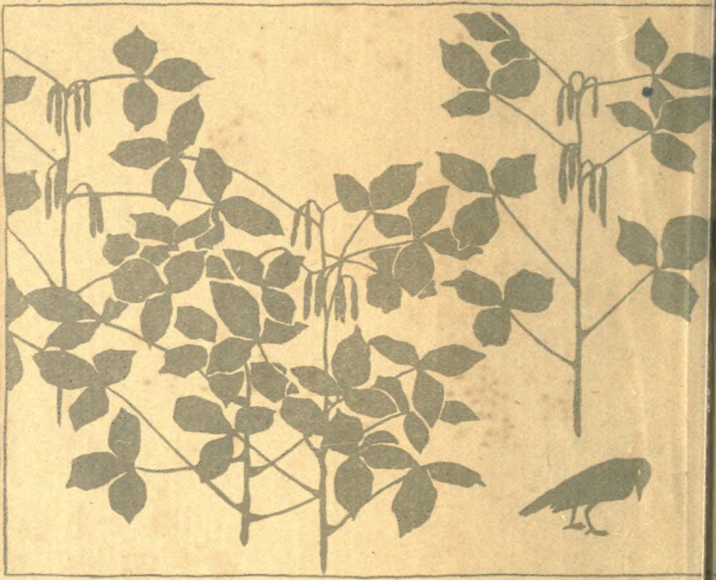
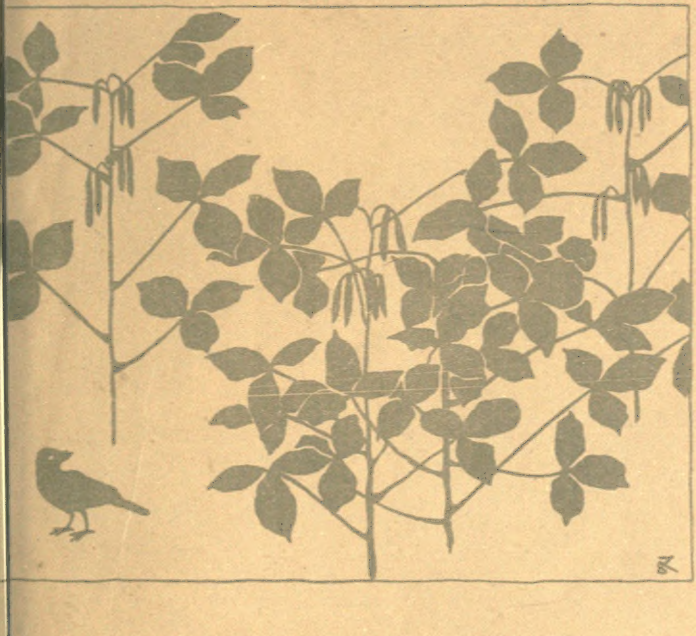




不許複製

大正三年九月二十日印刷
大正三年九月二十三日發行

日蓮上人文集（非賣品）
有朋堂文庫

編輯兼發行者　三浦理　[illegible]
印刷者　中井[illegible]　[illegible]
印刷所　山陽印刷株式會社工場　[illegible]
發行所　有朋堂書店　[illegible]

（岡山製本）

大正三年九月二十日印刷
大正三年九月二十三日發行

有朋堂文庫
日蓮上人文集（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

日蓮上人文集索引　終

マ

ミ

ム

メ

チ

コ

日蓮上人文集索引

（主要なる語句思想を採り發音に從ひ五十音順に排列す）

日蓮上人文集終

中經文指二末法始一也。此恐怖惡世中次下安樂行品等云。於末世等云云。同本異譯正法華經云。然後末世。又云然後來末世。添品法華經云。恐怖惡世中等云云。發時當世三類敵人有レ之但八十萬億那由佗諸菩薩不レ見二一人一。如二乾潮不レ滿月虧不レ滿。清レ水浮レ月。植レ木棲レ鳥。日蓮八十萬億那由佗諸菩薩爲二代官一申レ之。彼諸菩薩請二加被一者也。此入道佐渡國可レ爲二御供一之由承二申之一。可レ然用途云かたがた有レ煩之故還レ之。御志始不レ及レ申候。人人如レ是申給。但囹僧等懸レ心候。便宜之時早早可レ聽レ之。穴賢穴賢。

十月二十二日辰の時　　日蓮花押

土木殿

經已前如華嚴經等。已後如涅槃經等。又天竺法華經有印眞言、譯者略之。羅什名妙法經。加印眞言、善無畏名大日經歟。譬如正法華添品法華法華三昧薩云分陀利等也。佛滅後於天竺得此說、龍樹菩薩。於漢土始得之天台智者大師也。眞言宗善無畏等華嚴宗澄觀等三論宗嘉祥等法相宗慈恩等名依自宗、其心落天台宗。其門弟等不知此事。如何免謗法失乎。或人難日蓮云。不知機立麤義値難。或人云。如勸持品者深位菩薩義也違安樂行品。或人云。我存此義不言云云。或人云。唯教門計也。雖具我存之卞和切足、淸丸給于穢丸云名欲及死罪。時人咲之。雖然其人未流善名。汝等邪難亦可爾。勸持品云。有諸無智人惡口罵詈等云云。日蓮當此經文。汝等何不入此經文。及加刀杖者等云云。日蓮讀此經文。汝等何不讀此經文常在大衆中欲毀我等過等云云向國王大臣婆羅門居士等云云惡口而顰蹙數數見擯出。數數者度度也。日蓮擯出度度流罪二度也。法華經三世說法儀式也。過去不輕品今勸持品今勸持品過去不輕品也今勸持品未來可爲不輕品。其時日蓮卽可爲不輕菩薩。一部八卷二十八品天竺御經布一由旬承定可有數品。今漢土日本二十八品略之中要也。正宗置之。至流通寶塔品三箇敕宣令被靈山虛空大衆。勸持品二萬八萬八十萬億等大菩薩御誓言不及日蓮淺智、但恐怖惡世

是。所詮依佛教起邪見。轉目者欲轉大山。今八宗十宗等多門故至諍論。涅槃經第十八贖命重寶と申法門あり。天台大師料簡云。命者法華經也重寶者涅槃經所說前三教也。但涅槃經所說圓教如何。此法華經所說佛性常住重說之令歸本。以涅槃經圓常攝法華經。涅槃經得分但限前三教。天台玄義三云。涅槃贖命重寶重抵掌耳也云云。籤三云。今家引意指大經部以爲重寶等云云。天台大師四念處中文。法華經引雖示種種道之文。先四味又定重寶了。若爾者法華經前後諸經爲法華經重寶也。世間學者想云。此天台一宗義也諸宗不用之等云云。日蓮案之云。八宗十宗等皆自佛滅後起之論師人師立之。以滅後宗不可計現在經。天台所判依叶一切經。屬於一宗不可弃之。諸宗學者等執自師誤故。或事寄機。或讓前師。或語賢王。結句最後。惡心强盛起鬪諍。無失者損之爲樂。諸宗之中眞言宗殊至僻案。善無畏金剛智等想云。一念三千天台極理一代肝心也。顯密二道可爲詮之心地三千且置之。此外印與眞言佛教最要等云云。其後眞言師等事寄此義。無印眞言經經下之如外道法。或義云。大日經釋迦如來之外說。或義云。教主釋尊第一說。或義現釋尊說顯經。現大日說密經。不得道理。無盡僻見起之。譬如不辨乳色者作種種邪推不當本色。又如象譬。今汝等可知大日經等法華

追加

寺泊御書

鵞目一結給候畢。心ざしあらん諸人は一處にあつまりて、御聽聞あるべし。

今月十月也十日起相州愛京郡依智鄕。付武藏國久目河宿。經于十二日。付越後國寺泊津。自此亙大海。欲至佐渡國。順風不定不知其期。道間事心莫及。又不及筆。但暗可推度。又自本存知之上。始非可歎止之。法華經第四云。而此經者。如來現在猶多怨嫉。況滅度後。第五卷云。一切世間多怨難信。涅槃經三十八云。爾時一切外道衆咸作是言。大王今者唯有一大惡人。瞿曇沙門。一切世間惡人爲利養故。往集其所。而爲眷屬。不能修善。呪術力故。調伏迦葉及舍利弗目犍連等云云。此涅槃經文一切外道我本師二天三仙所說經典被毀佛陀所出惡言也。法華經文佛非爲怨。經文天台意云。一切聲聞緣覺竝樂近成菩薩等云云。不欲聞不欲信不當其機。出言莫謗。皆定怨嫉者了。以在世推滅後。一切諸宗學者等皆如外道。彼等云一大惡人者當日蓮。一切惡人集之者日蓮弟子等是也。彼外道先佛說敎流傳之後謬之後佛爲怨。今諸宗學者等亦復如

四條金吾殿御返事

滿月のごとくなる餅二十、甘露のごとくなる清酒一つゝ給び候ひ畢んぬ。春の始の御悦は月の滿つるがごとく、潮のさすがごとく、草のかこむが如く、雨のふるが如しと思食すべし。抑八日は各の御父釋迦佛の生れさせ給ひ候ひし日也。彼の日に三十二の不思議あり、一には一切の草木に花咲きみなる、二には大地より一切の寶涌き出づ、三には一切の田畠に雨降らずして水涌き出づ、四には夜變じて晝の如し、五には三千世界に歎の聲なし。是の如くの吉瑞の相のみにて候ひし。是より已來今にいたるまで、二千二百三十餘年が間、吉事には八日をつかひ給ひ候ふ也。然るに日本國皆釋迦佛を捨てさせ給ひて候ふに、いかなる過去の善根にてや、法華經と釋迦佛とを御信心ありて、各々あつまらせ給ひて、八日を供養申させ給ふのみならず、山中の日蓮に華香を贈らせ候ふやらん。尊したふとし。恐々。

正月七日　　　　日　蓮　花押

人々御返事

佛惡しと思しけん。されば佛は側向きて、八十萬億那由佗の諸菩薩をこそ、つく〴〵と御覽ぜしか。されば女人は、由なき道には名を折り命を捨つれども、成佛の道は弱かりけるやと覺え候ふに、今末代惡世の女人と生まれさせ給ひて、かゝる物覺えぬ島の夷に罵られ打たれ責められ、忍び、法華經を弘めさせ給ふ、彼の比丘尼には雲泥勝れてありと、佛は靈山にて御覽あるらん。彼の比丘尼の御名を一切衆生喜見佛と申すは別の事にあらず、今の妙法尼御前の名にて候ふべし。王となる人は過去にても現在にても十善を持つ人の名也、名はかはれども師子の座は一つ也。此の名も變るべからず。彼の佛の御言を倒反す尼だにも、一切衆生喜見佛と名づけらる。是は佛の言を違へず、此の娑婆世界まで名を失ひ命をすつる尼也。彼は養母として捨て給はず、是は佗人として捨てさせ給はゞ、偏頗の佛也。爭でかさる事は候ふべき。況や「其中衆生悉是吾子」の經文の如くならば、今の尼は女子也、彼の尼は養母也、養母を捨てずして女子を捨つるの御意やあるべき。此の道理を深く御存知あるべし。繁ければ止め候ひ畢んぬ。

日　蓮　花　押

妙法尼御前

し。佛の御姨母、摩訶波闍波提比丘尼は女人ぞかし。而るに阿羅漢とならせ給ひて聲聞の御名を得させ給ひ、永不成佛の道に入らせ給ひしかば、女人の姿をかへ、后の位を捨てて佛の御すゝめを敬ひ、四十餘年が程五百戒を持ちて、晝は道路にたゝずみ、夜は樹下に坐して後生をねがひしに、成佛の道を許されずして、永不成佛の憂き名を流させ給ひし、口惜しかりし事ぞかし。女人なれば過去遠遠劫の間、有るに付けても無きに付けても虚名を立てし、恥しく口惜しかりしぞかし。其の身を厭ひて形をやつし、尼と成りて候へば、かゝる嘆は離れぬとこそ思ひしに、相違して二乘となり、永不成佛と聞きしは、いかばかりあさましく御座せしに、法華經にして三世の諸佛の御勘氣を許され、一切衆生喜見佛と成らせ給ひしは、いくら程か嬉しく悦しく御座しけん。さるにては、法華經の御爲と申すには、何なる事有りとも背かせ給ふまじきぞかし。其に、佛の言く、

以二大音聲一普告二四衆一。誰能於二此娑婆國土一廣說二妙法華經一等云云。

我も我もと思ふに、諸佛の恩を報ぜんと思はん尼御前女人達、何事をも忍びて我が滅後に此の娑婆世界にして、法華經を弘むべしと、三箇度までいさめさせ給ひしに、御用なくして、「於二佗方國土一廣宣二此經一」と申させ給ひしは、能々不得心の尼ぞかし。幾くか

勝童子は沙の餅を佛に供養し奉りて阿育大王と生まれて一閻浮提の主たりき。貧女の我が頭を剃して油と成せしが、須彌山を吹きぬきし風も此の火を消さず。されば此の二三の鵞目は、日本國を知る人の國を寄せ、七寶の塔を忉利天に組みあげたらんにも過ぐるべし。法華經の一字は大地の如し、萬物を出生す。一字は大海の如し、衆流を納む。一字は日月の如し、四天下を照す。此の一字變じて佛となる。稻變じて苗となる。苗變じて艸となる。艸變じて米となる。米變じて人となる。人變じて佛となる。女人變じて妙の一字となる。妙の一字變じて臺上の釋迦佛と成るべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。恐々謹言。

日蓮　花押

王日殿

妙法尼御前御返事

明衣一つ給び畢んぬ。女人の御身、男にも後れ、親類をも離れ、一二人ある娘もはかばかしからず、便なき上、法門の故に人にも怨まれさせ給ふ女人、さながら不輕菩薩の如

母にも兄弟にも後れはてて、いとをしき夫にすぎわかれたりしかども、子どもあまた御座しませば、心慰みてこそおはし候ふらむ。愛しき子、しかも男兒。容姿も人にすぐれ、心もかひぐ〵しく見えしかば、よその人々もすゞしくこそ見候ひしに、あやなく莟める花の風にしほみ、滿つる月の俄に失せたるがごとくこそ覺すらめ。まこととも覺え候はねば、書きつくるそらも覺え候はず。又々申すべし。恐々謹言

九月六日　　　　日蓮花押

上野殿御返事

追申。此の六月十五日に見奉り候ひしに、あはれ肝ある者哉、男也男也と見候ひしに、又見候はざらん事こそ悲しくは候へ。さは候へども、釋迦佛、法華經に身を入れて候ひしかば、臨終目出たく候ひけり。心は父君と一所に靈山淨土に參りて、手をとり頭を合せてこそ悅ばれ候ふらめ。あはれなり、あはれなり。

王日殿御返事

辨の房の便宜に三百文、今度二百文給び畢んぬ。佛は眞に尊くして物によらず。昔の得

妙一尼御前御返事

夫信心と申すは別にはこれなく候ふ。妻の夫を惜むが如く、夫の妻に命をすつるが如く、親の子を捨てざるが如く、子の母に離れざるが如くに、法華經、釋迦、多寶、十方の諸佛菩薩、諸天善神等に信を入れ奉りて、南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申し候ふ也。しかのみならず、正直捨方便不受餘經一偈の經文を女の鏡を捨てざるが如く、男の刀をさすが如く、すこしも捨つる心なく案じ給ふべく候ふ。あなかしこあなかしこ。

五月十八日　　日蓮　花押

妙一尼御前御返事

上野殿後家尼御前御書

南條七郎五郎殿の御死去の御事、人は生れて死する習とは、智者も愚者も上下一同に知りて候へば、始めて嘆くべし驚くべしとは覺えぬよし、我も存じ人にも教へ候へども、時にあたりて夢か幻かいまだ辨へがたく候ふ。まして母の如何がなげかれ候ふらむ。父

胡國—匈奴をさす、今の蒙古

いうし者—云ひし者

漢王の御使に胡國と申す國に入りて十九年、妻も夫を離れ、夫も忘るゝ事なし。あまりの戀ひしさに、夫の衣を秋ごとに碪の上にてうちけるが、思や通りて行きにけん、夫の耳に聞えけり。陳子というし者は、女夫離れけるに、鏡を割りて一つづつ取りにけり。忘るゝ時は鳥出でて告げけり。相思といひしものは、夫を戀ひて墓に至りて木となりぬ。相思樹と申すはこの木也。大唐へ渡るに、志賀の明神と申す神おはす、夫の唐へゆきしを戀ひて神となれり。島のすがた女に似たり、松浦佐與姫といふ是也。いにしへより今にいたるまで、親子の別、主從の別、いづれかつらからざる。されども男女の別ほどたとへなかりけるはなし。過去遠々より女の身となりしが、この夫娑婆最後の善知識なりけり。散りし花落ちし果實も咲き結ぶ、などかは人の返らざるらむ。去年も憂く、今年もつらき月日かな、思はいつも晴れぬものゆゑ。法華經の題目を唱へまゐらせてまゐらせ。

十一月二日　　日蓮花押

持妙尼御前御返事

をこ―おろか
鏡―手本
とかう紛れ―何彼の用事にかまけて

漆に水をかけ、空を切りたるやうに候ふぞ。三位房が事は大不思議の事ども候ひしかども、殿原の思には智慧ある者をそねませ給ふかと、愚癡の人思ひなんと思ひて、物も申さで候ひしが、佞心となりて大難にもあたりて候ふぞ。なか〳〵散々とだにも申せしかば、助かる邊もや候ひなん。あまりに不思議さに申さゞりしなり。又かく申せば、をこどもは、死亡の事を仰せ候ふと申すべし。鏡のために申す。又此の事は彼等の人々も内内は怖ぢおそれ候ふらむと覺え候ふぞ。人の騒げばとて、兵士なんど此の一門にせられば、此へ書きつけてたび候へ。恐々謹言。

十月一日　日蓮花押

人々御中

さぶらうざゑもん殿のもとに、留めらるべし。

持妙尼御前御返事

御僧餼料送り給ひ畢んぬ。すでに故入道殿の隠るゝ日にておはしける歟。とかう紛れ候ひけるほどに、うち忘れて候ひける也。よもそれには忘れ給はじ。蘇武と申せし武士は、

を、人の讒言と知りて許ししなり。今はいかに人申すとも聞き解かずしては人の讒言は用ひ給ふべからず。設ひ大鬼神のつける人なりとも、日蓮をば梵釋日月四天等天照太神八幡の守護し給ふゆゑに罰しがたかるべしと存じ給ふべし。月々日々に強り給へ。すこしも撓む心あらば魔たよりを得べし。我等凡夫の拙さは、經論に有る事と遠き事は恐るゝ心なし。一定として平等も城等も瞋りて此の一門を散々となす事も出來せば、眼を塞いで觀念せよ。當時の人々の筑紫へか指されんずらむ。又ゆく人又かしこに向へる人々を、我が身にひきあてよ。當時までは此の一門に此のなげきなし。彼等現にはかくのごとし。殺されば又地獄へ行くべし。我等現には此の大難に値ふとも、後生は佛になりなん。設へば灸治のごとし。當時は痛けれども、後の藥なれば疼くていたからず。彼の熱原の愚癡の者ども、言ひ勵して脅す事なかれ。彼等にはたゞ一圓に思ひ切れ、善からんは不思議、惡からんは一定と思へ。空腹しと思はゞ餓鬼道を敎へよ。寒しといはゞ八寒地獄を敎へよ。恐ろししといはゞ鷹にあへる雉、猫にあへる鼠を、佗人と思ふ事なかれ。此はこま〳〵と書き候ふ事は、かく年どし月々日々に申して候へども、名越の尼、少輔房、能登房、三位房なんどのやうに候ふ、臆病物覺えず、欲深く疑多き者どもは、塗れる

總罰—國人全體の受くる罰
別罰—人々によりて異る罰
冥罰—目に見えぬ所より下さるる罰

一日、頭に疵を被り左の手を打ち折らる、同じき文永八年辛未九月十二日佐渡の國へ配流、又頭の座に臨む。其の外に弟子を殺され切られ追出し、過料等かずを知らず。佛の大難には及ぶか、勝れたるか、其は知らず、龍樹、天親、天台、傳敎は余に肩を並べがたし。日蓮末法に出でずば、佛は大妄語の人、多寶十方の諸佛は大虚妄の證明なり。佛滅後二千二百二十餘年が間、一閻浮提の内に佛の御言を助けたる人、但日蓮一人なり。過去現在の末法の法華經の行者を輕賤する王臣萬民始は事なき樣にて終に亡びざるは候はず。日蓮又かくのごとし。始は驗なきやうなれども今二十七年が間、法華經守護の梵釋日月四天等、さのみ守護せずば、佛前の御誓むなしくて、無間大城に墮つべしと恐ろしく想ふ間、今は各々はけむらむ。太田の親昌、長崎次郎兵衛の尉時綱、大進房が落馬等は法華經の罰のあらはるゝか、罰は總罰、別罰、現罰、冥罰、四候ふ。日本國の大疫病と大飢渴と、同士討と、佗國より攻めらるゝは總罰なり。疫病は冥罰なり。太田等は現罰なり別ばちなり。各々師子王の心を取り出して、いかに人脅すとも怖づる事なかれ。師子王は百獸に怖ぢず、師子の子又かくのごとし。彼等は野干の吼ゆるなり、日蓮が一門は師子の吼ゆるなり。故最明寺殿の日蓮を釋ししと、此の殿の許ししは、禍なかりける

日蓮法華宗唱導の年時

太神の御厨、右大將家の立て始め給ひし日本第二のみくりや、今は日本第一なり。此の郡の内、淸澄寺と申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして、午の時に此の法門申しはじめて、今に二十七年、弘安二年太歲己卯なり。佛は四十餘年、天台大師は三十餘年、傳敎大師は二十餘年に出世の本懷を遂げ給ふ。其の中の大難申す計りなし、先々に申すがごとし。余は二十七年なり。其の間の大難は各々且知召せり。法華經に云はく、

而此經者。如來現在。猶多怨嫉。況滅度後云云。

釋迦如來の大難は數を知らず。其の中に馬の麥をもつて九十日、小指の出佛身血、大石の頂にかゝりし、善星比丘等の八人が、身は佛の御弟子、心は外道に伴ひて、晝夜十二時に佛の短をねらひなし、無量の釋子の波瑠璃王に殺されし、無量の弟子等が惡象に踏まれし、阿闍世王の大難をなせし等、此等は如來現在の小難なり。況や滅度後の大難は、龍樹、天親、天台、傳敎いまだ値ひ給はず。法華經の行者ならずといはゞ、いかでか行者にておはせざるべき。又行者といはんとすれば、佛のごとく身より血を滴されず。何に況や佛に過ぎたる大難なし。經文むなしきがごとし。佛說すでに大虛妄となりぬ。而るに日蓮二十七年が間、弘長元年辛酉五月十二日には伊豆の國へ流罪、文永元年甲子十一月十

其數有り―その數多きこと

孝養―死者の追福をなすこと

神祇は、過去の輪陀王のごとし。白馬は日蓮なり、白鳥は我らが一門なり。白馬の鳴くは我等が南無妙法蓮華經の聲なり。此の聲を聞かせ給ふ梵天帝釋日月四天王等、いかでか色を增し光を昌になし給はざるべき、いかでか我等を守護し給はざるべきと、强々と思召すべし。抑貴邊の去ぬる三月の御佛事に、鵞目其の數有りしかば、今年一百餘人の人を山中に養ひて、十二時の法華經を讀ましめ、談義して候ふぞ。此らは末代惡世には、一閻浮提第一の佛事にてこそ候へ。若干か過去の聖靈も嬉しくおぼすらん。釋尊は孝養の人を世尊となづけ給へり、貴邊あに世尊にあらずや。故大進阿闍梨の事、なげかしく候へども、此又法華經の流布の出來すべき因緣にてや候ふらんと思召すべし。事事命ながらへば、其の時申すべし。

弘安二年己卯八月十七日　日蓮　花押

曾谷の道宗御返事

○聖人御難事

去ぬる建長五年太歲癸丑四月二十八日に、安房の國長狹郡の內、東條の鄕、今は郡也、天照

壞劫—この世界のこはるゝ時

境—目的、對象

あまさへ禪宗と申す大邪法、念佛宗と申す小邪法、眞言と申す大惡法、此の惡宗鼻を竝べて一國に盛なり。天照太神は魂を失つて氏子を守らず、八幡大菩薩は威力よわくして國を守護せず。結句は他國の物とならむとす。日蓮此のよしを見るゆゑに、「佛法中怨俱墮地獄」等の責を恐れて粗國主に示せども、かれらが邪義に誑らかされて信じ給ふ事なし。還つて大怨敵となり給ひぬ。法華經を失ふ人、國中に充滿せりと申せども、人知る事なければ、たゞ愚癡の失ばかりにてある事、今は又法華經の行者出來せり。日本國の人人癡の上に、瞋を起す邪法を愛し、正法を惡む。三毒强盛なる一國、いかでか安穩なるべき。壞劫の時は大の三災起る、いはゆる火災水災風災也。又減劫の時は、小の三災起る、いはゆる飢渴、疫病、合戰なり。飢渴は大貪より起り、疫病は愚癡より起り、合戰は瞋恚より起る、今日本國の人々、四十九億九萬四千八百二十八人の男女、人々異なれども同じく一の三毒なり。所謂南無妙法蓮華經を境として起れる三毒なれば、人ごとに釋迦多寶十方の諸佛を、一時に罵責め流し失ふなり。是即ち小の三災の序なり。しかるに日蓮が一類いかなる過去の宿習にや、法華經の題目の檀那となり給ふらん。是をもて思召せ、今梵天帝釋 日月 四天天照太神八幡大菩薩、日本國の三千一百三十二社の大小の

とや思ひけん、弘法大師去ぬる弘仁十四年正月十九日に、眞言第一、華嚴第二、法華第三、法華經は戲論の法、無明の邊域、天台宗等は盜人なりなんど申す書どもをつくりて、嵯峨の皇帝を申しかすめ奉りて、七宗に眞言宗を申し加へて、七宗を方便とし、眞言宗は眞實なりと申し立て畢んぬ。其の後日本一州の人ごとに、眞言宗になりし上、其の後又傳教大師の御弟子、慈覺と申す人漢土にわたりて、天台眞言の二宗の奧義をきはめて歸朝す。此の人金剛頂經蘇悉地經の二部の疏をつくりて、前唐院と申す寺を叡山に申し立て畢んぬ。此には大日經第一、法華經第二、其の中に弘法のごとくなる過言數ふべからず。前々に少々申し畢んぬ。智證大師、又此の大師の後を繼で園城寺に弘通せり。當時、寺とて國の禍と見ゆる寺是也。叡山の三千人は慈覺智證おはせずば、眞言すぐれたりと申すをば用ひぬ人もありなん。圓仁大師に一切の諸人口を塞がれ心をたぼらかされて、言を出す人なし。王臣の御歸依も又傳教弘法にも超過して見え候へば、叡山、七寺、日本一州、一同に法華經は大日經に劣れりと云々。法華經の弘通の寺々ごとに眞言ひろまりて、法華經の頭となれり。かくのごとくして、すでに四百餘年になり候ひぬ。やうやく此の邪見增上して、八十一乃至五の五王すでに失せぬ。佛法失せしかば、王法すでに盡き畢んぬ。

七大寺ー東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺

十五大寺ー七大寺に、法華寺、新藥師寺、本元興寺、招提寺、東寺、西寺、四天王寺、崇福寺を加ふ

還つて笑き失ふ也、之によつて天もいかり、守護の善神も力弱し云々。所謂法華經を譽むといへども、返つて法華の心を殺す等云々。南都七大寺、十五大寺、日本國中の諸寺諸山の諸僧等、此のことばを聞きて大きに怒り、天竺の大天、漢土の道士、我國に出來せり。所謂最澄と申す小法師是也。詮ずる所は、行きあはむずる處にて頭を割れ、肩を切れ落せ、打て詈れと申せしかども、桓武天皇と申す賢王尋ねあきらめて、六宗は僻事なりけりとて、初めて比叡山を建立して天台法華宗と定め置かせ、圓頓の戒を建立し給ふのみならず、七大寺十五大寺の六宗の上に法華宗を副へ置かる。詮ずる所六宗を法華經の方便となされしなり。例せば、神の佛に負けて門守となりしがごとし。日本國も又々かくのごとし。法華最第一の經文初めて此の國に顯はれ給ひ、「能竊爲一人說法華經」の如來の使初めて此の國に入り給ひぬ。桓武平城嵯峨の三代二十餘年が間は、日本一州皆法華經の行者なり。しかれば栴檀には伊蘭、釋尊には提婆のごとく、傳敎大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり。漢土にわたりて大日經眞言宗を習ひ、日本國にわたりてありしかども、傳敎大師の御存生の御時は、いたう法華經に大日經すぐれたりといふ事はいはざりけるが、傳敎大師去ぬる弘仁十三年六月四日にかくれさせ給ひて後、ひまを得たり

しなり。例せば、守屋は日本の天神七代地神五代が間の百八十神を崇めたてまつりて、佛教を弘めずしてもとの外典となさんと祈りき。聖徳太子は教主釋尊を御本尊として、法華經一切經を文書として兩方の勝負ありしに、つひには神は負け佛は勝たせ給ひて、神國はじめて佛國となりぬ。天竺漢土の例のごとし。「今此三界皆是我有」の經文あらはれさせ給ふべき序也。欽明より桓武にいたるまで二十餘代二百六十餘年が間、佛を大王とし、神を臣として世を治め給ひしに、佛教は勝れ神は劣りたりしかども、未だ代治る事なし。いかなる事にやと疑はれし程に、桓武の御宇に傳教大師と申す聖人出來して、勘へて云はく、神は負け佛はかたせ給ひぬ、佛は大王神は臣下なれば、上下あひついで禮儀正しければ國中治るべしと思ふに、國の靜ならざる事不審なるゆゑに、一切經をかんがへて候へば、道理にて候ひけるぞ、佛教に多きなる失ありけり、一切經の中に法華經と申す大王おはします、ついで華嚴經、大品經、深密經、阿含經等は、あるひは臣の位、あるひは侍の位、あるひは民の位なりけるを、或は般若經は法華經には勝れたり、(三論宗)或は深密經は法華經にすぐれたり、(法相宗)或は華嚴經は法華經にすぐれたり、(華嚴宗)或は律宗は諸宗の母也なんど申して、一人として法華經の行者なし、世間に法華經を讀誦するは、

成劫ーこの世の出來上る時期

せつけられけり。其の時馬鳴菩薩と申す小僧一人あり、召し出されければ、此の僧の給はく、國中に外道の邪法を止めて佛法を弘通し給ふべくば、馬を鳴せん事やすしといふ。勅宣に云はく、仰のごとくなるべしと。其の時に馬鳴菩薩、三世十方の佛に祈請し申せしかば、たちまちに白鳥出來せり。白馬は白鳥を見て一聲なきけり。大王馬の聲を一こゑきこしめして、眼を開き給ひ白鳥二匹乃至百千いできたりければ、百千の白馬一時に悅びなきけり。大王の御色なほること、日蝕の本に復するがごとし。身の力、心のはかり事、先々には百千萬倍こえたり。后もよろこび、大臣公卿いさみて、萬民も掌をあはせ、佗國も頭を傾けたりと見えて候。今の世も又是に違ふべからず。天神七代地神五代已上十二代は成劫のごとし、先世の戒力と福力とによつて、今生のはげみなけれども、國も治り人の壽命も長し。人王の代となりて二十九代が間は、先世の戒力も少し弱く今生の政事もはかなかりしかば、國に漸く三災七難起り始めたり。なほ漢土より三皇五帝の世を治むべき文書わたりしかば、其をもて神を崇めて國の災難を鎭む。人皇第三十代欽明天皇の世となりて、國には先世の戒福うすく、惡心强盛の者多く出來て、善心おろかに惡心はかしこし。外典の敎はあさし、罪も重きゆゑに、外典捨てられ内典になり

例せば蝦蟆と申す蟲、母の啼く聲を聞いて生長するがごとし。秋の萩の鹿の鳴くに華の咲くがごとし。象牙草の雷の聲に孕み、柘榴の石に逢うて榮ゆるがごとし。されば此の王白馬を多くあつめて飼はせ給ふ。又此の白馬は白鳥を見てなく馬なれば、多くの白鳥をあつめ給ひしかば、我が身の安穩なるのみならず、百官萬乘も榮え、天下も風雨時に順ひ、他國も頭を傾ぶけて數年すごし給ふに、政事の相違にや侍りけん、又宿業によつて果報や盡きけん、千萬の白鳥一時に失せしかば、又無量の白馬もなく事止みぬ。大王は白馬の聲をきかざりしゆゑに、華の萎めるがごとく、月の蝕するがごとく、御身の色かはり、力よわく、六根憒々として耄れたるがごとくありしかば、后も憒々しくならせ給ひ、百官萬乘も如何がせんと歎き、天も曇り地もふるひ、大風旱魃し、飢渇疫病に人の死する事、肉は塚、骨は瓦と見えしかば、他國よりも襲ひ來れり。此の時大王いかんがせんと歎き給ひしほどに、詮ずる所は佛神に祈るには若くべからず、此の國にもとより外道多く國々を塞げり、又佛法といふ物を多く崇め置きて國の大事とす。いづれにてもあれ、白鳥を出して白馬を鳴かせん法を崇むべし。まづ外道の法に仰せつけて、數日行はせけれども、白鳥一疋も出でこず、白馬もなく事なし。此の時外道の祈をとゞめて、佛教に仰

ることと是より始れり。國の費のみ入ッて祈とならず、還て佛變じて魔となり鬼となり、國主乃至萬民を煩はす是なり。今法華經の行者と檀那との出來する故に、百獸の師子王を厭ひ、草木の寒風を恐るゝが如し。是は且く置く。法華經は何の故ぞ諸經に勝れて一切衆生の爲に用ふる事なるぞと申すに、譬へば、草木は大地を母とし虛空を父とし、甘雨を食とし風を魂とし、日月を乳母として生長し、華さき菓なるが如く、一切衆生は實相を大地とし無相を虛空とし、一乘を甘雨とし、已今當第一の言を大風とし、定慧力莊嚴を日月として妙覺の功德を生長し、大慈大悲の華さかせ、安樂佛果の菓なつて、一切衆生を養ひ給ふ。一切衆生又食するによりて壽命を持つ。食に多數あり、土を食し水を食し火を食し風を食する衆生もあり。求羅と申す蟲は風を食す、鼹鼠と申す蟲は土を食す。人の皮肉骨髓等を食する鬼神もあり、尿糞等を食する鬼神もあり。壽命を食する鬼神もあり、聲を食する鬼神もあり。石を食する魚、鐵を食する獏もあり。地神天神龍神日月帝釋大梵王二乘菩薩佛は、佛法をなめて身とし魂とし給ふ。例せば、乃往過去に輪陀王と申す大王ましましき、閻浮提の主也。賢王也。此の王はなに物をか供御とし給ふと申せば、白馬の鳴聲をきこしめて、身も生長し身心も安穩にして代をたもち給ふ。

故知法華爲醍醐正主等云云。

此の釋は正しく法華經は五味の中にはあらず、此の釋の心は、五味は壽命を養ふ、壽命は五味の主也。天台宗には二の意あり、一には華嚴方等般若涅槃法華同じく醍醐味也。此の釋の心は爾前と法華とを相似せるに似たり。世間の學者等、此の筋のみを知りて、法華經は五味の主と申す法門に迷惑せるゆゑに諸宗にたぼらかさるゝ也、開未開異なれども、同じく圓なりと云々。是は迹門の心なり。諸經は五味、法華經は五味の主と申す法門は、本門の法門也。此の法門は天台妙樂粗書かせ給ひ候へども、分明ならざる間、學者の存知少し。此の釋に「若論教旨」と書かれて候ふは、法華經の題目を教旨とは書かれて候ふ。「開權」と申すは、五字の中の華の一字也。顯遠と書かれて候ふは、五字の中の蓮の一字也。「獨得妙名」とかゝれて候ふは、妙の一字也。「意在於此」と書かれて候ふは、法華經を一代の意と申すは題目なりと書かれて候ふぞ。此を以て知んぬべし、法華經の題目は一切經の神、一切經の眼目也。大日經等の一切經をば、法華經にてこそ開眼供養すべき處に、大日經等を以て一切の木畫の佛を開眼し候へば、日本國の一切の寺塔の佛像等、形は佛に似れども、心は佛にあらず、九界の衆生の心なり。愚癡の者を智者とす

五味ー牛乳を精製する五の段階。乳味、酪味、生酥味、熟酥味、醍醐味

曾谷殿御返事

燒米二俵給び畢んぬ。米は少と思食し候へども、人の壽命を繼ぐ物にて候ふ。命をば三千大千世界にても買はぬ物にて候ふと佛は說かせ給へり。米は命を繼ぐ物也。譬へば米は油の如く、命は燈の如し。法華經は燈の如く行者は油の如し。檀那は油の如く行者は燈の如し。一切の百味の中には、乳味と申して牛の乳第一なり。涅槃經の七に云はく、

猶如㆓諸味中乳最爲第一㆒云云。

乳味を煎ずれば酪味となる、酪味を煎ずれば乃至醍醐味となる、醍醐味は五味の中の第一也。法門を以て五味にたとへば、儒家の三千、外道の十八大經は衆味の如し。阿含經は醍醐味なり。阿含經は乳味の如く、觀經等の一切の方等部の經は酪味の如し。一切の般若經は生蘇味、華嚴經は熟蘇味、無量義經と法華經と涅槃經とは醍醐の如し。又涅槃經は醍醐のごとし、法華經は五味の主の如し。妙樂大師云はく、

若論㆓教旨㆒。法華唯以㆓開權顯遠㆒。爲㆓教正主㆒。獨得㆓妙名㆒。意在㆓於此㆒云云、

又云はく、

鬼門―東北隅に當る

へがたし。又涌出品は、日蓮がためには少し縁ある品也。其の故は、上行菩薩等の末法に出現して、南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと見えたり。しかるに、先日蓮一人出來す。六萬恒沙の菩薩より、さだめて忠賞を被るべしと思へば賴もしき事也。とにかくに、法華經に身をまかせ信ぜさせ給へ。殿一人にかぎるべからず。信心をすゝめ給ひて過去の父母等を救はせ給へ。日蓮生れし時より、いまに一日片時も心易き事はなし。此の法華經の題目を弘めんと思ふばかりなり。相かまへて相かまへて、自他の生死は知らねども、御臨終の刻、生死の中間に、日蓮必ず迎にまゐり候ふべし。三世の諸佛の成道は子丑の終、寅の刻の成道也。佛法の住處、鬼門の方に三國ともに立つなり。此等は相承の法門なるべし。委しくは又々申すべく候ふ。恐々謹言。

かつゑて食をねがひ、渴して水を慕ふがごとく、戀ひて人を見たきがごとく、病に藥をたのむがごとく、容良き人、紅粉をつくるがごとく、法華經には信心を致させ給へ。さなくしては後悔あるべし云々。

弘安二年己卯卯月二十日　日蓮花押

上野殿御返事

字にあひたる人を聞かず。不輕菩薩は杖木瓦石と見えたれは、杖の字にあひぬ、刀の難は聞かず。天台、妙樂、傳教等は、刀杖不加と見えたれば、是又缺けたり。日蓮は刀杖の二字ともに値ひぬ。剰へ刀の難は前に申すがごとく、東條の松原と龍の口となり。一度もあふ人なきなり。日蓮は二度あひぬ、杖の難にはすでに少輔房に面を打たれしかども、第五の卷をもて打つ。うつ杖も第五の卷、打たるべしと云ふ經文も五の卷。不思議なる未來記の經文也。されば、少輔房に日蓮數十人の中にして打たれし時の心中には、法華經の故とは思へども、いまだ凡夫なれば無情かりける間、杖をも奪ひ、力あるならば、踏み折りすつべきことぞかし。然れども、つゑは法華經の五の卷にてまします。いま思ひ出でたる事あり。子を思ふ故にや、親、槻の木の弓をもて學文せざりし子に教へたり。然る間、此の子うたてかりしは父、憎かりしは槻の木の弓。されども終には修學增進して、自身得脱をきはめ、又人を利益する身となり、立ち還つて見れば、つきの木をもて我を打ちし故也。此の子卒堵婆に此の木をつくり、父の供養のために立て、手向けりと見えたり。日蓮も又かくの如くあるべき歟。日蓮佛果を得むに、爭か少輔房が恩を捨つべきや。何に況や法華經の御恩の杖をや。かくの如く思ひつゞけ候へば、感涙押

玄文止―法華玄義、法華文句、摩訶止觀の三書

能所不二―教へる者と教へらるる者とは一つにて二つならず

那由佗―梵語、千億或は萬億と譯す

多寶佛は皆是眞實すとて、法華經にかぎりて卽身成佛ありとさだめ給へり。爾前經に何樣に成佛ありとも說け、權宗の人々無量に言ひ狂ふとも、たゞ焙烙千に槌一つなるべし。法華折伏破權門理とはこれなり。尤もいみじく祕奧なる法門也。又天台の學者慈覺よりこのかた、玄、文、止の三大部の文を、とかく料簡し、義理を構ふとも、去年の曆昨日の食のごとし、今日の用にならず。末法の始の五百年に、法華經の題目を離れて成佛ありといふ人は、佛說なりとも用ふべからず。何に況や人師の義をや。爰に日蓮思ふやう、提婆品を案ずるに、提婆は釋迦如來の昔の師なり、昔の師は今の弟子なり、今の弟子はむかしの師なり、古今能所不二にして、法華の深意をあらはす。されば惡逆の達多には慈悲の釋迦如來、師となり、愚癡の龍女には智慧の文殊、師となり、文殊釋迦如來にも、日蓮劣り奉るべからざる歟。日本國の男は提婆がごとく、女は龍女にあひにたり。逆順ともに成佛を期すべきなり。是提婆品の意なり。次に勸持品に、八十萬億那由佗の菩薩の、異口同音の二十行の偈は、日蓮一人讀めり。誰か出でて日本國唐土天竺三國にして、佛の滅後に讀みたる人やある。又我讀みたりと名宣るべき人なし。又あるべしとも覺えず。及加刀杖の刀杖の二字の中に、もし杖の字にあふ人はあるべし、刀の

一代に分絶え—釈尊一代中に比すべきものなきこと

此は法華經の御故也。されども法華經の第五の巻は、同じきなり。彼女人の足地獄に入らざらんに、此の兩の手無間に入るべきや。たゞし彼は男を惡みて法華經をば惡まず、此は法華經と日蓮とを惡むなれば、一身無間に入るべし。經に云はく、「其人命終入阿鼻獄」と云々。手ばかり無間に入るまじとは見えず。不便なり、不便なり。遂には日蓮にあひて佛果を得べき歟。不輕菩薩の上慢の四衆のごとし。夫第五の巻は一經第一の肝心なり、龍女が卽身成佛あきらかなり。提婆はこゝろの成佛をあらはし、龍女は身の成佛をあらはす。一代に分絶えたる法門也。さてこそ傳教大師は、法華經の、一切經に超過して勝れたる事を十あつめ給ひたる中に、卽身成佛化導勝とは此の事也。此の法門は天台宗の最要にして、卽身成佛義と申して文句の義科也。眞言天台の兩宗の相論なり。龍女が成佛も法華經の功力也。文殊師利菩薩は、「唯常宣說妙法華經」とこそ語らせ給へ。唯常の二字は八字の中の肝要也。菩提心論の唯眞言法中の唯の字と、今の唯の字と、いづれを本とすべきや。彼の唯の字は、恐らくはあやまり也。無量義經に云はく、「四十餘年未顯眞實」

法華經に云はく、

世尊法久後　要當說眞實。

上野殿御返事

抑日蓮種々の大難の中には、龍の口の頸の座と、東條の難には過ぎず。其の故は、諸難の中には命を捨つる程の大難はなきなり。或は罵りせめ、或は處を逐はれ、無實を云ひつけられ、或は面を打たれしなどは物のかずならず。されば色心の二法より起りて、謗られたる者は日本國の中には日蓮一人也。但しありとも、法華經の故にはあらじ。さてもさても忘れざる事は、少輔房が法華經の第五の卷を取りて、日蓮が面を打ちし事は、三毒より起る處の打擲なり。天竺に嫉妬の女人あり、男をにくむ故に、家內の物をこと〴〵く打ち破り、其の上にあまりの腹立にや、姿氣色かはり、眼は日月の光のごとく輝き、口は炎を吐くがごとし。すがたは青鬼赤鬼のごとくにて、年來男の讀み奉る法華經の第五の卷を取り、兩の足にて散々に踏みける。其の後命つきて地獄に墮つ。兩の足ばかり地獄に入らず。獄卒鐵杖をもつて打てども入らず。是は法華經を踏みし逆緣の功德による。今日蓮を惡む故に、少房が第五の卷を取りて予が面をうつ。是も逆緣となるべきか。彼は天竺此は日本。かれは女人これは男。かれは兩のあし、これは兩の手。彼は嫉妬の故、

べし。例せば、有徳國王の覺徳比丘の命にかはりて、釋迦佛とならせ給ひしがごとし。法華經は祈とはなり候ひけるぞ。あなかしこあなかしこ。いよいよ道心堅固にして、今度佛になり給へ。御一門の御房たち、又俗人等にも斯かるうれしき事候はず。かう申せば今生の慾と覺すか。それも凡夫にて候へば、さも候ふべき上、慾をも離れずして佛になり候ひける道の候ひけるぞ。普賢經に、法華經の肝心を說きて候ふ。

不斷煩惱不離五欲等云云。

天台大師の摩訶止觀に云はく、

煩惱卽菩提。生死卽涅槃等云云。

龍樹菩薩の大論に、法華經の一代に勝れていみじき樣を釋して云はく、

譬如大藥師能變毒爲藥等云云。

小藥師は藥を以て病を治す、大醫は大毒をもつて大重病を治す等云々。

弘安元戊寅年十月　日　　日蓮花押

四條金吾殿御返事

一所は三百貫と云々。かゝる處なりと承る。何となくとも同隷といひ、親しき人々と申し捨てはてられて笑ひ喜びつるに、殿岡に劣りて候ふ處なりとも、御下し文は給びたく候ひつるぞかし。まして三倍の處也と候ふ。いかに惡くとも惡きよし人にも又上へも申させ給ふべからず候ふ。よき所よきところと申し給はゞ、又かさねて給はらせ給ふべし。惡き處德分なしなむど候はゞ、天にも人にも捨てられ給ひ候はむずるに候ふぞ。御心得あるべし。阿闍世王は賢人なりしが、父を殺せしかば、即時に天にも捨てられ、大地も破れて入りぬべかりしかども、殺されし父の王、一日に五百輛五百輛、數年が間佛を供養しまるらせたりし功德と、後に法華經の檀那となるべき功德によりて、天も捨てがたし、地も割れず、遂に地獄に墮ちずして佛になり給ひき。殿も又かくのごとし。兄弟にも捨てられ同僚にも怨まれ、公達にも猜められ、日本國の人にも惡まれ給ひつれども、去ぬる文永八年の九月十二日の子丑の時、日蓮が御勘氣を被りし時、馬の口に執りつきて、鎌倉を出でて、相摸の依智に御ともありしが、一閻浮提第一の法華經の御方人にて有りしかば、梵天帝釋も捨てかねさせ給へるか。佛にならせ給はん事もかくのごとし。いかなる大科ありとも、法華經を背かせ給はず候ひし、御ともの御奉公にて佛にならせ給ふ

五月一日　　　　日　蓮　花押

四條金吾殿御返事

鵞目一貫文給び候ひ畢んぬ。御所領上より給はらせ給ひて候ふなる事、まことゝも覺えず候ふ。夢かと餘りに不思議に覺え候ふ。御返事なんども、何樣に申すべしとも覺えず候ふ。其の故は、殿の御身は、日蓮が法門の御ゆゑに、日本國竝に鎌倉中、御内の人々公達までうけず、不思議に思はれて候へば、其の御内におはせむだにも不思議に候ふに、御恩を被らせ給へば、うちかへし又うちかへしせさせ給へば、いかばかり同僚どもも不思議と思ひ、上もあまりなりと思すらむ。さればこの度はいかんが有るべかるらんと疑ひ思ひ候ひつる上、御内の數十人の人々訴へて候へば、さればこそいかにも叶ひ難かるべし。あまりなる事なりと疑ひ候ひつる上、兄弟にも捨てられておはするに、かゝる御恩、面目申すばかりなし。かの處は、殿岡の三倍とあそばして候ふ上、佐渡の國のもののこれに候ふがよく〳〵其處を知りて候ふが申し候ふは、三箇郷の内に、いかだと申すは第一の處也、田畠はすくなく候へども、徳は量なしと申し候ぞ。二所は御年貢千貫、

或は山林に隱るべし。教主釋尊の御使を二度まで街路を渡し、弟子等を牢に入れ、或は殺し、或は害し、或は所國を逐ひし故に、其の科必ず其の國々萬民の身に一々に懸るべし。或は又白癩黑癩諸惡重病の人々多かるべし。我が弟子等、此の由を存ぜさせ給へ。

恐々謹言。

九月九日　日蓮花押

此の文は別しては兵衞の志殿へ、摠じては我が一門の人々御覽有るべし。他人に聞かせ給ふな。

松野殿御返事

日月は地におち、須彌山は崩るとも、彼の女人佛に成らせ給はん事疑なし。あら賴もしやたのもしや。

干飯一斗、古酒一筒、角粽、青麩、筍、方々の物送り給ひて候ふ。草にさける花、木の皮を香として佛に奉る人、靈鷲山へ參らざるはなし。況や民の骨を碎ける白米、人の血を絞れるが如くなる古酒を、佛、法華經にまゐらせ給へる女人の成佛得道疑ふべしや。

草の後に—餘草の後まで咲き殘るによりて

平の將軍—執權職北條義時をいふ

に貴邊の御身にあり。又眞實の經の御理を、代末になりて佛法あながちに亂れば、大聖人世に出づべしと見えて候ふ。喩へば松の、霜の後に木の王と見え、菊は草の後に仙草と見えて候ふ。代の治れるには賢人見えず、代の亂れたるにこそ聖人愚人は顯はれ候へ。あはれ平の左衞門殿、相摸殿の、日蓮をだに用ひられて候ひしかば、過ぎにし蒙古國の朝使の頸は、よも切らせまゐらせ候はじ。惜しくおはすらん。人皇八十一代安德天皇と申す大王は、天台の座主明雲等の眞言師等數百人かたらひて、源の右將軍賴朝を調伏せしかば、還著於本人とて、明雲は義仲に切られぬ。安德天皇は西海に沈み給ふ。人皇八十二三四、隱岐の法皇、阿波の院、佐渡の院、當今、已上四人、座主慈圓僧正、御室、三井等の四十餘人の高僧等をもて、平の將軍義時を調伏し給ふ程に、又還著於本人とて、上の四王島々に放たれ給ひき。此の大惡法は、弘法、慈覺、智證の三大師、法華經最第一の釋尊の金言を破りて、法華最第二最第三、大日經最第一と讀み給ひし僻見を御信用有りて、今生には國と身とを亡し、後生には無間地獄に墮ち給ひぬ。今度は又此の調伏三度なり。今我が弟子等死したらん人々は、佛眼をもて是を見給ふらん。命つれなくて生きたらん眼に見よ。國主等は他國へ責めわたされ、調伏の人々は或は狂死、或は他國、

四條金吾殿

日蓮　花押

兵衛志殿御書

久しくうけ給はり候はねば、よく覺束なく候ふ。何よりもあはれに不思議なる事は、大夫志殿と殿との御事不思議に候ふ。常ざまには、世末になり候へば、聖人賢人も皆かくれ、たゞ讒人佞人和讒曲理の者のみこそ、國には充滿すべきと見えて候へば、喩へば水少くなれば池さわがしく、風吹けば大海靜ならず、代の末になり候へば、旱魃疫癘大雨大風吹きかさなり候へば、廣き心も狹くなり、道心ある人も邪見になるとこそ見えて候へ。されば他人はさて置きぬ、父母と夫妻と兄弟と諍ふ事、獵師と鹿と猫と鼠と、鷹と雉との如しと見えて候ふ。良觀等の天魔の法師らが親父左衛門の大夫殿を賺し、和殿ばら二人を失はんとせしに、殿の御心賢くして、日蓮が諫を御もちひ有りしゆゑに、二の輪の車をたすけ、二の足の人を荷負へるが如く、二の羽の飛ぶが如く、日月の一切衆生を助くるが如く、兄弟の御力にて親父を法華經に入れまゐらせさせ給ひぬる御計ひ、偏

あらかるべからず—身を荒ましめず自重すべしとなり

穴賢—宛字なり、あな畏しの意、恐々謹言などいふに同じ

すは主に勝つ物也。いかに愛し離れじと思ふ妻なれども、死しぬればかひなし。いかに所領を惜しと思すとも、死しては他人の物。すでに榮えて年久し、すこしも惜む事なかれ。又さき〴〵申すがごとく、さき〴〵よりも百千萬億倍御用心あるべし。日蓮は少より今生の祈なし、只佛にならんと思ふ計り也。されども殿の御事をば、ひまなく法華經釋迦佛日天に申す也。其の故は法華經の命を繼ぐ人なればと思ふ也。穴賢々々、あらかるべからず。吾が家にあらずんば人に寄合ふ事なかれ。又夜廻の殿原はひとりも頼もしき事はなけれども、法華經の故に屋敷を取られたる人々なり、常は眤ばせ給ふべし。又夜の用心の爲と申し、かた〴〵殿の守となるべし。吾方の人々をば少々の事をば見ず聞かずあるべし。さて又法門なんどを聞ばやと仰せ候はんに、悅んで見え給ふべからず。いかんが候はんずらん、御弟子共に申してこそ見候はめと、和々とあるべし。いかにも嬉しさに色に顯れなんと覺え、聞かんと思ふ心だにも付かせ給ふならば、火をつけて燃すがごとく、天より雨の下るがごとく、萬事を捨てられんずるなり。又今度いかなる便も出來せば、したゝめ候ひし陳狀を上げらるべし。大事の文なれば、ひと騷は必ずあるべし。穴賢々々。

宿禰―稻目のこと

物部と守屋と―物部守屋は一人なるを、二人とせるはいぶかし

が如くなるべし。其の故は佛法日本に立ちし事は、蘇我の宿禰と馬子との父子二人の故ぞかし。釋迦如來の出世の時の、梵王帝釋の如くにてこそあらましなれども、物部と守屋とを失ひし故に、只一門になりて位もあがり、國をも知行し、一門も繁昌せし故に、高擧をなして崇峻天皇を失ひたてまつり、王子を多く殺し、結句は太子の御子二十三人を、馬子が孫入鹿の臣下、失ひまゐらせし故に、皇極天皇は中臣の鎌子が計として、救主釋尊を造り奉りて、あながちに申せしかば、入鹿の臣並に父等の一族一時に滅びぬ。此をもて御推察あるべし。又我が此の一門の中にも申し通らせ給はざらん人々は、かへりて失あるべし。日蓮を恨みさせ給ふな。少輔房、能登房等を御覽あるべし。かまへてかまへて此の間は餘の事なりとも、御起請かゝせ給ふべからず。火は夥しき樣なれども、暫くあれば滅る。水は鈍き樣なれども、左右なく失ひがたし。御邊は腹あしき人なれば、火の燃るがごとし。一定人にすかされなん。又主の遲々と言和かに賺させ給ふならば、火に水をかけたる樣に御わたりありぬと覺ゆ。鍛はぬ金はさかんなる火に入るれば疾く蕩け候ふ、氷を湯に入るゝがごとし。劍なんどは大火に入るれども暫くはとけず。是きたへる故也。前にかう申すは鍛ふなるべし。佛法と申すは道理也。道理と申

二聖—堯、舜
三王—禹王、湯王、武王

は、佛の御舍利と釋迦佛の畫像と五部の經を本尊と恃み給ふ。道士は本より王の前にして、習ひたりし仙經三墳五典二聖三王の書を薪につみこめてやきしかば、古は燒けざりしが灰となりぬ。先には水に浮びしが水に沈みぬ。鬼神を呼びしも來らず。あまりの恥しさに、褚善信、費叔才なんど申せし道士等は思ひ死に死しぬ。二人の聖人の說法ありしかば、舍利は天に登りて光を放ちて日輪見ゆる事なし。畫像の釋迦佛は眉間より光を放ち給ふ。呂慧通等の六百餘人の道士は歸伏して出家す。三十日が間に十寺立ちぬ。されば釋迦佛は賞罰たゞしき佛也。上に擧ぐる三代の帝竝に二人の臣下、釋迦如來の敵とならせ給ひて、今生は空しく後生は惡道に墮ちぬ。今の代も又これに變るべからず。漢土の道士信費等、日本の守屋等は、漢土日本の大小の神祇を信用して、救主釋尊の御敵となりしかば、神は佛に隨ひ奉り、行者は皆ほろびぬ。今の代も此の如く上に擧ぐる所の百濟國の佛は教主釋尊也。名を阿彌陀佛と云つて日本國をたぼらかして、釋尊を他佛にかへたり。神と佛と佛との差別こそあれども、釋尊を捨つる心はたゞ一なり。されば今の代の滅せん事又疑なかるべし。是は未だ申さゞる法門也。祕す可し祕すべし。又吾が一門の人々の中にも、信心もうすく、日蓮が申す事を背き給はゞ、蘇我

※橘寺―大和高市郡にあり、聖徳太子、母夫人の爲に建立

※摩騰迦―摩騰迦葉といふ

放ち給ふ矢なりと。此の矢はるかに飛んで太子の鎧に中る。太子名のる、此は我が放つ矢にはあらず、四天王の放ち給ふ矢なりとて、迹見の赤檮と申す舍人に射させ給へば、矢はるかに飛んで守屋が胸に中りぬ。秦川勝落ちあひて頸をとる。此の合戰は、用明崩御、崇峻未だ位につき給はざる其の中間也。第三十三崇峻天皇位につき給ふ。太子は四天王寺を建立す。此釋迦如來の御舍利なり。馬子は元興寺と申す寺を建立して百濟國よりわたりて候ひし教主釋尊を崇重す。今の代に世間第一の不思議は、善光寺の阿彌陀如來といふ誑惑これなり。又釋迦佛に怨をなせしゆゑに、三代の天皇並に物部の一族空しくなりしなり。又太子、教主釋尊の像一體つくらせ給ひて元興寺に居せしむ。今の橘寺の御本尊これなり。此こそ日本國に釋迦佛つくりし始なれ。漢土には、後漢の第二の明帝永平七年に金神の夢を見て博士蔡愔、王遵等の十八人を月氏につかはして、佛法を尋ねさせ給ひしかば、中天竺の聖人、摩騰迦、竺法蘭と申せし二人の聖人を、同じき永平十年丁卯の歲迎へ取りて崇重ありしかば、漢土にて本より皇の御祈せし儒家道家の人々數千人、此の事を妬みて訴へしかば、同じき永平十四年正月十五日に召し合はせられしかば、漢土の道士悅びをなして、唐土の神、百靈を本尊としてありき。二人の聖人

断餘人ー他人をして拜せしむる勿れ

蘇我馬子興㆓行佛法㆒。宜㆑卻㆓佛法㆒等云云。

此に守屋、中臣の臣、勝海大連等兩臣と寺に向つて堂塔を切り倒し佛像を燒きやぶり、寺には火を放ち、僧尼の袈裟を剝ぎ、笞をもつて責む。又天皇竝に守屋馬子等疫病す。其の言に云はく、燒くがごとし切るがごとし。又瘡起る、疱瘡といふ。馬子歎いて云はく、「尙㆓仰三寶㆒」勅宣に云はく、「汝獨行。但斷㆓餘人㆒等云云」馬子欣悅し精舍を造りて三寶を崇めぬ。天皇は終に八月十五日崩御云々。此の年は太子は十四なり。第三十二代用明天皇の治二年、欽明の太子、聖德太子の父也。治二年丁未四月に天皇疫病あり。皇勅して云はく、「欲㆑歸㆓三寶㆒云云」蘇我の大臣詔に隨ふべしとて、遂に法師を引いて內裏に入る、豐國の法師是也。物部の守屋大連等大に瞋り、橫に睨んで云はく、天皇を厭魅すと。終に皇隱れさせ給ふ。五月に物部の守屋が一族、澁河の家にひき籠り多勢をあつめぬ。太子と馬子と押し寄せて戰ふ。五月六月七月の間に四箇度合戰す。三度は太子まけ給ふ。第四度めに太子願を立てて云はく、釋迦如來の御舍利の塔を立て四天王寺を建立せんと。馬子願つて云はく、百濟より渡すところの釋迦佛を、寺を立てて崇重すべしと云云。弓削名宣つて云はく、此は我が放つ矢にはあらず、我が先祖崇重の府都の大明神の

死せる者大半に及ぶ。すでに國民盡きぬべかりしかば、物部の大連、隙を得て此の佛を失ふべきよし申せしかば、勅宣なる。早く佗國の佛法を棄つべし云々。物部の大連御使として、佛をば取りて炭をもて起し、槌をもて打ちくだき、佛殿をば火をかけて燒きはらひ、僧尼をば笞を加ふ。其の時天に雲なくして大風ふき雨ふり、内裏天火に燒けあがつて、大王竝に物部の大連、蘇氏の臣三人共に疫病あり、切るがごとく燒くがごとし。大連は終に壽絶えぬ。蘇我と王とは辛くして蘇生す。而れども佛法を用ふることなくして十九年すぎぬ。第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子、治十四年なり。左右の兩臣は、一は物部の大連が子にて弓削の守屋、父のあとをついで大連に任ず。蘇我の宿禰の子は蘇我の馬子と云々。此の王の御代に聖德太子生れ給へり。用明の御子、敏達の甥なり。御年二歳の二月東に向つて無名の指を開いて「南無佛」と唱へ給へば、御舍利掌にあり。是日本國の釋迦念佛の始也。太子八歳なりしに、八歳の太子云はく、西國の聖人釋迦牟尼佛の遺像、末世に之を尊めば則ち禍を銷し福を蒙る、之を蔑れば則ち災を招き壽を縮む等云云。大連物部の弓削宿禰の守屋等怒りて云はく、蘇我は勅宣を背きて佗國の神を禮す等云云。又疫病未だ息ず、人民すでにたえぬべし。弓削守屋又此を問奏す云々。勅宣に云はく、

へ行く事天然のことわり。磁石と鐵と雷と象華とのごとし。誰か此のことわりを破らん。此の國に佛法わたりし由來をたづぬれば、天神七代地神五代すぎて、人王の代となりて第一神武天皇乃至第三十代欽明天皇と申せし王おはしき。位につかせ給ひて三十二年治世し給ひしに、第十三年壬申十月十三日辛酉に、此の國より西に百濟國と申す國あり、日本國の大王の御知行の國也。其の國の大王聖明王と申せし國王あり、年貢を日本國にまゐらせしついでに、金銅の釋迦佛竝に一切經法師尼等を渡したりしかば、天皇大に喜びて、群臣に仰せて、西蕃の佛をあがめ奉るべしやいなや。蘇我の大臣稻目の宿禰と申せし人の云はく、西蕃の諸國みな此を禮す、豐秋日本あに獨り背かん哉と申す。物部の大連尾輿、中臣の鎌子等奏して曰はく、我が國家天下に君たる人は、つねに天地社稷百八十神を、春夏秋冬に祭拜するを事とす、しかるを今更あらためて西蕃の神を拜せば、恐らくは我が國の神怒をなさんと云々。爾の時に天皇別ちがたくして勅宣す。此の事を只心みに蘇我の大臣につけて一人に崇めさすべし、佗人用ふる事なかれ。蘇我の大臣うけ取りて大に悅び給ひて、此の釋迦佛を我が居住の小墾田と申すところに入れまゐらせて安置せり。物部の大連不思議なりとて憤りし程に、日本國に大疫病起りて

へ。かへすがへす奉行人に諂ふ氣色なかれ。此の所領は上より給びたるにはあらず、大事の御所勞を法華經の藥をもつてたすけまゐらせて給びて候ふ所領なれば、召すならば御所勞こそ又かへり候はむずれ。爾時は賴基に御怠狀候ふとも用ひまゐらせ候ふまじく候ふと、打ちあて憎體氣にてかへるべし。あなかしこ、あなかしこ。御寄合あるべからず。夜は用心きびしく、夜廻の殿原語らひて用ひ、常には寄り合はるべし。今度御内をだにも出されずば、十に九は内のものねらひなむ。かまへて、穢き死すべからず。

建治三年丁丑七月　　日蓮　花押

四條金吾殿御返事

御文あら〱うけ給はりて長き夜の明け遠き道をかへりたるがごとし。夫佛法と申すは、勝負を先とし、王法と申すは賞罰を本とせり。故に佛をば世雄と號し、王をば自在となづけたり。中にも天竺をば月氏といふ。我が國をば日本と申す。一閻浮提八萬の國の中に、大なる國は天竺、小なる國は日本也。名のめでたきは印度第二、扶桑第一也。佛法は月の國より始めて日の國にとゞまるべし。月は西より出で、東に向ひ、日は東より西

我とは―自ら進んで

法華經に傷をつけ給ふべからず。されば同じくは嘆きたる氣色なくて、此の狀にかきたるがごとく、すこしも諂はず振舞ひ仰せあるべし。中々諂ふならば惡しかりなん。設ひ所領を召され追ひ出し給ふとも、十羅刹女の御計ひにてぞあるらむと、深く恃ませ給ふべし。日蓮は流罪されずして鎌倉にだにもありしかば、有りし軍に一定打ち殺されなん、此も又御内にては惡しかりぬべければ、釋迦佛の御計ひにてやあるらむ。陳狀は申して候へども、又それに僧は候へども、あまりの覺束なさに三位房をつかはすべく候ふに、いまだ所勞きら〱しく候はず候へば、同事に此の御房をまゐらせ候ふ。大學の三郎殿か、瀧の太郎殿か、富木殿かに、暇に隨ひて書かせて上げさせ給ふべし。これはあげなば事きれなむ、いたう急がずとも、内々うちを認め、又ほかの彼奴原にも、あまねく騷がせてさし出したらば、若や此の文かまくら内にも披露し、上へもまゐる事もやあるらん。禍の幸はこれなり。法華經の御事は已前に申しふりぬ。しかれども小事こそ善よりはおこつて候へ、大事になりぬれば必ず大なるさわぎが大なる幸となるなり。此の陳狀人ごとに見るならば、彼等が恥あらはるべし。只一口に申し給へ。我とは御内を出で所領を上ぐべからず。上より召され出さむは法華經の御布施、幸と思ふべしと罵らせ給

中々―却って

の末代の凡夫が、爭か此の經の行者となるべき、設ひ日蓮一人は杖木瓦石惡口王難をも忍ぶとも、妻子を帶せる無智の俗なんどは、爭か叶ふべき、中々信ぜざらんはよかりなん、末通らず暫時ならば、人に笑はれなんと不便に思ひ候ひしに、度々の難二箇度の御勘氣に、心ざしをあらはし給ふだにも不思議なるに、かく脅さるゝに、二所の所領をすてて法華經を信じ通すべしと御起請候ふ事、いかにとも申す計りなし。普賢文殊等なほ末代はいかんがと、佛思食して、妙法蓮華經の五字をば、地涌千界の上首、上行等の四人にこそ仰せつけられて候へ。只事の心を案ずるに、日蓮が道を扶けんと、上行菩薩貴邊の御身に入りかはらせ給へるか。又敎主釋尊の御計か。彼の御內の人々うちはびこつて、良觀、龍象が計ひにてや定あるらん。起請をかゝせ給ひなば、いよ〳〵彼奴等驕りてかた〴〵にふれ申さば、鎌倉の內に日蓮が弟子等一人もなく責め失ひなん。凡夫のならひ、身の上ははからひがたし。これをよく〳〵知るを賢人聖人とは申すなり。遠きをばしばらくおかせ給へ。近きは武藏の守殿兩所をすてて入道になり、結句は多くの所領男女の公達御ぜん等をすてて、御遁世と承はる。殿は子なし。たのもしき兄弟なし。わづかの二所の所領なり。一生は夢の上、明日を期せず。いかなる乞食にはなるとも、

初地初住—十地十住といふ菩薩の位の初
得無生忍—無生忍といふさとりの位を得たること

なれども、法華經の松にかゝりて妙覺の山にものほりなん。一乘の羽をたのみて寂光の空にもかけりぬべし。此の羽をもて父母祖父祖母乃至七代の末までもとぶらふべき僧なり。あはれいみじき御寶はもたせ給ひておはします女人かな。彼の龍女は珠をさゝげて佛となり給ふ。此の女人は孫を法華經の行者となしてみちびかれさせ給ふべし。事々怱々にて候へば、くはしくは申さず。又々申すべく候。恐々。

七月十三日　　日蓮花押

治部殿うばごぜん御返事

四條金吾殿御返事

去月二十五日の御文同月の二十七日の酉の時に來りて候ふ。仰せ下さるゝ狀と又起請書くまじきよしの御誓狀とを見候へば、優曇華のさきたるを見るか、赤栴檀の嫩葉になるを得たるか。珍し香し。三明六通を得給ふ上、法華經にて初地初住にのぼらせ給へる證果の大阿羅漢、得無生忍の菩薩なりし舍利弗、目連、迦葉等だにも、娑婆世界の末法に法華經を弘通せん事の大難忍へかねければ、叶ふまじき由辭退候ひき。まして三惑未斷

候ひき。三男知盛は海に入りて魚の糞となりぬ。四男重衡は其の身に繩をつけて京鎌倉を引かれて、結句奈良七大寺にわたされて、十萬人の大衆等、我等が佛のかたきなりとて、一刀づつきざみぬ。惡の中の大惡は我が身に其の苦を受くるのみならず、子と孫と末七代までもかゝり候ひけるなり。善の中の大善も又又かくのごとし。目蓮尊者が法華經を信じまゐらせし大善は、我が身佛になるのみならず、父母佛になり給ふ。上七代下七代、上無量生下無量生の父母等存外に佛となり給ふ。乃至子息夫妻所從檀那無量の衆生、三惡道を離るゝのみならず、皆初住、妙覺の佛となりぬ。故に法華經の第三に云はく、

願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道云云。

されば此等をもつて思ふに、貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち給へり。此の僧は無戒也無智なり。二百五十戒一戒を持つことなし。三千の威儀一つを持たず。智慧は牛馬に類し威儀は猿猴に似て候へども、仰ぐところは釋迦佛、信ずる法は法華經なり。例せば蛇の珠を握り龍の舍利を戴くがごとし。藤は松にかゝりて千尋をよぢ、鶴は羽を恃みて萬里をかける。此は自身の力にはあらず。治部房も又かくのごとし。我が身は藤のごとく

かるに、目連尊者と申す人は法華經と申す經にて正直捨方便とて、小乘の二百五十戒立ちどころになげすてて、南無妙法蓮華經と申せしかば、やがて佛になりて、名號をば多摩羅跋栴檀香佛と申す。此の時こそ父母も佛になり給へ。故に法華經に云はく、「我願既滿衆望亦足云云」目連が色身は父母の遺體なり。目連が色身佛になりしかば父母の身も又佛になりぬ。例せば、日本國八十一代の安德天皇と申せし王の御宇に、平氏の大將安藝の守淸盛と申せし人おはしき。度々の合戰に國敵を亡して上太政大臣まで官位をきはめ、當今は孫となり、一門は雲客月卿につらなり、日本六十六國島二を掌の内にかい握りて候ひしが、人を順ふこと大風の草木をなびかしたるやうにて候ひしほどに、心憍り身あがり、結句は神佛をあなづりて神人と諸僧を手に握らむとせしほどに、山僧と七寺との諸僧の敵となりて、結句は去ぬる治承四年十二月二十二日に七寺の内の東大寺興福寺の兩寺を燒きはらひてありしかば、其の大重罪、入道の身にかゝりて、かへる歲養和元年閏二月四日、身は炭のごとく、面は火のごとく、炭のおこれるがやうにて、結句は炎身より出でて、熱死に死ににき。其の大重罪をば二男宗盛にゆづりしかば、西海に沈むとみえしかども、東天に浮び出でて、右大將賴朝の御前に繩をつけてひきすゑて

匝—めぐり
重報—重き恩報
淨名居士—維摩居士

は、七月十五日に此の法を行ひ候ふなり。此は常のごとし。日蓮案じて云はく、目連尊者と申せし人は、十界の中に聲聞道の人、二百五十戒をかたく持つ事石のごとし。三千の威儀を備へて缺けざる事は十五夜の月のごとし。智慧は日に似たり。神通は須彌山を十四匝まき、大山を動せし人ぞかし。かゝる聖人だにも、重報の乳母の恩報じがたし。あまさへ、報ぜんとせしかば大苦を增し給ひき。今の僧等の二百五十戒は名計りにて、事を戒によせて人をたぼらかし、一分の神通もなし。大石の天に上らんとせんがごとし。智慧は牛に類し羊にことならず。設ひ千萬人をあつめたりとも、父母の一苦救ふべしや。せんずるところは、目連尊者が乳母の苦を救はざりし事は、小乘の法を信じて二百五十戒と申す持齋にてありしゆゑぞかし。されば淨名經と申す經には、淨名居士と申す男、目連房をせめて云はく、「供二養汝一者。墮二三惡道一云云」文の心は、二百五十戒の尊き目連尊者を供養せん人は三惡道に墮つべしと云々。此又たゞ目連一人が聞く耳にはあらず、一切の聲聞乃至末代の持齋等が聞く耳なり。此の淨名經と申すは、法華經の御ためには數十番の末の郞從にて候ふ。詮ずるところは、目連尊者が自身のいまだ佛にならざるゆゑぞかし。自身佛にならずしては、父母をだにも救くひがたし。いはうや他人をや。し

れはいま少し悲しさは勝りけん。目蓮尊者はあまりの悲しさに、大神通を現じ給ひ、飯をまゐらせたりしかば、母よろこびて右の手には飯をにぎり、左の手にては飯を隱して口に押し入れ給ひしかば、いかんがしたりけん、飯變じて火となり、やがて燃えあがり、燈心をあつめて火をつけたるがごとく、ぱと燃えあがり、母の身のこここと燒け候ひしを、目連見給ひて、あまり周章てさわぎ、大神通を現じて大なる水をかけ候ひしかば、其の水薪となりていよ〳〵母の身のやけ候ひし事こそあはれには候ひしか。其の時目連みづからの神通叶はざりしかば、走りかへり、須臾に佛にまゐりて歎き申せしやうは、我が身は外道の家に生れて候ひしが、佛の御弟子になりて阿羅漢の身を得て、三界の生を離れ、三明六通の羅漢とはなりて候へども、乳母の大苦を救はんとし候ふに、かへりて大苦にあはせて候ふは、心憂しとなげき候ひしかば、佛說いて云はく、汝が母は罪ふかし、汝一人が力及ぶべからず、又何の人なりとも、天神、地神、邪魔、外道、道士、四天王、帝釋、梵王の力も及ぶべからず。七月十五日に十方の聖僧をあつめて百味飲食を調へて母の苦を救ふべしと云々。目連、佛の仰のごとく行ひしかば、其の母は餓鬼道一劫の苦を脫れ給ひきと。盂蘭盆經と申す經に說かれて候ふ。其によつて滅後末代の人々

三明―宿命明、天眼明、漏盡明

取るに及ばず―取ること能はず

餓鬼道に墮ちて候ひしを、目連尊者の救ひ給ふより事起りて候ふ。其の因緣は、母は餓鬼道に墮ちてなげき候ひけれども、目連は凡夫なれば知ることなし。幼少にして外道の家に入り、四韋陀、十八大經と申す外道の一切經を習ひ盡せども、いまだ其の母の生所を知らず。其の後十三の年、舍利弗とともに釋迦佛にまゐりて御弟子となり、見惑を斷じて初果の聖人となり、修惑を斷じて阿羅漢となりて、三明をそなへ、六通を得給へり。天眼をひらいて三千大千世界を明鏡の影のごとく御覽ありしかば、大地を見透し三惡道を見る事、氷の下に候ふ魚を朝日に向ひて我等が透し見るがごとし。其の中に餓鬼道と申すところに我が母あり、のむ事なし食ふことなし、皮は金鳥を毟れるがごとく、骨はまろき石を並べたるがごとし。頭は毬のごとく、頸は絲のごとし。腹は大海のごとし。口を張り手を合せて物を乞へる形は、餓ゑたる蛭の人の香をかけるがごとし。先生の子を見て泣かんとするすがた、うゑたるかたち、譬をとるに及ばず。いかんが悲しかりけん。法勝寺の執行俊寛が、硫黃の島に流されて、躶にて髮頸付にうち蔽ひ、瘦せ衰へて海邊に憩ひて、藻屑をとりて腰にまき、魚を一見つけて右の手にとり、口に咬みける時、本仕へし童のたづね行きて見し時と、目連尊者が母を見しと、いづれか疎なるべき。か

いみじかりし時云々—現世の榮にほこるをいふ
所領云々—意外にも領地を召し上げらるゝ樣のこと
盂蘭盆—梵語、倒懸と譯す、非常の苦なり

恐謹言。

この世の中はいみじかりし時は何事かあるべきと見えしかども、當時は殊に危氣に見え候ふぞ。いかなる事ありとも嘆かせ給ふべからず。ふつと思ひきりて、所領なんども違ふ事あらば、いよ〳〵悅びとこそ思ひて、打嘯きてこれへわたらせ給へ。所地知らぬ人もあまりにすぎ候ふぞ。當時筑紫へむかひてなげく人々は、いかばかりとか思す。これは皆日蓮を上のあなづらせ給ひしゆゑなり。

七月二日　　日蓮花押

南條殿御返事

盂蘭盆御書

麞牙一俵、燒米、瓜、茄子等佛前にさゝげ申し上げ候ひ畢んぬ。

盂蘭盆と申し候ふ事は、佛の御弟子の中に目連尊者と申して、舍利弗にならびて智慧第一神通第一と申して、須彌山に日月のならび、大王に左右の臣のごとくにおはせし人なり。此の人の父をば吉懺師子と申し、母をば青提女と申す。其の母の慳貪の科によつて、

させ給ひしかば、昔うゐたる世に麥の飯を一盃供養したりしゆゑに、忉利天に千反生れて、今釋迦佛に値ひまゐらせ、僧の中の第一とならせ給ひ、法華經にて光明如來と名をさづけられさせ給ふと、天台大師文句の第一に記されて候ふ。かれをもつて此を案ずるに、迦葉尊者の麥の飯は、いみじくて光明如來とならせ給ふ。今の檀那の白麥は、いやしくて佛にならず候ふべきか。在世の月は今も月、在世の花は今も花、むかしの功德は今の功德なり。その上、上一人より下萬民までに惡まれて山中に餓死すべき法華經の行者なり。これを不便と覺して山河を越え渡り、送りたびて候ふ御心ざしは、麥にはあらず金なり。金にはあらず法華經の文字なり。我等が眼には麥なり、十羅刹には此のむぎをば佛の種とこそ御らん候ふらめ。阿那律が稗の飯は變じて兎となる。兎變じて死人となる。死人變じて金となる。指をぬきて賣りしかば又いできたりぬ。王の責のありし時は死人となる。かくのごとく盡きずして九十一劫なり。釋摩男と申せし人の、石をとりしかば金となりき。金粟王は砂を金となし給ひき。今の麥は法華經の文字なり。又は女人の御ためには鏡となり、身のかざりとなるべし。男のためには甲となり、冑となるべし。守護神となりて弓箭の第一の名を取るべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。恐

四種の花—天の感應する時四種の蓮華降るをいふ

を以て地とし、金の繩を以て八の道を界へり。天より四種の花ふり、虚空に音樂聞えて、諸佛菩薩は常樂我淨の風にそよめき、娯樂快樂し給ふぞや。我等も其の數に列りて遊戲し樂むべき事、はや近づけり。信心弱くしては、かゝる目出たき所に行くべからず行くべからず。不審の事をば倘々承るべく候ふ。穴賢々々。

建治二年丙子十二月九日　　日蓮花押

松野殿御返事

南條殿御返事

白麥一俵、小白麥一俵、河のり五帖送り給ひ畢んぬ。佛の御弟子に阿那律尊者と申せし人は、幼くしての御名をば如意と申す。如意と申すは心の思の寶を雨らししゆゑ也。このよしを佛に問ひまゐらせ給ひしかば、昔飢ゑたる世に緣覺と申す聖人を、稗の飯をもて供養しまゐらせしゆゑと答へさせ給ふ。迦葉尊者と申せし人は、佛についても閻浮提第一の僧なり。俗にておはせし時は長者にて、[illegible]六十、その藏に金を百四十石づつ入れさせ給ふ。それより外のたから、申すばかりなし。この人の先生の御事を佛にとひまゐらせ

睡の夢ぞかし。受けがたき人身を得て、適出家せる者も、佛法を學し謗法の者を責めずして、徒らに遊戲雜談のみして明し暮さん者は、法師の皮を著たる畜生也。法師の名を借りて世を渡り身を養ふといへども、法師となる義は一もなし。法師と云ふ名字をぬすめる盜人也。恥づべし恐るべし。迹門には「我不レ愛二身命一但惜二無上道一」と說き、本門には「不二自惜一身命一」と說き、涅槃經には「身輕法重。死レ身弘レ法」と見えたり。本迹兩門、涅槃經共に身命を捨てて法を弘むべしと見えたり。此等の禁を背く重罪は、目には見えざれども積りて地獄に墮つる事、譬へば寒熱の姿形もなく眼には見えざれども、冬は寒來りて草木人畜をせめ、夏は熱來りて人畜を熱惱せしむるが如くなるべし。然るに在家の御身は但餘念なく南無妙法蓮華經と御唱へありて、僧をも供養し給ふが肝心にて候ふ也。それも經文の如くならば、隨力演說も有るべき歟。世の中もの憂からん時も、今生の苦さへ悲しゝ、況や來世の苦をやと思食しても、南無妙法蓮華經と唱へ、悅ばしからん時も、今生の悅は夢の中の夢、靈山淨土の悅こそ實の悅なれと思食し合せて、又南無妙法蓮華經と唱へ、退轉なく修行して最後臨終の時を待つて御覽ぜよ。妙覺の山に走り登つて、四方をきつと見るならば、あら面白や法界寂光土にして、瑠璃

滅なるを樂となす

れじと度々誦して深く其の心にそめ、悦ばしき處はこれ佛の說き給へるにも異ならず、歎はしき處は我一人のみ聞きて人の爲に傳へざらん事をと、深く思ひて、石の上、壁の面、路の邊の諸木ごとに、此の偈を書き付け、願はくは後に來らん人必ず此の文を見、其の義理をさとり、實の道に入れと云ひ畢つて、卽ち高き木に登りて鬼神の前に落ち給へり。いまだ地に至らざるに、鬼神俄に帝釋の形と成りて、雪山童子の其の身を受け取りて、平かなる所に据ゑ奉りて恭敬禮拜して云はく、我暫く如來の聖教を惜みて、試に菩薩の心を惱し奉る也、願はくは此の罪を許して、後世には必ず救ひ給へと云ふ。一切の天人又來りて、善哉々々、實に是菩薩也と讚め給ふ。半偈の爲に身を投げて、十二劫生死の罪を滅し給へり。此の事涅槃經に見えたり。然れば雪山童子の古を思へば、半偈の爲に猶命を捨て給ふ。何に況や此の經の一品一卷を聽聞せん恩德をや。何を以てか此を報ぜん。尤も後世を願はんには、彼の雪山童子の如くこそあらまほしくは候へ。誠に我が身貧にして布施すべき寶なくば、我が身命を捨て、佛法を得べき便あらば、身命を捨てて佛法を學すべし。とても此の身は徒に山野の土と成るべし、惜みても何かせん。惜むとも惜み遂ぐべからず。人久しといへども百年には過ぎず。其の間の事は但一

生滅云云―生滅の滅し已りて寂

し、人のあたゝかなる血を飲む、空を飛び普ねく求れども、人をば各守り給ふ佛神ましませば、心に任せて殺しがたし、佛神の捨て給ふ衆生を殺して食する也と云ふ。其の時雪山童子の思ひ給はく、我法の爲に身を捨て、此の偈を聞き畢らんと思ひて、汝が食物こゝに有り、外に求むべきにあらず、我が身いまだ死せず、其の肉あたゝか也、我が身いまだ寒えず、其の血あたゝかならん、願はくは殘の偈を說き給へ、此の身を汝に與へんと云ふ。時に鬼神大に瞋つて云はく、誰か汝が語を實とは憑むべき。聞いて後には誰をか證人として糾さんと云ふ。雪山童子の云はく、此の身は終に死すべし、徒に死せん命を法の爲に投げば、きたなくけがらはしき身を捨て、後生は必ず覺を開き、佛となり清妙なる身を受くべし、土器を捨てて寶器に替ふるが如くなるべし、梵天帝釋四天王十方の諸佛菩薩を、皆證人とせん、我更に僞るべからずとの給へり。其の時鬼神少し和いで、若汝が云ふ處實ならば偈を說かんと云ふ。其の時雪山童子大に悅んで、身に著たる鹿の皮を脫いで法座に敷き、頭を地に付け掌を合せ跪き、但願はくは我が爲に殘の偈を說き給へと云うて、至心に深く敬ひ給ふ。さて法座に登り、鬼神偈を說いて云はく、「生滅滅已寂滅爲樂」と。此の時雪山童子是を聞き、悅び貴み給ふ事限なく、後世までも忘

うつける—不確實なる

かに母の音を聞きつるが如し。此の事誰か誦しつるぞ、いまだ殘の語あらんとて、普ねく尋ね求むるに、更に人もなければ、若も此の語は鬼神の說きつる歟と疑へども、よもさもあらじと思ひ、彼の身は罪報の鬼神の形也、此の偈は佛の說き給へる語也、かゝる賤しき鬼神の口より出づべからずとは思へども、亦殊に人もなければ、若此の語汝が說きつるかと問へば、鬼神答へて云ふ、我に物な云ひそ、食せずして日數を經ぬれば飢ゑ疲れて正念を覺えず、既にあだ言云ひつるならん、我うつける意にて云へば知る事もあらじと答ふ。童子の云はく、我は此の半偈を聞きつる事、半なる月を見るが如く、半なる玉を得るに似たり、慥に汝が語也、願はくは殘れる偈を說き給へとのたまふ。鬼神の云はく、汝は本より悟あれば、聞かずとも恨は有るべからず、吾は今飢に責められたれば、物を云ふべき力なし、都て我に向ひて物な云ひそと云ふ。童子猶物を食ひてば說かんやと問ふ。鬼神答へて、食ひてば說きてんと云ふ。童子悅びて、さて何物をか食とするぞと問へば、鬼神の云はく、汝更に問ふべからず、此を聞きては必ず恐を成さん、亦汝が求むべき物にもあらずと云へば、童子猶責めて問ひ給はく、其の物をとだにも云はゞ、試にも求めんとの給へば、鬼神の云はく、我は但人の和らかなる肉を食

實報—報身佛の淨土
寂光—法身佛の淨土

諸行云々—諸行は無常なりこれ生滅の法なればなり

法をも信ぜず、無行無智にして徒らに明し暮して、閻魔の廳庭に引き迎へられん時は、何を以てか資糧として、三界の長途を行き、何を以て船筏として、生死の曠海を渡りて、實報寂光の佛土に至らん哉と思ひ、迷へば夢、覺れば寤、しかじ夢の憂世を捨てて寤の覺を求めんにはと思惟し、彼の山に籠りて觀念の牀の上に、妄想顚倒の塵を拂ひ、偏に佛法を求め給ふ所に、帝釋遙に天より見下し給ひて思食さるゝ樣は、魚の子は多けれども魚となるは少く、菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少し、人も又此の如し、菩提心を發す人は多けれども、退せずして實の道に入る者は少し、都て凡夫の菩提心は、多く惡緣にたぼらかされ、事にふれて移りやすき物也、鎧を著たる兵者は多けれども、戰に恐をなさゞるは少きが如し、此の人の意を行きて試みばやと思ひて、帝釋鬼神の形を現じ、童子の側に立ち給ふ。其の時佛世にましまさゞれは、雪山童子普ねく大乘經を求むるに、聞くことあたはず。時に「諸行無常是生滅法」と云ふ音ほのかに聞ゆ。童子驚き四方を見給ふに人もなし、但鬼神近付いて立ちたり。其の形けはしく恐しくして、頭のかみは炎の如く、口の齒は劍の如く、目を瞋らして雪山童子を守り奉る。此を見るにも恐れず、偏に佛法を聞かん事を喜び怪しむ事なし。譬へば母を離れたる犢ほの

老少不定—死は老者少者の順によらぬこと

ひき。此の雪山童子思はれけるは、倩世間を觀ずるに、生死無常の理なれば、生ずる者は必ず死す、されば憂世の中のあだ、はかなき事、譬へば電光の如く、朝露の日に向ひて消ゆるに似たり、風の前の燈の消えやすく、芭蕉の葉の破れやすきに異ならず、人皆此の無常を遁れず、終に一度は黃泉の旅に趣くべし、然れば冥途の旅を思ふに、闇闇としてくらければ、日月星宿の光もなく、せめて燈燭とて燈す火だにもなし。かゝる闇き道に又伴ふ人もなし、娑婆にある時は、親類兄弟妻子眷屬集りて、父は慈の志高く、母は悲の情深く、夫妻は海老同穴の契とて、大海にあるえびは同じ畜生ながら夫妻ちぎり細かに、一生一處にともなひて、離れ去る事なきが如く、鴛鴦の衾の下に枕を竝べて遊び戲るゝ中なれども、彼の冥途の旅には伴ふ事なし。冥々として獨り行く、誰か來りて是非を訪はんや、或は老少不定の境なれば、老いたるは先立ち若きは留まる、是は順次の道理也、歎の中にもせめて思ひなぐさむ方も有りぬべし、老いたるは留まり若きは先立つ、されば恨の至つて恨めしきは、幼くして親に先立つ子、歎の至つて歎かしきは、老いて子を先立つる親也、是の如く生死無常老少不定の境、仇にはかなき世の中に、但晝夜に今生の貯をのみ思ひ、朝夕に現世の業をのみなして、佛をも敬はず、

給ふ人歟。「能聽是法者。斯人亦復難」とて、此の經は正しき佛の御使世に出でずんば、佛の御本意の如く說く事難き上、此の經のいはれを問ひ尋ねて不審を明らめ能信ずる者難かるべしと見えて候ふ。何に賤者なりとも、少し我より勝れて智慧ある人には、此の經のいはれを問ひ尋ね給ふべし。然るに惡世の衆生は、我慢偏執名聞名利に著して、彼が弟子と成るべき歟。彼に物を習はゞ人にや賤しく思はれんずらんと、不斷惡念に住して惡道に墮すべしと見えて候ふ。法師品には、人有りて八十億劫の間、無量の寶を盡して佛を供養し奉らん功德よりも、法華經を說かん僧を供養して後に須臾の間も此の經の法門を聽聞する事あらば、我大なる利益功德を得べしと悅ぶべしと見えたり。無智の者は此の經を說く者に使はれて功德を得べし。何なる鬼畜なりとも、法華經の一偈一句をも說かん者をば、「當起遠迎。當如敬佛」の道理なれば、佛の如く互に敬ふべし。例へば寶塔品の時の釋迦多寶の如くなるべし。此の三位房は下劣の者なれども、少分も法華經の法門を申す者なれば、佛の如く敬ひて法門を御尋ねあるべし。「依法不依人」此を思ふべし。されば昔獨りの人有りて、雪山と申す山に住み給ひき。其の名を雪山童子と云ふ。蕨を折り菓を拾ひて命をつぎ、鹿の皮を著物と拵へ、肌をかくし、閑に道を行じ給

明惡數者。今文云說不說耳。有人分此云。先列惡因。次列惡果。惡因十四。一憍慢。二懈怠。三計我。四淺識。五著欲。六不解。七不信。八顰蹙。九疑惑。十誹謗。十一輕善。十二憎善。十三嫉善。十四恨善也。

此の十四誹謗は在家出家に亙るべし。恐る可し恐る可し。過去の不輕菩薩は、一切衆生に佛性あり、法華經を持たば必ず成佛すべし、彼を輕んじては佛を輕んずるになるべしとて、禮拜の行をば立てさせ給ひし也。法華經を持たざる者をさへ若持ちやせんずらん、佛性ありとて、かくの如く禮拜し給ふ。何に況や、持てる在家出家の者をや。此の經の四の卷には、若は在家にてもあれ出家にてもあれ、法華經を持ち說く者を、一言にても毀る事あらば、其の罪多き事、釋迦佛を一劫の間直ちに毀り奉る罪には勝れたりと見えたり。或は「若實若不實」とも說かれたり。之を以て之を思ふに、忘れても法華經を持つ者をば互に毀るべからざる歟。其の故は法華經を持つ者は必ず皆佛也。佛を毀りては罪を得る也。加樣に心得て唱ふる題目の功德は釋尊の御功德と等しかるべし。釋に云はく、

阿鼻依正。全處極聖自身。毘盧身土。不逾凡下一念云云。

十四誹謗の心は文に任せて推量あるべし。加樣に法門を御尋ね候ふ事誠に後世を願はせ

「我不愛身命」の修行を致し、佛の御恩を報ぜんと面々までも教化申し、此の如く供養等まで捧げしめ給ふ事不思議也。末世には狗犬の僧尼は恒沙の如しと佛は說かせ給ひて候ふ也。文の意は、末世の僧比丘尼は名聞名利に著し、上には袈裟衣を著たれば、形は僧比丘尼に似たれども、內心には邪見の劍を提げて我が出入する檀那の所へ、餘の僧尼をよせじと、無量の讒言を致し、餘の僧尼を寄せずして檀那を惜まん事、譬へば犬が前に人の家に至りて物を得て食ふが、後に犬の來るを見ていがみ吠え食合ふが如くなるべしと云ふ心也。是の如きの僧尼は、皆々惡道に墮すべき也。此の學徒日源は學生なれば、此の文をや見させ給ひけん。殊の外に僧衆を訪ひ顧み給ふ事誠に有り難く覺え候ふ。御文に云はく、此の經を持ち申して後退轉なく、十如是、自我偈を讀み奉り、題目を唱へ申し候ふ也、但し聖人の唱へさせ給ふ題目の功德と、我等が唱へ申す題目の功德と、何程の多少候ふべきやと云々。更に勝劣あるべからず候ふ。其の故は、愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、愚者の燃せる火も智者の燃せる火も其の差別なき也。但し此の經の心に背いて唱へば、其の差別有るべき也。此の經の修行に重々のしなあり、其の大概を申せば、記の五に云はく、

鵞目―鳥目に同じ錢の事

流沙―西域にある河の名

僻事なり。是程の御悦まゐりても悦びまゐらせ度候へども、人聞つゝましく候ひてとどめ候ひ畢んぬ。

乃時　日蓮花押

西山殿御返事

松野殿御返事

鵞目一結、白米一駄、白小袖一送り給ひ畢んぬ。抑此の山と申すは南は野山漫々として百餘里に及べり、北は身延山高く峙ちて白根が嶽につゞき、西には七面と申す山峨々として白雪絶えず、人の住家一字もなし。適問ひくる物とては、梢を傳ふ猨猴なれば、少も留まる事なく、還るさ急ぐ恨なる哉。東は富士河漲りて流沙の浪に異ならず。かゝる所なれば、訪ふ人も希なるに、加樣に度々音信せさせ給ふ事不思議の中の不思議也。實相寺の學徒日源は、日蓮に歸伏して所領を捨て、弟子檀那に放され御座て我が身だにも置處なき由承り候ふに、日蓮を訪ひ衆僧を哀みさせ給ふ事、誠の道心也、聖人也。已に彼の人は無雙の學生ぞかし。然るに名聞名利を捨てて某が弟子と成りて、我が身には

萬法は己心―あらゆる事物は自己一心より顯現すとの考
九山八海―世界の中心須彌山の周圍にあり

世を知しめすに過ぎて候ふ御智慧はなし。設佛にあらねども、龍樹、天親、天台、傳敎なんど申せし聖人賢人等は、佛程こそなかりしかども、三世の事を粗知しめされて候ひしかば、名をも未來まで流されて候ひき。所詮萬法は己心に收りて一塵も闕けず、九山八海も我が身に備りて日月衆星も己心にあり。然りといへども、盲目の者の鏡に影を浮べるに見えず、嬰兒の水火を怖れざるが如し。外典の外道、內典の小乘權大乘等は、皆己心の法を片端々々說きて候ふ也。然りといへども、法華經の如く說かず。然れば經經に勝劣のあり、人々にも聖賢分れて候ふぞ。法門多々なれば止め候ひ畢んぬ。鎌倉より御下り早々の御隙に使者申す計りなし。其の上種々の物送り給び候ふ事悅び入つて候ふ、日本は皆人の歎き候ふに、日蓮が一類こそ歎の中に悅び候へ。國に候へば蒙古の責はよも脫れ候はじなれども、國のために責められ候ひし事は天も知しめして候へば、後生は必ずたすかりなんと悅び候ふに、御邊こそ今生に蒙古國の恩を蒙らせ給ひて候へ。此の事起らずば、最明寺殿の十三年に當らせ給ひては、御かりは所領にては申す計りなし。北條六郎殿のやうに、筑紫にや御坐なん。是は各々の御心の忤逆らせ給うて候ふ也。人の科を當てるにはあらず。又一には法華經の御故に助らせ給ひて候ひぬるがゆゝしき御

て候ふを、憍りて云ふと思ふべし。此の二十餘年の間、私には晝夜に弟子等に歎き申し、公には度々申せし事是也。一切の大事の中に、國の亡ぶるが第一の大事にて候ふ也。最勝王經に云はく、

害中極重。者無過失國位等云云。

文の心は、一切の惡の中に國王と成りて政惡くして、我が國を他國に破らるゝが第一の惡にて候ふと說かれて候ふ。又金光明經に云はく、

由愛敬惡人治罰善人故。乃至他方怨賊來。國人遭喪亂等云云。

文の心は、國王と成りて惡人を愛し善人を科にあつれば、必ず其の國他國に破らるゝと云ふ文也。法華經第五に云はく、

爲世所恭敬。如六通羅漢等云云。

文の心は、法華經の敵の相貌を說きて候ふに、二百五十戒を堅く持ち、迦葉舍利弗の如くなる人を、國主これを尊みて法華經の行者を失なはむとするなりと說かれて候ふぞ。夫大事の法門と申すは別に候はず、時に當りて我がため國のため大事なる事を少しも勘へたがへざるが智者にては候ふ也。佛のいみじきと申すは、過去を勘へ未來を知り、三

伊蘭—悪臭の木

勘へあてて—蒙古來襲を豫言せること

は一なれども、法華經にまゐらせさせ給ひぬれば、法華經の文字は六萬九千三百八十四字、一字は一佛なり。此の佛は再生敗種を心腑とし、顯本遠壽を其の壽とし、常住佛性を咽喉とし、一乘妙行を眼目とせる佛なり。應化非眞佛と申して、三十二相八十種好の佛よりも、法華經の文字こそ眞の佛にては渡らせ給ひ候へ。佛を信ぜし人は佛にならざる人もあり。佛の滅後に法華經を信ずる人は、「無一不成佛」如來の金言なり。この衣を裁りてかたびらを著添ひて法華經を讀みて候はゞ、日蓮は無戒の比丘なり。法華經は正直の金言なり。毒蛇の珠を吐き、伊蘭の栴檀を出すがごとし。恐々謹言。

九月二十八日　　日蓮花押

御返事

蒙古使御書

鎌倉より事故なく御下りの由承り候ひて、うれしさ申す計りなし。又蒙古の人の頸を刎られ候ふ事承り候ふ。日本國の敵にて候ふ念佛、眞言、禪、律等の法師は切られずして、科なき蒙古の使の頸を刎ねられ候ひける事こそ不便に候へ。子細を知ざる人は勘へあて

忍和忍辱衣―忍和柔辱衣なるべし、つゞめて忍辱といふ

には心、たからの中には如意寶珠のたま、家には柱のやうなる事にて候ふ。この曼荼羅を身に持ちぬれば、王を武士の護るがごとく、子を親の愛するがごとく、魚の水を怙むがごとく、草木の雨を樂ふがごとく、鳥の木をたのむがごとく、一切の佛神等のあつまり守り、晝夜に影のごとく守らせ給ふ法にて候ふ。よく〳〵御信用あるべし。あなかしこ、あなかしこ。恐々謹言。

八月二十五日　　　　日蓮花押

妙心尼御前御返事

御衣竝單衣御書

御衣の布竝に御單衣給び候ひ畢んぬ。鮮白比丘尼と申せし人は、生れさせ給ひて御衣をたてまつりたりけり。生長するほどに次第にこの衣大になりけり。後に尼とならせ給ひければ法衣となりにけり。つひに法華經の座にして記莂を授る。一切衆生喜見如來これなり。又法華經を說く人は、忍和忍辱衣と申して必ず衣あるべし。物種と申すもの一なれども、植ゑぬれば多となり、龍は小水を多雨となし、人は小火を大火となす。衣帷

し、日本國を扶けんと思ひしゆゑなり。しかるに尼ごぜん並に入道殿は、彼の國に有る時は人目を畏れて夜中に食を贈り、或時は國の責をも憚らず身にも代らんとせし人々なり。されば痛かりし國なれども、剃りたる髪を後へひかれ、進む足も返りしぞかし。いかなる過去の縁にてやありけんと、覺束なかりしに、又いつしか、これまで、さしも大事なるわが夫を御使にて遣されて候ふ。夢か幻か尼ごぜんの御すがたをば見參らせ候はねども、心をばこれにとゞめ覺え候へ。日蓮を戀しくおはしせば、常に出づる日、夕に出づる月を拜ませ給へ。何時となく日月に影を浮ぶる身なり。又後生には靈山淨土にまゐりあひ參らせん。南無妙法蓮華經。

六月十六日　　日蓮花押

さどの國の國府の尼御前

妙心尼御前御返事

種々の御志送り給び候ひ畢んぬ。幼き人の御ために御守さづけまゐらせ候ふ。この御守は法華經のうちの肝心、一切經の眼目にて候ふ。たとへば天には日月、地には大王、人

同法—同朋か

蘇夫—蘇武のこと

李呂—李陵のこと

るにも其の功徳すぎたり。又濁世に法華經の行者あらんを、留難をなさん人は頭七分にわるべしと云々。夫日蓮は日本第一の僻ものなり。其の故は、天神七代はさて置きぬ、地神五代も又はかりがたし。人王始りて神武より今に至るまで九十代、欽明天皇より七百餘年が間、世間につけ佛法によりても、日蓮ほど普く人に怨まれたるものは候はじ。守屋が寺塔をやき、清盛入道が東大寺興福寺を失せし、彼等が一類は彼を惡まず、將門貞任が朝敵と成りし、傳教大師の七寺にあだまれし、彼等もいまだ日本一州の比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆には惡まれず。日蓮は父母兄弟師匠同法、上一人下萬民一人も洩れず、父母のかたきのごとく、謀反强盜にもすぐれて、人ごとに怨をなすなり。されば或時は數百人に罵られ、或時は數千人に取り籠められて、刀杖の大難にあふ。所を逐はれ國を出さる。結句は國主より御勘氣二度、一度は伊豆の國、今度は佐渡の島なり。されば身命を續ぐべき資糧もなし、形體を隱すべき藤の衣も持たず、北海の島に放たれしかば、彼の國の道俗は相州の男女よりも怨をなしき。野中に捨てられて雪に肌をまじへ、草を摘みて命をさゝへたりき。彼の蘇夫が胡國に十九年雪を食うて世を渡りし。李呂が北海に六ケ年嵓窟にせめられし、我は身にて知られぬ。これはひとへに我が身には失な

千日尼御前御書

阿佛御房の尼ごぜんより錢三百文。同心なれば此の文を二人して人に讀ませて聞召せ。

單衣一領、佐渡の國より甲斐の國波木井の鄕の内の深山まで送り給び候ひ畢んぬ。法華經第四法師品に云はく、

有レ人求ニ佛道一而於ニ一劫中一合掌在ニ我前一以ニ無數偈一讚。由ニ是讚佛一故。得ニ無量功德一歎ニ美持經者一其福復過レ彼等云云。

文の心は、釋尊ほどの佛を三業相應して一中劫が間、ねんごろに供養し奉るよりも、末代惡世の世に法華經の行者を供養せん功德は勝れたりと說かれて候ふ。まことしからぬ事にては候へども、佛の金言にて候へば疑ふべきにあらず。其の上妙樂大師と申す人、此の經文を重ねて解げて云はく、

若毀謗者。頭破ニ七分一。若供養者。福過ニ十號一等云云。

釋の心は末代の法華經の行者を供養するは十號を具足しまします如來を供養したてまつ

れば、法華經の女人とこそ佛は知しめされて候ふらんに、又我と心を發して法華經の御ために、御帷贈りたびて候ふ。法華經の行者に二人あり、聖人は皮を剝いで文字をうつす、凡夫はたゞ一領著て候ふかたびらなどを、法華經の行者に供養すれば、皮を剝ぐうちに佛收めさせ給ふなり。此の人の帷は法華經の六萬九千三百八十四の文字の佛にまゐらせさせ給ひぬれば、六萬九千三百八十四のかたびら也。又六萬九千三百八十四の佛一々、六萬九千三百八十四の文字なれば、此の帷も又かくのごとし。たとへば、春の野の千里ばかりに草の充ちて候はんに、すこしの豆ばかりの火を草ひとつに放ちたれば、一時に無量無邊の火となる。此のかたびらも又かくのごとし。ひとつの帷なれども法華經の一切の文字の佛に奉るべし。この功徳は父母祖父母乃至無邊の衆生にも及してん。まして我が最愛しと思ふ夫は申すに及ばずと、思召すべしおぼしめすべし。

五月二十五日　　日蓮花押

さじき女房御返事

なく謗ぜし人々も、悔ゆる心あるべし。設ひこれより後に信ずる男女ありとも、各々には替へ思ふべからず。始は信じてありしかども、世間の怖ろしさに、捨つる人々數をしらず。其の中に返つて本より謗ずる人々よりも、强盛にそしる人々又あまたあり。在世にも善星比丘等は、始は信じてありしかども、後に捨つるのみならず、返つて佛を謗じ奉りしゆゑに、佛も叶ひ給はず、無間地獄におちにき。此の御文は別して兵衞の志殿へまゐらせ候ふ。又太夫志殿の女房、兵衞志殿の女房に、よく〳〵申しきかせさせ給ふべし、聽かせさせ給ふべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

文永十二年四月十六日　日蓮花押

棧敷女房御返事

女人は水のごとし、器物にしたがふ。女人は矢のごとし、弓に番はさる。女人は舟のごとし、楫のまかするによるべし。しかるに女人は、夫盗人なれば女人ぬす人となる。夫王なれば女人妃となる。夫善人なれば女人佛になる。今生のみならず後生も夫に依るなり。しかるに兵衞の左衞門殿は法華經の行者なり。たとひ何なる事ありとも、夫の妻な

爾前へやるは、悪道に人をつかはす獄卒也。今二人の人々は、隱士と烈士とのごとし。一も缺けなば成ずべからず。譬へば鳥の二つの羽、人の兩眼の如し。又二人の御前達は、此の人々の檀那ぞかし。女人となる事は物に隨つて物を隨へる身也。夫樂しくば妻も榮ふべし。夫盗人ならば妻も盗人なるべし。是偏に今生計りの事にはあらず、世世生々に影と身と、華と果と、根と葉との如くにておはするぞかし。木にすむ蟲は、木を食む。水にある魚は水を喰ふ。芝かるれば蘭泣く。松榮ゆれば柏悦ぶ。草木すら是の如し。比翼と申す鳥は、身は一つにて頭二つあり、二つの口より入る物一身を養ふ。比目と申す魚は、一目づつある故に、一生が間離るゝ事なし。夫と妻とは是の如し。此の法門のゆゑには、設ひ夫に害せらるゝとも悔ゆる事なかれ。一同して夫の心を諫めば龍女が跡をつぎ、末代悪世の女人の成佛の手本と成り給ふべし。此の如くおはさば、設ひいかなる事ありとも、日蓮が二聖二天十羅刹釋迦多寶に申して、順次生に佛になし奉るべし。心の師とはなるとも、心を師とせざれとは、六波羅密經の文也。設ひいかなる煩しき事ありとも、夢になして、只法華經の事のみ思索らせ給ふべし。中にも日蓮が法門は、古こそ信じがたかりしか、今は前々いひおきし事、既におひぬれば、由

は漢土に始るのみならず、月氏の論師までも明し給はぬ事也。然れば章安大師の釋に云はく、「止觀明靜前代未ㇾ聞」云々。又云はく、天竺大論尚非二其類一」等云々。其の上、摩訶止觀の第五の卷の一念三千は、今一重立ち入りたる法門ぞかし。此の法門を申すには、必ず魔出來すべし。魔競はずは、正法と知るべからず。第五の卷に云はく、

行解既勤。三障四魔紛然競起。乃至不ㇾ可ㇾ隨。不ㇾ可ㇾ畏。隨ㇾ之將ㇾ人向二惡道一。畏ㇾ之妨ㇾ修二正法一等云云。

此の釋は日蓮が身に當るのみならず、門家の明鏡也。謹んで習ひ傳へて未來の資糧とせよ。此の釋に三障と申すは、煩惱障　業障　報障也。煩惱障と申すは、貪瞋癡等によりて障礙出來すべし。業障と申すは、妻子等によりて障礙出來すべし。報障と申すは、國主父母等によりて障礙出來すべし。又四魔の中に天子魔と申すも是の如し。今日本國に我も止觀を得たり、我も止觀を得たりと云ふ人々、誰か三障四魔競へる人あるや。「隨ㇾ之將ㇾ人向二惡道一」と申すは、只三惡道のみならず、人天九界を皆惡道と書けり。されば法華經を除きて、華嚴阿含方等般若涅槃大日經等也。天台宗を除きて餘の七宗の人々は、人を惡道に向はしむる獄卒也。天台宗の人々の中にも、法華經を信ずるやうにて、人を

通別圓―大乘四階級の後三

殺されなば、又子をまうけがたしと思ひつる程に、聲を發すと思へば、驚きぬ、と云ひければ、師が云はく、力及ばず、我も汝も魔にたぼらかされぬ、終に此の事成ぜずと云ひければ、烈士大に歎きけり。我心よわくして、師の仙法を成ぜずと云ひければ、隱士が云はく、我が失也、兼て誡めざりける事をと悔ゆ。然れども、烈士師の恩を報ぜざりける事を歎きて遂に思ひ死に死しぬと書かれて候ふ。仙の法と申すは、漢土には儒家より出て月氏には外道の法の一分也。云ふにかひ無き佛教の小乘阿含經にも及ばず、況や通別圓をや。況や法華經に及ぶべしや。かゝる淺き事だにも成ぜんとすれば、四魔競ひて成じがたし。何に況や法華經の極理、南無妙法蓮華經の七字を始めて持たん、日本國の弘通の始ならん人の、弟子檀那とならん人々の、大難の來らん事をば、言をもて盡し難し。心をもて押しはかるべしや。されば天台大師の摩訶止觀と申す文は、天台一期の大事、一代聖教の肝心ぞかし。佛法漢土に渡つて五百餘年、南北の十師、智は日月に齊く、徳は四海に響きしかども、いまだ一代聖教の淺深勝劣前後次第には迷惑してこそ候ひしか。智者大師再び佛教をあきらめさせ給ふのみならず、妙法蓮華經の五字の藏の中より、一念三千の如意寶珠を取り出して、三國の一切衆生に普く與へ給へり。此の法門

中陰—死して後次の所に生るゝまでの中途の身

て寶となし、人畜形を變へけれども、いまだ風雲に乘りて仙宮には遊ばざりけり。此の事を成ぜんがために一の烈士をかたらひ、長刀をもたせて壇の隅に立てて、息をかくし言をたつ。宵より朝にいたるまで、ものいはずば仙の法成ずべし。仙を求むる隱士は壇の中に坐して手に長刀をとつて口に神呪を誦す。約束して設ひ死なんとする事ありとも、物言ふ事なかれ。烈士云はく、死すとも物いはじ。此の如くして既に夜中を過ぎて、夜まさに明けんとする時、如何が思ひけん、烈士大に聲をあげて呼はる。既に仙の法成ぜず。隱士烈士に言ひて云はく、何に約束をばたがふるぞ、口惜しき事也と云ふ。烈士歎きて云はく、少し眠つてありつれば、昔仕へし主人自來りて責めつれども、師の恩厚ければ忍びて物いはず、彼の主人怒つて頸をはねんと云ふ。然而又ものいはず、遂に頸を切りつ、中陰に趣く、我が屍を見れば惜く歎かし、然而物いはず、遂に南印度の婆羅門の家に生れぬ、入胎出胎するに大苦忍びがたし、然而息を出さず、又物いはず、已に冠者となりて妻を娶ぎぬ、又親死ぬ、又子を儲けたり、かなしくもあり、よろこばしくもあれども物いはず、此の如くして年六十有五になりぬ、我が妻かたりて云はく、汝若物いはずば、汝が愛の子を殺さんと云ふ、時に我思はく、我已に年衰へぬ、此の子を若

位につき給ふべし。兄の云はく、いかに親の御ゆづりをば用ひさせ給ひ候はぬぞ。かくのごとく、互に論じて三箇年が間位に王をばせざりき。萬民のなげき云ふばかりなし。天下の災にてありしほどに、宇治の王子云はく、我生きてあるゆゑに兄位に卽き給はずといつて、死させ給ひにき。仁德これをなげかせ給ひて、又伏沈ませ給ひしかば、宇治の王子いきかへりて、やう／＼に仰せおかせ給ひて、又ひきいらせ給ひぬ。さて仁德位につかせ給ひたりしかば、國穩やかなる上、新羅百濟高麗も日本國にしたがひて、年貢を八十艘そなへけるとこそみえて候へ。賢王のなかにも、兄弟おだやかならぬ例もあるぞかし。いかなる契にてかくはおはするぞ。淨藏淨眼の二人の太子の生れかはりておはするか。藥王藥上の二人か。大夫志殿の親父の御勘氣はうけ給はりしかども、兵衞の志殿の事は、今度はよも兄には付かせ給はじ。さるにてはいよ／＼大夫志殿の親の御不審はおぼろげにては許りじなんど思ひて候へば、この童子の申し候ふは、まことにてや。御同心と申し候へば、あまりの不思議さに、別の御文を參らせ候ふ。未來までの物語、なに事かこれにすぎ候ふべき。西域と申す文にかきて候ふは、月氏に婆羅痆斯國、施鹿林と申すところに一の隱士あり、仙の法を成ぜんと思ふ。すでに瓦礫を變じ

ば、伯夷制ししかども、天これをきゝて來らず。二人飢ゑて死ににき。一生が間賢なりし人も、一言に身をほろぼすにや。各々も御心の內はしらず候へば、覺束なしおほつかなし。釋迦如來は太子にておはせし時、父の淨飯王太子を惜みたてまつりて、出家をゆるし給はず、四門に二千人の兵をすゑて守らせ給ひしかども、終に親の御心をたがへて家をいでさせ給ひき。一切はおやに隨ふべきにてこそ候へども、佛になる道は隨はぬが孝養の本にて候ふか。されば心地觀經には孝養の本を說かせ給ふには、「棄恩入無爲眞實報恩者」等云々。言は、まことの道に入るには父母の心に隨はずして、家を出で佛になるがまことの恩を報ずるにてはあるなり。世間の法にも父母の謀反なんどを起すには隨はぬが孝養とみえて候ふ。孝經と申す外經に見えて候ふ。天台大師も法華經の三昧に入らせ給ひておはせし時は、父母左右の膝に住して佛道を障へんとし給ひしなり。此は天魔の父母の形を現じて障ふるなり。伯夷叔齊が因緣はさきにかき候ひぬ。又第一の因緣あり。日本國の人王第十六に王おはしき、應神天皇と申す。今の八幡大菩薩これなり。この王の御子二人ましましき。嫡子は仁德、次男は宇治王子なり。天皇、次男の宇治の王子に位をゆづり給ひき。王崩御ならせ給ひて後、宇治の王子の云はく、兄

なり。色ばし悪しくて、人に笑はれさせ給ふなよ。あまりにおぼつかなく候へば、大事のものがたり一つ申す。伯夷叔齊と申せし者は、孤竹國の王の二人の太子なり。父の王、弟の叔せいに位をゆづり給ひき。父死して後叔せい位につかざりき。伯夷が云はく、位につき給へ。叔齊が云はく、兄位を繼ぎ給へ。伯夷がいかに親の遺言をばたがへ給ふぞと申せしかば、親の遺言はさる事なれども、いかんが兄をおきては位には卽くべきと辭退せしかば、二人共に父母の國をすてて佗國へわたりぬ。周の文王につかへしほどに、文王殷の紂王に打たれしかば、武王百箇日が内に軍を起しき。伯夷叔齊は武王の馬の口にとりつきて諫めて云はく、親の死して後、三箇年が内に軍を起すは、あに不孝にあらずや。武王いかりて伯夷叔齊を打たんとせしかば、大公望制して打たせざりき。二人は此の王をうとみて首陽と申す山に隱れ居て、蕨を折りて命をつぎしかば、麻子と申す者ゆきあひて云はく、いかにこれには在するぞ。二人上の事をかたりしかば、麻子が云はく、さるにては、わらびは王の物にあらずや。二人せめられて、爾の時よりわらびを食はず。天は賢人をすて候はぬならひなれば、天白鹿と現じて乳をもつて二人を養ひき。白鹿去りて後に叔齊が云はく、此の白鹿の乳をのむだにも甘し、まして肉といひしか

見えて候ふ。眼前の事ぞかし。文永九年二月の十一日に合戰さかんなりし。華の大風にみだるゝがごとく、清絹の大火にやかるゝがごとくなりしに、世を厭ふ人のいかでかなかるらん。文永十一年の十月壹岐對馬のものども、一時に死人となりし事は、いかに人の上と覺すか。當時も、かの打手に向きたる人々のなげき、老いたる親、稚き子、若き妻、めづらしかりし住宅うちすてて、よしなき海を守り、雲の見ゆれば旗かと疑ひ、釣船のみゆれば兵船かと肝心を消す。日に一二度山へのぼり、夜に三四度馬に鞍をおく。現身に脩羅道を感ぜり。各々のせめられさせ給ふ事も、詮ずるところは國主の法華經のかたきとなれるゆゑなり。國主のかたきとなる事は、持齋等、念佛者等、眞言師等が謗法より起れり。今度忍し暮して法華經の御利生心みさせ給へ。日蓮も又強盛に天に申し上げ候ふなり。いよ〳〵怖づる心ねすがたをばすべからず。定んで女人は心よわくおはすれば、御前たちは心ひるがへりてや在すらん。強盛に切齒をして弛む心なかれ。例せば日蓮が平の左衛門の尉がもとにて、うち振舞ひいひしがごとく、すこしも怖る心なかれ。和田が子となりしもの、若狹守が子となりしもの、將門貞任が郎從等となりし者、佛になる道にはあらねども、はぢを思へば命を死ぬ習なり。なにとなくとも一度の死は一定

云々。この中に邪見の家と申すは誹謗正法の家なり。王難に値ふ等と申すは惡王に生れあふなり。此の二つの大難は、各々の身に當つて覺えつべし。過去の謗法の罪を滅せんとて、邪見の父母にせめられさせ給ふ。又法華經の行者をあだむ國主にあへり。經文明明たり、經文赫赫たり。我が身は過去に謗法の者なりける事疑給ふことなかれ。此を疑つて、現世の輕苦忍びがたくて、慈父のせめに隨ひて、存外に法華經をすつるよしあるならば、我が身地獄に墮つるのみならず、悲母も慈父も大阿鼻地獄に墮ちて、ともに悲まん事疑なかるべし。大道心と申すはこれなり。各々隨分に、法華經を信ぜられつるゆゑに、過去の重罪をせめいだし給ひて候ふ。たとへば、鐵をよく〳〵鍛へば疵のあらはるゝがごとし。石は燒けば灰となる、金はやけば眞金となる。此度こそまことの御信用はあらはれて、法華經の十羅刹も守護せさせ給ふべきにて候ふらめ。雪山童子の前に現ぜし羅刹は帝釋なり。尸毗王の鳩は毗沙門天ぞかし。十羅刹心み給はんがために父母の身に入らせ給ひてせめ給ふこともやあるらん。それにつけても、信心あさからん事は後悔あるべし。又前車の覆へすは後車の誡ぞかし。今の世には何となくとも道心起りぬべし。此の世のありさま厭ふとも厭はれじ。日本の人々定んで大苦に値ひぬと

佛の末の男女等は、勝意比丘と申せし持戒の僧をたのみて、喜根比丘を笑ひてこそ無量劫が間地獄に墮ちつれ。今又日蓮が弟子檀那等は此にあたれり。法華經には、

如來現在。猶多怨嫉。況滅度後。

又云はく、

一切世間。多怨難信。

涅槃經に云はく、

橫羅死殃。訶嘖罵辱。鞭杖閉繫。飢餓困苦。受如是等現世輕報。不墮地獄等云云。

般泥洹經に云はく、

衣服不足。飲食麤疎。求財不利。生貧賤家及邪見家。或遭王難及餘種種人間苦報。現世輕受。斯由護法功德力故等云云。

文の心は我等過去に正法を行じける者にあだをなしてありけるが、今かへりて信受すれば、過去に人を障へたる罪にて未來に大地獄に墮つべきが、今生に正法を行ずる功德強盛なれば、未來の大苦を招き越して少苦に値ふなり。この經文に、過去の誹謗によりてやう〳〵の果報を受くるなかに、或は貧家に生れ或は邪見の家に生れ或は王難に値ふ等

は、善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證是也。又禪宗へすかしおとす惡友は、達磨、慧可等是也。又觀經へすかしおとす惡友は、善導、法然是也。此は第六天の魔王が、智者の身に入つて善人をたぼらかす也。法華經第五の卷に、「惡鬼入其身」と說かれて候ふは是也。設ひ等覺の菩薩なれども、元品の無明と申す大惡鬼、身に入つて、法華經と申す妙覺の功德を障へ候ふ也。何に況や其の已下の人々においてをや。又第六天の魔王、或は妻子の身に入つて親や夫をたぼらかし、或は國王の身に入つて法華經の行者を嚇し、或は父母の身に入つて孝養の子をせむる事あり。悉達太子は位を捨てんとし給ひしかば、羅睺羅孕れておはしませしを、淨飯王此の子生れて後出家し給へといさめられしかば、魔が子を抑留へて六年なり。舍利弗は昔禪多羅佛と申せし佛の末世に、菩薩の行を立てて六十劫を經たりき。既に四十劫近づきしかば、百劫にてあるべかりしを、第六天の魔王菩薩の行の成ぜん事を危殆しとや思ひけん、婆羅門となりて眼を乞ひしかば、相違なく取らせたりしかども、其より退する心出來て、舍利弗は無量劫が間無間地獄に墮ちたりしぞかし。大莊嚴佛の末の六百八十億の檀那等は、苦岸等の四比丘にたぼらかされて、普事比丘を怨みてこそ、大地微塵劫が間無間地獄を經しぞかし。師子音王

惡友則失本心云々。本心と申すは法華經を信ずる心なり。失ふと申すは法華經の信心を引きかへて、餘經へうつる心なり。されば經文に云はく、

然與良藥。而不肯服等云云。

天台の云はく。

其失心者。雖與良藥。而不肯服。流浪生死。逃逝他國云云。

されば法華經を信ずる人の恐るべきものは、賊人強盜夜打虎狼師子等よりも、當時の蒙古のせめよりも、法華經の行者をなやます人々なり。此の世界は第六天の魔王の所領なり。一切衆生は無始已來、彼の魔王の眷屬なり。六道の中に二十五有と申す籠をかまへて、一切衆生を入るゝのみならず、妻子と申す鉃をうち、父母主君と申す網を空に張り、貪瞋癡の酒をのませて佛性の本心をたぼらかす。但惡の肴のみをすゝめて、三惡道の大地に伏臥せしむ。たま〳〵善の心あれば障碍をなす。法華經を信ずる人をば、いかにもして惡へ墮さんと思ふに、叶はざればやうやく賺さんがために相似せる華嚴經へおとしつ。杜順、智儼、法藏、澄觀等是也。又般若經へすかしおとす惡友は、嘉祥僧詮等是也。又深密經へすかし墮す惡友は、玄奘慈恩是也。又大日經へすかし墮す惡友

一眼の龜云々—大海中に一眼の龜あり、又海上に一浮木あり、時々浮び出づる龜、風に動かされて所定めぬ浮木に値ふこと殆どあり難しとの比喩

三五の塵點—三千塵點五百の塵點

き奉りぬ。又此の經を佛のごとくに說く人に値ふことは難にて候ふ。設一眼の龜の浮木には値ふとも、蓮の糸をもつて須彌山をば虛空に懸くとも、法華經を經のごとく說く人にあひがたし。されば慈恩大師と申せし人は、玄奘三藏の御弟子、太宗皇帝の御師なり。梵漢を空に浮べ、一切經を胸に湛へ、佛舍利を筆のさきより雨らし、牙より光を放ち給ひし聖人なり。時の人も日月のごとく恭敬し、後の人も眼目とこそ渴仰せしかども、傳敎大師これをせめ給ふには、「雖讃法華經還死法華心等云云」言は、彼の人の心には法華經を譽むと思へども、理のさすところは法華經をころす人になりぬ。善無畏三藏は月支國烏仗那國の國王なり。位をすて出家して天竺五十餘の國を修行して、顯密二道を究め、後には漢土にわたりて玄宗皇帝の御師となる。支那日本の眞言師、誰か此の人の流にあらざる。かゝる貴き人なれども、一時に頓死して閻魔のせめにあはせ給ふ。いかなりける故とも人しらず。日蓮此をかんがへたるに、本は法華經の行者なりしが、大日經を見て法華經にまされりと云ひしゆゑなり。されば舍利弗目連等が、三五の塵點を經しことは、十惡五逆の罪にもあらず、謀反八虐の失にてもあらず、但惡知識に値うて法華經の信心をやぶりて、權經にうつりしゆゑなり。天台大師釋して云はく、「若値

くれる人は無間地獄に墮ちて、一中劫を經て後は又かへりて生ず。いかなる事にや候ふらん。法華經をすつる人は、すつる時はさしも父母を殺すなんどのやうに、夥しくは見え候はねども、無間地獄に墮ちては多劫を經候ふ。設父母を一人二人十人百人千人萬人十萬人百萬人億萬人なんど殺して候ふとも、いかんが三千塵點劫をば經候ふべき。一佛二佛十佛百佛千佛萬佛乃至億萬佛を殺したりとも、いかんが五百塵點劫をば經候ふべき。しかるに法華經をすて候ひけるつみによりて、三周の聲聞が三千塵點劫を經、諸大菩薩の五百塵點劫を經候ひけること、おびたゞしく覺え候へ。詮ずるところは、拳をもて虚空を打てば拳いたからず、石を打てばこぶし痛し。惡人を殺すは罪あさし、善人を殺すは罪ふかし。或は佗人を殺すは、拳をもつて泥を打つがごとし、父母を殺すは拳をもて石を打つがごとし。鹿を吠ゆる犬は、頭われず、師子を吠ゆる犬は腸くさる。日月を呑む脩羅は頭七分にわれ、佛を打ちし提婆は大地われて入りにき。所對によりて罪の輕重はありけるなり。さればこの法華經は、一切の諸佛の眼目、敎主釋尊の本師なり。一字一點もすつる人あれば、千萬の父母を殺せる罪にも過ぎ、十方の佛の身より血を出す罪にも超えて候ひける故に、三五の塵點を經候ひけるなり。此の法華經はさて置

て一塵を下し、此の如く三千大千世界の塵を下しはてぬ。さてかへつて下せる三千大千世界と、下さゞる三千大千世界をともに押し總束ねて又塵となし、此の諸の塵を以て列べ置きて一塵を一劫として、經盡しては又始め又始め、かくのごとく上の諸塵の經盡したるを三千塵點とは申すなり。今三周の聲聞と申して舍利弗迦葉阿難羅云なんど申す人人は、過去遠遠劫三千塵點劫のそのかみ、大通智勝佛と申せし佛の、第十六の王子にておはせし菩薩ましましき。かの菩薩より法華經を習ひけるが、惡緣に賺されて法華經を捨つる心つきにけり。かくして或は華嚴經へ墮ち或は般若經へ墮ち、或は大集經へ墮ち、或は涅槃經へ墮ち或は大日經或は深密經或は觀經等へ墮ち、或は阿含小乘經へおちなんどしけるほどに、次第に墮ちゆきて、後には人天の善根後に惡に墮ちぬ。かくのごとく墮ちゆく程に三千塵點劫が間、多分は無間地獄少分は七大地獄、たま〳〵には一百餘の地獄、まれには餓鬼畜生修羅なんどに生れ、大塵點劫なんど經て人天には生れ候ひけり。されば法華經の第二の卷に云はく。

常處二地獄一如レ遊二園觀一在二餘惡道一如二己舍宅一等云云。

十惡をつくる人は等活黑繩なんど申す地獄に墮ちて、五百生或は一千歲を經、五逆をつ

八萬法藏―内容上より佛教全體をいふ
十二部經―形式上より佛教全體をいふ
塵點―世界を磨に磨りその汁にて點を付け汁の盡くるに至るまでの時間

十一月十一日　　　　日蓮花押

南條七郎次郎殿御返事

兄弟鈔

夫法華經と申すは八萬法藏の肝心、十二部經の骨髓也。三世の諸佛は此の經を師として正覺を成し、十方の佛陀は一乘を眼目として衆生を引導し給ふ。今現に經藏に入りて此を見るに、後漢の永平より唐の末に至るまで、渡れる所の一切經論に二本あり。所謂舊譯の經は五千四十八卷也。新譯の經は七千三百九十九卷也。彼の一切經は皆各々分々に隨つて我第一也となのれり。然るに法華經と彼の經經と、引き合せて之を見るに勝劣天地なり、高下雲泥なり。彼の經經は衆星の如く、法華經は月の如し。彼の經經は燈炬星月の如く、法華經は大日輪の如し。此は總なり。別して經文に入りて此を見奉れば二十の大事あり。第一第二の大事は、三千塵點劫五百塵點劫と申す二つの法門也。其の三千塵點と申すは、第三の卷化城諭品と申す處に出て候ふ。此の三千大千世界を抹して塵となし、東方に向つて千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、又千の三千大千世界を過ぎ

隱岐法皇云々―承久の亂に後鳥羽法皇の北條氏を亡さんとて負け給ひしをいふ

り候へば、涙もとまらず。念佛宗と申すは亡國の惡法也。この軍には大體人々の自害をし候はんずる也。善導と申す愚癡の法師が弘めはじめて自害をして候ゆゑに、念佛をよく〳〵申せば自害の心出來し候ぞ。禪宗と申し、當時の持齋法師等は天魔の所爲也。教外別傳と申して神も佛もなしなんど申す物狂しき惡法也。眞言宗と申す宗は、本は下劣の經にて候ひしを、誑惑して法華經にも勝るなんど申して多くの人々大師僧正なんどになりて、日本國に大體充滿して、上一人より頭をかたぶけたり。これが第一の邪事に候ふを、昔より今にいたるまで知る人なし。但傳教大師と申せし人こそしりて候ひしかども、くはしくも仰せられず。さては日蓮略〻この事を知れり。後白河の法皇の太政の入道に責められ給ひし、隱岐法皇の鎌倉に負けさせ給ひし事、みな眞言惡法のゆゑなり。漢土にこの法わたりて、玄宗皇帝亡びさせ給ふ。この惡法鎌倉に下つて、當時かまくらにはやる僧正法印等は是也。これらの人々この軍を調伏せば、百日戰ふべきは十日に縮り、十日のいくさは一日に攻めらるべし。今始めて申すにあらず。二十餘年が間音も惜まず呼はり候ひぬるなり。あなかしこ、あなかしこ。この御文は大事の事ども書きて候ふ。よくよく人に讀ませて聞召せ。人も謗り候へ。ものとも思はぬ法師等なり。恐々謹言。

臨終正念―死に臨みて信仰の動かざること
故聖靈―死せる人の魂

ば或る經に云はく、須彌山は崩るとも大地をばうち返すとも、佛には妄語なしと說かれたり。日は西よりいづとも、大海の潮は滿ち干ずとも、佛の御言はあやまりなしとかや其の上此の法華經は佗經にも勝れさせ給へば、多寶佛も證明し諸佛も舌を梵天につけ給ふ。一字一點も妄語は候ふまじきにや。其の上殿は幼少くおはしき。故親父は武士なりしかども、あながちに法華經を尊み給ひしかば、臨終正念なりける由うけ給はりき。其の親の跡をつがせ給ひて、又此の經を御信用あれば、故聖靈いかに草の陰にても喜びおぼすらん。あはれ活きておはさばいかに嬉しかるべき。此の經を持つ人々は佗人なれども、同じ靈山へまゐりあはせ給ふ也。いかにいはんや故聖靈も、殿も、同じく法華經を信じさせ給へば、同じところに生れさせ給ふべし。いかなれば佗人は五六十までも親と同じ白髮なる人もあり。我若き身に親に早く後れて教訓をもうけ給はらざるらんと、御心のうち推量るこそ涙も留り候はね。抑　日蓮は日本國を扶けんと深くおもへども、日本國の上下萬人一同に、國の亡ぶべきゆゑにや、用ひられざる上、度々怨をなさるれば力及ばず山林にまじはり候ひぬ。大蒙古國より寄せて候ふと申せば、申せし事を御用ひあらば何になんどあはれなり。皆人の當時の壹岐對馬のやうにならせ給はん事、思ひや

人に強に語らせ給ふべからず。若き殿が候へば申すべし。

上野殿御返事

聖人二管柑子一籠、蒟蒻十枚、薯蕷一籠、牛房一束、種々の物送り給び候ふ。得勝無勝の二童子は、佛に沙の餅を供養したてまつりて、閻浮提三分が一の主となる。所謂阿育大王これなり。儒童菩薩は錠光佛に五莖の蓮華を供養したてまつりて佛となる。今の教主釋尊これなり。法華經の第四に云はく、

有人求佛道。而於一劫中。合掌在我前。以無數偈讃。由彼讃佛故。得無量功德。歎美持經者。其福復過彼等云云。

文の心は佛を一劫が間供養したてまつるより、末代惡世の中に人の強に惡む法華經の行者を供養する功德はすぐれたりと說かせ給ふ。誰の人のかゝる僻事をば仰せらるゝぞと疑ひおもひ候へば、教主釋尊の我と仰せられて候ふ也。疑はんとも信ぜんとも、御心にまかせまゐらする。佛の御舌は或は面に覆ひ、或は三千大千世界に覆ひ、或は色究竟天までも付け給ふ。過去遠遠劫よりこのかた、一言も妄語のましまさざるゆゑ也。され

鵞目―鳥目といふに同じ、錢のこと

二子―淨藏、淨眼の兄弟

上野殿御返事

鵞目十連、かはのり二帖、薑二十束給び候ひ畢ぬ。鎌倉にてかりそめの御事とこそ思ひまゐらせ候ひしに、思ひ忘れさせ給はざりける事申すばかりなし。故上野殿だにもおはせしかば、つねに申しうけ給はりなんと歎き思ひ候ひつるに、御形見に御身を若くしてとゞめ置かれけるか。すがたの違はせ給はぬに、御心さへ似られける事云ふばかりなし。法華經にて佛にならせ給ひて候ふと承給はりて、御墓にまゐりて候ひしなり。又この御心ざし申すばかりなし。今年の飢渇に始めたる山中に木のもとに木葉うち敷きたるやうなる住家、思ひやらせ給へ。このほど讀み候ふ御經の一分を、故殿へ廻向しまゐらし候ふ。あはれ人はよき子は持つべかりけるものかなと、涙かきあへずこそ候ひし。妙莊嚴王は二子にみちびかる。かの王は惡人なり。故上野殿は善人なり。かれには似るべくもなし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

七月二十六日　　日蓮　花押

御返事

靈山を期し―死して靈鷲山に生るゝことを目的とす

安州―安房國

はゞ、御迎にまゐり候事もやあらんずらん。又さきに行かせ給はゞ、日蓮必ず閻魔法王にも委しく申すべく候ふ。此の事少しも虚事あるべからず。日蓮、法華經の文の如くならば、通塞の案内者なり。只一心に信心おはして靈山を期し給へ。錢と云ふものは用にしたがつて變ずるなり。法華經も亦復是の如し。暗には燈となり、渡には舟となり、或は水ともなり、或は火ともなり給ふなり。若然らば法華經は現世安穩後生善處の御經なり。其の上日蓮は日本國の中には安州のものなり。總じて彼の國は天照太神の住初め給ひし國なりといへり。かしこにして日本國をさぐり出し給ふ。安房の國御厨なり。しかも此の國の一切衆生の慈父悲母なり。かゝるいみじき國なれば定んで故ぞ候ふらん。いかなる宿習にてや候ふらん。日蓮又彼の國に生れたり、第一の果報なるなり。此の消息の詮にあらざれば委しくは書かず。但おしはかり給ふべし。能々諸天に祈り申すべし。信心に倦かなくして所願を成就し給へ。女房にもよく〳〵語らせ給へ。恐々謹言。

二月二十一日　　日蓮　花押

彌源太殿　御返事

併ら—そのまゝ、みんな

發心の杖—さとりの心を發し給へるたよりたりしと云ふこと

り。譬へば夏の蟲の火に飛び燒り、鼠が貓の前に出でたるが如し。是あに我が身を知りて用心せざる畜生の如くにあらずや。身命を失ふ事併ら心より出れば僻人也。但し石は玉をふくむ故に碎かれ、鹿は皮肉の故に殺され、魚は味ある故に捕らる。翠は羽ある故にやぶらる。女人は容貌美ければ必ずねたまる、此の意なるべき歟。日蓮は法華經の行者なる故に、三類の强敵あつて種々の大難にあへり。然るにかゝる者の弟子檀那とならせ給ふ事、不思議也。定めて子細候ふらん。相構へて能々御信心候ひて靈山淨土へまゐり給へ。又御祈禱のために御太刀、同じく刀、あはせて二つ送り給はつて候ふ。此の太刀は、しかるべき鍛冶仕り候ふ歟と覺え候ふ。天國或は鬼切、或は八劍、異朝には、干將莫耶が劍に爭でか異るべきや。此を法華經にまゐらせ給ふ。殿の御もちの時は惡の刀、今佛前へまゐりぬれば善の刀なるべし。譬へば身の道心を起したらんが如し。あら不思議や不思議や。後生には此の刀を杖とたのみ給ふべし。法華經は三世の諸佛發心の杖にて候ふぞかし。但し日蓮を杖柱とも賴み給ふべし。嶮しき山あしき道、つゑをつきぬれば倒れず。殊に手をひかれぬればまろぶ事なし。南無妙法蓮華經は死出の山にては杖柱となり給へ。釋迦佛多寶佛、上行等の四菩薩は手を取り給ふべし。日蓮さきに立ち候

貞當―安倍貞任のこと
同居穢土―穢土の中に善悪同居すること
三災―水災、火災、兵災

貞當は十二年にやぶれぬ。將門は八年に傾きぬ。第六天の魔王十軍の軍を起して、法華經の行者と生死海の海中にして同居穢土を取られじ奪はんと爭ふ。日蓮其の身にあひあたりて大兵を起して二十餘年なり。日蓮一度も退く心なし。しかりといへども、弟子等檀那等の中に臆病のもの、大體或は落ち或は退轉の心あり。尼御前の一文不通の小心に、今まで退かせ給はぬ事申すばかりなし。其の上自身の使ふべきところに、下人を一人付けられて候ふ事、定めて釋迦多寶十方分身の諸佛も御知見あるか。恐々謹言。

九月十九日　　日蓮　花押

辨殿尼御前申給へ

彌源太殿返事

抑日蓮は日本第一の僻人也。其の故は、皆人の父母よりもたかく、主君よりも大事に、思はれ候ふところの阿彌陀佛、大日如來、藥師等を御信用ある故に、三災七難先代にこえ、天變地夭等昔にも過ぎたりと申す故に、結句は今生には身を亡し國を敗ひ、後生には大阿鼻地獄に墮ち給ふべしと、一日片時もたゆむ事なく呼りし故に、かゝる大難にあへ

龍女—法華によりて成佛せる八歳の龍女

隨身—身につけ持つこと

以二顯本遠壽一爲二其命一と釋し給ふ。經王御前には禍も轉じて幸となるべし。あひかまへて御信心を出し、此の御本尊に祈念せしめ給へ。何事か成就せざるべき。「充滿其願如清涼池現世安穩後生善處」疑なからん。又申し候ふ。當國の大難許り候はゞ、いそぎいそぎ鎌倉へ上り見參いたすべし。法華經の功力を思ひやり候へば、不老不死目前にあり。たゞ歎く所は露命計り也。天たすけ給へと強盛に申し候ふ。淨德夫人、龍女の跡をつがせ給へ。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。あなかしこ、あなかしこ。

八月十五日　　日蓮　花押

經王御前御返事

辨殿尼御前御書

しげければとゞむ。辨殿に申す。大師講を行ふべし。大師取つてまゐらせて候ふ。三郎左衞門殿に候ふ。御文のなかに、涅槃經の後分二卷、文句五の本末、授決集の抄の上卷御隨身あるべし。

師子王—たゞ獅子のこと

前三後一—前に三度後に一度と身振をすること

愛染—愛染明王は愛の神

毘沙門—四天王の一、多聞天ともいふ、福の神

たる錢、山海を尋ぬるとも日蓮が身には、時に當りて大切に候ふ。夫について經王御前の事、二六時中に日月天に祈り申し候ふ。先日の守　暫時も身を離さずたもち給へ。其の本尊は正法像法二時には習へる人だにもなし。まして書き顯し奉る事絶えたり。師子王は前三後一と申して、蟻の子を取らんとするにも、又猛きものを取らんとする時も、勢を出す事はたゞ同じき事也。日蓮守護たる處の御本尊を認め參らせ候ふ事も、師子王に劣るべからず。經に云はく、「師子奮迅之力」とは是也。又此の曼荼羅よく〳〵信ぜさせ給ふべし。南無妙法蓮華經は師子吼の如し。いかなる病障をなすべきや。鬼子母神、十羅刹女、法華經の題目を持つものを守護すべしと見えたり。幸は愛染の如く、福は毘沙門の如くなるべし。いかなる處にて遊びたはぶるとも、恙あるべからず。遊行して畏なきこと師子王の如くなるべし。十羅刹女の中にも皐諦女の守護深かるべき也。但し御信心によるべし。劒なんども、進まざる人のためには用ふる事なし。法華經の劒は信心の勇なる人こそ用ふる事なれ。鬼に鐵棒たるべし。日蓮が魂を墨に染めながして書きて候ふぞ。信じさせ給へ。佛の御意は法華經也、日蓮がたましひは南無妙法蓮華經に過ぎたるはなし。妙樂云はく、

たるらん行如來事をも行ずるになりなん。多寶塔中にして二佛並坐の時、上行菩薩に讓り給ひし題目の五字を、日蓮粗弘め申すなり。此即ち上行菩薩の御使歟。貴邊又日蓮にしたがひて法華經の行者として諸人にかたり給ふ。是豈流通にあらずや。法華經の信心を通し給へ。火をきるに休みぬれば火を得ず。强盛の大信力をいだして、法華宗の四條金吾四條金吾と、鎌倉中の上下萬人乃至日本國の一切衆生の口にうたはれ給へ。あしき名さへ流す、況やよき名をや。何に況や法華經ゆゑの名をや。女房にも此の由を云ひ含めて日月兩眼左右の翼と調ひ給へ。日月あらば冥途あるべきや。兩眼あらば三佛の顏貌拜見疑なし。左右のつばさあらば寂光の寶刹へ飛ばん事須臾刹那なるべし。委しくは又々申すべく候ふ。恐惶謹言。

五月二日　日蓮　花押

四條金吾殿　御返事

經王殿御返事

其の後御音信きかまほしく候ひつるところに、態と人を送り給び候ふ。又何よりも重寶

優婆塞—淸信士と譯す

毎自作是念、以何令衆生、得入無上道、速成就佛身。

方便品に云はく、

世間相常住。

等は此の意なるべし。かくの如く法體と云ふも全く餘には非ず、たゞ南無妙法蓮華經の事なり。かゝるいみじく尊き法華經を、過去にて膝の下に置きたてまつり、或は侮り顰蹙み、或は信じ奉らず、或は法華經の法門を習うて一人をも敎化し法命をつぐ人を、惡心をもて、左に寄せ右によせ謔弄ひ、或は後生の勤なれども、先今生かなひがたければ、しばらくさし置けなんどと無量にいひ疎め謗ぜしに依つて、今生に日蓮種々の大難に逢ふなり。諸經の頂上たる御經を、低く置き奉る故によりて、現世に又人に下げられ用ひられざるなり。譬諭品に、人に親みつくとも、人心にいれて不便と思ふべからずと說きたり。然るに、貴邊法華經の行者となり、結句大難にもあひ、日蓮をもたすけ給ふ事、法師品の文に、「遣化四衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷」と說き給ふ。此の中の優婆塞とは貴邊の事にあらずんば誰をか指さむ。すでに法を聞いて信受して逆はざればなり。不思議や不思議や。若然らば、日蓮、法華經の法師なる事疑なき歟。則ち如來にも似

境智—客觀、外境と主觀、內智
卽—取りも直さず、そのまゝ

てましますなれば深きなり。經に云はく、「諸佛智慧甚深無量云云」此の經文に諸佛とは十方三世の一切の諸佛、眞言宗の大日如來、淨土宗の阿彌陀、乃至諸宗諸經の佛菩薩、過去未來現在の總諸佛、現在の釋迦如來等を諸佛と說き舉げて、次に智慧といへり。此の智慧とはなにものぞ。諸法實相十如果成の法體也。其の法體とは又何ものぞ。南無妙法蓮華經是なり。釋に云はく、實相の深理、本有の妙法蓮華經といへり。其の諸法實相と云ふも釋迦多寶の二佛と習ふなり。諸法をば多寶に約し、實相をば釋迦に約す。是又境智の二法也。多寶は境なり、釋迦は智なり。境智而二にして、しかも境智不二の內證なり。此等はゆゝしき大事の法門也。煩惱卽菩提生死卽涅槃と云ふもこれなり。まさしく男女交會のとき、南無妙法蓮華經と唱ふるところを、煩惱卽菩提生死卽涅槃と云ふなり。生死の當體不生不滅と覺るより外に生死卽涅槃はなきなり。普賢經に云はく、

不レ斷二煩惱一不レ離二五欲一得レ淨二諸根一滅二除諸罪一。

止觀に云はく、

無明塵勞卽是菩提。生死卽涅槃。

壽量品に云はく、

檀那—檀那院の覺運僧正
慧心—慧心院の源信僧都
僧賀—增賀上人なるべし

四條金吾殿御返事

日蓮が諸難について御訪、今にはじめざる志ありがたく候ふ。法華經の行者としてかかる大難にあひ候ふは悔しくおもひ候はず。いかほど生をうけ死にあひ候ふとも、是ほどの果報の生死は候はじ。又三惡四趣にこそ候ひつらめ。今は生死切斷し、佛果を得べき身となればよろこばしく候ふ。天台傳教等は迹門の理の一念三千の法門を弘め給ふすら、なほ怨嫉の難にあひ給ひぬ。日本にしては傳教より義眞圓澄慈覺等相傳して弘め給ふ。第十八代の座主、慈慧大師なり。御弟子あまたあり。其の中に檀那、慧心、僧賀、禪瑜等と申して四人まします。法門又二つに分れたり。檀那僧正は教を傳ふ、慧心僧都は觀をまなぶ。されば教と觀とは日月のごとし、教はあさく觀はふかし。されば檀那の法門はひろくしてあさし、慧心の法門は狹くしてふかし。今日蓮が弘通する法門は、せばきやうなれどもはなはだ深し。其の故は彼の天台傳教等の所弘の法よりは一重立ち入りたる故也。本門壽量品の三大事とは是也。南無妙法蓮華經の七字ばかりを修行すれば狹きが如し。されども三世の諸佛の師範、十方薩埵の導師、一切衆生皆成佛道の指南に

同生同名―倶生神ともいふ

法を御信用ある世に生れて、日蓮が大難に値ふことは法道に似たり。各々わづかの御身と生れて鎌倉に居ながら、人目をも憚らず命をも惜まず法華經を御信用ある事、たゞ事ともおぼえず。但推量るに濁れる水に玉を入れぬれば水の淸むがごとし。知らざる事をよき人に敎へられて其のまゝに信用せば、道理にきこゆるがごとし。釋迦佛、普賢菩薩、藥王菩薩、宿王華菩薩等の各々の御心中に入り給へるか。法華經の文に、閻浮提に此の經を信ぜん人は普賢菩薩の御力也と申す、是なるべし。女人はたとへば藤のごとし、男は松のごとし。須臾もはなれぬれば立ちあがる事なし。はかぐ〵しき下人もなきに、かゝる亂れたる世に此の殿をつかはされたる心ざし、大地よりもあつし。地神定めてしりぬらん。虚空よりも高し、梵天帝釋も知らせ給ひぬらん。人の身には同生同名と申す二の使を天生るゝ時よりつけさせ給ひて、影の身に隨ふがごとく須臾もはなれず、大罪小罪大功德小功德、すこしも遺さず代るがはる天に上りて申し候ふと、佛說き給ふ。此の事ははや天も知召しぬらん。賴もしゝ、たのもしゝ。

四月日　　　　日蓮　花押

四條金吾殿女房御返事

べし。

同生同名御書

此の御文は藤四郎殿の女房と、常に寄り合ひて御覽あるべく候ふ。

大闇をば日輪やぶる。女人の心は大闇のごとし。法華經は日輪のごとし。幼子は母を知らず、母は幼子を忘れず。釋迦佛は母のごとし。女人は幼子のごとし。二人たがひに思へばすべて離れず。一人は思へども一人思はざれば、或ときは逢ひある時は逢はず。佛は思ふもののごとし。女人は思はざるもののごとし。我等佛を思はゞ、いかでか釋迦佛見え給はざるべき。石を珠といへども珠とならず、珠を石といへども石とならず。權經の當世の念佛等は石のごとし。念佛は法華經ぞと申すとも法華經等にあらず。又法華經を謗るとも珠の石とならざるがごとし。昔唐國に徽宗皇帝と申せし惡王あり、道士と申すものにすかされて、佛像經卷を失ひ僧尼を皆還俗せしめしに、一人として還俗せざるものなかりき。其の中に法道三藏と申せし人こそ敕宣を畏れずして、面に火印を燒かれて江南と申せし處へ流されて候ひしか。今の世の禪宗と申す道士の法門のやうなる惡

道士—道教の僧

外典─佛書以外の書
かまへて〳〵─是非々々

起して法華經を捨つるのみならず、かへりて日蓮を教訓して我賢しと思はん僻人等が、念佛者よりも久しく阿鼻地獄にあらん事、不便とも申す計りなし。脩羅が、佛は十八界我は十九界と云ひ、外道が云はく、佛は一究竟道、我は九十五究竟道と云ひしが如く、日蓮御房は師匠にてはおはせども、餘に剛し、我等は柔に法華經を弘むべしと云んは、螢火が日月をわらひ、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなづり、烏鵲が鸞鳳を笑ふなるべし、笑ふなるべし。南無妙法蓮華經。

文永九年太歳壬申三月二十日　日蓮　花押

日蓮弟子檀那等御中

佐渡の國は紙候はぬ上、面々に申せば煩あり、一人も洩るれば恨ありぬべし。此の文を、心ざしあらん人々は寄合うて御覽じ料簡候ひて、心なぐさませ給へ。世間にまさる歎だにも出來すれば劣る歎は物ならず。當時の軍に死する人々實不實は置く、幾か悲しかるらん。伊澤の入道酒部の入道いかになりぬらん。河邊の山城得行寺殿等の事いかにと書付けて給ふべし。外典書の貞觀政要すべて外典の物語、八宗の相傳等此等がなくしては消息もかゝれ候はぬに、かまへてかまへて給び候ふ

塵點—塵點劫、非常に長き時間

るが如くなる御經を、或は上げ或は下して嘲哢せし故に、此の八種の大難に値る也。此の八種は盡未來際が間、一づつこそ現ずべかりしを、日蓮つよく法華經の敵を責むるによつて一時に聚り起せる也。譬へば民の鄕郡なんどにあるには、いかなる利錢を地頭等に債せたれども、いたく責めず年々にのべゆく。其の所を出づる時に競ひ起るが如し。「斯由護法功德力故」等は是也。法華經には「有諸無智人惡口罵詈等加刀杖瓦石乃至向國王大臣婆羅門居士乃至數數見擯出等云云」。獄卒が罪人を責めずば地獄を出づる者難かりなん。當世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し。日蓮は過去の不輕の如く、當世の人々は彼の輕毀の四衆の如し。人は替れども因は是一也。父母を殺せる人異なれども、同じ無間地獄におつ。いかなれば不輕の因を行じて、日蓮一人釋迦佛とならざるべき。又彼の諸人は跋陀婆羅等と云はれざらんや。但千劫阿鼻地獄にて責められん事こそ不便にはおほゆれ。是をいかんとすべき。彼の輕毀の衆は、始は謗ぜしかども後には信伏隨從せりき。罪多分は滅して少分有りしが、父母千人殺したる程の大苦を受く。當世の諸人は飜す心なし。譬喩品の如く無數劫をや經んずらん。三五の塵點をや送らんずらん。これはさて置きぬ。日蓮を信ずるやうなりし者どもが、日蓮が斯くなれば疑を

被輕易ー輕んじあなどりを被る

ける者の弟子と成りけん、かゝる國に生れけん、いかになるべしとも覺えず。般泥洹經に云はく、

善男子。過去作二無量諸罪種種惡業一。是諸罪報。或被二輕易一。或形狀醜陋。衣服不レ足。飲食麤疎。求レ財不レ利。生二貧賤家及邪見家一。或遭二王難一等云云。

又云はく、

及餘種種人間苦報。現世輕受。斯由二護法功德力一故等云云。

此の經文は、日蓮が身なくば殆ど佛の妄語となりぬべし。一には或被輕易、二には或形狀醜陋、三には衣服不足、四には飲食麤疎、五には求財不利、六には生貧賤家、七には及邪見家、八には或遭王難等云々。此の八句は只日蓮一人が身に感ぜり。高山に登る者は必下り、我人を輕しめば還つて我が身人に輕易せられん。形狀端嚴をそしれば醜陋の報を得、人の衣服飲食を奪へば必ず餓鬼となる。持戒尊貴を笑へば貧賤の家に生ず、正法の家をそしれば邪見の家に生ず、善戒を笑へば國土の民となり王難に値ふ。是は常の因果の定れる法也。日蓮は此の因果にはあらず、法華經の行者を過去に輕易せし故に、法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね、華山に華山をかさね、玉と玉とをつらねた

傳ふべきものとする禪宗の主義

る故也。但し一闡提人と申して、謗法の者計り地獄守に留められたりき。彼等が生ひろげて今の世の日本國の一切衆生となれる也。日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば、今生に念佛者にて、數年が間法華經の行者を見ては、「未有一人得者千中無一等」と笑ひし也。今謗法の醉さめて見れば、酒に醉へる者父母を打て悦びしが、醉さめて後歎きしが如し。歎けども甲斐なし。此の罪消えがたし。何に況や過去の謗法の心中に染みけんをや。經文を見候へば、烏の黒きも鷺の白きも先業の強き染みけるなるべし。外道は知らずして自然と云ひ、今の人は謗法を顯して扶けんとすれば、我が身に謗法なき由を強に陳答して、法華經の門を閉ぢよと法然が書けるを、とかく爭ひなんとす。念佛者はさて置きぬ。天台眞言等の人々、彼が方人をあながちにする也。今年正月十六日十七日に、佐渡の國の念佛者等數百人、印性房と申すは念佛者の棟梁也、日蓮が許に來て云はく、法然上人は法華經を抛げよとかゝせ給ふには非ず。一切衆生に念佛を申させ給ひて候ふ。此の大功德に御往生疑なしと書付けて候を、山僧等の流されたる竝に、寺法師等善哉善哉とほめ候ふを、いかゞこれを破し給ふと申しき。鎌倉の念佛者よりも、遙にはかなく候ぞ。無慚とも申す計りなし。いよ〳〵日蓮が先生今生先日の謗法おそろし。斯り

大師外道―婆羅門教の大大派
捨閉閣抛―すつ、とづ、おく、なげうつ
教外別傳―眞理は口や文字に表したる教の中にあるにあらず、別に心より心に

あなづる道理也。心も又身に對すればこそ、月金にも譬ふれ。又過去の謗法を案ずるに誰か知る。勝意比丘が魂にもや。大天が神にもや。不輕輕毀の流類なる歟。失心の餘殘なる歟。五千上慢の眷屬なる歟。大通第三の餘流にもやあるらん。宿業はかりがたし。鐵は炎ひ打てば劒となる。賢聖は罵詈して試みるなるべし。我今度の御勘氣は世間の失一分もなし。偏に先業の重罪を今生に消して、後生の三惡を脫れんずるなるべし。

般泥洹經に云はく、

有當來之世、假被袈裟。於我法中出家學道。懶惰懈怠。誹謗此等方等契經。當知此等皆是。今日諸異道輩等云云。

此の經文を見ん者自身を恥づべし。今我等が出家して、袈裟をかけ、懶惰懈怠なるは是佛在世の六師外道が弟子也と佛記し給へり。法然が一類、大日が一類、念佛宗禪宗と號して、法華經に捨閉閣抛の四字を副へて制止を加へて、權經の彌陀稱名計りを取立て、教外別傳と號して法華經を、月をさす指、只文字を算ふるなんど笑ふ者は、六師が末流の、佛教の中に出來せるなるべし。憂なるかなや。涅槃經に、佛光明を放つて地の下一百三十六地獄を照し給ふに、罪人一人もなかるべし。法華經の壽量品にして皆成佛せ

泰衡—藤原秀衡の子
弟—泉三郎
九郎判官—源義經
先業云々—先世になせし行爲の惡しかりし報

此の事起る歟。是は果報なるべし。實果の成ぜん時、いかゞ歎はしからんずらん。世間の愚者の思に云はく、日蓮智者ならば何ぞ王難に値ふ哉なんど申す。日蓮兼ての存知也。父母を打つ子あり、阿闍世王なり。佛阿羅漢を殺し血を出す者あり、提婆達多是也。六臣これを讃め、瞿伽利等これを悦ぶ。日蓮當世には此の御一門の父母也、佛阿羅漢の如し。然るを流罪して主從共に悦びぬる、あはれに無慚なる者也。謗法の法師が自ら禍の既に顯るゝを歎きしが、斯なるを一旦は悦ぶなるべし。後には彼等が歎き日蓮が一門に劣るべからず。例せば泰衡が弟を討ち九郎判官を討つて悦びしが如し。既に一門を亡す、大鬼の此の國に入るなるべし。法華經に云はく、「惡鬼入二其身一」と是也。日蓮も又かく責めらるゝも、先業なきにあらず。不輕品に云はく、「其罪畢已等云云」不經菩薩の、無量の謗法の者に、罵詈打擲せられしも、先業の所感なるべし。何に況や、日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出でたり。心こそすこし法華經を信じたる樣なれども、身は人身に似て畜身也。魚鳥を混丸して赤白二渧とせり。其の中に識神をやどす。濁水に月のうつれるが如し。糞嚢に金を包めるなるべし。心は法華經を信ずる故に、梵天帝釋をも猶恐しと思はず。身は畜生の身也、色心不相應の故に、愚者の

寶治の合戰—時頼、三浦氏を亡せる時
今年—龜山天皇文永九年に當る、時宗、兄を弑す、高麗、元書を致す

をなして智者を失はん時は、師子王の如くなる心をもてる者、必ず佛になるべし。例せば日蓮が如し。これ傲れるにはあらず、正法を惜む心の强盛なるべし。おごる者は必ず强敵に値ておそるゝ心出來する也。例せば脩羅の傲、帝釋に責められて無熱池の蓮の中に小身と成つて隱れしが如し。正法は一字一句なれども、時機に叶ひぬれば必ず得道成るべし。千經萬論を習學すれども、時機に相違すれば叶ふべからず。寶治の合戰すでに二十六年、今年二月十一日十七日又合戰あり。外道惡人は如來の正法を破りがたし、佛弟子等必ず佛法を破るべし。師子身中の蟲の師子を食む等云々。大果報の人をば他の敵破りがたし、親しみより破るべし。藥師經に云はく、「自界叛逆難」と是也。仁王經に云はく、「聖人去時七難必起云云」金光明經に云はく、「三十三天各生瞋恨由其國王縱惡不治等云云」日蓮は聖人にあらざれども、法華經を說の如く受持すれば聖人の如し、又世間の作法兼ねて知るによつて、注し置くこと是違ふべからず。現世に云ひ置く言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず。日蓮は此の關東の御一門の棟梁也、日月也、龜鏡也、眼目也。日蓮捨て去る時七難必ず起るべしと。去ぬる年九月十二日、御勘氣を蒙りしの時、大音聲を放ちて呼はりし事これなるべし。纔に六十日乃至百五十日に

摂受―慈悲を以て摂め入ること
折伏―悪法を折りひしぐこと

に命をすて、女人は男の爲に命を捨つ。魚は命を惜む故に池に栖むに、池の淺き事を歎きて池の底に穴を堀りてすむ。しかれども、餌にばかされて鈎を呑む。鳥は木に栖む。木の低き事を怖ぢて木の上枝にすむ。しかれども、餌にばかされて網にかゝる。人も又是の如し。世間の淺き事には身命を失へども、大事の佛法なんどには捨つる事難し。故に佛になる人もなかるべし。佛法は、攝受折伏時に依るべし。譬へば世間の文武二道の如し。されば昔の大聖は、時によりて法を行ず。雪山童子薩埵王子は、身を布施とせば法を敎へん菩薩の行となるべしと責しかば、身をすつ。肉を欲しがらざる時身を捨つべき乎。紙なからん世には身の皮を紙とし、筆なからん時は骨を筆とすべし。破戒無戒を毀り、持戒正法を用ひん世には、諸戒を堅く持つべし。儒教道敎を以て釋敎を制止せん日には、道安法師、慧遠法師、法道三藏等の如く、王と論じて命を輕うすべし。釋敎の中に、小乘大乘、權經實經雜亂して、明珠と瓦礫と、牛驢の二乳を辨へざる時は、天台大師傳敎大師等の如く、大小權實顯密を强盛に分別すべし。畜生の心は弱きを脅し强きを恐る。當世の學者等は畜生の如し。智者の弱きをあなづり、王法の邪を恐る。諛臣と申すは是也。强敵を伏して始めて力士を知る。惡王の正法を破るに、邪法の僧等が方人

これへの人々ー
この佐渡へ來る
人は持參して呉
れとなり

らば各々御物語り申しさせ給ひ候へ。

十月　日　　日蓮　花押

佐渡御書

此の文は富木殿のかた三郎左衞門殿、大藏塔の辻十郎入道殿等、棧敷の尼御前、一一に見させ給ふべき人々の御中へ也。京鎌倉に軍に死せる人々を書付けてたび候へ。外典鈔、文句の二、玄の四の本末、勘文宣旨等これへの人々持ちてわたらせ給へ。

世間に人の恐るゝ者は、火炎の中と刀劍の影と此の身の死するとなるべし。牛馬猶身を惜む、況や人身をや。癩人猶命を惜む、何に況や壯人をや。佛說いて云はく、

以二七寶一布二滿三千大千世界一、不レ如下以二手小指一供中養佛經上。取意

雪山童子の身を投げし、樂法梵志が身の皮を剝ぎし、身命に過ぎたる惜しき者のなければ、是を布施として佛法を習へば必ず佛となる。身命を捨つる人他の寶を佛法に惜むべしや。又財寶を佛法に惜まん者、まさる身命を捨つべきや。世間の法にも重恩をば命を捨てて報ずるなるべし。又主君の爲に命を捨つる人は少きやうなれども、其數多し。男子は恥

旃陀羅―梵語、屠者と譯す、社會最卑の人民、日蓮の父は漁夫なりし故爾云ふ

佐渡御勘氣鈔

九月十二日に御勘氣を蒙つて、今年十月十日佐渡の國へまかり候ふ也。本より學文し候ひし事は、佛教をきはめて佛になり、恩ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は必ず身命を捨つるほどの事ありてこそ、佛にはなり候ふらめと推量らる。既に經文のごとく、「惡口罵詈刀杖瓦礫數數見擯出」と說かれて、かゝる目に値ひ候ふこそ、法華經を讀むにて候ふらめと、いよ〳〵信心もおこり、後生も賴もしく候ふ。死して候はゞ必ず各々をも救けたてまつるべし。天竺に師子尊者と申せし人は、檀彌羅王に頸を刎ねられ、提婆菩薩は外道につき殺さる。漢土に竺の道生と申せし人は、蘇山と申す所へ流さる。法道三藏は面に火印をやかれて、江南と申す所へながされき。是皆法華經の德、佛法のゆゑなり。日蓮は日本國東夷東條安房の國、海邊の旃陀羅が子也。いたづらに朽ちん身を、法華經の御故に捨てまゐらせん事、あに、石に金をかふるにあらずや。各々嘆かせ給ふべからず。道善の御房にも斯う申し聞かせまゐらせ給ふべし。領家の尼御前へも御ふみと存じ候へども、先かゝる身の文なれば、なつかしやと思さざるらんと申しぬると、便宜あ

信力こそありがたく候へ。恐々謹言。

文永八年九月二十一日　　日蓮　花押

四條金吾殿

土籠御書

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜の寒さに付けても、牢のうちのありさま思ひやられて痛しくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をも救け給ふべき御身也。法華經を餘人の讀み候ふは、口ばかり言ばかりは讀めども心は讀まず。心は讀めども身に讀まず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。「天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害」と說かれて候へば、別の事はあるべからず。籠をばし出でさせ給ひ候はゞ、とく／＼來り給へ。見奉り見えたてまつらん。恐々謹言。

文永八年辛未十月九日　　日蓮　花押

筑後殿

天諸童子—天童加護をなして敵の刀杖をして毒害をなさしめずとなり

除佛方便―佛の方便としては他佛の淨土を說かれあるも、實は法華經以外にはなしとなり

寂光土―法身佛の淨土

三光―日、月、星

此の意なるべき歟。此の經文に一乘法と說き給ふは法華經の事也。十方佛土の中には法華經より外は全くなきなり。「除佛方便說」と見えたり。若然らば日蓮が難に遭ふ所ごとに佛土なるべき歟。娑婆世界の中には日本國、日本國の中には相摸の國、相摸の國の中には片瀨、片瀨の中には龍口に、日蓮が命を留め置く事は、法華經の御故なれば、寂光土ともいふべき歟。神力品に云はく、

若於林中。若於園中。若山谷曠野。是中乃至而般涅槃。

とは是歟。かゝる日蓮に伴ひて法華經の行者として腹を切らんと宣給ふ事、かの弘演が腹をさいて主の懿公が肝を入れたるよりも、百千萬倍すぐれたる事也。日蓮靈山にまゐりて、まづ四條金吾こそ法華經の御故に、日蓮と同じく腹切らんと申し候ふなりと申し上げ候ふべきぞ。又鎌倉殿の仰とて內々佐渡の國へ遣すべき由承り候ふ。三光天子の中に月天子は光物とあらはれ、龍の口の首をたすけ、明星天子は四五日已前に下りて日蓮に見參し給ふ。いま日天子ばかりのこり給ふ。定めて守護あるべきかと賴もしたのもし。法師品に云はく、「則遣變化人爲之作衞護」疑あるべからず。安樂行品に云はく、「刀杖不加」、普門品に云はく、「刀刃段段壞」此等の經文よも虛事にては候はじ。强盛の

華經南無妙法蓮華經。恐々謹言。

七月十二日　　　日蓮　花押

四條金吾殿御返事

四條金吾殿御消息

度々の御音信申し盡しがたく候ふ。さても〱去ぬる十二日の難のとき、貴邊龍口まで連れさせ給ひ、しかのみならず、腹を切らんと仰せられし事こそ不思議とも申すばかりなけれ。日蓮過去に妻子所領眷屬等の故に、身命を捨てし所若干かありけむ。或は山にすて海に捨て、或は河或は磯等、路のほとりか。然れども法華經のゆゑ題目の難にあらざれば、捨てし身も蒙る難等も、成佛の爲ならず。成佛のためならざれば、捨てし海河も佛土にもあらざるか。今度法華經の行者として流罪死罪に及ぶ。流罪は伊東、死罪は龍の口、相州の龍の口こそ日蓮が命を捨てたる處なれ。佛土に劣るべしや。其の故は、すでに法華經の故なるがゆゑなり。經に云はく、

十方佛土中。唯有一乘法。

し。人頭鹿とも申すべき也。日蓮此の業障を消しはてて、未來は靈山淨土にまゐるべしとおもへば、種々の大難雨のごとくふり、雲のごとくにわき候へども、法華經の御故なれば苦をも苦とも思はず。かゝる日蓮が弟子檀那となり給ふ人々、殊に今月十二日の妙法聖靈は法華經の行者也。日蓮が檀那也。いかでか餓鬼道におち給ふべきや。定めて釋迦多寶佛十方の諸佛の御寶前にましまさん。是こそ四條金吾殿の母よ母よと同心に頭をなで悅びほめ給ふらめ。あはれいみじき子を我はもちたりと、釋迦佛と語らせ給ふらん。法華經に云はく、

若有善男子善女人。聞妙法華經提婆達多品。淨心信敬。不生疑惑者。不墮地獄餓鬼畜生。生十方佛前。所生之處。常聞此經。若生人天中。受勝妙樂。若在佛前。蓮華化生云云。

此の經文に善女人と見えたり。妙法聖靈の事にあらずんば誰が事にやあらん。又云はく、

此經難持。若暫持者。我卽歡喜。諸佛亦然。如是之人。諸佛所歎 云云。

日蓮讃歎したてまつる事は物の數ならず。諸佛所歎と見えたり。あら賴もしや、あら賴もしやと、信心を深くとり給ふべし、信心を深くとり給ふべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮

修因—原因といふに同じ

は何なる修因ぞと申すに、此の世にて夜討強盗などをなして候ふによりて候ふ。食吐餓鬼と申すは人の口より吐き出す物を食し候ふ。是も修因上の如し。又人の食を奪ふに依り候ふ。食水餓鬼と云ふは父母孝養のために手向る水などを呑む餓鬼なり。有財餓鬼と申すは馬の蹄の水をのむ餓鬼なり。是は今生にて財を惜み食をかくす故也。無財がきと申すは生れてより以來飲食の名をもきかざるがきなり。食法餓鬼と申すは出家となりて佛法を弘むる人、我は法を説けば人尊敬するなんど思ひて名聞名利の心を以て人にすぐれんと思ひて今生をわたり、衆生をたすけず父母をすくふべき心もなき人を、食法餓鬼とて法をくらふがきと申すなり。當世の僧を見るに人にかくして我一人ばかり供養をうくる人もあり。是は狗犬の僧と涅槃經に見えたり。是は未來には牛頭と云ふ鬼となるべし。又人にしらせて供養をうくるとも欲心に住して人に施す事なき人もあり。是は未來には馬頭と云ふ鬼となり候ふ。又在家の人々も我が父母地獄餓鬼畜生におちて苦患をうくるをば弔はずして、我は衣服飲食にあきみち、牛馬眷屬充滿して我が心に任せてたのしむ人をば、いかに父母の羨しく恨み給ふらん。僧の中にも父母師匠の命日をとぶらふ人は稀なり。定めて天の日月地の地神怒り憤り給ひて、不孝の者と思はせ給ふらん。形は人にして畜生のごと

五百生—五百度生れかはる間

四條金吾殿御書

雪のごとく白く候ふ白米一斗、古酒のごとく候ふ油一筒、御布施一貫文。態使者を以つて盆料送り給ひ候ふ。殊に御文の趣有り難くあはれに覺え候ふ。抑盂蘭盆と申すは源目連尊者の母青提女と申す人、慳貪の業によりて、五百生、餓鬼道に墮ち給ひて候ふを、目連救ひしより事起りて候ふ。然りといへども佛にはなさず。其故は我が身いまだ法華經の行者ならざる故に母をも佛になす事なし。靈山八箇年の座席にして法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱へて多摩羅跋栴檀香佛となり給ひ、此の時母も佛になり給ふ。又施餓鬼の事仰に候ふ。法華經第三に云はく、

　如從飢國來忽過大王膳云云。

此の文は中根の四大聲聞醍醐の珍膳を音にもきかざりしが、今經に來りて始めて醍醐の味を飽までに嘗めて昔飢ゑたる心を忽にやめし事を說き給ふ文也。若爾らば餓鬼供養の時は此の文を誦して南無妙法蓮華經と唱へて弔ひ給ふべく候ふ。總じて餓鬼において三十六種類相わかれて候ふ。其の中に鑊身餓鬼と申すは目と口となき餓鬼にて候ふ。是

十羅刹－法華經守護の鬼神

天上天下－此世にて唯われひとり尊し、三界は皆苦なり我まさに之を度すべし

給ふ。娑婆世界の教主釋尊も又卯月八日に御誕生なりき。今の童女又月は替れども八日に生れ給ふ。釋尊八幡の生れ替りとや申さん。日蓮は凡夫なれば能くは知らず。是併しながら日蓮が符を進らせし故也。さこそ父母も悦び給ふらむ。殊に御祝として餅酒鳥目一貫文送り給び候ひ畢んぬ。是また御本尊十羅刹に申し上げて候ふ。今日の佛生れさせまします時に三十二の不思議あり。此の事周書の異記と云ふ文に記し置けり。釋迦佛は誕生し給ひて七歩し口を自ら開いて「天上天下唯我獨尊三界皆苦我當度之」の十六字を唱へ給ふ。今の月滿御前はうまれ給ひてうぶ聲に南無妙法蓮華經と唱へ給ふ歟。法華經に云はく、諸法實相。天台の云はく、「聲爲佛事等云云」日蓮又かくの如く推し奉る。譬へば雷の音聾の爲に聞く事なく、日月の光目くらの爲に見る事なし。定めて十羅刹女は寄り合ひて產水をなで養ひ給ふらん。あらめでたや、あらめでたや。御悅び推量申し候ふ。念頃に十羅刹女天照太神等にも申して候ふ。あまりの事に候間委しくは申さず。是より重ねて申すべく候ふ。あなかしこ〳〵。

日蓮　花押

四條金吾殿御返事

辨公—使者たる弟子の名

有一—一の寶珠あり價直三千世界に等し云々

を垂れ守護し給ふべし。とく〳〵生れ候ふべし。法華經に云はく、「如是妙法」又云はく、「安樂産福子云云」口傳相承の事は此の辨公にくはしく申しふくめて候ふ。則ち如來使なるべし。返々も信心候ふべし。天照太神は玉を素盞雄尊にさづけて玉の如くの子をまうけたり。然る間日の神我が子となづけたり。さてこそ正哉吾勝とは名づけたれ。日蓮うまるべき種をさづけて候へば、爭か我が子に劣るべき。「有一寶珠價直三千等。無上寶聚不求自得。釋迦如來皆是吾子等云云」日蓮あに此の義にかはるべきや。幸なり幸なり、めでたしめでたし。又々申すべく候ふ。あなかしこ、あなかしこ。

文永八年五月七日　　日蓮花押

四條金吾殿女房御返事

月滿御前御書

若童生れさせ給ひし由承り候ふ。めでたく覺え候ふ。殊に今日は八日にて候ふ。彼と云ひ此と云ひ所願潮の指すが如く春の野に花の開けるが如し。然ればいそぎ〳〵名をつけ奉る。月滿御前と申すべし。其の上此の國の主八幡大菩薩は卯月八日にうまれさせ

符—護符、守札なり

色心二法—肉體と精神との二つの物

に投げぬれば三災にも失せず。一華を五淨によせぬれば劫火にも萎まず。一豆を法華經になげぬれば法界みな蓮なり。恐惶謹言。

十月二十三日　日蓮花押

御所御返事

四條金吾女房御書

懐胎のよし承り候ひ畢んぬ。それについては符の事仰せ候ふ。日蓮相承の中より撰み出して候ふ。能々信心あるべく候ふ。たとへば祕藥なりとも毒を入ぬれば藥の用すくなし。劍なれども臆病れたる人のためには何かせん。就中夫婦共に法華の持者也。法華經流布あるべき種を繼ぐ所の玉の子出で生れん、めでたく覺え候ふぞ。色心二法をつぐ人也。爭か遲なはり候ふべき。疾く〳〵こそ生れ候はむずれ。此の藥をのませ給はゞ疑なかるべきなり。闇なれども燈入りぬれば明かなり、濁水にも月入りぬれば澄めり。明かなる事日月にすぎんや、淨き事蓮華にまさるべきや。法華經は日月と蓮華となり。故に妙法蓮華經と名づく。日蓮又日月と蓮華との如くなり。信心の水澄まば利生の月必ず應

欲令衆生をして佛知見を開かしめんと欲すと云云

六根—身體のこと、眼、耳、鼻、舌、身、意

消息文類

眞間釋迦佛御供養逐狀

釋迦佛御造立の御事、無始曠劫よりいまだ顯れましまさぬ己心の一念三千の佛造り顯しましますか。馳せ參りて拜み參らせ候はゞや。「欲令衆生開佛知見乃至然我實成佛已來」は是也。但し佛の御開眼の御事は急ぎいそぎ伊豫房をもて果しまゐらせさせ給ひ候へ。法華經一部御佛の御六根によみ入れまゐらせて生身の教主釋尊になしまゐらせてかへりて迎へ入れ參らせさせ給へ。自身竝に子にあらずばいかんがと存じ候ふ。御所領の堂の事等は大進の阿闍梨がきゝて候ふ。返すがへす拜み結緣しまゐらせ候べし。いつぞや大黑を供養して候ひし其の後より世間なげかずしておはするか。此の度は大海の潮の滿つるがごとく月の滿ずるが如く、福來り命ながく、後生は靈山とおぼしめせ。

大豆御書

大豆一石かしこまつて拜領し畢んぬ。法華經の御寶前に申し上げ候ふ。一滴の水を大海

上行無邊行—共に法華經の菩薩

し。地獄まではよもおはせじ。又生死を離るゝ事はあるべしともおほえず。中有にや漂ひましますらむと嘆し。貴邊は地頭の怒りし時、義城房と共に清澄寺を出でておはせし人なれば、何となくとも、これを法華經の御奉公と思召して、生死をはなれさせ給ふべし。此の御本尊は世尊說き置かせ給ひて後、二千二百三十餘年が間、一閻浮提の内にいまだ弘めたる人候はず。漢土の天台、日本の傳敎、ほゞ知召して、いさゝか弘めさせ給はず。當時こそ弘まらせ給ふべき時にあたりて候へ。經には上行、無邊行等こそ出でて弘めさせ給ふべしと見えて候へども、いまだ見えさせ給はず。日蓮は其の人には候はねども、ほほこゝろえて候へば、地涌の菩薩の出でさせ給ふまでの口ずさみに、あら〱申して況滅度後の鋒に當り候ふ也。願はくは此の功德を以て、父母と師匠と一切衆生に回向し奉らんと祈請仕り候ふ。其の旨を知らせまゐらせむがために、御不審を書きおくりまゐらせ候ふに、他事をすてて此の御本尊の御前にして、一向に後世をも祈らせ候へ。又これより申さんと存し候ふ。いかにも御房たち計らひ申させ給へ。

日蓮花押

これを用ひ來りて、やうやく年數を經る程に、今佗國の責をかうぶりて、此の國すでに亡びなんとす。關東八箇國のみならず、叡山東寺園城七寺等の座主別當、皆關東の御計らひとなりぬる故に、隱岐の法皇のごとく、大惡法の檀那と成り定まり給ひぬる也。國主となる事は、大小皆梵王帝釋日月四天の御計らひ也。法華經の怨敵となり定まり給はゞ、忽ちに治罰すべきよしを誓ひ給へり。隨つて人王八十一代安德天皇に太政入道の一門與力して、兵衞の佐賴朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め、山王を氏神と憑みしかども、安德は西海に沈み、明雲は義仲に殺さる。一門皆一時に亡び畢んぬ。第二度也。今度は第三度にあたる也。日蓮が諫を御用ひなくて、眞言の惡法を以て大蒙古を調伏せられば、日本國還つて調伏せられなむ。還著於本人と說けりと申す也。然らば則ち罰を以て利生を思ふに、法華經に過ぎたる佛になる大道は無かるべき也。現世の祈禱は兵衞の佐殿、法華經を讀誦する現證也。此の道理を存ぜる事は、父母と師匠との御恩なれば、父母はすでに過去し給ひ畢んぬ。故道善御房は師匠にておはしましかども、法華經の故に地頭に畏れ給ひて、心中には不便と思しつらめども、外には敵のやうに惡み給ひぬ。後にはすこし信じ給ひたるやうに聞えしかども、臨終には何にや在しけむ覺束な

別當供僧—別當は住職、供僧は神に奉仕する僧

字金輪、四天王、不動、大威德、轉法輪、如意輪、愛染王、佛眼六字、金剛童子、尊星王、太元守護經等の大法也。此の法の詮は、國敵王敵となる者を降伏して、命を召し取りて其の魂を密嚴淨土へつかはすと云ふ法也。其の行者の人々も又輕からず。天台の座主慈圓、東寺、御室、三井の常住院の僧正等の四十一人、竝に伴僧等二百餘人也云々。法と云ひ行者と云ひ、又代も上代也。いかにとして負け給ひけるぞ。たとひ勝つ事こそなくとも、即時に負け終りてかゝる恥にあひたりける事、いかなるゆゑといふ事を餘人いまだ知らず。國主として民を討たん事、鷹の鳥をとらんがごとし。たとひ負け給ふとも一年二年十年二十年も支ふべきぞかし。五月十五日に起りて六月十四日に負け給ひぬ。わづかに三十餘日也。權の大夫殿は此の事を兼て知らねば、祈禱もなし構もなし。然るに日蓮小智を以て勘へたるに其の故あり。所謂彼の眞言の邪法の故也。僻事は一人なれども、萬國のわづらひ也。一人として行ずとも一國二國破れぬべし。況や二百餘人をや。國主と共に法華經の大怨敵となりぬ。いかでか亡びざらん。かゝる大惡法年を經てやうやく關東におち下りて、諸堂の別當供僧となり、連々と行へり。本より邊域の武士なれば、教法の邪正をば知らず。たゞ三寶をば崇むべき事とばかり思ふゆゑに、自然として

てき。これは何にとして負け給ひけるぞ。國王の身として民の如くなる義時を打ち給はんは、鷹の雉をとり猫の鼠を食むにてこそあるべけれ。これは猫の鼠にくらはれ、鷹の雉に取られたるやうなり。しかのみならず、調伏の力を盡せり。所謂天台の座主慈圓僧正、眞言の長者、仁和寺の御室、園城寺の長吏、總じて七大寺十五大寺、智慧戒行は日月の如く、祕法は弘法慈覺等の三大師の心中の深密の大法、十五壇の祕法也。五月十九日より六月の十四日に至るまで、汗を流し頭腦をくだきて行ひき。最後には御室、紫宸殿にして、日本國にわたりていまだ三度までも行はぬ大法、六月八日始めて之を行ふ程に、同じき十四日に關東の兵軍、宇治勢多をおしわたして洛陽に打ち入りて、三院を生け取り奉りて、九重に火を放ちて一時に燒失す。三院をば三國へ流罪し奉りぬ。又公卿七人は忽に頸を切る。しかのみならず、御室の御所に押し入りて、最愛の弟子の小兒勢多伽と申せしを責め出して、終に頸をきりにき。御室思に堪へずして死に給ひ畢んぬ。母も死す、童も死す。すべて此の祈を頼みし人いく千萬といふ事を知らず死にき。たま〳〵生きたるもかひなし。御室祈を始め給ひし六月八日より同しき十四日まで、中を數ふれば七日に滿じける日也。此の十五壇の法と申すは、一

隱岐法皇—後鳥羽法皇

太子二人—土御門上皇、順德上皇

と云々。其の證據を尋ぬべきなり。所詮大日經こゝにわたれり、法華經に引き向けて其の勝劣を見る處、大日經は法華經より七重下劣の經也。證據、彼の經此の經に分明也。此不レ引レ之しかるを、或は云はく、法華經に三重の主君或は二重の主君也と云々。以の外の大僻見也。譬へば劉聰が下劣の身として愍帝に馬の口をとらせ、超高が民の身として横に帝位につきしがごとし。又彼の天竺の大慢婆羅門が釋尊を床として坐せしがごとし。漢土にも知る人なく、日本にも怪めずして、すでに四百餘年を送れり。是の如く佛法の邪正亂れしかば、王法も漸く盡きぬ。結句は此の國佗國に破られて亡國となるべきなり。此の事日蓮獨り勘へ知れる故に、佛法のため王法のため、諸經の要文を集めて一卷の書を造る。仍て故最明寺入道殿に奉る。立正安國論と名づけき。其の書に委しく申したれども愚人は知り難し。所詮現證を引いて申すべし。抑人王八十二代隱岐の法皇と申す王在しましき。去ぬる承久三年太歳辛巳五月十五日、伊賀太郎判官光末を打捕りまします。鎌倉の義時を討ち給はんとての門出也。やがて五畿七道の兵を召して、相州鎌倉の權の太夫義時を打ち給はんとし給ふところに、還りて義時にまけ給ひぬ。結句我が身は隱岐の國に流され、太子二人は佐渡の國阿波の國にながされ給ふ。公卿七人は忽に頸を刎ねられ

將門純友—平將門、藤原純友、共に天慶の謀叛人

成實宗は大小兼雜して謬悞あり。律宗は本は小乘、中比は權大乘、今は一向に大乘宗とおもへり。又傳敎大師の律宗あり。別に習ふ事也。法相宗は源權大乘經の中の淺近の法門にてありけるが、次第に增長して權實と竝び、結句は彼の宗宗を打ち破らんと存ぜり。譬へば日本國の將軍將門、純友等のごとし。下に居て上を破る。三論宗も又權大乘の空の一分也。此も我は實大乘と思へり。華嚴宗は又權大乘と云ひながら、餘宗にまされり。譬へば攝政關白のごとし。然るに法華經を敵となして立てる宗なる故に、臣下の身を以て大王に準ぜんとするがごとし。淨土宗と申すも權大乘の一分なれども、善導法然がたばかり賢くして、諸經をば上げ觀經をば下し、正像の機をば上げ、末法の機をば下して、末法の機に相叶へる念佛を取り出して、機を以て經を打ち、一代の聖教を失ひて念佛の一門を立てたり。譬へば心かしこくして身は卑しき者が、身を上げて心はかなきものを敬ひて、賢人を失ふがごとし。禪宗と申すは、一代聖敎の外に眞實の法有りと云々。譬へば親を殺して子を用ひ、主を殺せる所從の、しかも其の位につけるがごとし。眞言宗と申すは、一向に大妄語にて候ふが、深く其の根源をかくして候へば、淺機の人露しがたし。一向に誑惑せられて數年を經て候ふ。先天竺に眞言宗と申す宗なし。然れども有り

も、天台の座主御室等の高貴に畏れて申す事なし。あるは又其の義をも辨へぬかのゆゑに、からくして同の義をいへば、一向眞言師はさる事思ひもよらずと笑ふなり。然れば日本國中に數十萬の寺社あり、皆眞言宗也。たま〳〵法華經を竝ぶとも、眞言は主の如く法華ば所從の如く也。若は兼學の人も、心中は一同に眞言也。座主、長吏、檢校、別當、一向に眞言たるうへ、上に好むところ下皆從ふ事なれば、一人も洩れず眞言師也。されば日本國、或は口には「法華經最第一」とは讀めども、心は最第二最第三也。或は身口意共に最第二三也。三業相應して最第一と讀める法華經の行者は、四百餘年が間一人もなし。まして能持此經の行者はあるべしとも覺えず。「如來現在猶多怨嫉況滅度後」一の衆生は、上一人より下萬民にいたるまで、法華經の大怨敵也。然るに日蓮は東海道十五箇國の内第十二に相當る安房の國長狹の郡東條の鄕片海の海人が子也。生年十二、同じき鄕の内淸澄寺と申す山にまかりて、遠國なるうへ寺とはなづけて候へども修學の人なし。然るに隨分諸國を修行して學問し候ひしほどに、我が身は不肖也、人は敎へず、十宗の元起勝劣たやすく辨へがたきところに、たま〳〵佛菩薩に祈請して一切の經論を勘へて、十宗に合せたるに、倶舍宗は淺近なれども一分は小乘經に相當するに似たり。

三業相應—身口意ともに

宗をわたす。人王四十六代孝謙天皇の御宇に、唐代の鑒眞和尚、律宗と法華經をわたす。律をば弘め法華をば弘めず。第五十代桓武天皇の御宇に、延暦二十三年七月、傳教大師勅を給ひて漢土に渡り、妙樂大師の御弟子道邃、行滿に値ひ奉りて法華宗の定慧を傳へ、道宣律師に菩薩戒を傳へ、順曉和尚と申せし人に眞言の祕教を習ひ傳へて日本國に歸り給ひて、眞言法華の勝劣は漢土の師の教に依りては定め難しと思食しければ、こゝにして大日經と法華經と彼の釋と此の釋とを引き竝べて勝劣を判じ給ひしに、大日經は法華經に劣りたるのみならず、大日經の疏は天台の心をとりて我宗に入れたりけりと勘へ給へり。其の後弘法大師、眞言經を下されける事を遺恨とや思食しけむ、眞言宗を立てんとたばかりて、法華經は大日經に劣るのみならず、華嚴經に劣れりと云々。あはれ慈覺、智證、叡山、園城にこの義をゆるさずば、弘法大師の僻見は日本國に弘まらざらまし。彼の兩大師、華嚴法華の勝劣をば許さねど、法華眞言の勝劣をば、永く弘法大師に同心せしかば、存外に本の傳教大師の大怨敵となる。其の後日本國の諸碩德等、各智慧高く有るなれども、彼の三大師に越えざれば、今四百餘年の間、日本一同に眞言は法華經に勝れけりと定め畢んぬ。たま〳〵天台宗を習へる人々も、眞言は法華に及ばざるの由存ぜど

審祥大德—新羅の僧

答ふ。夫教主釋尊の御入滅一千年の間、月氏に佛法の弘通せし次第は、先五百年は小乘、後の五百年は大乘、小大權實の諍はありしかども、顯密の定はかすかなりき。像法に入りて十五年と申せしに、漢土に佛法渡る。始は儒道と釋教と諍論して定めがたかりき。されども佛法やうやく弘通せしかば、小大權實の諍論いできたる。されども甚くの相違もなかりしに、漢土に佛法渡りて六百年、玄宗皇帝の御宇に、善無畏、金剛智、不空の三三藏、月氏より入り給ひて後、眞言宗を立てしかば、華嚴法華等の諸宗は以ての外に下されき。上一人より下萬民に至るまで、眞言には法華經は雲泥也と思ひしなり。其の後德宗皇帝の御宇に妙樂大師と申す人、眞言は法華經に强に劣りたりと思召ししかども、いたく立てる事もなかりしかば、法華眞言の勝劣を辨へる人なし。日本國は人王三十代、欽明の御時、百濟國より佛法始めて渡りたりしかども、始は神と佛との諍論こはくして三十餘年は過ぎにき。三十四代推古天皇の御宇に、聖德太子始めて佛法を弘通し給ふ。慧觀、觀勒の二の上人、百濟國よりわたりて三論宗を弘め、孝德の御宇に道昭、禪宗をわたす。天武の御宇に新羅國の智鳳、法相宗をわたす。第四十四代元正天皇の御宇に、善無畏三藏大日經をわたす。然るに弘まらず。聖武の御宇に審祥大德、朗辨僧正等、華嚴

會昌天子ー唐武宗

杵を握る人、たれかこの末流にあらざるや。又慈覺大師は下野の國の人、廣智菩薩の弟子也。大同三年御歳十五にして、傳教大師の御弟子となりて、叡山に登りて十五年の間六宗を習ひ、法華眞言の二宗を習ひ傳へ、承和五年御入唐、漢土の會昌天子の御宇也。法全、元政、義眞、法月、宗叡、志遠等の天台眞言の碩學に値ひ奉りて、顯密の二道を習ひ極め給ふ。其の上殊に眞言の祕教は、十年の間功を盡し給ふ。大日如來よりは九代也。嘉祥元年仁明天皇の御師也。仁壽、齊衡に、金剛頂經蘇悉地經の二經の疏を造り、叡山に總持院を建立して第三の座主となり給ふ。天台の眞言これよりはじまる。又智證大師は讃岐の國の人、天長四年御年十四、叡山に登り義眞和尚の御弟子となり給ふ。日本國にては義眞、慈覺、圓澄、別當等の諸德に八宗を習ひ傳へ、去ぬる仁壽元年に文德天皇の勅を給ひて漢土に入り、宣宗皇帝の大中年中に法全、良諝和尚等の諸大師に、七年の間顯密の二教習ひ極め給ひて、去ぬる天安二年に御歸朝、文德、淸和等の皇帝の御師也。何れも現の爲、當のため、月の如く日の如く代々の明主、時々の臣民信仰餘りあり、歸依怠無し。故に愚癡の一切偏に信ずるばかり也。誠に依法不依人の金言を背かざるの外は、爭か佛によらずして弘法等の人によるべきや。所詮其の心如何。

又慈覺、智證大師の讀み給ふ樣に云はく、

於二諸經中一最在二其中一。又最爲二第一一等云云。

釋迦如來、多寶佛、大日如來一切の諸佛、法華經を一切經に相對して說いての給はく、「法華最第一」又說いて云はく、「法華最在二其上一」云々。所詮釋迦、十方の諸佛と、慈覺、弘法等の三大師と、いづれを本とすべきや。但し事を日蓮によせて、釋迦、十方の諸佛には永く背きて三大師を本とすべき歟如何。

問ふ。弘法大師は讃岐の國の人、勤操僧正の弟子也。三論法相の六宗を極む。去ぬる延暦二十三年五月桓武天皇の敕宣を帶びて漢土に入り、順宗皇帝の敕に依りて青龍寺に入りて慧果和尚に眞言の大法を相承し給へり。慧果和尚は大日如來よりは七代になり給ふ。人は替れども法門は同じ。譬へば瓶の水を猶瓶にうつすがごとし。大日如來と金剛薩埵、龍猛、龍智、金剛智、不空、慧果、弘法との、瓶は異なれども所傳の智水は同じ眞言也此の大師、彼の眞言を習ひて三千の波濤をわたりて日本國に付き給ふに、平城、嵯峨、淳和の三帝にさづけ奉る。去ぬる弘仁十四年正月十九日に東寺を建立すべき敕を給ひて、眞言の祕法を弘通し給ふ。然れば五畿七道六十六箇國二つの島に至るまでも、鈴をとり

答ふ。釋迦如來多寶佛、總じて十方の諸佛の御評定に云はく、已今當の一切經の中に法華最爲第一云々。

問ふ。今日本國中の天台眞言等の諸僧並に王臣萬民疑うて云はく、日蓮法師めは、弘法慈覺智證大師等に勝るべきか如何。

答ふ。日蓮反詰して云はく、弘法、慈覺、智證大師等は、釋迦、多寶、十方の諸佛に勝るべき歟、是一。今日本の國王より民までも教主釋尊の御子也。釋尊の最後の御遺言に云はく、「依法不依人」等云々。法華最第一と申すは法に依る也。然るに三大師等に勝るべしやとの給ふ。諸僧王臣萬民乃至所從牛馬等にいたるまで、不孝の子にあらずや、是二。

問ふ。弘法大師は法華經を見給はずや。

答ふ。弘法大師も一切經を讀み給へり。其の中に法華經華嚴經大日經の淺深勝劣を讀み給ふに、法華經を讀み給ふ樣に云はく、

文殊師利。此法華經。諸佛如來祕密之藏。於諸經中。最在其下。

又讀み給ふ樣に云はく、

藥王今告汝。我所說諸經。而於此經中。法華最第三云云。

又云はく、

此方等經。是諸佛眼。諸佛因是。得具五眼。佛三種身。從方等生。是大法印印涅槃海。如此海中。能生三種佛清淨身。此三種身。人天福田。應供中最等云云。

此等の經文、佛は所生、法華經は能生、佛は身也、法華經は神也。然れば則ち木像畫像の開眼供養は、唯法華經にかぎるべし。而るに今木畫の二像をまうけて、大日佛眼の印と眞言とを以て、開眼供養をなすは最も逆なり。

問うて云はく、法華經を本尊とすると、大日如來を本尊とすると、いづれか勝るや。

答ふ。弘法大師、慈覺大師、智證大師の御義の如くならば、大日如來はすぐれ、法華經は劣る也。

問ふ。其の義如何。

答ふ。弘法大師の祕藏寶鑰、十住心に云はく、第八法華、第九華嚴、第十大日經等云々。是は淺きより深きに入る、慈覺大師の金剛頂經の疏、蘇悉地經の疏、智證大師の大日經の旨歸等に云はく、大日經第一、法華第二等云々。

問ふ。汝が意如何。

能生—他の者を生ずるもの

如來、淨土宗は阿彌陀佛、禪宗にも釋迦を用ひたり。何ぞ天台宗に法華經を本尊とするや。

答ふ。彼等は佛を本尊とするに、是は經を本尊とす。其の義あるべし。

問ふ。其の義如何。佛と經といづれか勝れたるや。

答へて云はく、本尊とは勝れたるを用ふべし。例せば儒家には三皇五帝を用ひて本尊とするが如く、佛家にも又釋迦を以て本尊とすべし。

問うて云はく、然らば汝如何ぞ釋迦を以て本尊とせずして、法華經の題目を本尊とするや。

答ふ。上に擧ぐるところの經釋を見給へ、私の義にはあらず。釋尊と天台とは法華經を本尊と定め給へり。末代今の日蓮も佛と天台との如く、法華經を以て本尊とする也。其の故は、法華經は釋尊の父母諸佛の眼目也。釋迦大日總じて十方の諸佛は法華經より出生し給へり。故に今能生を以て本尊とする也。

問ふ。其の證據如何。

答ふ。普賢經に云はく。

此大乘經典。諸佛寶藏。十方三世諸佛眼目。出生三世諸如來種等云云。

四種三昧―天台に於ける肝心の修行

疑うて云はく、天台大師の摩訶止觀の第二の四種三昧の御本尊は阿彌陀佛也。不空三藏の法華經の觀智の儀軌は、釋迦多寶を以て法華經の本尊とせり。汝何ぞ此等の義に相違するや。

答へて云はく、是私の義にあらず、上に出すところの經文竝に天台大師の御釋也。但し摩訶止觀の四種三昧の本尊は阿彌陀佛とは、彼は常坐、常行、非行非坐の三種の本尊は阿彌陀佛也。文殊問經、般舟三昧經、請觀音經等による。是爾前の諸經の內、未顯眞實の經也。半行半坐三昧には二あり、一には方等經の七佛八菩薩等を本尊とす、彼の經による。二には法華經の釋迦多寶等を引き奉れども、法華三昧を以て案ずるに、法華經を本尊とすべし。不空三藏の法華儀軌は寶塔品の文によれり。此は法華經の教主を本尊とす。法華經の正意にはあらず。上に擧ぐる所の本尊は、釋迦多寶十方の諸佛の御本尊、法華經の行者の正意也。

法華儀軌―法華三昧修行の規則

問うて云はく、日本國に十宗あり、所謂俱舍、成實、律、法相、三論、華嚴、眞言、淨土、禪、法華宗也。此の宗は皆本尊まち〳〵なり。所謂俱舍、成實、律の三宗は劣應身の小釋迦也。法相三論の二宗は大釋迦佛を本尊とす。華嚴宗は臺上の盧遮那報身の釋迦如來、眞言宗は大日

本尊問答抄

問うて云はく、末代惡世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや。

答へて云はく、法華經の題目を以て本尊とすべし。

問うて云はく、何の經文何の人師の釋にか出でたるや。

答ふ。法華經の第四法師品に云はく、

藥王在在處處。若說若讀若誦若書若經卷所住之處。皆應起七寶塔極令高廣嚴飾。不須復安舍利。所以者何。此中已有如來全身等云云。

涅槃經の第四如來性品に云はく、

復次。迦葉諸佛所師。所謂法也。是故如來恭敬供養。以法常故。諸佛亦常云云。

天台大師の法華三昧に云はく、

於道場中。敷好高座。安置法華經一部。亦未必須安形像舍利竝餘經典。唯置法華經一部等云云。

提比丘尼は一切衆生喜見佛とならじ。耶輸陀羅は具足千萬光相佛とならじ。三千塵點も戯論、五百塵點も妄語となりて、恐らくは教主釋尊は無間地獄に墮ち、多寶佛は阿鼻の炎にむせび、十方の諸佛は八大地獄を栖とし、一切の菩薩は一百三十六の苦を受くべし。いかでかその義あるべき。其の義なくば日本國は南無妙法蓮華經なり。されば花は根にかへり、眞味は土に留る。此の功德は故道善房の聖靈の御身に集るべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

建治二年太歳丙子七月二十一日　之を記す

甲州波木井の鄕蓑歩の嶽より安房の國東條の郡淸澄山淨顯房の本へ奉送す

始皇の左道ー秦始皇帝の邪道

千二百二十五年が間一人も唱へず。日蓮一人南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經等と、聲も惜まず唱ふるなり。例せば風に隨つて波の大小あり、薪によつて火の高下あり、池に隨つて蓮の大小あり、雨の大小は龍による。根深ければ枝しげし、源遠ければ流ながしといふこれなり。周の代の七百年は文王の禮孝による。秦の世ほどもなし。始皇の左道なり。日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙蓮法華經は萬年の外、未來までも流布るべし。日本國の一切衆生の盲目を開ける功德あり。無間地獄の道を塞ぎぬ。此の功德は傳敎天台にも超え、龍樹迦葉にも勝れたり。極樂百年の修行は、穢土の一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は、末法の一時に劣るか。是はひとへに日蓮が智の賢きにはあらず、時の然らしむる耳。春は花さき、秋は菓なる、夏はあたゝかに、冬はつめたし、時の然らしむるに有らずや。

我滅度後。後五百歳中。廣宣流布。於閻浮提。無令斷絶。惡魔魔民諸天龍夜叉鳩槃荼等得其便也等云云。

此の經文若空しくなるならば、舍利弗は華光如來とならじ、迦葉尊者は光明如來とならじ。目犍は多摩羅跋栴檀香佛とならじ。阿難は山海慧自在通王佛とならじ。摩訶波闍波

させ給ひぬ。されば内證は同じけれども、法の流布は迦葉阿難よりも、馬鳴龍樹等は勝れ、馬鳴等よりも天台はすぐれ、天台よりも傳教は越えさせ給ひたり。世末になれば、人の智はあさく佛教は深くなる事なり。例せば輕病は凡藥、重病には仙藥、弱人には強き方人有りて扶くるこれなり。

問うて云はく、天台傳教の弘通し給はざる正法ありや。

答へて云はく、有り。

求めて云はく、何物ぞや。

答へて云はく、三あり。末法のために佛留め置き給ふ。迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、天台、傳教等の弘通せさせ給はざる正法なり。

求めて云はく、其の形貌如何。

答へて云はく、一には日本乃至一閻浮提一同に、本門の教主釋尊を本尊とすべし。所謂寶塔の内の釋迦多寶、外の諸佛並に上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏一閻浮提に、人ごとに有智無智を嫌はず、一同に他事を捨てて南無妙法蓮華經と唱ふべし。此の事いまだ弘まらず、一閻浮提の内に佛滅後二

欽明—日本に初めて佛法渡りし時

小野寺—藥師寺

殺したるものなり。鬼を殺すにも過ぐべしと罵りき。又妙樂大師の時、月氏より法相眞言わたり、漢土に華嚴宗の始りたりしを、兎角責めしかば、これも又騒ぎしなり。日本國には傳教大師が佛滅後一千八百年にあたりて出でさせ給ひ、天台の御釋を見て欽明より已來二百六十餘年が間の六宗を責め給ひしかば、在世の外道、漢土の道士日本に出現せりと謗ぜし上、佛滅後一千八百年が間、月氏、漢土、日本になかりし圓頓の大戒を立てんといふのみならず、西國の觀音寺の戒檀、東國下野の小野寺の戒檀、中國大和の國東大寺の戒檀は、同じく小乘臭糞の戒なり、瓦石のごとし。其を持つ法師等は野干猿猴等のごとしとありしかば、あら不思議や法師に似たる大蝗蟲國に出現せり、佛教の苗一時に失せなん。殷の紂、夏の桀、法師となりて日本に生まれたり。後周の宇文、唐の武宗二たび世に出現せり。佛法も但今失せぬべし、國も亡びなんと。大乘小乘の二類の法師出現せば、脩羅と帝釋と、項羽と高祖と、一國に並べるなるべし。諸人手をたゝき舌を震ふ。在世には佛と提婆が二の戒檀ありて若干の人々死にき。されば他宗には背くべし、我が師天台大師の立て給はざる圓頓の戒檀を立つべしといふ不思議さよ、あら恐しおそろしと罵りあへりき。されども經文分明にありしかば、叡山の大乘戒壇すでに立て

永平十年―佛法初めて支那に渡りし時
三藏人師―佛典翻譯の大家

にも記せられたり。又付法藏經には申すに及ばず。されども諸の小乘のものどもは用ひず、但理不盡に責めしなり。「如來現在猶多怨嫉況滅度後」の經文は、此の時にあたりて少し摘み知られけり。提婆菩薩の外道に殺され、師子尊者の頸を切られし、此の事をもつて思ひやらせ給へ。又佛滅後一千五百餘年にあたりて、月氏よりは東に漢土といふ國あり。陳隋の代に天台大師出世す。此の人の云はく、如來の聖教に大あり小あり顯あり密あり權あり實あり。迦葉阿難等は一向に小を弘め、馬鳴龍樹無著天親等は權大乘を弘めて、實大乘の法華經をば、或は但指を指して義を隱し、或は經の面を述べて始中終をのべず。或は迹門を述べて本門を顯さず。或は本迹あつて觀心なしといひしかば、南三北七の十流が末、數千萬人鬨をつくり嘲と笑ふ。世の末になるまゝに、不思議の法師も出現せり。時にあたりて我等を偏執するものはありとも、後漢の永平十年丁卯の歲より、今陳隋に至るまでの三藏人師二百六十餘人を、物も知らずと申す上、謗法の者なり惡道に墮つるといふ者出來せり。あまりの物狂はしさに、法華經を持て來り給へる羅什三藏をも、もの知らぬ者と申す也。漢土はさても置け、月氏の大論師龍樹天親等の數百人の四依の菩薩も、いまだ實義をのべ給はずといふなり。此を殺したらん人は、鷹を

苦空無常無我—この世は苦なり空なり無常なり無我なりといふ小乘の教

永觀、法然が日本國を皆阿彌陀佛になしたるがごとく、すゝめ給はざりけるやらん。答へて云はく、此の難は古の難なり。今始めたるにはあらず。馬鳴、龍樹菩薩等は、佛の滅後六百年七百年等の大論師なり。此の人々世に出でて大乘經を弘通せしかば、諸々の小乘の者疑うて云はく、迦葉阿難等は佛の滅後二十年四十年住壽し給ひて、正法を弘め給ひしは、如來一代の肝心をこそ弘通し給ひしか。而るに此の人々は、但苦空無常無我の法門をこそ詮とし給ひしに、今馬鳴、龍樹等賢しといふとも、迦葉、阿難等には過ぐべからず、是一。迦葉は佛に値ひまゐらせて解を得たる人なり。此の人々は佛にあひたてまつらず、是二。外道は常樂我淨と立てしを、佛世に出でさせ給ひて苦空無常無我と說かせ給ひき。此のものどもは常樂我淨といへり。されば佛も御入滅なり、又迦葉等もかくれさせ給ひぬれば、第六天の魔王が此のものどもが身に入りかはりて佛法を破り外道の法となさんとするなり。されば佛法の敵をば頭をわれ、首をきれ、命を斷て、食を止めよ、國を追へと、諸の小乘の人々申せしかども、馬鳴龍樹等は但一二人なり、晝夜に惡口の聲をきき、朝暮に杖木を蒙りしなり。而れども此の二人は佛の御使ぞかし。正しく摩耶經には六百年に馬鳴出で、七百年に龍樹出でんと說かれて候ふ。其の上楞伽經等

うと、久遠實成の釋迦佛なし。例せば華咲いて菓ならず、雷なつて雨ふらず、鼓あつて音なし。眼あつて物をみず、女人あつて子を生まず、人あつて命なし、又神なし。大日の眞言、藥師の眞言、阿彌陀の眞言、觀音の眞言等又かくのごとし。彼の經經にしては、大王須彌山日月良藥如意珠利劍等のやうなれども、法華經の題目に對すれは、雲泥の勝劣なるのみならず、皆各々當體の自用を失ふ。例せば衆星の光の、一の日輪に奪はれ、諸々の鐵の一の磁石に値うて利精の盡き、大劍の小火に値うて用を失ひ、牛乳驢乳等の師子王の乳に値うて水となり、衆狐が術、一犬に値うて失ひ、狗犬が小虎に値うて色を變ずるがごとし。南妙無法蓮華經と申せば、南無阿彌陀佛の用も、南無大日眞言の用も、觀世音菩薩の用も、一切の諸佛諸經諸菩薩の用、皆悉く妙法蓮華經の用に失はる。彼の經經は妙法蓮華經の用を借ずば、皆徒物なるべし。當時眼前の理なり。日蓮が南無妙法蓮華經と弘むれば、南無阿彌陀經の用は月の缺くるがごとく、鹽の干るがごとく、秋冬の草の枯るゝがごとく、氷の日天に解くるが如くなり行くを見よ。

問うて云はく、此の法寶にいみじくば、など迦葉、阿難、馬鳴、龍樹、無著、天親、南岳、天台、妙樂、傳敎等は、善導が南無阿彌陀佛と勸めて漢土に弘通せしがごとく、慧心、

靈山にまのあたり聞召してありし天台大師は、

如是者所聞法體也等云云。

章安大師の云はく、

記者釋曰。蓋序王者。叙經玄意。述於文心等云云。

此の釋に、文心とは題目は法華經の心也。妙樂大師云はく、

收一代教法。出法華文心等云云。

天竺は七十箇國なり、摠名は月氏國。日本は六十箇國、摠名は日本國。月氏の名の内に七十箇國乃至人畜珍寶みなあり。日本と申す名の内に六十六箇國あり。出羽の羽も奥州の金も、乃至國の珍寶人畜乃至寺塔も神社も、みな日本と申す二字の名の内に攝れり。天眼をもつては、日本と申す二字を見て六十六國乃至人畜等を見るべし。法眼をもつては人畜等の此に死し彼に生るゝをも見るべし。譬へば人の聲をきいて體をしり、跡を見て大小を知る。蓮をみて池の大小を計り、雨をみて龍の分齊を勘ふ。これはみな一に一切の有る理なり。阿含經の題目には、大旨一切はあるやうなれども、但小釋迦一佛ありて他佛なし。華嚴經、觀經、大日經等には、又一切有るやうなれども、二乘を佛になすや

結集—弟子衆集りて佛說の復習會をなせしこと

藥は命をのべ、凡藥は病を癒せども命をのべず。

疑うて云はく、二十八品の中に何か肝心ぞや。

答へて云はく、或は云はく、品品皆事に隨ひて肝心なり。或は云はく、方便品壽量品肝心なり。或は云はく、方便品肝心なり。或は云はく、壽量品肝心なり。或は云はく、開示悟入肝心なり。或は云はく、實相肝心なり。

問うて云はく、汝が心如何。

答ふ。南無妙法蓮華經肝心なり。其の證如何。阿難文殊等如是我聞等云々。

問うて曰はく、心如何。

答へて云はく、阿難と文殊とは八年が間、此の法華經の無量の義を一句一偈一字も殘さず聽聞してありしが、佛の滅後に結集の時九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしに、妙法蓮華經と書かせて如是我聞と唱へさせ給ひしは、妙法蓮華經の五字は、一部八卷二十八品の肝心にあらずや。されば過去の燈明佛の時より、法華經を講ぜし光宅寺の法雲法師は、

如是者將レ傳二所聞一前題擧二一部一也等云云。

知らぬ者の唱ふると齊等なりや。淺深の功德差別せりや。
答へて云はく、淺深等あり。
疑うて云はく、其の心如何。
答へて云はく、小河は露と涓と井と渠と江とをば收むれども、大河を收めず。大河は露乃至小河を攝むれども大海を攝めず。阿含經は井江等露涓ををさめたる小河のごとし。方等經阿彌陀經大日經華嚴經等は、小河を攝むる大河なり。法華經は露、涓、井、江、小河、大河、天雨等の一切の水を一渧も洩らさぬ大海なり。譬へば身の熱者の大寒水の邊に寢ねつればすゞしく、小水の邊に臥しぬれば苦しきがごとし。五逆謗法の大一闡提人、阿含、華嚴、觀經、大日經等の小水の邊にては、大罪の大熱散じがたし。法華經の大雪山の上に臥しぬれば、五逆誹謗一闡提等の大熱忽ちに散ずべし。されば愚者は必ず法華經を信ずべし。各々經經の題目は易き事同じといへども、愚者と智者との唱ふる功德は天地雲泥なり。譬へば大綱は大力も切りがたし。小力なれども、小刀をもて容易くこれを切る。譬へば堅石をば鈍刀をもては大力も破りがたし、利劍をもてば小力も破りぬべし。譬へば藥は知らねども服すれば病止みぬ。食は服せども病やまず。譬へば仙

にておはします。勤操僧正、行表僧正の傳教大師の御師たりしが、かへりて御弟子とならせ給ひしがごとし。日蓮が景信にあだまれて、清澄山を出でしに、追ひて忍び出でられたりしは、天下第一の法華經の奉公なり。後生は疑おぼすべからず。

問うて云はく、法華經一部八卷二十八品の中に何物か肝心なる。

答へて云はく、華嚴經の肝心は大方廣佛華嚴經、阿含經の肝心は佛說中阿含經、大集經の肝心は大方等大集經、般若經の肝心は摩訶般若波羅蜜經、雙觀經の肝心は佛說無量壽經、觀經の肝心は佛說觀無量壽經、阿彌陀經の肝心は佛說阿彌陀經、涅槃經の肝心は大般涅槃經。かくのごとくの一切經は、皆、如是我聞の上の題目其の經の肝心なり。大は大につけ、小は小につけて題目をもて肝心とす。大日經、金剛頂經、蘇悉地經等亦復かくのごとし。佛又かくのごとし。大日如來、日月燈明佛、燃燈佛、大通佛、雲雷音王佛、是等も又名の內に其の佛の種々の德を具へたり。今の法華經も亦もつてかくのごとし。如是我聞の上の妙法蓮華經の五字は卽ち一部八卷の肝心、亦復一切經の肝心、一切の諸佛菩薩二乘天人脩羅龍神等の頂上の正法なり。

問うて云はく、南無妙法蓮華經と心も知らぬ者の唱ふると、南無大方廣佛華嚴經と心も

ちぬ。大覺世尊の御子なれども、善星比丘は阿鼻地獄へ墮ちぬ。これは力のまや救はんと思せども、自業自得果の邊は救ひがたし。故道善房はいたふ弟子なれば、日蓮をば惡しとは覺せざりけるらめども、きはめて臆病なりし上、清澄を離れじと執せし人なり。地頭景信が恐しといひ、提婆、瞿伽利に異ならぬ圓智、實城が、上と下とに居て脅せしを、強に畏れて愛しと思ふ年ごろの弟子等をだにも、捨てられし人なれば、後生はいかんがと疑ふ。但一の冥加には、景信と圓智、實城とが先に逝きしこそ一のたすかりとは思へども、彼等は法華經の十羅刹の責を蒙りて早く失せぬ。後にすこし信ぜられてありしは、爭の後の棒なり。晝の燈なにかせん。其の上いかなる事あれども、子弟子なんどいふ者は不便なる者ぞかし。力なき人にもあらざりしが、佐渡の國まで行きしに、一度も訪はれざりし事は、信じたるにはあらぬぞかし。それに附けても、あさましければ、彼の人の御死去と聞くには、火にも入り水にも沈み、走り立ちても行いて、御墓をも叩いて、經をも一巻讀誦せんとこそ思へども、賢人のならひ、心には遁世とは思はねども、人は遁世とこそ思ふらんに、故もなく走り出づるならば、末も通らずと人思ふべし。されば、いかに思ふともまゐるべきにあらず。但し各々二人は、日蓮が幼少の師匠

故道善房―清澄寺の僧、日蓮幼時の師

の大事、日本國を失はんと咒咀する法師なり。故最明寺殿極樂寺殿を無間地獄に墮ちたりと申す法師なり、御尋ねあるまでもなし、但須臾に頸を召せ、弟子等をば又或は頸を切り或は遠國につかはし、或は籠に入れよと、尼御前たち怒らせ給ひしかば、そのまゝ行はれけり。去ぬる文永八年辛未九月十二日の夜は、相摸の國龍の口にて切らるべかりしが、如何にしてやありけん其の夜は延びて、依智といふ所へつきぬ。又十三日の夜は許りたりと多口めきしが、又いかにやありけん、佐渡の國まで行く。今日切る明日切るといひしほどに、四箇年といふに、結句は去ぬる文永十一年太藏甲戌二月の十四日に許りて、同じき三月二十六日に鎌倉へ入り、同じき四月の八日平の左衛門の尉に見參してやうやうの事申したりし中に、今年に蒙古は一定寄すべしと申しぬ。同じき五月の十二日に鎌倉を出でて此の山に入れり。これはひとへに父母の恩、師匠の恩、三寶の恩、國恩を報ぜんがために、身を破り命を捨つれども、破れざればさてこそ候へ。又賢人の習、三度國を諫むるに用ひずば、山林に交れといふことは、定る例なり。此の功德は定めて上三寶、下梵天帝釋日月までも知召しぬらん。父母も故道善房の聖靈も扶かり給ふらん。但疑ひ念ふことあり。目連尊者は扶けんと思ひしかども、母の青提女は餓鬼道に墮

羅云ー釋尊在俗の時の御子、羅睺羅尊者
魏徴ー唐太宗の忠臣
忠仁公ー藤原良房

流されぬ。又同じき弘長三年癸亥二月二十二日に許りぬ。其の後彌菩提心強盛にして申せば、いよ〳〵大難かさなる事、大風に大波の起るがごとし。昔の不輕菩薩の杖木の責も我が身に摘み知られたり。覺德比丘が歡喜佛の末の大難も、此には及ばじと覺ゆ。日本六十六箇國、島二の中に、一日片時も何の所に住むべきやうもなし。古は二百五十戒を持ちて、忍辱なる事羅云のごとくなる持戒の聖人も、富樓那のごとくなる智者も、日蓮に値ひぬれば惡口を吐く。正直にして、魏徴、忠仁公のごとくなる賢者等も、日蓮を見ては理をまげて非と行ふ。いはうや世間の常の人々は、犬の猿を見たるがごとく、獵師が鹿を籠めたるに似たり。日本國の中に一人として、故こそあるらめといふ人なし。道理なり。人ごとに念佛を申す。人に向ふごとに念佛は無間に墮つるといふゆゑに。人ごとに眞言を尊む。眞言は國を亡す惡法といふ。國主は禪宗を尊む。日蓮は天魔の所爲といふゆゑに。我と招ける禍なれば、人の罵るをもとがめず、咎むとても一人ならず。打つをも痛まず、本より存ぜしがゆゑに。斯ういよ〳〵身も惜まず責めしかば、禪僧數百人、念佛者數千人、眞言師百千人も、或は奉行につき、或は權家に附き、或は權女房につき、或は後家尼御前等について、無盡の讒言をなせし程に、最後には天下第一

御室—仁和寺の法親王
天童—寵愛の稚兒名は勢多伽

大神、正八幡、山王、加茂、春日等に、數年が間或は調伏或は神に申させ給ひしに、二日三日だにも支へかねて、佐渡國、阿波國、隱岐國等にながし失せて、終に隱れさせ給ひぬ。調伏の上首御室は、但東寺をかへらるゝのみならず、眼のごとく愛せさせ給ひし第一の天童勢多伽が頸切られたりしかば、調伏のしるし還著於本人のゆゑとこそ見えて候へ。これはわづかの事なり。此の後定んで日本の國臣萬民一人もなく乾草を積みて火を放つがごとく、大山の崩れて谷をうむるがごとく、我が國他國に攻めらるゝ事出來すべし。此の事日本國の中に、但日蓮一人計り知れり。いひ出すならば殷の紂王の比干が耳をさきしがごとく、夏の桀王の龍逢が頸を切りしがごとく、檀彌羅王の師子尊者が頸を刎ねしがごとく、竺の道生が流されしがごとく、法道三藏の火印を燒かれしがごとく、ならんずらんとは、かねて知りしかども、法華經には「我不レ愛二身命一但惜二無上道一」と說かれ、涅槃經には「寧喪二身命一不レ匿二教者一」といさめ給へり。今度命を惜むならばいつの世にか佛になるべき。又何なる世にか父母師匠をも救ひ奉るべきと、ひとへに思ひ切りて申し始めしかば、案にたがはず、或は所を逐ひ、或は罵り、或は打たれ、或は疵を蒙るほどに、去ぬる弘長元年辛酉五月十二日に、御勘氣をかうぶりて伊豆の國伊東に

三鈷の事—空海が支那にてわが法の興るべき處に止まれとて空中に投ぜし傳說

又六の卷に云はく、

佛告迦葉。我般涅槃。乃至後。是魔波旬漸當沮壞我之正法。乃至化作阿羅漢身及佛色身。魔王以此有漏之形。作無漏身。壞我正法等云云。

弘法大師は法華經を華嚴經大日經に對して戲論等云々。而も佛身を現ず。此涅槃經には、魔、有漏の形をもつて佛となつて我が正法をやぶらんと記し給ふ。涅槃經の正法は法華經なり。故に經の次下の文に云はく、久しく已に成佛す。又云はく、法華の中の如し等云云。釋迦多寶十方の諸佛は、一切經に對して法華經は眞實、大日經等の一切經は不眞實等云々。弘法大師は佛身を現じて、華嚴經大日經に對して法華經は戲論等云々。佛說まことならば、弘法は天魔にあらずや。又三鈷の事殊に不審なり。漢土の人の日本に來りて掘り出すとも信じがたし。已前に人をや遣して埋みけん。いはうや弘法は日本の人、かかる誑亂其の數多し。此等をもつて佛意に叶ふ人の證據とは知りがたし。されば此の眞言禪宗念佛等漸く斯うなり來る程に、人王八十二代尊成、隱岐の法皇、權の太夫殿を失はんと年ごろ勵ませ給ひけるゆゑに、國主なれば何となくとも師子王の兎を伏するがごとく、鷹の雉を取るやうにこそあるべかりし上、叡山、東寺、園城、奈良七大寺、天照

眞言瑜伽宗。祕密曼荼羅。從二彼時一而建立矣等云云。

此の筆は傳教義眞の御存生かと見ゆ。弘法は平城天皇大同二年より弘仁十三年までは盛に眞言を弘めし人なり。其の時は此の二人現におはします。又義眞は天長十年まではおはせしかば、其の時まで弘法の眞言は弘まらざりけるか。かたぐ\不審あり。孔雀經の疏は弘法の弟子眞濟が自記なり、信じがたし。又邪見者が公家諸家圓澄の記を引かるべきか。又道昌、源仁、道雄の記を尋ぬべし。

面門俄開。成二金色毘盧遮那一等云云。

面門とは口なり。口の開けたりけるか。眉間開くと書かんとしけるが悞りて面門と書けるか。謀書をつくる故にかゝるあやまりあるか。

大師結二智拳印一向二南方一面門俄成二金色毘盧遮那一等云云。

涅槃經の五に云はく、

迦葉白レ佛言。世尊我今不レ依二是四種人一。何以故。如二瞿師羅經中一。佛爲二瞿師羅一說。若天魔梵爲レ欲二破壞一。變爲二佛像一。具二足莊嚴三十二相八十種好一。圓光一尋。面部圓滿。猶二月盛明一。眉間毫相白踰二珂雪一。乃至左脇出レ水。右脇出レ火等云云。

建元―漢武帝の年號
大寶―文武天皇の年號
緇素―僧俗

等の日記あるならば、すこし信ずる邊もや。次下に、

昔予陪㆓鷲峰説法之筵㆒親聞㆓其深文㆒等云云。

此の筆を人に信ぜさせしめんがために構へ出す大妄語か。されば靈山にして法華は戲論、大日經は眞實と佛の説き給ひけるを、阿難文殊が悞りて妙法華經をば眞實と書けるかいかん。いふに甲斐なき婬女破戒の法師等が、歌をよみて雨す雨を、三七日まで下さざりし人はかゝる德あるべしや、是四。孔雀經の音義に云はく、

大師結㆓智拳印㆒向㆓南方㆒面門俄開。成㆓金色毘盧遮那㆒等云云。

此又何の王何の年時ぞ。漢土には建元を初とし、日本には大寶を初として緇素の日記大事には必ず年號のあるが、これほどの大事に、いかでか王も臣も年號も日時もなきや。又次に云はく、三論の道昌、法相の源仁、華嚴の道雄、天台の圓澄等云々。抑圓澄は寂光大師、天台第二の座主なり。其の時何ぞ第一の座主義眞、根本の傳敎大師をば召さざりけるや。圓澄は天台第二の座主、傳敎大師の御弟子なれども、又弘法大師の弟子なり。弟子を召さんよりは、三論法相華嚴よりは、天台の傳敎義眞の二人を召すべかりけるか。而も此の日記に云はく、

花を感ぜし―說法の感應によりて夫より花を降せしこと

三皇―伏犧、神農、黃帝

五帝―少昊、顓頊、高辛、唐堯、虞舜

三墳五典―三皇五帝の書、其名不詳

そ釋せられて候へ。光宅が忽ちに雨を下し、須臾に花を感ぜしをも、妙樂は感應かくの若くなれども猶理に稱はずとこそ書かれて候へ。されば天台大師の法華經をよみて須臾に甘雨を下らせ、傳教大師の三日が内に甘露の雨をふらしておはせしも、其をもつて佛意に叶ふとは仰せられず。弘法大師いかなる德ましますとも、法華經を戲論の法と定め、釋迦佛を無明の邊域と書かせ給へる御筆は、智慧かしこからん人は用ふべからず。いかにいはうや、上にあげられて候ふ德どもは不審ある事なり。弘仁九年の春天下大疫等云云。春は九十日、何の月何の日ぞ、是一。又弘仁九年には大疫ありけるか、是二。又夜變じて日光赫々たりと云々。此の事第一の大事なり。弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり。左史右史の記に載せたりや、是三。設ひ載せたりとも信じがたき事なり。成劫二十劫、住劫九劫、已上二十九劫が間にいまだ無き天變也。夜中に日輪の出現せる事如何。又如來一代の聖教にも見えず。未來に夜中に日輪出づべしとは三皇五帝の三墳五典にも載せず。佛經のごときんば、減劫にこそ二の日三の日乃至七の日は出づべしとは見えたれども、かれは晝のことぞかし。夜、日出現せば東西北の三方は如何。設ひ内外の典に記せずとも、現に弘仁九年の春、何の月、何の日、何の夜の、何の時に、日出づるといふ、公家諸家叡山

又云はく、

此時諸宗學徒。歸ニ大師一始得ニ眞言一。請益習學。三論道昌。法相源仁。華嚴道雄。天台圓澄等皆其類也。

弘法大師の傳に云はく、

歸朝泛舟之日。發願云。我所學教法。若有ニ感應之地一者。此三鈷可レ到ニ其處一。仍向ニ日本方一抛ニ上三鈷一。遙飛入レ雲。十月歸朝云云。

又云はく、

高野山下。占ニ入定所一乃至彼海上之三鈷。今新在レ此等云云。

此の大師の德無量なり。其の兩三を示す。かくのごとくの大德あり。いかんが此の人を信ぜずして却りて阿鼻地獄に墮つるといはんや。

答へて云はく、予も仰いで信じ奉る事かくのごとし。但古の人々も不可思議の德ありしかども、佛法の邪正は其にはよらず。外道が或は恒河を耳に十二年留め、或は大海を吸ひ干し、或は日月を手ににぎり、或は釋子を牛羊となしなんどせしかども、いよいよ大慢を起して生死の業とこそなりしか。此をば天台云はく、名利を邀め見愛を增すとこ

黃金云々—紺紙金泥の經文を書寫し給へること

毘盧遮那—法身佛、弘法大師卽身に佛の姿となりしこと

法華經と善導とは水火也。善導は觀經をば十卽十生百卽百生。無量義經に云はく、觀經は未だ眞實を顯さず等云々。無量義經と楊柳房とは天地也。此を阿彌陀佛の僧と成りて來つて眞なりと證せば、あに眞事ならんや。抑阿彌陀は法華經の座に來りて、舌をば出し給はざりけるか。觀音勢至は法華經の座にはなかりけるか。此をもて思へ。慈覺大師の御夢は禍なり。

問うて云はく、弘法大師の心經の秘鍵に云はく、

于時弘仁九年春。天下大疫。爰皇帝自染黃金於筆端。握紺紙於爪掌。奉書寫般若心經一卷。予範講讀之撰。綴經旨之宗。未吐結願之詞。蘇生之族佇途。夜變而日光赫赫。是非愚身戒德。金輪御信力所爲也。但詣神舍輩。奉誦此秘鍵。昔予陪鷲峰說法之筵。親聞其深文。豈不達其義而已等云云。

又孔雀經の音義に云はく、

弘法大師歸朝之後。欲立眞言宗。諸宗群集朝廷矣。疑卽身成佛義。大師結智拳印向南方。面門俄開成金色毘盧遮那。卽便還歸本體。入我我入之事。卽身頓證之疑。此日釋然。然眞言瑜伽宗。秘密曼荼羅道。從彼時而建立矣。

第九の減―人の壽命が十歳と八萬四千歳との間を上下する中に九度目の減壽の時

其の矢かへりて我が眼にたつ。殷の紂王は日天を的に射て身を亡す。日本の神武天皇の御時、度美長と五瀬命と合戰ありしに、命の手に矢たつ。命の云はく、我はこれ日天の子孫なり、日に向ひ奉りて弓をひくゆゑに、日天の責を蒙れりと云々。阿闍世王は佛に歸しまゐらせて內裏に返りて、御寢なりしが、驚いて諸臣に向つて云はく、日輪天より地に落つと夢にみる。諸臣の云はく、佛の御入滅か云々。須跋陀羅が夢又かくのごとし。我が國は殊に忌むべき夢なり。神をば天照といふ。國をば日本といふ。又教主釋尊をば日種と申す。摩耶夫人日を孕むとゆめに見てまうけ給へる太子なり。慈覺大師は大日如來を叡山に立て、釋迦佛をすて眞言の三部經をあがめて、法華經の三部の敵となりし故に、此の夢出現せり。例せば、漢土の善導が始は密州の明勝といひし者に値うて法華經をよみたりしが、後には道綽に値うて法華經を捨て觀經に依りて疏をつくり、法華經をば千中無一、念佛をば十卽十生百卽百生と定めて、此の義を成ぜんがために、阿彌陀佛の御前にして祈誓をなす。佛意に叶ふやいなや、毎夜夢の中に常に一の僧あり、而も來りて指授すと云々。乃至一經法の如くせよ、乃至觀念法門經等云々。法華經には、若有㆓聞㆑法者㆒。無㆓一不㆑成佛㆒。善導千中無㆑一等云云。

成劫—この世界の次第に出來上る間の長時
住劫—世界出來上りたる今のところ

月卿の宿所一所もあるべしとも見えざりしかば、天子大に驚きて宣旨なりて風を止めよ。且くありては又吹き又吹きせしほどに、數日が間止むことなし。結句は使をつけて追うてこそ風も止みてありしか。此の三人の惡風は漢土日本の一切の眞言師の大風なり。然にてあるやらん、去ぬる文永十一年四月十二日の大風は、阿彌陀堂加賀法印東寺第一の智者の雨の祈に吹きたりし逆風なり。善無畏金剛智不空の惡法を少しも違へず傳へたりけるか。心にくし心にくし。弘法大師は去ぬる天長元年の二月大旱魃のありしに、先には守敏祈雨して、七日が内に雨を下す。但京中にふりて田舍に注がず。次に弘法承取りて一七日に雨氣なし、二七日に雲なし、三七日と申せしに、天子より和氣の眞綱を使者として、御幣を神泉苑にまゐらせたりしかば、雨下る事三日。此をば弘法大師並に弟子等此の雨を奪ひとり、我が雨として今に四百餘年、弘法の雨といふ。慈覺大師の夢に日輪を射しと。弘法大師の大妄語に云はく、弘仁九年の春大疫を祈りしかば、夜中に大日輪出現せりと云々。成劫より已來住劫の第九の減已上二十九劫が間に、日輪夜中に出でしといふ事なし。慈覺大師は夢に日輪を射るといふ。內典五千七千、外典三千餘卷に、日輪を射るとゆめにみるは吉夢といふ事有りやいなや。脩羅は帝釋をあだみて日天をい奉る。

り等云々。人死して後色の黒きは地獄の業と定むる事は佛陀の金言ぞかし。善無畏三藏の地獄の業はなに事ぞ。幼少にして位を捨てぬ、第一の道心なり。月氏五十餘箇國を修行せり。慈悲の餘りに漢土に渡れり。天竺、震旦、日本、一閻浮提の內に眞言を傳へ、鈴をふる、此の人の德にあらずや。いかにして地獄に墮ちけると、後生を思はん人々は御尋ねあるべし。又金剛智三藏は南天竺の大王の太子也。金剛頂經を漢土にわたす、其の德善無畏のごとし。又互に師となれり。而るに金剛智三藏勅宣によつて雨の祈ありしかば、七日が中に雨下る。天子大に悅ばせ給ふほどに、忽ちに大風吹き來る。王臣等興覺め給ひて、使をつけて追はせ給ひしかども、とかう述べて留りし也。結句は姬宮の御死去ありしに、祈をなすべしとて、身の代に殿上の二の女子七歲になりしを、薪につみこめて燒き殺せし事こそ無慘には覺ゆれ。而れども姬宮も生きかへり給はず。不空三藏は金剛智と月支より御供せり。此等の事を不審とや思ひけん、畏と智と入滅の後、月氏に還りて龍智に値ひ奉り、眞言を習ひ直し、天台宗に歸伏してありしが、心計りは歸れども身はかへる事なし。雨の御祈うけ給りたりしが、三日と申すに雨下る。天子悅ばせ給ひて、我と御布施ひかせ給ふ。須臾ありしかば大風落ち下りて內裏をも吹きやぶり、雲閣

玄宗ー唐第六代

遺形ー遺骸、死體なり

受け、百千の石の塔を立てしかば、法華經の行者とこそみえしか。しかれども大日經を習ひしよりこのかた、法華經を大日經に劣るとや思ひけん。始はいたう其の義もなかりけるが、漢土にわたりて玄宗皇帝の師となりぬ。天台宗をそねみ思ふ心つき給ひけるかのゆゑに、忽に頓死して二人の獄卒に鐵の繩七つけられて閻魔王宮にいたりぬ。命いまだ盡きずといひて還されしに、法華經謗法とや思ひけん、眞言の觀念、印、眞言等をば投げ捨てて、法華經の「今此三界」の文を唱へて繩も切れかへされ給ひぬ。又雨の祈をおほせ付けられたりしに、忽ちに雨は下りたりしかども、大風吹きて國をやぶる。結句死し給ひてありしには、弟子等集りて臨終いみじきやうを讃めしかども、無間大城に墮ちにき。

問うて云はく、何をもつてかこれを知る。

答へて云はく、彼の傳を見るに云はく、

今觀二畏之遺形一。漸加縮小。黑皮隱隱。骨其露焉等云云。

彼の弟子等は死後に地獄の相の顯れたるを知らずして、德をあぐなど思へども、書きあらはせる筆は畏が失を書けり。死してありければ身やうやく縮り小く皮は黑し、骨露な

五體―頭と兩手兩足

ならば、重罪きえがたし、いはうやひるがへる心なし。又法華經を失ひ、眞言敎を晝夜に行ひ、朝暮に傳法せしをや。世親菩薩、馬鳴菩薩は小をもて大を破せる罪をば、舌を切らんとこそせしか。世親菩薩は、佛說なれども阿含經をば戲にも舌の上に置かじとちかひ、馬鳴菩薩は懺悔のために起信論をつくりて小乘をやぶり給ひき。嘉祥大師は天台大師を請じ奉りて、百餘人の智者の前にして、五體を地になげ、徧身に汗をながし、紅の涙をながして、今よりは弟子を見じ、法華經を講ぜじ、弟子の面を守り法華經を讀みたてまつれば、我が力の此の經を知るに似たりとて、天台よりも高僧老僧にておはせしが、わざと人の見る時負ひまゐらせて河を越え、高座に近づきて背にのせまゐらせて高座に上せたてまつり、結句御臨終の後には、隋の皇帝に參らせて、小兒が母に後れたるがごとくに足をすりて泣き給ひしなり。嘉祥大師の法華玄を見るに、いたう法華經を謗したる疏にはあらず。但法華經と諸大乘經とは、門は淺深あれども心は一とかきてこそ候へ。此が謗法の根本にて候か。華嚴の澄觀も、眞言の善無畏も、大日經と法華經とは理は一とこそ書かれて候へ。嘉祥科あらば善無畏三藏も脫れがたし。されば善無畏三藏は中天の國主なり、位をすてて他國にいたり、殊勝・招提の二人にあひて、法華經を

嘉祥大師―嘉祥寺の吉藏、三論宗の高僧

法華經を劣るとよむは彼彼の經經の心には背くべし。此をもつて知るべし、法華經を讀む人の此の經をば信ずるやうなれども、諸經にても得道成ると思うは、此の經をよまぬ人なり。例せば嘉祥大師は法華玄と申す文十卷造りて法華經を讚めしかども、妙樂かれを責めて云はく、

毀在其中何成弘讚等云云。

法華經をやぶる人なり。されば嘉祥は落ちて天台に仕へて法華經を讀まず、我經をよむならば惡道免れがたしとて、七年まで身を橋とし給ひき。慈恩大師は玄贊と申して、法華經をはむる文十卷あり。傳教大師責めて云はく、

雖讚法華經還死法華心等云云。

此等をもつて思ふに、法華經をよみ讚歎する人々の中に、無間地獄は多く有るなり。嘉祥慈恩すでに一乘誹謗の人ぞかし、弘法、慈覺、智證あに法華經蔑如の人にあらずや。嘉祥大師のごとく、講を廢し衆を散じて身を橋となせしも、猶や已前の法華經誹謗の罪や消えざるらん。不輕輕毀の者は不輕菩薩に信伏隨從せしかども、重罪いまだ殘りて千劫阿鼻に墮ちぬ。されば弘法、慈覺、智證等は設ひ飜す心ありとも、尚法華經を讀む

天地せり―非常の違あること

此の經文は予が肝に染みぬ。當世日本國には我も法華經を信じたり。諸人の語のごときんば、一人も謗法の者なし。此の經文には、末法に謗法の者十方の地土、正法の者爪上の土等云々。經文と世間とは水火なり。世間の人云はく、日本國には日蓮一人計り謗法の者等云々。又經文には天地せり。法滅盡經には善者一二人、涅槃經には信者爪上土等云々。經文のごとくならば、日本國は但日蓮一人こそ爪上土、一二人にては候へ。經文をか用ふべき、世間をか用ふべき。

問うて云はく、涅槃經の文には、涅槃經の行者は爪上の土等云々。汝が義には法華經等云々如何。

答へて云はく、涅槃經に云はく「如法華中」等云々。妙樂大師云はく、「大經自指法華爲極」等云々。大經と申すは涅槃經也、涅槃經には法華經を極と指して候ふなり。而るを涅槃宗の人の、涅槃經を法華經に勝ると申せしは、主を所從といひ、下郎を上郎といひし人なり。涅槃經を讀むと申すは法華經をよむを申すなり。譬へば賢人は國主を重んずる者をば、我を下ぐれども悅ぶなり。涅槃經は法華經を下げて我を譽むる人をば、あながちに敵と惡ませ給ふ。此の例をもつて知るべし、華嚴經觀經大日經等を讀む人も、

又云はく、

時王見已。即嚴四兵。發向彼國。欲爲討罰。我等爾時當與眷屬無量無邊藥叉諸神。各隱形爲作護助。令彼怨敵自然降伏。等云云。

最勝王經の文又かくのごとし。大集經云々、仁王經云々、此等の經文のごときんば、正法を行ずるものを國主あだみ、邪法を行ずる者の方人せば、大梵天王帝釋日月四天等、隣國の賢王の身に入りかはりて其の國を攻むべしと見ゆ。例せば訖利多王を雪山下王のせめ、大族王を幻日王の失ひしがごとし。訖利多王と大族王とは、月氏の佛法を失ひし王ぞかし。漢土にも佛法を亡しし王、みな賢王に攻められぬ。これは彼には似るべくもなし。佛法の方人なるやうにて佛法を失ふ法師の方人をするゆゑに、愚者はすべて知らず、智者なんども常の智人は知りがたし。天も下劣の天人は知らずもやあるらん。されば漢土月氏の古の亂よりも大きなるべし。法滅盡經に云はく、

吾般泥洹後。五逆濁世魔道興盛。魔作沙門。壞亂吾道。乃至惡人轉多如海中沙。善者甚少。若一若二云云。涅槃經云、信如是等涅槃經典如抓上土。乃至不信是經如十方界所有地土等云云。

世東にー鎌倉幕府の世となりしこと

らば、俄に軍起り又大風ふかせ、他國より攻むべし等云々。去ぬる文永九年二月の同士いくさ、同じき十一年の四月の大風、同じき十月に大蒙古の來りしは、偏に日蓮がゆゑにあらずや。いはうや、前よりこれを勘へたり。誰の人か疑ふべき。弘法、慈覺、智證の悞、竝に禪宗と念佛宗との禍相起りて、逆風に大波起り、大地震の重なれるがごとし。さればやうやく國衰ふ。大政入道が國を押へ、承久に王位盡果てて、世東にうつりしかども、但國中のみだれにて、他國の攻はなかりき。彼は謗法の者は國に充滿せりといへども、支へ顯す智人なし。かるがゆゑに平なりき。譬へば師子の眠れるは、手をつけざれば吼えず。迅流は櫓をさゝへざれば波高からず、盗人は止めざれば怒らず、火は薪を加へざれば盛ならず。謗法はあれども顯す人なければ國も穩やかなるに似たり。例せば日本國に佛法わたりはじめて候ひしに、始は何事もなかりしかども、守屋佛をやき、僧をいましめ、堂塔を燒きしかば、天より火の雨ふり、國に疱瘡起り兵亂つゞきしがごとし。此はそれには似るべくもなし。謗法の人々も國に充滿せり。日蓮が大義も強く責めかゝる。脩羅と帝釋と佛と魔王との合戰にも劣るべからず。金光明經に云はく、

時隣國怨敵興二如レ是念一。當下具二四兵一壞中彼國土上等云云。

天も捨てぬ。天捨つれば舊き守護の善神も禿倉を燒いて寂光の都へかへり給ひぬ。但日蓮計り留り居て告げ示せば、國主これをあだみ、數百人の民に或は罵詈或は惡口或は杖木或は刀劍、或は宅々ごとに堰き、或は家々ごとに逐ふ。それに叶はねば、我と手をくだして二度まで流罪あり。去ぬる文永八年九月の十二日に頸を切らんとす。最勝王經に云はく、

由レ愛二敬惡人一。治二罰善人一故。他方怨賊來。國人遭二喪亂一等云云。

大集經に云はく、

若復有二諸刹利國王一。作二諸非法一惱二亂世尊聲聞弟子一。若以毀罵。刀杖打斫。又奪二衣鉢種種資具一。若他給施作二留難一者。我等令三彼自然卒二起他方怨敵一。及自國土。亦令二兵起病疫飢饉。非時風雨鬪諍言訟一。又令二其王不一レ久。復當レ亡二失己國一等云云。

此等の文のごときは、日蓮この國になくば、佛は大妄語の人、阿鼻地獄はいかで脫れ給ふべき。去ぬる文永八年九月十二日に、平の左衛門竝びに數百人に向うて云はく、日蓮は日本國の柱なり、日蓮を失ふほどならば、日本國の柱を倒すになりぬ等云々。此の經文に、智人を國主等若くは惡僧等が讒言により、若くは諸人の惡口によつて失にあつるな

廻心—誤を改めて正に向ふ心
展轉—それよりそれへと轉じ行く事

ひて、師の徳をあげて智慧にかへ、我が師の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり。又高野山に、本寺、傳法院といひし二の寺あり。本寺は弘法のたてたる大塔、大日如來なり。傳法院と申すは、正覺房の立てし金剛界の大日なり。此の本末の二寺、晝夜に合戰あり。例せば叡山園城のごとし。誑惑のつもりて、日本に二の禍の出現せるか。糞を集めて栴檀となせども、燒く時は但糞の香なり。大妄語を集めて佛と號すとも但無間大城なり。尼犍が塔は、數年が間利生廣大なりしかども、馬鳴菩薩の禮をうけて忽に崩れぬ。鬼辨婆羅門が帷は、多年人を誑らかせしかども、阿溼縛窶沙菩薩に責められて破れぬ。拘留外道は石となつて八百年、陳那菩薩に責められて水となりぬ。道士は漢土を誑らかすこと數百年、摩騰、竺蘭にせめられて仙經も燒けぬ。趙高が國をとりし、王莽が位を奪ひしがごとく、法華經の位を奪つて大日經の所領とせり。法王すでに國に失せぬ。人王あに安穩ならんや。日本國は慈覺智證弘法の流なり、一人として謗法ならざるはなし。但し事の心を案ずるに、大莊嚴佛の末、一切明王佛の末法のごとし。威音王佛の末法には改悔ありしすら、猶千劫阿鼻地獄に墮つ。いかにいはうや、日本國の眞言師禪宗念佛者等は、一分の廻心なし。「如是展轉至無數劫」疑なきものか。かゝる謗法の國なれば、

蝙蝠云々—以下弟子の如くにて弟子にあらぬ者の譬

十八道—眞言の修行の一

給へども、法門は全く御弟子にはあらず。而れども圓頓の戒計りは又御弟子に似たり。蝙蝠鳥のごとし、鳥にもあらず鼠にもあらず。梟鳥禽、破鏡獸のごとし。法華經の父を食ひ持者の母を噛めるなり。日を射ると夢に見しこれなり。されば死去の後は墓なくてやみぬ。智證の門家園城寺と、慈覺の門家叡山と、脩羅と惡龍と合戰ひまなし。園城寺を燒き叡山をやく。智證大師の本尊の慈氏菩薩もやけぬ。慈覺大師の本尊大講堂もやけぬ。現身に無間地獄を感ぜり。但中堂計り殘れり。弘法大師も又跡なし。弘法大師の云はく、東大寺の受戒せざらん者をば、東寺の長者とすべからず等、御いましめの狀あり。しかれども、寛平法王は仁和寺を建立して東寺の法師をうつして、我が寺には叡山の圓頓戒を持ざらん者をば住せしむべからずと宣旨分明なり。されば今の東寺の法師は、鑒眞が弟子にもあらず、弘法の弟子にもあらず。戒は傳敎の御弟子なり。又傳敎の御弟子にもあらず、傳敎の法華經を破失す。去ぬる承和二年三月二十一日に死去ありしかば、公家より遺體をば葬らせ給ひ、其の後誑惑の弟子等集りて御入定と云々。或は髮を剃りてまゐらするぞといひ、或は三鈷を漢土より投げたりといひ、或は日輪夜中に出でたりといひ、或は現身に大日如來となりといひ、或は傳敎大師に十八道を敎へまゐらせ給ふとい

涇渭—涇水と渭水との二河黄河に入る

兩部の大日如來を郎從等と定めたる多寶佛の上座に、敎主釋尊居せさせ給ふ。此即ち法華經の行者なり。天竺かくのごとし。漢土には陳帝の時、天台大師、南北にせめ勝ちて現身に大師となる。「特秀於群獨歩於唐」といふこれなり。日本國には傳敎大師六宗にせめかちて、日本の始第一の根本大師となり給ふ。月氏漢土日本に、但三人計りこそ「於一衆生中亦爲第一」にては候へ。されば秀句に云く、

淺易深難。釋迦所判。去淺就深。丈夫之心也。天台大師信順釋迦助法華宗敷揚震旦叡山一家相承天台助法華宗弘通日本等云云。

佛滅後一千八百餘年が間に、法華經の行者、漢土に一人、日本に一人、已上二人。釋尊を加へ奉りて已上三人なり。外典に云はく、聖人は一千年に一出で、賢人は五百年に一出づ。黄河は涇渭ながれをわけて五百年には半河すみ、千年には共に清むと申すは一定にて候ひけり。然るに日本國は叡山計りに、傳敎大師の御時、法華經の行者ましましけり。義眞圓澄は第一第二の座主なり。第一の義眞計り傳敎大師に似たり。第二の圓澄は半は傳敎の御弟子、半は弘法の弟子なり。第三の慈覺大師は始は傳敎大師の御弟子に似たり。御年四十にて漢土にわたりてより、名は傳敎の御弟子、其の跡をば繼がせ

胎藏界—理を以てこの宇宙を見たる名
金剛界—智を以てこの宇宙を見たる名

衆生中亦爲第一。

已上經文なりと引き入れさせ給ひて、次下に云はく、天台法華玄に云はく等云々。已上玄文と書かせ給ひて、上の心を釋して云はく、

當知他宗所依經。未最爲第一。其能持經者。亦未第一。天台法華宗所持法華經。最爲第一故。能持法華者。亦衆生中第一。已據佛說。豈自歎哉等云云。

次下に讓る釋に云はく、

委曲之依憑。具有別卷也等云云。

依憑集に云はく、

今吾天台大師。說法華經。釋法華經。特秀於群。獨步於唐。明知如來使也。讚者積福於安明。謗者開罪於無間等云云。

法華經、天台、妙樂、傳敎の經釋の心のごとくならば、今日本國には法華經の行者は一人もなきぞかし。月氏には敎主釋尊、寶塔品にして、一切の佛を集めさせ給ひて大地の上に居せしめ、大日如來計り寶塔の中の南の下座に据ゑ奉りて、敎主釋尊は北の上座につかせ給ひ、此の大日如來は大日經の胎藏界の大日、金剛頂經の金剛界の大日の主君なり。

宗は一人もなきなり。例せば法師と尼と黑と靑とは、まがひぬべければ、眼くらき人は過つぞかし。僧と男と白と赤とは、目くらき人も迷はず。いはうや眼あきらかなる者をや。慈覺智證の義は法師と尼と黑と靑とがごとくなるゆゑに、智人も迷ひ愚人もあやまり候ひて、此の四百餘年が間は、叡山、園城、東寺、奈良、五畿、七道、日本一州皆謗法の者となりぬ。抑法華經の第五に、

文殊師利此法華經。諸佛如來祕密之藏。於諸經中最在其上云云。

此の經文のごとくならば、法華經は大日經等の衆經の頂上に住し給ふ正法なり。さるにては善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等は此の經文をばいかんが會通せさせ給ふべき。法華經の第七に云はく、

有能受持是經典者。亦復如是。於一切衆生中亦爲第一等云云。

此の經文のごとくならば、法華經の行者は、川流江河の中の大海、衆山の中の須彌山、衆星の中の月天、衆明の中の大日天、轉輪王、帝釋、諸王の中の大梵王なり。傳教大師の秀句と申す書に云はく、

此經亦復如是。乃至諸經法中。最爲第一。有能受持是經典者。亦復如是。於一切

畏にては候へども、此を責めずば大日經法華經の勝劣破れなんと存じて、命を的にかけて責め候ふなり。此の二人の人々の弘法大師の邪義を責め候はざりけるは、最も道理にて候ひけるなり。されば粮米をつくし、人を煩はかして漢土へ渡らせ給はんよりは、本師傳教大師の御義をよく〳〵盡させ給ふべかりけるにや。されば叡山の佛法は、但傳教大師、義眞和尚、圓澄大師の三代計りにてやありけん。天台の座主すでに眞言の座主にうつりぬ。名と所領とは天台山、其の主は眞言師なり。されば慈覺大師智證大師は、已今當の經文を破らせ給ふ人なり。已今當の經文をやぶらせ給ふは、あに釋迦多寶十方の諸佛の怨敵にあらずや。弘法大師こそ第一の謗法の人と思ふに、これはそれには似るべくもなき僻事なり。其の故は水火天地なる事は僻事なれども、人用ふる事なければ、其の僻事成ずる事なし。弘法大師の御義は、あまり僻事なれば、弟子等も用ふる事なし。事相計りは其の門家なれども、其の教相の法門は弘法の義いひにくき故に、善無畏、金剛智、不空、慈覺、智證の義にてあるなり。慈覺智證の義こそ眞言と天台とは理同なりなんど申せば、皆人さもやと思ふ。かう思ふゆゑに、事勝の印と眞言とについて、天台宗の人々畫像木像の開眼の佛事をねらはんがために、日本一同に眞言宗におちて、天台

魯人｜おろかなるひと

豈非中國失法求之四維。而此方少有識者。如魯人耳等云云。

此の書は法相、三論、華嚴、眞言の四宗を責めて候ふ文也。天台眞言の二宗同一味ならば、いかでか責め候ふべき。而も不空三藏等をば魯人のごとしなんど書かれて候ふ。善無畏金剛智不空の眞言宗いみじくば、いかでか魯人と惡口あるべき。又天竺の眞言が天台宗に同じきも又勝れたるならば、天竺の名僧いかでか不空に誂へ、中國に正法なしとはいふべき。それは何にもあれ、慈覺智證の二人は、言は傳教大師の御弟子とは名のらせ給へども、心は御弟子にあらず。其の故は、此の書に云はく、

謹著依憑集一卷。贈同我後哲等云云。

同我の二字は、眞言宗は天台宗に劣ると習ひてこそ同我にてはあるべけれ。我と申し下さるゝ宣旨に云はく、

專違先師之義。成偏執之心等云云。

又云はく、

凡厥師資之道。闕一不可等云云。

此の宣旨のごとくならば、慈覺智證こそ專ら先師に背く人にては候へ。かう責め候ふも

沈空―三論は空の理に沈み込めること
彈訶―訶は呵をよしとす、誤解者を叱すること
著有―法相は有の理に執着すとす
撲揚―撲揚大師智周

事を不審申すは、親に値うての年あらそひ、日天に値ひ奉りての目くらべにては候へども、慈覺智證の御方人をせさせ給はん人々は、分明なる證文をかまへさせ給ふべし。詮ずるところは、信をとらんがためなり。玄奘三藏は月氏の婆沙論を見たりし人ぞかし。天竺にわたらざりし實法師に責められにき。法護三藏は印度の法華經をば見たれども、囑累の先後をば漢土の人見ねども悞といひしぞかし。設ひ慈覺傳教大師に値ひ奉りて習ひ傳へたりとも、智證義眞和尚に口決せりといふとも、傳教義眞の正文に相違せば、あに不審を加へざらん。傳教大師の依憑集と申す文は、大師第一の祕書なり、彼書の序に云はく、

新來眞言家。則泯二筆授之相承一。舊到華嚴家。則隱二影響之軌範一。沈空三論宗者。忘二彈訶之屈恥一。覆二稱心之醉一。著有法相。非二撲揚之歸依一。撥二青龍之判經一等。乃至謹著二依憑集一卷一。贈二同我後哲一。某時興。日本第五十二葉弘仁之七丙申之歲也云云。

次下の、正宗に云はく、

天竺名僧。聞二大唐天台教迹最堪一レ簡二邪正一。渴仰訪問云云。

次下に云はく、

普賢經の記、論の記に云はく、同じ等云々。貞觀八年丙戌四月廿九日壬申、勅宣を申し下して云はく、

如聞眞言止觀兩敎之宗。同號醍醐。倶稱深祕等云云。

又六月三日の勅宣に云はく、

先師既開兩業。以爲我道。代代座主相承莫不兼傳。在後之輩豈乖舊迹。如聞山上僧等事違先師之義。成偏執之心。殆似不顧扇揚餘風。興隆舊業。凡厥師資之道闕一不可。傳弘之勤寧不兼備。自今以後。宜以通達兩敎之人。爲延暦寺座主。立爲恆例。云云。

されば慈覺智證の二人は傳敎義眞の御弟子、漢土にわたりては又天台眞言の明師に値ひて有りしかども、二宗の勝劣は思ひ定めざりけるか。或は眞言すぐれ、或は法華すぐれ、或は理同事勝等云云。宣旨を申し下すには、二宗の勝劣を論ぜん人は、違勅の者と誡められたり。此等は皆自語相違といひぬべし。他宗の人はよも用ひじとみえて候ふ。但二宗齋等とは、先師傳敎大師の御義と、宣旨に引き載せられたり。抑傳敎大師いづれの書に書かれて候ふぞや。此の事よくよく尋ぬべし。慈覺智證と日蓮とが、傳敎大師の御

經に眞言勝れたりと造りつる文は佛意に叶ひけりと悦ばせ給ひて、宣旨を申し下して日本國に弘通あり。而も宣旨の心に云はく、

　遂知天台止觀。與二眞言法義一理冥符等云云。

祈請のごときんば、大日經に法華經は劣なるやうなり。宣旨を申し下すには、法華經と大日經とは同じ等云々。智證大師は本朝にしては義眞和尙、圓澄大師、別當慈覺等の弟子なり。顯密の二道は大體此の國にして學し給ひけり。天台眞言の二宗の勝劣の御不審に、漢土へは渡り給ひけるか。去んぬる仁壽二年に御入唐、漢土にしては眞言宗は法全、元政等にならはせ給ひ、大體大日經と法華經とは理同事勝、慈覺の義のごとし。天台宗は良諝和尙にならひ給ひ、眞言天台の勝劣、大日經は華嚴法華等には及ばず等云々。七年が間漢土に經て、去る貞觀元年五月十七日に御歸朝。大日經の旨歸に云はく、

　法華尙不レ及。況自餘教乎等云云。

此釋は法華經は大日經には劣る等云々。

又授決集に云はく、

　眞言禪門乃至若望二華嚴法華涅槃等經一是攝引門等云云。

もいかに御不審はなかりけるやらん、天下第一の大凶なり。慈覺大師は去ぬる承和五年に御入唐、漢土にして十年が間天台眞言の二宗を習ふ。法華大日經の勝劣を習ひしに、法全、元政等の八人の眞言師には、法華經と大日經は理同事勝等云々。天台宗の志遠、廣脩、維蠲等に習ひしには、大日經は方等部の攝等云々。同じき承和十三年九月十日に御歸朝、嘉祥元年六月十四日に宣旨下る。法華大日經等の勝劣は、漢土にして知りがたかりけるかのゆゑに、金剛頂經の疏七卷、蘇悉地經の疏七卷、已上十四卷。此の疏の心は大日經、金剛頂經、蘇悉地經の義と法華經の義は、其の所詮の理は一同なれども、事相の印と眞言とは、眞言の三部經すぐれたりと云々。此は偏に善無畏金剛智不空の造りたる大日經の疏の心のごとし。然れども、我が心に猶不審や殘りけん、又心には解けてんけれども、人の不審を晴さんとや思しけん、此の十四卷の疏を御本尊の御前にさし置きて御祈請ありき。かくは造りて候へども、佛意計りがたし、大日の三部や勝れたる、法華經の三部や勝れると御祈念有りしかば、五日と申す五更に忽ちに夢想あり、靑天に大日輪かゝり給へり。矢をもてこれを射ければ、矢飛んで天にのぼり、日輪の中に立ちぬ。日輪動轉してすでに地に落ちんとすと思ひて打覺めぬ。悅んで云はく、我吉夢あり、法華

兩界ー金剛界と胎藏界の相傳

に兩界を傳受し、大同二年十月二十二日に御歸朝、平城天皇の御宇なり。桓武天皇は御崩御平城天皇に見參し、御用ひありて御歸依他に異りしかども、平城ほどもなく、嵯峨に世をとられさせ給ひしかば、弘法ひき入れてありし程に、傳教大師は嵯峨の天皇弘仁十三年六月四日御入滅、同しき弘仁十四年より弘法大師、王の御師となり、眞言宗を立てて東寺を給ひ、眞言和尚と號し、此より八宗始る。一代の勝劣を判じて云はく、第一眞言大日經、第二華嚴、第三は法華涅槃等云々。法華經は阿含方等般若等に對すれば、眞實の經なれども、華嚴經大日經に望むれば戲論の法なり。教主釋尊は佛なれども、大日如來に向ふれば無明の邊域と申して、皇帝と俘囚とのごとし。天台大師は盜人なり、眞言の醍醐を盜んで法華經を醍醐といふなんど書かれしかば、法華經はいみじと思へども、弘法大師にあひぬれば物の數にもあらず。天竺の外道はさて置きぬ、漢土の南北が、法華經は涅槃經に對すれば邪見の經といひしにもすぐれ、華嚴宗が、法華經に對すれば枝末教と申せしにも越えたり。例へば彼の月氏の大慢婆羅門が、大自在天、那羅延天、婆籔天、教主釋尊の四人を高座の足につくりて、其の上にのぼつて邪法を弘めしがごとし。傳教大師御存生ならば、一言は出されべかりける事なり。又義眞、圓澄、慈覺、智證等

諍論が煩しきに依りてや、眞言天台の二宗の勝劣は、弟子にも分明に教へ給はざりけるか。但依憑集と申す文に、正しく眞言宗は法華天台宗の正義を偸みとりて大日經に入れて理同とせり。されば彼の宗は天台宗に落ちたる宗なり。いはうや不空三藏は、善無畏、金剛智入滅の後、月氏に入りてありしに、龍智菩薩に値ひ奉りし時、月氏には佛意をあきらめたる論釋なし、漢土に天台といふ人の釋こそ、邪正をえらみ、偏圓をあきらめたる文にては候ふなれ、あなかしこあなかしこ、月氏へ渡し給へと懇に誂へし事を、不空の弟子含光といひし者が、妙樂大師にかたれるを、記の十の末に引き載せられて候ふを、この依憑集に取り載せて候ふ。法華經に大日經は劣ると知ろしめす事、傳教大師の御心顯然也。されば釋迦如來、天台大師、妙樂大師、傳教大師の御心は、一同に大日經等の一切經の中には法華經は勝れたりといふ事は分明なり。又眞言宗の元祖といふ龍樹菩薩の御心もかくのごとし。大智度論を能々尋ぬるならば、此の事分明なるべきを、不空が誤れる菩提心論に、皆人ばかされて、此の事に迷惑せるか。又石淵の勤操僧正の御弟子に空海と云ふ人あり、後には弘法大師と號す。去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐。漢土にわたりては、金剛智、善無畏の兩三藏の第三の御弟子、慧果和尚といひし人

理同事勝—眞言と天台との教理の深きことは同じけれど修行の方法に於て眞言が勝れたりとなり

ぬる上は、沙汰のかぎりにあらず。而るを今に子細を知らざる者、六宗はいまだ破られずと思へり。譬へば盲目が天の日月を見ず、聾人が雷の音をきかざるゆゑに、天には日月なし、空に聲なしと思ふがごとし。眞言宗と申すは、日本人王第四十四代と申せし元正天皇の御宇に、善無畏三藏大日經をわたして弘通せずして漢土へかへる。又玄昉等大日經の義釋十四卷をわたす。又東大寺の得清大德わたす。此等を傳教大師御覽ありてありしかども、大日經法華經の勝劣いかんがと思しけるほどに、かた〴〵不審ありし故に、去ぬる延曆二十三年七月御入唐。西明寺の道邃和尚、佛瀧寺の行滿等に値ひ奉りて、止觀圓頓の大戒を傳受し、靈感寺の順曉和尚に値ひ奉りて眞言を相傳し、同延曆二十四年六月に歸朝して。桓武天皇に御對面、宣旨を下して六宗の學匠に止觀眞言を習はしめ、同七大寺に置かれぬ。眞言止觀の二宗の勝劣は、漢土に多く子細あれども、又大日經の義釋には理同事勝と書きたれども、傳教大師は善無畏三藏のあやまりなり、大日經は法華經には劣りたりと知しめして、八宗とはせさせ給はず、眞言宗の名をけづりて法華宗の内に入れ、七宗となし、大日經をば法華天台宗の傍依經となして、華嚴、大品、般若、涅槃等の例とせり。而れども、大事の圓頓の大乘別受戒の大戒壇を我が國に立う立じの

自二聖德弘化一以降。于レ今二百餘年之間。所レ講經論其數多矣。彼此爭レ理。其疑未レ解。而此最妙圓宗猶未二闡揚一等云云。又云。三論法相久年之諍。渙焉冰解。照然既明。猶レ披二雲霧一而見中三光上矣云云。

最澄和尚、十四人が義を判じて云はく、

各講二一軸一。振二法鼓於深壑一。賓主徘二徊三乘之路一。飛二義旗於高峰一。長幼摧二破三有之結一。猶未レ改二曆劫之轍一。混二白牛於門外一。豈善昇二初發之位一。悟二阿荼於宅内一等云云。

弘世、眞綱二人の臣下云はく、

靈山之妙法聞二於南岳一。總持妙悟闢二於天台一。慨二一乘之權滯一。悲二三諦之未顯一等云云。

又十四人の云はく、

善議等牽二逢休運一。乃閲二奇詞一。自レ非二深期一。何託二聖世一哉等云云。

此の十四卷は華嚴宗の法藏、審祥、三論宗の嘉祥、觀勒、法相宗の慈恩、道昭、律宗の道宣、鑒眞等の、漢土日本元祖等の法門、瓶はかはれども水は一也。而るに十四人彼の邪義をすてて傳教の法華經に歸伏しぬる上は、誰の末代の人か華嚴、般若、深密經等は法華經に超過せりと申すべきや。小乘の三宗は又彼の人々の所學なり。大乘の三宗破れ

ひしかども、天台の御釋持ち來りながら弘め給はず。人王第四十五代聖武天皇の御宇なりと語る。其の書を見んと申されしかば、取り出して見せまゐらせしかば、一返御覽ありて生死の醉を醒しつ。此の書をもつて六宗の心を尋ねあきらめしかば、一一に邪見なる事あらはれぬ。忽ちに願を發して云はく、日本國の人皆謗法の者の檀越たるが、天下一定亂れならずと思して六宗を難ぜられしかば、七大寺六宗の碩學蜂起して、京中烏合し天下みな騷ぐ。七大寺六宗の諸人等惡心強盛なり。而るを去んぬる延暦二十一年正月十九日に天皇高雄寺に行幸あつて七寺の碩德十四人、善議、勝猷、奉基、寵忍、賢玉、安福、勤操、脩圓、慈誥、玄耀、歳光、道證、光證、觀敏等の十有餘人を召し合はす。華嚴三論法相等の人々、各々我が宗の元祖が義に違はず。最澄上人は六宗の人人の所立一一に牒を取りて、本經本論並に諸經諸論に指し合せて責めしかば、一言も答へず、口をして鼻のごとくになりぬ。天皇驚き給ひて委細に御たづねありて、重ねて勅宣を下して十四人を責め給ひしかば、承伏の謝表を奉りたり。其の書に云はく、

七箇ノ大寺。六宗ノ學匠。乃至初悟ニ至極ヲ等云云。

又云はく、

和氣の妹子―大體小野の妹子のこと、和氣の姓未詳

山階寺―奈良興福寺のこと

此の三十巻の文は本書の重れるを削り弱きをたすくるのみならず、天台大師の御時なかりしかば、御責にも免れてあるやうなる、法相宗と華嚴宗と眞言宗とを一時にとり挫がれたる書なり。又日本國には人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十三日に、百濟國より一切經釋迦佛の像をわたす。又用明天皇の御宇に聖德太子佛法を讀みはじめ、和氣の妹子と申す臣下を漢土につかはして、先生所持の一巻の法華經をとりよせ給ひて持經と定め、其の後人王第三十七代に孝德天皇の御宇に、三論宗、華嚴宗、法相宗、倶舍宗、成實宗わたる。人王第四十五代に聖武天皇の御宇に律宗わたる。已上六宗なり。孝德より人王第五十代の桓武天皇にいたるまでは、十四代一百二十餘年が間は、天台眞言の二宗なし。桓武の御宇に最澄と申す小僧あり、山階寺の行表僧正の御弟子なり。法相宗を始として六宗を習ひ極めぬ。而れども佛法いまだ極めたりとも覺えざりしに、華嚴宗の法藏法師が造りたる起信論の疏を見給ふに、天台大師の釋を引きのせたり。此の疏こそ子細ありげなれ、此の國に渡りたるか、又いまだ渡らざるか、と不審ありしほどに、有人に問ひしかば、其の人の云はく、大唐の揚州龍興寺の僧鑒眞和尚は、天台の末學道暹律師の弟子、天寶の末に日本國にわたり給ひて、小乘の戒を弘通せさせ給

頭をかたぶけ、萬民掌をあはす。此の人々の義にいはく、華嚴、深密、般若、涅槃、法華經等の勝劣は、顯教の内、釋迦如來の說の分也。今の大日經等は、大日法王の勅言なり。彼の經經は民の萬言、此の經は天子の一言なり。華嚴經涅槃經等は、大日經には梯を立てても及ばず。但法華經計りこそ大日經には相似の經なれ。されども、彼の經は釋迦如來の說、民の正言、此の經は天子の正言なり。言は似れども人がら雲泥なり。譬へば濁水の月と淸水の月のごとし。月の影は同じけれども水に淸濁あり、なんど申しければ、此の由尋ね顯す人もなし。諸宗皆落ち伏して眞言宗に傾きぬ。善無畏、金剛智、死去の後、不空三藏又月氏にかへりて菩提心論と申す論を渡し、いよ〳〵眞言宗盛りなりけり。但し妙樂大師といふ人あり、天台大師よりは二百餘年の後なれども、智慧かしこき人にて、天台の所釋を見明めてありしかば、天台の釋の心は、後にわれたる深密經法相宗、又始めて漢土に立てたる華嚴宗、大日經眞言宗にも法華經は勝れさせ給ひたりけるを、或は智の及ばざるか、或は人に畏るゝか、或は時の王威を怖づるかの故に云はざりけるか。かくてあるならば、天台の正義すでに失せなん。又陳隋已前の南北が邪義にも勝れたりとおぼして、三十卷の末文を造り給ふ。所謂弘決、釋籤、疏記これなり。

かりしかば、天台の末學等は智慧の薄きかのゆゑにさもやと思ふ。又太宗は賢王なり、玄奘の御歸依淺からず。いふべき事ありしかども、いつもの事なれば時の威をおそれて申す人なし。法華經を打ちかへして、三乘眞實一乘方便五性各別と申せし事は、心うかりし事なり。天竺よりは渡れども月氏の外道が漢土に渡れるか、法華經は方便、深密經は眞實といひしかば、釋迦多寶十方の諸佛の誠言もかへりて虚しくなり、玄奘慈恩こそ時の生身の佛にてはありしか。其の後則天皇后の御宇に、前に天台大師に責められし華嚴經に、又重ねて新譯の華嚴經渡りしかば、さきの憤を果さんがために、新譯の華嚴をもつて天台に責められし舊譯の華嚴經を扶けて、華嚴宗と申す宗を、法藏法師と申す人立てぬ。此の宗は華嚴經をば根本法輪、法華經をば枝末法輪と申すなり。南北は一華嚴、二涅槃、三法華、天台大師は一法華、二涅槃、三華嚴。今の華嚴宗は一華嚴、二法華、三涅槃等云々。其の後玄宗皇帝の御宇に天竺より善無畏三藏大日經蘇悉地經を渡す。金剛智三藏は金剛頂經をわたす。又金剛智三藏の弟子あり、不空三藏なり。此の三人は月氏の人種、姓も高貴なる上、人がらも漢土の僧に似ず、法門も何とは知らず、後漢より今に至るまでなかりし、印と眞言といふ事を相副へてゆゝしかりしかば、天子

まらせ給ふ。廣長舌を大梵天に付け、又教主釋尊も付け給ふ。然して後、多寶佛は寶淨世界へかへり、十方の諸佛各々本土にかへらせ給ひて後、多寶分身の佛もおはせざらんに、教主釋尊涅槃經を說いて、法華經に勝ると仰せあらば、御弟子等は信ぜさせ給ふべしやと責めしかば、日月の大光明の脩羅の眼を照すがごとく、漢王の劍の諸侯の頸にかゝりしがごとく、兩眼をとぢ一頭を低れたり。天台大師の御氣色は師子王の狐兎の前に吼えたるがごとし。鷹鷲の鳩雉を責めたるに似たり。かくのごとくありしかば、さては法華經は、華嚴經涅槃經にもすぐれてありけりと、震旦一國に流布するのみならず、かへりて五天竺までも聞え、月氏大小の諸論も智者大師の御義には勝れず。教主釋尊兩度出現しましますか、佛教二度あらはれぬとほめられ給ひしなり。其の後天台大師も御入滅なりぬ。陳隋の世も代りて唐の世となりぬ。章安大師も御入滅なりぬ。天台の說法やうやく習ひ失せし程に、唐の太宗の御宇に、玄奘三藏といひし人、貞觀三年に始めて月氏に入りて、同十九年にかへりしが、月氏の佛法尋ね盡して、法相宗と申す宗をわたす。此の宗は天台宗と水火なり。而るに天台の御覽なかりし深密經、瑜伽論、唯識論等をわたして、法華經は一切經には勝れたれども、深密には劣るといふ。而るを天台は御覽な

捃拾―あつめひろふ、法華の大菓實をひろひ集むるが涅槃經となり

師の御方人せんと思さば、此の經文をやぶりて此に勝れたる經文を取り出して御師の御義を助け給へとせめたり。又涅槃經を法華經に勝るゝと候ひけるは、いかなる經文ぞ。涅槃經の第十四には、華嚴阿含方等般若をあげて、涅槃經に對して勝劣は說かれて候へども、またく法華經と涅槃經との勝劣はみえず。次上の第九の卷に、法華經の涅槃經との勝劣分明なり。所謂經文に云はく、

是經出世。乃至如法華中八千聲聞得受記莂成大菓實。如秋收冬藏更無所作

等云云。

經文明かに諸經をば春夏と說かせ給ひ、涅槃經と法華經とをば菓實の位とは說かれて候へども、法華經をば秋收冬藏の大菓實の位、涅槃經をば秋の末冬の始、捃拾の位と定め給ひぬ。此の經文正しく法華經には我が身劣ると承伏し給ひぬ。法華經の文には已說今說當說と申して、此の法華經は前と並との經經に勝れたるのみならず、後に說かん經經にも勝るべしと佛定め給ふ。すでに教主釋尊かく定め給ひぬれば、疑ふべきにあらねども、我が滅後はいかんかと疑ひおぼして、東方寶淨世界の多寶佛を證人に立て給ひしかば、多寶佛大地より踊り出でて、妙法華經皆是眞實と證し、十方分身の諸佛重ねてあつ

りといはゞ、用ふることなき上、我が長の心に叶はんがために、今の人を罵打なんどすべし。如何がせんとは思せしかども、さて默止すべきにあらねば、光宅寺の法雲法師は謗法によつて地獄に墮ちぬと罵らせ給ふ。其の時南北の諸師、蜂のごとく蜂起し、烏のごとく烏合せり。智顗法師をば頭を破るべきか、國を逐ふべきかなんど申せし程に、陳主此をきこしめして、南北の數人に召し合せて、我と列座してきかせ給ひき。法雲法師が弟子等の慧榮、法歳、慧曠、慧晅なんど申せし僧正僧都已上の人々百餘人なり。各々惡口を先とし、眉をあけ眼をいからかし、手をあげ拍子をたゝく。而れども智顗法師は末座に坐して色を變ぜず言を悞らず、威儀しづかにして諸僧の言を一々に牒をとり、言ごとに責返す。打返して難じて云はく、抑法雲法師の御義に、第一華嚴第二涅槃第三法華と立てさせ給ひける證文は何れの經ぞ。慥に明かなる證文を出させ給へとせめしかば、各々頭をうつぶせ色を失ひて、一言の返事なし。重ねてせめて云はく、無量義經に正しく次說方等十二部經摩訶般若華嚴海空等云々。佛我と華嚴經の名をよびあげて、無量義經に對して未顯眞實と打ち消し給ふ。法華經に劣りて候ふ無量義經に、華嚴經はせめられて候ひぬ。いかに心得させ給ひて、華嚴經をば一代第一とは候ひけるぞ。各々御

と書かれて候ふ。此の人の御義佛意に相ひ叶ひ給ひければこそ、天より花も下り雨もふり候ひけめ。かゝるいみじき事にて候ひしかば、漢土の人々、さては法華經は華嚴經涅槃經には劣るにてこそあるなれと思ひし上、新羅、百濟、高麗、日本まで此の疏ひろまりて、大體一同の義にて候ひしに、法雲法師御死去ありていくばくならざるに、梁の末、陳の始に智顗法師と申す小僧出來せり。南岳大師と申せし人の御弟子なりしかども、師の義も不審にありけるかのゆゑに、一切經藏に入つて度々御らんありしに、華嚴經、涅槃經、法華經の三經に詮じいだし、此の三經の中に殊に華嚴經を講じ給ひき。別して禮文を造りて日々に功をなし給ひしかば、世間の人思はく、此の人も華嚴を第一と思すかと見えしほどに、法雲大師が一切經の中に華嚴第一、涅槃第二、法華第三と立てたるが、あまりに不審なりける故に、ことに華嚴經を御らんありけるなり。かくて一切經の中に、法華第一、涅槃第二、華嚴第三と見定めさせ給ひてなげき給ふやうは、如來の聖教は漢土にわたれども、人を利益することなし。かへりて一切衆生を惡道に導びくこと、人師の悞によれり。例せば國の長とある人、東を西といひ天を地といひ出しぬれば、萬民はかくのごとくに心うべし。後にいやしき者出來して、汝等が西は東、汝等が天は地な

ぬ、所謂南三北七なり。十流ありしかども一流をもて最とせり。所謂南三の中の第三の光宅寺の法雲法師これなり。此の人は一代の佛教を五にわかつ。其の五の中に三經を撰出す。所謂華嚴經、涅槃經、法華經なり。一切經の中には華嚴經第一大王のごとし。涅槃經第二、攝政關白のごとし。第三法華經は公卿等のごとし。此より已下は萬民のごとし。此の人は本より智慧かしこき上、慧觀、慧嚴、僧柔、慧次なんど申せし大智者より習ひ傳へ給へるのみならず、南北の諸師の義を攻めやぶり、山林に交りて法華經、涅槃經、華嚴經の功を積りし上、梁の武帝召し出して、内裏の内に寺を立て、光宅寺となづけて此の法師をあがめ給ふ。法華經を講ぜしかば天より花ふること在世のごとし。天鑒五年に大旱魃ありしかば、此の法雲法師を請じ奉りて法華經を講ぜさせまゐらせしに、藥草喩品の「其雨普等四方倶下」と申す二句を講ぜさせ給ひし時、天より甘雨下りたりしかば、天子御感のあまりに、現に僧正になしまゐらせて、諸天の帝釋につかへ、萬民の國王を畏るゝがごとく、我とつかへ給ひし上、或人夢みらく、此の人は過去の燈明佛の時より、法華經を講ぜる人なり、法華經の疏四卷あり、此の疏に云はく、此の經未碩然ならずと。亦云はく、異の方便等云々。正しく法華經は、いまだ佛理をきはめざる經

大石醉象―釋尊を亡はんとてなせる計なり

付法藏―正しく佛法を後世に弘むる様依賴をうけしこと

等の惡人の身に入りて、或は大石をなげて佛の御身より血をいだし、或は釋子を殺し、或は御弟子等を殺す。此等の大難は皆遠くは法華經を佛世尊に説かせまゐらせじと巧謀りし如來現在猶多怨嫉の大難ぞかし。此等は遠き難なり。近き難には、舍利弗目連諸大菩薩等も、四十餘年が間は法華經の大怨敵の内ぞかし。況や滅度後と申して、未來の世には又此の大難よりもすぐれて畏しき大難あるべしと説かれて候ふ。佛だにも忍びがたかりける大難をば、凡夫はいかでか忍ぶべき。いはうや在世より大なる大難にてあるべかんなり。いかなる大難か、提婆が長三丈廣一丈六尺の大石、阿闍世王の醉象には過ぐべきとは思へども、彼にも過ぐべく候ふなれば、小失なくとも大難に度々値ふ人をこそ、滅後の法華經の行者とは知り候はめ。付法藏の人々は四依の菩薩、佛の御使なり。提婆菩薩は外道に殺され、師子尊者は檀彌羅王に頭を刎ねられ、佛陀密多、龍樹菩薩等は赤幡を七年十二年さし通す。馬鳴菩薩は金錢三億が代となり、如意論師は思死に死す。此等は正法一千年の内なり。像法に入つて五百年佛滅後一千五百年と申せし時、漢土に一人の智人あり、始は智顗後には智者大師と號す。法華經の實義をありのまゝに弘通せんと思ひ給ひしに、天台已前の百千萬の智者品々に一代を判ぜしかども、詮じて十流となり

敵といはんとすれば、彼宗宗の末の人々の云はく、法華經に大日經をまさりたりと申すは、我が私の計にはあらず、祖師の御義也。戒行の持破、智慧の勝劣、身の上下はありとも、所學の法門はたがふ事なしと申せば、彼の人々に失なし。又日蓮此を知りながら、人々を恐れて申さずば、寧喪身命不匿教者の佛陀の諫曉を用ひぬ者となりぬ、いかんがせん。言はんとすれば世間恐し、止めんとすれば佛の諫曉脫れがたし。進退此に谷れり。實なるかなや、法華經の文に云はく、

而此經者。如來現在。猶多怨嫉。況滅度後。

又云はく、

一切世間。多怨難信等云云。

釋迦佛を摩耶夫人孕せ給ひたりければ、第六天の魔王、摩耶夫人の御腹を通し見て、我等が大怨敵法華經と申す利劍をはらみたり、事の成ぜぬ先にいかにしてか失ふべき。第六天の魔王、大醫と變じて淨飯王宮に入り、御產安穩の良藥を持ち候ふ大醫ありとのゝしりて、毒を后にまゐらせつ。初生の時は石をふらし、乳に毒をまじへ、城を出でさせ給ひしには、黑き毒蛇と變じて道にふさがり、乃至提婆、瞿伽梨、波瑠璃王、阿闍世王

壞劫—大地の破壞する時期

くして墮落し給はざる事は、上品の不妄語戒の力ぞかし。法華經に勝れたる御經ありと仰せある大妄語あるならば、恐らくはいまだ壞劫にいたらざるに、大地の上にどうと落ち候はんか。無間大城の最下の堅鐵にあらずば、止りがたからんか。大妄語の人は須臾も空に處して四天下を廻り給ふべからずと責め奉るべし。而るを華嚴宗の澄觀等、眞言宗の善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等の大智の三藏大師等の、華嚴經大日經等は法華經に勝れたりと立て給はど、我等が分齊には及ばぬ事なれども、大道理の押すところは、豈諸佛の大怨敵にあらずや。提婆、瞿伽梨も、ものならず、大天、大慢、外に求むべからず。かの人々を信ずる輩は畏しおそろし。

問うて云はく、華嚴の澄觀、三論の嘉祥、法相の慈恩、眞言の善無畏、乃至弘法、慈覺、智證等を佛の敵と宣給ふか。

答へて云はく、此大なる難也。佛法に入りて第一の大事也。愚眼をもて經文を見るには、法華經に勝れたる經ありといはん人は、設ひいかなる人なりとも謗法は免れじと見えて候ふ。而るを經文のごとく申すならば、いかでか此の諸人佛敵たらざるべき。若又恐をなして指し申さずは、一切經の勝劣むなしかるべし。又此の人々を恐れて末の人々を佛

判形を加へ―眞實なることの證明をせらるとなり

上品―最上

火にてやなかるらん。かくのごとくいはん者は、一闡提の人と知るべし。生盲にことならず。法華經の法師品に釋迦如來金口の誠言をもて五十餘年の一切經の勝劣を定めて云はく、

我所說經典。無量千萬億。已說今說當說。而於其中。此法華經。最爲難信難解等云云。

此の經文は但釋迦如來一佛の說なりとも、等覺已下は仰いで信ずべき上、多寶佛東方より來りて眞實なりと證明し、十方の諸佛集りて釋迦佛と同じく廣長舌を梵天に付け給ひて後、各々國々へ還らせ給ひぬ。今已當の三字は五十年竝びに十方三世の諸佛の御經、一字一點も殘さず引き載せて、法華經に對して說かせ給ひて候ふを、十方の諸佛此の座にして御判形を加へさせ給ひ、各々又自國に還らせ給ひて、我が弟子等に向はせ給ひて、法華經に勝れたる御經ありと說かせ給はゞ、其の所化の弟子等信用すべしや。又我は見ざれば月氏龍宮四天日月等の宮殿の中に、法華經に勝れさせ給ひたる經やおはしますらんと疑をなすは。されば梵釋日月四天龍王は法華經の御座にはなかりけるか。若日月等の諸天、法華經に勝れたる御經まします、汝は知らずと仰せあるならば、大誑惑の日月なるべし。日蓮責めて云はく、日月は虛空に住し給へども、我等が大地に處するがごと

の經經をあげて、涅槃經に對して我が身勝ると說いて、又法華經に對する時は、

是經出世。乃至如法華中八千聲聞。得授記莂。成大菓實。如秋收冬藏。更無所作

等云云。

我と、涅槃經は法華經には劣ると說ける經文なり。かう經文は分明なれども、南北の大智の諸人の迷うて有りし經文なれば、末代の學者能々眼をとゞむべし。此の經文は但法華經涅槃經の勝劣のみならず。十方世界の一切經の勝劣をも知りぬべし。而るを經文にこそ迷ふとも天台妙樂傳教大師の御料簡の後は眼あらん人々は知りぬべき事ぞかし。然れども天台宗の人たる慈覺智證すら猶此の經文に暗し、いはうや餘宗の人々をや。

或人疑うて云はく、漢土日本にわたりたる經經にこそ、法華經に勝れたる經はおはせずとも、月氏、龍宮、四王、日、月、忉利天、都率天なんどには恒河沙の經經ましますなれば、其の中に法華經に勝れさせ給ふ御經やましますらん。

答へて云はく、一をもつて萬を察せよ、庭戸を出でずして天下を知るとはこれなり。癡人が疑うて云はく、我等は南天を見て東西北の三空を見ず。彼の四方の空に此の日輪より別の日やましますらん。山を隔て煙の立つを見て火を見ざれば、煙は一定なれども、

料簡の後—三師の判斷說明をせられし後の學者といふこと

四王日月—此等皆天人の住する社會ありとせるなり

肉髻―佛像の頭上中央に凸起せるもの

俗諦―現象差別界の道理
眞諦―眞如平等界の道理

此の經に指すところ了義經と申すは法華經、不了義經と申すは華嚴經、大日經、涅槃經等の已今當の一切經なり。されば佛の遺言を信ずるならば、專ら法華經を明鏡として、一切經の心をば知るべきか。隨つて法華經の文を開き奉れば、此の法華經は諸經の中に於て最も其の上に在り等云々。此の經文のごとくば、須彌山の頂に帝釋の居るがごとく、輪王の頂に如意寶珠のあるがごとく、衆木の頂に月のやどるがごとく、諸經の頂上に肉髻の住せるがごとく、此の法華經は華嚴經、大日經、涅槃經等の一切經の頂上の如意寶珠なり。されば專ら論師人師をすてて、經文に依るならば、大日經華嚴經等に、法華經の勝れ給へることは、日輪の青天に出現せる時、眼あきらかなる者の天地を見るがごとく、高下宛然なり。又大日經華嚴經等の一切經をみるに、此の經文に相似の經文一字一點もなし。或は小乘經に對して勝劣を說かれ、或は俗諦に對して眞諦をとき、或は諸〳〵の空假に對して中道をほめたり。譬へば小國の王が我が國の臣下に對して大王といふがごとし。法華經は諸王に對して大王等と云々。但涅槃經計りこそ、法華經に相似の經文は候へ。されば天台已前の南北の諸師は迷惑して、法華經は涅槃經に劣ると云々。されども專ら經文を開き見るには、無量義經のごとく、華嚴阿含方等般若等の四十餘年

はく、一切經の中には楞伽經第一なり、乃至、餘宗かくのごとし。而も上に擧ぐる諸師は、世間の人々各々思へり。諸天の帝釋をうやまひ、衆星の日月に隨ふがごとし。我等凡夫はいづれの師師なりとも信ずるならば、不足あるべからず。仰いでこそ信ずべけれども、日蓮が愚案晴れがたし。世間を見るに各々我も我もといへども、國主は但一人なり、二人となれば國土おだやかならず。家に二の主あれば其の家必ずやぶる。一切經も又かくのごとくや有るらん。何の經にても御座せ、一經こそ一切經の大王にてはおはすらめ。而るに十宗七宗まで、各々諍論して隨はず。國に七人十人の大王ありて、萬民穩やかならじ。いかんがせんと疑ふところに、一の願を立つ。我八宗十宗に隨はじ、天台大師の專ら經文を師として、一代の勝劣を勘へしがごとく、一切經を開きみるに、涅槃經と申す經に云はく、

依法不依人等云云。

依法と申すは一切經、不依人と申すは佛を除き奉りて外の普賢菩薩文殊師利菩薩、乃至上にあぐるところの諸の人師なり。此の經に又云はく、

依了義經不依不了義經等云云。

比干―湯の紂王の忠臣

三宗―倶舍、成實、律

比干が王に隨はずして賢人の名を取り、悉達太子の淨飯大王に背きて三界第一の孝となりしこれなり。かくのごとく存じて、父母師匠等に隨はずして佛法をうかゞひし程に、一代聖教を覺るべき明鏡十あり、所謂、倶舍、成實、律宗、法相、三論、眞言、華嚴、淨土、禪宗、天台法華宗なり。此の十宗を明師として、一切經の心を知るべし。世間の學者等思へり、此の十の鏡はみな正直に佛道の道を照せりと。小乘の三宗はしばらくこれを置く。民の消息の是非につけて、他國へわたるに用なきがごとし。大乘の七鏡こそ、生死の大海をわたりて、淨土の岸につく大船なれば、此を習ひ解いて我が身も助け、人をも導かんと思ひて習ひみるほどに、大乘の七宗いづれもいづれも自讃あり、我が宗こそ一代の心は得たれ得たれ等云々。所謂華嚴宗の杜順、智儼、法藏、澄觀等。法相宗の玄奘、慈恩、智周、智昭等。三論宗の興皇、嘉祥等。眞言宗の善無畏、金剛智、不空、弘法、慈覺、智證等。禪宗の達磨、慧可、慧能等。淨土宗の道綽、善導、懷感、源空等。此等の宗宗みな本經本論によりて、我も我も一切經を覺れり佛意を究めたりと云々。彼の人々云はく、一切經の中には華嚴經第一なり、法華經大日經等は臣下のごとし。眞言宗の云はく、一切經の中には大日經第一なり、餘經は衆星のごとし。禪宗が云

出離の道―生死を離れさとりを得ること
顯―現世の行
冥―神佛の處

報恩鈔

日蓮撰之

夫老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず。畜生すらかくのごとし。いはうや人倫をや。されば古の賢者豫讓といひし者は、劒を飲みて智伯が恩にあて、弘演と申せし臣下は、腹を割いて衛の懿公が肝を入れたり。いかにいはうや佛教を習はん者、父母、師匠、國恩を忘るべしや。此の大恩を報ぜんには、必ず佛法を習ひきはめ、智者とならで叶ふべきか。譬へば衆盲を導かんには、生盲の身にては橋河をわたしがたし。方風を辨へざらん大舟は諸商を導きて寶山に至るべしや。佛法を習ひ極めんと思はゞ、いとまあらずは叶ふべからず。暇あらんと思はゞ父母、師匠、國主等に隨ひては叶ふべからず。是非につけて出離の道を辨へざらんほどは、父母師匠等の心に隨ふべからず。この義は、諸人思はく、顯にもはづれ冥にも叶ふまじと思ふ。しかれども外典の孝經にも、父母主君に隨はずして忠臣孝人なるやうも見えたり。內典の佛經に云はく、

棄恩入無爲。眞實報恩者等云云

草茂り、問ふ人希なれば道を踏みわくることかたし。殊に今年は雪深くして人問ふことなし。命を期として法華經計りをたのみ奉り候ふに、御音信ありがたく候ふ。知らず釋迦佛の御使歟、過去の父母の御使歟と申すばかりなく候ふ。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

自レ是已下以二光日鈔之末文二百四十餘字一而改寫二此章之斷落一

申すは、或は心破作七分とも申して、頂の皮の底にある骨の響破るなり。死ぬる時はわるゝ事もあり。今の世の人々は、去ぬる正嘉の大地震、文永の大彗星に、皆頭われて候ふなり。其の頭のわれし時喘息、五藏の損ぜし時赤痢き腹をやみしなり。これは法華經の行者を謗りしゆゑにあたりし罰とは知ずや。

されば鹿は味ある故に人に殺され、龜は油ある故に命を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し。國を治むる者は佗國の恐あり。財有る者は命危し。法華經を持つ者は必ず成佛し候ふ。故に第六天の魔王と申す三界の主、此の經を持つ人をば強に嫉み候ふ也。此の魔王、疫病の神の目にも見えずして人に付き候ふやうに、古酒に人の醉ひ候ふ如く、國主父母妻子に付きて法華經の行者を嫉むべしと見えて候ふ。少しも違はざるは當時の世にて候ふ。日蓮は南無妙法蓮華經と唱ふる故に、二十餘年所を追はれ、二度まで御勘氣を蒙り、最後には此の山に籠る。此の山の體たらくは、西は七面の山、東は天子の嶽、北は身延の山、南は鷹取の山。四ッの山高きこと天に付き、さがしきこと飛鳥も飛びがたし。中に四ッの河あり。所謂富士河、早河、大白河、身延河也。其の中に一町ばかり間の候ふに庵室を結びて候ふ。晝は日をみず、夜は月を拜せず。冬は雪深く夏は

らん、知らま欲しき事なり。一人二人こそ失もあるらめ、若干の人々いかん。これ、ひとへに法華經を下ぐる弘法、慈覺、智證等の末の眞言師、善導、法然が末の弟子等、達磨等の人々の末の者ども國中に充滿せり。故に梵釋四天等の法華經の座の誓狀のごとく、頭破作七分の失に當てらるゝなり。

疑うて云はく、法華經の行者をあだむ者は、「頭破作七分」と說かれて候ふに、日蓮房をそしれども頭もわれぬは、日蓮房は法華經の行者にはあらざるかと申すは道理也と覺え候ふはいかん。

答へて云はく、日蓮を法華經の行者にてなしと申さば、法華經を投げすてよと書ける法然等、無明の邊域と記せる弘法大師、理同事勝と宣べたる善無畏、慈覺等が、法華經の行者にてあるべきか。又頭破作七分と申す事はいかなる事ぞ。刀をもて切るやうにわるゝと知れるか。經文には「如阿梨樹枝」とこそ說かれたれ。人の頭に七滴あり。七鬼神ありて一滴食へば頭をいたむ。三滴を食へば壽絕えんとす。七滴皆食へば死するなり。今の世の人々は皆頭阿梨樹の枝のごとくに割れたれども、惡業深くして知らざるなり。例せば手負ひたる人の、或は酒にゑひ、或は寢いりぬれば覺えざるが如し。又頭破作七分と

同生同名―倶生神ともいふ
壹岐對馬云々―蒙古勢の侵害を受けしをいふ

は、此の事を信ずべき事なり。眼前の現證あり。いのもりの圓頓房、清澄の西堯房、道義房、かたうみの實智房等は、貴かりし僧ぞかし。此等の臨終はいかんがありけんと尋ぬべし。これらはさて置きぬ。圓智房は清澄の大堂にして、三箇年が間一字三禮の法華經を、我と書きたてまつりて、十卷を諳に覺え、五十年が間一日一夜に二部づつ讀まれしぞかし。かれをば皆人は佛になるべしと云々。日蓮こそ念佛者よりも道義房と圓智房とは、無間地獄の底に墮つべしと申したりしが、此の人々の御臨終はよく候ひけるかいかに。日蓮なくば此の人々をば佛になりぬらんとこそ思すべけれ。これをもつて知召せ。弘法、慈覺等はあさましき事どもはあれども、弟子ども隱せしかば、公家にも知らせ給はず。末の代はいよ〳〵仰ぐなり。あらはす人なくば、未來永劫までも然であるべし。拘留外道は八百年ありて水となり、迦毗羅外道は一千年すぎてこそ其の失はあらはれしか。夫人身を受くる事は五戒の力による。五戒を持てる者をば二十五の善神これを守る上、同生同名と申して、二つの天、生れしよりこのかた、左右の肩に守護するゆゑに、失なくて鬼神あだむことなし。しかるに此の國の無量の諸人歎をなすのみならず、壹岐對馬の兩國の人皆事にあひぬ。太宰府又申すばかりなし。此の國はいかなる失のあるや

寄せるならば、いかにも此の國弱々と見ゆるなり。仁王經には、聖人去る時は七難必ず起る等云々。最勝王經に云はく、

由愛敬惡人治罰善人故乃至佗方怨賊來國人遭喪亂等云云。

佛說まことならば、此の國に一定惡人のあるを、國主尊ませ給ひて善人を怨ませ給ふにや。大集經に云はく、

日月不現明四方皆亢旱如是不善業惡王惡比丘毀壞我正法云云。

仁王經に云はく、

諸惡比丘多求名利於國王太子王子前自說破佛法因緣破國因緣其王不別信聽此語是爲破佛法破國因緣等云云。

法華經に云はく、濁世の惡比丘等云々。經文まことならば、此の國に一定惡比丘のあるなり。夫寶山には曲林を伐る。大海には死骸をとゞめず。佛法の大海一乘の寶山には、五逆の瓦礫四重の濁水をば入るれども、誹謗の死骸と一闡提の曲林をば納めざるなり。されば佛法を習はん人、後世をねがはん人は法華誹謗を畏るべし。皆人思するやうは、いかでか弘法慈覺等を謗る人を用ふべきと。佗人はさて置きぬ、安房の國の東西の人々

二十一日に云々—二十一日もするならば自然に雨降らぬ事あるべきやとなり

一座なんど—一度の祈にて直に降らしたるは尊しとなり

此の山—身延山

蓮云はく、善無畏も不空も雨の祈に雨はふりたりしかども、大風吹きてありけると見ゆ、弘法は三七日すぎて雨を降らしたり、此等は雨ふらさぬがごとし、三七二十一日に降らぬ雨やあるべき、設ひ降りたりともなんの不思議かあるべき、天台のごとく、千観なんどのごとく、一座なんどこそ尊けれ、此は一定様あるべしといひもあはせず、大風吹き來る。大小の舍宅堂塔古木御所等を、或は天に吹きのぼせ、或は地に吹きいれ、空には大なる光物飛び、地には棟梁みだれたり。人々をも吹き殺し牛馬多く倒れぬ。惡風なれども秋は時なればなほ許すかたもあり。此は夏四月なり。其の上日本國には吹かず。但關東八箇國なり。八箇國にも武藏相摸の兩國なり。兩國の中には相州につよく吹く。相州にも鎌倉、かまくらにも御所、若宮、建長寺、極樂寺等につよく吹けり。たゞ事ともみえず、ひとへにこの祈のゆゑにやと覺えて笑ひ口すくめせし人々も、興さめてありし上、我が弟子どもも、あら不思議やと舌を振ふ。本より期せし事なれば、三度國を諫めんに、用ひずば國を去るべしと、されば同五月十二日に、鎌倉をいでて此の山に入り、同十月に大蒙古國寄せて壹岐對馬の二箇國を打ち取らるゝのみならず、太宰府も破られて少貳入道大友等、聞逃ににげ、其の外の兵者ども其の事ともなく大體打たれぬ。又今度

法を鏡にかけ、天台華嚴等の諸宗をみな胸にうかべたり。それに隨ひて十日よりの祈雨に、十一日に大雨下りて風ふかず、雨しづかにて一日一夜ふりしかば、守の殿御感のあまりに、金三十兩、馬、やう〳〵の御ひきで物ありと聞ゆ。鎌倉中の上下萬人、手をたたき口を蹙めて笑ふやうは、日蓮僻法門申して、すでに頸を切られんとせしが、左右して免りたらばさではなくして、念佛禪をそしるのみならず、眞言の密教なんどをも謗るゆゑに、かゝる法のしるしめでたしと罵りしかば、日蓮が弟子等興さめて、これは御あら義と申せし程に、日蓮が申すやうは、しばし待て、弘法大師の惡義まことにて、國の御祈となるべくば、隱岐の法皇こそ軍にかち給はめ、御室最愛の兒勢多迦も頸をきられざるらん、弘法の法華經を華嚴經に劣れりとかける狀は、十住心論と申す文にあり、壽量品の釋迦佛をば、凡夫なりと記されたる文は、祕藏寶鑰に候ふ、天台大師を盜人と書ける狀は二教論にあり、一乘法華經を說ける佛をば、眞言師履取りにも及ばずと書ける狀は、正覺房が舍利講の式にあり、かゝる僻事を申す人の弟子、阿彌陀堂の法印が日蓮に勝つならば、龍王は法華經のかたきなり、梵釋四王にせめられなん、子細ぞあらんずらんと申せば、弟子どものいはく、いかなる子細のあるべきぞと、嘲笑きし程に、日

御室—仁和寺法親王

自」是以下古來號」法印祈雨鈔」

もて御祈有るべからず、各々は佛法を知らせ給うておはすにこそ申すとも知らせ給はめ、又何なる不思議にやあるらん、佗事には特にして、日蓮が申す事は御用ひなし、後に思ひ合せさせ奉らんが爲に申す、隱岐の法皇は天子也。權の大夫殿は民ぞかし、子の親を怨まんをば、天照大神うけ給ひなんや、所從が主君を敵とせんをば、正八幡は御用ひあるべしや、いかなりければ公家はまけ給ひけるぞ、此は偏に只事にはあらず、弘法大師の邪義、慈覺大師、智證大師の僻見をまことと思ひて、叡山東寺園城寺の人々の、鎌倉を怨み給ひしかば、還著於本人とて、其の失還つて公家はまけ給ひぬ、武家は其の事知らずして、調伏も行はざれば勝ちぬ、今又かくの如くなるべし、蝦夷は死生不知のもの、安藤五郎は因果の道理を辨へて堂塔多く造りし善人也、いかにとして頸をば蝦夷にとられぬるぞ、是をもて思ふに、此の御房たちだに御祈りあらば、入道殿事にあひ給ひぬと覺え候ふ、あなかしこあなかしこ、さ言はざりけると仰せ候ふなと、剛強に申し付け候ひぬ。

さて歸り聞きしかば、同四月十日より阿彌陀堂法印に仰せ付けられて、雨の御祈あり。此の法印は東寺第一の智人、御室等の御師、弘法大師、慈覺大師、智證大師の眞言の祕

間合あしし—間が惡いこと

人乞丐—罵りて言ふ詞

爾前得道云々—法華以前に說かれし敎にてもさとりを得て佛になれるかとのこと

善導和尚、法然上人を罵るほどの者が、たま〱御勘氣を蒙りて、此の島に放されたるを、御赦免あるとて生けて歸さんは心憂き事也と云うて、やう〱の支度ありしかども、何なる事にや有りけん、思はざるに順風吹き來りて島をば立ちしかば、間合あしければ百日五十日にもわたらず、順風には三日なる所を、須臾の間に渡りぬ。越後の國府信濃の善光寺の念佛者、持齋、眞言等は雲集して僉議す。島の法師原は今まで生けて還すは人乞丐也。我等はいかにも生身の阿彌陀佛の御前をば通すまじと僉議せしかども、又越後の國府より兵者どもあまた日蓮に添ひて善光寺を通りしかば、力及ばず。三月十三日に島を立ちて同三月二十六日に鎌倉へ打ち入りぬ。同四月八日、平の左衛門の尉に見參しぬ。前には似るべくもなく威儀を和らげて正しくする上、或入道は念佛を問ふ、或俗は眞言をとふ、或人は禪をとふ。平の左衛門の尉は爾前得道の有無を問ふ。一一に經文を引いて申す、平の左衛門の尉は上の御使の樣にて、大蒙古國はいつか渡り候ふべきと申す。日蓮答へて云はく、今年は一定也、それに取つては、日蓮已前より勘へ申すをば御用ひなし、譬へば病の起を知らざらん人の病を治せば彌々病は倍增すべし、眞言師だにも調伏するならば、彌々此の國軍に負くべし、穴賢穴賢。眞言師總じて當世の法師等を

者ども申しけるは、此の御房は神通の人にてましますか、あら畏しおそろし、今は念佛者をも養ひ持齋をも供養すまじ。念佛者、良觀が弟子の持齋等が云はく、此の御房は謀叛の内に入りたりけるか。さて且くありて世間しづまる。又念佛者集りて僉議す。斯うてあらんには我等餓死ぬべし。いかにもして此の法師を失はゞや。既に國の者も大體つきぬ。いかんがせん。念佛者の長者の唯阿彌陀佛、持齋の長者の性諭房、良觀が弟子の道觀等、鎌倉に走り登りて、武藏の守殿に申す。此の御房、島に候ふものならば、堂塔一宇も候ふべからず、僧一人も候ふまじ、阿彌陀佛をば或は火に入れ或は河にながす、夜もひるも高き山に登りて日月に向つて大音聲を放つて上を呪咀し奉る、其の音聲一國に聞ゆと申す。武藏の前司殿是をきゝ、上へ申すまでもあるまじ、先國中のもの日蓮房につくならば、或は國を逐ひ或は牢に入れよと私の下知を下す。又下文下る。かくの如く三度。其の間の事申さゞるに、心をもて計りぬべし。或は其の前を通行れりと云うて牢に入れ、或は其の御房に物を進らせけりと云うて國をおひ、或は妻子を執る。かくの如くして、上へ此の由を申されければ、案に相違して、去ぬる文永十一年二月十四日の御赦免の狀、同三月八日に島につきぬ。念佛者等僉議して云はく、此程の阿彌陀佛の御敵、

相摸守—當時の執權北條時宗

幼若—尫弱の誤歟

るに、いくほどなく三十日が内にあひ候ひぬ、又蒙古國も一定渡り候ひなん、念佛無間地獄も一定にてぞ候はんずらん、永く念佛申し候ふまじと申せしかば、いかに云ふとも相摸の守殿等の用ひ給はざらんには、日本國の人用ふまじ、用ひずば國必ず亡ぶべし、日蓮は幼若の者なれども、法華經を弘むれば釋迦佛の御使ぞかし、わづかの天照大神正八幡なんどと申すは、此の國には重んずれども、梵釋日月四天に對すれば小神ぞかし、されども此の神、人なんどを過ちぬれば、只の人を殺せるには七人半なんど申すぞかし、太政入道隱岐の法皇等のほろび給ひしは是也、此はそれには似るべくもなし、教主釋尊の御使なれば、天照大神正八幡宮も頭を傾け手を合せて地に伏し給ふべき事也、法華經の行者をば、梵釋左右に侍り、日月前後を照し給ふ、かゝる日蓮を用ひぬるとも、あしく敬はゞ國亡ぶべし、何に況や數百人に惡ませ二度まで流しぬ、此の國の亡びん事疑なかるべけれども、且く禁をなして國をたすけ給へと、日蓮が扣ふればこそ、今までは安穩にありつれども、法に過ぐれば罸あたりぬるなり、又此度も用ひずば大蒙古國より打手を向けて、日本國亡さるべし、たゞ平の左衛門の尉が好む禍なり、和殿原とても此の島とても、安穩なるまじき也と申せしかば、あさましげにて立ち歸りぬ。さて在家の

比と云々。日蓮云はく、弓箭とる者は公の御大事にあひて所領をも給はり候をこそ田畠つくるとは申せ、只今軍のあらんずるに、急ぎうち上り高名して所知を給らぬか、さすがに和殿原は、相摸の國には名ある侍ぞかし、田舍にて田つくり軍に外れたらんは恥なるべしと申せしかば、いかにや思ひげにて急遽てものもいはず。念佛者、持齋、在家の者どもも、何と云ふ事ぞやと恠しむ。さて皆歸りしかば、去年の十一月より勘へたる開目抄と申す文二巻造りたり、頸切るゝならば、日蓮が不思議留めんと思ひて勘へたり。此の文の心は、日蓮によりて日本國の有無はあるべし、譬へば宅に柱なければたもたず、人に魂なければ死人也。日蓮は日本の人の魂也。平の左衛門、既に日本の柱を倒しぬ。只今世亂れて、それともなく夢の如くに妄語出來して、此の御一門同士打して、後には佗國よりせめらるべし。例せば立正安國論に委しきが如し。かやうに書き付けて、中務の三郎左衛門の尉が使に取らせぬ。つきたる弟子等も强義かなと思へども力及ばざりげにてある程に、二月の十八日に島に船つく。鎌倉に軍あり、京にもあり、そのやう申す計りなし。六郎左衛門の尉其の夜に早舟をもて一門相具して渡る。日蓮に掌を合せて、たすけさせ給へ、去ぬる正月十六日の御言いかにやと、此の程疑ひ申しつ

思ひやらせ云々―容易に破りたる狀を推量して見給へとなり
おろか―佛學の幼稚なること

言師は面々に色を失ひ、天台宗が勝つべきよしをのゝしる。在家の者どもは聞ゆる阿彌陀佛の敵よとのゝしり、さわぎひゞく事、震動雷電の如し。日蓮は暫らくさわがせて後、各々しづまらせ給へ、法門の御爲にこそ御渡りあるらめ、惡口等よしなしと申せしかば、六郎左衞門を始めて諸人然るべしとて、惡口せし念佛者をば素首を突出しぬ。さて止觀眞言念佛の法門、一一にかれが申す樣を牒揚げて、承伏せさせては、ちやうとは詰めつめ、一言二言にはすぎず。鎌倉の眞言師、禪宗、念佛者、天台の者よりも、はかなきものどもなれば、只思ひやらせ給へ。利劍をもて瓜をきり、大風の草を靡かすが如し。佛法のおろかなるのみならず、或は自語相違し、或は經文をわすれて論と云ひ、釋をわすれて論といふ。善導が柳より落ち、弘法大師の三鈷を投げたる、大日如來と現じたる等をば、或は妄語或は物に狂へる處を一一にせめたるに、或は惡口し、或は口を閉ぢ、或は色を失ひ、或は念佛僻事也けりと云ふものもあり。或は當座に袈裟平念珠をすてて念佛申すまじきよし誓狀を立つる者もあり。皆人立ち歸る程に、六郎左衞門の尉も立ち歸る。一家の者も返る。日蓮不思議一云はんと思ひて、六郎左衞門の尉を大庭より呼返して云はく、いつか鎌倉へ登り給ふべき。かれ答へて云はく、下人共に農せさせて七月の

一定—必ず殺さるべしとなり

は、佐渡の國の持齋念佛者の唯阿彌陀佛、生喩房、印性房、慈道房等の數百人寄り合ひて僉議すると承る、聞ゆる阿彌陀佛の大怨敵一切衆生の惡知識の日蓮房、此の國に流されたり、なにとなくとも此の國へ流されたる人の始終活けらるゝ事なし、設ひ活けらるるとも歸る事なし、又打ち殺したれども御咎なし、塚原と云ふ所に只一人あり、いかに剛なりとも力つよくとも、人なき處なれば集りて射殺せかしと云ふものもありけり。又なにとなくとも頸を切らるべかりけるが、守殿の御臺所の御懷妊なれば、しばらく切られず、終には一定と聞く。又云はく、六郎左衞門の尉殿に申して切らずんば計らふべしと云ふ。多くの義の中に、これについて守護所に數百人集りぬ。六郎左衞門の尉の云はく、上より殺しまゐらすまじき副狀下りて、蔑るべき流人にはあらず、過ちあるならば重連が大なる失なるべし。それよりは只法門にて攻めよかしと云ひければ、念佛者等、或は淨土の三部經或は止觀或は眞言等を、小法師等が頸にかけさせ、或は腋に挾ませて、正月十六日にあつまる。佐渡の國のみならず、越後、越中、出羽、奥州、信濃等の國々より集れる法師等なれば、塚原の堂の大庭、山野に數百人、六郎左衞門の尉兄弟一家、さならぬもの、百姓の入道等、かずをしらず集りたり。念佛者は口々に惡口をなし、眞

鎌倉の御一門—北條氏をいふ
義盛—和田義盛
隱岐の法皇—後鳥羽法皇
違目—間違

く、
　若知衆生不出生死不慕佛乘魔於是人猶生親想等云云。
釋の心は、人善根を修すれども、念佛眞言禪律等の行をなして、法華經を行ぜざれば、魔王親の思をなして人間につきて其の人をもてなし供養す。世間の人に實の僧と思はせんが爲也。例せば國主の尊む僧をば諸人供養するが如し。されば國主等の敵にするは既に正法を行ずるにてある也。釋迦如來の御ためには、提婆達多こそ第一の善知識なれ。今の世間を見るに、人をよくなすものは方人よりも強敵が人をばよくなしけるなり。眼前に見えたり。此の鎌倉の御一門の御繁昌は、義盛と隱岐の法皇ましまさずんば、爭か日本の主となり給ふべき。されば此の人々は此の御一門の御ためには第一の方人なり。日蓮が佛にならん第一のかたうどは景信、法師には良觀、道隆、道阿彌陀佛と平の左衞門の尉、守殿ましまさずんば、爭か法華經の行者とはなるべきと悅ぶ。
かくてすごす程に、庭には雪つもりて人も通はず、堂にはあらき風より外は音づるるものなし。眼には止觀法華をさらし、口には南無妙法蓮華經と唱へ、夜は月星に向ひ奉りて諸宗の違目と法華經の深義を談ずる程に、年もかへりぬ。いづくも人の心の果敢なさ

阿耨云々―梵語、無上正徧知と譯す、さとりのこと
在世―釋迦佛の居られし時をいふ

弘めて、かゝる責にあへり。佛滅度後二千二百餘年が間、恐らく天台智者大師も、「一切世間多怨難信」の經文をば行じ給はず。「數數見擯出」の明文は但日蓮一人也。「一句一偈我皆與授記」は我也。阿耨多羅三藐三菩提は疑なし。相模の守殿こそ善知識よ、平の左衛門こそ提婆達多よ、念佛者は瞿伽利尊者、持齋等は善星比丘。在世は今にあり、今は在世なり。法華經の肝心は諸法實相と説かれて、本末究竟等と宣べられて候ふは是也。摩訶止觀第五に云く、

行解既勤。三障四魔紛然競起。

又云はく、

如猪揩金山。衆流入海。薪熾於火。風益求羅耳等云云。

釋の心は法華經を教のごとく機に叶ひ時に叶うて解行すれば、七つの大事出來す。其の中に天子魔とて第六天の魔王、或は國主或は父母或は妻子或は檀那或は惡人等について、或は隨つて法華經の行を支へ、或は違して支ふべき事也。何れの經をも行ぜよ、佛法を行ずるには分々に隨つて留難あるべし。其の中に法華經を行ずるには、强盛に支ふべし。法華經を教の如く時機に當つて行ずるには殊に難あるべし。故に弘決の八に云

洛陽―京都

許りさせ給へ候へと申す人もあり。又百日の内に軍あるべしと申しつれば、それを待つべしとも申す。依智にして二十餘日、其の間鎌倉に或は火をつくる事七八度、或は人を殺す事ひまなし。讒言の者共の云はく、日蓮が弟子共の火をつくるなりと。さもあるらんとて日蓮が弟子等を鎌倉に置くべからずとて、二百六十餘人に記さる、皆遠島へ遣すべし、牢にある弟子共をば頸をはねらるべしと聞ゆ。さる程に火をつくる者は持齋念佛者が計り事なり。其の由は繁ければかゝず。同十月十日に依智を立つて同十月二十八日に佐渡の國へ著きぬ。十一月一日に六郎左衛門が家のうしろみの家より、塚原と申す山野の中に、洛陽の蓮臺野のやうに死人を捨つる所に、一間四面なる堂の佛もなく、上は板間あはず、四壁はあばらに雪ふり積りて消ゆる事なし。かゝる所に敷皮打ちしき、蓑うちきて夜をあかし日をくらす。夜は雪雹雷電ひまなし。晝は日の光もささせ給はず、心細かるべき住居なり。彼の李陵が胡國に入りて、巖崛にせめられし、法道三藏の徽宗皇帝にせめられて、面に火印をさされて、江南に放たれしも、只今とおぼゆ。あら嬉しや、檀王は阿私仙人にせめられて法華經の功德を得給ひき。不輕菩薩は上慢の比丘等の杖にあたりて、一乘の行者といはれ給ふ。今日蓮は末法に生れて妙法蓮華經の五字を

澄み渡らせ―澄した顏をする
三十三天―須彌の頂上忉利天に居る諸天

りまします、名月天子ぞかし。寶塔品にして佛敕をうけ給ひ、囑累品にして佛に頂を摩でられまゐらせ、「如二世尊敕一當二具奉行一」と誓狀をたてし天ぞかし。佛前の誓は日蓮なくば虚しくてこそおはすべけれ、今かゝる事出來せば、いそぎ悅をなして法華經の行者にもかはり、佛敕をも果して誓言の驗をば遂げさせ給ふべし、いかに今しるしのなきは不思議に候ふものかな、何なる事も國になくしては鎌倉へもかへらんとも思はず、驗こそなくとも嬉し顏にて澄み渡らせ給ふはいかに。大集經には、日月明を現ぜずと說かれ、仁王經には日月度を失ふと書かれ、最勝王經には、三十三天各瞋恨を生ずとこそ見え侍るに、いかに月天いかに月天と攻めしかば、其の驗にや、天より明星の如くなる大星下りて、前の梅の木の枝にかゝりてありしかば、兵士ども皆緣より飛び下り、或は大庭にひれ伏し、或は家の後へ逃げぬ。やがて卽ち天かきくもりて、大風吹き來て江の島の鳴るとて、空のひゞく事大なる皷を打つがごとし。夜明くれば十四日卯の時に、十郎入道と申すもの來りて云はく、昨日の夜の戌の時計りに、守殿に大なるさわぎあり、陰陽師を召して御うらなひ候へば、申せしは、大に國みだれ候ふべし、此の御房御勘氣のゆゑなり、いそぎいそぎ召しかへさずんば、世の中いかゞ候ふべかるらんと申せば、

立ぶみ—指令書

此の人—日蓮をさす

自是以下古來與星下鈔而出錄內十四卷初紙

つるに、目のあたり拜みまゐらせ候ひつる事どもを見て候へば、尊さに年頃申しつる念佛はすて候ひぬとて、火打袋より珠數とり出して捨つる者あり。今は念佛申さじと誓狀を立つる者もあり。六郎左衞門が郎從等、番をば受けとりぬ。左衞門尉もかへりぬ。其の日の戌の時計りに鎌倉より上の御使とて、立文をもつて來ぬ。頸切れといふ重ねたる御使かと兵士どもは思ひてありし程に、六郎左衞門が代、右馬允と申す者、立ぶみもちて走り來り、跪いて申す。今夜にて候ふべし、あらあさましやと存じて候ひつるに、かゝる御悅の御ふみ來りて候ふ。武藏の守殿は今日卯の時に、熱海の御湯へにて候へば、いそぎ無益き事もやと、まづこれへ走りまゐりて候ふと申す。鎌倉より御つかひは、二時に走りて候ふ、今夜の內にあたみの御湯へは走りまゐるべしとて罷りいでぬ。追狀に云はく、此の人は失なき人なり、今しばらくありて赦させ給ふべし、過しては後悔あるべしと云々。

其の夜は十三日、兵士ども數十人坊の邊並に大庭になみゐて候ひき。九月十三日の夜なれば、月大にはれてありしに、夜中に大庭に立ち出でて月に向ひ奉りて、自我偈少少よみ奉り、諸宗の勝劣、法華經の文あら〳〵申して、抑も今の月天は法華經の御座に列

これほどの悦をば笑へかし、いかに約束をば違へらるゝぞと申せし時、江の島のかたより、月のごとく光りたる物鞠のやうにて、辰巳のかたより戌亥の方へひかりわたる。十二日の夜の昧爽、人の面もみえざりしが、物のひかり月夜のやうにて、人々の面もみな見ゆ。太刀取目くらみ倒れ臥し、兵共おぢ怖れ興醒めて、一町計り馳せ退き、或は馬より下りて畏り、或は馬の上にて蹲踞れるもあり。日蓮申すやう、いかに殿原、かゝる大に禍なる召人には遠退くぞ、近く打ち寄れや打ちよれやと高々と呼ばはれども、急ぎよる人もなし。さて夜あけばいかにいかに、頸切るべくば急ぎ切るべし、夜明けなば見苦しかりなんと勸めしかども、とかくの返事もなし。はるか計りありて云はく、相摸の依智と申すところへ入らせ給へと申す。此は道知る者なし、先打すべしと申せども、うつ人もなかりしかば、さて小憩ふほどに、或兵士の云はく、それこそ其の道にて候へと申せしかば、道にまかせてゆく。午の時計りに依智と申すところへ行き着きたりしかば、本間の六郎左衞門が家に入りぬ。酒とり寄せて兵士どもに飲ませてありしかば、各かへるとて、頭をうなだれ手を叉へて申すやう、このほどは、いかなる人にてやおはすらん、我等がたのみて候ふ阿彌陀佛を謗らせ給ふとうけ給はれば、惡みまゐらせて候ひ

きいそぎこそ誓狀の宿願を遂げさせ給ふべきに、いかに此處には落ち合せ給はぬぞと、高々と申す。さて最後には、日蓮今夜頸切られて靈山淨土へまゐりてあらん時は、まづ天照大神正八幡こそ起請を用ひぬ神にて候ひけれと、さしきりて敎主釋尊に申し上げ候はんずるぞ、痛しとおぼさば、いそぎいそぎ御計らひあるべしとて、又馬に乘りぬ。由比の濱にうち出でて御靈の前にいたりて又云はく、しばし殿原、これに告ぐべき人ありとて、中務三郎左衞門の尉と申す者のもとへ、熊王と申す童子を遣したりしかば、いそぎ出でぬ。今夜頸切られて罷るなり、この數年が間願ひつる事これなり、此の娑婆世界にして、雉となりし時は鷹に抓まれ、鼠となりし時は猫に喰はれき、或は妻に子にかたきに身を失ひし事、大地微塵より多し、法華經の御ためには、一度だも失ふことなし、されば日蓮貧道の身と生れて父母の孝養心にたらず、國の恩を報ずべき力なし、今度頸を法華經に奉りて、其の功德を父母に回向せん、其のあまりは弟子檀那等に配當くべしと申せし事これなりと申せしかば、左衞門の尉兄弟四人、馬の口に取り附きて、腰越龍の口にゆきぬ。此にてぞ有らんずらんと思ふところに、案にたがはず兵士どもうちまはり騷ぎしかば、左衞門の尉申すやう、只今なりと泣く。日蓮申すやう、不覺の殿原かな、

の左衛門の尉等方人し叶へずして、詰り伏しし事どもは、繁ければ書かず。さては十二日の夜、武藏の守殿の預にて、夜半に及び頸を切らんがために鎌倉を出でしに、若宮小路にうち包みて四方に兵のうちつゝみてありしかども、日蓮云はく、各々騷がせ給ふな、別の事はなし、八幡大菩薩に最後に申すべき事ありとて、馬よりさし下りて高聲に申すやう、いかに八幡大菩薩は實の神か、和氣の清丸が頸を刎ねられんとせし時は、長一丈の月と顯はれさせ給ひ、傳教大師の法華經を講ぜさせ給ひし時は、紫の袈裟を御布施にさづけさせ給ひき、今日蓮は日本第一の法華經の行者なり、其の上身に一分のあやまちなし、日本國の一切衆生の法華經を謗じて無間大城に墮つべきを救けんがために申す法門なり、又大蒙古國よりこの國を攻むるならば、天照大神正八幡とても安穩におはすべきか、其の上、釋迦佛、法華經を說き給ひしかば、多寶佛十方の諸佛菩薩あつまりて、日と日と月と月と星と星と鏡と鏡とを並べたるがごとくなりし時、無量の諸天竝に天竺漢土日本國等の善神聖人あつまりたりし時、各々法華經の行者に疎略なるまじき由の誓狀まゐらせよと攻められしかば、一一に御誓狀を立てられしぞかし、さるにては日蓮が申すまでもなし、急

るひは身にまとひ、あるひは板敷疊等、家の二三間にちらさぬ所もなし。日蓮大高聲を放ちて申す。あらおもしろや平の左衛門の尉がものに狂ふを見よ、殿原、但今ぞ日本國の柱を倒すと呼ばはりしかば、上下萬人あわてて見えし。日蓮こそ御勘氣を蒙れば、臆して見ゆべかりしに、さはなくして、これは僻ごとなりとや思ひけん、兵者どもの色こそ變じて見えしか。十日並に十二日の間、眞言宗の失、禪宗、念佛等、良觀が雨ふらさぬ事、具に平の左衛門の尉にいひ聞かせてありしに、或は、はと笑ひ、或は怒りなんどせし事どもは、繁ければ記さず。詮ずるところは、六月十八日より、七月四日まで、良觀が雨の祈して、日蓮にかかれて降らしかね、汗をながし、涙のみ下して雨ふらざりし上、逆風ひまなくてありし事、三度まで使者を遣して、一丈の堀をこえぬもの、十丈二十丈の堀をこゆべきか、和泉式部好色の身にして、八齋戒にせいせる和歌をよみて雨をふらし、能因法師が破戒の身としてうたをよみて天雨を下せしに、いかに二百五十戒の人々百千人あつまりて、七日二七日せめさせ給ふに、雨の下らざる上に大風は吹き候ふぞ、これをもつて存ぜさせ給へ、各々の往生は叶ふまじきぞとせめられて、良觀が泣きし事、人々につきて讒せし事、一一に申せしかば、平

かかれて―差支へられん

能因法師―伊豫の國にて「天の川苗代水にせき下せ天降ります神ならば神」と詠みて雨を下せりと

大政の入道—平清盛

胴丸—鎧の胴の一種

盡に失に行はるゝほどならば、國に後悔ありて、日蓮御勘氣を蒙らば、佛の御使を用ひぬになるべし。梵天帝釋日月四天の御咎ありて、遠流死罪の後、百日一年三年七年が内に、自界叛逆難とて、此の御一門同士打始るべし。其の後は佗國侵逼難とて、四方より、ことには西方よりせめられさせ給ふべし。其の時後悔あるべし。平の左衞門の尉と申し付けしかども、太政の入道の狂ひしやうに、すこしも憚る事なく物にくるふ。去ぬる文永八年太歳辛未九月十二日御勘氣を蒙る。其の時の御勘氣のやうも常ならず法にすぎて見ゆ。了行が謀反を起し、大夫の律師が世を亂さんとせしを召捕られしにもこえたり。平の左衞門の尉大將として數百人の兵者に胴丸著せて、烏帽子がけして眼をいからし聲を荒うす。大體事の心を案ずるに、太政入道の世をとりながら國をやぶらんとせしに似たり、たゞ事ともみえず。日蓮これを見て思ふやう、日ごろ月ごろ思ひまうけたりつる事はこれなり、幸なるかな法華經のために身をすてん事よ、臭き頭を放たれば、沙に金をかへ、石に珠を貿へるがごとし。さて平の左衞門の尉が一の郎從少輔房と申す者走りよりて、日蓮が懐中せる法華經の第五の巻を取り出して、面を三度呵責みて、さんざんと打ちちらす。又九巻の法華經を兵者ども打ちちらして、あるひは足にふみ、あ

持齋―禪宗を指す

等、南岳、天台等、妙樂、傳教等だにも、いまだひろめ給はぬ法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に、日蓮魁したり。和黨共、二陣三陣つゞきて、迦葉、阿難にも勝ぐれ、天台、傳教にもこえよかし。わづかの小島の主等が威嚇さんを怖ぢては、閻魔王の責をばいかんがすべき。佛の御使と名のりながら臆せんは、無下の人々なりと申しふくめぬ。さりし程に、念佛者、持齋、眞言師等、自身の智は及ばず、訴狀も叶はざれば、上郎尼ごぜんたちにとりつきて、種種に構へ申し、故最明寺の入道殿、極樂寺の入道殿を、無間地獄に墮ちたりと申し、建長寺、壽福寺、極樂寺、長樂寺、大佛寺等を燒きはらへと申し、道隆上人、良觀上人等を頸をはねよと申す。御評定になにとなくとも、日蓮が罪禍まぬがれがたし。但し上件の事一定申すかと、召し出だしてたづねらるべしとて召し出されぬ。奉行人の云はく、上の仰かくのごとしと申せしかば、上件の事一言もたがはず申す。但し最明寺殿極樂寺殿を地獄といふ事はそらごとなり。此の法門は最明寺殿極樂寺殿御存生の時より申せし事なり。詮ずるところ、上件の事どもは、此の國を思ひて申す事なれば、世を安穩にたもたんとおぼさば、彼の法師ばらを召し合せて聞召せ、さなくして彼等にかはりて理不

を得て一向にすべからずと記され、法華經は一法なれども機にしたがひ時によりて其の行萬差なるべし。佛記して云はく、我が滅後正像二千年すぎて末法の始に此の法華經の肝心題目の五字計りを弘めんもの出來すべし、其の時惡王惡比丘等大地微塵より多くして、或は大乘或は小乘等をもて競はんほどに、此の題目の行者にせめられて、在家の檀那等をかたらひて、或は罵り或はうち、或は籠に入れ或は所領を召し、或は流罪或は頸をはぬべし、などいふとも、退轉なく弘むるほどならば、怨をなすものは、國主は同士打をはじめ、餓鬼のごとく身をくらひ、後には佗國よりせめらるべし、これひとへに、梵天帝釋日月四天等の法華經の敵なる國を、佗國より責めさせ給ふなるべしと說かれて候ふぞ。各々我が弟子と名のらん人々は、一人も臆し思はるべからず。親を思ひ妻子を思ひ所領をかへりみることなかれ。無量劫よりこのかた、親子のため所領に命をすてたる事は大地微塵よりも多し。法華經のゆゑにはいまだ一度もすてず、法華經をば若干行ぜしかども、かゝる事出來せしかば、退轉して止みにき。譬へば湯を沸して水に入れ、火を切るに遂げざるがごとし。各々思ひ切り給へ、此の身を法華經に替ふるは石に金をかへ、糞に米をかふるなり。佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹

亡されぬ—紂王が亡されしこと
これもかれが—これは日本、かれは亡國の王

やこの事は、上の御大事出で來らむのみならず、各々の身にあたりて大いなるなげき出來すべき事ぞかし。而るを用ひる事こそなくとも、惡口まではあまりなり。此ひとへに日本國の上下萬人、一人もなく法華經の强敵となりて、年久しくなりぬれば、大禍のつもり大鬼神の各々の身に入る上、蒙古國の牒狀に正念をぬかれて狂ふなり。例せば、殷の紂王に比干といひし者諫めをなせしかば、用ひずして胸をほる。周の文武王に亡されぬ。吳王は伍子胥が諫を用ひず、自害をせさせしかば、越王勾踐の手にかゝる。これも彼がごとくなるべきかと、いよ〳〵不便におぼえて、名をも惜まず命をもすてて强盛に申し張りしかば、風大なれば波大なり、龍大なれば雨たけきやうに、いよ〳〵怨をなしますます惡みて御評定に僉議あり。頸を刎ぬべきか、鎌倉を追はるべきか、弟子檀那等をば所領あらん者は所領を召して頸を切られ、或は籠にてせめ、あるひは遠流すべし等云々。日蓮悅んで云はく、本より存知の旨なり、雪山童子は半偈のために身をなげ、常啼菩薩は身をうり、善財童子は火に入り、樂法梵士は皮をはぐ、藥王菩薩は臂をやく、不輕菩薩は杖木をかうむり、師子尊者は頭をはねられ、提婆菩薩は外道に殺さる、此等はいかなりける時ぞやと勘ふれば、天台大師は時に適ふ而已と書かれ、章安大師は取捨宜しき

樂府―詩集、わが國に重ぜらる

權狀―勸賞の誤か

種々御振舞御書

去ぬる文永五年後の正月十八日、西戎大蒙古國より日本國を襲ふべきよし牒狀をわたす。日蓮が去ぬる文應元年太歳庚申に勘へたりし立正安國論少しも違はず符合しぬ。此の書は白樂天が樂府にも越え、佛の未來記にも劣らず、末代の不思議なに事かこれに過ぎん。賢王聖主の御世ならば、日本第一の權狀にも行はれ、現身に大師號もあるべし。定んで御尋ねありて軍の僉義をもいひ合せ、調伏なんども申しつけられぬらんと思ひしに、其の義なかりしかば、其の年の末十月に十一通の狀をかきて、かたぐ＼へ驚かし申す。國に賢人なんどもあるならば、不思議なる事かな、これはひとへに唯事にはあらず、天照大神正八幡宮の僧に託いて、日本國のたすかるべき事を御計ひのあるかと思はるべきに、さはなくて、或は使を惡口し、或はあざむき、或はとりも入れず、或は返事もなし、或は返事をなせども上へも申さず、これひとへにたゞ事にはあらず。設ひ日蓮が身の事なりとも、國主となり政事をなさん人々は、取りつぎ申したらんには、政道の法ぞかし。況

一 三諦即一—事物を空と觀、假と觀、中と觀れば畢竟一に歸すとの天台の理、これを一心にて觀破するにより一心三觀といふ

に供養し奉りて、此の功德に依つて閻浮提の主阿育大王と生れて、終に八萬四千の石塔を造り、國々に送り給ひ、後に菩提の素懷をとげ給ふ。されば法華經にて四十餘年が程きらはれし女人も佛に成り、五逆闍提と云はれし提婆も佛になりけり。然れば末代濁世の謗法闡提五逆たる僧も俗も尼も女も此の經にて佛に成らん事疑なし。然れば法華經第七に云はく、

於二我滅度後一應レ受二持此經一是人於二佛道一決定無レ有レ疑云云。

此の文こそ、よによに憑敷候へ。此等をさま〴〵思ひつゞけて、觀念の牀の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の音に目をさまし、我が身の内に三諦即一、一心三觀の月曇り無く澄みけるを、無明深重の雲引覆ひつゝ、昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事、此の砌にしられつゝ、自らかくぞ思ひつゞけける。

立ちわたる身のうき雲も晴れぬべしたえぬ御法の鷲の山風

建治元年八月二十一日　　日蓮花押

貧女の一燈の因縁話、貧女名は難陀

夜、佛入らせ給ふべき由有りしかば、梵天帝釋は忉利天より金銀水精の三つの橋をかけたりける。中の橋を佛は入らせ給ふに、佛の左には梵天右には帝釋互に佛に天蓋を指かけまゐらせ、佛の御後には四衆八部、迦葉、迦旃延、目連、須菩提、千二百の羅漢、萬二千の聲聞、八萬の菩薩等を引具して下給ひけるに、五天竺に有りと在る人皆分々に隨ひて油を儲けてともしけり。萬燈をともす人もあり、千燈をともす人もあり、或は百燈乃至一燈をともす人もありけるに、此に貧女と云ふ者ありけり、貧しき事譬ふべき方もなし。身に纒ふ物とては、十府の菅薦にも及ばざる藤の衣計也。四方に馳せ走すとも、一燈の代を求むるにあたはず、空しく歎き思ひつもれる涙、油ならましかば百千萬燈にともすとも盡きじ。思の餘に自ら髪を切り、手づから鬘にひねりて油一燈にかへて、わづかにぞともしたりけるに、佛神も三寶も天神も地神も納受を垂れ給ひけるにや、藍風毗藍風と申す大風吹いて燈を吹き消しけるに、貧女が一燈計りぞ殘りたりける。此の光にて佛は祇園精舍へ入らせ給ひけり。之を以て之を思ふに、たのしくして若干の財を布施すとも、信心よわくば佛に成らん事叶ひ難し。縱ひ貧なりとも信心强うして志深からんは、佛に成らん事疑あるべからず。されば無勝德勝と云ひける者は、土の餅を佛

祇園精舍の由緒―古傳と少しく異る

子祇陀太子と云ひける人、祇陀林と云ふ苑を持ち給ひたりけるに、廣さ四十里有りける。此の苑に人太刀刀を持ちて入りれば折れ碎けける苑也。須達、祇陀太子に値ひ奉りて此の苑を賣らせ給へ、御堂を造らんと云ひければ、太子の給ふ樣、此の苑四十里に、金を厚四寸に敷き給はゞ賣らんとの給ひけり。須達之を買ふべき由を申しければ、太子の給はく、戲にこそ云ひつれ、實には叶ふまじとの給ひけり。須達申しける樣は、天子に二言なしと云ふ、爭か假染の戲にも虛言をし給ふべきと申して、波斯匿王に此の由を申しけり、大王の給はく、祇陀太子は我が位を繼ぐべき者也、爭か假の戲にも虛言をすべきと仰せられければ、太子力なく賣らせ給ひけり。須達四十里に金を四寸に敷いて買ひ取りて悅んで御堂を造らんとしけるに、舍利弗來りて繩をひき地を畫りけるに、舍利弗空を見上げて咲ひけり。須達が云はく、大聖は威儀を亂さゞる理也、いかに咲はせ給ふぞと怪み申しければ、舍利弗の云はく、汝此の堂を造らんとすれば、六欲天に軍起る。かゝる大善根を修する者なれば、我天へこそ迎へんずれとて、互に諍をなす事のをかしと覺ゆる也。汝は一期百年の後には、兜率の內院に生るべしとぞの給ひける。然して後、此の堂を作り畢れり。此の名を祇園精舍と云ふ。此の祇園精舍へ、七月十五日の

紫磨黃金―金中の最貴きもの

迦陵頻伽―天、淨土に居る美音の鳥といふ、實は雀の一種にて印度に居ると

上陽人―唐玄宗の時の一婦人宮に入れられしまゝ一度も君寵を受くることなかりき

と說き給へるも理也。昔佛、摩耶の恩を報じ給はんがために、俄にも知られ給はずして、忉利天へ四月十五日に昇らせ給ひて御坐けるに、五天竺の國王大臣を始として、あやしの賤の男しづの女までも、佛を失ひ奉りて啼き悲みける歎限無く、誠に子を失ひ親に後れたるが如し。愛しき妻を戀ひ男を戀ふる思の闇すら忍び難し、何に況や大覺世尊の三十二相八十種好紫磨金色の粧嚴しくして、迦陵頻伽の御音を以て、一切衆生を皆佛に成し給はんと御經を說かせ給ふ、慈悲深重に御坐す佛の御餘波、惜み進らする歎思ひ遣るに、上陽人の上陽宮に閉ぢ籠められて歎きし歎にも勝れ、堯王の娘娥皇女英の二人、舜王に別れ奉りて歎きし歎にも勝れ、蘇武が胡國に流されて十九年、雪中に住みけん思にも勝れたり。餘の御戀しさに、木を以て佛の御形を作り奉るに、三十二相の一相をだにも作り似せ奉らず。爾の時に優塡大王と申しける王、赤栴檀と云ふ木を以て、忉利天より毗首羯摩天を請じて作り奉りける佛の、忉利天へ本佛の御迎に參らせ給ひけるも、優塡大王の信心深き故也。是こそ一閻浮提に佛を作り奉りける始なれ。又須達長者と云ひける人あり、佛は忉利天に御坐すが、七月十五日に天竺へ下り給ふべきよし聞えければ、御儲に御堂を作らんとしけるに、御造る可き地堂を持たざりければ、波斯匿王の太

若實若不實。此人現世得白癩病云云。

文の心は法華經の行者のとがを、若は實にもあれ、若は不實にもあれ云はん者は、現世には白癩の病をうけ、後生には無間地獄に墮つべしと說かれたり。此等の理を思ひつづくるに、大地の上に針を立てて、大梵天宮より糸を下して、あやまたず糸の針の穴に入る事は有りとも、我等が人間に生るゝ事は難く、又億億萬劫不可思議劫をば過ぐるとも、如來の聖教に値ひ奉る事難し。而るに受け難き人間に生をうけ、値ひ難き聖教に値ひ奉る。設ひ聖教に値ふと云へども、惡知識に値ふならば、三惡道に墮ちん事疑あるべからず。師墮つれば弟子墮つ、弟子墮つれば檀那墮つと云ふ文有るが故に、今幸に一乘の行者に値ひ奉れり。皮をはぎ肉を切り千歲仕へざれども、恣に一念三千、十界十如、一實中道、皆成佛道の妙法を學ぶ。實に過去の宿善拙うして末法流布の世に生れ値はざれば、未來永々を過ぐとも、解脫の道難かるべし。又世間の人の有り樣を見るに、口には信心深き事を云ふといへども、實に神にそむる人は、千萬人に一人もなし。涅槃經に云はく、

佛法不信墮惡道者。如大地土。信佛法成佛者。如爪上土。

文の心は、禍なる哉今日苦みにせめられて卽ち當に命を渇井に沒すべし、一切の萬物は皆是無常也、恨むらくは身を師子に飼ざりける事を。南無歸命十方佛、我が心の淨きことを表知し給へと喚りき。爾の時に天の帝釋狐の文を唱ふる事を聞き給ひて、自ら下界に下り井の中の狐を取り上げ給ひて法を說き給へと宣給ひければ、狐の云はく、逆なる哉、弟子は上に師は下に居たる事をと云ひければ、諸天笑ひ給へり。帝釋誠にことわりと思食して下に居給ひて、法を說き給へとの給ひければ、又狐云はく、逆なる哉、師も弟子も同座なる事をと云ひければ、帝釋、諸天の上の御衣を脫ぎ重ねて高座として登せて法を說かしむ。狐說いて云はく、

有レ人樂レ生惡レ死。有レ人樂レ死惡レ生云云。

文の心は、人有りて生る〻事を樂つて死せん事をにくみ、又人有りて死せん事を願ひて生ん事をにくむと。此の文を狐に値うて帝釋習ひ給ひて、狐を師として敬はせ給ひけり。天台の御釋に云はく、雪山は鬼に隨つて偈を請ひ、天帝は畜を拜して師と爲す。嚢臭きをもて其の金を捨つる事なかれと釋し給へり。されば何に賤しき者なりとも、實の經を知りたらん人を閑にする事あるべからず。然れば法華經の第八に云はく、

に其の心有るは、身自ら法の勝利を壞り失ふ者也云々。又止觀の一に云はく、

如來慇懃稱歎此法。聞者歡喜。常啼東請。善財南求。藥王燒手。普明刎頭。一日三度捨恒河沙身。尚不能報一句之力。況兩肩荷負。百千萬劫。寧報佛法之恩云云。

文の心は如來ねんごろに此の法を稱歎し給へば、聞く者卽ち歡喜す。常啼菩薩は東に法を請ひ、善財菩薩は南に法を求め、藥王菩薩は臂を燒き、普明王は頭を刎られたり。一日に三度恒河の沙の數程身をば捨つるとも、尚一句の法恩を報ずる事あたはじ。況や二つの肩に荷ひ負うて百千萬劫すとも、寧ろ佛法の恩を報ずる事あるべからずと云へる心也。止觀の五に云はく、香城に骨を粉き、雪嶺に身を投ぐとも亦何ぞ以て德を報ずるに足んやと云へり。弘決の四に云はく、昔毗摩大國と云ふ國に狐あり、師子に追はれて逃げけるが、水もなき渇井に落ち入りぬ。師子は井を飛び越えて行きぬ。彼の狐井より上らんとすれども、深き井なれば上る事を得ざりき。既に日數を經るほどに飢死んとす。其の時狐文を唱へて云はく、

禍哉。今日苦所逼。便當没命於丘井。一切萬物皆無常。恨不以身飼師子。南無歸命十方佛表知我心淨無已。

なんどと、樣々に思ひつゞけ給ひて、自ら藏を開きて金銀等の七珍萬寳を僧に供養し、象馬妻子を布施し、然して後大法の螺をふき、大法の鼓を撃つて、四方に法を求め給ふ。爾の時に阿私仙人と申す仙人來つて申しける樣は、實に法を求め給ふ志御坐ば、我が云はん樣に仕へ給へと云ひければ、大に悅んで、山に入つては果を拾ひ、薪をこり、菜をつみ、水をくみ、給仕し給へる事千歳なり。常に御口ずさみには、「情存妙法故、身心無懈惓」とぞ唱へ給ひける。文の心は、常に心に妙法を習はんと存ずる間、身にも心にも仕ふれども、ものうき事なしと云へり。かくの如くして、習ひ給ひける法は、卽ち妙法蓮華經の五字也。爾の時の王とは今の釋迦牟尼佛是なり。佛の仕へ給ひて法を得給ひし事を我が朝に五七五七七の句に結び置きけり、今如法經の時、伽陀に誦する歌に、

法華經を我が得し事は薪こり菜つみ水くみつかへてぞえし。

此の歌を見るに、今は我が身につみしられて哀に覺えける也。實に佛になる道は、師に仕ふるには過ぎず。妙樂大師の弘決の四に云はく、

若有ニ弟子一見ニ師過一者。若實、若不實。其心自壞ニ失法勝利一云云。

文の心は、若し弟子あつて師の過を見さば、若は實にもあれ、若は不實にもあれ、已

磨の浦に藻汐垂れつゝわぶと答へよ」とある歌なるべし、人丸和歌の浦は誤と覺し

刹利も須陀―古歌「いふならく那落の底に入りぬれば刹利も首陀もかはらざりけり」、刹利は尊き武士、首陀は賤しき穢多、地獄に入りてはいづれ異るなしの意

阿防羅刹―地獄の獄卒

は、皮を剝ぎて紙とし、髓の水を取りて硯の水とし、肉を割きて墨とし、骨を摧きて筆として、下方の迦葉佛に値ひ奉りて、「如法應修行、非法不應行、今世若後世、行法者安穩」云々と、此の文を傳へ給ふ。薩埵王子としては飢ゑたる虎の爲に身を與へ、雪山童子としては半偈の爲に身を投げ、尸毗王としては鳩の爲に肉を秤にかけ、乞眼婆羅門には眼をくじりて取らせ給ひき。又佛、大國の王と御座し時は、宿善内に催し月卿雲客の政をも忘れ、百官萬乘に仰がれ給ふ十善の樂も、風の前の燈、あだなる春の夜の夢、籬につたふ槿華の日影をまつ程ぞかし。然るに過去の戒善いみじきに依りて、今生には大國の王たりと云へども、無常の殺鬼にさそはれて、一期空しくして後、修するところの善無くんば、阿鼻大城の炎の底に沈み、刹利も須陀もかはらぬ例にて、三熱の炎にまじはり、鐵繩五體をしばり、三熱の彈丸を口に入れ、阿防羅刹、三鈷の菱鋒を手に取り、邪見の音を荒らかにして、五體身分を取々に責むるならば、音を天に響かし叫ぶとも、地に臥して歎くとも、百官萬乘も來つて助くること無く、親類眷屬も來つて救ふことと無からん。又錦帳の内にして、夜々のねざめの牀にして、天にあらば比翼の鳥、地に住めば連理の枝とならんと、月日を送り年を重ねて契りし妻子も、來つて訪ふ事はあらじ

身延山御書

誠に身延山の栖は、ちはやふる神も惠を垂れ、天下りましますらん。心無きしづの男しづの女までも、心を留めぬべし。哀を催す秋の暮には、草の庵に露深く、檐に集多く蜘蛛の糸玉を連き、紅葉いつしか色深うして斷々に傳ふ懸樋の水に影を移せば、名にしおふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ。又後には峨々たる深山聳えて梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く、前には湯々たる流水湛へて實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし。かゝる砌なれば、庵の内には晝は終日に一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳へ聞く釋尊の住み給ひけん鷲峰を、我が朝此の砌に移し置きぬ。霧立ち嵐烈しき折々も、山に入りて薪をこり、露深き草を分けて深谷に下りて芹をつみ、山河の流もはやき巖瀬に菜をすゝぎ、袂濡れて干しわぶる思は昔人丸が詠じける和歌の浦に藻汐垂れつゝ世を渡る、海士もかくやとぞ思ひ遣る。つくづくと浮身の有樣を案ずるに、佛の法を求め給ひしに異ならず。昔釋尊、樂法梵志として

和歌の浦に―これは在原行平の「わくらはにといふ人あちば須

て投げんは易し、大石を負うて大海をわたらんはやすし、日本國にして此の法門を立てんは大事なるべし云々。靈山淨土の教主釋尊、寶淨世界の多寶佛、十方分身の諸佛、地涌千界の菩薩等、梵釋日月四天等、冥に加し顯に助け給はずば、一時一日も安穩なるべしや。

有下似二羅漢一一闡提上而行二惡業一等云云。

此等の經文は正法の强敵と申すは惡王惡臣よりも外道魔王よりも、破戒の僧侶よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし。されば妙樂大師書いて云はく、

第三最甚。以二後後者轉難一レ識故等云云。

法華經の五の卷に云はく、

此法華經。諸佛如來祕密之藏。於二諸經中一最在二其上一等云云。

此の經文に「最在其上」の四字あり。されば此の經文のごときんば、法華經を一切經の頂にありと申すが法華經の行者にてはあるべきか。而るを又國に尊重せらるゝ人々あまたありて、法華經にまさりておはする經經ましますと申す人に責合ひ候はん時、かの人は王臣に御歸依あり、法華經の行者は貧道なるゆゑに、國擧つてこれをいやしみ候はん時、不輕菩薩のごとく賢愛論師がごとく申し强らば身命に及ぶべし。此が第一の大事なるべしとみえて候ふ。此の事は今の日蓮が身にあたれり。予が分齊として弘法大師、慈覺大師、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏なんどを法華經の强敵なり、經文まことならば、無間地獄は疑なしなんど申すは、裸形にして大火に入るは易し、須彌を手にとつ

いかやうなる事のあるゆゑに身命を捨つるまでにてあるやらん。委細にうけ給はり候はん。

答へて云はく、予が初心の時の存念は、傳教、弘法、慈覺、智證等の勅宣を給うて漢土にわたりし事の、我不愛身命にあたれる歟。玄奘三藏の漢土より月氏に入りしに、六生が間身命をほろぼしし此等歟。雪山童子の半偈のために身をなげ、藥王菩薩の七萬二千歳が間、臂を燒きし事歟なんど思ひしほどに、經文のごときんば此等にはあらず。經文に「我不愛身命」と申すは上に三類の敵人をあげて彼等がのりせめ、刀杖に及んで身命を奪ふともみえたり。又涅槃經の文に、寧喪身命等と說かれて候ふは、次下の經文に云はく、

有㆓一闡提㆒。作㆓羅漢像㆒。住㆓於空處㆒誹㆓謗方等經典㆒。諸凡夫人見已。皆謂㆓眞阿羅漢是大菩薩㆒等云云。

彼の法華經の文に、第三の敵人を說いて云はく、

或有㆘阿蘭若衲衣。在㆓空閑㆒乃至爲㆔世所㆓恭敬㆒。如㆗六通羅漢㆖等云云。

般泥洹經に云はく、

今日本國の一切衆生無間地獄に墮ちん事疑ふべしや。法華經の八の卷に云はく、

若於後世受持讀誦是經典者。乃至所願不虛。亦於現世得其福報。

又云はく、

若有供養讃歎之者。當於今世得現果報等云云。

此の二つの文の中に、亦於現世得其福報の八字、當於今世得現果報の八字、已上十六字の文虛しくして、日蓮今生に大果報なくば、如來の金言は提婆が虛言に同じく、多寶の證明は倶伽利が妄語に異らじ。謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮つべからず。三世の諸佛もましまさざるか。されば我が弟子等、心みに法華經のごとく身命もをしまず修行して、此の度佛法の定否を心みよ。南無妙法蓮華經。

抑も此の經の文に、

我不愛身命。但惜無上道。

涅槃經に云はく、

譬如王使善能談論。巧於方便。奉命他國。寧喪身命。終不匿王所說言教。智者亦爾。於凡夫中不惜身命。要必宣說大乘方等如來祕藏一切衆生皆有佛性等云云。

輪王—轉輪聖王は世界中を飛び廻る力ありといふ

子最爲第一。持法華經者。亦復如是。

と御心えあるべし。當世日本國の智人等は衆星のごとし、日蓮は滿月のごとし。

問うて云はく、古かくのごとくいへる人ありや。

答へて云はく、傳教大師の云はく、

當知他宗所依經。未最爲第一。其能持經者。亦未第一。天台法華宗。所持經最爲第一故。能持法華者。亦衆生中第一。已據佛說。豈自歎哉等云云。

夫驥驎の尾につける蟎の、一日に千里を飛ぶといひ、輪王に隨へる劣夫の、須臾に四天下をめぐるといふをば難ずべしや、疑ふべしや。豈自歎哉の釋は肝に銘ずるか。若爾らば法華經を經のごとくに持つ人は、梵王にもすぐれ帝釋にもこえたり。脩羅を隨へば須彌山をも負ひぬべし。龍神をせめ使役はゞ大海をも汲み干しぬべし。傳教大師云はく、

讃者積福於安明。謗者開罪於無間等云云。

法華經に云はく、

見有讀誦書持經者。輕賤憎嫉。而懷結恨。乃至其人命終。入阿鼻獄等云云。

教主釋尊の金言まことならば、多寶佛の證明違はずば、十方の諸佛の舌相一定ならば、

著―善しと思ひ込む心

有ㇾ能受ニ持是經典ニ者。亦復如ㇾ是。於ニ一切衆生中ニ亦爲ニ第一等云云。

此の經文をもつて案ずるに、華嚴經を持てる普賢菩薩、解脫月菩薩等、龍樹菩薩、馬鳴菩薩、法藏大師、淸涼國師、則天皇后、審祥大德、良辨僧正、聖武天皇、深密般若經を持てる勝義生菩薩、須菩提尊者、嘉祥大師、玄奘三藏、太宗、高宗、觀勒、道昭、孝德天皇、眞言宗の大日宗を持てる金剛薩埵、龍猛菩薩、龍智菩薩、印生王、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏、玄宗、代宗、慧果、弘法大師、慈覺大師、涅槃經を持てる迦葉童子菩薩、五十二類、曇無懺三藏、光宅寺の法雲、南三北七の十師等よりも、末代惡世の凡夫の、一戒も持たず一闡提のごとくに人には思はれたれども、經文のごとく已今當にすぐれて、法華經より外は佛になる道なしと強盛に信じて、而も一分の解なからん人人は、彼等の大聖には百千萬億倍のまさりなりと申す經文なり。彼の人々は、或は彼の經經に且く人を入れて法華經へ移さんがためなる人もあり。或は彼の經に著をなして、法華經へ入らぬ人もあり。或は彼の經經に留逗るのみならず、彼の經經を深く執するゆゑに、法華經を彼の經に劣るといふ人もあり。されば今法華經の行者は心うべし。

譬如ニ一切川流江河諸水之中海爲ニ第一ニ持ニ法華經ヲ者亦復如ㇾ是。又如ニ衆星之中月天

三界—欲界色界無色界

ぬ、無間の罪人なり。汝いかでか一閻浮提第一の智人となのれる。大地獄に墮ちざるべしや。恐ろしおそろし。

答へて云はく、汝は七慢九慢八慢等をば知れりや、大覺世尊は三界第一と名のらせ給ふ。一切の外道が云はく、只今天に罰せらるべし、大地われて入りなんと。日本國の七寺三百餘人が云はく、最澄法師は大天が蘇生か、鐵腹が再誕か等云々。而りといへども、天も罰せず、かへつて左右を守護し地もわれず金剛のごとし。傳教大師は叡山を立てて一切衆生の眼目となる。結句七大寺は落ちて弟子となり、諸國は檀那となる。されば現に勝れたるを勝れたりといふ事は、慢に似て大功德なりけるか。傳教大師云はく、

天台法華宗勝諸宗者。據所宗經故。不自讃毀佗等云云。

法華經第七に云はく、

衆山之中。須彌山爲第一。此法華經亦復如是。於諸經中。最爲其上等云云。

此の經文は已說の華嚴般若大日經等、今說の無量義經、當說の涅槃經等の五千七千。月支、龍宮、四王天、忉利天、日月の中の一切經、盡十方界の諸經は、土山、黑山、小鐵圍山、大鐵圍山のごとし。日本國にわたらせ給へる法華經は須彌山のごとし。又云はく、

小路をわたす―頸を曝さん爲に町中をひき廻すこと

には佗國にせめらるべし。其の國主もうせ、其の國もほろびなんずと說かれて候ふ。痛と痒とはこれなり。日蓮が身には今生にはさせる失なし。但國を扶けんがため生國の恩を報ぜんと申せしを御用ひなからんこそ本意にあらざるに、剰へ召し出して法華經の第五の卷を懷中せるを取出して、さん〳〵と呵責み、結句は小路を渡しなんどせしかば、申したりしなり。日月天に處し給ひながら、日蓮が大難にあふを今度代らせ給はずば、一つには日蓮が法華經の行者ならざるか、忽に邪見を改たむべし。若日蓮法華經の行者ならば、忽に國に驗を見せ給へ。若しからずは今の日月等は、釋迦多寶十力の佛をたぶらかし奉る大妄語の人なり。提婆が虛誑罪、俱伽利が大妄語にも、百千萬億倍すぎさせ給へる大妄語の天なりと、聲をあげて申せしかば、忽に出來せる自界反逆難なり。されば國土いたく亂れば我が身はいふに甲斐なき凡夫なれども、御經を持ちまゐらせ候ふ分齊は、當世には日本第一の大人なりと申すなり。

問うて云はく、慢煩惱は七慢九慢八慢あり。汝が大慢は佛教に明すところの大慢にも百千萬億倍すぐれたり。彼の德光論師は彌勒菩薩を禮せず、大慢婆羅門は四聖を座とせり。大天は凡夫にして阿羅漢となのる。無垢論師が五天第一といひし、此等は皆阿鼻に墮ち

経を信じ始めしは、日本國には一渧一微塵のごとし。法華經を二人三人十人百千萬億人唱へ傳ふるほどならば、妙覺の須彌山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。佛になる道は此よりほかに又もとむる事なかれ。

問うて云はく、第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時は、いかにとして我を損せば、自他の軍起るべしとは知り給ふや。答ふ。大集經五十に云はく、

若復有諸刹利國王。作諸非法。惱亂世尊聲聞弟子。若以毀罵。刀杖打斫。及奪衣鉢種種資具。若他給施作留難者。我等令彼自然卒起他方怨敵。及自界國土亦令兵起飢疫飢饉非時風雨鬪諍言訟譏謗。又令其王不久復當亡失己國等云云。

夫諸經に諸文多しといへども、此の經文は、身にあたり時にのぞんで殊に尊く覺ゆるゆゑに、これを撰し出す。此の經文に我等とは梵王と帝釋と第六天の魔王と日月と四天等の三界の一切の天龍等なり。此等の上主佛前に詣して誓つて云はく、佛の滅後、正法像法末代の中に、正法を行ぜん者を邪法の比丘等が國主にうつたへば、王に近きもの、王に心寄なる者、我が尊しと思う者のいふことなれば、理不盡に是非を糾さず、彼の智人をさんぐ〵に恥に及ばせなんどせば、其の故ともなく其の國に卒に大兵亂出現し、後

十如是—總ての事理に含まる〜十種の普遍性
相—すがた

みならず、多く生捕にせらるべし、建長寺、壽福寺、極樂寺、大佛、長樂寺等の一切の念佛者禪僧等が、寺塔をば燒きはらひて、彼等が頸を由比の濱にて切らずは日本國必ずほろぶべしと申し候ひ了んぬ。第三には去年文永十一年四月八日、左衛門の尉に語つて云はく、王地に生ひたれば身をば隨へられ奉るやうなりとも、心をば隨へられたてまつるべからず。念佛の無間獄、禪の天魔の所爲なる事は疑なし。殊に眞言宗が此の國土の大なるわざはひにては候ふなり。大蒙古を調伏せん事、眞言師には仰せ付けらるべからず。若大事を眞言師調伏するならば、いよ〳〵急いで此の國ほろぶべしと申せしかば、頼綱問うて云はく、何頃寄せ候ふべき。予言はく、經文には何時とは見え候はねども、天の御氣色いかり少からず、急に見えて候ふ。よも今年は過し候はじと語りたりき。此の三つの大事は、日蓮が申したるにはあらず、只偏に釋迦如來の御神我が身に入りかはせ給ひけるにや、我が身ながらも悦び身にあまる。法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。經に云はく、所謂諸法如是相と申すは何事ぞ。十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば、佛は世に出でさせ給ふ。智人は起を知る、蛇みづから蛇を知るとはこれなり。一滴あつまりて大海となる、微塵つもりて須彌山となれり。日蓮が法華

蓮華經南無妙法蓮華經と唱へ、掌を合せて、たすけ給へ日蓮の御房日蓮の御房とさけび候はんずるにや。例せば月支のいふ大族王は、幻日王に掌をあはせ、日本の盛時は梶原をうやまふ。大慢のものは敵に隨ふといふ、この理なり。彼の輕毀大慢の比丘等は始には杖木をとゝのへて不輕菩薩を打ちしかども、後には掌をあはせて失を悔ゆ。提婆達多は釋尊の御身に血をいだししかども、臨終の時には南無と唱へたりき。佛とだに申したりしかば、地獄には墮つべからざりしを、業深くして但南無とのみとなへて佛とはいはず。今日本國の高僧等も、南無日蓮聖人と唱へんとすとも、南無計りにてやあらんずらん。不便ふびん。外典に云はく、未萠を知るを聖人といふ。內典に云はく、三世を知るを聖人といふ。余に三度の高名あり、一つには去にし文應元年（太歲庚申）七月十六日に、立正安國論を最明寺殿に奏したてまつりし時、宿谷の入道に向ひて云はく、禪宗と念佛宗とを失ひ給ふべしと申させ給へ、此の事を御用ひなきならば、此の一門より事起りて佗國に攻められさせ給ふべし。二には去にし文永八年九月十二日申の時に、平の左衞門の尉に向ひて云はく、日蓮は日本國の棟梁也、予を失ふは日本國の柱橦を倒すなり、只今に自界反逆難とて、同士打して、佗國侵逼難とて、此の國の人々佗國に打ち殺さるゝの

を失ふべし。譬へば須彌山は金の山なり、三千大千世界の草木をもつて四天六欲に充滿して積籠めて、一年二年百千萬億年が間燒くとも、一分も損ずべからず。而るを劫火起らん時、須彌の根より豆計りの火いでて、須彌山を燒くのみならず、三千大千世界をやき失ふべし。若し佛記のごとくならば、十宗八宗内典の僧等が、佛敎の須彌山をば燒き拂ふべきにや。小乘の倶舍、成實、律僧等が、大乘を嫉む胸の瞋恚は炎なり。眞言の善無畏、禪宗の三階等、淨土宗の善導等は、佛敎の師子の肉より出來せる蝗虫の比丘なり。傳敎大師は三論法相華嚴等の日本の碩德等を六蝨と書かせ給へり。日蓮は眞言禪宗淨土等の元祖を三虫となづく。又天台宗の慈覺安然慧心等は、法華經傳敎大師の師子の身の中の三虫なり。此等の大謗法の根源をたゞす日蓮に怨をなせば、天神もをしみ、地祇もいからせ給ひて災妖も大に起るなり。されば心得べし、一閻浮提第一の大事を申すゆゑに最第一の瑞相此に起れり。あはれなるかなや、なげかしきかなや、日本國の人皆無間大城に墮ちむ事よ。悅ばしきかなや、樂しいかなや、不肖の身として今度心田に佛種を植ゑたる。今にしも見よ、大蒙古國數萬艘の兵船をうかべて日本國をせめば、上一人より下萬民にいたるまで、一切の佛寺一切の神寺をばなげすてて、各々聲をつるべて南無妙法

は内賊と申して親類より大兵亂起り、我が方人しぬべき者をば、皆打ち失ひて、後には佗國に攻められて、或は自殺し或はいけどりにせられ、或は降人となるべし。是偏に、佛法をほろぼし國をほろぼす故なり。守護經に云はく、

彼釋迦牟尼如來所有教法。一切天魔外道惡人五通神仙。皆不破壞乃至少分。而此名相諸惡沙門。皆悉毀滅。令無有餘。如須彌山假使盡於三千界中艸木爲薪。長時焚燒。一毫無損。若劫火起。火從内生。須臾燒滅。無餘灰燼等云云。蓮華面經云。佛告阿難。譬如師子命終。若空若地。若水若陸。所有衆生。不敢食師子身宍。唯師子自生諸虫。自食師子之宍。阿難。我之佛法。非餘能壞。是我法中諸惡比丘。破我三大阿僧祇劫。積行勤苦。所集佛法等云云。

經文の心は、過去の迦葉佛、釋迦如來の末法の事を訖哩枳王にかたらせ給ひ、釋迦如來の佛法をばいかなるものが失ふべき。大族王の五天の堂舍を燒き拂ひ、十六大國の僧尼を殺せし、漢土の武宗皇帝の九國の寺塔四千六百餘所を消滅せしめ、僧尼二十六萬五百人を還俗せし等のごとくなる惡人等は、釋迦の佛法をば失ふべからず。三衣を身にまとひ、一鉢を頸にかけ、八萬法藏を胸にうかべ、十二部經を口に誦せん僧侶が、彼の佛法

由愛敬惡人治罰善人故。星宿及風雨。皆不以時行等云云。

此の經文のごときんば、此の國に惡人のあるを、王臣此を歸依すといふ事疑なし。又此の國に智人あり、國主此を惡みて怨すといふ事も又疑なし。又云はく、

三十三天衆。咸生忿怒心。變怪流星墮。二日倶時出。佗方怨賊來。國人遭喪亂等云云。

すでに此の國に天變あり、地妖あり、佗國より此を攻む。三十三天の御いかり有ること又疑なきか。仁王經に云はく、

諸惡比丘。多求名利。於國王太子王子前。自說破佛法因緣破國因緣。其王不別信聽此語等云云。

又云はく、

日月失度。時節反逆。或赤日出。或黑日出。二三四五日出。或日蝕無光。或日輪一重二重四五重輪現等云云。

文の心は、惡比丘等國に充滿して國王太子王子等を誑かして破佛法破國の因緣を說かば、其の國の王等此の人にたぼらかされて思すやう、此の法こそ持佛法の因緣、持國の因緣と思ひ、此の言を納めて行ふならば、日月に變あり、大風と大雨と大火等出來し、次に

國主—執權北條氏をさす、天子にあらず

答へて云はく、見思を斷盡し、四十一品の無明を盡せる大菩薩だにも、此の事を知らせ給はず。いかに況んや一毫の惑をも斷ぜぬ者どもの、此の事を知るべきか。

問うて云はく、智人なくばいかでか此を對治すべき。例せば病の所起を知らぬ人の、病人を治すれば人必ず死す。此の災の根源を知らぬ人々が祈をなさば、國まさに亡びん事疑なきか。あらあさましや、あらあさましや。

答へて云はく、蛇は七日が内の大雨をしり、烏は年中の吉凶をしる。此則大龍の所從又久學のゆゑか。日蓮は凡夫なり。此の事をしるべからずといへども、汝等にほどこれを曉さん。彼の周の平王の時、禿にして裸なる者出現せしを、辛有といひし者うらなつて云はく、百年が内に世ほろびん。同じき幽王の時、山川崩れ大地震ひき。白陽と云ふ者勘へていはく、十二年の内に大王事に値せ給ふべし。今の大地震大長星等は國主日蓮をにくみて、亡國の法たる禪宗と念佛者と眞言師を方人せらるれば天怒らせ給ひていださせ給ふところの災難なり。

問うて云はく、なにをもつてか此を信ぜん。

答へて云はく、最勝王經に云はく、

四十一品―まよひの階段を淺より深へ四十一種
元品―最後四十二段にある根柢のまよひ

欽明より當帝にいたるまで七百餘年、いまだ聞かずいまだ見ず、南無妙法蓮華經と唱へよと他人をすゝめ我と唱へたる智人なし。日出でぬれば星かくる。賢王來れば愚王ほろぶ。實經流布せば權經の止まり、智人南無妙法蓮華經と唱へば愚人の此に隨はんこと、影と身と聲と響とのごとくならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なる事、あへて疑なし。これをもつて推せよ、漢土月支にも一閻浮提の内にも、肩をならぶる者は有るべからず。

問うて云はく、正嘉の大地震文永の大彗星はいかなる事によつて出來せるや。

答へて云はく、天台云はく、

智人知レ起。蛇自識レ蛇等云云。

問うて云はく、心いかん。

答へて云はく、上行菩薩の大地より出現し給ひたりしをば、彌勒菩薩、文殊師利菩薩、觀世音菩薩、藥王菩薩等の四十一品の無明を斷ぜし人々も、元品の無明を斷ぜざれば愚人といはれて、壽量品の南無妙法蓮華經の末法に流布せんずるゆゑに、此の菩薩を召し出されたるとは知らざりしといふ事なり。

問うて云はく、日本漢土月支の中に、此の事を知る人あるべしや。

度々諫められども、いよ〱あだをなすゆゑに、天の御計として、鄰國の聖人に仰せつけられて此をいましめ、大鬼神を國に入れて人の心をたぼらかし、自界反逆せしむ。吉凶につけて瑞大なれば、難多かるべき理にて、佛滅後二千二百三十餘年が間、いまだ出でざる大長星、いまだ震らざる大地震出來せり。漢土日本に、智慧すぐれ才能いみじき聖人は度々ありしかども、いまだ日蓮ほど法華經の方人して、國土に强敵多く儲けたる者なきなり。まづ眼前の事をもつて、日蓮は閻浮提第一の者と知るべし。佛法日本に渡つて七百餘年、一切經は五千七千、宗は八宗十宗、智人は稻麻のごとし。弘通は竹葦に似たり。しかれども佛には阿彌陀佛、諸佛の名號には彌陀の名號ほど弘まりておはするは候はず。此の名號を弘通する人は、慧心は往生要集をつくる。日本國三分が一は一同の彌陀念佛者、永觀は十因と往生講の式をつくる。扶桑三分が二分は一同の念佛者、法然、選擇をつくる。本朝一同の念佛者。而れば今の彌陀の名號を唱ふる人々は、一人が弟子にはあらず。此の念佛と申すは雙觀經、觀經、阿彌陀經の題名なり。權大乘經の題目の廣宣流布するは、實大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや。心あらん人は此を推しぬべし。權經流布せば實經流布すべし。權經の題目流布せば實經の題目も又流布すべし。

一子—最愛の一人子

に又鎌倉日本を失はんと祈るかと申すなり。これをよく〳〵知る人は一閻浮提一人の智人なるべし。よく〳〵知るべきか。今は鎌倉の世盛なるゆゑに、東寺天台園城七寺の眞言師等と、竝に自立をわすれたる法華經の謗法の人々、關東に落ち下りて、頭をかたぶけ膝を屈め、やう〳〵に武士の心をとりて、諸寺諸山の別當となり、長吏となりて、王位を失ひし惡法をとりいだして、國土安穩と祈れば、將軍家竝びに所從の侍已下は、國土の安穩なるべき事なんめりとうち思ひて有るほどに、法華經を失ふ大禍の僧どもを用ひられば、國定めてほろびなん。亡國のかなしさ亡身のかなしさに、身命をすてて此の事を顯すべし。國主世を持つべきならば、怪しと思ひて尋ぬべきところに、たゞ讒言のことばのみ用ひて、やう〳〵の讐をなす。而るに法華經守護の梵天帝釋日月四天地神等は、古の謗法をば不思議とは思せども、此を知れる人なければ、一子の惡事のごとくうち許して、詐り愚なる時もあり、又すこし摘み知らする時もあり。今は謗法を用ひたるだに不思議なるに、稀まれ諫曉する人を、かへりてあだをなす。一日二日一月二月一年一年ならず數年に及ぶ。彼の不輕菩薩の杖木の難に値ひしにもすぐれ、覺德比丘の殺害に及びしにも越えたり。而る間、梵釋の二王、日月四天衆星地神等、やう〳〵に怒り、

日種—實は釋迦佛五姓の一、その祖の一姓より來る

還—かへつてきた

より月落つるとゆめにみて、耆婆大臣に合せさせ給ひしかば、大臣合せて云はく、佛の御入滅なり。須拔多羅、天より日落つるとゆめにみる。我と合せて云はく、佛の御入滅なり。脩羅は帝釋と合戰の時、まづ日月を射たてまつる。夏の桀、殷の紂と申せし惡王は、常に日をいて身をほろぼし國をやぶる。摩耶夫人は日を孕むとゆめにみて、悉達太子をうませ給ふ。かるがゆゑに佛の幼名をば日種といふ。日本國と申すは天照大神の日天にてましますゆゑなり。されば此のゆめは、天照大神、傳教大師、釋迦佛、法華經をいたてまつれる矢にてこそ、一部の疏は候ふなれ。日蓮は愚癡の者なれば經論も知らず、但此の夢をもつて法華經に眞言すぐれたりと申す人は、今生には國をほろぼし家を失ひ、後生には阿鼻地獄に入るべしとは知りて候ふ。今現證あるべし。日本國と蒙古との合戰に、一切の眞言師の調伏を行ひ候へば、日本かちて候ふならば、眞言はいみじかりけりとおもひ候ひなん。但し承久の合戰に、そこばくの眞言師のいのり候ひしが、調伏せられ給ひし權の大夫殿はかたせ給ひ、後鳥羽院は隱岐の國へ、御子の天子は佐渡の島々へ、調伏しやりまゐらせ候ひぬ。結句は野干の鳴の己が身におふなるやうに、還著於本人の經文に少しもたがはず。叡山の三千人、鎌倉に攻められて、一同に從ひはてぬ。しかる

不レ依二修多羅一黒論一。天台の云はく、「復與二修多羅一合者。錄而用レ之。無レ文無レ義。不レ可二信受一」。傳教大師云はく「依二憑佛說一莫レ信二口傳一等云云」

此等の經論釋のごときんば、夢を本にはすべからず、ただついさして法華經と大日經との勝劣を分明に說きたらん經論の文こそ、大切に候はめ。但し印眞言なくば、木畫の像の開眼の事、此又嗚呼の事なり。眞言のなかりし已前には、木畫の開眼はなかりしか。天竺漢土日本には、眞言宗已前の木畫の像は、或は行き或は說法し、或は御物言あり。印眞言を以て佛を供養せしよりこのかた、利生もかた〴〵失せたるなり。此は常の論談の義なり。此の一事に於いては、但し日蓮は分明の證據を餘所に引くべからず。慈覺大師の御釋を仰いで信じて候ふなり。

問うていはく、何と信ぜらるゝや。

答へて云はく、此の夢の根源は、眞言は法華經に勝ると造り定めての御ゆめなり。此の夢吉夢ならば、慈覺大師の合せさせ給ふがごとく眞言勝るべし。但し日輪を射るとゆめにみたるは、吉夢なりといふべきか。內典五千七千餘卷、外典三千餘卷の中に、日を射るとゆめに見て吉夢なる證據をうけ給はるべし。少々此より出し申さん。阿闍世王は、天

異朝―支那
八大德―八高僧
稻麻竹葦―澤山にあるもののたとへ
大日佛眼―共に眞言所崇の佛

世一矣。仍安二置佛像前一。七日七夜翹二企深誠一。勤二修祈請一。至二五日五更一夢。當二于正午一。仰二見日輪一。而以レ弓射レ之。其箭當二日輪一。日輪卽轉動。夢覺之後。深悟レ通二達於佛意一。可レ傳二於後世一等云云。

慈覺大師は本朝にしては傳救弘法の兩家を習ひきはめ、異朝にしては八大德並に南天の寶月三藏等に、十年が間、最大事の祕法をきはめさせ給へる上、二經の疏をつくり了り、重ねて本尊に祈請をなすに、智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうち驚かせ給ひ、歡喜のあまりに仁明天皇に宣旨を申し副へさせ給ひ、天台の座主を眞言の官主となし、眞言の鎭護國家の三部とて、今に四百餘年が間、碩學稻麻のごとし、渴仰竹葦に同じ。されば桓武傳教等の日本國建立の寺塔は一字もなく眞言の寺となりぬ。公家も武家も一同に眞言師を召して師匠と仰ぎ官をなし寺をあづけ給ふ。佛事の木畫の開眼供養は、八宗一同に大日佛眼の印眞言なり。

疑つて云はく、法華經を眞言に勝ると申す人は此の釋をばいかゞせん、用ふべきか又捨つべきか。

答ふ。佛の未來を定めて云はく、「依レ法不レ依レ人」龍樹菩薩の云はく、「依二修多羅一白論。」

此項慈覺が肝心の主義

に總持院と申す大講堂を立て、御本尊は金剛界の大日如來、此の御前にして大日經の善無畏の疏を本として、金剛頂經の疏七卷、蘇悉地經の疏七卷、已上十四卷をつくる。此の疏の肝心の釋に云はく、

教有二二種一。一顯示教。謂三乘教。世俗勝義。未二圓融一故。二祕密教。謂一乘教。世俗勝義。一體融故。祕密教中。亦有二二種一。一理祕密教。諸華嚴般若維摩法華涅槃等。但說二世俗勝義不二一。未レ說二眞言密印事一故。二事理俱密教。謂大日經金剛頂經蘇悉地經等。亦說二世俗勝義不二一。亦說二眞言密印事一。故等云云。

釋の心は法華經と眞言の三部との勝劣を定めさせ給ふに、眞言の三部經と法華とは、所詮の理は同じく一念三千の法門なり。しかれども密印と眞言等の事法は、法華經は缺けておはせず。法華經は理祕密、眞言の三部經は事理俱密なれば、天地雲泥なりと書かれたり。しかも此の筆は私の釋にはあらず、善無畏三藏の大日經の疏の心なりと思せども、なほ／＼二宗の勝劣不審にやありけん、はた又佗人の疑を散ぜんとや思しけん。

大師慈覺の傳に云はく、

大師造二二經疏一。成レ功已畢。心中獨謂。此疏通二佛意一否乎。若不レ通二佛意一者。不レ流二傳於

年分得度—毎年その宗にて出家する數を官にて定めたるもの

宗のはやりて、一國を失はんとする因縁は、慧心の往生要集の序よりはじまれり。師子の身の中の虫の師子を食ふと、佛の記し給ふは、まことなるかなや。傳教大師は日本國にして、十五年が間、天台眞言等を自見せさせ給ふ。生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給ひしかども、世間の不審をはらさんがために、漢土に亙りて天台眞言の二宗を傳へ給ひし時、漢土の人々はやう／＼の義ありしかども、我が心には法華は眞言にすぐれたりと思召しゆゑに、眞言宗の宗の名字をば削らせ給ひて、天台宗の止觀、眞言等かかせ給ふ。十二年の年分得度の者二人を置かせ給ひ、重ねて止觀院に法華經、金光明經、仁王經の三部を鎭護國家の三部と定めて宣旨を申し下し、永代日本國の第一の重寶、神璽、寶劍、內侍所とあがめさせ給ひき。叡山第一の座主義眞和尚、第二の座主圓澄大師までは、此の義相違なし。第三慈の覺大師御入唐、漢土にわたりて十年が間顯密二道の勝劣を、八箇の大德にならひ傳ふ。又天台宗の人々、廣修、維蠲等にならはせ給ひしかども、心の內に思しけるは、眞言宗は天台宗には勝れたりけり、我が師傳教大師は、いまだ此の事をばくはしく習はせ給はざりけり、漢土に久しくもわたらせ給はざりける故に、此の法門は荒唐に見おはしけるやと思して、日本國に歸朝し、叡山東塔止觀院の西

久くなり候へば、いやしむべきにはあらねども、申さば信ずる人もやありなん。これよりも、百千萬億倍信じがたき最大の惡事侍り。慈覺大師は傳教大師の第三の御弟子なり。しかれども上一人より、下萬民にいたるまで、傳教大師には勝れておはします人なりと思へり。此の人、眞言宗と法華宗の實義を極めさせ給ひて候ふが、眞言は法華經には勝れたりと書かせ給へり。而るを叡山三千人の大衆、日本一州の學者等、一同の歸伏の義なり。弘法の門人等は、大師の法華經を、華嚴經に劣ると書かせ給へるは、我が方ながらも少し強きやうなれども、慈覺大師の釋をもつて思ふに、眞言宗の法華經に勝れたることは一定なり。日本國にして、眞言宗を法華經に勝るゝと立つるをば、叡山こそ強かたきなりぬべかりつるに、慈覺をもつて三千人の口をふさぎなば、眞言宗は思ふごとし。されば東寺第一の方人、慈覺大師には過ぐべからず。例せば、淨土宗は餘國にては弘まるとも、日本國にしては、延曆寺のゆるされなからんには、無邊劫は經とも叶ふまじかりしを、安然和尚と申す叡山第一の古德、敎時諍論と申す文に、九宗の勝劣を立てられたるに、第一眞言宗、第二禪宗、第三天台法華宗、第四華嚴宗等云々。此の大謬釋について、禪宗は日本國に充滿して、すでに亡國とならんとはするなり。法然が念佛

小僧あり、彼をたゞすべきよし申せしかども、王臣萬民これをもちひず、結句は大慢が弟子等檀那等に申しつけて、無量の妄語をかまへて惡口打擲せしかども、すこしも命を惜まずのゝしりしかば、帝王賢愛を憎みて詰めさせんとし給ひしほどに、かへりて大慢がせめられたりしかば、大王天に仰ぎ地に伏して嘆いての給はく、朕はまのあたり此の事を聽いて邪見をはらしぬ、先王はいかに此の者に誑されて、阿鼻地獄におはすらんと。賢愛論師の御足にとりつきて、悲涙せさせ給ひしかば、賢愛の御計らひとして、大慢を驢にのせて、五竺に面をさらし給ひければ、いよ〳〵惡心盛になりて、現身に無間地獄に墮ちぬ。今の世の眞言と禪宗等とは、此にかはれりや。漢土の三階禪師の云はく、教主釋尊の法華經は、第一第二階の正像の法門なり、末代のためには我がつくれる普經なり、法華經を今の世に行ぜん者は、十方の大阿鼻獄に墮つべし、末代の根機にあたらざるゆゑなりと申して、六時の禮懺、四時の坐禪、生身佛のごとくなりしかば、人多く尊みて弟子萬餘人ありしかども、わづかの小女の法華經を讀みしにせめられて、當坐には音を失ひ、時には大蛇となりて、そこばくの檀那弟子竝に小女處女等をのみ食ひしなり。今の善導法然等が、千中無一の惡義もこれにて候ふなり。此等の三つの大事は、すでに

六時—後夜、晨朝、日中、日没、初夜、中夜
禮懺—禮拜と懺悔、おつとめなり

九思一言—一言を發する前に九回考をなすこと、愼重の態度をいふ
沐に三—周公の士を待つにつとめたる故事
本願—建立の願を立てたる主者
摩訶衍—大乘

とも、譯者の誤る事もあるぞかし。よく〳〵思慮のあるべかりけるか。孔子は九思一言、周公旦は沐に三にぎり、食には三はかれけり。外書の、はかなき世間の淺き事を習ふ人すら、智人はかう候ふぞかし。いかに、かゝるあさましき事はありけるやらん。かゝる僻見の末なれば、彼の傳法院の本願と號する正覺房が舍利講の式に云はく、

尊高者也。不二摩訶衍之佛。驢牛三身。不レ能レ扶レ車。祕奧者也。兩部漫陀羅之教。顯乘四法。不レ堪レ採レ履云云。

顯乘の四法と申すは、法相三論華嚴法華の四人、驢牛の三身と申すは、法華華嚴般若深密經の教主の四佛。此等の佛僧は、眞言師に對すれば正覺弘法の牛飼、履物取者にもたらぬ程の事なりと書いて候ふ。彼の月氏の大慢婆羅門は、生知の博學、顯密二道胸にうかべ、内外の典籍掌ににぎる。されば王臣頭をかたぶけ、萬人師範と仰ぐ。あまりの慢心に、世間に尊崇する者は、大自在天、婆籔天、那羅延天、大覺世尊、此の四聖なり。我が座の四足にせんと、座の足につくりて坐して法門を申しけり。當時の眞言師が釋迦佛等の一切の佛をかきあつめて灌頂する時、敷曼荼羅とするがごとし。禪宗の法師等が云はく、此の宗は佛の頂をふむ大法なりといふがごとし。而るを賢愛論師と申せし

傍例—少し似たる例

醍醐は、陳隋の世には渡りてあらばこそ、天台大師は眞言の醍醐をば盗ませ給はめ、傍例あり。日本の得一が云はく、天台大師は深密經の三時教をやぶる。三寸の舌をもつて五尺の身を斷つべしと罵りしを、傳教大師此をたゞして云はく、深密經は、唐の始玄奘三藏これをわたす、天台は陳隋の人、智者御入滅の後數箇年あつて解深密經わたれり。死して已後にわたれる經をばいかでか破し給ふべきとせめさせ給ひて候ひしかば、得一は詰るのみならず、舌八つにさけて死し候ひぬ。これは彼には似るべくもなき惡口なり。華嚴の法藏、三論の嘉祥、法相の玄奘、天台等乃至南北の諸師、後漢より已下の三藏人師を皆押へて盗人と書かれて候ふなり。其の上又法華經を醍醐と稱することは、天台等の私の言にはあらず。佛、涅槃經に法華經を醍醐と說かせ給ひ、天親菩薩は法華經涅槃經を醍醐と書かれて候ふ。龍樹菩薩は法華經を妙藥となづけさせ給ふ。されば、法華經等を醍醐と申す人、盗人ならば、釋迦多寶十方の諸佛、龍樹天親等は盗人にておはすべきか。弘法の門人等乃至日本の東寺の眞言師、如何自眼の黑白は拙くして辨へずとも、他の鏡をもつて自禍をしれ。此の外、法華經を戲論の法と書かるゝこと、大日經、金剛頂經等にたしかなる經文をいだされよ。設ひ彼彼の經經に、法華經を戲論と說かれたり

も、天台宗の人々いたう咎め申す事なし。

問うて云はく、弘法大師の十住心論、祕藏寶鑰、二教論に云はく、

如此乘乘。自乘得名。望後作戲論。又云。無明邊域。非明分位。

又云はく、

第四熟蘇味。

又云はく、

震旦人師等。諍盜醍醐。各名自宗等云云。

此等の釋の心如何。

答へて云はく。予此の釋に驚いて一切經竝びに大日の三部經等をひらきみるに、華嚴經と大日經とに對すれば、法華經戲論、六波羅蜜經に對すれば盜人、守護經に對すれば無明の邊域と申す經文は一字一句も候はず。此の事はいと果敢なき事なれども、此の三四百餘年に日本國のそこばくの智者どもの用ひさせ給へば、定めてゆゑあるかと思ひぬべし。暫くいとやすき僻事をあけて、餘事のはかなき事を知らすべし。法華經を醍醐味と稱することは、陳隋の代なり。六波羅蜜經は、唐の半に般若三藏此をわたす。六波羅密經の

の論の、計り無かりけるかのあひだ、敵多くしては戒場の一事成りがたしとや思召しけん、又末法にせめさせんとや思しけん、皇帝の御前にしても論ぜさせ給はず、弟子等にもはか〴〵しく語らせ給はず。但し依憑集と申す一卷の祕書あり。七宗の人々の天台に落ちたるやうを書かれつる文なり。かの文の序に、眞言宗の誑惑一筆みえて候ふ。弘法大師は同じき延暦年中に御入唐、青龍寺の慧果に値ひ給ひて眞言宗をならはせ給へり。御歸朝の後、一代の勝劣を判じ給ひけるに、第一眞言、第二華嚴、第三法華と書かれて候ふ。此の大師は世間の人々は、もつてのほかに重んずる人なり。但し佛法の事は申すに畏あれども、もつての外に荒量き事ども見えり。此の事を、あら〳〵考へたるに、漢土にわたらせ給ひては、但眞言の事相の印眞言計り習ひ傳へて、其の義理をば、くはしくも思索らせ給はざりけるほどに、日本にわたりて後大に世間を見れば、天台宗もつての外に崇みたりければ、我が重んずる眞言宗弘めがたかりけるかのゆゑに、本日本國にして習ひたりし華嚴宗をとりいだして、法華經に勝れたるよしを申しけり。それも常の華嚴宗に申すやうに申すならば、人信ずまじとや思しめしけん、すこし色をかへて、此は大日經龍猛菩薩の菩提心論、善無畏等の實義なりと、大妄語を引添へたりけれど

一味となる—よく和合すること

莊嚴云々—心の上に印と眞言とを加ふれば身口意の三密を相應したる眞言宗となるといふ

三藏此を渡す、天台大師此を見る、大日如來は法華經を大日經となづけて、金剛薩埵に向つて說かせ給ふ、此を大日經となづく、我まのあたり天竺にしてこれを見る、されば汝が書くべきやうは、大日經と法華經とをば、水と乳とのやうに一味となすべし、もししからば、大日經は已今當の三說をば、皆法華經にのごとくうち下すべし、さて印と眞言とは、心法の一念三千に莊嚴するならば、三密相應の祕法なるべし、三密相應する程ならば、天台宗は意密なり、眞言は甲なる將軍の甲鎧を帶して弓箭を横たへ、太刀を腰に佩けるがごとし、天台宗は意密計りなれば、甲なる將軍の赤裸なるがごとくならんといひければ、一行阿闍梨は此のやうにかきけり。漢土三百六十箇國には。此の事を知る人なかりけるかのあひだ、始には勝劣を諍論しけれども、善無畏等は人品は重し、天台宗の人々は輕かりけり、又天台大師ほどの智ある者もなかりければ、但日々に眞言宗になりてさて止みにけり。年ひさしくなれば、いよ／＼眞言の誑惑の根ふかく隱れて候ひけり。日本國の傳教大師、漢土にわたりて天台宗を渡し給ふ次序に、眞言宗をならべわたす。天台宗を日本の皇帝にさづけ、眞言宗を六宗の大德にならはせ給ふ。但し六宗と天台宗の勝劣は、入唐已前に定めさせ給ふ。入唐已後には圓頓の戒場を立てう立じ

累層—已その上に累りて打勝つこと

申しければ、善無畏思はく、天台宗は天竺にして聞きしにもなほうち勝れて、累層むべきやうもなかりければ、善無畏一行をうちぬいて云はく、和僧は漢土には賢しき者にてありけり、天台宗は神妙の宗なり、今眞言宗の天台宗に重崇むところは、印と眞言と計りなりといひければ、一行さもやと思ひければ、善無畏三藏一行に語つて云はく、天台大師の法華經に疏をつくらせ給へるごとく、大日經の疏を造りて眞言を弘通せんと思ひ、汝かきなんやといひければ、一行が云はく、やすう候ふ、但し如何様にかき候ふべきぞ、天台宗は惡き宗なり、諸宗は我も我もと爭ひをなせども、一切に叶はざる事一つあり、所謂法華經の序分に、無量義經と申す經をもつて、前四十餘年の經經をば其の門を打ち塞ぎ候ひぬ、法華經の法師品神力品をもつて、後の經經をば又防がせぬ、肩をなぶる經經をば、今説の文をもつてせめ候ふ、大日經をば三説の中には、いづくにか置き候ふべきと問ひければ、爾の時に善無畏三藏大に巧んで云はく、大日經に住心品といふ品あり、無量義經の四十餘年の經經を打ち掃ふがごとし、大日經の入漫陀羅已下の諸品は、漢土にては法華經大日經とて二本なれども、天台にては一經のごとし、釋迦佛は舍利弗彌勒に向つて、大日經を法華經となづけて、印と眞言とを捨てて但理計りを説けるを、羅什

外に、迦葉尊者に密に囁かせ給へり。されば禪宗を知らずして一切經を習ふものは、犬の雷を噬むがごとし。猿の月の影をとるに似たり云々。此の故に日本國の中に不孝にして父母にすてられ、無禮なる故に主君に勘當せられ、あるひは若なる法師等の學文に懈き、遊女の物狂はしき本性に叶へる邪法なるゆゑに、皆一同に持齋になりて、國の百姓を喰ふ蝗虫となれり。しかれば天は天眼を怒かし、地神は身をふるふ。

眞言宗と申すは、上の二つの災には似るべくもなき大僻見なり。あら／＼此を申すべし。所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に、善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏、大日經、金剛頂經、蘇悉地經を月支よりわたす。此の三經の說相分明なり。其の極理を尋ぬれば、會二破二の一乘、其の相を論ずれば印と眞言と計りなり。尙華嚴般若の三一相對の一乘にも及ばず、天台宗の爾前の別圓程もなし　但通藏二教を面とするを、善無畏三藏思はく、此の經文を現にいひ出す程ならば、華嚴法相にも嘲かれ、天台宗にも笑はれなん、大事として月支よりは持來りぬ、さて默止せば本意にあらずとや思ひけん、天台宗の中に一行禪師といふ僻人一人あり、これをかたらひて漢土の法門を語らせけり。一行阿闍梨うち欺かれて、三論法相華嚴等をあら／＼語るのみならず、天台宗の立てられけるやうを

願つて一人も往生者なし

慧心―源信僧都、先德は尊稱

十因―往生十因といふ書

法然流罪―土御門の御宇、法然土佐に配せらる

持齋―もとは午後食事をせぬこと、轉じて民家にて食事を饗せらるゝこと

代におはすべきか。彼の往生要集には、顯密の教法は予が死生を離るべき法にはあらず。又三輪の永觀が十因等を見よ。されば法華眞言等を捨てて一向に念佛せば、十卽十生百卽百生とすゝめければ、叡山東寺園城七寺等、始は諍論するやうなれども、往生要集の序の詞道理かと見えければ、顯眞座主落ちさせ給ひて法然が弟子となる。其の上設ひ法然が弟子とならぬ人々も、彌陀念佛は陀佛に似るべくもなく、口ずさみとし、心よせに思ひければ、日本國皆一同に法然房の弟子と見えけり。此の五十年が間、一天四海一人もなく法然が弟子となる。法然が弟子となりぬれば、日本國一人もなく謗法の者となりぬ。譬へば千人の子が、一同に一人の親を殺害せば、千人共に五逆の者なり。一人阿鼻に墮ちなば、餘人墮ちざるべしや。結句は法然流罪を怨みて惡靈となつて、我並に弟子等を科せし國主山寺の僧等が身に入つて、或は謀反を起し、或は惡事をなして、皆關東に滅されぬ。わづかに殘れる叡山東寺等の諸僧は、俗男俗女にあなづらるゝこと、猿猴の人に笑はれ、俘囚が童子に蔑如せらるゝがごとし。

禪宗は又此の便を得て持齋等となつて人の眼を迷かし、貴げなる氣色なれば、いかに僻法門をいひ狂へども失とも覺えず。禪宗と申す宗は教外別傳と申して、釋尊の一切經の

未有一人―往生するもの一人もなし
千中無一―千人

撰時鈔（下）

問うて云はく、此の三宗の謬悞如何。

答へて云はく、淨土宗は齊の世に曇鸞法師と申す者あり。本は三論宗の人、龍樹菩薩の十住毘婆娑論を見て、難行道易行道を立てたり。道綽禪師といふ者あり、唐の世の者、本は涅槃經を講じけるが、曇鸞法師が淨土にうつる筆を見て、涅槃經をすてて淨土に移つて聖道淨土の二門を立てたり。又道綽が弟子に善導といふ者あり、雜行正行を立つ。日本國に、末法に入つて二百餘年、後鳥羽の院の御宇に法然といふものあり、一切の道俗をすゝめて云はく、佛法は時機を本とす、法華經、大日經、天台、眞言等の八宗九宗、一代の大小顯密權實等の經宗等は、上根上智の正像二千年の機のためなり。末法に入つてはいかに功をなして行ずるとも、其の益あるべからず。其の上彌陀念佛にまじへて行ずるならば、念佛も往生すべからず。此わたくしに申すにはあらず。龍樹菩薩、曇鸞法師は難行道と名づけ、道綽は未有一人得者と嫌ひ、善導は千中無一と定めたり。此等は他宗なれば御不審もあるべし。慧心先德にすぎさせ給へる天台眞言の智者は、末

をなすべき。かゝる僻見のたよりを得て、弘法大師の邪義をも咎むる人もなし。安然和尚すこし弘法を難ぜんとせしかども、只華嚴宗のところ計りとがむるに似て、かへつて法華經をば大日經に對して沈め果てぬ。たゞ世間の立入りの者のごとし。

三祇―三阿僧祇、無量の長時、權大乘にて佛となる修行の間
無見頂相を得ん―無見頂相は三十二相の一、これは佛となる意
三衣一鉢―僧たるものはたゞ大衣と九條と五條との袈裟と鉢を一つ持つに止むべきものといふ、他宗がこの以外のものをも持つに禪僧はこれに限るとて慢心を起すなり
內侍所―宮中の賢所、これに安置する神器
劫石―時間を計る石、方四十里の石三年に一度輕衣を以て摩して盡きたる時を劫と計すと

生れて、一歩をあゆまずして三祇をこえ、頭を虎に飼ずして無見頂相を得ん。

答へて云はく、此の法門を申さん事は、經文に候へば易かるべし。但此の法門には先づ三つの大事あり。大海は廣けれども死骸をとゞめず、大地は厚けれども不孝の者をば戴せず。佛法には五逆をたすけ不孝をばすくふ。但し誹謗一闡提の者、持戒にして第一なるをば容されず。此の三ツの禍とは、謂念佛宗と禪宗と眞言宗となり。一には念佛宗は日本國に充滿して四衆の口遊とす。二に禪宗は三衣一鉢の大慢の比丘の四海に充滿して、一天の明導と思へり。三に眞言宗は、又彼等の二宗には似るべくもなし。叡山、東寺、七寺、園城、或は官主或は御室或は長吏或は檢校なり。かの內侍所の神鏡燼灰となりしかども、大日如來の寶印を佛鏡とたのみ、寶劍西海に入りしかども、五大尊をもつて國敵を切らんと思へり。此等の堅固の信心は、設ひ劫石は磷らぐとも、傾くべしとは見えず。大地は反覆すとも疑心起りがたし。彼の天台大師の南北をせめ給ひし時も、此の宗いまだ渡らず、此の傳教大師の六宗を虐け給ひし時も洩れぬ。かたぐ\の強敵をまぬがれて、かへつて大法を掠め失ふ。其の上傳教大師の御弟子慈覺大師、此の宗を取立てて叡山の天台宗をかすめ落して、一向眞言宗に爲ししかば、此の人には誰の人か敵

涌出－地中より涌出で來ること

人出現せり。其の上天台大師の未弘の圓頓大戒を叡山に建立し給ふ。此豈に像法の末に法華經廣宣流布するにあらずや。

答へて云はく、迦葉阿難等の弘通せざる大法を、馬鳴龍樹提婆天親等の弘通せる事、前の難に顯れたり。又龍樹天親等の流布し殘し給へる大法、天台大師の弘通し給ふ事、又難にあらはれぬ。又天台智者大師の弘通し給はざる圓頓の大戒を、傳教大師の建立せさせ給ふ事又顯然なり。但し詮と不審なる事は、佛は說き盡くし給へども、佛の滅後に迦葉、阿難、馬鳴、龍樹、無著 天親乃至天台、傳教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深密の正法、經文の面に現前なり。此の深法、今末法の始五五百歲に一閻浮提に廣宣流布すべきやの事、不審極無きなり。

問ふ、いかなる祕法ぞ先づ名を聞き次に義をきかんと思ふ。此の事もし實事ならば、釋尊の二度世に出現し給ふか、上行菩薩の重ねて涌出せるか。いそぎいそぎ慈悲をたれられよ。彼の玄奘三藏は六生を經て月氏に入りて十九年、法華一乘は方便教、小乘阿含經は眞實教、不空三藏は身毒に返りて壽量品を阿彌陀佛と書かれたり。此等は東を西といふ。日を月とあやまてり。身を苦めてなにかせん、心に染て用なし。幸ひ我等末法に

三論の二藏云々―以下各宗教義の要旨

或は一言に舌を巻いて二言三言に及ばず、皆一同に頭を傾け手を叉ふ。三論の二藏、三時、三轉法輪、法相の三時五性、華嚴宗の四教五教、根本枝末、六相十玄、皆大綱をやぶらる。例せば大屋の棟梁の折れたるがごとし。十大徳の慢の幢も倒れにき。爾時天子大に驚かせ給ひて、同二十九日に弘世國道の兩吏を勅使として、重ねて七寺六宗に仰せ下されしかば、各々歸伏の狀を載せて云はく、

竊見二天台玄疏一者。摠括二釋迦一代教一。悉顯二其趣一。無レ所レ不レ通。獨逾二諸宗一。殊示二一道一。其中所說。甚深妙理。七箇大寺。六宗學生。昔所レ未レ聞。曾所レ未レ見。三論法相久年之諍。渙焉氷釋。照然既明。猶レ披二雲霧一而見中三光上矣。自二聖德弘化一以降。于レ今二百餘年之間。所レ講經論其數多矣。彼此爭レ理。其疑未レ解。而此最妙圓宗。猶未二闡揚一。蓋以此間羣生。未レ應二圓味一歟。伏惟聖朝久受二如來之付一。深結二純圓之機一。一妙義理始乃興顯。六宗學者初悟二至極一。可レ謂下此界含靈。而今而後。悉載二妙圓之船一。早得上レ濟二於彼岸一。乃至善議等。牽二逢休運一。乃閱二奇詞一。自レ非二深期一。何託二聖世一哉等云云。

彼の漢土の嘉祥等は一百餘人をあつめて天台大師を聖人と定めたり。今日本の七寺二百餘人は、傳教大師を聖人と號したてまつる。佛の滅後二千餘年に及んで、兩國に聖人二

賢劫—現在の時の名

爲難等云云。

此經を釋して云はく、

淺易深難。釋迦所判。去レ淺就レ深。丈夫之心也。天台大師。信ニ順釋迦一助ニ法華宗一敷ニ揚震旦一。叡山一家。相ニ承天台一。助ニ法華宗一。弘ニ通日本一云云。

釋の心は賢劫第九の滅人壽百歳の時より、如來在世五十年滅後一千八百餘年が中間に、高さ十六萬八千由旬六百六十二萬里の金山を、有人五尺の小身の手をもつて、方一寸二寸等の瓦礫を握りて一丁二丁までなぐるがごとく、雀鳥の飛ぶよりもはやく、鐵圍山の外へなぐる者はありとも、法華經を佛の說かせ給ひしやうに說かん人は、末法には稀なるべし。天台大師傳敎大師こそ、佛說に相似して說かせ給ひたる人にておはすれとなり。天竺の論師は、いまだ法華經へ行付き給はず。漢土の天台已前の人師は、或はすぎ或はたらず。慈恩法藏善無畏等は、東を西といひ、天を地と申せる人々なり。此等は傳敎大師の自讃にはあらず。去ぬる延曆二十一年正月十九日、高雄山に桓武皇帝行幸なりて、六宗七大寺の碩德たる善議、勝猷、奉基、寵忍、賢玉、安福、勤操、修圓、慈誥、玄燿、歲光、道證、光證、觀敏等の十有餘人、最澄法師と召し合せられて宗論ありしに、

圓慧圓定—完全なる智慧と完全なる禪定
三處—大和東大寺、筑紫觀音寺、下野藥師寺

答へて云はく、正法一千年、像法の前四百年。已上佛滅後一千四百餘年に、いまだ論師の弘通し給はざる、一代超過の圓定圓慧を、漢土に弘通し給ふのみならず、其の聲月氏までもきこえぬ。法華經の廣宣流布には似たれども、いまだ圓頓の戒壇を立てられず。小乘の威儀をもつて、圓の慧定に切りつけるは、すこし便なきに似たり。例せば、日輪の蝕するがごとし。月輪のかけたるに似たり。何にいはうや天台大師の御時は、大集經の讀誦、多聞堅固の時にあひ當つて、いまだ廣宣流布の時にあらず。

問うて云はく、傳教大師は日本國の士也。桓武の御字に出世して、欽明より二百餘年が間の邪義を難じ破り、天台大師の圓慧圓定を撰じ給ふのみならず、鑒眞和尚の弘通せし日本小乘の三處の戒壇を難じ破り、叡山に圓頓の大乘別受戒を建立せり。此の大事は、佛滅後一千八百年が間の身毒尸那扶桑、乃至一閻浮提第一の奇事なり。內證は龍樹天台等には或は劣るにもや、或は同じくもやあるらん。佛法の人を統べて一法となせる事は、龍樹天親にも越え、南岳天台にもすぐれて見えさせ給ふなり。摠じては、如來御入滅の後一千八百餘年が間、此の二人こそ法華經の行者にてはおはすれ。故に秀句に云はく、若接須彌擲置佗方無數佛土、亦未爲難。乃至若佛滅度於惡世中能說此經、是則

終南山の道宣律師、天台大師を讃歎して云はく、

照了法華。若高輝之臨幽谷説摩訶衍。似長風之遊大虚。假令文字之師千羣萬衆。數尋彼妙辨無能窮者也。乃至義同指月。乃至宗歸一極云云。

華嚴宗の法藏法師、天台を讃して云はく、

如思禪師智者等。神異感通。迹參登位。靈山聽法。憶在於今等云云。

眞言宗の不空三藏、含光法師等、師弟共に眞言宗をすてて天台大師に歸伏する物語に云はく、

高僧傳に云はく、與不空三藏親。遊天竺。彼有僧。問曰。大唐有天台迹教。最堪簡邪正曉偏圓。可能譯之將至此土耶等云云。

此の物語は含光が妙樂大師にかたり給ひしなり。妙樂大師此の物語を聞いて云はく、

豈非中國失法求之四維。而此方少有識者。如魯人耳等云云。

身毒國の中に天台三十卷のごとくなる大論あるならば、南天の僧いかでか漢土の天台の釋をねがふべき。これあに像法の中に法華經の實義顯れて、南閻浮提に廣宣流布するにあらずや。

作禮而去―凡ての經文の終句

るよしは、知ろしめしながら、外には宣説せずして、但權大乘計りを宣べさせ給ふことは、しかるべしとは覺えねども、其の義はすこしきこえ候ひぬ。像法一千年の半に天台智者大師出現して、題目の妙法蓮華經の五字を、玄義十巻一千枚にかきつくし、文句十巻には、始如是我聞より、終作禮而去にいたるまで、一字一句に因緣約教本迹觀心の四の釋をならべて、又一千枚に盡し給ふ。已上玄義文句の二十巻には、一切經の心を江河として、法華經を大海にたとへ、十方界の佛法の露一渧も漏さず、妙法蓮華經の大海に入れさせ給ひぬ。其の上天竺の大論の諸義一點ももらさず。漢土南北の十師の義、破すべきをばこれを破し、採るべきをば此を用ふ。其の上止觀十巻を注して、一代の觀門を一念に統べ、十界の依正を三千に縮めたり。此の書の文體は、遠くは月支一千年の間の論師にも超え、近くは尸那五百年の人師の釋にも勝れたり。故に三論宗の吉藏大師、南北一百餘人の先達と長者らをすゝめて、天台大師の講經を聞けと勸むる狀に云はく、

千年之興五百之實。復在於今日。乃至南岳叡聖天台明哲。昔三業住持。今二尊紹係。豈止灑甘呂(露)於震旦。亦當震法鼓於天竺。生知妙悟。魏晉以來。典籍風謠。實無連類。乃至共禪衆一百餘僧。奉請智者大師等云云。

慈恩―法相宗高僧、玄奘の弟子窺基。

まり給ひしか。

疑うて云はく、羅什已前はしかるべし、已後の善無畏不空等は如何。

答へて云はく、已後なりとも譯者の舌の燒けるをば悞ありけりと知るべし。されば日本國に法相宗の流行りたりしを、傳教大師責めさせ給ひしには、羅什三藏は舌燒けず、玄奘慈恩は舌燒けぬとせめさせ給ひしかば、桓武天皇は道理と思して、天台法華宗へはうつらせ給ひしなり。涅槃經の第三第九等を見まゐらすれば、我が佛法は月支より他國へわたらんの時、多くの謬誤出來して、衆生の得道薄かるべしと說かれて候ふ。されば妙樂大師は、

竝進退在レ人。何關二聖旨一。

とこそあそばされて候へ。今の人々いかに經のまゝに後世を願ふとも、あやまれる經經のまゝにねがはゞ、得道もあるべからず。しかればとても、佛の御とがにはあらじと書かれて候ふ。佛教を習ふ程には、大小權實顯密はさて置く、これこそ第一の大事にては候ふらめ。

疑うて云はく、正法一千年の論師の內心には、法華經の實義の顯密の諸經に超過してあ

藏一人を除いては、いづれの人々も悞らざるはなし。其の中に不空三藏は、殊に誤多き上、誑惑の心顯なり。

疑うて云はく、何をもつて知るぞや。羅什三藏より外の人々はあやまりなりとは、汝が禪宗、念佛、眞言等の七宗を破るのみならず、漢土日本にわたる一切の譯者を用ひざるかいかん。

答へて云はく、此の事は余が第一の祕事なり、委細には向つて問ふべし。但しすこし申すべし。羅什三藏の云はく、我が漢土の一切經を見るに、皆梵語のごとくならず、いかでか此の事を顯はすべき、但し一ツの大願あり、身を不淨になして妻を帶すべし、舌計り淸淨になして佛法に妄語せじ、我死せば必ずやくべし、燒かん時舌燒けるならば、我が經をすてよと、常に高座にして說かせ給ひしなり。上一人より下萬民にいたるまで、願して云はく、願はくは羅什三藏より後に死せんと。終に死し給ふ。後燒きたてまつりしかば、不淨の身は皆灰となりぬ。御舌計り火中に靑蓮華生ひて其の上にあり。五色の光明を放ちて夜は晝のごとく、晝は日輪の御光を奪ひ給ひき。さてこそ一切の譯人の經經は輕くなりて、羅什三藏の譯し給へる經經、殊に法華經は漢土にやすく〲とひろ

龍猛—龍樹のこと

觀智の儀軌—密敎の修行法則を記したる書の名

問うて云はく、唐の末に、不空三藏一卷の論をわたす、其の名を菩提心論となづく。龍猛菩薩の造なり云々。弘法大師云はく、此の論は龍猛千部の中の第一肝心の論と云々。

答へて云はく、此の論一部七丁あり、龍猛の言ならぬ事處々に多し、故に目錄にも、或は龍猛或は不空と、兩方にいまだ事定らず。其の上此の論文は、一代を括れる論にもあらず、荒量なる事此多し。先「唯眞言法中」の肝心の文誤なり。其の故は、文證現證ある法華經の卽身成佛をば、なきになして、文證も現證も、あとかたもなき眞言の經に卽身成佛を立て候ふ。又唯といふ唯の一字は第一のあやまりなり。事の體を見るに、不空三藏の私につくりて候ふを、時の人に重くせさせんがために、事を龍猛に寄せたるか。其の上不空三藏は誤る事かず多し。所謂法華經の觀智の儀軌に、壽量品を阿彌陀佛とかける、眼の前の大僻見。陀羅尼品を神力品の次に置ける、屬累品を經末に下せる、此等はいふがひなし。さるかとみれば、天台の大乘戒を盜んで代宗皇帝に宣旨を申し、五臺山の五寺に立てたり。而も又、眞言の敎相には天台宗を爲べしといへり。かたぐ誑惑の事どもなり。佗人の譯ならば用ふる事もありなん。此の人の譯せる經論は信ぜられず。摠じて、月支より漢土に經論をわたす人、舊譯新譯に一百八十七人なり。羅什三

答へて云はく　龍樹菩薩の事は私に申すべからず、佛記し給ふ、我が滅後に龍樹菩薩と申す人、南天竺に出づべし、彼の人の所詮は中論といふ論に有るべしと、佛記し給ふ。隨つて龍樹菩薩の流、天竺に七十家あり、七十人ともに大論師なり。彼の七十家の人々は皆中論を本とす。中論四卷二十七品の肝心は、因緣所生法の四句の偈なり。此の四句の偈は華嚴般若等の四敎三諦の法門なり。いまだ法華開會の三諦をば宣べ給はず。

疑うて云はく、汝がごとくに料簡せる人ありや。

答へて云はく、天台云はく、

莫㆘以㆓中論㆒相比㆖。

又云はく、

天親龍樹内鑒冷然。外適㆓時宜㆒等云云。

妙樂云く、

論㆓破會㆒者。未㆑若㆓法華㆒故云云。

從義の云はく、

龍樹天親未㆑若㆓天台㆒云云。

說かせ給ふならば、淨飯大王、摩耶夫人に、觀佛三昧經、摩耶經を說くべからず。無緣の惡人謗法の者に、祕法を與へずば、覺德比丘は無量の破戒の者に涅槃經を授くべからず。不輕菩薩は誹謗の四衆に向つて、いかに法華經をば弘通せさせ給ひしぞ。されば機に隨つて法を說くと申すは大なる僻見なり。

問うて云はく、龍樹世親等は、法華經の實義をば宣べ給はずや。

答へて云はく、宣べ給はず。

問うて云はく、何なる敎をか宣べ給ひし。

答へて云はく、華嚴方等般若大日經等の權大乘顯密の諸經をのべさせ給ひて、法華經の法門をば宣べさせ給はず。

問うて云はく、何をもつてこれを知るや。

答へて云はく、龍樹菩薩の所造の論三十萬偈、而れども盡して漢土日本にわたらざれば、其の心知りがたしといへども、漢土にわたれる十住毗婆娑論、中論、大論等をもつて天竺の論をも比知して此を知るなり。

疑うて云はく、天竺に殘る論の中に、わたれる論よりも勝れたる論やあるらん。

玄と文と止ー法華の註解書たる玄義と文句と止觀

と、一切衆生に勸めたる人一人もなし。此の德は誰か一天に眼を合せ、四海に肩をならぶべきや。

疑つて云はく、設正法の時は、佛の在世に對すれば、根機劣なりとも、像末に對すれば最上の上機なり。いかでか正法の始に法華經をば用ひざるべき。隨つて馬鳴龍樹提婆無著等も、正法一千年の内にこそ出現せさせ給へ。天親菩薩は千部の論師、法華論を造りて諸經の第一の義を存す。眞諦三藏の相傳に云はく、月支に法華經を弘通せる家五十餘家、天親は其の一也と。已上正法なり。像法に入つては、天台大師像法の半に漢土に出現して、玄と文と止との三十卷を造りて、法華經の淵底を極めたり。像法の末に、傳教大師日本に出現して天台大師の圓慧圓定の二法を我が朝に弘通せしむるのみならず、圓頓の大戒場を叡山に建立して、日本一州皆同じく圓戒の地になして、上一人より下萬民まで、延暦寺を師範と仰がせ給ふ。豈像法の時、法華經の廣宣流布にあらずや。

答へて云はく、如來の教法は必ず機に隨ふといふ事は、世間の學問の存知なり。しかれども、佛經は然らず、上根上智の人のために、必ず大法を說くならば、初成道の時、なんぞ法華經を說き給はざる。正法の先五百年に大乘經を弘通すべし。有緣の人に大法を

結構—保護の意

なげかし。今生には萬人にせめられて、片時も安からず、後生には惡道に墮ちん事あさましとも申すばかりなし。又日蓮、法華經の行者ならずば、いかなる者の一乘の持者にてはあるべきぞ。法然が「法華經をなげすてよ」善導が「千中無一」道綽が「未有一人得者」と申すが、法華經の行者にて候か。又弘法大師の云はく、法華經を行ずるは戲論なりと書かれたるが、法華經の行者なるべきか。經文には、「能持是經能說此經」なんどこそ說かれて候へ。能說と申すは、いかなるぞと申すに、「於諸經中最在其上」と申して、大日經、華嚴經、涅槃經、般若經等に、法華經はすぐれて候ふなりと申す者をこそ、經文には法華經の行者とは說かれて候へ。もし經文のごとくならば、日本國に佛法渡つて七百餘年、傳敎大師と日蓮とが外は、一人も法華經の行者はなきぞかし。いかにいかにと思ふところに、「頭破作七分口則閉塞」のなかりけるは道理にて候ひけるなり。此等は淺き罰なり、但一人二人等のことなり、日蓮は閻浮第一の法華經の行者なり。此を謗り此をあだむ人を結構せん人は、閻浮第一の大難に値ふべし。これは日本國を振搖す正嘉の大地震、一天を罰する文永の大彗星等なり。此等をみよ。佛滅後の後　法を行ずる者に怨をなすといへども、今のごとくの大難は一度もなきなり。南無妙法蓮華經

五天―東西南北中の五方天竺
鐵圍山―世界の周圍をかこむ大山

安大師云はく、

爲レ彼除レ惡。即是彼親等云云。

されば日蓮は當帝の父母、念佛者禪衆眞言師等が師範なり、又主君なり、而るを上一人より下萬民にいたるまで怨をなすをば、日月いかでか彼れが頂を照し給ふべき、地神いかでか彼れの足を戴き給ふべき。提婆達多は佛を打ち奉りしかば大地搖動して火炎いでにき。檀彌羅王は師子尊者の頸を切りしかば、右の手刀とともに落ちぬ。徽宗皇帝は法道が面に火印を燒きて江南に流せしかば、半年が内に夷人の手にかゝり給ひき。蒙古の攻も又かくのごとくなるべし。設五天の兵をあつめて、鐵圍山を城とせりともかなふべからず。必ず日本國の一切衆生兵難に値ふべし、されば、日蓮が法華經の行者にてあるなきかはこれにて見るべし。敎主釋尊記して云はく、末代惡世に法華經を弘通するものを、惡口罵詈等せん人は、我を一劫が間仇せん者の罪にも百千萬億倍すぎたるべしと說かせ給へり。而るを今の日本國の國主萬民等、我意にまかせて、父母宿世の敵よりも痛く憎み、謀反殺害の者よりもつよく責めぬるは、現身にも大地われて入り、天雷も身を裂かざるは不審なり。日蓮が法華經の行者にてあらざるか。もし然らば、大きに

誠諦—まことの道理
色究竟—色究竟天

堅固の佛語地に墮ちず。あだかもこれ大海の潮の時を違へざるがごとし。是をもつて案ずるに、大集經の白法隱沒の時に次いで、法華經の大白法の日本國並に一閻浮提に廣宣流布せん事も疑ふべからざるか。彼の大集經は佛說の中の權大乘ぞかし。生死を離るる道には法華經の結緣なき者のためには未顯眞實なれども、六道四生三世の事を記し給ひけるは寸分もたがはざりけるにや。何に況や法華經は釋尊要當說眞實となのらせ給ひ、多寶佛は眞實なりと御判を添へ、十方の諸佛は廣長舌を梵天につけて誠諦と指し示し、釋尊は重ねて無虛妄の舌を色究竟に付けさせて、後五百歲に一切の佛法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華經の五字を持たしめて、謗法一闡提の白癩病の輩の良藥とせんと、梵帝日月四天龍神等に仰せつけられし金言虛妄なるべしや。大地は反覆すとも、高山は頽落すとも、春の後に夏は來らずとも、日は東へ返るとも、月は地に落つるとも、此の事は一定なるべし。此の事一定ならば、鬪諍堅固の時日本國の王臣と並に萬民等が、佛の御使として南無妙法蓮華經を流布せんとするを、或は罵詈し或は惡口し或は流罪し或は打擲し弟子眷屬等を種々の難に逢はする人々、いかでか安穩にては候ふべき。これをば愚癡の者は呪詛すと思ひぬべし。法華經を弘むる者は日本國の一切衆生の父母なり。章

華洛－都のこと

の圓戒を背くべき。かの漢土九國の諸律には圓定圓慧は天台の弟子に似たれども、圓頓一同の戒場は漢土になければ戒においては弟子とならぬ者もありけん、この日本國は傳敎大師の御弟子にあらざる者は外道なり惡人なり。而れども漢土日本の天台宗と眞言の勝劣は大師心中には存知せさせ給ひけれども、六宗と天台宗とのごとく公場にして勝負なかりけるゆゑにや、傳敎大師已後には東寺園城諸寺日本一州一同に、眞言宗は天台宗に勝れたりと、上一人より下萬民に至るまで思召し思へり。しかれば天台法華宗は傳敎大師の御時計にぞありける。此の傳敎の御時は像法の末大集經の「多造塔寺堅固」の時なり。いまだ「於我法中　鬪諍言　訟白　法隱沒」の時にはあたらず。今末法に入つて二百餘歲、大集經の「於我法中鬪諍言訟白法隱沒」の時にあたれり。佛語實ならば定ンで一閻浮提に鬪諍起るべき時節なり。傳へ聞く漢土は三百六十箇國二百六十餘州はすでに蒙古國に打ちやぶられぬ。華洛すでにやぶられて徽宗欽宗の兩帝北蕃にいけどりにせられて、韃靼にして終に崩御れさせ給ひぬ。徽宗の孫高宗皇帝は長安を攻落されて田舍の臨安行在府に落ちさせ給ひて今に數年が間京を見ず、高麗六百餘國も新羅百濟等の諸國等も皆大蒙古國の皇帝にせめられぬ。今の日本國の壹岐對馬竝に九國のごとし。鬪諍

七寺―南都七大寺

別受戒―大乘の戒

身毒―印度といふに同じ

八宗―六宗に天台と眞言とを加ふ

經本論と宗々の人師の釋とを引き合せて御覽ありしかば、彼の宗々の人師の釋所依の經論に相違せる事多き上、僻見多々にして信受せん人皆惡道に墮ちぬべしと考へさせ給ふ。其の上法華經の實義は宗々の人々我も得たり我も得たりと自讃ありしかども其の義なし。此を申すならば喧嘩出來すべし、默して申さずば佛誓に背きなんと、思ひわづらはせ給ひしかども、終に佛の誡を畏れて、桓武皇帝に奏し給ひしかば、帝此の事を驚かせ給ひて六宗の碩學に召し合させ給ふ。彼の學者等始は慢の幢山のごとし。惡心毒蛇のやうなりしかども、終に王の前にして攻め落されて六宗七寺一同に御弟子となりぬ。例せば漢土の南北の諸師陳殿にして天台大師にせめ落されて御弟子となりしがごとし。此はこれ圓定圓慧計りなり。其の上天台大師のいまだ攻め給はざりし小乘の別受戒を攻落し、六宗の八大德に梵網經の大乘別受戒を授け給ふのみならず、法華經の圓頓の別受戒を叡山に建立せしかば、延暦圓頓の別受戒は日本第一たるのみならず、佛の滅後一千八百餘年が間身毒尸那一閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒日本國に始る。されば傳教大師は其の功を論ずれば龍樹天親にもこえ、天台妙樂にも勝れておはします聖人なり。されば日本國の當世の東寺園城七大寺諸國の八宗淨土禪宗律宗等の諸僧等、誰人か傳教大師

六宗—三論、成實、法相、倶舍、華嚴、律

年の前二百餘年が内なり。像法に入つて四百餘年と申しけるに、百濟國より一切經竝に教主釋尊の木像僧尼等日本國に渡る。漢土の梁の末陳の始に相當る。日本には神武天皇よりは第三十代欽明天皇の御宇なり。欽明の御子用明の太子に上宮王子、佛法を弘通し給ふのみならず、竝に法華經淨名經勝鬘經を鎭護國家の法と定めさせ給ひぬ。其の後人王第三十七代に、孝德天皇の御宇に三論宗成實宗を觀勒僧正百濟國より渡す。同御代に道昭法師漢土より法相宗倶舍宗をわたす。人王第四十四代元正天皇の御宇に天竺より大日經をわたして有りしかども、而も弘通せずして漢土へかへる。此の僧をば善無畏三藏といふ。人王第四十五代に聖武天皇の御宇に審祥大德新羅國より華嚴宗を渡して、良辨僧正聖武天皇に授け奉りて東大寺の大佛を立てさせ給へり。同じき御代に大唐の鑒眞和尚天台宗と律宗をわたす。其の中に律宗をば弘通し小乘の戒場を東大寺に建立せしかども、法華宗の事をば名字をも申し出させ給はずして入滅し了んぬ。其の後人王第五十代像法八百年に相當つて桓武天皇の御宇に、最澄と申す小僧出來せり、後には傳教大師と號したてまつる。始には三論法相華嚴倶舍成實律の六宗竝に禪宗等を行表僧正等に習學せさせ給ひし程に、我と立て給へる國昌寺、後には比叡山と號す。此にして六宗の本

事相—祕密敎の修行法
内々—心の中

ず、三皇にも越え五帝にも勝れたるよし四海に響き、漢土を手ににぎるのみならず、高昌高麗等の一千八百餘國を靡かし、内外を極めたる王ときこえし賢王の第一の御歸依の僧なり。天台宗の學者の中にも頭をさしいだす人一人もなし。而れば法華經の實義すでに一國に隱沒しぬ。同じき太宗の太子高宗、高宗の繼母則天皇后の御宇に法藏法師といふ者あり、法相宗に天台宗の襲はるゝところを見て、前に天台の御時せめられし華嚴經を取り出して、一代の中には華嚴第一法華第二涅槃第三と立てけり。太宗第四代玄宗皇帝の御宇開元四年と同八年に、西天印度より善無畏三藏金剛智三藏不空三藏、大日經金剛頂經蘇悉地經を持て渡り眞言宗を立つ。此の宗の立義に云はく、敎に二種あり、一には釋迦の顯敎所謂華嚴法華等、二には大日の密敎所謂大日經等なり。法華經は顯敎の第一なり。此の經は大日の密敎に對すれば極理は少し同じけれども、事相の印契と眞言とは絕えてみえず、三密相應せざれば不了義經等云々。已上法相華嚴眞言の三宗、一同に天台法華宗を破れども、天台大師程の智人、法華宗の中になかりけるかの間、内々は謂なき由は存じけれども、天台のごとく公場にして論ぜられざりければ、上國王大臣、下一切の人民に至るまで皆佛法に迷ひて衆生の得道みな止りけり。此等は像法の後の五百

三時四時云々—佛の說法を淺深によりて次第を立てし諸說
半滿—同上、一を半と判じ一を滿と讃す
一音—佛は一音を以て說かれしを聽者の智の高下によつて別々に解す等の說
月支—月氏に同じ、印度をさす

かれり。所謂南には三時四時五時、北には五時半滿四宗五宗六宗。二宗の大乘一音等各各義を立て偏執水火なり。しかれども大綱は一同なり。所謂一代聖教の中には華嚴經第一涅槃經第二法華經第三なり。法華經は阿含般若淨名思益等の經經に對すれば眞實なり、了義經正見なり。然りといへども涅槃經に對すれば無常教不了義經邪見の經等云云。漢より四百餘年の末五百年に入つて、陳隋二代に智顗と申す小僧一人あり、後には天台智者大師と號したてまつる。南北の邪義をやぶりて一代聖教の中には法華經第一涅槃經第二華嚴經第三なり等云々。これ像法の前五百歲大集經の讀誦多聞堅固の時に相當れり。像法の後五百歲は唐の始太宗皇帝の御宇に、玄奘三藏月支に入つて十九年が間、百三十箇國の寺塔を見聞して多くの論師に値ひたてまつりて、八萬聖教十二部經の淵底を習ひ極めしに、其の中に二宗あり、所謂法相三論宗なり。此の二宗の中に法相大乘に、遠くは彌勒無著、近くは戒賢論師に傳へて、漢土にかへりて太宗皇帝にさづけさせ給ふ。此の宗の心は佛教は機に隨ふべし。一乘の機のためには三乘方便一乘眞實なり。所謂法華經等なり。三乘の機のためには三乘眞實一乘方便、所謂深密經勝鬘經等これなり。天台智者等は此の旨を辨へず等云々。而も太宗は賢王なり。當時名を一天にひゞかすのみなら

月氏—月氏國、印度の北方ガンダラ國をいふ

摩騰竺蘭—迦葉摩騰、竺法蘭の二人、支那に始めて佛法を齎せし人

乘經と法華經の勝劣をば分明に書かせ給はず。設ひ勝劣をすこし書かせ給ひたるやうなれども、本迹の十妙、二乘作佛、久遠實成、已今當の妙、百界千如、一念三千の簡要の法門は分明ならず。但或は指をもつて月をさすがごとくし、或は文にあたりて一端計かよせ給ひて、化道の始終師弟の遠近得道の有無はすべて一分もみえず。此等は正法の後の五百年大集經の禪定堅固の時にわたれり。正法一千年の後は月氏に佛法充滿せしかども、或は小をもて大を破し、或は權經をもつて實經を隱沒し、佛法さま〴〵に亂れしかば、得道の人漸くすくなく、佛法につけて惡道に墮つる者數をしらず。正法一千年の後像法に入つて一十五年と申せしに、佛法東に流れて漢土に入りにき。像法の前五百年の內始の一百餘年が間は漢土の道士と月氏の佛法と諍論していまだ事定まらず。設定まりたりしかども佛法を信ずる人の心いまだ深からず。而るに佛法の中に大小權實顯密を分つならば、聖敎一同ならざる故、疑起りてかへりて外典と伴ふ者もありぬべし。これらの恐あるかのゆゑに、摩騰竺蘭は自は知りて而も大小を分けず權實を言はずして止みぬ。其の後魏晉宋齊梁の五代が間佛法の內に大小權實顯密を諍ひし程に、いづれこそ道理ともきこえずして、上一人より下萬民にいたるまで不審すくなからず。南三北七と申して佛法十流にわ

迹化―佛がかりに人となりて生れ給ひしもの

求めて云はく、いかなる故にか宣べ給はざるや。

答へて云はく、多くの故あり。一には彼の時には機なし、二には時なし、三には迹化なれば付囑せられ給はず。

求めて云はく、願はくは此の事よく〳〵きかんと思ふ。

答へて云はく、夫佛の滅後二月十六日よりは正法の始なり。迦葉尊者佛の付囑をうけて二十年、次に阿難尊者二十年、次に商那和修二十年、次に優婆崛多二十年、次に提多迦二十年。已上一百年が間は但小乘經の法門をのみ弘通して諸大乘經は名字もなし、何に況や法華經をひろむべしや。次には彌遮迦、佛陀難提、佛駄密多、脇比丘、富那奢等の四五人、前の五百餘年が間は大乘經の法門少々出來せしかども、とりたてて弘通し給はず。但小乘經を面としてやみぬ。已上大集經の先、五百年解脱堅固の時なり。正法の後六百年已後一千年が前、其の中間に馬鳴菩薩、毘羅尊者、龍樹菩薩、提婆菩薩、羅睺尊者、僧佉難提、僧伽耶奢、鳩摩羅駄、闍夜那、盤陀、摩奴羅、鶴勒夜那、師子等の十餘人の人々、始には外道の家に入り、次には小乘經をきはめ、後には諸大乘經をもて諸小乘經を散々に破し失ひ給ひき。此等の大士等は諸大乘經をもつて諸小乘經をば破せさせ給ひしかども、諸大

鬱頭羅弗—小乘のさとりの一人

怨嫉。況滅度後。此言良有以也云云。

夫釋尊の出世は住劫第九の減、人壽百歳の時也。百歳と十歳との中間在世五十年滅後二千年と一萬年となり。其の中間に法華經の流布の時二度あるべし。所謂在世の八年滅後には末法の始の五百年なり。而るに天台妙樂傳教等は進んでは在世法華經の時にももれさせ給ひぬ。退いては滅後末法の時にも生れさせ給はず、中間なる事をなげかせ給ひて末法の始を戀させ給ふ御筆なり。例せば阿私陀仙人が悉達太子の生れさせ給ひしを見て悲んで云はく、現生には九十にあまれり、太子の成道を見るべからず、後生には無色界に生れて五十年の說法の坐にも列なるべからず、正像末にも生るべからずとなげきしがごとし。道心あらん人々は此を見きゝて悅ばせ給へ。正像二千年の大王よりも後世を思はん人々は末法の今の民にてこそあるべけれ。此を信ぜざらんや。彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱ふる癩人とはなるべし。梁の武帝の願に云はく、寧ろ提婆達多となつて無間地獄には沈むとも鬱頭羅弗とはならじと云々。

問うて云はく、龍樹天親等の論師の中に此の義ありや。答へて云はく、龍樹天親等は内心には存ぜさせ給ふといへども言には此の義を宣べ給はず。

切の萬民皆頭を地につけ掌を合せて南無妙法蓮華經と唱ふべし。例せば神力品の十神力の時十方世界の一切衆生一人もなく、娑婆世界に向つて大音聲を發ちて南無釋迦牟尼佛南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と一同に叫びしがごとし。問うて曰はく、經文は分明に候ふ。天台妙樂傳教等の未來記の言はありや。答へて曰はく、汝が不審逆なり。釋を引かん時こそ經論はいかにとは不審せられたれ、經文に分明ならば釋を尋ぬべからず。さて釋の文が經に相違せば經をすてて釋につくべきか如何。彼云はく、道理至極せり。しかれども凡夫の習經は遠し釋は近し。近き釋分明ならば今すこし信心を增すべし。今云はく、汝が不審懇なれば少々釋を出すべし。天台大師云はく、

後五百歲。遠沾妙道。

妙樂大師云はく、

末法之初。冥利不無。

傳教大師云はく、

正像稍過已。末法太有近。法華一乘機。今正是其時。何以得知。安樂行品云。末世法滅時也。又云。語代則像終末初。尋地唐東羯西。原人則五濁之生。鬬諍之時。經云。猶多

於二我法中一鬪諍言訟等云云。

法華經第五に云はく、

　惡世中比丘。

又云はく、

　或有二阿蘭若一等云云。

又云はく、

　惡鬼入二其身一等云云。

文の心は第五の五百歲の時惡鬼の身に入る大僧等國中に充滿せん。其の時に智人一人出現せん。彼の惡鬼の入れる大僧等時の王臣萬民等を語らひて惡口罵詈杖木瓦礫流罪死罪に行はん時、釋迦多寶十方の諸佛地涌の大菩薩らに仰せつけ、大菩薩は梵帝日月四天等に申し下され、其の時天變地妖盛なるべし。國主等其の諫を用ひずば鄰國に仰せつけて、彼彼の國々の惡王惡比丘等をせめらるゝならば、前代未聞の大鬪諍一閻浮提に起るべし。其の時日月所照の四天下の一切衆生、或は國を惜み或は身を惜むゆゑに、一切の佛菩薩に祈を懸くとも驗なくば、彼の憎みつる一の小僧を信じて、無量の大僧等八萬の大王等、一

問うて云はく、其の證文如何。

答へて云はく、法華經の第七に云はく、

我滅度後。後五百歲中。廣宣流布。於閻浮提。無令斷絕。等云云。

經文は大集經の白法隱沒の次の時をとかせ給ふに廣宣流布と云々。同第六の卷に云はく、

惡世末法時。能持是經者等云云。

又第五の卷に云はく、

於後末世法欲滅時等。

又第四の卷に云はく、

而此經者。如來現在。猶多怨嫉。況滅度後。

又第五の卷に云はく、

一切世間。多怨難信。

又第七の卷に、第五の五百歲鬪諍堅固の時を說いて云はく、

惡魔魔民。諸天龍夜叉。鳩槃茶等。得其便也。

大集經に云はく、

十卽十生—十人ながら十人皆淨土に生るゝこと

ことふりぬ—皆よりのこと、今に始めぬといふこと

行せん人計り生死を離るべし。日本國の法然が料簡して云はく、今日本國に流布する法華經華嚴經竝びに大日經諸の小乘經天台眞言律等の諸宗は、大集經の記文の正像二千年の白法なり。末法に入つては彼等の白法は皆滅盡すべし。設ひ行ずる人ありとも、一人も生死を離るべからず。十住毘婆沙論と曇鸞法師の難行道、道綽の未有一人得者、善導の千中無一これなり。彼等の白法隱沒の次には淨土三部經彌陀稱名の一行ばかり大白法として出現すべし。此を行ぜん人々は何なる惡人愚人なりとも、十卽十生百卽百生唯淨土の一門のみ有つて路に通入すべしと、これなり。されば後世を願はん人々は叡山東寺園城七大寺等の日本一州の諸寺諸山の御歸依をとゞめて、彼の寺山に寄せおける田畠郡鄕を奪ひ取つて念佛堂につけば、決定往生南無阿彌陀佛とすゝめければ、我が朝一同に其の義になりて今に五十餘年なり。日蓮此等の惡義を難じやぶる事はことふり候ぬ。彼の大集經の白法隱沒の時は第五の五百歲當世なる事は疑なし。但し彼の白法隱沒の次には法華經の肝心たる南無妙法蓮華經の大白法の、一閻浮提の内八萬の國あり、其の國々に八萬の王あり、王々ごとに臣下竝に萬民までも、今日本國に彌陀稱名を四衆の口々に唱ふるがごとく廣宣流布せさせ給ふべきなり。

下の文は五五百歳の說明

惜ませ給ふべき。なれども、法華經をば說かせ給はず。詮ずるところ、機にはよらず、時いたらざれば如何にも說かせ給はぬにや。

問うて云はく、いかなる時にか小乘權經をとき、何なる時にか法華經を說くべきや。

答へて云はく、十信の菩薩より等覺の大士にいたるまで、時と機とをば相知りがたき事なり。何に況や我等は凡夫なり、いかでか時機を知るべき。

求めて云はく、すこしも知る事あるべがらざるか。

答へて云はく、佛眼を借つて時機を考へよ。佛日を用て國土を照せ。

問うて云はく、其の心如何。

答へて云はく、大集經に大覺世尊、月藏菩薩に對して未來の時を定め給へり。所謂我が滅度の後の五百歲の中には、解脫堅固、次の五百年には禪定堅固（已上一千年）、次の五百年には讀誦多聞堅固、次の五百年には多造塔寺堅固（已上二千年）、次の五百年には我が法の中に於て鬪諍言訟して白法隱沒せん等云々。此の五の五百歲二千五百餘年に人々の料簡さまざまなり。漢土の道綽禪師が云はく、正像二千四箇の五百歲には小乘と大乘との白法盛なるべし。末法に入つては彼等の白法皆消滅して淨土の法門念佛の白法を修

一機萬機—一人と萬人

方等大會—方等の經を說法せられし時といふこと

而作ニ是言一我深敬ニ汝等一等云云。四衆之中。有下生ニ瞋恚一心不淨者上。惡口罵詈言。是無智比丘。又云。衆人或以ニ杖木瓦石一而打ニ擲之一等云云。

勸持品に云はく、

有下諸無智人惡口罵詈等及加ニ刀杖一者上等云云。

此等の經文は惡口罵詈乃至打擲すれども、說かれて候ふは說く人の失となりけるか。求めて云はく、此の兩說は水火なり。いかんが心得べき。答へて云はく、天台云はく、時に適ふ而已と。章安云はく、取捨宜しきを得て一向にす可からず等云々。釋の心は或時は謗じぬきには暫く說かず。或時は謗ずとも强て說くべし。或時は一機は信ずべくとも萬機謗るべくば說くべからず。或時は萬機一同に謗ずとも强ひて說くべし。初成道の時は法慧、功德林、金剛幢、金剛藏、文殊、普賢、彌勒、解脫月等の大菩薩、梵帝四天等の凡夫大根性の者數をしらず。鹿野苑の苑には倶鄰等の五人、迦葉等の二百五十人、舍利弗等の二百五十人、八萬の諸天。方等大會の儀式には、世尊の慈父の淨飯大王ねんごろに戀せさせ給ひしかば、佛宮に入らせ給ひて觀佛三昧經をとかせ給ひ、悲母の御ために忉利天に九十日が間籠らせ給ひしには摩耶經をとかせ給ふ。慈父悲母なんどにはいかなる祕法か

機の熟不熟—聴衆の智が法を聴くだけに進めるや否やといふこと

座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如來と名をさづけ、五障の龍女は蛇身をあらためずして佛になる。決定性の成佛は燋れる種の花さき果なり、久遠實成は百歳の叟二十五の子となれるかと疑ふ。一念三千は九界即佛界、佛界即九界と談ず。されば此の經の一字は如來寶珠なり、一句は諸佛の種子となる。此等は機の熟不熟はさておきぬ、時の至れる故なり。經に云はく、今正しく是其の時なり、決定して大乘を說かん等云々。

問うて云はく、機にあらざるに大法を授けられば、愚人は定めて誹謗をなして、惡道に墮つるならば、豈に說く者の罪にあらずや。

答へて云はく、人路をつくる路に迷ふ者あり、作る者の罪となるべしや。良醫藥を病人にあたふ、病人嫌ひて服せずして死せば、良醫の失となるか。

尋ねて云はく、無智の人の中に此經を說くこと莫れと。同第四に云はく、分布して妄りに人に授與すべからずと。同第五に云はく、

此法華經。諸佛如來祕密之藏。於諸經中。最在其上。長夜守護。不妄宣說等云云。

此等の經文は機にあらずば說かざれといふか。

今反詰して云はく、不輕品に云はく、

一坐十小劫―以下の經文は說法すべきの時の未だ至らぬ故にそのまゝ時を經しことをいふ

八部―人間以外の八種の鬼神の類、龍、夜叉等

解脫月―一菩薩の名

撰時抄（上）

釋子日蓮述

夫佛法を學せん法は必ず先づ時をならふべし。過去の大通智勝佛は出世し給ひて十小劫が間一經も說き給はず。經に云はく、「一坐十小劫」又云はく、「佛知時未至受請默然坐等云云」今の教主釋尊は四十餘年の程法華經を說き給はず。經に云はく、「說時未至故」と云々。老子は母の胎に處して八十年。彌勒菩薩は兜率の內院に籠らせ給ひて五十六億七千萬歲を待ち給ふべし。彼の時鳥は春を送り鷄鳥は曉をまつ。畜生すらなほかくのごとし。何に況や佛法を修行せんに時を糾さざるべしや。寂滅道場の砌には十方の諸佛示現し一切の大菩薩集會し給ふに、梵帝四天は衣をひるがへし、龍神八部は掌を合せ、凡夫大根性の者は耳をそばだて、生身得忍の諸菩薩解脫月等請をなし給ひしかども、世尊は二乘作佛久遠實成をば名字を祕し、卽身成佛一念三千の肝心其の義を宣べ給はず。此等は偏にこれ機は有りしかども時の來らざればのべさせ給はず。經に云はく、說くべき時未だ至らざるが故に等云々。靈山會上の砌には閻浮第一の不幸の人たりし阿闍世大王

常見—死後もそのまゝ存すとの考
分齊—程度
奪—假借せずの意
與—假借し許す意

り。禪は法華經の方便無得道の禪なるを、眞實常住の法と云ふが故に、外道の常見なり。もし與へてこれを言はゞ、佛の方便三藏の分齊なり。もし奪つてこれを言はゞ、たゞ外道の邪法なり。與ふるは當分の義、奪ふは法華の義なり。法華の奪ふの義を以ての故に、禪は天魔外道の法と云ふなり。

問ふ。禪を天魔の法と云ふ證據如何。

答ふ。前々に申すが如し。（原漢文）

隨縁眞如―眞如の本體が縁のまに〳〵種々の事物となりてあらはるゝこと
不變眞如―本體は少しもかはらずそのまゝにあること

見性―自己内に佛性あるを見るといふこと

無見―死後は物なしとの考

ふ邪義を申し出で。過無き天台に失を懸け上る故に、高祖に背く不孝の者、法華經に背く大謗法罪の者となるなり。それ天台の觀法を尋ぬれば、大蘇道場に於て、三昧開發せしより以來、目を開いて妙法を見れば、隨縁眞如なり。目を閉ぢて妙法を思へば、不變眞如なり。この兩種の眞如は、たゞ一言の妙法にあり。われ妙法を唱ふる時、萬法玆に達し、一代の修多羅一言に含す。所詮迹門を尋ぬれば、迹廣く、本門を尋ぬれば、本高し。しかじ、己心の妙法を觀ぜんにはと、思食されしなり。當世の學者この意を得ざるが故に、天台己證の妙法を習ひ失つて、止觀は法華經に勝り、禪宗は止觀に勝れたりと思ひて、法華經を捨てて、止觀につき、止觀を捨てて禪宗に付くなり。禪宗の一門に云はく、松に藤懸る、松枯れ、藤枯れて後如何。上らずして一打なむどと云へる天魔の語を深く信ずる故なり。修多羅の教主は、松の如く、その教法は藤の如し。各諍論すと雖も、佛も入滅し、教法の威德も無し。爰に知りぬ。修多羅の佛教は、月を指す指なり。禪の一法のみ獨妙なり。これを觀ずれば、見性得達するなりと云ふ大謗法の天魔の所爲を信ずる故なり。然り而して、法華經の佛は、壽命無量常住不滅の佛なり。禪宗は滅度の佛と見るが故に、外道の無見なり。「是法住法位世間相常住」の金言に背く僻見な

漢土に於ては天台に背く。兩大師の傳法すでに法華經に依る、あに、その末學これに違はんや。違ふを以て知りぬ、當世の天台家の人々、その名を天台山に借ると雖も、所學の法門は、達磨の僻見と、善無畏の妄語とに依つて云ふことを。天台傳教の解釋の如くんば、己心中の祕法は、たゞ妙法の一言に限るなり。然り而して、當世の天台宗の學者は、天台の石塔の血脈を祕し失ふが故に、天台の血脈相承の祕法を習ひ失つて、我と一心三觀の血脈とて、我道に任せて書を造り、錦の袋に入れて、頸に懸け、箱の底に埋めて、高直に賣るが故に、邪義國中に流布して、天台の佛法破失せるなり。天台の本意を失ひ、釋尊の妙法を下す、これ偏に、達磨の教訓、善無畏の勸なり。故に止觀をも知らず、一心三觀一心三諦をも知らず、一念三千の觀をも知らず、本迹二門をも知らず、相待、絕待の二妙をも知らず、法華の妙觀をも知らず、教相をも知らず、權實をも知らず、四教八教をも知らず、五時五味の施化をも知らず、教機時國相應の義は申すに及ばず、實教にも似ず、權教にも似ざるなり。道理なり、道理なり。天台傳教の所傳に、禪眞言より劣れりと習ふ故に、達磨の邪義、眞言の妄語と打ち成つて、權教にも似ず、實教にも似ず、二途に攝せざるなり。故に大謗法の罪顯れて、止觀は法華經に勝るとい

薩埵―菩薩といふに同じ

六度―布施、戒律忍辱、精進、靜慮、智慧

この兩大師の血脈の如くならば、天台大師の血脈相承の最要の法は、妙法の一言なり。一心三觀とは、所詮妙法を成就せんための修行の方法なり。三觀は因の義、妙法は果の義なり。但し、因の處に果あり、果の處に因あり。因果俱時の妙法を觀ずるが故に、かくの如き功能を得るなり。爰に知りぬ。天台至極の法門は、法華本迹未分の處に無念の止觀を立て、最祕の大法とすと云へる邪義大なる僻見なりと云ふことを。四依弘經の大薩埵は既に佛教に依りて、諸論を造る、天台何ぞ佛說に背きて、無念の三觀を立て給はんや。もしこの止觀、法華經に依らずといはゞ、天台の止觀教外別傳の達磨の天魔の邪法に同ぜん。都て然るべからず。哀なり哀なり。傳教大師の云はく、國主の制にあらざれば、以て遵行することなかれと。法王の教にあらざれば、以て受信することなかれ。又云はく、四依論を造るに權あり實あり、三乘の旨を述ぶるに三あり一あり。所以に天台智者は、三乘の旨に順じて、四教の階を定め、一實の道に依りて、一佛乘を建つ。六度別あり、戒度何ぞ同じからん。受法同じからず、威儀豈に同じからん。この故に天台の傳法は、深く四依に依り、亦佛教に順ふと。本朝の天台宗の法門は、傳教大師よりこれを始む。もし天台の止觀法華經に依らずと云はゞ、日本に於ては、傳教の高祖に背き、

界如三千―十界の各に十如を具有すとして千界如を生じ三種世間に各これありとして三千となる

三諦―空、假、中の三道理

灌頂玄旨―深き教旨を傳へんが爲に頂に佛水を灑ぎて神聖ならしむる儀式あり

八舌の鑰―今も天台宗の寶物として傳ふ

問ふ。天台大師眞實に、この一言の妙法を證得し玉はざるか。

答ふ。内證は爾るなり。外用に於ては、これを弘通し玉はざるなり。所謂内證の邊をば祕して外用には、三觀と號して、一念三千の法門を示現し給ふなり。

問ふ。何が故に知りながら弘通し給はざるか。

答ふ。時至らざるが故に、付屬にあらざるが故に、迹化なるが故なり。

問ふ。天台この一言の妙法これを證得し給へる證これありや。

答ふ、このこと、天台一家の祕事なり。故に流布せる學者これを知らず。灌頂玄旨の血脈として、天台大師自筆の血脈一紙これあり。天台御入滅の後は石塔の中にこれあり。傳教大師御入唐の時八舌の鑰を以てこれを開き、道邃和尚より傳授し給ふ血脈とはこれなり。この書に云はく、

一言妙旨。一教玄義。

傳教大師の血脈に云はく、

夫一言妙法者。開兩眼見五塵境時者。應隨縁眞如。閉兩眼住無念時者。當不變眞如。故聞此一言。萬法玆達。一代修多羅含一言。

言語道斷―言にあらはしいひ得ざること

心行所滅―心にも思ひ及ばぬこと

諸佛の師―過去の諸佛は皆この妙法によりて成道せられしものといふ意

境智―客觀の外界と主觀の智慧

止觀―止は散亂の心を止めて靜にすること、觀は眞理を明に照したる智慧のこと

觀名云々―「觀を佛と名づけ止を知るを佛見と名づく」

答ふ。妙法は所詮の功德なり。三觀は行者の觀門なるが故なり。この妙法を佛說いて云はく、

道場所得法。我法妙難思。是法非思量。不可以言宣云云。

天台の云はく、妙とは、不可思議言語道斷心行所滅なり。法とは、十界十如因果不二の法なり。三諦とも云ひ、三觀とも云ひ、三千とも云ひ、不可思議とも云ふ。天台の己證は、天台の御思慮の及ぶ所の法門なり。この妙法は諸佛の師なり。今の經文の如くならば、久遠實成の妙覺極果の佛の境界にして、爾前迹門の教主諸佛諸菩薩の境界にあらず。經に、「唯佛與佛 乃能究盡」とは、迹門の界如三千の法門をば、迹門の佛が當分究竟の邊を說けるなり。本地難思の境智の妙法をば、迹佛等の思慮に及ばず。何に況や、菩薩凡夫をや。止觀の二字をば、觀名佛、知止名佛見と釋すれども、迹門の佛智佛見にして、妙覺極果の知見にはあらず。その故は、止觀は天台己證の、界如三千三諦三觀を正となす、迹門の正意これなり。故に、迹佛の知見なりと云ふことを知りぬ。たゞ止觀に、絕待不思議の妙觀を明すと云へども、只一念三千の妙觀に、且く與へて、絕待不思議と名づくるなり。

名字—ことば、名稱

可思議の三觀なり。
問ふ。一心三觀に勝れたる法とは、いかなる法ぞや。
答ふ。この事誠に一大事の法門なり。唯佛與佛の境界なるが故に、われらが言說に出すべからざるが故に、これを申すべからざるなり。こゝを以て經文には、わが法は、妙にして思ひ難し。言を以て宣ぶべからず云々。妙覺果滿の佛すらなほ不可說不思議の法と說き給ふ。何に況や、等覺の菩薩已下乃至凡夫をや。
問ふ。名字を聞かずんば、何を以て勝法ありと知ることを得んや。
答ふ。天台己證の法とはこれなり。當世の學者は、血脈相承を習ひ失ふ故にこれを知らざるなり。故に相構へ、相構へて、祕す可く、祕すべき法門なり。然りと雖も、汝の志神妙なれば、その名を出すなり。一言の法これなり。傳教大師の「一心三觀傳於一言」と書き給ふこれなり。
問ふ。未だその法體を聞かず。如何。
答ふ。所詮一とは妙法これなり。
問ふ。何を以て、妙法は、一心三觀に勝れたりと云ふ事を知るを得るや。

一心三觀—一心にして空觀、假觀、中觀をなすこと

果—終局のさとり

能觀—客觀に對して主觀と名づくるものに當る

義を云ふ人は、祖師天台のためには、不知恩の人なる、あに、その過を免れんや。それ天台大師は、昔靈山にありては藥王と名づけ、今漢土にありては天台と名づけ、日本國の中にては傳教と名づく。三世の弘通倶に妙法と名づく。かくの如く、法華經を弘通し給ふ人は、在世の釋尊より外は三國その名を聞かず、有り難く御坐す大師を、その末學その教釋を惡しく習ひて、失無き天台に、失を懸けまつる、あに大罪にあらずや。

今問ふ。天台の本意は如何なる法ぞや。碩學等の云はく、一心三觀これなり。今云はく、一實圓滿の一心三觀とは、誠に甚深なるに似たれども、なほ以て行者修行の方法なり。三觀とは因の義なるが故なり。慈覺大師の釋に云はく、

三觀者。爲レ令レ得ニ法體一修觀云云。

傳教大師の云はく、

今止觀修行者。爲レ成ニ法華妙果一云云。

故に知りぬ。一心三觀とは、果地果德の法門を成ぜんがための能觀の心なることを。何に況や、三觀とは、言說に出したる法なるが故に、如來の果地果德の妙法に對すれば

所被の機—教を被る者の智識

靈山云々—天台大師の前生は靈鷲山にて釋尊の說法を聽聞せる一人なりといふ

帶權—方便の性質を有すること

一心三觀—一心にして空觀假觀中觀をなすこと

も仍ほこれを畧するなり。

又一つの問答に云はく、所被の機、上機なるが故に勝るといはゞ、實を捨てゝ權を取れ。天台云はく、教彌權なれば、位彌高しと釋し給ふ故なり。所被の機下劣なる故に劣ると云はゞ、權をとりて實を捨てよ。天台の釋には、教彌實なれば、位彌下ると云ふ故なり。然り而して、止觀の上機のためにこれを說き、法華は下機のためにこれを說くと云はゞ、止觀は法華に劣れるが故に、機を高く說くと聞えたり。實にさもあるらむ。天台大師は靈山の聽衆として、如來出世の本懐を述べ玉ふと雖も、時至らざるが故に、妙法の名字を替へて止觀と號す。迹化の衆なるが故に、本化の付屬を弘め玉はず。正直の妙法を止觀と說きまぎらすが故に、ありのまゝの妙法ならざれば、帶權の法に似たり。故に知りぬ。天台弘通の諸化の機は、在世帶權の圓機の如し。本化弘通所化の機は、法華本門の直機なり。止觀法華は、體全く同じと云はん。なほ人師の釋を以て、佛說に同ずる失甚重なり。何に況や、止觀は法華に勝るといふ邪義を申し出すは、但これ本化の弘經と、迹化の弘通と、像法と末法と、迹門の付屬と、本門の付屬とを、末法の行者に云ひ顯さんための、佛天の御計なり。爰に知りぬ、當世の天台宗の中に、この

傳教元よりの約束なるが故なり。その上天台の釋の意は、迹の大教起れば、爾前の大教亡び、本の大教興れば、迹の大教亡び、觀心の大教興れば、本の大教亡ぶと釋するは、本體の本法をば、妙法不思議の一法に取り定めての上に修行を立つるの時、今の像法の修行は、觀心の修行を詮と爲るに、迹を尋ぬれば迹廣し、本を尋ぬれば、本高くして極むべからず。故に末學の機に叶ひ難し。但己心の妙法を觀ぜよといふ釋なり。然りと雖も、妙法を捨てよとは釋せざるなり。若し妙法を捨てば何物を己心となしてか觀ずべき。如意寶珠を捨てて、貧窮を取りて寶となすべきか。悲しいかな、當世天台宗の學者は、念佛眞言禪宗等に同意するが故に、天台の教釋を習ひ失つて、法華經に背き、大謗法の罪を得るなり。若し止觀を法華經に勝ると云はゞ、種々の過これあり。止觀は天台の道場所得の己證なり。法華經は釋尊の道場所得の大法なり。これ一つ。釋尊は、妙覺果滿の佛なり、天台は住前未證なれば、名字 觀行 相似には過ぐ可からず。四十二重の劣なり。これ二つ。法華は釋尊乃至諸佛出世の本懐なり。止觀は天台出世の己證なり。これ三つ。法華經は多寶の證明あり。來集の分身は廣長舌を、大梵天につく。みなこれ眞實の大白法なり。止觀は天台の說法なり。かくの如き等の、種々の相違これあれど

詮—目的

己心の妙法—己が心に具ふる不思議の法

道場所得—佛道修行の場にてさとれるところ

住前—菩薩修行の階級中、十住位の前、十位のこと

名字云々—天台宗にて圓教修行の階段を理即、名字即、觀行即、相似即、分眞即、究竟即の六つとす

白法—善法

四種の釋―天台大師が經を解釋するに用ひし四の方法、因緣釋、約敎釋、本迹釋、觀心釋

漸機―修行をつみて漸くさとりに進む智識のもの

事理俱密―事は有形の行、理は無形の觀、この兩者共に佛以外の智の及ばざる所といふ

圓頓止觀。卽法華三昧之異名耳。

文句の記に云はく、

觀與レ經合。非レ數ニ佗寶一。方知止觀一部。是法華三昧之筌蹄。若得ニ斯意一。方會ニ經旨一云云。

唐土の人師行滿の釋せる學天台宗法門大意に云はく、

摩訶止觀一部大意。不レ出ニ法華三昧異名一。依レ經修レ觀。

これ等の文證分明なり。誰かこれを論ぜん。

問ふ。天台四種の釋を作るの時、觀心の釋に至りて、本迹の釋を捨つと見えたり。又法華經は漸機のためにこれを說き、止觀は直達の機のためにこれを說くと。如何。

答へて云はく、漸機のために說かば劣り、頓機のために說かば勝るとならば、天台宗の意は、華嚴眞言等の經は、法華經に勝れたりと云ふ可きや。今の天台宗の淺猨は、眞言は事理俱密の教なるが故に、法華經に勝れたりといへり。故に、止觀は法華に勝ると云へるも道理なり、道理なり。次に觀心の釋の時、本迹を捨つといふ難は、法華經何の文人師の釋を本と爲して、佛教を捨てよと見えたるや。設ひ天台の釋なりとも、釋尊の金言に背き、法華經に背かば、全くこれを用ふべからず。依法不依人の故に、龍樹、天台、

弘決—止觀輔行弘決、十卷、天台第六祖荊溪の著

止觀大意—一卷、荊溪の著

龍樹の大論に云はく、修多羅白論に依りて、修多羅黑論に依らざれと。

教主釋尊の云はく、

依法不依人。

天台は、法華經に依り、龍樹を高祖にしながら、經文に違ひ、わが言を飜して、外道邪見の法に依りて、止觀一部を釋すること全くあるべからず。

問ふ。正しく、止觀は法華經に依ると見えたる文これありや。

答ふ。餘りに多きが故に少々これを出さん。止觀に云はく。

漸與不定。置而不論。今依經更明圓頓。

弘決に云はく、

攢法華旨。成不思議十乘十境待絶滅絶寂照之行。

止觀大意に云はく、

今家教門以龍樹爲始祖。慧文但列內觀而已。洎于南岳天台。復因法華三昧發陀羅尼。開拓義門。觀法周備。若釋法華。彌須曉了權實本迹。方可立行。此經獨得稱妙。方可依此以立觀道。言五方便及十乘軌行者。即圓頓止觀全依法華。

問ふ。天台大師止觀一部竝びに一念三千一心三觀己心證得の妙觀は、併しながら法華經に依ると云ふ證據如何。

答ふ。予反詰して云はく、法華經に依らざると見えたる證文如何。

人これを出して云はく、この止觀は、天台智者己心中所行の法門を說く。或は又故に止觀に至りて、正しく觀法を明す。故に序の中に、說己心中所行法門と云へり。良に以あるなり。

難じて云はく、この文は全く法華經に依らずと云ふ文にあらず。既に、說己心中所行法門と云ふが故なり。天台の所行の法門は、法華經なるが故に、この意は法華經に依ると見えたる證文なり。但し、佗宗に對するの時は、問答大綱を存ずべきなり。所謂云ふ可し、若し、天台の止觀法華經に依らずと云はゞ、速に捨つべきなり。その故は、天台大師豫て約束して云はく、

修多羅と合せば、錄してこれを用ひよ。文なく、義なきは信受す可からず云々。

傳敎大師の云はく、

佛說に依憑して、口傳を信ずるなかれ。

併しながら—そのまゝ、盡く

修多羅—經文

立正觀抄

法華止觀同異決

日蓮撰

當世天台の教法を習學するの輩、多く觀心修行を貴びて、法華本迹二門を捨つると見えたり。今問ふ。抑も、觀心修行と言はゞ、天台大師の摩訶止觀の說、己心中所行法門の一心三觀一念三千の觀に依るか、將又、世に流布せる達磨の禪觀に依るか。若し、達磨の禪觀に依るといはゞ、教禪とは、未顯眞實妄語方便の禪觀なり。法華經妙禪の時には、正直捨方便と捨てらるゝ禪なり。祖師達磨禪とは、教外別傳の天魔禪なり。ともにこれ、無得道妄語の禪なり。仍つてこれを用ふべからず。若し天台の止觀の一心三觀に依るとならば、止觀一部の廢立天台の本意に背くべからず。若し、止觀修行の觀心に依るとならば、法華經に背くべからず。止觀一部は法華經に依りて建立す。一心三觀の修行は、妙法の不可得なるを感得せんがためなり。故に知りぬ。法華經を捨てたゞ觀を正とするの輩は、大謗法大邪見天魔の所爲なることを。その故は、天台の一心三觀とは、法華經に依りて、三昧開發するを己心證得の止觀とは云ふ故なり。

己心云々―何も彼も自己一心中に存して外界に無しとの考

廢立―研究といふほどの意

寶刹—淨土

けて、我等を守護して慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべき也。あら嬉しや、あらうれしや。

文永十年癸酉五月日　日蓮花押

人々御中へ

此の書御身を離さず常に御覧あるべく候ふ

寂光の本土—法身佛の淨土

自受法樂—佛が佛法を說きて自らのよろこびとすること

二聖—釋迦佛と多寶佛

二天—梵天と帝釋

然、良觀房等は卽ち法華經の行者と云はれ、釋尊天台傳敎日蓮竝びに弟子檀那は、念佛眞言禪律等の行者なるべし。法華經は方便權敎と云はれ、念佛等の諸經は還て法華經となるべき歟。東は西となり、西は東となるとも、大地は持つ所の草木共に飛び上りて天となり、天の日月星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも、いかでか此の理あるべき。哀哉今日本國の萬人、日蓮竝びに弟子檀那等が三類の強敵に責められ、大苦に値ふを見て悅んで笑ふとも、昨日は人の上、今日は身の上なれば、日蓮竝びに弟子檀那共に、霜露の命の日影を待つ計りぞかし。只今佛果に叶ひて寂光の本土に居住して、自受法樂せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値はん時、我等何計無慚と思はんずらん。汝等何計うらやましく思はんずらん。一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるとも、ゆめ〳〵退する心なかれ、恐るゝ心なかれ。縱ひ頸をば鋸にて引き切り、胴をば稜鉾を以て突き、足には釱を打つて錐を以て揉むとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ死に死ぬるならば、釋迦多寶十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來つて、手をとり肩に引懸けて靈山へ走り給はゞ、二聖二天十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は天蓋を指し旗を上

を責めずして山林に閉籠り、攝受を修行せんは、豈法華經修行の時を失ふ物怪にあらずや。されば末法今の時、法華經の折伏の修行をは、誰か經文の如く行じ給ひしぞ。誰人にても坐せ、諸經は無得道墮地獄の根源、法華經獨り成佛の法也と、音も惜まずよばはり給ひて、諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ。三類の强敵來らん事疑なし。我等が本師釋迦如來は　在世八年の間折伏し給ひ、天台大師は三十餘年、傳教大師は二十餘年、今日蓮は二十餘年の間權理を破す。其の間の大難數を知らず。佛の九横の難に及ぶか及ばざるか知らず。恐らくは天台傳教も法華經の故に日蓮が如く、大難に値ひ給ひし事なし。彼は只惡口怨嫉計り也。是は兩度の御勘氣、遠國に流罪せられ、龍口の頸の座、頭の疵等、其の外惡口せられ、弟子等を流罪せられ、籠に入れられ、檀那の所領を取られ、御内を出されし。是等の大難には、龍樹天台傳教も爭でか及び給ふべき。されば如說修行の法華經の行者には、三類の强敵打ち定んで有るべしと知り給へ。されば釋尊御入滅の後二千餘年が間に、如說修行の行者は釋尊天台傳教の三人はさておき候ひぬ、末法に入つては日蓮竝びに弟子檀那等是也。我等を如說修行の者といはずば、釋尊天台傳教の三人も如說修行の人なるべからず。提婆、瞿伽利、善星、弘法、慈覺、智證、善導、法

權大乘—小乘教の上なれど實大乘教に及ばぬもの、法華經に對する他の諸宗を意味す

四安樂行—身安樂行、口安樂行、意安樂行、誓願安樂行

答へて云はく。凡佛法を修行せん者は、攝折二門を知るべき也。一切の經論此の二つを出でざるなり。されば國中の諸學者等、佛法をあら〳〵學すと云へども、時刻相應の道をしらず。四節四季取々に替れり。夏は熱く、冬はつめたく、春は花さき、秋は菓なる。春種子を下して秋菓を取るべし。秋種子を下して春菓を取らんに、豈に取らるべけんや。極寒の時は厚き衣は用ふるなり。極熱の夏はなにかせん。涼風は夏の用也。冬はなにかせん。佛法も亦復是の如し。小乘の流布して得益あるべき時もあり、權大乘の流布して得益あるべき時もあり、實教の流布して佛果を得べき時もあり。然るに正像二千年は小乘權大乘の流布の時也。末法の始の五百年には、純圓一實の法華經のみ廣宣流布の時也。此の時は鬪諍堅固白法隱沒の時と定めて、權實雜亂の砌也。敵ある時は刀杖弓箭を持つ可し、敵無き時は弓箭兵杖何にかせん。今の時は權教卽實教の敵と成る也。一乘流布の時は權教有つて敵と成りてまぎらはしくば、實教より之を責むべし。是を攝折二門の中には法華經の折伏と申す也。天台云はく、法華折伏破權門理と。まことに故ある哉。然るに攝受たる四安樂の修行を、今の時行ずるならば、冬種子を下して春菓を求むる者にあらずや。雞の曉に鳴くは用也。宵に鳴くは物怪也。權實雜亂の時、法華經の御敵

大士―菩薩
施權云々―初に方便を教へ、次に方便なるを示し、最後に方便をすてて眞實に誘引すること

し也。此の經の序分無量義經にして、權實の榜示を指して方便眞實を分け給へり。所謂「以方便力四十餘年未顯眞實」是なり。大莊嚴等の八萬の大士、施權開權廢權等のいはれを得意分け給ひて、領解して言はく、法華已前歷劫修行等の諸經は、終に無上菩提を成ずるを得ずと申しきり給ひぬ。然して後正宗の法華に至りて、世尊法久後要當說眞實と說き給ひしを始として、無二亦無三除佛方便說、正直捨方便乃至不受餘經一偈」と禁め給へり。是より已後は唯有一佛乘の妙法のみ一切衆生を佛になす大法にて、法華經より外の諸經は一分の得益もあるまじきに、末法の今の學者、何れも如來の說教なれば、皆得道あるべしと思ひて、或は眞言、或は念佛、或は禪宗三論法相倶舍成實律等の諸宗諸經を取々に信ずる也。是の如きの人をば、「若人不レ信毀ニ謗此經一即斷ニ一切世間佛種一乃至其人命終入ニ阿鼻獄一」と定め給へり。此等の約の明鏡を本として一分も違へず、唯有一乘法と信ずるを、如說修行の人とは佛は定めさせ給へり。

難じて云はく。左樣に方便權敎たる諸經諸佛を信ずるを法華經と云はどこそ、只一經に限りて經文の如く五種の修行をこらし、安樂行品の如く修行せんは、如說修行の者とは云はれ候ふまじき歟如何。

一人—自己をいふ

義農—伏羲氏と神農氏、支那大古のよく治まりし代の帝王

攻め落しすれども、かたきは多勢也、法王の一人は無勢也、今に至つて軍やむ事なし。法華折伏破權門理の金言なれば、終に權教權門の輩を一人もなく攻め落して法王の家人となし、天下萬民諸乘一佛乘と成つて、妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨壤を砕かず、代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死之理顯れん時を各々御覽ぜよ。現世安穩の證文疑あるべからざる者也。

問うて云はく、如說修行の行者と申さんは、何樣に信ずるを申し候ふべきや。

答へて云はく、當世日本國中の諸人、一同に如說修行の人と申し候ふは、諸乘一佛乘と開會しぬれば、何れの法も皆法華經にして、勝劣淺深ある事なし。念佛を申すも、眞言を持つも禪を修行するも、總じて一切の諸經竝びに佛菩薩の御名を持ちて唱ふるも、皆法華經なりと信ずるが、如說修行の人とは云はれ候ふ也云々。予が云はく、然らず。所詮佛法を修行せんには、人の言を用ふべからず、只仰いで佛の金言を守るべき也。我等が本師釋迦如來は、初成道の始より法華を說かんと思食ししかども、衆生の機根未熟なりしかば、先權教たる方便を四十餘年が間說きて後に、眞實たる法華經を說かせ給ひ

法王―釋尊をさす

捨權―方便の敎を捨つること

大白牛車―最も貴く最も大なる車、一乘の法華經に譬ふ

や。

問うて云はく、如說修行の行者は現世安穩なるべし。何が故ぞ三類の强敵盛んならんや。答へて云はく、釋尊は法華經の御爲に今度九橫の大難に値ひ給ふ。過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り、竺の道生は蘇山に流され、法道三藏は面に火印をあてられ、師子尊者は頭を刎ねられ、天台大師は南三北七にあだまれ、傳敎大師は六宗に憎まれ給へり。此等の佛菩薩大聖等は、法華經の行者として、而も大難にあひ給へり。此等の人々を如說修行の人と云はずんば、いづくにか如說修行の人を尋ねん。然るに今の世は鬪諍堅固白法隱沒なる上、惡國惡王惡臣惡民のみ有りて正法を背きて邪法邪師を崇重すれば、國土に惡鬼亂れ入りて三災七難盛に起れり。かゝる時刻に日蓮佛勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ。法王の宣旨背きがたければ、經文に任せて權實二敎のいくさを起し、忍辱の鎧を著て妙敎の劍を提げ、一部八卷の肝心、妙法五字の旗を指上げて、未顯眞實の弓をはり、正直捨權の箭をはげて、大白牛車に打乘つて權門をかつぱと破り、かしこへ押しかけ、こゝへおしよせ、念佛眞言禪律等の八宗十宗の敵人を攻むるに、或はにげ或はひき退き、或は生取られし者は我が弟子となる。或はせめ返し、

如説修行鈔

四衆—比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷

闘諍堅固—爭の烈しきこと、末法の現象

白法—善法の意

況滅度後—佛在世にすら怨嫉多し、まして佛滅の後に於てをや

夫以れば、末法流布の時、生を此の土に受け、此の經を信ぜん人は、如來の在世より猶多く怨嫉の難甚しかるべしと見えて候ふ也。其の故は在世は能化の主は佛也。弟子又大菩薩阿羅漢也。人天四衆八部人非人等也といへども、調機調養して法華經を聞かしめ給ふ、猶怨嫉多し。何に況や末法今の時は、教機時刻當來すといへども、其の師を尋ぬれば凡師也。弟子又闘諍堅固白法隱沒三毒強盛の惡人等也。故に善師をば遠離し、惡師には親近す。其の上眞實の法華經の如説修行の行者の師弟檀那とならんには、三類の敵人決定せり。されば此の經を聽聞し始めん日より思ひ定むべし。況や滅度後の大難の三類甚しかるべしと。然るに我が弟子等の中にも兼て聽聞せしかども、大小の難來る時は今始めて驚き、肝をけして信心を破りぬ。兼て申さゞりける歟。經文を先として「猶多怨嫉況滅度後況滅度後」と朝夕教へし事は是也。予が或は所を逐はれ或は疵を蒙り、或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に流罪せらるゝを見聞くとも、今始めて驚くべきにあらざる物を

太公—太公望
成王—周第二代の王
四皓—四人の賢き老人
惠帝—前漢第二代の天子

四大菩薩を出現せしむべき先兆なるか。天台の云はく、「雨の猛きを見て、龍の大なるを知り、花の盛なるを見て、池の深きことを知る」等云云。妙樂云はく、「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る等云々」天晴れぬれば地明かなり。法華を識る者は世法を得べきか。一念三千を識らざる者には、佛大慈悲を起し、妙法五字の袋の内に、この珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめ玉ふ。四大菩薩の此の人を守護し玉はんこと、太公、周公の、成王を攝伏し、四皓が惠帝に奉持せしに異らず。

文永十年大才癸酉卯月二十五日　日蓮註之

（原漢文）

自界—國内
西海—西方の海外
上宮—聖德太子
阿彌陀他方—他方淨土の阿彌陀如來
鵝王—藥師佛、延暦寺根本中堂の本尊なり

師云はく、「正像やゝ過ぎ已て末法太だ近きにあり等云々」「末法太だ近きにあり」の釋は、わが時は正時にあらずといふ意なり、傳教大師が日本にして末法の始を記して云はく、「代を語れば像の終、末のはじめ、地を尋ぬれば、唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち、五濁の生、鬪諍の時なり」經に云はく、

猶多怨嫉。況滅度後。此言良有レ以也。此釋鬪諍之時云云。

今の自界叛逆、西海侵逼の二難を指すなり。この時地涌千界出現して、本門の釋尊の脇士となり、一閻浮提第一の本尊をこの國に立つべし。月支震旦未だこの本尊有さず。日本國の上宮四天王寺を建立す。いまだ時來らず。阿彌陀他方を以て本尊となす。聖武天皇東大寺を建立す。華嚴經の教主なり。いまだ、法華經の實義を顯さず。傳教大師粗法華經の實義を顯示す。然りと雖も時いまだ來らざるが故に、東方の鵝王を建立して、本門の四菩薩を顯さず。所詮地涌千界のために、これを讓り與へ玉ふ故なり。この菩薩佛敕を蒙りて、近く大地の下に在り。正像にいまだ出現せず、末法にもいまだ出で來り給はず。大妄語の大士なり。三佛の未來記も亦泡沫に同じ。これを以てこれを惟ふに、正像になき大地震大慧星等を出來す。これ等は、金翅鳥修羅龍神等の動變にあらず。偏に

理具―萬有の本體
事行―有形的の修行
圓機―完全のさとりを得べき智慧の人
圓時―さとりを開くべき人の多き時期

なし、本門を以て裏となして、百界千如一念三千その儀を盡せり。たゞ理具を論じて、事行の南无妙法蓮華經の五字ならびに本門の本尊未だ廣くこれを行ぜず。所詮圓機ありて、圓時なきが故なり。今末法のはじめ小を以て大を打ち、權を以て實を破し、東西共にこれを失し、天地顚倒せり。迹化の四依は隱れて現前せず、諸天その國を弃ててこれを守護せず。この時地涌の菩薩はじめて世に出現し、たゞ妙法蓮華經の五字を以て、幼稚に服せしむ。「因謗墮惡必因得益」とは、わが弟子これを惟へ。地涌千界は、教主釋尊の初發心の弟子なり。寂滅道場にも來らず。雙林最後にも訪はず。不孝の失これあり。迹門の十四品にも來らず。本門の六品には座を立つ。たゞ八品の間に來還せり。かくの如き高貴の大菩薩三佛に約足してこれを受持す。末法のはじめに出で玉はざるべきか。當に知るべし、この四菩薩折伏を現ずる時は、賢王となりて、愚王を誡責し、攝受を行ずる時は、僧となりて正法を弘持す。

問うて云はく、佛の記文は云何。

答へて云はく、「後の五百歲閻浮提に於て廣宣流布せん」天台大師記して云はく、「後の五百歲遠く妙道に沾はん」。妙樂記して云はく、「末法のはじめ、冥利无きにあらず」傳教大

靈山八年の諸人｜法華經聽聞の人

今留在此。

分別功德品に云はく、

惡世末法時。

藥王品に云はく、

後五百歲。於閻浮提廣宣流布。

涅槃經に云はく、

譬如七子。父母非不平等。然於病者心則偏重。

已前の明鏡を以て佛意を推知するに、佛の出世は、靈山八年の諸人の爲にあらず、正像末の人のためなり。又正像二千年の人のためにあらず。末法のはじめ予が如き者のためなり。「然於病者」といふは、滅後の法華經誹謗の者を指すなり。「今留在是」とは、「於此好色香藥而謂不美者」を指すなり。地涌千界正像に出でざるは、正法一千年の間は、小乘權大乘なり。機と時と共にこれなく、四依の大士小權を以て緣となして、在世の下種これを脫せしむ。謗多くして熟益を破るべき故にこれを說かず。例へば、在世の前四味の機根の如し。像法の中の末に、觀音藥王、南岳天台等と示現して、迹門を以て面と

慳貪ー法を惜みて與へざることその罪恐るべし

疑ひて云はく、正像二千の間に、地涌千界閻浮提に出現してこの經を流通するか。

答へて云はく、しからず。

驚きて云はく、法華經並に本門は佛の滅後を以て、本となして、まづ地涌千界にこれを授與す。何ぞ正像に出現して、この經を弘通せざるや。

答へて云はく、宣べず。

重ねて問うて云はく、如何。

答ふ、これを宣べず、

又重ねて問ふ。如何。

答へて云はく、これを宣ぶれば、一切世間の諸人威音王佛の末法の如く、又わが弟子の中にも粗これを說かばみな誹謗をなす可し。默止せんのみ。

求めて云はく、說かずんば汝慳貪に墮せん。

答へて云はく、進退これ谷れり。試に粗これを說かん。法師品に云はく、

　況滅度後。

壽量品に云はく、

云はく、

以要言之。如來一切所有之法。乃至宣示顯說。

明に知りぬ。果分の一切の所有之法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の祕要の藏、果分の一切の甚深の事、みな法華に於て宣示顯說するなり等云々、この十神力は、妙法蓮華經の五字を以て、上行、安立行、淨行、无邊行等の四大菩薩に授與し玉ふなり。前の五神力は滅後のためなり。然りと雖も、再往これを論ずれば一向に滅後のためなり。故に次下の文に云はく、

以佛滅度後。能持是經故。諸佛皆歡喜。現无量神力等云云。

次下の囑累品に云はく、

爾時釋迦牟尼佛從法座起。現大神力。以右手。摩无量菩薩摩訶薩項。乃至今以付屬汝等云云。以地涌菩薩爲頭。迹化他方乃至梵釋四天等。囑累此經。十方來諸分身佛。各還本土。乃至多寶佛塔。還可如故等云云。

藥王品已下乃至涅槃經等は、地涌菩薩去り了つて、迹化の衆、佗方の菩薩等のために、これを付屬し玉ふ。捃拾遺囑これなり。

壽佛の弟子、藥王菩薩は、日月淨明德佛の弟子、普賢菩薩は寶威佛の弟子なり。一往、釋尊の行化を扶けん爲に、娑婆世界に來入す。又爾前迹門の菩薩なり。本法所持の人にあらざれば、末法の弘法に足らざる者か。經に云はく、

爾時世尊乃至一切衆前現大神力。出廣長舌。上至梵世。乃至十方世界衆寶樹下師子座上諸佛。亦復如是。出廣長舌等云云。

それ、顯密二道一切の大小乘經の中に、釋迦諸佛並び坐し、舌相梵天に至る文これなし。阿彌陀經の廣長舌相三千を覆ふは有名無實なり。般若經の舌相三千光を放ち、般若を說きしも全く證明にあらず。これはみな兼帶の故に、久遠を覆相する故なり。かくの如く、十神力を現じて、地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云はく、經に云はく、

爾時佛告上行等菩薩大衆。諸佛神力如是。无量无邊不可思議。若我以是神力。於无量无邊百千萬億阿僧祇劫。爲囑累故。說此經功德。猶不能盡。以要言之。如來一切所有之法。如來一切自在神力。如來一切祕要之藏。如來一切甚深之事。皆於此經宣示顯說等云云。

天台云はく、爾の時佛上行に告ぐより、下は第三結要付屬云々。傳敎云はく、又神力品に

使還告。等云云。

分別功德品に云はく、「惡世末法時等云云」

問うて云はく、この經文の遣使還告は如何。

答へて云はく、四依なり。四依に四類あり。小乘の四依は、多分は、正法の前の五百年に出現す。大乘の四依の多分は、正法の後の五百年に出現す。三に迹門の四依は多分は、像法一千年、小分は末法の初なり。四に本門の四依は多分は、地涌千界は末法の始に必ず出現すべし。今の遣使還告は地涌なり。是好良藥とは、壽量品の肝要たる妙體宗用敎の南無妙法蓮華經これなり。この良藥をば、佛なほ迹化に授與し玉はず。何に況や他方をや。神力品に云はく、

爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩從地涌出者。皆於佛前一心合掌。瞻仰尊顏而白佛言。世尊我等於佛滅後世尊分身所在國土滅度之處當廣說此等云云。

天台の云はく、「但下方の發誓のみを見たり等云々」道宣云はく、「付囑とは、この經をばたゞ下方涌出の菩薩に付す。何が故ぞ爾る。法は是久成の法なるによるが故に、久成の人に付す等云々」それ文殊師利菩薩は、東方金色世界の不動佛の弟子、觀音は西方無量

云はく、
以二法是久成法一付二久成之人一等云云。
又彌勒菩薩疑請して云はく、經に云はく、
我等雖下復信二佛隨宜所說。佛所出言未二曾虛妄。佛所知者皆悉通達上然諸新發意菩薩。於二佛滅後一若聞二是語一或不二信受一而起二破レ法罪業因緣一。唯願世尊。願爲解說除二我等疑一。及未來世諸善男子。聞二此事一已。亦不レ生レ疑等云云。
文の意は、壽量の法門は、滅後の爲にこれを請ずるなり。壽量品に云はく、
或失二本心一。或不レ失者。乃至不レ失レ心者。見二此良藥色香俱好一。即便服レ之。病盡除愈等云云。
久遠下種大通結緣乃至前四味迹門等の一切の菩薩、二乘人天等の本門に於て得道するこれなり。經に云はく、
餘失レ心者。見二其父來一。雖二亦歡喜問訊。求二索治一レ病。然與二其藥一而不二肯服一。所以者何。毒氣深入失二本心一故。於二此好色香藥一而謂レ不レ美。乃至我今當下設二方便一令上レ服二此藥一。乃至是好良藥。今留在レ此。汝可二取服一。勿レ憂レ不レ差。作二是教一已。復至二他國一。遣レ

曉—さとす

者。當於此土而廣說之。爾時佛告諸菩薩摩訶薩衆。止。善男子。不須汝等護持此經等云云。

以大音聲普告四衆。誰能於此娑婆國土廣說妙法華經等云云。

法師より已下の五品の經文前後の水火なり。寶塔品の末に云はく、設ひ教主一佛たりと雖も、これを奬勸し玉はゞ、藥王等の大菩薩梵帝日月四天等はこれを重んずべき處に、多寶佛十方の諸佛客佛となりて諫曉し玉ふ。諸の菩薩等は、この慇懃の付屬を聞きて、「我不愛身命」の誓言を立つ。これ等は偏に、佛意に叶はんが爲なり　而るに、須臾の間に、佛語相違して、過八恒沙の此の土の弘經を誓止し玉ふ。進退これ谷る、凡智に及ばず。天台智者大師、前三後三の六釋を作りて、これを會し玉へり。所詮、迹化他方の大菩薩等に、わが内證の壽量品を以て授與すべからず。末法の初は、謗法の國にして、惡機なるが故に、これを止めて、地涌千界の大菩薩を召して、壽量品の肝心たる、妙法蓮華經の五字を以て、閻浮の衆生に授與せしめ玉ふ。又迹化の大衆は、釋尊の初發心の弟子等にあらざるが故なり。天台大師の云はく、これわが弟子なり、わが法を弘むべしと。妙樂の云はく、子父の法を弘む、世界の益ありと。輔正記に

身を燒き盡して灰となること

旃陀羅—穢多に同じ

等妙—等覺、妙覺の位

問うて云はく、その證如何。

答へて云はく、法師品に云はく、

而此經者。如來現在。猶多怨嫉。況滅度後。

寶塔品に云はく、

令法久住。乃至所來化佛。當知此意。

勸持安樂等これを見るべし。迹門かくの如し。本門を以てこれを論ずれば、一向に末法の初を以て正機となす。所謂一往これを見る時は、久種を以て下種となし、大通前四味迹門を熟と爲して、本門に至りて、等妙に登らしむるを脱と爲す。再往これを見れば、迹門には似ず。本門は序正流通倶に、末法の始を以て詮となす。在世の本門と、末法の初は一因に純圓なり。但し、彼は脱、此は種なり。彼は一品二半、此はたゞ題目の五字なり。

問うて云はく、その證文如何。

答へて云はく、涌出品に云はく、

爾時他方國土諸來菩薩摩訶薩過八恆河沙數。於大衆中。起立合掌。作禮而白佛言。世尊若聽。我等於佛滅後。在此沙婆世界。勤加精進。護持讀誦書寫供養是經典

竹膜—極めて僅少なるたとへ

奪—假借せずに

種熟脱—佛が衆生に法華經を領解せしめんが爲に種を下すこと、機根を調熟せしむること、得脱せしむることの三順序を用ふること

灰斷—火を以て

覺の釋尊にあらず、所說の法門亦天地の如し。十界久遠の上に國土世間既に顯る。一念三千殆んど竹膜を隔てたり。又迹門並びに、前四味無量義經涅槃經等の三說は、悉く隨他意の易信易解、本門は三說の外の難信難解隨自意なり。又本門に於ても、序正流通あり。過去大通佛の法華經より、乃至現在の華嚴經、乃至迹門十四品、涅槃經等の一代五十餘年の諸經、十方三世諸佛の微塵の經には皆壽量の序分なり。一品二半よりの外は、小乘敎、邪敎、未得道敎、覆相敎と名づく。その機を論ずれば、德薄、垢重、幼稚、貧窮、孤露にして、禽獸に同じきなり。爾前迹門の圓敎すらなほ佛因にあらず。何に況んや、大日經等の小乘經をや。何に況や、華嚴眞言等の七宗等の論師人師の宗をや。與へて、これを論ずれば、前三經を出でず。奪つてこれを云へば、藏通に同ず。設ひ法は甚深と稱すとも、未だ種熟脱を論ぜず。還つて灰斷に同ず。化の始終なしとはこれなり。譬へば、王女たりと雖も、畜種を懷姙すれば、その子旃陀羅に劣れるが如し。これ等は且くこれを閣く。迹門十四品の正宗の八品は、一往これを見るに、二乘を以て正と爲し、菩薩凡夫を以て傍と爲す。再往これを勘ふれば、凡夫正像末を以て正と爲す。正像末の三時の中にも、末法の始を以て、正が中の正となす。

大通—三千塵點劫の昔に出でし佛の名、阿閦、彌陀、釋尊等の十六佛は、この佛在俗の時の子なりきといふ

正宗の十巻の内に於て、亦序正流通あり。无量義經並びに序品は序分なり。方便品より、分別功徳十九行の偈に至るまで、十五品中は正宗分なり。分別功徳品の現在の四信より、普賢經に至るまで、十一品半と一巻は流通分なり。又法華經の十巻に於ても、二經あり、各序正流通を具するなり。无量義經と序品は序分なり。方便品より、人記品に至るまでの八品は、正宗分なり。法師品より、安樂行品に至るまでの五品は流通分なり。その教主を論ずれば、始成正覺の佛、本无今有の百界千如を說きて、已今當に超過せる隨自意難信難解の正法なり。過去の結緣を尋ぬれば、大通十六の時、佛果の下種を下し、進みては、華嚴經の前四味を以て、助緣となして、大通の種子を覺知せしむ。これは佛の本意にあらず。たゞ毒發等の一分なり。二乘凡夫等は、前四味を緣となし、漸々に法華に來至して、種子を顯し、開顯を遂ぐるの機これなり。又在世に於て、始めて八品を聞く。人天等或は一句一偈等を聞きて下種となし、或は熟し、或は脫し、或は普賢涅槃等に至り、或は正像末等に小權等を以て緣と爲して法華に入る。例へば、在世の前四味の者の如し。又本門十四品の一經に序正流通あり。涌出品の半を序分となし、壽量品と前後の二半これを正宗となす。その餘は流通分なり。その教主を論ずれば、始成正

迹佛—本佛しばらく迹を垂れて現れし佛

八品—法華經の最要なる處

寂滅道場—華嚴經說法の處

蓮華經の左右に、釋迦牟尼佛、多寶佛、釋尊の脇士上行等の四菩薩、文殊、彌勒等の四菩薩は、眷屬として末座に居し、迹化他方の大小諸菩薩は、萬民の大地に處して、雲閣月卿を見るが如し。十方の諸佛は、大地の上に處し玉ふ。迹佛迹土を表す故なり。かくの如き本尊は、在世五十餘年にこれ无し。八年の間但八品に限る。正像二千年の間は、小乘の釋尊は、迦葉阿難を脇士となし、權大乘並びに、涅槃法華經の迹門等の釋尊は、文殊、普賢等を以て脇士と爲す。これ等の佛を正像に造り畫けども、未だ壽量の佛有さず。末法に來入して、始めてこの佛像出現せしむべきか。

問ふ。正像二千餘年の間は、四依の菩薩並びに人師等、餘佛、小乘、權大乘、爾前迹門の釋尊等の寺塔を建立すれども、本門壽量品の本尊並びに四大菩薩をば、三國の王臣倶に、未だこれを崇重せざる由これを申す。この事、ほゞこれを聞くと雖も、前代未聞の故に、耳目を驚動し、心意を迷惑す。請ふ重ねてこれを說け。委細にこれを聞かん。

答へて云はく、法華經一部八卷二十八品、進みては、前四味、退きては、涅槃經等の一代諸經惣じてこれを括るに、たゞ一經なり。始、寂滅道場より、終、般若經に至るまで序分なり。無量義經、法華經、普賢經の十卷は正宗なり。涅槃經等は、流通分なり。

方便—應身佛の淨土
實報—報身佛の淨土
寂光—法身佛の淨土
安養—彌陀の淨土
淨瑠璃—藥師の淨土
密嚴—密嚴經に見えたる淨土の名

周公旦等は、周武の臣下、成王幼稚の眷屬、武内の大臣は、神功皇后の棟梁、仁德王子の臣下なるが如し。上行、無邊行、淨行、安立行等は、われ等が己心の菩薩なり。妙樂大師云はく、

當に知るべし。身土一念三千なり。故に、成道の時この本理に稱うて、一身一念法界に遍し等云々。

それ始、寂滅道場華藏世界より、沙羅林に終るまで五十餘年の間、法藏密嚴三變四見等の三土四土は、皆成劫の上、無常の土に變化する所の、方便、實報、寂光、安養、淨瑠璃、密嚴等なり。能變の教主涅槃に入り玉へば、所變の諸佛隨つて滅盡す。土も亦以てかくの如し。今本時の娑婆世界は、三災を離れ、四劫を出でたる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず、未來にも生ぜず、所化以て同躰なり。これ即ち、己心三千具足三種の世界なり。迹門十四品に未だこれを說かず。法華經の内に於ても、時機未熟の故なるか。この本門の肝心の、南無妙法蓮花經の五字に於ては、佛なほ、文殊藥王等にもこれを付屬し玉はず。何に況んやその已下をや。但、地湧千界を召して、八品を說きてこれを附屬し玉ふ。それ、本尊の爲體、本師の娑婆の上に寶塔空に居し、塔中の妙法

古佛――今始て覺られたるにあらぬ佛

は、妙法蓮華經の五字に具足す。われ等この五字を受持すれば自然に、かの因果の功德を讓與し給ふ。四大聲門の領解に云はく、

无上寶珠不求自得云云。

われ等が己心の聲聞界なり。わが如く等しくして異ることなし。わが昔の所願の如きいま已に滿足しぬ。一切衆生を化して皆佛道に入らしむ。妙覺の釋尊はこれ等が血肉なり。因果の功德は骨髓にあらずや。寶塔品に云はく、

其有能護此經法者。則爲供養我及多寶乃至亦復供養諸來化佛莊嚴光飾諸世界者等云云。

釋迦多寶十方の諸佛は、わが佛界なり。その迹を紹繼して、その功德を受得す。「須臾聞之卽得究竟阿耨多羅三藐三菩提」とはこれなり。壽量品に云はく、

然我實成佛已來。无量无邊百千萬億那由他劫等云云。

われ等が己心の釋尊は、五百塵點乃至所顯の三身にして无始の古佛なり。經に云はく、

我本行菩薩道所成。壽命今猶未盡、況復上數等云云。

われ等が己心の菩薩等なり。地涌千界の菩薩は、己心の釋尊の眷屬なり。例へば大公、

胡―夷狄のこと

に同ずるを悦び、或は遠を貴びて、近を蔑にし、或は舊を捨てて新をとり、魔心愚人出來す。然りと雖も、詮ずる所は、一念三千の佛種にあらざれば、有情の成佛木畫二像の本尊は、有名無實なり。

問うて云はく、大難いまだ開通を聞かず。如何。

答へて云はく、无量義經に云はく、

雖レ未レ得レ修ニ行六波羅蜜ヲ一六波羅蜜自然在前ス等云云。

法華經に云はく、

欲レ聞ニ具足道ヲ一等云云。

涅槃經に云はく、

薩者名ニ具足ニ一等云云。

龍樹菩薩の云はく、薩とは六なり等云々。无依无得大乘四論玄義記に云はく、沙とは譯して六と云ふ。胡の法には、六を以て、具足の義となす。吉藏の疏に云はく、沙とは飜じて具足となすと。天台大師云はく、薩とは梵語なり、こゝには妙と飜ず、等云々。私に會通を加へば、本文を黷すが如し。しかりと雖も、文の心は、釋尊の因行果德の二法

寶葉—蓮華花臺上に座せる佛
毘盧遮那—法身佛のこと

普賢經に云はく

此大乘經典。諸佛寶藏。十方三世諸佛眼目。乃至出二生三世諸如來種一。乃至汝行二大乘一不レ斷二佛種一等云云。

又云はく。

此方等經。是諸佛眼。諸佛因レ是。得レ具二五眼一。佛三種身。從二方等一生。是大法印。印二涅槃海一。如レ此海中能生二三種佛淸淨身一。此三種身。人天福田等云云。

それ釋迦如來の一代顯密大小二教、華嚴眞言等の諸宗の依經、往いてこれを勘ふるに、或は十方臺葉毘盧遮那佛、大集雲集の諸佛如來、般若染淨の千佛示現、大日金剛頂等の千二百尊、たゞ、その近因近果を演說して、その遠因果を顯さず。速疾頓成これを說けども、三五の遠化を亡失し、化道の始終迹を削りて見えず。華嚴經、大日經等は、一往これを見るに、別圓四藏等に似たれども、再往これを勘ふれば、藏通二教に同じて、いまだ別圓にも及ばず、本有の三因これなし。何を以てか、佛の種子を定めん。而るに新譯の譯者等、漢土に來入するの日、天台の一念三千の法門を見聞して、或は自の所持の經經に添加し、或は天竺より受持するの由、これを稱す。天台の學者等、或は自宗

機—說法を解しうる智慧、又その人
時—說法に適したる時期
南三北七—南方の三師北方の七師が天台宗に對して異說を立てたるをいふ、法華玄義十卷に出づ

問うて云はく、龍樹天親等は如何。

答へて云はく、これ等の聖人は、知つてこれを言はざる仁なり。或は迹門の一分これを宣べて、本門と觀心とを云はず。或は機ありて時なきか。或は、機と時と共にこれ无きか。天台傳教已後は、これを知る者多々なり。二世の智を用ふるが故なり。所謂三論の嘉祥、南三北七の百餘人、華嚴宗の法藏、淸凉等、法相宗の玄奘三藏、慈恩大師等、眞言宗の善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏等、律宗の道宣等。初には、反逆をなし、後には、一向に歸伏せしなり。但し初の大難を遮せば、无量義經に云はく、

譬如下國王夫人新生二王子一。若一日若二日。若至二七日一若一月若二月。若至二七月一若一歳若二歳。若至二七歳一雖四復不三能レ領二理國事一已爲二臣民之所二崇敬一。諸大王子以爲二伴侶一。王及夫人愛心偏重。常與共語。所以者何。以二稚小一故。善男子是持經者。亦復如レ是。諸佛國王是經夫人。和合共生二是菩薩子一。若菩薩得レ聞二是經一。若一句若一偈。若一轉若二轉。若十若百。若千若萬。若億萬恒河沙无量數轉。雖四復不三能レ體二眞理極一。乃至已爲二一切四衆八部之所二宗仰一。諸大菩薩以爲二眷屬一。乃至常爲二諸佛之所二護念一。慈愛偏覆。以二新學一故等云云。

蘊在—つゝまれてある

遮會—誤をとゞめ理を說明すること

二門—本門、迹門

るが故にこれを宣べざるか。人師に於ては、天台已前は或は珠を含み、或は一向にこれを知らず。已後の人師或は初にこれを破りて後に歸伏する人あり、或は一向に用ひざるものもこれあり。但し、「斷諸法中惡」の經文を會すべきなり。彼は法華經に、爾前の經文を載するなり。往いてこれを見よ。經文分明に、十界互具これを說く、「所謂欲令衆生開佛知見等云云」。天台この經文を承けて云はく、若し衆生に佛の知見なくんば、何ぞ開を論ずる所あらん。當に知るべし。佛の知見は衆生に蘊在することをと云々。但し、會し難きの所は、上の教主釋尊等の大難なり。この事を、佛、遮會して云はく、「已今當所最爲難信難解」と。次下の六難九易これなり。天台大師の云はく、二門悉く昔と反して信じ難く、解し難く、鋒に當るの難事なり。章安大師の云はく、佛これを將て大事となす。何ぞ解し易きことを得べけんや。傳教大師の云はく、この法華經は最もこれ難信難解なり。隨自意の故に等云々。

それ佛滅後に至つてより、一千八百餘季三國に經歷してたゞ三人のみありて、始めてこの正法を覺知せり。所謂月支の釋尊、眞旦の智者大師、日域の傳教、この三人は、內典の聖人なり。

成不―成佛不成佛

始成久成―始成正覺、久遠實成

矢石―爭

惠苑法師の云はく、然るに天台は、小乘を呼びて、三藏教となし、その名謬濫するを以て等云々。了洪の云はく、天台ひとりいまだ華嚴の意を盡さず等云々。得一の云はく、拙きかな智公、汝はこれ誰の弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所說の敎時を謗す等云々。弘法大師の云はく、震旦の人師等諍つて、醍醐を盜みて各自宗に名づく等云々。

それ一念三千の法門は、一代の權實に名目を削り、四依の諸論師その義を載せず、漢土日域の人師もこれを用ひず。如何かこれを信ぜん。

答へて云はく、この難最も甚し。最も甚し。但し、諸經と法華との相違は、經文より事起りて分明なり。未顯と、已顯と、證明と、舌相と、二乘の成不と、始成と久成と等これを顯す。諸論師の事、章、天台大師云はく、天親龍樹、內鑒冷然たり。外には時の宜に適ひ、各かりに據る所。而るに人師偏に解し、學者苟も執し、遂に矢石を興し各一邊を保して、大いに聖道に乖る等云々。章安大師云はく、天竺の大論すら、なほその類にあらず。眞旦の人師何ぞ勞しく語るに及ばん。これ誇耀にあらず。法相の然らしむる耳等云々。天親、龍樹、馬鳴、堅惠は內鑒冷然なり。然りと雖も、時未だ至らざ

有漏―煩惱、まよひのこゝろ
金剛喩定―小乘のさとりの位の一つ
現在前―あらはるゝこと
千部云々―天親千部の著あるによりての名

金剛涅槃經に云はく、
有二清淨善一。
馬鳴菩薩の起信論に云はく、如來藏の中に清淨の功德のみありと。天親菩薩の唯識論に云はく、謂はく餘の有漏と劣無漏と種とをば金剛喩定が現在前する時、極圓明純淨の本識を引く。彼依にあらざるが故に、みな永く弃捨す等云々。爾前の經經と、法華經とこれを校量するに、彼の經經は無數なり。時說旣に長し。一佛二言彼に付く可し。馬鳴菩薩は付法藏第十一の佛記にこれあり。天親菩薩は、千部の論師、四依の大士なり。天台大師は、邊鄙の小僧にして、一論をも宣べず。誰かこれを信ぜん。その上、多を捨てて小に付けども、法華經の文分明ならば、少し恃怙あらんも、法華經の文に何れの所にか、十界互具。百界千如。一念三千の分明なる證文これありや。隨つて、經文を開拓するに、「斷諸法中惡等云云」、法華論にも、堅惠菩薩の法性論にも、十界互具これ無く、漢土南北の諸大人師、日本七寺の末師の中にもこの義なし。たゞ、天台一人の僻見なり。傳敎一人の謬傳なり。故に清涼國師の云はく、天台の謬なりと。

佛身を現じ給へること

三十四心—さとりに至るに三十四段の迷心を断除すべきこと、阿含經に說かる

斷結—結は煩惱

尊—佛菩薩等

四土—四種の佛土

盧舍那—報身佛のこと

八十—釋尊は八十歲にて入滅せらる

方臺上の盧舍那。阿含經の三十四心斷結成道の佛、方等般若の千佛等、大日金剛頂等の千二百餘尊、並びに迹門寶塔品の四土色身、涅槃經の、或は丈六を見る、或は小身大身と見る。或は盧舍那と見る、或は身虛空に同じと見る。四種の身乃至八十御入滅、舍利を留めて正像末を利益し玉ふ。本門を以てこれを疑はゞ、教主釋尊は五百塵點已前の佛なり。因位もまたかくの如し。それより已來十方世界に分身し、一代聖教を演說して塵數の衆生を教化し玉ふ、本門の所化を以て、迹門の所化に比校すれば、一滴と大海と、一塵と大山となり。本門の一菩薩を、迹門の十方世界の文殊觀音等に對向すれば、猴猨を以て帝釋に比するになほ及ばず。そのほか十方世界の斷惑證果の二乘、並びに梵天帝釋日月四天四輪王乃至無間大城の大火災等、これ等はみな、わが一念の十界か。己心の三千か。佛說たりと雖もこれを信ず可からず。これを以てこれを思ふに、爾前の諸經は、實事なり。實語なり。華嚴經に云はく、

究竟離虛妄无染如虛空。

仁王經に云はく、

窮源盡性妙知存。

三惑―見思惑、塵沙惑、無明惑
四衆―比丘比丘尼等
八部―阿脩羅、乾闥婆等
金剛―執金剛神
因行―さとりに至る間の修行
四教の色心―淺より深に至る四階段の教を説かるゝに各異れる

は水より出で、龍水は火より生ず。心得られざれども現證あればこれを用ふ。既に人界の八界これを信ず。佛界何ぞこれを用ひざらん。堯舜等の聖人の如きは、万民に於て偏頗もなし。人界は佛界の一分なり。不輕菩薩は所見の人に於て佛身を見る。悉達太子は人界より佛身を成ず。これ等の現證を以てこれを信ずべきなり。

問うて云はく、教主釋尊は(自レ之堅固祕レ之)三惑已斷の佛なり。又十方世界の國主一切の菩薩二乘人天等の主君なり。行の時は、梵天左にあり、帝釋右に侍り、四衆は部後に從ひ、金剛後に導びき、八万法藏を演說して、一切衆生を得脫せしむ。かくの如き佛陀何を以て、われ等凡夫の己心に住せしめんや。又迹門爾前の意を以てこれを論ずれば、教主釋尊は始成正覺の佛なり。過去の因行を尋ね求むれば、或は能施太子、或は儒童菩薩、或は尸毘王、或は薩埵王子、或は三祇百劫、或は、動喩塵劫、或は无量阿僧祇劫、或は初發心時、或は三千塵點等の間、七万五千六千七千等の佛を供養し、功を積み行滿じて今の教主釋尊となり玉ふ。かくの如き因位の諸行は皆われ等が己心所具の菩薩界の功德歟、果位を以てこれを論ずれば、教主釋尊は始成正覺の佛。四十餘年の間、四教の色心を示現し、爾前迹門涅槃經等を演說して一切衆生を利益し玉ふ。所謂華嚴の時、十

一大事因緣—生死解脱の大事
理卽—一切衆生佛法の理を具へながら迷に居る位
佛前—釋迦佛世に出でられざる前時代、又佛教の渡來せざる以前をもいふ
道士—支那道教の僧侶
四韋陀—破羅門教の四聖書、梨倶韋陀、耶柔韋陀、傞馬韋陀、阿他婆韋陀
獨覺—二乘の一たる緣覺のこと
飛花落葉云々—佛說には因らずして花の飛び葉の散るを見て感を起しさとりを得るなり
小權—小乘、權大乘

を起してこれを信ぜしめ、阿鼻の苦を救護し玉へ。

答へて云はく、汝既に唯一大事因緣の經文を見聞してこれを信ぜざれば、釋尊より已下、四依の菩薩竝びに末代理卽のわれ等如何か汝が不信を救護せんや。然りと雖も、試にこれを云はゞ、佛に値ひて覺らざる者の、阿難等の邊にして得道する者これあればなり。それ機に二あり。一には佛を見上り、法華にして得道するあり。二には佛を見上らずとも、法華にて得道するあるなり。その上、佛前の漢土の道士、月支の外道、儒教四韋陀等を以て緣となして、正見に入る者これあり。又利根の菩薩凡夫等の、華嚴方等般若の諸大乘經を聞きし緣を以て、大通久遠の下種を顯示する者多々なり。例へば、獨覺の飛花落葉の如し。教外の得道是なり。過去の下種結緣なきものの權小に執著する者は、設ひ法華經に値ひ奉れども、小權の見を出でず、自見を以て正義と僞るが故に、還つて法華經を以て、或は小乘經に同じ、或は華嚴大日經等に同じ、或はこれを下す。これ等の諸師は、儒家外道の賢聖より劣れる者なり。これ等は且らくこれを置く。十界互具これを立つるは、石中の火、木中の花、信じ難けれども、緣に値ひて出生すればこれを信ず。人界所具の佛界は、水中の火、火中の水、最も甚だ信じ難し。然りと雖も、龍火

无顧―人に顧らるゝことなきほどの惡

現れずとも、委細にこれを尋ねばこれあるべし。

問うて云はく、六道に於て分別ならずと雖も、粗これを聞くに、これを備ふるに似たり。四聖は全く具へず。如何。

答へて云はく、前に人界の六道これを疑ふ。然りと雖も、強ひてこれを言ひて相似の語を出せしなり。四聖も又爾るべきか。試に道理を添加して、萬が一これを宣べん。故に、世間の無常眼前にあり。豈に人界に二乘界无からんや。无顧の惡人もなほ妻子を慈愛す。菩薩界の一分なり。但佛界計り現じ難し。九界を具するを以て強ひてこれを信じ、疑惑せしむること勿れ。法華經の文に人界を說いて云はく、

欲レ令ニ衆生開ニ佛知見一。

涅槃經に云はく、

學ニ大乘一者。雖レ有ニ肉眼一。名爲ニ佛眼一等云云。

末代の凡夫出生して、法華經を信ずるは、人界に佛界を具足するが故なり。

問うて云はく、十界互具の佛語分明なり。然りと雖も、われ等が劣心に、佛法界を具すること信を取り難き者なり。今時これを信ぜずば必ず一闡提とならん。願はくは大慈悲

正機―正に說法を聽きて信解し得る智慧又その人

五千云々―五千人の者不信の故に席を起去りしこと法華經に見ゆ

何かこれを信ぜん。

答へて曰はく、法華經法師品に云はく、「難信難解」寶塔品に云はく、「六難九易等云々」天台大師云はく、二門悉く昔と反すれば難信難解なりと。章安大師云はく、佛これを將て大事と爲す。何ぞ解し易きことを得べけんや等云々。傳敎大師云はく、これ法華經は最も爲難信難解なり、隨自意の故に等云々。

それ在世の正機は過去の宿習厚き上、敎主釋尊、多寶佛、十方分身の諸佛、地涌千界文珠彌勒等これを扶けて諫曉せしむるに、なほ信ぜざる者これあり。五千、席を去り、又人天移さる。況んや正像をや。何に況んや末法の初をや。汝これを信ぜば正法にあらじ。

問うて云はく、經文竝びに、天台章安等の解釋は疑網なし。但し、火を以て水と云ひ、墨を以て白しと云ふ。設ひ佛說たりと雖も、信を取り難し。今數他面を見るに、但人界に限りて、餘界を見ず。自面も亦復かくの如し。如何か信心を立てんや。

答ふ。數他面を見るに、或時は喜び、或時は瞋り、或時は平かに、或時は貪り、或時は癡現じ、或時は諂曲なり。瞋るは地獄、貪るは餓鬼、癡は畜生、諂曲なれば修羅、喜ぶは天、平かなるは人なり。他面の色法に於ては、六道倶にこれあり。四聖は冥伏して

これ畜生界所具の十界なり。經に云はく、

　波稚阿修羅王乃至聞一偈一句。得阿耨多羅三藐三菩提等云云。

修羅界所具の十界なり。經に云はく、

　若人爲佛故。乃至皆已成佛道等云云。

これ人界所具の十界なり。經に云はく、

　大梵天王乃至我等。亦如ㇾ是。必當ㇾ得ㇾ作ㇾ佛等云云。

これ天界所具の十界なり。經に云はく、

　舍利弗乃至花光如來等云云。

これ聲聞界所具の十界なり。經に云はく

　其求㆓緣覺㆒者。比丘比丘尼乃至合掌以㆓敬心㆒欲ㇾ聞㆓具足道㆒等云云。

これ卽ち緣覺界所具の十界なり。經に云はく、

　地涌千界乃至眞淨大法等云云。

これ卽ち菩薩所具の十界なり。

問うて云はく、自他面の六根共にこれを見る。彼此の十界に於ては未だこれを見ず。如

藍婆――一餓鬼の名

雖も、法華經並に、天台大師所述の摩訶止觀等の明鏡を見ざれば、自具の十界百界千如、一念三千を知らざるなり。

問うて云はく、法華經は何の文ぞ。天台の釋は如何。

答へて云はく、法華經第一方便品に云はく、

欲令衆生開佛知見等云云。

これは、九界所具の佛界なり。壽量品に云はく、

如是我成佛已來。甚大久遠。壽命无量阿僧祇劫常住不滅。諸善男子。我本行菩薩道。所成壽命今猶未盡。復倍上數等云云。

この經文は、佛界所具の九界なり。經に云はく、

提婆達多乃至天王如來等云云。地獄界所具佛界也

經に云はく、

一名藍婆乃至汝等。但能護持法華名者。福不可量等云云。

これ餓鬼界所具の十界なり。經に云はく、

龍女乃至成等正覺等云云。

色心―色は有形の肉體、心は無形の精神
外典―佛教外の書
内典―佛典
國土世間―國土を一つの世界と見ていふもの
相、性體等―十如是の一々
義―意味

玉ひ、かの二説を壞る。一佛二言水火なり、誰かこれを信ぜん。これは教門の難信難解なり。觀門の難信難解とは、百界千如一念三千は、非情の上の色心の二法十如是これなり。しかりと雖も、木畫の二像に於ては、外典内典倶にこれを許し本尊と爲す。その義に於ては、天台一家より出でたり。草木の上に、色心の因果を置かずんば、木畫の像を本尊に恃み奉ること无益なり。

疑うて云はく、草木國土の上の十如是の因果の二法は、何の文に出でたるや。

答へて云はく、止觀第五に云はく、國土世間亦十種の法を具す。故に、惡國土相性體力等と云々。釋籤第六に云はく、相は唯色に在り。性は唯心に在り。體力作縁は義色心を兼ぬ。因果は唯心に、報は色にあり等云々。金錍論に云はく、乃ちこれ一草一木一礫一塵に各一佛性、各一因果あり。縁了を具足す等と云々。

問うて云はく、出處既にこれを聞く。觀心の心如何。

答へて云はく、觀心とは、わが己心を觀じて、十法界を見る。これを觀心と云ふ。譬へば、他人の六根を見ると雖も、未だ自面の六根を見ざれば、自具の六根を知らず。明鏡に向ふの時始めて自具の六根を見るが如し。設ひ諸經の中に、處々に六道並に四聖を載すと

章安—名は灌頂、智者大師の高弟、隋唐間の人

有情界—人間畜生の如きこゝろある者の世界

非情—土砂草木の如きこゝろなきものの世界

請ふ、尋ね讀まん者心に異緣无れ等云々。夫智者の弘法三十年、二十九年の間は、玄文等の諸義を說きて、五時八敎百界千如を明し、前の五百餘年の間の諸罪を責め、竝に、天竺の論師の未だ述べざるを顯す。章安大師云はく、天竺の大論なほその類にあらず。震旦の人師何ぞ勞はしく語るに及ばん。誇耀するにあらず。法相の然らしむる耳等云々。はかなきかな、天台の末學等、華嚴眞言の元祖の盜人に、一念三千の重寶を盜み取られ、還つて彼等が門家と成りぬ。章安大師豫てこの事を知りて歎いて云はく、斯言若し墮ちなば、將來は悲むべし云々。

問うて云はく、百界千如と、一念三千との差別如何、

答へて云はく、百界千如は、有情界に限り、一念三千は、情非情に亙る。

不審して云はく、非情に十如是に亙るならば、草木に心ありて、有情の如く、成佛をなすべきや如何。

答へて云はく、この事難信難解なり。天台の難信難解に二あり。一は敎門の難信難解、二は觀門の難信難解なり。その敎門の難信難解とは、一佛の所說に於て、爾前の諸經には二乘闡提未來に永く成佛せず。敎主釋尊始めて、正覺を成じ、法華經迹本二門に來至し

十如是—總ての事物には十種の普遍性を有す卽ち如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟

觀音玄—觀音經玄義

二十五法—止觀の修行をなす前に準備として修行する法の數

答へて云はく、妙樂云はく、故に止觀の正しく觀法を明すに、並に三千を以て指南と爲す等云々。

疑ひて云はく、玄義の第二に云はく、又一法界に九法界を具すれば、百法界に千如是等云々。文句第一にいはく、一入に十法界を具すれば、一界又十界なり。十界各十如是あれば、卽是一千等云々。觀音玄に云はく、十法界交互なれば卽ち百法界あり。千種の性相冥伏して、心にあり。現前せずと雖も、冥然として具足す等云々。

問うていはく、止觀前の四に、一念三千の名目を明すか。

答へて云はく、妙樂云はく、明さず。

問うて云はく、その釋如何、

答ふ。弘決第五に云はく、若し止觀に望めば、全くいまだ行を論ぜず。亦二十五法に歷て、事に約して解を生ず。方によく正修の方となるに堪へたり。この故に前の六をばみな解に屬す等云々。

又云はく、故に、止觀の正しく觀法を明すに至りて、並に三千を以て指南となす、乃ち、是修窮究竟の極說なり。故に序の中に、「說己心中所行法門」と云ふ、良に所以あるなり、

如來滅後五五百歳始觀心本尊抄

法界—宇宙眞如

摩訶止觀第五に云はく、

夫一心具十法界。一法界又具十法界百法界。一界具三十種世間。百法界即具三千種世間。此三千在一念心。若无心而已。介爾有心。即具三千。乃至所以稱爲不可思議境。意在於此等云云。（或本に云く一界に具三種の世間。）

問うて云はく、玄義に一念三千の名目を明すか。

答へていはく、妙樂云はく、明さず。

問うていはく、その妙樂の釋如何。

答へて云はく、並に未だ一念三千と云はず等云々。

問うて云はく、止觀一二三四等に、一念三千の名目を明すか。

答へて云はく、これ无し。

問うて云はく、その證如何。

九牛の一毛─僅ばかりといふ意

佛意に叶はず、神慮にも違する者なり。能々案あるべきなり。人間に生を得る事都て希なり。適生を受けて法の邪正を極めて未來の成佛を期せざらん事、返々本意に非ざる者なり。又慈覺大師御入唐以後、本師傳敎大師に背かせ給ひて叡山に眞言を弘めんが爲に、御祈請ありしに、日を射るに日輪動轉すと云ふ夢想を御覽じて、四百餘年の間、諸人是を吉夢と思へり。日本國は殊に忌べき夢なり。殷の紂王日輪を的にして射るに依て、身亡びたり。此の御夢想は權化の事なりとも、能々思惟あるべき歟。仍て九牛の一毛、註するところ件の如し。

慈尊―彌勒菩薩のこと、釋尊滅後五十六億七千萬歲を過ぎてこの世に出て佛となる方といふ

五眼―肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼

さては涅槃經の文眞實にして、弘法の筆邪義ならば、邪義の敎を信ぜん人々は云何、只弘法大師の筆と佛の說法と勘へ合せて正義を信じ侍るべしと申す許りなり。

疑うて云はく、大日經は大日如來の說法なり。若爾らば釋尊の說法を以て大日如來の敎法を打たるゝ事、都て道理に相叶はず如何。

答へて云はく、大日如來は何なる人を父母として、何なる國に出で大日經を說き給ひけるやらん。もし父母なくして出世し給ふならば、釋尊入滅以後、慈尊出世以前、五十六億七千萬歲が中間に佛出て說法すべしと云ふ事、何なる經文ぞや。若證據なくんば誰人か信ずべきや。かゝる僻事をのみ構へ申す間、邪敎とは申すなり。其の迷謬盡しがたし。纔か一二を出すなり。加之並びに禪宗念佛等を是を用ふる。此等の法は皆未顯眞實の權敎、不成佛の法、無間地獄の業なり。彼の行人又謗法の者なり。爭でか御祈禱叶ふべきや。然るに國主と成り給ふ事は、過去に正法を持ち、佛に仕ふるに依つて、大小の王皆、梵王帝釋日月四天等の御計ひとして郡鄕を領し給へり。所謂經に云はく、

我今五眼。明見二三世一。一切國王皆由二過去世侍二五百佛一得レ爲二帝王主一等云云。

然るに法華經を背きて眞言禪念佛等の邪師に付きて、諸の善根を修せらるゝとも、敢て

醍醐―乳中の最も優れたるもの、最上の法に譬ふ

藥王今告汝。我所說諸經。而於此經中。法華最第一云云。

佛正しく諸敎を擧げて其の中に於て法華第一と說き給ふ。佛の說法と弘法大師の筆とは、水火の相違なり。尋ね究むべき事也。此の筆を數百年が間、凡僧高僧是を學し、貴賤上下是を信じて、大日經は一切經の中に第一とあがめける事、佛意に叶はず。心あらん人は能々思ひ定むべきなり。若佛意に相叶はぬ筆ならば、信ずとも豈に成佛すべきや。又是を以て國土を祈らんに、當に不祥を起さざるべき哉。又云はく、

震旦人師等。諍盜醍醐云云。

文の意は天台大師等眞言敎の醍醐を盜んで、法華經の醍醐と名づけ給へる事は、此の筆最第一の勝事也。法華經を醍醐と名づけ給へる事は、天台大師涅槃經の文を勘へて、一切經の中には法華經を醍醐と名づくと判じ給へり。眞言敎の天竺より唐土へ渡る事は天台出世の以後二百餘年也。されば二百餘年の後に渡るべき眞言の醍醐を盜みて、法華經の醍醐と名づけ給ひけるか。此の事不審也不審也。眞言未だ渡らざる以前の二百餘年の人々を盜人とかき給へる事證據何れぞや。弘法大師の筆をや信ずべき。涅槃經に法華經を醍醐と說けるをや信ずべき。若天台大師盜人ならば、涅槃經の文をば云何が心得べき。

本院—後鳥羽院
中院—後土御門院
三院—順徳院
供僧—神に仕ふる僧

斐源氏に破られ畢んぬ。同六月十三日十四日宇治橋の合戰、同十四日に京方破られ畢んぬ。同十五日に武藏守殿六條へ入り給ふ。諸人入り畢んぬ。七月十一日に本院は隱岐の國へ流され給ひ、中院は阿波の國へ流され給ひ、第三院は佐渡の國へ流され給ふ。殿上人七人誅殺せられ畢んぬ。かゝる大惡法年を經て漸々に關東に落ち下りて、諸堂の別當供僧となり、連々と之を行ふ。本より教法の邪正勝劣をば知食さず、只三寶をば崇むべき事とばかり思召す故に、自然として是を用ひきたれり。關東の國々のみならず、叡山東寺薗城寺の座主別當、皆關東の御計と成りぬる故に、彼の法の檀那と成り給ひぬるなり。

問うて云はく、眞言の教を強に邪教と云ふ心如何。

答へて云はく、弘法大師云はく、第一大日經、第二華嚴經、第三法華經と、能々此の次第を案ずべし。佛は何なる經にか、此の三部の經の勝劣を說き判じ給へるや。若第一大日經、第二華嚴經、第三法華經と說き給へる經あるならば尤も然るべし。其の義なくんば甚だ以て依用し難し。

法華經に云はく、

調伏―降伏といふに同じ

がはざる故なり。されば山門と王家とは、松と柏とのごとし、蘭と芝とに似たり。松かるれば必ず柏かれ蘭しほめば又芝しほむ。王法の榮は山の悦、王位の衰は山の歎と見えしに、既に世、關東に移りし事、なにとか思食しけん。

法皇の宣旨に依つて始めて行はる。御修法十五壇之祕法。一字金輪法。天台座主慈圓僧正。伴僧十二口。關白殿基通の御沙汰 四天王法。成興寺の宮僧正。伴僧八口。於二廣瀬殿一 修明門院の御沙汰 不動明王法 成寶僧正。伴僧八口。花山院禪門の御沙汰 大威徳法。觀嚴僧正。伴僧八口。七條院の御沙汰 轉輪聖王法。成賢僧正。伴僧八口。同院の御沙汰 十壇大威徳法。伴僧六口。覺朝僧正。俊性法印。永信法印。豪圓法印。猷圓僧都。慈賢僧正。賢乘僧都。仙尊僧都。行遍僧都。實覺法眼。已上十人大旨於二本坊一修レ之 如意輪法。妙高院僧正。伴僧八口宣秋門院の御沙汰 毗沙門法。常住院僧正。三井。伴僧六口。資賢の御沙汰 御本尊一日被レ造レ之。調伏行儀。如法愛染王法。仁和寺御室の行法。五月三日始レ之於二紫宸殿一三七日被レ修 之佛眼法。大政僧正。三七日修レ之 六字法。快雅僧都 愛染王法。觀嚴僧正。七日修レ之 不動法。勸修寺の僧正。伴僧八口。皆僧綱 大威徳法。安藝僧正 金剛童子法 同人 已上十五壇法了。

五月十五日伊賀太郎判官光季京にして討たる。同十九日鎌倉に聞え、同二十一日大勢軍兵上ると聞えしかば、殘る所の法、六月八日之を行ひ始めらる。尊星王法 覺朝僧正 太元法 藏有僧都 五壇法 大政僧正。永信法印。全尊僧都。猷圓僧都。行遍僧都 守護經法 御室被レ行レ之 我朝二度行レ之 五月二十一日武藏の守殿が海道より上洛し甲斐源氏は山道を上る。式部殿は北陸道を上り給ふ。六月五日大津を堅むる手、甲

王氣—帝都たるべき相ありと見給ひし由傳說せらる

平の京城—平安城のこと

見ゆるなり。恐らくは經文の虛言なるか、行者の行の愚なるか、時機のかなはざるかと、疑はれて後生もいかんと覺ゆ。それはさて置きぬ。御房は山僧の御弟子とうけ給はる。父の罪は子にかゝり、師の罪は弟子にかゝるとうけ給はる。叡山の僧徒の、薗城山門の堂塔佛像經卷數千萬を燒き拂はせ給ふが、ことにおそろしく世間の人々もさわぎ疎みあへるはいかに。前にも少々うけ給はり候ひぬれども、今度委しく聞きひらき候はん。但し不審なることは、かゝる惡僧どもなれば、三寶の御意にもかなはず、天地にもうけられ給はずして、祈も叶はざるやらんとおぼえ候ふはいかに。

答へて云はく、先々も少々申しぬれども、今度又あら〳〵申すべし。日本國に於ては此の事大切なり。これを知らざる故に多くの人、口に罪業をつくる。先づ山門はじまりし事は、此の國に佛法渡つて二百餘年、桓武天皇の御宇に、傳教大師立て始め給ひしなり。當時の京都は、昔聖德太子王氣ありと相し給ひしかども、天台宗の渡らん時を待ち給ひし間、都をたて給はず。又上宮太子の記に云はく、

我滅後二百餘年。佛法日本可レ弘云云。

傳教大師延曆年中に叡山を立て給ふ。桓武天皇は平の京都をたて給ひき。太子の記文た

の行者の祈のかなはぬ事はあるべからず。法華經の行者を諸々の菩薩人天八部等二聖二天十羅刹等、千に一も來りてまほり給はぬ事侍らば、上は釋迦諸佛をあなづり奉り、下は九界をたぼらかす失あり。行者は必ず不實なりとも、智慧は愚なりとも、身は不淨なりとも、戒德は備へずとも、南無妙法蓮華經と申さば、必ず守護し給ふべし。袋きたなしとて金を捨つる事なかれ。伊蘭を憎まば栴檀あるべからず。谷の池を不淨なりと嫌はゞ、蓮を取らざるべし。行者を嫌ひ給はゞ誓を破り給ひなん。正像既に過ぎぬれば持戒は市の中の虎の如し。智者は麟角よりも希ならん。月を待つまでは燈を憑むべし。寶珠のなき處には金銀も寶なり。白烏の恩をば黑烏に報ずべし。聖僧の恩をば凡僧に報ずべし。とく〳〵利生をさづけ給へと強盛に申すならば、いかでか祈のかなはざるべき。問うて云はく、上にかゝせ給ふ道理文證を拜見するに、まことに日月の天におはしますならば、大地に草木の生ふるならば、晝夜の國土にあるならば、大地だにも反覆せずば、大海の汐だにも滿ち干るならば、法華經を信ぜん人現世のいのり後生の善處は疑なかるべし。然りと雖も此の二十餘年が間の天台眞言等の名匠、多く大事の祈をなすに、はかばかしく、いみじき祈ありともみえず。尙外典の者どもよりも、拙きやうにうち覺えて

あてがひ―宛行ふ

をもつくしぬべし。況や五十二類をや。此の類皆華香衣食をそなへて最後の供養とあてがひき。一切衆生の寶の橋折れなんとす、一切衆生の眼ぬけなんとす、一切衆生の父母主君師匠死なんとすなんど申す聲ひゞきしかば、身の毛のいよ立つのみならず、涙を流す。涙をながすのみならず頭をたゝき、胸を押へ、音も惜まず叫びしかば、血の涙血の汗、倶尸那城は大雨よりも繁くふり、大河よりも多く流れたりき。是偏に法華經にして佛になりしかば、佛の恩の報ずる事かたかりしなり。かゝるなげきの庭にても、法華經の敵をば舌を切るべきよし、座に列るまじきよしのゝしり侍りき。迦葉童子菩薩は、法華經の敵の國には霜雹となるべしと誓ひ給ひき。爾の時、佛は臥より起きてよろこばせ給ひて善哉善哉と讃め給ひき。諸菩薩は佛の御心を推して、法華經の敵をうたんと申さば、しばらくも生き給ひなんと思ひて一一の誓は爲せしなり。されば諸菩薩諸天人等は、法華經の敵の出來せよかし、佛前の御誓果して、釋迦尊竝びに多寶佛諸佛如來にも、げに佛前にして誓ひしが如く、法華經の御ためには名をも身命をも惜まざりけりと、思はれまゐらせんとこそおぼすらめ。いかに申す事は遲きやらん。大地は指さば外るゝとも、虚空をつなぐ者はありとも、潮の滿干ぬ事はありとも、日は西より出づるとも、法華經

卻後三月―これより後三月にしてわれ入滅すべきぞ

粟散國―小さき島國の粟をまき散せし如きの譬

に現じ、二佛日月の如く竝び、諸佛大地に列り、大山をあつめたるごとく、地涌千界の菩薩が虚空に星の如く列り給ひて、諸佛の果分の功德を吐き給ひしかば、寶藏をかたぶけて貧人に與ふるがごとく、崑崙山のくづれたるに似たりき。諸人この玉をのみ拾ふが如く、此の八箇年が間珍しく貴き事心髓にも徹りしかば、諸菩薩身命も惜まず、言をはぐくまず、誓をなせし程に、屬累品にして、釋迦如來、寶塔を出させ給ひて扉を押したて給ひしかば、諸佛は國々へ返り給ひき。諸の菩薩等も諸佛に隨ひ奉りて返らせ給ひぬ。やうやく心ぼそくなりし程に、「卻後三月當般涅槃」と唱へさせ給ひし事こそ心ぼそく耳驚かしたりしかば、二乘人天等、こと〴〵く法華經を聽聞して、佛の恩德心肝にそみて、身命をも法華經の御ために投げて、佛に見せ參らせんと思ひしに、佛の仰の如く、若涅槃せさせ給はゞ、いかにあさましからんと、胸さはぎしてありし程に、佛の御年滿八十と申せし二月十五日の寅卯の時、東天竺舍衛國倶尸那城跋提河の邊にして、佛御入滅なるべき由の御音、上は有頂、横には三千大千界までひゞきたりしこそ、目も暮れ心も消えはてぬれ。五天竺十六の大國五百の中國十千の小國無量の粟散國等の衆生、一人も衣食を調へず、上下をきらはず、牛馬狼狗鵰鷲蚊虻等の五十二類の一類の數、大地微塵

身に代へて思ふ—身よりも大切なる

義をかねず—意味を兼有せず

破旬—天魔の王の名

ばし—虚字

と三度まで聲を惜まず呼はりしかば、いかでか法華經の行者には替らせ給はざるべき。范於期と云ひしもの、荊軻に頭を取らせ、季札と云ひしもの徐の君が塚に刀をかけし、約束を違へじがためなり。此等は震旦邊土の夷の如くなるものどもだにも、友の約束に命をも亡し、身に代へて思ふ刀をも塚に懸くるぞかし。まして諸大菩薩は本より大悲代受苦の誓深し。佛の御諫なしとも、いかでか法華經の行者を捨て給ふべき。其の上我が成佛の經たる上、佛慇懃に諫め給ひしかば、佛前の御誓丁寧也。行者を助け給ふ事疑ふべからず。佛は人天の主、一切衆生の父母なり。而も開導の師也。父母なれども賤しき父母は主君の義をかねず。主君なれども父母ならざれば、畏しき邊もあり。父母主君なれども師匠なる事はなし。諸佛は又世尊にてましませば、主君にてはましませども、娑婆世界に出でさせ給はざれば、師匠にあらず。又「其中衆生悉是吾子」とも名乘らせ給はず。釋迦佛獨、主師親の三義をかね給へり。しかれども四十餘年の間は、提婆達多を罵り給ひ、諸の聲聞をそしり、菩薩の果分の法門を惜み給ひしかば、佛なれども、よりよりは天魔破旬ばしの、我等をなやますかの疑、人にはいはざれども、心の中には思ひし也。此の心は四十餘年より法華經の始るまで失せず。而るを靈山八年の間に、寶塔虚空

因分可說—佛になるまでのことは說くべきも佛の境界は說き難しとのこと
果分—佛のさとり

諸〻の大地微塵の如くなる諸菩薩は、等覺の位まで、せめて元品の無明計りもちて侍るが、釋迦如來に値ひ奉りて元品の大石をわらんと思ふに、教主釋尊四十餘年が間は「因分可說果分不可說」と申して、妙覺の功德を說き顯し給はず。されば妙覺の位に登る人一人もなかりき。本意なかりし事なり。而るに靈山八年が間に、「唯一佛乘名爲果分」と說き顯し給ひしかば、諸〻の菩薩皆妙覺の位に上りて、釋迦如來と悟り等しく、須彌山の頂に登つて四方を見るが如く、長夜に日輪の出でたらんが如く、明くならせ給ひたりしかば、佛の仰せ無くとも法華經を弘めじ、又行者に替らじとはおぼしめすべからず。されば我不愛身命但惜無上道。不惜身命當廣說此經」等とこそ誓ひ給ひしか。其の上慈父の釋迦佛、悲母の多寶佛、慈悲の父母等、同じく助證の十方の諸佛一座に列らせ給ひて、月と月とを集めたるが如く、日と日とを竝べたるが如くましましし時、

告諸大衆。我滅度後。誰能護持讀誦此經。今於佛前自說誓言。

と三度まで諫めさせ給ひしに、八万四百萬億那由佗の國土に充滿せさせ給ひし諸大菩薩、身を曲げ低頭合掌し、倶に同時に聲をあげて、

如世尊敕。當具奉行。

千—輻輪佛の三十二相の一、足の裏にある紋
白毫—佛三十二相の一、眉間の毛の光

宿世の敵と思ひしに、出家の後に人天大會の集たりし時、佛に汝は癡人、唾を食へる者と罵られし上、名聞利養深かりし人なれば、佛の、人にもてなされしを妬みて、我が身には五法を行じて佛よりも尊げになし、鐵をのして千輻輪につけ、螢火を集めて白毫となし、六萬寶藏、八萬寶藏を胸に浮べ、象頭山に戒場を立て、多くの佛弟子をさそひとり、爪に毒を塗り、佛の御足に塗らむと企て、蓮華比丘尼を打殺し、大石を放つて佛の御指をあやまちぬ。具に三逆を犯し、結句は五天竺の惡人を集め、佛竝びに御弟子檀那等にあだをなす程に、頻婆娑羅王は佛の第一の御檀那也、一日に五百輛の車を送り、日日に佛竝びに御弟子を供養し奉りき。提婆そねむ心深くして、阿闍世太子を語らひて、父を終に一尺の釘七つをもて磔になし奉りき。終に王舍城の北門の大地破れて阿鼻大城に墮ちにき。三千大千世界の人一人も是を見ざる事なかりき。されば大地微塵劫は過ぐとも、無間大城をば出づべからずとこそ思ひ候ふに、法華經にして天王如來とならせ給ひけるにこそ不思議に尊けれ。提婆達多、佛になり給はゞ、語らはれし所の無量の惡人、一業所感なれば、皆無間地獄の苦は離れぬらん。是偏に法華經の恩德也。されば提婆達多竝びに所從の無量の眷屬は、法華經の行者の室宅にこそ住はせ給ふらめと恃し。

非口所宣—口に宣べ難く心にも測られぬ

るさざりしに、設ひ人間天上の女人なりとも、成佛の道には望なかりしに、龍畜下賤の身たるに、女人とだに生れ、年さへいまだ長けず、わづかに八歳なりき。かたぐ\思ひも寄らざりしに、文殊の敎化によりて海中にして、法師提婆の中間わづかに寶塔品を說かれし時刻に佛になりたりし事は、ありがたき事也。一代超過の法華經の御力にあらずば、いかでかかくは候ふべき。されば妙樂は「行淺功深以顯經力」とこそ書かせ給へ。龍女は我が佛になれる經なれば、佛の御諫なくとも、いかでか法華經の行者を捨てさせ給ふべき。されば自讃歎佛の偈には、

我闡大乘敎。度脫苦衆生等。

こそすゝませさせ給ひしか。龍女の誓は其の所從の「非口所宣。非心所測」の一切の龍畜の誓なり。娑竭羅龍王は龍畜の身なれども、子を念ふ志深かりしかば、大海第一の寶如意寶珠をも娘にとらせて、卽身成佛の御布施にせさせつれ。此の珠は直三千大千世界に替ふる珠なり。提婆達多は師子頰王には孫、釋迦如來には伯父たりし斛飯王の御子、阿難尊者の舍兄也。善聞長者のむすめの腹なり。轉輪聖王の御一門、南閻浮提には賤しからざる人也。在家にましましし時は、夫妻となるべき耶輸多羅女を悉達太子に押し取られ、

おろかならぬ友—親友
恥あるもの—廉恥の心あるもの
壽ともなる—命を失ふに至ること
便—すなはちと訓む

四王天の四十四日也。されば、日月竝びに毘沙門天王は、佛におくれたてまつりて四十四日、いまだ二月にたらず。帝釋梵天なんどは佛におくれ奉りて一月一時にもすぎず。わづかの間に、いかでか佛前の御誓竝びに自身成佛の御經の恩をば忘れて、法華經の行者をば捨てさせ給ふべきなんど、思ひつらぬればたのもしき事なり。されば法華經の行者の祈る祈は、響の音に應ずるがごとし。影の體に添へるがごとし。澄める水に月のうつるがごとし。方諸の水をまねくがごとし。磁石の鐵を吸ふがごとし。琥珀の塵をとるがごとし。あきらかなる鏡の物の色を浮ぶるがごとし。世間の法には、我が思はざる事も、父母主君師匠妻子、おろかならぬ友なんどの申す事は、恥ある者は、意にはあはざれども、名利をも失ひ、壽ともなる事も侍るぞかし。何に況や我が心から起りぬる事は、父母主君師匠なんどの制止を加ふれどもなす事あり。されば、芃於期と云ひし賢人は、我が頸を切りてだにこそ、荊軻と申せし人には與へき。季札と申せし人は約束の劍を徐の君が塚の上に懸けたりき。而るに靈山會上にして卽身成佛せし龍女は、小乘經には五障の雲厚く、三從の紲強しと嫌はれ、四十餘年の諸大乘經には、或は歷劫修行にたへずと捨てられ、或は「初發心時便成正覺」の言も、有名無實なりしかば、女人成佛もゆ

天子―天人のこと

會上―說法聽聞の場

下の微塵數の菩薩、三四天下二四天下一四天下の微塵數の菩薩、復八世界微塵數の衆生、藥王品の八萬四千の菩薩、妙音品の八萬四千の菩薩、又四萬二千の天子、普門品の八萬四千、陀羅尼品の六萬八千人、妙莊嚴王品の八萬四千人、勸發品の恒河沙等の菩薩、三千大千世界微塵數等の菩薩、此等の菩薩を委しく數へば、十方世界の微塵の如し。十方世界の草木の如し。十方世界の星の如し。十方世界の雨の如し。此等は皆法華經にして佛にならせ給ひて、此の三千大千世界の地上地下虛空の中にまします。迦葉尊者は雞足山にあり。文殊師利は淸涼山にあり。地藏菩薩は伽羅陀山にあり。觀音は補陀落山にあり。彌勒菩薩は兜率天に、難陀等の無量の龍王阿脩羅王は海底海畔にあり。帝釋は忉利天に、梵王は有頂天に、摩醯脩羅は第六の佗化天に、四天王は須彌の腰に、日月衆星は我等が眼に見えて、頂上を照し給ふ。江神河神山神等も皆法華經の會上の諸尊也。佛法華經をとかせ給ひて、年數二千二百餘年なり。人間こそ壽も短き故に、佛をも見奉り候ふ人も侍らね、天上は日數は永く壽も長ければ、併ながら佛を拜み法華經を聽聞せる天人かぎり多くおはする也。人間の五十年は四王天の一日一夜なり。此の一日一夜をはじめとして、三十日は一月、十二月は一年にして五百歲なり。されば人間の二千二百餘年は、

耆闍崛山—靈鷲山のこと
分別功德品の—分別功德品に見えたるの意以下之にならふ

中天竺王舍城の丑寅、耆闍崛山と申す山にして、法華經を說き始められて、八年まで說かせ給ひて東天竺倶尸那城菩提河の邊にして、御年八十と申せし、二月十五日の夜半に、御涅槃に入らせ給ひき。而りといへども、御悟をば法華經と說き置かせ給へば、此の經の文字は即ち釋迦如來の御魂也。一一の文字は佛の御魂なれば、此經を行ぜん人をば、釋迦如來、我が御眼の如くまほり給ふべし。人の身に影のそへるがごとく添はせ給ふらん。いかでか祈とならせ給はざるべき。一切の菩薩は、又始華嚴經より四十餘年の間、佛にならんと願ひ給ひしかどもかなはずして、法華經の方便品の略開三顯一の時、

求レ佛諸菩薩大數有二八萬一。又諸萬億國轉輪聖王至。合掌以二敬心一。欲レ聞二具足道一。と願しが、廣開三顯一を聞て、菩薩聞二是法一疑網皆已斷。

と說かせ給ひぬ。其後自界佗方の菩薩雲の如く集り星の如く列り給ひき。寶塔品の時十方の諸佛各々無邊の菩薩を具足して集り給ひき。文殊は海より無量の菩薩を具足し、又八十萬億那由佗の諸菩薩、又過八恆河沙の菩薩、地涌千界の菩薩、分別功德品の六百八十萬億那由陀恆河沙の菩薩、又千倍の菩薩、復一世界の微塵數の菩薩、復三千大千世界の微塵數の菩薩、復二千中國土の微塵數の菩薩、復小千國土の微塵數の菩薩、復四四天

四州—須彌山の四方に人の住む州ありとす

元品無明—最も根本のまよひ

金をひきき—罰金を出したること

とく、須彌山を八山の囘るが如く、日輪を四州の衆生の仰ぐが如く、輪王を萬民の仰ぐが如く、仰がれさせ給ふは、法華經の恩德にあらずや。されば佛は法華經に誡めて云はく、

不須復安舍利。涅槃經云。諸佛所師所謂法也。是故如來恭敬供養等云云。

法華經には我が舍利を法華經に竝ぶべからず、涅槃經には諸佛は法華經を恭敬供養すべしと說かせ給へり。佛此の法華經をさとりて、佛に成り、しかも人に說き聞かせ給はずば、佛種を斷たせ給ふ失あり。此の故に釋迦如來は此の娑婆世界に出でて說かんとせさせ給ひしを、元品の無明と申す第六天の魔王が、一切衆生の身に入りて、佛をあだみて說かせ參らせじとせしなり。所謂波瑠璃王の、五百人の釋子を殺し、鴦崛摩羅が佛を追ひ、提婆が大石を放ち、旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせて、佛の御子と云ひし、婆羅門城には、佛を入れ奉る者は五百兩の金をひきき。されば道には荊棘をたて、井には糞を入れ、門には逆木をひけり、食には毒を入れし、皆是佛をにくむ故に。華色比丘尼を殺し、目連は竹杖外道に殺され、迦留陀夷は馬糞に埋れし、皆佛をあだみし故なり。而れども、佛さま〴〵の難をまぬがれて、御年七十二歲、佛法を說き始められて四十二年と申せしに、

六凡—地獄、餓鬼、畜生、阿脩羅、人間、天上。聲聞、緣覺、菩薩、佛を四聖といふに對す

三十二相—佛に存する三十二のよき姿

を食して氣力をます。其の恩を報ぜずんばあるべからずと申して、衣をぬぎて梅に懸けてさりぬ。王尹と云ひし者は、道を行くに水に渇しぬ。河をすぐるに水を飲んで、錢を河に入れて是を水の直とす。龍は必ず袈裟を懸けたる僧を守る。佛より袈裟を給びて龍宮城の愛子に懸けさせて金翅鳥の難をまぬかるゝ故也。金翅鳥は必ず父母孝養の者を守る。龍は須彌山を動して金翅鳥の愛子を食す。金翅鳥は佛の教によて父母の孝養をなす者、僧のとる生飯を須彌の頂に置きて龍の難をまぬがるゝ故也。天は必ず戒を持ち善を修する者を守る。人間界に戒を持たず、善を修する者なければ、人間界の人死して多く脩羅道に生ず。脩羅、多勢なれば、驕をなして必ず天を犯す。人間界に戒を持ち善を修するの者多ければ、人死して必ず天に生ず。天多ければ脩羅恐をなして天を犯さず。故に戒を持ち善を修する者をば、天必ず之を守る。何に況や二乘は六凡より戒德も勝れ智慧賢き人々なり。いかでか我が成佛を遂げたらん法華經を行ぜん人をば捨つべきや。又一切の菩薩竝に凡夫は佛にならんがために、四十餘年の經經を無量劫が間行ぜしかども、佛に成る事なかりき。而るを法華經を行じて佛と成りて、今十方世界におはします。佛佛の三十二相八十種好を具へさせ給ひて、九界の衆生に仰がれて、月を星の囘れるがご

崐崙山—空想の山、但しヒマラヤ山にても指したりしか

衣。及諸臥具種種湯藥。牛頭栴檀及諸珍寶。以起二塔廟一。寶衣布レ地。如レ斯等事。以用供養。
於二恒沙劫一亦不レ能レ報　等云云。

此の經文は四大聲聞が、譬喩品を聽聞して佛になるべき由を心得て、佛と法華經の恩の報じがたき事を說けり。されば二乘の御爲には此の經を行ずる者をば、父母よりも、愛子よりも、兩眼よりも、身命よりも、大事にこそ思召すらめ。舍利弗目連等の諸大聲聞は、一代聖教いづれも讃歎せん行者を捨ておぼす事は有るべからずとは思へども、爾前の諸經は、すこし怨みおぼす事も有らん。「於二佛法中一已如二敗種一」なんど、したゝかに誡められ給ひし故也。今の華光如來、名相如來、普明如來なんどならせ給ひたる事は、おもはざる外の幸なり。例せば崐崙山の崩れて、寶の山に入りたる心地してこそ在しぬらめ。されば領解の文に云はく、「無上寶珠不求自得等云云」されば一切の二乘界、法華經の行者を守り給はん事は疑あるべからず。あやしの畜生なんども、恩をば報ずる事に候ふぞかし。雁と申す鳥あり、必ず母の死なんとする時孝をなす。狐は塚を跡にせず。畜生すら猶此の如し。況や人類をや。されば王壽と云ひし者、道を行きしに飢ゑ疲れたりしに、路の邊に梅の樹あり、其の實多し。壽とりて食して、飢やみぬ。我此の梅の實

大地微塵劫―大地を微塵に砕きし數ほどの劫、無量の大時

祈禱鈔

本朝沙門日蓮撰

問うて云はく、華嚴宗、法相宗、三論宗、小乘の三宗、眞言宗、天台宗の祈をなさんに、いづれか驗あるべきや。

答へて云はく、佛說なればいづれも一往は祈となるべし。但法華經をもていのらむ祈は必ず祈となるべし。

問うて云はく、其の所以は如何。

答へて云はく、二乘は大地微塵劫を經て先四味の經を行ずとも成佛すべからず。法華經は須臾の間、此を聞いて佛になれり。「若爾者舍利弗迦葉等の千二百萬二千」總じて一切の二乘界の佛は必ず法華經の行者の祈をかなふべし。又行者の苦にも替るべし。故に信解品に云はく、

世尊大恩。以希有事。憐愍敎化。利益我等。無量億劫。誰能報者。手足供給。頭頂禮敬。一切供養。皆不能報。若以頂戴。兩肩荷負。於恒沙劫。盡心恭敬。又以美膳無量寶

云。佛法は時に依るべし。日蓮が流罪は今生の小苦なれば歎しからず。後生には大樂を得くべければ大に悅ばし。

上宮―聖德太子のこと

御心の中を推するに、父母の一子の大苦に値ふを見るよりも強盛にこそ見えたるを、法然痛はしとも思はで、末法には法華經の門を堅く閉ぢて人を入れじと堰き、狂兒をたほらかして、寳を捨てさするやうに、法華經を抛てさせける心こそ、無慚に見え候へ。我が父母を人の殺すに、父母に告げざるべしや。惡子の醉狂して父母を殺すを制せざるべしや。惡人寺塔に火を放たんに制せざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禪と念佛者とを見て制せざる者はかくのごとし。「無慈詐親是彼怨等云云」。日蓮は日本國の諸人に親し。父母也。一切天台宗の人は彼等が大怨敵なり。「爲彼除惡卽是彼親等云云」。無道心の者、生死をはなるゝ事はなきなり。敎主釋尊の、一切の外道に大惡人と罵詈せられさせ給ひ、天台大師の南北竝びに得一に三寸の舌もて五尺の身を斷つと、傳敎大師の南京の諸人に、最澄未だ唐都を見ず等といはれさせ給ひし。皆法華經のゆゑなれば、恥ならず。愚人に譽められたるは第一のはぢなり。日蓮が御勘氣を被れば天台眞言の法師等悅しくや思ふらん。かつは無慚なり、かつは奇恠なり。夫釋尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、傳敎は尸那に入り、提婆師子は身をすつ。藥王は臂をやく。上宮は手の皮をはぐ。釋迦菩薩は肉をうる。樂法は骨を筆とす。天台の云はく、「適時而已等云

三密—口に眞言を唱へ、身に印を結び、意に觀法をこらす修行

の二人出來して、念佛宗禪宗を興行す。法然云はく、法華經は末法に入りては未有一人得者千中無一等云云。大日云はく、教外別傳等云云。此の兩義國土に充滿せり。天台眞言の學者等、念佛禪の檀那を諛ひ怖づる事、犬の主に尾をふり、ねずみの猫を怕るゝがごとし。國王將軍にみやつかへ、破佛法の因緣、破國の因緣を能く說き能く語るなり。天台眞言の學者等今生には餓鬼道に墮ち後生には阿鼻を招くべし。設ひ山林にまじはつて、一念三千の觀をこらすとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機を知らず攝折の二門を辨へずば、いかでか生死を離るべき。

問うて云はく、念佛者禪宗等を責めて、彼等のあだまれたる、いかなる利益かあるや。

答へて云はく、涅槃經に云はく、

若善比丘見壞法者。置不呵責駈遣擧處。當知是人佛法中怨。若能駈遣呵責擧處。是我弟子眞聲聞也等云云。壞亂佛法。佛法中怨。無慈詐親是彼怨。能糾治者。是護法聲聞眞我弟子。爲彼除惡。即是彼親。能呵責者。是我弟子。不駈遣者。佛法中怨等云云。

夫法華經の寶塔品を拜見するに、釋迦多寶十方分身の諸佛の來集は、なに心ぞ。「令法久住故來至此等云云」。三佛の未來に法華經を弘めて、未來の一切の佛子に與へんと思召す

あるべきゆゑなり。日本國の當世は惡國か破法の國かと知るべし。

問うて云はく、攝受の時折伏を行ずると、折伏の時攝受を行ずると利益あるべしや。

答へて云はく、涅槃經に云はく、

迦葉菩薩白佛言。如來法身金剛不壞。而未能知所因云何。佛言。迦葉以能護持正法因緣故。得成就是金剛身。迦葉我護持正法因緣。今得成就是金剛身常住不壞。善男子護持正法者。不受五戒。不修威儀。應持刀劍弓箭。如是種種說法。然故不能師子吼。不能降伏非法惡人。如是比丘。不能自利及利衆生。當知是輩懈怠懶惰。雖能持戒守護淨行。當知是人無所能爲。乃至時有破戒者。聞是語已。咸共瞋恚。害是法師。是說法者。設復命終。故名持戒自利利他等云云。

章安の云はく、

取捨得宜。不可一向等。

天台云はく、

適時而已等云云。

譬へば秋の終に種子を下し田畠を耕さんに、稻米を得ること難し。建仁年中に法然大日

問。大經明親付國王持弓帶箭摧伏惡人。此經遠離豪勢謙下慈善。剛柔碩乖。云何不異。答。大經偏論折伏住一子地。何曾無攝受。此經偏明攝受頭破七分。非無折伏。各擧一端適時而已等云云。

涅槃經の疏にいはく、

出家在家護法。取其元心所爲棄事存理。匡弘大敎。故言護持正法。不拘小節。故言不修威儀。昔時平而法弘。應持戒勿持杖。今時嶮而法翳。應持杖勿持戒。今昔俱嶮應俱持杖。今昔俱平應俱持戒。取捨得宜。不可一向等云云。

汝が不審をば世間の學者多分道理と思ふ。いかに諫曉すれども日蓮が弟子等も此を思ひすてず、一闡提人のごとくなるゆゑに、先づ天台妙樂等の釋を出して、かれが邪難を防ぐ。夫攝受折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水を厭ふ。水は火を惡む。攝受の者は折伏を笑ふ。折伏の者は攝受を悲む。無智惡人の國土に充滿の時は攝受を前とす。安樂行品のごとし。邪智謗法の者の多き時は折伏を前とす。常不輕品のごとし。譬へば熱き時に寒水を用ひ、寒き時に火をこのむがごとし。草木は日輪の眷屬、寒月に苦を得。諸水は月輪の所從、熱時に本性を失ふ。末法に攝受折伏あるべし。所謂惡國破法の兩國

けん。拙き者のならひは約束せし事を、まことの時は忘るゝなるべし。妻子を不便と思ふゆゑ、現身にわかれん事をなげくらん。多生曠劫に親みし妻子には心と離れしか、佛道のために離れしか、何時も同じわかれなるべし。我が法華經の信心を破らずして靈山に參りて返りて導けかし。疑うて云はく、念佛者と禪宗等を無間と申すは諍ふ心あり。脩羅道にや墮つべかるらむ。又法華經の安樂行品に云はく、

不樂說人及經典過。亦不輕慢諸餘法師等云云。

汝此の經文に相違するゆゑに天にすてられたるか。答へて云はく、止觀に云はく、

夫佛兩說。一攝一折。如安樂行不稱長短。是攝義。大經執持刀杖。乃至斬首。是折義。雖與奪殊途。倶令利益等云云。

弘決に云はく、

夫佛兩說等者。大經執持刀杖者。第三云。護正法者。不受五戒。不修威儀。乃至下文仙豫國王等文。又新醫禁云。若有更爲。當斷其首。如是等文。並是折伏破法之人。一切經論。不出此二等云云。

文句に云はく、

八不―不生、不滅、不去、不來、不一、不異、不斷、不滅

五輪―地、水、火、風、空

一分の慧解―少しの理解

解脫―迷をはなれてさとりに進むこと

して頭を刎ねらるゝなり。梵天とは佛界に生るゝをいふなり。引業と申すは佛界までかはらず。日本漢土の萬國の諸人を殺すとも。五逆謗法なければ無間地獄には墮ちず。餘の惡道にして多歲を經べし。色天に生るゝこと、萬戒を持てども、萬善を修すれども、散善にては生れず。又梵天王となる事、有漏の引業の上に慈悲を加へて生ずべし。今此の貧女が子を念ふゆゑに梵天に生る。常の性相には相違せり。章安の二はあれども、詮ずるところは子を念ふ慈念より外の事なし。念を一境にする定に似たり。專ら子を念ふ又慈悲にもにたり。かるがゆゑに佗事なけれども天に生るゝか。又佛になる道は、華嚴の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、眞言の五輪觀等も、實には叶ふべしともみえず。但天台の一念三千こそ、佛になるべき道とみゆれ。此の一念三千も我等一分の慧解もなし。而れども一代經經の中には、此の經計り一念三千の玉をいだけり。餘經の理は玉ににたる黃石なり。沙をしぼるに油なし。石女に子のなきがごとし。諸經は、智者猶佛にならず。此の經は愚人も佛因を種うべし。「不求解脫解脫自至等云云」我並びに我が弟子、諸難ありとも疑ふ心なくば、自然に佛界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ。現世の安穩ならざる事をなげかざれ。我が弟子に朝夕敎へしかども、疑を起して皆すて

よく搾めざれば油少きがごとし。今、日蓮強盛に國土の謗法を責むれば、此の大難の來るは過去の重罪の、今生の護法に招き出せるなるべし。鐵は火に値はざれば黑し。火と合ひぬれば赤し。木をもつて急流を搔けば波山のごとし。睡れる師子に手をつくれば大に吼ゆ。涅槃經に云はく、

譬如貧女。無有居家救護之者。加復病苦飢渴所逼。遊行乞丐。止他客舍。寄生一子。是客舍主。驅逐令去。其產未久。攜抱是兒。欲至他國。於其中路。遇惡風雨。寒苦竝至。多爲蚊虻蜂螫毒蟲之所唼食。逕由恆河。抱兒而度。其水漂疾。而不放捨。於是母子遂共俱沒。如是女人。慈念功德命終之後。生於梵天。文殊師利。若有善男子。欲護正法。如彼貧女在於恆河。爲愛念子。而捨身命。善男子。護法菩薩亦應如是。寧捨身命。如是之人。雖不求解脫。解脫自至。如彼貧女不求梵天。梵天自至等云云

此の經文は、章安大師三障をもつて釋し給へり。それを見るべし。貧人とは法財のなきなり。女人とは一分の慈ある者也。客舍とは穢土也。一子とは法華經の信心了因の子也。舍主驅逐とは流罪せらる、其產未久とはいまだ信じてひさしからず。惡風とは流罪の敕宣なり。蚊虻等とは有諸無智人惡口罵詈等也。母子共沒とは終に法華經の信心をやぶらず

輕易—輕んじあなどること

三障—さとりをさまたぐるもの三つ、煩惱、業、報

四魔—さとりをさまたぐるもの四つ、天魔、死魔、煩惱魔、五蘊魔

句を我が身に合せん。「或被二輕易一等云云」法華經に云はく、「輕賤憎嫉等云云」二十餘年が間の輕慢せらる。或は「形狀醜陋」又云はく「衣服不足」は予が身也。「飮食麤疎」は予が身也。「求財不利」は予が身也。「生貧賤家」は予が身也。「或遭王難等」此の經文疑ふべしや。法華經に云はく、「數數見二擯出一」此の經文に云はく、「種種等云云」「斯由護法功德力故等」とは、摩訶止觀の第五に云はく、

散善微弱。不レ能レ令レ動。今修二止觀一健病不レ虧。動二生死輪一等云云。

又云はく、

三障四魔。紛然競起等云云。

我無始よりこのかた、惡王と生れて法華經の行者の衣食田畠等を奪ひとりせしこと數しらず。當世日本國の諸人の、法華經の山寺を倒すがごとし。又法華經の行者の頸を刎ぬること其の數をしらず。此等の重罪果せるもあり、いまだ果さざるもあるらん。果すも餘殘いまだ盡きず。生死を離るゝ時は必ず此の重罪を消しはてて出離すべし。功德は淺輕なり、此等の罪は深重なり。權經を行ぜしには、此の重罪いまだ起らず、鐵を熱くに甚うきたはざれば琱隱れて見えず。度々槌むればきずあらはる。麻子をしぼるに、つ

身子—舍利弗のこと
宿習—前世のしわざの此の世にあらはるゝこと
符契—合ひふだ

すて給へ、諸難にも逢へ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責を堪へざるゆゑ、久遠大通の者の三五の塵をふる、惡知識に値ふゆゑなり。善に付け惡につけ、法華經を捨つるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本國の位をゆづらむ、法華經をすてて觀經等について後生を期せよ、父母の頸を刎ねん。念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我が義やぶられずは用ひじとなり。其の外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等と、誓ひし願やぶるべからず。

疑うて云はく、いかにとして汝が流罪死罪等を過去の宿習としらむ。

答へて云はく、銅鏡は色形を顯はす。秦王驗僞の鏡は、現在の罪を顯はす、佛法の鏡は過去の業因を現ず。般泥洹經に云く、

善男子。過去曾作㆓無量諸罪種種惡業㆒。是諸罪報。或被㆓輕易㆒。或形狀醜陋。衣服不㆑足。飲食麤疎。求㆑財不㆑利。生㆓貧賤家邪見家㆒。或遭㆓王難㆒。及餘種種人間苦報。現世輕受。斯由㆓護法功德力㆒故云云。

此の經文、日蓮が身に宛も符契のごとし。狐疑の氷融けぬ。千萬の難も由なし。一一の

上品—最上位、こゝにては不信者の最上なるものをいふ
現罰—この世に生き居る間の罰

迦葉菩薩白佛言。世尊云何未發菩薩心者。得菩薩因等云云、

佛此の問を答へて云はく、

佛告迦葉。若有聞是大涅槃經。言我不用發菩提心。誹謗正法。是人即時於夜夢中見羅刹像。心中怖畏。羅刹語言。咄善男子。汝今若不發菩提心。當斷汝命。是人惶怖。寤已即發菩提之心。當知是人是大菩薩等云云。

甚うの大悪人ならざる者が、正法を誹謗すれば、即時に夢みてひるがへる心生ず。又云はく、「枯木石山等」又云はく、「燋種雖遇甘雨等」又「明珠淤泥等」又云はく、如人手創捉毒藥等」又云はく、「大雨不住空等云云」此等の多くの譬あり。詮ずるところ、上品の一闡提人になりぬれば、順次生に必ず無間獄に墮つべきゆゑに現罰なし。例せば夏の桀、殷の紂の世には天變なし。重科有つて必ず世亡ぶべきゆゑか。又守護神此の國を捨つるゆゑに現罰なきか。謗法の世をば守護神すてて去り、諸天守るべからず。かるがゆゑに正法を行ずるものに驗なし。還つて大難に値ふべし。金光明經に云はく、

修善業者。日日衰滅等云云。

悪國悪時これなり。具には立正安國論にかんがへたるがごとし。詮ずるところは、天も

北野の天神―菅原道眞
白居易―唐の詩人白樂天
順次生―次の世に直に其處に生るゝこと

此等は一乘の持者にあらざるか。北野の天神、白居易は遠流せらる。賢人にあらざるか。事の心を案ずるに、前生に法華經誹謗の罪なきもの、今生に法華經を行ず。これを世間の失によせ、或は罪なきを怨すれば、忽に現罰あるか。脩羅が帝釋を射る。金翅鳥阿耨池に入る等、必ず返つて一時に損するがごとし。天台云はく、

今我疾苦。皆由過去。今生脩福。報在將來等云云。

心地觀經に云はく、

欲知過去因見其現在果。欲知未來果見其現在因等云云。

不輕品に云はく、

其罪畢已等云云。

不輕菩薩は過去に法華經を謗じ給ふ罪身に有るゆゑに、瓦石を蒙るとみえたり。又順次生に必ず地獄に墮つべき者は重罪を造るとも現罰なし。一闡提人これなり。涅槃經に云はく、

迦葉菩薩白佛言。世尊如佛所說。大涅槃光。入於一切衆生毛孔等云云。

又云はく、

一乘—法華經をさす
竹杖—竹杖外道のこと

又、

頭破作七分。如阿梨樹枝。

又云はく、

亦於現世得其福報等。

又云はく、

若復見受持是經典者。出其過惡。若實。若不實。此人現世得白癩病等云云。

答へて云く、汝が疑大に吉し序に不審を晴さん。不輕品に云はく「悪口罵詈等」又云はく

或以杖木瓦石。而打擲之等云云。

涅槃經に云はく、「若殺若害等云云」法華經に云はく、

而此經者。如來現在。猶多怨嫉等云云。

佛は小指を提婆に傷られ、九横の大難に値ひ給ふ。此は法華經の行者にあらずや。不輕菩薩は一乘の行者といはれまじきか。目連は竹杖に殺さる。法華經記莂の後なり。付法藏の第十四の提婆、菩薩第二十五の師子尊者の二人は人に殺されぬ。此等は法華經の行者にはあらざるか。竺の道生は蘇山に流されぬ。法道は火印を面にやいて江南にうつさる。

いかゞせんいかゞせん。抑たれやの人か衆俗に惡口罵詈せらるゝ。誰の僧か刀杖を加へらるゝ。誰の僧をか法華經のゆゑに公家武家に奏する。誰の僧か數數見擯出と度々流さるゝ。日蓮より外に日本國に取出さんとするに人なし。日蓮は法華經の行者にあらず。天これをすて給ふゆゑに、誰をか當世の法華經の行者として佛語を實語とせん。佛と提婆とは身と影とのごとし。生々に離れず。聖德太子と守屋とは蓮華の花菓同時なるがごとし。法華經の行者あらば必ず三類の怨敵あるべし。三類はすでにあり。法華經の行者は誰なるらむ。求めて師とすべし。一眼の龜の浮木に値ふなるべし。有人云はく、當世の三類はほゞ有るに似たり。但し法華經の行者なし。汝を法華經の行者といはんとすれば大なる相違あり。此の經に云はく、

天諸童子。以爲給使。刀杖不加。毒不能害。

又云はく、

若人惡罵。口則閉塞等。

又云はく、

現世安穩。後生善處等云云。

高推云々―高く聖境を推するは己が智の分にあらず

解微―理解の力少きこと

一ふさの華―拈華微笑の故事、以心傳心をいふ

令法久住―佛法を久しく此の土にとゞまらしむること

夫昔像法の末には護命修圓等奏狀をさゝげて傳教大師を讒奏す。今末法の始には良觀念阿等僞書を注して將軍家にさゝぐ。あに三類の怨敵にあらずや。當世の念佛者等、天台法華宗の檀那の國王、大臣、婆羅門、居士等に向つて云はく、法華經は理深、我等は解微、法は至つて深く機は至つて淺し等と申し疎むるは、「高推聖境非己智分」の者にあらずや。禪宗の云はく、法華經は月をさす指、禪宗は月也、月を得て指なにかせん。禪は佛の心、法華經は佛の言也。佛、法華經等の一切經を說かせ給ひて後、最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさづく。其のしるしに佛の御袈裟を迦葉に付屬し乃至付法藏の二十八六祖までに傳ふ等云々。此等の大妄語國中を誑醉せしめて年久し。又天台眞言の高僧等、名は其の家に得たれども我が宗に昏し、貪欲は深く公家武家を恐れて此の義を證伏し讃歎す。昔の多寶分身の諸佛は法華經の令法久住を證明す。今天台宗の碩德は理深解微を證伏せり。かるがゆゑに日本國に但法華經の名のみあつて得道の人一人もなし。誰をか法華經の行者とせん。寺塔を燒きて流罪せらるゝ僧侶は數をしらず。公家武家に諛うて憎まるゝ高僧これ多し。此等を法華經の行者といふべきか。佛語むなしからざれば三類の怨敵すでに國中に充滿せり。金言の破るべきかのゆゑに、法華經の行者なし。

居士―出家をせずして佛道の修行をするもの

昔鄴洛禪師。名播ニ河海一。住則四方雲仰。去則阡陌成レ群。隱隱轟轟。亦有ニ何利益一。

臨終皆悔等云云。

弘の七に云はく、

鄴洛禪師者。鄴住ニ相州一。即齊魏所レ都。大興ニ佛法一。禪祖之一王ニ化其地一。護ニ時人意一。不レ出ニ其名一。洛即洛陽等云云。

六卷の般泥洹經に云はく、

不レ見ニ究究處一者。不レ見ニ彼一闡提究竟惡業一等云云。

妙樂云はく、

第三最甚。轉難レ識故等。

無眼の者、一眼の者、邪見の者は末法の始の三類を見るべからず。一分の佛眼を得るもの此を知るべし。

向國王大臣婆羅門居士等云云。

東春に云はく、

向ニ公處一毀レ法謗レ人等云云。

丈六―一丈六尺、生身の佛の身長、但し尺度が違ふと知るべし

自漢明帝夜夢。洎乎陳朝。豫廁禪門。衣鉢傳授者等云云。

補注に云はく、

衣鉢傳授者指達磨等云云。

止の五に云はく、

又一種禪人。乃至盲跛師徒二。俱墮落等云云。

止の七に云く、

九意不與世間文字法師共。不與事相禪師共。一種禪師唯有觀心一意。或淺或僞。餘九全無此。非虛言。後賢有眼者。當證知也。

弘の七に云はく、

文字法師者。內無觀解。唯構法相。事相禪師者。不閑境智。鼻膈止心。乃至根本有漏定等。一師唯有觀心一意等者。此且與而爲論奪則觀解俱闕。世間禪人偏尙理觀。既不諳教。以觀消經。數八邪八風爲丈六佛。合五陰三毒名爲八邪。用六入爲六通。以四大爲四諦。如此解經。僞中之僞。何淺可論等云云。

止觀の七に云はく、

園城—近江三井寺、天台宗寺門派
東寺—京都眞言宗
南都—主に興福寺を斥す、法相宗
建仁—京都禪宗
壽福—鎌倉、禪宗
建長—鎌倉、禪宗
五分法身—小乘の者をさす
華洛—京都

服袈裟。猶如獵師細視徐行。如猫伺鼠。常唱是言。我得羅漢。外現賢善。内懐貪嫉。如受瘂法婆羅門等。實非沙門。現沙門像。邪見熾盛。誹謗正法等云云。

妙樂云はく、

第三最甚。以後後者轉難識故等云云。

東春云はく、

第三或有阿練若下三偈。即是出家處。攝一切惡人等云云。

東春に「即是出家處攝一切惡人等」とは、當世日本國には何の處ぞや。叡山か園城か東寺か南都か建仁寺か壽福寺か建長寺か、よく〳〵尋ぬべし。延暦寺の出家の頭に甲冑をよろふをさすべきか。園城寺の五分法身の膚に鎧杖を帶せるか。彼等は經文に衲衣在空閑と指すには似ず、爲世所恭敬如六通羅漢と人思はず。又轉難識故といふべしや。華洛には聖一等、鎌倉には良觀等に似たり。人を怨むことなかれ。眼あらば經文に我が身を合せよ。止觀の第一に云はく、

止觀明靜　前代未聞等云云。

弘の一に云はく、

相待―比較的

邪惡、但法華のみ正善也。爾前の圓は、相待妙、絶待妙に對すれば猶惡也。前三教に攝すれば猶惡道なり。爾前のごとく彼の經の極理を行ずる猶惡道なり。況や觀經等の猶華嚴般若經等に及ばざる、小法を本として、法華經を觀經に取入れて、還つて念佛に對して閣抛閉捨せるは、法然竝びに所化の弟子等檀那等は誹謗正法の者にあらずや。釋迦多寶十方の諸佛は、法をして久しく住せしめんが故にこゝに來至し給へり。法然竝に日本國の念佛者等は法華經は末法に念佛より前に滅盡すべしと。豈に三聖の怨敵にあらずや。

第三は法華經に云はく、

或有阿練若。衲衣在空閑。乃至與白衣說法爲世所恭敬。如六通羅漢等云云。

六巻の般泥洹經に云はく、

有似羅漢一闡提而行惡業。似一闡提阿羅漢而作慈心。有似羅漢一闡提者。是諸衆生誹謗方等。似一闡提阿羅漢者。毀呰聲聞廣說方等。語衆生言。我與汝等俱是菩薩。所以者何。一切皆有如來法故。然彼衆生謂一闡提等云云。

涅槃經に云はく、

我涅槃後。於像法中當有比丘。似像持律少讀誦經典。貪嗜飲食長養其身。雖

叡山の大師―傳教大師、日本大乘戒の開祖たるをいふ

云」。道綽と傳教と法然と慧心といづれ此を信ずべしや。彼は一切經に證文なし。此は正しく法華經によれり。其の上日本國一同に叡山の大師は受戒の師なり。何ぞ天魔のつける法然に心をよせ、我が剃頭の師をなげ捨つるや。法然智者ならば何ぞ此の釋を選擇に載せて和會せざる。人の理を隱せる者なり。第二の惡世中比丘と指さるゝは法然等の無戒邪見の者なり。涅槃經に云はく、

我等悉名邪見之人等云云。

妙樂云はく、

自指三教皆名邪見等云云。

止觀經に云はく、

大經云。自此之前我等皆名邪見之人也。邪豈非惡等云云。

弘決に云はく、

邪則是惡。是故當知。唯圓爲善。復有二意。一者以順爲善。以背爲惡。相待意也。以著爲惡。以達爲善。相待絶待俱須離惡。圓著尚惡。況復餘耶等云云。

外道の善惡は小乘經に對すれば皆惡道。小乘の善道乃至四味三教は法華經に對すれば皆

是時當有諸惡比丘。乃至是諸惡人。雖復讀誦如是經典。滅除如來深密要義等云云。

止觀に云はく、

若無信高推聖境非己智分。若無智起增上慢。謂己均佛等云云。

道綽禪師が云はく、

二由理深解微等云云。

法然云はく、

諸行非機失時等云云。

記の十に云はく、

恐人謬解者。不識初心功德之大。而推功上位蔑此初心。故今示被行淺功深。以顯經力等云云。

傳教大師云はく、

正像稍過已。末法太有近。法華一乘機。今正是其時。何以得知。

安樂行品に云はく、「末世法滅時也等云云」。慧心の云はく、日本一州圓機純一なり等云

野干ー狐

後に彼の聖言此の國にわたつて衆生を利すべし。彼のわづかの外典の一毫未斷見思の者、しかれども一千年のことを知る。はたして佛教一千一十五年と申せし後漢の第二明帝の永平十年丁卯の年佛法漢土にわたる。此は似るべくもなき釋迦多寶十方分身の佛の御前の諸菩薩の未來記なり。當世日本國に三類の法華經の敵人なかるべしや。されば佛、付法藏經等に記して云はく、我が滅後に正法一千年が間我が正法を弘むべき人二十四人、次第に相續すべし。迦葉阿難等はさて置きぬ、一百年の脇比丘、六百年の馬鳴、七百年の龍樹菩薩等、一分もたがはず、すでに出で給ひぬ。此の事いかんが空しかるべき。此の事相違せば一經皆相違すべし。所謂舍利弗が未來の華光如來、迦葉の光明如來も皆妄語となるべし。爾前返つて一定となつて永不成佛の諸聲聞なり。犬野干をば供養すとも阿難等をば供養すべからずとなん。いかんがせんいかんがせん。第一の有諸無智人と云ふは經文の第二の惡世中比丘と、第三の衲衣の比丘の大檀那等と見えたり。隨つて妙樂大師は「俗衆等云々」。東春に云はく「向公處等云々」。第二の法華經の怨敵は、經に云はく、

惡世中比丘。邪智心諂曲。未得謂爲得。我慢心充滿等云云。

涅槃經に云はく、

六種に震動―動、起、涌、震、吼、撃
大史―官名

と。分別功德品に云はく、「惡世末法時」と。藥王品に云はく、「後五百歲等云云」と。正法華經の勸說品に云はく、「然後末世」と。又云はく、「然後來末世等云云」と。添品法華經に云はく、「等」。天台の云はく、像法の中の南三北七は法華經の怨敵なり。傳敎の云はく、像法の末南都六宗の學者は法華の怨敵等云々。彼等の時はいまだ分明ならず。此は敎主釋尊多寶佛、寶塔の中に日月の竝ぶがごとく、十方分身の諸佛樹下に星を列ねたりし中にして、正法一千年、像法一千年、二千年すぎて末法の始に、法華經の怨敵三類あるべしと、八十萬億那由佗の諸菩薩の定め給ひし、虛妄となるべしや。當世は如來滅後二千二百餘年なり。大地は指せば外るとも、春は花は咲かずとも、三類の敵人必ず日本國にあるべし。さるにては誰々の人々か三類の內なるらん。又誰人か法華經の行者なりと指されたるらん覺束なし。後の三類の怨敵に我等入りてやあるらん。又法華經の行者の內にてやあるらん覺束なし。周の第四昭王の御宇二十四年甲寅四月八日の夜中に、天に五色の光氣南北に亙つて晝のごとし。大地六種に震動し、雨ふらずして江河井池の水まさり、一切の草木に花さき菓なりたりけり。不思議なりし事なり。昭王大に驚き大史蘇由占つて云はく、西方に聖人生れたり。昭王問うて云はく、此の國いかん。答て云はく、事なし、一千年の

等云云。

六卷の般泥洹經に云はく、

有似阿羅漢一闡提而行惡業。似一闡提阿羅漢而作慈心。有似羅漢一闡提者。是諸衆生誹謗方等。似一闡提阿羅漢者。毀呰聲聞廣說方等語衆生言。我與汝等倶是菩薩。所以者何。一切皆有如來性故。然彼衆生謂一闡提等云云。

涅槃經に云はく、

我涅槃後。乃至正法滅後。於像法中當有比丘。似像持律少讀誦經貪嗜飲食長養其身。雖服袈裟。猶如獵師細視徐行。如猫伺鼠。常唱是言。我得羅漢。外現賢善。內懷貪嫉。如受瘂法婆羅門等。實非沙門現沙門像。邪見熾盛。誹謗正法等云云。

夫鷲峯雙林の日月、毗湛東春の明鏡に、當世の諸宗竝に國中の禪律念佛者が醜面を浮べたるに一分も曇なし。妙法華經に云はく、

於佛滅度後恐怖惡世中。

安樂行品に云はく、「於後惡世」と。又云はく、「於末世中」と。又云はく、「於後末世法欲滅時」

記の八に云はく、

文三初一行。通明邪人。即俗衆也。次一行。明道門增上慢者。三七行。明僭聖增上慢者。此三中。初者可忍。次者過前。第三最甚。以後後者轉難識故等云云。

東春に智度法師云はく、

初有諸下五行。第一一偈忍三業惡。是外惡人。次惡世下一偈。是上慢出家人。第三或有阿練若下三偈。即是出家處。攝一切惡人等云云。又云。常在大衆下兩行。向公處毀法謗人等云云。

涅槃經の九に云はく、

善男子。有一闡提。作羅漢像。住於空處。誹謗方等大乘經典。諸凡夫人見已。皆謂眞阿羅漢是大菩薩等云云。

又云はく、

爾時是經。於閻浮提。當廣流布。是時當有諸惡比丘。抄略是經。分作多分。能滅正法色香美味。是諸惡人。雖復讀誦如是經典。滅除如來深密要義。安置世間莊嚴文飾無義之語。抄前著後。抄後著前。前後著中。中著前後。當知如是諸惡比丘。是魔伴侶

内典の孝經—佛經の孝經といふべしの意

阿練若—梵語、閑靜處の意、寺のこと

衲衣—僧衣のこと

ひがたし。何に況や父母をや。但文のみあつて義なし。今法華經の時こそ、女人成佛の時、悲母の成佛も顯はれ、達多の惡人成佛の時、慈父の成佛も顯はるれ。此の經は內典の孝經也。二箇の諫了んぬ。已上五箇の鳳詔に驚きて勸持品の弘經あり。明鏡の經文を出して當世の禪律念佛者、並びに諸檀那の謗法をしらしめん。日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸刎ねられぬ。此は魂魄佐渡の國にいたりて返年の二月雪中に書して有緣の弟子へ贈れば、畏しくて怕しからず。見ん人いかにおぢぬらむ。此は釋迦多寶十方の諸佛の未來日本國當世をうつし給ふ明鏡なり。記念ともみるべし。勸持品に云はく、

唯願不爲慮。於佛滅度後恐怖惡世中。我等當廣說。有諸無智人惡口罵詈等。及加刀杖者。我等皆當忍。惡世中比丘。邪智心諂曲。未得謂爲得。我慢心充滿。或有阿練若衲衣。在空閑。自謂行眞道。輕賤人間者。貪著利養故。與白衣說法。爲世所恭敬。如六通羅漢。是人懷惡心。常念世俗事。假名阿練若。好出我等過。常在大衆中。欲毀我等故。向國王大臣婆羅門居士及餘比丘衆。誹謗說我惡。謂是邪見人說外道論議。濁劫惡世中。多有諸恐怖。惡鬼入其身。罵詈毀辱我。濁世惡比丘。不知佛方便隨宜所說法。惡口而顰蹙。數數見擯出等云云。

改轉—だん／＼に進む
擧一例諸—一つをあげて多くのものの例とし示す
法華經の時—法華經の行はるゝ時

ゆゑなり。彼の人々は天台傳教に歸せさせ給はずば謗法の失脱れさせ給ふべしや。當世日本國に第一に當める者は日蓮なるべし。命は法華經にたてまつる。名をば後代に留むべし。大海の主となれば諸の河神皆從ふ。須彌山の王に諸の山神したがはざるべしや。法華經の六難九易を辨ふれば一切經よまざるにしたがふべし。寶塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諫曉あり。提婆達多は一闡提なり、天王如來と記せらる。涅槃經四十巻の現證は此の品にあり。善星阿闍世等の無量の五逆謗法の者の一をあげ頭をあげ萬ををさめ枝をしたがふ。一切の五逆七逆謗法闡提天王如來にあらはれ了んぬ。毒藥變じて甘露となる衆味にすぐれたり。龍女が成佛此一人にはあらず、一切の女人の成佛をあらはす、法華已前の諸の小乘經には女人の成佛をゆるさず。諸の大乘經には成佛往生をゆるすやうなれども、或は改轉の成佛にして一念三千の成佛にあらざれば、有名無實の成佛往生なり。擧一例諸と申して龍女が成佛は末代の女人の成佛往生の道をふみあけたるなるべし。儒家の孝養は今生にかぎる。未來の父母を扶けざれば、外家の聖賢は有名無實なり。外道は過未を知れども父母を扶くる道なし。佛道こそ父母の後世を扶くれば。聖賢の名はあるべけれ。しかれども法華經已前等の大小乘の經宗は自身の得道猶かな

五乳―五味に同じ

不嘗―味をなめて見ぬこと

空のごとくなる理に迷はざるべしや。教の淺深を知らざれば理の淺深を辨ふものなし。卷を隔て文前後すれば教門の色辨へがたければ、文を出して愚者を扶けんと思ふ。王に小王大王、一切に少分全分、五乳に全喩分喩を辨ふべし。六波羅密經は有情の成佛あつて無性の成佛なし。何に況や久遠實成をあかさず。猶涅槃經の五味に及ばず。何に況や法華經の迹門本門に對すべしや。而るに日本の弘法大師此の經文にまどひ給ひて法華經を第四の熟蘇味に入れ給へり。第五の總持門の醍醐味すら涅槃經に及ばず、いかにし給ひけるやらん。而るを震旦人師爭盜醍醐と、天台等を盜人とかき給へり。「惜哉古賢不嘗醍醐」等と自歎せられたり。此等はさて置く。我が一門の者のために記す。佗人は信ぜざれば逆緣なるべし。一渧をなめて大海の潮を知り、一華を見て春を推せよ。萬里を渡つて宋に入らずとも、三箇年を經て靈山にいたらずとも、龍樹のごとく龍宮に入らずとも、無著菩薩のごとく彌勒菩薩に値はずとも、二所三會に値はずとも。一代の勝劣はこれをしれるなるべし。蛇は七日が內の洪水をしる龍の眷屬なるゆゑ。烏は年中の吉凶をしれり、過去に陰陽師なりしゆゑ。鳥は飛ぶ德人にすぐれたり。日蓮は諸經の勝劣をしること華嚴の澄觀、三論の嘉祥、法相の慈恩、眞言の弘法にすぐれたり。天台傳敎の跡をしのぶ

九山—須彌山の周圍山九つありて之をめぐる

所作未爲難。信是法者爲甚難。十佛刹塵衆生類、一劫供養諸樂具。彼之功德未爲勝信是法者爲殊勝。十佛刹塵諸如來。一劫恭敬而供養。若能受持此品者。功德於彼爲最勝等云云。

涅槃經に云はく、

是諸大乘方等經典。雖復成就無量功德。欲比是經不得爲喩。百倍千倍百千萬倍。乃至算數譬喩所不能及。善男子。譬如從牛出乳。從乳出酪。從酪出生蘇。從生蘇出熟蘇。從熟蘇出醍醐。醍醐最上。若有服者。衆病皆除。所有諸藥悉入其中。善男子。佛亦如是。從佛出於十二部經。從十二部經出脩多羅。從脩多羅出方等經。從方等經出般若波羅蜜。從般若波羅蜜出大涅槃。猶如醍醐。言醍醐者。喩於佛性等云云。

此等の經文を法華經の已今當六難九易に相對すれば、月に星をならべ、九山に須彌を合せたるに似たり。しかれども華嚴宗の澄觀、法相三論眞言等の慈恩嘉祥弘法等の佛眼のごとくなる人猶此の文に惑へり。何に況や盲眼のごとくなる當世の學者等勝劣を辨ふべしや。黑白のごとくあきらかに、須彌芥子のごとくなる勝劣猶まどへり。いはんや虛

大日經第一に云はく

祕密主大乘行。發二無緣乘心一。法無二我性一。何以故。如下彼往昔如レ是修行者上。觀二察蘊阿賴耶一。知二自性如一レ幻等云云。

又云はく、

祕密主彼如レ是捨二無我一。心主自在覺二自心本不生一等云云。

又云はく、

所謂空性離二於根境一。無相無二境界一。越二諸戲論一等二同虛空一。乃至極無自性等云云。

又云はく、

大日尊告二祕密主一言。祕密主云何菩提。謂如レ實知二自心一等云云。

華嚴經に云はく、

一切世界諸群生。尠レ有レ欲レ求二聲聞乘一。求二緣覺一者轉復少。求二大乘一者甚希有。求二大乘一者猶爲易。能信二是法一爲甚難。況能受持。正憶念。如レ說修行。眞實解。若以二三千大千界一頂戴一劫身不レ動。彼之所作未二爲難一。信二是法一者爲甚難。大千塵數衆生類。一劫供二養諸樂具一。彼之功德未二爲勝一。信二是法一者爲殊勝。若以レ掌持二十佛刹一。於二虛空中一住二一劫一。彼之

五法藏。譬如乳酪生蘇熟蘇及妙醍醐。總持門者。譬如醍醐。醍醐之味乳酪蘇中微妙第一。能除諸病。令諸有情身心安樂。總持門者。契經等中最爲第一。能除重罪等云云。

解深密經に云はく、

爾時勝義生菩薩。復白佛言。世尊初於一時。在波羅痆斯仙人墮處施鹿林中。唯爲發趣聲聞乘者。以四諦相轉正法輪。雖是甚奇　爲希有。一切世間諸天人等。先無有能如法轉者。而於彼時所轉法輪。有上有容。是未了義。是諸諍論安足處所。世尊在昔第二時中。唯爲發趣修大乘者。依一切法皆無自性。無生無滅。本來寂靜。自性涅槃。以隱密相。轉正法輪。雖更甚奇甚爲希有。而於彼時所轉法輪。亦是有上。有所容受。猶未了義。是諸諍論安足處所。世尊於今第三時中。普爲發趣一切乘者。依一切法皆無自性。無生無滅。本來寂靜自性涅槃。無自性性。以顯了相。轉正法輪。第一甚奇最爲希有。于今世尊所轉法輪。無上無容。是眞了義。非諸諍論安足處所等云云。

大般若經に云はく、

隨所聽聞世出世法。皆能方便。會入般若甚深理趣。諸所造作世間業事。亦以般若會入法性。不見一事出法性者等云云。

縱有レ經云二諸經之王一不レ云三已今當說最爲二第一一等云云。

又云はく、

已今當妙。於レ茲固迷。謗法之罪苦。流二長劫一等云云。

此の經釋に驚いて一切經並に人師の疏釋を見るに狐疑の氷融けぬ。今眞言の愚者等印眞言のあるを恃みて、眞言宗は法華經にすぐれたりとおもひ、慈覺大師等の眞言勝れたりと仰せられぬればなんど思へるはいふに甲斐なき事なり。密嚴經に云はく、

十地華嚴等大樹與二神通勝鬘及餘經一。皆從二此經一出。如レ是密嚴經。一切經中勝等云云。

大雲經に云はく、

是經卽是諸經轉輪聖王。何以故是經典中。宣二說衆生實性佛性常住法藏一故等云云。

六波羅蜜經に云はく、

所謂過去無量諸佛所說正法。及我今所レ說。所謂八萬四千諸妙法蘊。攝爲二五分一。一索呾纜。二毗奈耶。三阿毗達磨。四般若波羅蜜。五陀羅尼門。此五種藏。敎二化有情一。若彼有情不レ能レ受二持契經調伏對法般若一。或復有情造二諸惡業四重八重五無間罪謗二方等經一一闡提等種種重罪一。使レ得二銷滅速疾解脫頓悟涅槃一而爲レ彼說二諸陀羅尼藏一。此

了義經―眞義を說きつくし了れる經

曲會私情―わがこゝろに曲げて合すること

莊嚴己義―自己の教義をよきものと吹聽すること

べきとこそ候ひぬれ。龍樹菩薩の十住毘婆沙論に云はく、

不依脩多羅黒論。依脩多羅白論等云云。

天台大師云はく、

與脩多羅合者。錄而用之。無文無義。不可信受等云云。

傳教大師云はく、

依憑佛說。莫信口傳等云云。

圓珍智證大師云はく、

依文可傳等云云。

上にあぐるところの諸師の釋皆一分經論に依つて勝劣を辨ふやうなれども、皆自宗を堅く信受し先師の謬義を糺さざるゆゑに、曲會私情の勝劣なり。莊嚴己義の法門なり。佛滅後の犢子方廣、後漢已後の外典は、佛法外の外道の見よりも、三皇五帝の儒書よりも邪見强盛なり。邪法巧なり。華嚴法相眞言等の人師天台宗の正義を嫉むゆゑに實經の文を會して權義に順せしむること强盛なり。しかれども道心あらん人、偏黨をすて自他宗を諍はず、人を蔑る事なかれ。法華經に云はく、已今當等云云　妙樂云はく、

六難—佛世に値ひ難し、正法聞き難し、善心生じ難し、中國に生れ難し、人身受け難し、諸根具し難し

左右なく—無造作に、わけなく

等覺—一歩にして佛となるべき菩薩の最高位

答へて云はく、華嚴宗の杜順、智儼、法藏、澄觀等の三藏大師讀んで云はく、華嚴經と法華經と六難の內、名は二經なれども所說乃至理これ同じ。四門觀別見眞諦同のごとし。法相の玄奘三藏、慈恩大師等讀んで云はく、深密經と法華經とは、同じく唯識の法門にして第三時の敎、六難の內なり。三輪の吉藏等讀んで云はく、般若經と法華經とは名異體同二經一法なり。善無畏三藏金剛智三藏不空三藏等讀んで云はく、大日經と法華經とは理同じ。同じく六難の內の經なり。日本の弘法讀んで云はく、大日經は六難九易の內にあらず。大日經は釋迦所說の一切經の外、法身大日如來の所說なり。

又或人云はく、華嚴經は報身如來の所說六難九易の內にはあらず。此の四宗の元祖等、かやうに讀みければ、其の流をくむ數千の學徒等も又此の見を出でず。

日蓮歎いて云はく、上の諸人の義を左右なく非なりといはゞ、當世の諸人面を向くべからず。非に非をかさね結句は國主に讒奏して命に及ぶべし。但し我等が慈父雙林最後の御遺言に云はく、法に依つて人に依らざれと等云云。不依人等とは初依二依三依第四依普賢文殊等の等覺の菩薩が法門を說き給ふとも、經を手に握らざらんをば用ふべからず。了義經に依りて不了義經に依らざれと定めて經の中にも了義不了義經を糾明して信受す

諫曉―いさめさとし
眼前―目前、確に明なるをいふ
西王母が云々―三千年に一度花咲き實る
沛公―漢の高祖
宗盛―平の宗盛
金翅鳥―カルラといふ鳥、鳥中の大王といふ

難。若佛滅後於二惡世中一能說二此經一是則爲難。假使劫燒擔二負乾草一入レ中不レ燒。亦未二爲難一。我滅度後。若持二此經一爲二一人一說。是則爲難。諸善男子。於二我滅後一誰能護二持讀二誦此經一。今於二佛前一自說二誓言一等云云。

第三の諫敕也。第四第五の二箇の諫曉、提婆品にあり。下に書くべし。此の經文の心は眼前也。青天に大日輪の懸れるがごとし。白面に黶のあるに似たり。而れども生盲の者と邪眼の者と一眼のものと、各謂自師の者、邊執家の者は見がたし。萬難をすてて道心あらん者に記しとどめて見せん。西王母が園の桃、輪王出世の優曇華よりも値ひがたく、沛公が項羽と八年漢土をあらそひし、頼朝と宗盛が七年秋津島に戰し、脩羅と帝釋と、金翅鳥と龍王と阿耨池に諍へるも此には過ぐべからずと知るべし。日本國に此の法顯ること二度なり。傳教大師と日蓮となりと知れ。無眼のものは疑ふべし。力及ぶべからず。此の經文は日本、漢土、月氏、龍宮、天上、十方世界の一切經の勝劣を、釋迦多寶十方の佛來集して定め給ふなるべし。

問うて云はく、華嚴經、方等經、般若經、深密經、楞伽經、大日經、涅槃經等は九易の內か六難の內か。

知識とは知るべきや。

答へて云はく、私の言を出すべからず。經釋の明鏡を出して謗法の醜面をうかべ、其の失を見しめん。生盲は力及ばず。法華經の第四寶塔品に云はく、

爾時多寶佛。於二衆塔中一分二半座一與二釋迦牟尼佛一。爾時大衆見二二如來在二七寶塔中師子座上一結跏趺坐上。以二大音聲一普告二四衆一。誰能於二此娑婆國土一廣說二妙法華經一。今正是時。如來不レ久。當レ入二涅槃一。佛欲下以二此妙法華經一付囑有上レ在　等云云。

第一の敕宣なり。又云はく、

爾時世尊。欲下重宣二此義一而說上レ偈言。聖主世尊雖二久滅度一。在二寶塔中一。尚爲レ法來。諸人云何不レ勤爲レ法。又我分身無量諸佛如二恒沙等一來。欲レ聽レ法。各捨二妙土及弟子衆天人龍神諸供養事一。令二法久住一故。來二至此一。譬如下大風吹二小樹枝一以二是方便一令中法久住上。告二諸大衆一。我滅度後。誰能護二持讀二誦此經一。今於二佛前一自說二誓言一。

第二の鳳詔也。

多寶如來及與我身所レ集化佛。當レ知二此意一。諸善男子。各諦思惟。此爲二難事一。宜レ發二大願一。諸餘經典數如二恒沙一。雖レ說二此等一未レ足レ爲レ難。若接二須彌一擲二置他方無數佛土一。亦未レ爲

に値ひたてまつて自宗の失をしるなるべし。されば諸經の諸佛菩薩人天等は彼彼の經經にして佛にならせ給ふやうなれども、實には法華經にして正覺なり給へり。釋迦諸佛の衆生無邊の總願は皆此經において滿足す。「今者已滿足」の文これなり。予事の由を推し計るに華嚴觀經大日經等をよみ修行する人をば、その經經の佛菩薩天等守護し給ふらん疑あるべからず。但し大日經觀經等を讀む行者等法華經の行者に敵對をなさば、彼の行者をすてて法華經の行者を守護すべし。例せば、孝子、慈父の王敵となれば父を捨てて王に參る。孝の至也。佛法も又かくのごとし。法華經の諸佛菩薩十羅刹、日蓮を守護し給ふ上、淨土宗の六方の諸佛二十五菩薩、眞言宗の千二百等七宗の諸尊守護の善神、日蓮を守護し給ふべし。例せば七宗の守護神が傳教大師をまほり給ひしがごとしと思ふ。

日蓮案じて云はく、法華經の二處三會の座にましましゝ日月等の諸天は、法華經の行者出來せば磁石の鐵を吸ふがごとく、月の水に遷るがごとく、須臾に來りて行者に代り佛前の御誓を果させ給ふべしとこそ覺え候ふに、今まで日蓮を訪ひ給はぬは、日蓮法華經の行者にあらざるか。されば重ねて經文を勘へて我が身にあてて身の失を知るべし。

疑つて云はく、當世の念佛宗禪宗等をば何なる智眼をもつて法華經の敵人、一切衆生の惡

教相—無形の教理、眞言等の有形の事相に對す

廢講散衆—自己の講義をやめ弟子衆を解散せしこと

眞言禪門華嚴三論乃至若望二法華等一是接引門等云云。

善無畏三藏の閻魔の責におづからせ給ひしは此の邪見による。後に心をひるがへし法華經に歸伏してこそ、この責をば脱れさせ給ひしか。其の後善無畏不空等、法華經を兩界の中央に置きて大王のごとくし、胎藏の大日經、金剛の金剛頂經をば左右の臣下のごとくせしこれなり。日本の弘法も教相の時は華嚴宗に心をよせて法華經をば第八に置きしかども、事相の時には實慧、眞雅、圓澄、光定等の人々に傳へ給ひし時、兩界の中央に上のごとく置かれたり。例せば三論の嘉祥は法華玄十卷に法華經を第四時會二破二と定むれども、天台に歸伏して七年つかへ、廢講散衆して身を肉橋となせり。法相の慈恩は法苑林七卷十二卷に一乘方便四乘眞實等の妄言多し。しかれども玄賛の第四には、故亦兩存等と我が宗を不定になせり。言は兩方なれども心は天台に歸伏せり。華嚴の澄觀は華嚴の疏を造りて華嚴法華相對して法華を方便とかけるに似たれども、

彼宗以レ之爲レ實。此宗立義理無レ不レ通等。

とかけるは悔い還すにあらずや。弘法も又かくのごとし。龜鏡なければ我が面をみず、敵なければ我が非を知らず。眞言等の諸宗の學者等我が非をしらざりし程に、傳教大師

種熟脱ー天台宗にて衆生をして法華を解せしむる三順序、下種、調熟、得脱

超高ー先秦の奸臣趙高か

心如云々ー心はたくみなる畫師の如し

智發ー智慧がひらくること

理同事勝ー法華と大日とは理論は同等なるも印眞言の有形の點が大日經勝るといふ

眞言華嚴等の經々には種熟脱の三義名字すら猶なし。何に況や其の義をや。華嚴眞言經等の一生初地の卽身成佛等は、經は權經にして過去を隱せり。種をしらざる脱なれば超高が位にのぼり、道鏡が王位に居せんとせしがごとし。宗宗互に權を諍ふ。予此をあらそはず。但經に任すべし。法華經の種に依つて天親菩薩は種子無上を立てたり。天台の一念三千これなり。華嚴經乃至諸大乘經大日經等の諸尊の種子皆一念三千なり。天台智者大師一人此の法門を得給へり。華嚴宗の澄觀此の義を盗んで華嚴經の「心如工畫師」の文の神とす。眞言大日經等には二乘作佛久遠實成一念三千の法門これなし。善無畏三藏が震旦に來りて後、天台の止觀を見て智發し、大日經の「心實相我一切本初」の文の神に天台の一念三千を盗み入れて眞言宗の肝心として、其の上に印と眞言とを飾り、法華經と大日經との勝劣を判ずる時、理同事勝の釋をつくれり。兩界の曼荼羅の二乘作佛十界互具は一定大日經にありや、第一の誑惑なり。故に傳教大師云はく、

新來眞言家。則泯二筆受之相承一。舊到華嚴家。則隱二影響之軌模一等云云。

俘囚の島なんどに渡つて「ほの〴〵」といふ和歌は、われ詠みたりなんど申すは、夷體の者はさこそと思ふべし。漢土日本の學者又かくのごとし。良諝和尙云はく、

盧舍那—報身佛のこと、但し眞言宗は法身を本尊とするなり

宗なり。法相三論は勝應身に似たる佛を本尊とす。天王の太子我が父は侍と思ふがごとし。華嚴宗眞言宗は釋尊を下げて盧舍那の大日等を本尊と定む。天子たる父を下げて種姓もなき者の法王のごとくなるに附けり。淨土宗は釋迦の分身の阿彌佗佛を有緣の佛と思ひて教主を捨てたり。禪宗は、下賤の者一分の德有つて父母を下ぐるがごとし。佛をさげ經を下す此皆本尊に迷へり。例せば三皇已前に父をしらず人皆禽獸に同ぜしがごとし。壽量品をしらざる諸宗の者は畜に同じき不知恩の者なり。故に妙樂云はく、

一代教中。未レ曾顯レ遠。父母之壽。不レ可レ不レ知。若不レ知二父壽之遠一復迷二父統之邦一徒謂二才能一全非二人子一等云云。

妙樂大師は唐の末、天寶年中の者也。三論華嚴法相眞言等の諸宗竝に依經を深く見廣く勘へて壽量品の佛をしらざる者は父統の邦に迷へる才能ある畜生とかけるなり。所謂才能とは華嚴宗の法藏、澄觀、乃至眞言宗の善無畏三藏等は才能の人師なれども子の父をしらざるがごとし。傳教大師は日本顯密の元祖、秀句に云はく、

佗宗所依經。雖レ有二一分佛母義一然但有レ愛闕二嚴義一天台法華宗。具二嚴愛義一一切賢聖學無學及發二菩提心一者之父等云云。

自調自度—自利のみを心がけて利他をせぬことと小乘の人の所爲なり

斷結—煩惱を斷ずること

し、讒臣は賢人をかくす。人讒れば黄石も玉と見え、諛臣も賢人かと覺ゆ。今濁世の學者等、彼等の讒義に隱されて壽量品の玉を翫ばず。又天台宗の人々も誑されて金石一同の思をなせる人々もあり。佛久成にましまさずば所化の少かるべき事を辨ふべきなり。月は影を慳まざれども水なくばうつるべからず。佛衆生を化せんと覺せども、結縁うすければ八相を現ぜず。例せば諸の聲聞が初地初住には上れども爾前にして自調自度なりしかば未來の八相を期するなるべし。しかれば敎主釋尊始成ならば、今此の世界の梵帝日月四天等は劫初より此の土を領すれども四十餘年の佛弟子なり。靈山八年の法華結縁の衆今まゐりの主君に思ひつかず、久住の者に隔てらるゝがごとし。今久遠實成あらはれぬれば、東方の藥師如來の日光月光、西方阿彌陀如來の觀音勢至、乃至十方世界の諸佛の御弟子、大日金剛頂等の兩部の大日如來の御弟子の諸大菩薩、猶敎主釋尊の御弟子也。諸佛釋迦如來の分身たる上は、諸佛の所化申すに及ばず。何に況や此土の劫初よりこのかたの日月衆星等敎主釋尊の御弟子にあらずや。而るを天台宗より外の諸宗は本尊に惑へり。倶舍成實律宗は三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり。天尊の太子が迷惑して我が身は民の子と思ふがごとし。華嚴宗眞言宗三論宗法相宗等の四宗は大乘の

始成正覺—以下各經文の一句づつを引く

臺上—蓮華臺上の報身佛

知行—第六天の魔王の支配せるこの世界

一往—單に

然善男子。我實成佛已來。無量無邊百千萬億那由佗劫等云云。

此の文は華嚴經の三處の始成正覺、阿含經に云はく、初成、淨名經の始坐佛樹、大日經に云はく、始十六年、大日經の我昔坐道場等、仁王經の二十九年、無量義經の我先道場、法華經の方便品に云はく、我始坐道場、等を一言に大虛妄なりと破る文なり。此過去常に顯るゝ時、諸佛皆釋尊の分身なり。爾前迹門の時は、諸佛釋尊に肩を並べて各修各行の佛なり。かるがゆゑに諸佛を本尊とする者釋尊等を下す。今華嚴の臺上、方等般若大日經等の諸佛は皆釋尊の眷屬なり。佛三十成道の御時は大梵天王、第六天等の知行の娑婆世界を奪ひ取り給ひき。今爾前迹門にして十方を淨土と號して此の土を穢土と說かれしを打ちかへして、此の土は本土なり、十方の淨土は垂迹の穢土となる。佛は久遠の佛なれば迹化佗方の大菩薩も教主釋尊の御弟子なり。一切經の中に此の壽量品ましまさずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんがごとくしてあるべきを。華嚴眞言等の權宗の智者と覺しき、澄觀、嘉祥、慈恩、弘法等の一往權宗の人々、且は自の依經を讚歎せんために、或は云はく、華嚴經の教主は報身、法華經は應身と。或は云はく、法華壽量品の佛は無明の邊域、大日經の佛は明の分位等云々。雲は月をかく

耆婆月光—二人共に大臣たりき

輪王—轉輪聖王のこと、世界統一の大王

徒事—提婆品を明にせずば眞の領解は出來ずとのこと

錮め、母を殺さんとせしが、耆婆月光に威されて母を放ちたりし時、佛を請じたてまつつて、まづ第一の問に云はく、

我宿何罪。生此惡子。世尊復有何等因緣。與提婆達多共爲眷屬等云云。

此の疑の中に世尊復有何等因緣等の疑は大なる大事なり。輪王は敵と共に生まれず、帝釋は鬼と共ならず。佛は無量劫の慈悲者なり。いかに大怨と共にはまします。還つて佛にはましまさざるかと疑ふなるべし。而れども佛答へ給はず。されば觀經を讀誦せん人、法華經の提婆品へ入らずば徒事なるべし。大涅槃經に迦葉菩薩の三十六の問もこれには及ばず。されば佛此の疑を晴させ給はずば、一代の聖教は泡沫に同じ、一切衆生は疑網に羅るべし。壽量の一品の大切なるこれなり。其の後佛壽量品を說いて云はく、

一切世間天人及阿脩羅。皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮。去伽耶城不遠。坐於道場得阿耨多羅三藐三菩提等云云。

此の經文は始寂滅道場より、終法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあけたるなり。

人々ならんと思へば、我が善知識なりと仰せられしかば、さもやとうち思ひき。其の後の大寶坊白鷺池等の來會の大菩薩も然のごとし。此の大菩薩は彼等には似るべくもなき舊りたりげにまします。定めて釋尊の御師匠かなんど覺しきを、令初發道心とて幼稚のものどもなりしを敎化して弟子となせりなんど仰せあれば、大なる疑なるべし。日本の聖德太子は人王第三十二代用明天皇の御子なり。御年六歲の時百濟高麗唐土より老人どもの渡りたりしを、六歲の太子我が弟子なりと仰せありしかば、彼の老人ども又合掌して我が師なり等云々。不思議なりし事なり。外典に申す。或人道をゆけば路のほとりに年三十計りなる若者が八十計りなる老人をとらへて打ちけり。いかなる事ぞと問へば、此の老翁は我が子也なんど申すと語るにも似たり。されば彌勒菩薩等疑ひて云はく、

　世尊如來爲二太子一時。出二於釋宮一去二伽耶城一不レ遠。坐二於道場一得レ成二阿耨多羅三藐三菩提一。從レ是已來始過二四十餘年一。世尊云何於二此少時一大作二佛事一等云云。

一切の菩薩、始華嚴經より四十餘年會會に疑を設けて、一切衆生の疑網を晴す中に、此の疑第一の疑なるべし。無量義經の大莊嚴等の八萬の大士四十餘年と今との歷劫疾成の疑にも超過せり。觀無量壽經に韋提希夫人の阿闍世王が提婆に賺されて父の王を禁

其因緣等云云。

天台云はく、

自寂場已降。今座已往十方大士來會不絕。雖不可限。我以補處智力。悉見悉知。而於此衆。不識一人。然我遊戲十方。覲奉諸佛。大衆快所識知等云云。

妙樂云はく、

智人知起。蛇自識蛇等云云。

經釋の心分明なり。詮ずるところは、初成道よりこのかた此土十方にて此等の菩薩を見奉らず、きかずと申すなり。佛此の疑を答へて云はく、

阿逸多汝等。昔所未見者。我於是娑婆世界。得阿耨多羅三藐三菩提已。教化示導是諸菩薩。調伏其心。令發道意等。

又云はく、

我於伽耶城菩提樹下。坐得成最正覺。轉無上法輪。爾乃教化之。令初發道心。今皆住不退。乃至我從久遠來。教化是等衆等云云。

此に彌勒等の大菩薩大に疑ひ思ふ。華嚴經の時、法慧等の無量の大菩薩集る。いかなる

此の菩薩に對すれば翳眼のものの日輪を見るがごとく、海人が皇帝に向ひ奉るがごとし。大公等の四聖の衆中に在つしに似たり。商山の四皓が恵帝に仕へしにことならず。巍々堂々として尊高也。釋迦多寶十方の分身を除いては一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし。彌勒菩提心に念言すらく、我は佛の太子の御時より三十成道、今の靈山まで四十二年が間此界の菩薩十方世界より來集せし諸大菩薩皆知りたり。又十方の淨穢土に或は御使、或は我と遊戯して其の國々に大菩薩を見聞せり。此の大菩薩の御師なんどはいかなる佛にてやあるらん。よも此の釋迦多寶十方の分身の佛陀には似るべくもなき佛にてこそおはすらめ。雨の猛きを見て龍の大なる事を知り、華の大なるを見て池のふかきことは知んぬべし。此等の大菩薩の來る國、又誰と申す佛に値ひたてまつり、いかなる大法をか習修し給ふらんと疑ひし、あまりの不審さに音をも出すべくもなけれども、佛力にやありけん、彌勒菩薩疑ひて云はく

無量千萬億大衆諸菩薩。昔所レ未二曾見一。是諸大威德精進菩薩衆。誰爲二其說一法。敎化而成就。從レ誰初發心。稱二揚何佛法一。世尊我昔來未二曾見一是事一。願說二其所從國土之名號一。我常遊二諸國一未二曾見一是事一。我於二此衆中一。乃不レ識二一人一。忽然從レ地出。願說二

其の化身三身圓滿の古佛にあらず。大品經の千佛、阿彌陀經の六方の諸佛いまだ來集の經にあらず。大集經の來集の佛又分身ならず。金光明經の四方の四佛の化身なり。總じて一切經の中に各修各行の三身圓滿の諸佛を集めて我が分身とは說かれず。これ壽量品の遠序なり。始成四十餘年の釋尊が一劫十劫等已前の諸佛を集めて分身と說かる。さすが平等意趣にも似ず、夥しく驚かし。又始成の佛ならば所化十方に充滿すべからざれば、分身の德は備はりたりとも示現して益なし。天台云はく、

分身既多。當知成佛久矣等云云。

大會の驚きし意を書かれたり。其の上に地涌千界の大菩薩大地より出來せり。釋尊に第一の御弟子と覺しき普賢文殊等にも似るべくもなし。華嚴方等般若法華經の寶塔品に來集せる大菩薩、大日經等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なんども、此の菩薩に對當すれば彌猴の群る中に帝釋の來り給ふがごとし。山人に月卿等の雜居るにことならず。補處の彌勒すら猶迷惑せり。何に況や其の已下をや。此の千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします。所謂上行、無邊行、淨行、安立行なり。此の四人は虚空靈山の諸菩薩等、眼もあはせ心も及ばず。華嚴經の四菩薩、大日經の四菩經、金剛頂經の十六大菩薩等も、

始成—始めて成道してより

對當—比較に同じ

補處—次に佛となるべき候補地

眼もあはせ—目にも見得ざること

日月—日天月天共に天上界の天人と考へたるなり

師子の牀—佛座を譬へいふ

報佛—報身佛

八葉—以下附錄參看

開目鈔　下

又今よりこそ諸大菩薩も梵帝日月四天等も教主釋尊の御弟子にては候へ。されば寶塔品には此等の大菩薩を佛我が御弟子等と覺すゆゑに、諫曉して云はく、

告諸大衆我滅度後誰能護持讀誦此經今於佛前自說誓言

とはしたゝかに仰せ下せしか。又諸大菩薩も、

譬如大風吹小樹枝等。

と吉祥草の大風に隨ひ河水の大海へ引くがごとく佛には隨ひまゐらせしか。而れども靈山日淺しくて夢のごとく現ならずありしに、證前の寶塔の上に起後の寶塔ありて、十方の諸佛來集せる皆我が分身なりと名のらせ給ひ、寶塔は虛空に釋迦多寶坐を竝べ、日月の青天に竝出せるがごとし。人天大會は星をつらね、分身の諸佛は大地の上寶樹の下の師子の牀にまします。華嚴經の蓮華藏世界は十方此土の報佛各々に國々にして、彼界の佛此土に來りて分身と名のらず、此界の佛彼の界へゆかず。但法慧等の大菩薩のみ互に來會せり。大日經金剛頂經等の八葉九尊三十七尊等大日如來の化身とはみゆれども、

衆生無邊云々―衆生は限りなく多きも誓願して覺に度すべしとのこと

衆生と申すは舍利弗、衆生と申すは一闡提、衆生と申すは九法界。衆生無邊誓願度此に滿足す。

我本立ニ誓願一。欲レ令ニ一切衆如レ我等無レ異。如ニ我昔所レ願。今者已滿足等云云。

諸大菩薩諸天等此の法門を聽いて領解して云はく、

我等從レ昔來。數聞ニ世尊說一。未ニ曾聞一如レ是深妙之上法一等云云。

傳敎大師云はく、

我等從レ昔來。數聞世尊說。謂昔聞ニ法華經前說一華嚴等大法一也。未ニ曾聞一如レ是深妙之上法一。謂未レ聞ニ法華經唯一佛乘敎一也等云云。

華嚴方等般若深密大日等の恒河沙の諸大乘經は、いまだ一代の肝心たる一念三千の大綱骨髓たる二乘作佛久遠實成等をいまだ聽かずと領解せり。

> 六度萬行―菩薩が修行してその身を佛に度する六つの大行爲と附屬のあらゆる善行

は薩達磨分陀利伽蘇多攬と申す。善無畏三藏の法華經の肝心眞言に云はく、

曩謨三曼陀没馱南〔歸命普佛陀〕唵〔三身如來〕阿阿暗惡〔開示悟入〕薩縛勃陀〔一切佛〕枳攘〔知〕娑乞芻毗耶〔見〕誐誐曩三娑縛〔如虚空性〕羅乞叉儞〔離塵相也〕薩哩達摩〔正法也〕浮陀哩迦〔白蓮華〕蘇駄覽〔經〕惹〔入〕吽〔遍〕鑁〔住〕發〔歡喜〕縛日羅〔堅固〕羅乞叉給〔擁護〕吽〔空無相無願〕娑婆訶〔決定成就〕

此の眞言は、南天竺の鐵塔の中の法華經の肝心の眞言也。此の眞言の中に薩哩達磨と申すは正法なり。薩と申すは正也。正は妙也妙は正也正法華妙法華是也。又妙法蓮華經の上に南無の二字を置けり。南無妙法蓮華經これなり。妙とは具足、六とは六度萬行、諸の菩薩の六度萬行を具足するやうを聞かんと思ふ。具とは十界互具足と申すは一界に十界あれば當位に餘界あり、滿足の義なり。此の經一部八卷二十八品六萬九千三百八十四字、一一に皆妙の一字を備へて三十二相八十種好の佛陀なり。十界に皆己界の佛界を顯す。妙樂云はく、

尚具佛果。餘果亦然等云云。

佛此を答へて云はく、

欲令衆生開佛知見等云云。

りしを、舍利弗等驚きて諸天龍神大菩薩等を催して、

諸天龍神等。其數如恆沙。求佛諸菩薩。大數有八萬。又諸萬億國轉輪聖王至合掌以敬心欲聞具足道等。

とは請ぜしなり。文の心は四味三教四十餘年の間、いまだ聞かざる法門うけ給はらんと請ぜしなり。此の文に欲聞具足道と申すは、大經に云く、

薩者名具足義等云云。

無依無得大乘四論玄義記に云はく、

沙者譯云六。胡法以六爲具足義也等云云。

吉藏の疏に云はく、

妙者翻爲具足等云云。

天台の玄義の八に云はく、

薩者梵語此翻妙也等云云。

付法藏の第十三眞言華嚴諸宗の元祖本地は法雲自在王如來。迹に龍猛菩薩初地の大聖の大智度論千卷の肝心に云はく、薩とは六也等云云。妙法蓮華經と申すは漢語也。月支に

開三顯一—三乘は畢竟法華の一乘に歸すべきことを明にせるもの

二教は又別圓の枝流なり。別圓二教を知る人必ず藏通二教をしるべし。人の師と申すは弟子のしらぬ事を教へたるが師にては候ふなり。例せば佛より前の一切の人天外道は二天三仙の弟子なり。九十五種まで流派したりしかども三仙の見を出でず。教主釋尊もかれに習ひ傳へて外道の弟子にてましませしが、苦行樂行十二年の時、苦空無常無我の理をさとり出でてこそ、外道の弟子の名をば離れさせ給ひて無師智とは名のらせ給ひしか。又人天も大師とは仰せまゐらせしか。されば前四味の間は教主釋尊法慧菩薩等の御弟子なり。例せば文殊は釋尊九代の御師と申すがごとし。つねは諸經に不說一字と說かせ給ふもこれなり。佛御年七十二の年、摩竭提國靈鷲山と申す山にして無量義經をとかせ給ひしに、四十餘年の經經をあげて枝葉をば其の中に收めて、四十餘年未顯眞實と打消し給ふは此なり。此の時こそ諸大菩薩諸天人等は周章て實義を請ぜんとは申せしか。無量義經にて實義と覺しき事一言ありしかども、いまだ實なし。譬へば月の出でんとして其の體東山にかくれて光西山に及べども、諸人月體を見ざるがごとし。法華經方便品の略開三顯一の時、佛略して一念三千心中の本懷を宣べ給ふ。始の事なれば時鳥の音を寢惚れたる者の一音きゝたるがやうに、月の山の半を出でたれども薄雲の覆へるがごとく幽な

だ說敎もなかりしに、法慧菩薩、功德林菩薩、金剛幢菩薩、金剛藏菩薩等なんど申せし六十餘の大菩薩、十方の諸佛の國土より敎主釋尊の御前に來り給ひて、賢首菩薩、解脫月等の菩薩の請に赴いて十住十行十囘向十地等の法門を說き給ひき。此等の大菩薩の所說の法門は釋尊に習ひたてまつるにあらず。十方世界の諸の梵天等も來りて法を說く。又釋尊に習ひたてまつらず。總じて華嚴會座の大菩薩天龍等は、釋尊已前に不思議解脫に住せる大菩薩なり。釋尊の過去因位の御弟子にや有らん、十方世界の先佛の御弟子にや有らん。一代敎主始成の正覺の佛の弟子にはあらず。阿含方等般若の時、四敎を佛の說き給ひし時こそ漸く御弟子は出來して候へ。此も又佛の自說なれども正說にはあらず。ゆゑいかんとなれば、方等般若の別圓二敎は、華嚴經の別圓二敎の義趣を出でず。彼の別圓二敎は敎主釋尊の別圓二敎にはあらず、法慧等の別圓二敎なり。此等の大菩薩は人目には佛の御弟子かとは見ゆれども、佛の御師ともいひぬべし。世尊彼の菩薩の所說を聽聞して、智發して後重ねて方等般若の別圓を說けり。色もかはらぬ華嚴經の別圓二敎なり。されば此等の大菩薩は釋尊の師なり。華嚴經に此等の菩薩を數へて善知識と說かれしはこれなり。善知識と申すは一向師にもあらず一向弟子にもあらずある事なり。藏通

華嚴會座—華嚴の敎理を說かれたる場
過去因位—過去にて佛になる修行をして居られし間をいふ
先佛—釋迦佛以前に已に佛となり居られしもの
別圓—附錄「四敎」參看
色もかはらぬ—全く同じきの意
藏通—同上

後五百歳—佛滅後に五つの五百歳毎に世が衰ふる、その最後の五百歳の間、人の爭のはげしき間との佛の豫言

滿月の處するがごとく、青天に日輪の懸り給ふがごとく、世尊法久後要當説眞實と照させ給ひて、華光如來、光明如來等と、舍利弗迦葉等を赫々たる日輪明々たる月輪のごとく、鳳文にしるし龜鏡に浮べられて候へばこそ、如來滅後の人天の諸檀那等には、佛陀のごとくは仰がれ給ひしか。水すまば月影を惜むべからず、風ふかば草木靡かざるべしや。法華經の行者あるならば、此等の聖衆は大火の中を過ぎても大石の中を通りても訪はせ給ふべし。迦葉の入定もことにこそよれ。いかにとなりぬるぞ不審しとも申すばかりなし。後五百歳の當らざるか。廣宣流布の妄語となるべきか。日蓮が法華經の行者ならざるか。法華經を教内と下して別傳と稱する大妄語の者を守り給ふべきか。捨閉閣抛と定んで法華經の門をとぢよ。卷をなげすてよと彫付けて法華堂を失へる者を守護し給ふべきか。佛前の誓はありしかども、濁世の大難のはげしさをみて諸天下り給はざるか。日月天にまします、須彌山今も崩れず、海潮も増減す、四季もかたのごとく違はず。いかになりぬるやらんと大疑いよ〳〵積り候ふ。又諸大菩薩天人等のごときは爾前の經經にして記莂を得るやうなれども、水中の月を取らんとするがごとく、影を體と思ふがごとく、色形のみあつて實義もなし。又佛の御恩も深くて深からず。世尊初成道の時はいま

跡を止むべき者にはあらず。されば天には日月衆星變をなず、地には衆夭盛なりなんど訴ふ。堪べしともおぼえざりしに、又うち添ふ禍と佛陀にもうち副ひがたくてありしなり。人天大會の衆會の砌にて、時々呵嘖の音をきゝしかば、いかにあるべしとも覺えず。只狼狽つる心のみなり。其の上大の大難の第一なりしは、淨名經の、

其施レ汝者不レ名二福田一。供二養汝一者墮二三惡道一等云云。

文の心は佛菴羅苑と申すところに御坐せしに、梵天帝釋日月四天二界諸天地神龍神等無數恆沙の大會の中にして云はく、須菩提等の比丘等を供養せん天人は三惡道に墮つべし。此等をうち聽く天人此等の聲聞を供養すべしや。詮ずるところは佛の御言を用ひて諸の二乘を殺害せさせ給ふかと見ゆ。心あらん人々は佛をも疎みぬべし。されば此等の人々は佛を供養したてまつりし序にこそ、わづかの身命をも扶けさせ給ひしか。されば事の心を案ずるに四十餘年の經經のみ說かれて、法華八箇年の所說なくて御入滅ならせ給ひたらましかば、誰の人か此等の尊者をば供養し奉るべき。現身に餓鬼道にこそおはすべけれ。而るに四十餘年の經經をば、東春の大日輪寒氷を消滅するがごとく、無量の草露を大風の零落するがごとく、一言一時に未顯眞實と打ち消し、大風の黑雲を卷き大虛に

思ふに、今諸の大聲聞はもと外道婆羅門の家より出でたり。又諸の外道の長者なりしかば諸王に歸依せられ、諸檀那に尊まる。或は種姓高貴の人もあり、或は富福充滿のやからもあり。而るに彼彼の榮官等をうち捨て慢心の幢を倒して、俗服を脱ぎ、壞色の糞衣を身にまとひ、白拂弓箭等をうちすてて、一鉢を手に握り、貧人乞丐なんどのごとくして世尊につき奉り、風雨を防ぐ宅もなく、身命をつぐ衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海皆外道の弟子檀那なれば、佛すら九横の大難にあひ給ふ。所謂提婆が大石をとばせし、阿闍世王の醉象を放し、阿耆多王の馬麥、婆羅門城の漿、旃遮婆羅門女が鉢を腹に伏せし。何に況や所化の弟子の數難申す計りなし。無量の釋子は波瑠璃王に殺され、千萬の眷屬は醉象にふまれ、華色比丘尼は提婆にがいせられ、迦盧提尊者は馬糞にうづまれ、目犍尊者は竹杖にがいせらる。其の上六師同心して、阿闍世、婆斯匿王等に讒奏して云はく、瞿曇は閻浮第一の大惡人なり。彼がいたる處は三災七難を前とす。一海の衆流を集め大山の衆木をあつめたるがごとし。瞿曇がところには衆惡をあつめたり。所謂迦葉舍利弗目連須菩提等なり。人身を受けたる者は忠孝を先とすべし。彼等は瞿曇にすかされて父母の教訓をも用ひず、家を出で王法の宣をも背いて山林にいたる。一國に

壞色の糞衣―袈裟のこと、これもと色目もわかぬ垢き衣なるが本義たるに由る

白拂弓箭―貴族武士の持ち物

九横―九種の横死、附錄參看

所謂提婆以下―凡て釋尊を害し又は陥れんとせしものを敍べしもの

釋子―佛弟子、以下は佛弟子の難に逢ひしものを敍ふ

三災―洪水、火災、戰爭

七難―火水、羅刹、刀杖、鬼、枷鎖、怨賊の難

以下の四人の大弟子

前四味―法華以前の四種の諸經を謂ふ

瞿曇―釋尊の俗名

於其中應受供養。世尊大恩。以希有事憐愍教化利益我等。無量億劫誰能報者。手足供給。頭頂禮敬。一切供養。皆不能報。若以頂戴。兩肩荷負於恒沙劫。盡心恭敬。又以美膳無量寶衣及諸臥具種種湯藥。牛頭栴檀及諸珍寶以起塔廟。寶衣布地。如斯等事以用供養。於恒沙劫。亦不能報等云云。

諸の聲聞等は者前四味の經經に幾許の呵嘖を蒙り、人天大會の中にして恥辱がましき事其の數をしらず。しかれば迦葉尊者の渧泣の音は三千をひゞかし、須菩提尊者は亡然として手の一鉢をすつ。舍利弗は飯食を吐き富樓那は畫瓶に糞を入ると嫌はる。世尊鹿野苑にしては阿含經を讃歎し、二百五十戒を師とせよなんど慇懃に譽めさせ給ひて、今又いつのまに我が所説をば斯うは謗らせ給ふと、二言相違の失とも申しぬべし。例せば世尊、提婆達多を汝愚人、人の唾を食ふと罵詈せさせ給ひしかば、毒箭の胸に入るがごとく思ひてうらみて云はく、瞿曇は佛陀にはあらず、我は斛飯王の嫡子、阿難尊者が兄、瞿曇が一類なり。いかに惡しき事ありとも内々教訓すべし。此等程の人天大會に此程の大禍を現に向ひて申すもの、大人佛陀の中にあるべしや。されば先々は妻の敵、今は一座のかたき、今日よりは生々世々に大怨敵となるべしと誓ひしぞかし。此をもつて

結集—編輯會議をなして編輯すること

聲聞—佛の聲を聞く小乘の人。四大聲聞—迦葉

桀紂々々とこそ申せ。下賤の者癩病の者も桀紂のごとしといはれぬれば罵れたりと腹たつなり。千二百無量の聲聞は法華經ましまさずば誰か名をもきくべき。其の音をも習ふべき。一千の聲聞一切經を結集せりとも、見る人よもあらじ。まして此等の人々を繪像木像にあらはして本尊と仰ぐべしや。此偏に法華經の御力によつて一切の羅漢歸依せられさせ給ふなるべし。諸の聲聞法華を離れさせ給ひなば魚の水をはなれ猿の木をはなれ小兒の乳をはなれ民の王をはなれたるがごとし。いかでか法華經の行者を捨て給ふべき。諸の聲聞は爾前の經經にては、肉眼の上に天眼慧眼を得。法華經にして法眼佛眼備れり。十方世界すら猶照見し給ふらん。何に況や此の娑婆世界の中、法華經の行者を知見せられざるべしや。設日蓮惡人にて、一言二言一年二年一劫二劫乃至百千萬億劫此等の聲聞を惡口罵詈し奉り、刀杖を加へまゐらする色なりとも、法華經をだにも信仰したる行者ならば捨て給ふべからず。譬へば幼稚の父母を罵る、父母これを捨つるや。梟鳥が母を食ふ、母これをすてず。破鏡父を害す、父これにしたがふ。畜生すら猶かくのごとし。大聖法華經の行者を捨つべしや。されば四大聲聞の領解の文に云はく、

我等今者眞是聲聞。以佛道聲令一切聞。我等今者眞阿羅漢。於諸世間天人魔梵普

これを書く上、疑を強くして答を構ふべし。季札といひし者は心の約束をたがへじと、王の重寶たる劍を徐君が墓にかく。王壽と云ひし人は河の水を飲みて金の鵞目を水に入れ。公胤といひし人は腹をさいて主君の肝を入る。此等は賢人なり。恩を報ずるなるべし。況や舍利弗迦葉等の大聖は二百五十戒三千の威儀一つもかけず、見思を斷じ三界を離れたる聖人也。梵帝諸天の導師一切衆生の眼目なり。而るに四十餘年が間永不成佛と嫌ひすて果てられてありしが、法華經の不死の良藥をなめて燋種の生ひ破石の合ひ枯木の華菓なんどせるがごとく、佛になるべしと許されて、いまだ八相を唱へず。いかでか此の經の重恩をば報ぜざらん。若報ぜずば彼彼の賢人にも劣りて不知恩の畜生なるべし。毛寶が龜は襖の恩を忘れず。昆明池の大魚は命の恩を報ぜんと、明珠を夜中にさゝげたり。畜生すら猶恩を報ず。何に況や大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅睺羅尊者は淨飯王の孫なり。人中に家高き上、證果の身となつて成佛を障へられたりしに、八年の靈山の席にて山海慧踊、七寶華なんど、如來の號をさづけられ給ふ。若法華經ましまさずば、いかに家高く大聖なりとも、誰か恭敬したてまつるべき。夏の桀、殷の紂と申すは萬乘の主、土民の歸依なり。しかれども政あしくして世をほろぼせしかば、今に惡きものの手本には

梵帝―梵天と帝釋と

八相―佛の一生に八つの樣子を現出するもの

夏の桀―夏の國の惡王、殷の湯王に亡さる

殷の紂―殷の國の惡王、周の武王に亡さる

正妙二本―正法華經と妙法華經と

此に阿育大王といふ王あるべし。摩耶經に云はく、我滅後六百年に龍樹菩薩といふ人南天竺に出づべし。大悲經に云はく、我が滅後六十年に末田地といふ者地を龍宮に築くべし。此等皆佛記のごとくなりき。しからずば誰か佛敎を信受すべき。而るに佛「恐怖惡世然後末世末法滅時後五百歳」なんど正妙の二本に正しく時を定め玉ふ。當世法華の三類の強敵なくば、誰か佛說を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として佛語を助けん。南三北七、七大寺等、猶像法の法華經の敵の內、何に況や當世の禪律念佛者等は脫るべしや。經文に我が身普合せり。御勘氣を蒙ぶれば、いよ〳〵悅を增すべし。例せば小乘の菩薩の未斷惑なるが願兼於業と申して、つくりたくなき罪なれども、父母等の地獄に墮ちて大苦をうくるを見て、形のごとく其の業を造りて、願ひて地獄に墮ちて苦むに同じ。苦に代れるを悅とするがごとし。此も又かくのごとし當時の責は堪ふべくもなけれども、未來の惡道を脫すらんと思へば悅ぶなり。但世間の疑といひ自心の疑と申し、いかでか天扶け給はざるらん。諸天等の守護神は佛前の御誓言あり。法華經の行者には猨になりとも法華經の行者と號して早々に佛前の御誓言をとげんとこそ覺すべきに、其の義なきは我が身法華經の行者にあらざるか。此の疑は此の書の肝心、一期の大事なれば、處々に

那由佗ー梵語千億、萬億等と譯す

もあづかるべしと存ずれども、一分の驗もなし。いよ〳〵重科に沈む。還つて此の事を計りみれば我が身の法華經の行者にあらざるか。又諸天善神等の此の國をすてて去り給へるか。かた〴〵疑はし。而るに法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此の國に生れずば、殆世尊は大妄語の人、八十萬億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ちぬべし。經に云はく

有諸無智人惡口罵詈等。加刀杖瓦石等云云。

今の世を見るに日蓮より外の諸僧たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ刀杖等を加らるゝ者ある。日蓮なくば此の一偈の未來記は妄語となりぬ。「惡世中比丘邪智心諂曲。」又云はく「與白衣說法爲世所恭敬如六通羅漢」此等の經文は今の世の念佛者禪宗律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人。「常在大衆中乃至向國王大臣婆羅門居士等」今の世の僧等日蓮を讒奏して流罪せずば此の經文むなし。又云はく「數數見擯出等」云云。日蓮法華經のゆゑに度々ながされずば、數數の二字いかんがせん。此の二字は天台傳教もいまだよみ給はず。況や餘人をや。末法の始のしるし、「恐怖惡世中」の金言の合ふゆゑに、但日蓮一人これを讀めり。例せば世尊が付法藏經に記して云はく、我滅後一百年

僧統奏曰、西夏有鬼辯婆羅門。東土吐巧言禿頭沙門。此乃物類冥召誑惑世間等云云。論曰。昔聞齊朝之光統。今見本朝之六統。實哉法華何況也等云云。

秀句に云はく、

語代則像終末初。尋地則唐東羯西。原人則五濁之生鬪諍之時。經云。猶多怨嫉況滅度後。此言良有以也等云云。

夫小兒に灸治を加ふれば必ず母を怨む。重病の者良薬をあたふれば定んで口に苦しと憂ふ。在世猶然り乃至像末邊土をや。山に山をかさね、波に波をたゝみ、難に難を加へ、非に非を增すべし。像法の中には天台一人法華經一切經を讀めり。南北これを怨みしかども、陳隋二代の聖主、眼前に是非を明めしかば、敵つひに盡きぬ。像の末に傳敎一人法華經一切經を佛說のごとく讀み給へり。南都七大寺蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主我と明らめ給ひしかば又事なし。今末法の始二百餘年なり。況や滅度後の兆に鬪諍の序となるべき故に、非理を前として濁世の驗に召し合せられずして流罪乃至壽にも及ばんとするなり。されば日蓮が法華經の智解は、天台傳敎には千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はおそれをも懐きぬべし。定んで天の御計に

世間惡人。爲利養故。往集其所而爲眷屬。不能修善呪術力故。調伏迦葉及舍利弗目揵連等云云。

天台云はく、

何況未來。理在難化也等云云。

妙樂云はく、

障未除者爲怨。不喜聞者名嫉等云云。

南三北七の十師、漢土無量の學者、天台を怨敵とす。得一云はく、

咄哉智公。汝是誰弟子以不足三寸舌根而謗覆面舌之所說等云云。

東春に云はく。

問。在世時許多怨嫉。佛滅度後說此經時。何故亦多留難耶。答云。如俗言良藥苦口。此經廢五乘異執。立一極之玄宗。故斥凡呵聖。排大破小。銘天魔爲毒蟲。說外道爲惡鬼。貶執小爲貧賤。挫菩薩爲新學。故天魔惡聞。外道逆耳。二乘驚怪。菩薩怯行。如此之徒悉爲留難。多怨嫉言豈唐哉等云云。

顯戒論に云はく、

重科に行はる。謀反なんどの者のごとし。法華經の第四に云はく、

而此經者。如來現在猶多怨嫉。況滅度後等云云。

第二に云く、

見有讀誦書持經者。輕賤憎嫉而懷結恨等云云。

第五に云はく、

一切世間多怨難信等云云。

又云はく、

有諸無智人惡口罵詈等。

又云はく、

向國王大臣婆羅門居士。誹謗說我惡。謂是邪見人。又云。數數見擯出等云云。

又云はく、

杖木瓦石而打擲之等云云。

涅槃經に云はく、

爾時多有無量外道。和合共往摩訶陀王阿闍世所。今者唯有一大惡人。瞿曇沙門。一切

理深解微—教理深けれども解をなすもの少きこと

無通—教義に通ぜざること

恆沙—非常に多きたとへ

ごとくなる惡魔の身に入りたる者、法華經をつよく譽めあげ、機をあながちに下し、理深解微と立て、未有一人得者千中無一等と賺ししものに無量生が間、恆河沙の度すかされて權經に墮ちぬ。權經より小乘經に墮ちぬ、外道外典に墮ちぬ、結句は惡道に墮ちけりと深く此を知れり。日本國に此を知れる者は但日蓮一人なり。これを一言も申し出すならば父母兄弟師匠に國主の王難必ず來るべし。いはずば慈悲なきに似たりと思惟するに、法華經涅槃經等に此の二邊を合せ見るに、いはずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮つべし。いふならば三障四魔必ず競ひ起るべしと知んぬ。二邊の中にはいふべし、王難等出來の時は退轉すべくは一度に思ひ止むべしと且く休らひし程に、寶塔品の六難九易これなり。我等程の小力の者須彌山はなぐとも、我等程の無通の者乾草を負うて劫火にはやけずとも、我等程の無智の者恆沙の經經をば讀み覺ゆとも、法華經は一句一偈も末代に持ちがたしと説かるゝはこれなるべし。今度强盛の菩提心を起して退轉せじと願しぬ。既に二十餘年が間此の法門を申すに日々月々年々に難かさなる。少々の難は數しらず、大事の難四度なり。二度はしばらくおく。王難すでに二度に及ぶ。今度はすでに我が身命に及ぶ。其の上弟子といひ檀那といひわづかの聽聞の俗人なんど來りて

外凡内凡—修行の位の名

王難—國王に苦めらるゝこと

無垢摩沓が利根なりし。權實二教を辨へず。正法一千年の内は在世も近く月氏の内なりし。既にかくのごとし。況や尸那日本等は國も隔て音もかはれり。人の根も鈍なり、壽命も日あさし。貪瞋癡も倍増せり。佛世を去りて年久し。佛經みな悞れり誰の智解か直かるべき。佛涅槃經に記して云はく、末法には正法の者は爪上の土謗法の者は十方の土見えぬ。法滅盡經に云はく、謗法の者は恒河沙、正法の者は一二の小石と記し置き給ふ。千年五百年に一人なんども正法の者ありがたからん。世間の罪に依りて惡道に墮つる者は爪上の土、佛法によりて惡道に墮つる者は十方の土。俗よりも僧、女より尼、多く惡道に墮つべし。此に日蓮案じて云はく、世すでに末代に入りて二百餘年、邊土に生をうけ其の上下賤其の上貧道の身なり。輪囘六趣の間人天の大王と生れて萬民をなびかす事、大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も佛にならず。大小乘經の外凡内凡の大菩薩と修しあがり、一劫二劫無量劫を經て菩薩の行を立て、すでに不退に入りぬべかりし時も、強盛の惡縁に落されて佛にもならず。知らず大通結縁の第三類の在世を漏れたるか、久遠五百の退轉して今に來れるか。法華經を行ぜし程に世間の惡縁、王難、外道の難、小乘經の難なんどは忍びし程に、權大乘實大乘經を極めたるやうなる道綽、善導、法然等が

權化—かりに人間となりて現れしこと

嚴經大日經に分明なり。華嚴宗の杜順、智儼、法藏、澄觀、眞言宗の善無畏、金剛智、不空等は、天台傳教には似るべくもなき高位の人なり。其の上善無畏等は大日如來より系みだれざる相承あり。此等の權化の人いかでか悞りあるべき。隨つて華嚴經には、

或見釋迦成佛道已經不可思議劫等云云。

大日經には、

我一切本初等云云。

何ぞ但久遠實成壽量品に限らん。譬へば井底の蝦が大海を見ず、山左が洛中をしらざるがごとし。汝但壽量の一品を見て、華嚴大日經等の諸經をしらざるか。其の上月氏尸那新羅百濟等にも、一同に二乘作佛久遠實成は法華經に限るといふか。されば八箇年の經は四十餘年の經經には相違せりといふとも、先判後判の中には後判につくべしといふとも、猶爾前づりにこそ覺ゆれ。又但在世計りならばさもあるべきに滅後に居せる論師人師多くは爾前づりにこそ候へ。斯う法華經は信じがたき上、世もやうやく末になれば聖賢はやうやく隱れ迷者はやうやく多し。世間の淺き事すら猶あやまりやすし。何に況や出世の深法悞なかるべしや。犢子方廣が聰敏なりし、猶大小乘經にあやまてり。

山階寺―後の興福寺

三藏―譯經家の稱

爾前に―爾前に對して

難陀、戒賢等の大論師なり。戒日大王頭を傾け、五天幢を倒して此に歸依す。尸那國の玄奘三藏月氏にいたりて十七年、印度百三十餘の國々を見きゝて諸宗をば振すて、此の宗を漢土にわたして太宗皇帝と申す賢王にさづけ給ひ、昉尙光基を弟子として、大慈恩寺竝に三百六十餘箇國に弘め給ひ日本國には人王三十七代孝德天皇の御宇に道慈道昭等習ひわたして山階寺にあがめ給へり。三國第一の宗なるべし。此宗の云はく、始華嚴經より終法華涅槃經にいたるまで、無性有情と決定性の二乘は永く佛になるべからず。佛語に二言なし。一度永不成佛と定め給ひぬる上は日月は地に落ち給ふとも大地は反覆すとも永く變改有べからず。されば法華經涅槃經の中にも爾前の經經に嫌ひし無性有情決定性を正しく衝指して成佛すとは說かれず。まづ眼を閉て案ぜよ。法華經涅槃經に決定性無性有情正しく佛になるならば、無著世親ほどの大論師、玄奘慈恩ほどの三藏人師これをみざるべしや、此を載せざるべしや。これを信じて傳へざるべしや。彌勒菩薩に問ひ奉らざるべしや。汝は法華經の文に依るやうなれども、天台、妙樂、傳敎の僻見を信受して其の見をもつて經文をみる故に、爾前に法華經は水火なりと見るなり。華嚴宗と眞言宗は法相三論には似るべくもなき超過の宗なり。二乘作佛久遠實成は法華經に限らず、華

小釋迦—小乘の人の見たる釋迦は本佛の釋迦なりて生死ある釋迦なるをいふ

爾前づり—爾前を重んずること、ひいきすること

都率—都率天といふ天上界

界互具、百界千如、一念三千なるべし。斯うて顧れば華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等般若の、金光明經の、阿彌陀經の、大日經等の權佛等は、此の壽量の佛の天月しばらく影を大小の器にして浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品をしらず、水中の月に實月の想をなし、或は入りて取らんと思ひ、或は繩をつけて繫ぎとゞめんとす。天台云はく、

不レ識ニ天月一但觀ニ池月一等云云。

日蓮案じて云はく、二乘作佛すら猶爾前づりにおぼゆ。久遠實成は又似るべくもなき爾前づりなり。其の故は爾前法華相對するに猶爾前こはき上、爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出壽量の二品を除いては皆始成を存せり。雙林最後の大涅槃經四十卷、其の外の法華前後の諸大經に一字一句もなく、法身の無始無終は說けども應身法身の顯本は說かれず。いかんが廣博の爾前本迹涅槃等の諸大乘經をばすてて但涌出壽量の二品には付くべき。されば法相宗と申す宗は西天の佛滅後九百年に無著菩薩と申す大論師有しき。夜は都率の內院にのぼり、彌勒菩薩に對面して一代聖教の不審をひらき、晝は阿輸舍國にして法相の法門を弘め給ふ。彼の御弟子は世親、護法、

無始—本來の意

云はく、

一切世間天人及阿脩羅。皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮。去伽耶城不遠。坐於道場得。阿耨多羅三藐三菩提等云云。

正しく此の疑を答へて云はく、

然善男子。我實成佛已來。無量無邊百千萬億那由佗劫等云云。

華嚴乃至般若大日經等は二乘作佛を隠すのみならず久遠實成を説きかくさせ給へり。此等の經經に二つの失あり。一には行布を存するが故に仍未だ權を開せず迹門の一念三千を隠せり。二には始成をいふ故に會て未だ迹を發せず、本門久遠をかくせり。此等の二つの大法は一代の綱骨、一切經の心髓なり。迹門方便品は一念三千二乘作佛を説いて爾前二種の失一つを脱れたり。然りといへどもいまだ發迹顯本せざれば實の一念三千もあらはれず、二乘作佛も定まらず、水中の月を見るがごとし、根なし草の波上に浮べるに似たり。本門にいたりて始成正覺を破れば四教の果を破る。四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打ち破りて本門の十界の因果をとき顯す。此即ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、眞の十

歷劫修行—直に佛になれず長く修行を要するの意
阿耨云々—無上正覺と譯す
序分—序論
正宗—本論
開三—三乘を說明すること
壽量—佛の壽命の長さのこと

二十九年等云云。此等は言ふにたらず。只耳目を驚かす事は、無量義經に華嚴經の唯心法界、方等般若經の海印三昧混同無二等の大法をかきあげて、或は未顯眞實、或は歷劫修行等、下す程の御經に、我先に道場菩提樹の下に端坐すること六年、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たりと初成道の華嚴經の始成の文に同ぜられし、不思議と打ち思ふところに、此は法華經の序分なれば正宗の事を言はずもあるべし。法華經の正宗、略開三、廣開三の御時、唯佛與佛乃能究盡諸法實相等、世尊法久後等、正直捨方便等。多寶佛迹門八品を指して皆是眞實と證明せられしに何事をか隱すべきなれども、久遠壽量をば祕せさせ給ひて我始道場に坐し樹を觀じ亦經行す等云云。最第一の大不思議なり。されば彌勒菩薩涌出品に四十餘年の未見今見の大菩薩を、

佛爾乃教化之令初發道心等。

と說かせ給ひしを。疑つて云はく、

如來爲太子時。出於釋宮。去伽耶城不遠。坐於道場。得成阿耨多羅三藐三菩提。從是已來始過四十餘年。世尊云何於此少時。大作佛事等云云。

教主釋尊此等の疑を晴さんがために壽量品を說かんとして、爾前迹門の所聞を擧げて

ころ、以下その意

一點もなく——一點も漏なくの意

始成正覺——今始めて佛になつたとのこと

久遠實成——實は本來の佛なりとのこと

を示現して、十立六相法界圓融頓極微妙の大法を說き給ひ、十方の諸佛も顯現し、一切の菩薩も雲集せり。土といひ機といひ諸佛といひ始といひ、何事につけてか大法を祕し給ふべき。されば經文には、

顯二現自在力一、爲說二圓滿經一等云云。

一部六十卷は一字一點もなく圓滿經なり。譬へば如意寶珠は一珠も無量珠も共に同じ。一珠も萬寶を盡して雨し、萬珠も萬寶を盡すがごとし。華嚴經は一字も萬字も但同事なるべし。心佛及衆生の文は華嚴宗の肝心なるのみならず、法相三論眞言天台の肝要とこそ申し候へ。此等程いみじき御經に何事をか隱すべき、なれども、二乘闡提不成佛ととかれしは珠の瑕とみゆる上、三處まで始成正覺となのらせ給ひて久遠實成壽量品を說き隱させ給ひき。珠の破れたると月に雲のかゝれると日の蝕したるがごとし。不思議なりしことなり。阿含方等般若大日經等は佛說なればいみじき事なれども、華嚴經に對すればいふに甲斐なし。彼の經に祕せんこと此等の經經にとかるべからず。されば諸阿含經に云はく、初成道等云云。大集經に云はく、如來成道始十六年等云云。淨名經に云はく、始佛樹に坐して力めて魔を降す等云云。大日經に云はく、我昔道場に坐して等云云。般若仁王經に云

普合―符合なるべし
流通―結論
住劫―この世界の存續して居る長き時間
寂滅道場―華嚴經を說かれしと

なり。其の故は法華經と大日經と、法華經と華嚴經と、法華經と阿彌陀經と一なる樣を說く人をば悅んで歸依し、別々なるなんど申す人をば用ひず。たとひ用ふれども本意なき事と思へり。日蓮云はく、日本に佛法わたりてすでに七百餘年。但傳教大師一人計法華經を讀めりと申すをば諸人これを用ひず。但法華經に云はく、

若接須彌擲置佗方無數佛土。亦未爲難。乃至若佛滅後於惡世中能說此經是則爲難等云云。

日蓮が強義經文には普合せり。法華經の流通たる涅槃經に、末代濁世に謗法の者は十方の地のごとし、正法の者は爪上の土のごとしと說かれて候ふは如何がし候ふべき。日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、よく〳〵思惟あるべし。賢王の世には道理勝つべし、愚王の世に非道先を爲べし。聖人の世に法華經の實義顯るべし等と心得べし。此の法門は迹門と爾前と相對して爾前の強きやうに覺ゆ。もし爾前強るならば舍利弗等の諸の二乘は永不成佛の者なるべし。いかんが嘆かせ給ふらん。二には教主釋尊は住劫第九の滅、人壽百歲の時、師子頰王には孫、淨飯王には嫡子童子、悉達太子一切義成就菩薩これなり。御年十九の御出家、三十成道の世尊、始寂滅道場にして實報華王の儀式

彈呵—退けること

後の經なければ佛語相違なし。なにつけてか大疑いて來べき。大集經大品經金光明經阿彌陀經等は諸の小乘經の二乘を彈呵せんがために十方に淨土を說き、凡夫菩薩を欣慕せしめ、二乘を煩らはす。小乘經と諸大乘經と一分の相違あるゆゑに、或は十方に佛現じ給ひ、或は十方より大菩薩をつかはし、或は十方世界にも此の經をとく由をしめし、或は十方より諸佛あつまり給ふ。或は釋尊舌を三千におほひ、或は諸佛の舌をいだす由を說かせ給ふ。これひとへに諸の小乘經の十方世界唯有一佛と說かせ給ひし思を破るなるべし。法華經のごとくに先後の諸大乘經と相違出來して、舍利弗等の諸の聲聞大菩薩人天等に將非魔作物と思はれさせ給ふ大事にはあらず。而るを華嚴法相三論眞言念佛等の翳眼の輩、彼彼の經經と法華經とは同じと、うち思へるは、つたなき眼なるべし。但在世は四十餘年をすてて法華經につき候ふ者もやありけん。佛滅後に此の經文を開見して信受せんこと難かるべし。先づ一つには爾前の經經は多言也。法華經は一言也。爾前の經經は多經也。此の經は一經也。彼彼の經經は多年也。此の經は八年也。佛は大妄語の人永く信ずべからず。不信の上に信を立てば爾前の經經は信ずる事もありなん。法華經は永く信ずべからず。當世も法華經をば皆信じたるやうなれども、法華經にてはなき

善哉―はめる詞

非人―龍神と修羅とかいふ様な人に似たるもの

長舌―眞實を託するに舌を出す習慣あり

三千―三千世界をいふ

翳眼―目をふさぐこと

云はく、

爾時寶塔中。出大音聲歎言。善哉善哉。釋迦牟尼世尊。能以平等大慧教菩薩法佛所護念妙法華經爲大衆說。如是如是。釋迦牟尼世尊如所說者。皆是眞實等云云。

又云はく、

爾時世尊。於文殊師利等無量百千萬億舊住娑婆世界菩薩乃至人非人等一切衆前。現大神力。出廣長舌。上至梵世。一切毛孔乃至十方世界衆寶樹下師子座上諸佛。亦復如是出廣長舌。放無量光等云云。

又云はく、

令十方來諸分身佛各還本土乃至多寶佛塔還可如故等云云。

大覺世尊初成道の時諸佛十方に現じて釋尊を慰喩し給ふ上、諸の大菩薩を遣しき。般若經の御時は釋尊長舌を三千に覆ひ千佛十方に現じ給ひ、金光明經には四方の四佛現ぜり。阿彌陀經には六方の諸佛舌を三千に覆ふ。大集經には十方の諸佛菩薩大寶坊にあつまれり。此等を法華經に引合せて考ふるに、黃石と黃金と白雲と白山と白氷と銀鏡と黑色と青色とをば、翳眼の者眇目の者一眼の者邪眼の者は見違へつべし。華嚴經には先

あらまさせか—何かの誤か、未詳

劫國—成佛すべき時間とその佛國の名

持て扱ひ—處理し兼ぬること

梵音聲—淸き音聲

聽く。各々國々へ還りて娑婆世界の釋尊の說法を彼々の國々にして一一にかたるに、十方無邊の世界の一切衆生一人もなく、迦葉舍利弗等は永不成佛の者、供養しては惡しかりぬべしと知りぬ。而るを後八年の法華經に忽に悔還して二乘作佛すべしと佛陀說かせ給はんに、人天大會信仰をなすべしや。用ふべからざる上、先後の經經に疑網をなし、五十餘年の說教皆虛妄の說となりなん。されば四十餘年未顯眞實等の經文はあらまさせか。天魔の佛陀と現じて後八年の經をば說かせ給ふかと疑網するところに、實に〴〵しげに劫國名號と申して、一一乘成佛の國をさだめ、劫を記し、所化の弟子なんどを定めさせ給へば、教主釋尊の御語すでに二言になりぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が佛陀を大妄語の者と咲ひしこととこれなり。人天大會興ざめてありし程に、爾の時に東方寶淨世界の多寶如來高さ五百由旬廣さ二百五十由旬の大七寶塔に乘じて、教主釋尊の人天大會に自語相違を責められて、と宣べ斯う宣べ樣々に宣べさせ給ひしかども、不審猶晴るべしとも見えず。持て扱ひておはせしに、佛前に大地より涌現して虛空にのぼり給ふ。例せば暗夜に滿月の東山より出づるがごとし。七寶の塔大虛にかゝらせ給ひて、大地にもつかず大虛にも付かせ給はず。天中に懸りて、寶塔の中より梵音聲を出して證明して

本意なかりし―氣の毒なる意

首楞嚴經に云はく、

五逆罪人。聞ニ是首楞嚴三昧ヲ。發ニ阿耨菩提心ヲ。還得レ作レ佛。世尊漏盡阿羅漢。猶如ニ破器ノ。永不レ堪ニ忍受ニ是三昧ヲ等云云。

淨名經に云はく、

其施レ汝者不レ名ニ福田ト。供ニ養汝ヲ者墮ニ三惡道ニ等云云。

文の心は迦葉舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は必ず三惡道に墮つべしとなり。此等の聖僧は佛陀を除き奉りては、人天の眼目、一切衆生の導師とこそ思ひしに、幾許の人天大會の中にして、かう度々仰せられしは本意なかりし事なり。只詮ずるところは我が御弟子を責め殺さんとにや。此の外牛驢二乳、瓦器金器、螢火日光等の無量の譬を取つて二乘を呵嘖せさせ給ひき。一言二言ならず一日二日ならず一月二月ならず一年二年ならず一經二經ならず。四十餘年が間、無量無邊の經經に無量の大會の諸人に對して一言も許し給ふ事もなく謗り給ひしかば、世尊の不妄語なりと我も知る、人も知る、天も知る、地も知る。一人二人ならず、百千萬人、三界の諸天、龍神、阿脩羅、五天、四洲、六欲、色、無色、十方世界より雲集せる人天、二乘、大菩薩等皆これを知る。又皆これを

不レ能ニ復利一等云云。

文の心は貪瞋癡等の三毒は佛の種となるべし、殺父等の五逆罪は佛種となるべし、高原の陸土には青蓮華生ずべし。二乘は佛になるべからず。いふ心は、二乘の諸善と凡夫の惡と相對するに、凡夫の惡は佛になるとも二乘の善は佛にならじとなり。諸の小乘經には惡を戒め善を譽む。此の經には二乘の善を謗り凡夫の惡をほめたり。却つて佛經とも覺えず外道の法門のやうなれども、詮ずるところは二乘の永不成佛をつよく定めさせ給ふにや。方等陀羅尼經に云はく、

文殊語ニ舍利弗一。猶如ニ枯樹一更生レ華不。亦如ニ山水一還ニ本處一不。折石還合不。焦種生レ芽不。舍利弗言不也。文殊言若不レ可レ得。云何問ニ我得ニ菩提記一心生ニ歡喜一等云云。

文の心は枯れたる木、華さかず、山水、山にかへらず、破れたる石あはず、熬れる種生ひず。二乘またかくのごとし。佛種を熬れり等となん。大品般若經に云はく、

諸天子今未レ發ニ三菩提心一者。應ニ當發一。若入ニ聲聞正位一。是人不レ能レ發ニ三菩提心一。何以故爲ニ生死一作ニ障隔一故等云云。

文の心は、二乘の菩提心をおこさざれば我隨喜せじ、諸天は菩提心を起せば我隨喜せん。

三千の威儀—澤山の別ある態度のこと
見思—見惑と思惑
分々—一部分づつ少しのこと

申すは高き也。天高けれども孝よりも高からず。又孝とは厚也。地あつけれども孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家より出でたり。何に況んや佛法を學せん人、知恩報恩なかるべしや。佛弟子は必ず四恩を知つて知恩報恩を報ずべし。其の上舍利弗迦葉等の二乘は二百五十戒、三千の威儀持整して、味淨無漏の三靜慮、阿含經を極め三界の見思を盡せり。知恩報恩の人の手本なるべし。然るを不知恩の人なりと世尊定め給ひぬ。其の故は父母の家を出でて出家の身となるは必ず父母を救はんがためなり。二乘は自身は解脱と思へども利佗の行缺けぬ。設ひ分分の利佗ありといへども父母等を永不成佛の道に入るれば却りて不知恩の者となる。維摩經に云はく、

維摩詰又問文殊師利。何等爲如來種。答曰。一切塵勞之疇爲如來種。雖以五無間具。猶能發此大道意等云云。

又云はく。

譬如族姓之子高原陸土不生青蓮芙蓉衡華。卑溼汙田乃生此華等云云。

又云はく、

已得阿羅漢。爲應眞者。終不能復起道意而具佛法也。如根敗之士其於五樂

分身―本佛が身を分けて假にその姿を示したるもの

水輪―大水のこと

所詮―明にするところ

多寶佛證明を加へ分身舌を出す等は、舍利弗が未來の華光如來、迦葉が光明如來等の説をば、誰の人か疑網をなすべき。而れども爾前の諸經も又佛陀の實語なり。大方廣佛華嚴經に云はく、

如來智慧大藥王樹。唯於二二處一不レ能レ爲レ作二生長利益一。所謂二乘墮二於無爲廣大深坑一。及壞二善根一。非器衆生溺二大邪見貪愛之水一等云云。

此の經文の心は雪山に大樹あり、無盡根となづく。此を大藥王樹と號す。閻浮提の諸木の中の大王なり。此の木高さは十六萬八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木は此の木の根ざし枝葉華菓の次第に隨つて華菓成るなるべし。此の木をば佛の佛性に譬へたり。一切衆生をば一切の草木に譬ふ。但此の大樹は火坑と水輪の中に生長せず。二乘の心中をば火坑にたとへ、一闡提人の心中をば水輪にたとへたり。此の二類は永く佛になるべからずと申す經文なり。大集經に云はく、

有二二種人一。必死不レ活。畢竟不レ能下知レ恩報上レ恩。一者聲聞。二者緣覺。譬如下有レ人墮二墜深坑一。是人不レ能三自利利二佗一。聲聞緣覺亦復如レ是。墮二解脫坑一。不レ能二自利及以利一レ佗等云云。

外典三千餘卷の所詮に二つあり。所謂孝と忠となり。忠も又孝の家よりいでたり。孝と

山王―日吉山王にて比叡山の鎭守神

一大事因緣―佛が衆生を濟ふ爲に種々の因緣を結ばるゝこと

ほどに六宗八宗の田畠所領みな倒され正法失せ果てぬ。天照太神正八幡山王等諸の守護の諸大善神も法味を嘗めざるか、國中を去り給ふかの故に、惡鬼便を得て國すでに破れなんとす。此に予愚見を以て前四十餘年と後八年との相違を考へみるに、其の相違多しといへども先づ世間の學者もゆるし、我が身にもさもやとうち覺ゆる事は二乘作佛久遠實成なるべし。法華經の現文を拜見するに舍利弗は華光如來、迦葉は光明如來、須菩提は名相如來、迦旃延は閻浮那提金光如來、目連は多摩羅跋栴檀香佛、富樓那は法明如來、阿難は山海慧自在通王佛、羅睺羅は蹈七寶華如來、五百七百は普明如來、學無學二千人は寶相如來、摩訶波闍波提比丘尼、耶輸陀羅比丘尼等は一切衆生喜見如來、具足千萬光相如來等なり。此等の人々は法華經を拜見し奉るには尊きやうなれども、爾前の經經を披見の時は興さむる事ども多し。其の故は佛世尊は實語の人なり、故に聖人大人と號す。外典外道の中の賢人聖人天仙なんど申すは實語につけたる名なるべし。此等の人々に勝れて第一なる故に、世尊をば大人とは申すぞかし。此の大人、唯一大事因緣を以ての故に世に出現すとなのらせ給ひて、

未﹅顯﹅眞實世尊法﹅久後要﹅當﹅說﹅眞實正直捨方便﹅等云云。

超過の心—自宗が他に超えたりと思ふこと

初は檀那—初保護者たりし者といふこと

は權經權宗なり。善無畏三藏、金剛智三藏、天台の一念三千の義を盜みとりて自宗の肝心とし、其の上に印と眞言とを加へて超過の心を起す。其の子細を知らぬ學者等は、天竺より大日經に一念三千の法門ありけりとうち思ふ。華嚴宗は澄觀が時華嚴經の心如工畫師の文に天台の一念三千の法門を偸み入れたり。人これを知らず。日本我が朝には華嚴等の六宗天台眞言已前にわたりけり。華嚴三論法相諍論水火なりけり。傳教大師此の國に出でて六宗の邪見を破るのみならず、眞言宗が天台の法華經の理を盜み取りて自宗の極とする事あらはれ畢んぬ。傳教大師、宗宗の人師の異執をすてて專ら經文を前として責めさせ給ひしかば、六宗の高德八人十二人十四人三百餘人竝に弘法大師等責め落されて、日本國一人もなく天台宗に歸伏し、南都東寺日本一州の山寺、皆叡山の末寺となりぬ。又漢土の諸宗の元祖の天台に歸伏して謗法の失をまぬがれたる事も顯れぬ。又其の後やうやく世衰へ人の智淺くなるほどに、天台の深義は習ひ失ひぬ。佗宗の執心は強盛になるほどに、やうやく六宗七宗に天台宗落されて弱り行くかの故に、結句は六宗七宗等にも及ばず、言ふに甲斐なき禪宗淨土宗に落されて、始は檀那、やうやく彼の邪宗にうつる。結句は天台宗の碩德と仰がる人々みな落ちゆきて彼の邪宗をたすく。さる

陳隋—陳の代隋の代に生活せる人のこと

水火—水と火との關係といふこと、敵對のこと

或は俗に心をあはせ、儒道の內に釋敎を盜み入れたり。止觀の第五に云はく、

今世多有二惡魔比丘一。退レ戒還レ家。懼二畏駈策一。更越二濟道士一。復邀二名利一。誇二談莊老一。以二佛法義一。偸二安邪典一。押レ高就レ下。摧レ尊入レ卑。概令二平等一云云。

弘に云はく

作二比丘身一。破二滅佛法一。若退レ戒還レ家。如二衞元嵩等一。卽以二在家身一。破二壞佛法一。此人偸二竊正敎一。助二添邪典一。押二高等者一。以二道士心一。爲二二敎槪一。使二邪正等一。義無二是理一。曾入二佛法一。偸レ正助レ邪。押二八萬十二之高一。就二五千二篇之下一。用釋二彼典邪鄙之敎一。名二摧尊入卑一等云云。

此の釋を見るべし。次上の心なり。佛敎又かくのごとし。後漢の永平に漢土に佛法わたりて邪典やぶれて內典立つ。內典に南三北七の異執起りて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師に打ちやぶられて佛法二び群類を救ふ。其の後法相宗眞言宗天竺よりわたり、華嚴宗又出來せり。此等の宗宗の中に法相宗は一向天台宗に敵を成す宗法門、水火なり。しかれども玄奘三藏、慈恩大師、委細に天台の御釋を見ける程に、自宗の邪見翻るかの故に、自宗をばすてねども、其の心天台に歸伏すと見えたり。華嚴宗と眞言宗とは本

骨目—肝要點

一切有情悉有佛性—あらゆるところあるものには悉く佛たる本性あり

釋教—佛教といふに同じ

を梵天に付く。此の言赫々たり明々たり、晴天の日よりもあきらかに、夜中の滿月のごとし。仰いで信ぜよ伏して懐ふべし。但此の經に二箇の大事あり。倶舍宗成實宗律宗法相宗三論宗等は名をもしらず。華嚴宗と眞言宗との二宗は偸に盗んで自宗の骨目とせり。一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知りてしかも未だ拾ひ出さず。但我が天台智者のみこれを懐けり。一念三千は十界互具よりこと始れり。法相と三論とは八界を立て十界をしらず。況んや互具をしるべしや。倶舍成實律宗等は阿含經によれり。六界を明めて四界をしらず。十方唯有一佛。一方有佛だにもあかさず。一切有情悉有佛性とこそ説かざらめ、一人の佛性猶ゆるさず。而るを律宗成實宗等の十方有佛有佛性なんど申すは佛滅後の人師等の大乘の義を自宗に盗み入れたるなるべし。例せば外典外道等は、佛前の外道は執見あさし。佛後の外道は佛教を聞き見て自宗の非を知り、巧の心出現して佛教を盗み取り自宗に入れて邪見もつとも深し。附佛教、學佛法成等これなり。外典も又々かくのごとし。漢土に佛法いまだ渡らざつし時の儒家道家は、悠々として嬰兒のごとくはかなかりしが、後漢已後に釋教わたりて、對論の後、釋教やうやく流布する程に、釋教の僧侶破戒のゆゑに或は還俗して家にかへり、

三には大覺世尊はこれ一切衆生の大導師大眼目大橋梁大船師大福田等なり。外典外道の四聖三仙は其の名は聖なりといへども、實には三惑未斷の凡夫、其の名は賢なりといへども實に因果を辨へざる事嬰兒のごとし。彼を船として生死の大海をわたるべしや。彼を橋として六道の巷超えがたし。我が大師は變易猶わたり給へり、況んや分段の生死をや。元品の無明の根本、猶傾け給へり。況んや見思枝葉の麤惑をや。此の佛陀は三十成道より八十御入滅にいたるまで五十年が間一代の聖教を說き給へり。一字一句皆眞言なり。一文一偈妄語にあらず。外典外道の中の聖賢の言すらいふことあやまりなし。事と心と相符へり。況んや佛陀は無量曠劫よりの不妄語の人。されば一代五十餘年の說教は外典外道に對すれば大乘なり。大人の實語なるべし。初成道の始より泥洹の夕にいたるまで說くところの所說皆眞實也。但佛教に入りて五十餘年の經經八萬法藏を勘へたるに、小乘あり大乘あり權經あり實經あり、顯經密教、輭語麤語、實語妄語、正見邪見等の種種の差別あり。但法華經計り教主釋尊の正言也。三世十方の諸佛の眞言也。大覺世尊は四十餘年の年限を指して其の內の恆河の諸經を未顯眞實、八年の法華は要當說眞實と定め給ひしかば、多寶佛大地より出現して皆是眞實と證明す。分身の諸佛來集して長舌

泥洹―涅槃に同じ

恆河の―澤山無數の

有漏—迷のこと

禪定—心を靜める修行

五處—五體のこと、此等皆破羅門敎の苦行なり

有果、或は因中無果、或は因中亦有果亦無果等云云。これ外道の極理なり。所謂善き外道は五戒十善戒等を持ちて有漏の禪定を修し、上色無色をきはめ、上界を涅槃と立てて屈歩蟲のごとくせめのぼれども、非想天より返りて三惡道に墮つ。一人として天に留るものなし。而れども天を極むる者は永くかへらずと思へり。各々自師の義をうけて堅く執するゆゑに、或は冬寒に一日に三度恆河に浴し、或は髪をぬき、或は巖に身をなげ、或は身を火にあぶり、或は五處をやく。或は裸形、或は馬を多く殺せば福を得。或は草木をやき、或は一切の木を禮す。此等の邪義其の數をしらず。師を恭敬する事諸天の帝釋をうやまひ諸臣の皇帝を拜するがごとし。しかれども外道の法九十五種、善惡につけて一人も生死を離れず。善師につかへては二生三生等に惡道に墮ち、惡師につかへては順次生に惡道に墮つ。外道の所詮は內道に入る卽最要なり。或外道云はく、千年已後佛出世す等云云。或外道云はく、百年已後出世す等云云。大涅槃經に云はく、

一切世間外道經書。皆是佛說。非二外道說一等云云。

法華經に云はく、

示二衆有二三毒一。又現二邪見相一。我弟子如レ是方便度二衆生一等云云。

四韋陀—四吠陀とも書す、破羅門敎の四聖書
六師外道—破羅門敎の六派

天台云はく、

金光明經云。一切世間所有善論。皆因二此經一。若深識二世法一。卽是佛法等云云。

止觀に云はく、

我遣二三聖一。化二彼眞丹一等云云。

弘決に云はく、

淸淨法行經云。月光菩薩彼稱二顏回一。光淨菩薩彼稱二仲尼一。迦葉菩薩彼稱二老子一。天竺指二此震旦一爲二彼等云云。

二には月氏の外道が三目八臂の摩醯首羅天、毗紐天、此の二天をば一切衆生の慈父悲母又天尊主君と號す。迦毗羅、漚樓僧佉、勒娑婆此の三人をば三仙となづく。此等は佛前八百年已前已後の仙人なり。此の三仙の所說を四韋陀と號す、六萬藏あり。乃至佛出世に當つて六師外道の此の外經を習傳して五天竺の王の師となる。支流九十五六等にもなれり。一一に流流多くして、我慢の幢高きこと非想天にもすぎ、執心の心の堅きこと金石にも超えたり。其の見の深きこと巧なるさま儒家には似るべくもなし。或は過去二生三生乃至七生八萬劫を照見し、又兼ねて未來八萬劫を知る。其の所說の法門の極理或は因中

自然等云云。かくのごとく巧に立つといへども、いまだ過去未來を一分もしらず。玄也黑也幽也かるがゆゑに玄といふ。但現在計しれるに似たり。現在において仁義を制して身を守り國を安ず。此に相違すれば族をほろぼし家を亡す等いふ。此等の賢聖の人々は聖人なりといへども過去をしらざること、凡夫の背をみず、未來をかゞみざること、盲人の前をみざるがごとし。但現在に家を治め孝をいたし、堅く五常を行ずれば、傍輩も敬ひ名も國にきこえ賢王もこれを召して或は臣となし、或は師とたのみ或は位をゆづり天も來りて守りつかふ。所謂周の武王には五老きたりつかへ、後漢の光武には二十八宿來りて二十八將となりし此なり。而りといへども過去未來をしらざれば父母主君師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり。まことの賢聖にあらず。孔子が、此の土に賢聖なし、西方に佛圖といふ者あり、此れ聖人なりといひて、外典を佛法の初門となせしこれなり。禮樂等を敎へて內典わたらば戒定慧を知り易からせんがため、王臣を敎へて尊卑をさだめ父母を敎へて孝の高きをしらしめ師匠を敎へて歸依をしらしむ。妙樂大師云はく、

佛敎流化實賴於玆。禮樂前馳眞道後啓等云云。

開目鈔上

頭身橋梁—尚びたよるところ

三史—史記、前漢書、後漢書

夫一切衆生の尊敬すべき者三つあり所謂主師親これなり。又習學すべき物三つあり所謂儒外内これなり。儒家には三皇五帝三王此等を天尊と號す。諸臣の頭身萬民の橋梁なり。三皇已前は父をしらず人皆禽獸に同ず。五帝已後は父母を辨へて孝をいたす。所謂重華は頑しき父をうやまひ、沛公は帝となつて大公を拜す。武王は西伯を木像に造り丁蘭は母の形を彫刻めり。此等は孝の手本也。比干は殷の世のほろぶべきを見て、强ひて帝をいさめ頭をはねらる。公胤といひし者は懿公の肝を取つて我が腹をさき肝を入れて死しぬ。此等は忠の手本也。尹壽は堯王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、老子は孔子の師なり。此等を四聖と號す。天尊頭をかたぶけ萬民掌をあはす。此等の聖人に三墳五典三史等の三千餘卷の書あり。其の所詮は三玄をいでず。三玄とは一には有の玄、周公等此を立つ。二には無の玄、老子等。三には亦有亦無等、莊子が玄これなり。玄とは黑也。父母未生已前をたづぬれば或は元氣より生り或は貴賤苦樂是非得失等は皆

文永三年丙寅正月六日於て清澄寺に未時書畢しぬ

二人の太子―淨藏淨眼

闇―明にすと訓む

號を一日に六萬遍十萬遍なんど唱ふるは、佛の名號なれば、たくみなるには似たれども、不成佛不往生の經によれるが故に徒に佗の寶を數ふるが如し。是偏に惡知識に誑されたる也。されば日本國の一切の女人の敵は、虎狼よりも山賊海賊よりも、父母の敵よりも、法華經を敎へずして念佛を敎ふる人々こそ、一切の女人のかたきなれ。南無妙法蓮華經と一日に六萬十萬千萬等も唱へて後に暇あらば、時々は彌陀等の諸佛の名號をも口ずさみなるやうに申し給はんこそ、法華經を信ずる女人にてはあるべきに、當世の女人は、一期の間彌陀の名號をば、しきりに唱へ、念佛の佛事をば暇なく行ひ、法華經をば、つや〳〵唱へず供養せず。或はわづかに法華經を持經者に讀ますれども、念佛者をば父母兄弟なんどのやうに思ひなし、持經者をば所從眷屬よりも輕く思へり。かくしてしかも、法華經を信ずるよしを名告る也。抑淨德夫人は二人の太子の出家をゆるして法華經を弘めさせ、龍女は我闡大乘敎度脫苦衆生とこそ誓ひしが、全く佗經計りを行じて此の經を行ぜじとは誓はず。今の女人は偏に佗經を行じて法華經を行ずる方をしらず。とくとく心をひるがへすべし、心をひるがへすべし。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

日蓮花押

佗經但記ㇾ男不ㇾ記ㇾ女。今經皆記等云云。

釋迦如來、多寶佛十方諸佛の御前にして、摩竭提國王舍城の艮、靈鷲山と申す所にて八箇年の間說き給ひし法華經を、智者大師目のあたり聞しめしけるに、我五十年の一代聖敎を說き置く事は、皆衆生利益のためなり。但し其の中に四十二年の經經には、女人佛になるべからずと說き、今法華經にして、女人の成佛を說くと名告らせ給ひしを、佛滅後一千五百餘年に當りて、靈鷲山より東北十萬八千里の山海をへだてて、摩訶尸那と申す國あり。震旦國是也。此の國に佛の御使として出世し給ひ、天台智者大師と名告りて女人は法華經を離れて佛になるべからずと定めさせ給ひぬ。尸那國より三千里をへだてて東方に國あり、日本國となづけたり。漢土の天台大師御入滅二百餘年と申せしに、此の國に生れて傳敎大師となのらせ給ひて、秀句と申す書を造り給ひしに、能化所化俱無歷劫妙法經力卽身成佛と、龍女が成佛を定め置き給へり。而るに當世の女人は、卽身成佛こそかたからめ、往生極樂は法華を憑まば疑なし。譬へば江河の大海に入るよりもたやすく、雨の空より落つるよりも早くあるべき事也。而るに日本國の一切の女人は、南無妙法蓮華經とは唱へずして、女人の往生成佛をとげざる雙觀等經によりて、彌陀の名

道場開悟—說法の場にて直に悟を開きしこと智者大師の前身を指す

一字を持ちぬれば、いれる佛種も還りて生ずるが如し。天台云はく、

闡提有心。猶可作佛。二乘滅智。心不可生。法華能治。復稱爲妙云云。

妙樂云はく、

但名大不名妙者。一有心易治。無心難治。難治能治。所以稱妙等云云。

此等の文の心は、大方廣佛華嚴經、大集經、大般若經、大涅槃經等は、題目に大の字のみありて妙の字なし。但生者を治して死せる者をば治せず。法華經は死せる者をも治す。故に妙と云ふ釋也。されば諸華にしては、佛になるべき者も佛にならず。法華は佛になりがたき者すら尙佛になりぬ、佛になりやすき者は云ふにや及ぶと云ふ道理立ちぬれば、法華經を說かれて後は諸經に趣く人一人もあるべからず。而るに正像二千年すぎて末法に入りて、當世の衆生の成佛往生の遂げがたき事は、在世の二乘闡提等にも百千萬億倍すぎたる衆生の、觀經等の四十餘年の經經に値ひて生死を離れんと思ふはいかゞ。はかなし、はかなし。女人は在世正像末總じて一切の諸佛の一切經の中に、法華經をはなれて佛になるべからざる事を、靈山の聽衆として、道場開悟し給へる天台智者大師定めて云はく、

轉輪王、梵天王、帝釋天、魔王及び佛となるを得ざること

三從—嫁せざれば父に從ひ、嫁すれば夫に從ひ、夫死すれば子に從ふ

初成道—華嚴經をさす

雙林最後—涅槃經をさす

色女經には、三世の諸佛の眼は大地に落つとも、女人は佛になるべからずと說かれ、大論には、淸風は執ると云へども、女人の心は執りがたしと云へり。此の如く諸經に嫌はれたりし女人を、文殊師利菩薩の經の一字を說き給ひしかば、忽に佛になりき。あまりに不審なりし故に、寶淨世界の多寶佛の第一の弟子智積菩薩、釋迦如來の御弟子の智慧第一の舍利弗尊者、四十餘年の大小乘經の意をもつて、龍女の佛になるまじき由を難ぜしかども、終に叶はずして佛になりにき。初成道の能斷佛種子も、雙林最後の一切江河必有囘曲の文も破れぬ。銀色女經、竝に大論の龜鏡も空しくなりぬ。又智積舍利弗は舌を卷き口を閉ぢ、人天大會は歡喜のあまりに掌を合せたりき。是偏に妙の一字の德也。此の南閻浮提の內に二千五百の河あり、一一に皆まがれり。南閻浮提の女人心のまがれるが如し。但し娑婆耶と申す河あり。繩を引き延えたるが如くして直に西海に入る。法華經を信ずる女人も亦復是の如く直に西方淨土へ入るべし。是妙の一字の德也。妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すはよみがへる義也。譬へば黃鵠の子死せるに、鶴の母、子安となけば、死せる子還て活り、鴆鳥水に入れば魚蚌悉く死す。犀の角これにふるれば、死せる者皆よみがへるが如く、爾前の經經にて佛種をいりて死せる二乘闡提女人等、妙の

五障―女にある五つのさはり、

大華嚴經の文に、能斷佛種子と說かれて候ふは、女人は佛になるべき種子を焦れり。譬へば大旱魃の時、虛空の中に大雲起り大雨を大地に下すに、かれたるが如くなる無量無邊の草木花さき菓なる。然りと雖ども焦りたる種は生ひずして結句雨しげければ、朽ち失するが如し。佛は大雲の如く說敎は大雨の如く、かれたるが如くなる草木を一切衆生に譬へたり。佛敎の雨に潤ひて五戒十善禪定等の功德を得るは、花さき菓なるが如し。雨ふれどもいりたる種の生ひずして、かへりて朽失するは、女人の佛敎に遇へども、生死をはなれずして、かへりて佛法を失ひ惡道に墮つるに譬ふ。是を能斷佛種子とは申す也。涅槃經の文に、一切の江河のまがれるが如く、女人も又まがれりと說かれたるは、水は輭かなる物なれば、石山なんどの硬き物にさへられて、水の先ひるむ故にかしこゝへ行く也。女人も亦是の如く女人の心をば水に譬へたり。心よわくして水の如く也。道理と思ふ事も男のこはき心に値ひぬれば、塞かれてよしなき方へ趣く。又水に畫くに、とゞまらざるが如し。女人は不信を體とする故に、只今さあるべしと見る事も、又しばらくあれば、あらぬさまになるなり。佛と申すは正直を本とす。故にまがれる女人は佛になるべきにあらず。五障三從と申して、五つのさはり、三つしたがふ事あり。されば、銀

劫石—四十里四方の石を三年に一度磨して、その石のすれ盡す間の時を劫といふ、その石のこと

三皇—伏羲、神農、黄帝、

五帝—小昊、顓頊、高辛、唐、虞

三墳五典—三皇五帝の書

等も、皆御覽ありき。三千大千世界十方法界の衆生界も皆聞きし也。されば大地微塵劫はすぐとも、無間大城を出づべからず。劫石は磷ぐとも阿鼻大城の苦はつきじとこそ思ひ合ひたりしに、法華經の提婆品にして、教主釋尊の昔の師天王如來と記し給ふ事こそ、不思議には覺ゆれ。爾前の經經實ならば、法華經は大妄語、法華經實ならば爾前の諸經は大虛誑罪也。提婆が三逆罪を具に犯して、其の外無量の重罪を作りしも天王如來となる。況や二逆一逆等の諸の惡人の得道疑なき事、譬へば大地をかへすに草木等のかへるが如く、堅石をわる者輭草をわるが如し。故に此の經をば妙と云ふ也。女人をば内外典に是をそしり、三皇五帝の三墳五典にも諂曲者と定む。されば災は三女より起ると云へり。國の亡び人の損ずる源は女人を本とす。内典の中には、初成道の大法たる華嚴經には、

　女人地獄使能斷佛種子。外面似菩薩。内心如夜叉。

雙林最後の大涅槃經には。

　一切江河必有回曲。一切女人必有諂曲。

又云はく、

　所有三千界男子諸煩惱合集。爲一人女人業障等云云。

五法―欲、精進、念、巧慧、一心のよき行

風輪ある大地―強き風を以てささへられたる土地

六欲四禪―以下皆天上界の名

教主釋尊には從子、南閻浮提にかろからざる人也。須陀比丘を師として出家し、阿難尊者に十八變を習ひ、外道の六萬藏、佛の八萬藏を胸にうかべ、五法を行じて殆ど佛よりも貴きけしきなり。兩頭を立てて、破僧罪を犯さんがために、象頭山に戒壇を築き、佛弟子を招き取り、阿闍世太子をかたらひて云はく、我は佛を殺して新佛となるべし。太子は父の王を殺して新王となり給へ。阿闍世太子既に父の王を殺ししかば、提婆達多又佛をうかゞひ、大石をもつて佛の御身より血を出し、阿羅漢たる華色比丘尼を打殺し、五逆の内たる三逆を具に作る。其の上瞿伽梨尊者を弟子とし、阿闍世王を檀那にたのみ、五天竺十六の大國五百の中國等の、一逆二逆三逆等をつくる者は皆提婆が一類にあらざる事なし。譬へば大海の諸河を集め、大山の草木を聚むるが如し。智慧ある者は舍利弗に集り、神通ある者は目連に從ひ、惡人は提婆にかたらひし也。されば厚さ十六萬八千由旬、其の下に金剛の風輪ある大地すでにわれて、生身に無間大城に墮ちにき。第一の弟子瞿伽梨も又生身に地獄に入る。旃遮婆羅門女も墮ちにき。波瑠璃王もおちぬ。善星比丘もおちぬ。此等の人々の生身に墮ちしをば五天竺十六の大國五百の中國十千の小國の人々も皆これをみる。六欲、四禪、色、無色、梵王、帝釋、第六天の魔王も、閻魔法王

十四字—法華經の文字の數

大藥師—立派なる醫師

法定性の二乘—小乘のものと定りて移らぬもの

一の妙あり。總じて六萬九千三百八十四の妙あり。妙とは天竺には薩と云ひ漢土には妙と云ふ。妙とは具の義也。具とは圓滿の義也。法華經の一一の文字、一字一字に餘の六萬九千三百八十四字を納めたり。譬へば大海の一滴の水に一切の河の水を納め、一の如意寶珠の芥子計なるが、一切の如意寶珠の財を雨らすが如し。譬へば秋冬枯れたる草木の、春夏の日に値ひて枝葉華菓出來するが如し。爾前の秋冬の草木の如くなる九界の衆生、法華經の妙の一字の春夏の日輪にあひたてまつりて、菩提心の華さき成佛の菓なる。

龍樹菩薩の大論に云はく、

譬如大藥師能以毒爲藥云云。

此の文は大論に法華經の妙の德を釋する文也。妙樂大師の釋に云はく、

難治能治。所以稱妙等云云。

總じて成佛往生のなりがたき者四人あり。第一には決定性の二乘、第二には一闡提人、第三には空心の者、第四には謗法の者也。此等を法華經において佛になさせ給ふ故に、法華經を妙とは云ふ也。提婆達多は斛飯王の第一の太子、淨飯王には甥、阿難尊者の兄、

一闡提―梵語、不信者のこと

六萬九千三百八

佛說き給ひたりしかども、彼の經を開く鑰をば、佛彼の經に說き給はず。阿含方等般若觀經等の四十餘年の經經も、佛說き給ひたりしかども、彼の經經の意をば開き給はず、門を閉ぢて置かせ給ひたりしかば、人彼の經經を悟る者一人もなかりき。たとひさとれりと思ひしも僻見にてありし也。而るに佛法華經を說かせ給ひて、諸經の藏を開かせ給ひき。此の時に四十餘年の九界の衆生始めて諸經の藏の內の財をば見しりたりし也。譬へば大地の上に人畜草木等あれども、日月の光なければ眼ある人も、人畜草木の色形をしらず。日月出で給ひてこそ、始めてこれをば知る事なれ。爾前の諸經は長夜の闇の如く、法華經の本迹二門は日月の如し。諸の菩薩の二目ある、二乘の眇目なる、凡夫の盲目なる、闡提の生盲なる、共に爾前の經經にては色形をわきまへず。中程に法華經の時、迹門の月輪始めて出給ひし時、菩薩の兩眼先にさとり、二乘の經目次にさとり、凡夫の盲目次に開き、生盲の一闡提も未來に眼の開べき緣を結ぶ事、是偏に妙の一字の德也。迹門十四品の一妙、本門十四品の一妙、合せて二妙。迹門の十妙、本門の十妙、合せて二十妙。迹門の三十妙本門の三十妙、合せて六十妙。迹門の四十妙、本門の四十妙、觀心の四十妙、合せて百二十重の妙なり。六萬九千三百八十四字、一一の字の下に

八萬法藏―八萬四千種にも別るべき敎法、實は無量數を意味す

の七佛千佛遠々劫の諸佛の所說、現在十方の諸佛の諸經も、皆法華經の經の一字の眷屬也。されば藥王品に佛、宿王華菩薩に對して云はく、

譬如一切川流江河諸水之中海爲第一。衆山之中須彌山爲第一。衆星之中月天子最爲第一等云云。

妙樂大師の釋に云はく、

已今當說最爲第一等云云。

此の經の一字の中に十方法界の一切經を納めたり。譬へば如意寶珠の一切の財を納め、虛空の萬象を含めるが如し。經の一字は一代に勝る故に、妙法蓮華の四字も又八萬寶藏に超過するなり。妙とは、法華經に云はく、

開方便門示眞實相云云。

章安大師の釋に云はく、

發祕密之奧藏稱之爲妙云云。

妙樂大師此の文を受けて云はく、發とは開也等云々。妙と申す事は開と云ふ事也。世間に財を積める藏に鑰なければ開く事かたし。開ざれば藏の內の財を見ず。華嚴經は

阿羅漢—小乘のさとりを開きしもの

十三世界微塵數—十三の世界を微塵に碎きたるほどの非常の數

ひて、五十餘季の間、八萬聖教を說き置かせ給ひき。佛は人壽百歲の時、壬申の歲二月十五日の夜半に御入滅あり。其の後四月八日より七月十五日に至るまで、一夏九旬の間、一千人の阿羅漢、結集堂にあつまりて、一切經を書きおかせ給ひき。其の後正法一千年の間は、五天竺に一切經弘まらせ給ひしかども、震旦國には渡らず。像法に入りて一十五年と申せしに、後漢の孝明皇帝永平十年丁卯の歲、佛經始めて渡りて、唐の玄宗皇帝開元十八年庚午の歲に至るまで、渡れる譯者一百七十六人、持來る經律論一千七十六部、五千四十八卷、四百八十帙、是皆法華經の經の一字の眷屬の修多羅なり。先づ妙法蓮華經の以前四十餘年の間の經の中に、大方廣佛華嚴經と申す經まします。龍宮城には三本あり。上本は十三世界微塵數の品、中本は四十九萬八千八百偈一千二百品、下本は十萬偈四十八品。此の三本の外に、震旦日本には僅に八十卷六十卷四十卷等あり。阿含小乘經方等般若の諸大乘經等、大日經は梵本には阿嚩羅訶佉[illegible]の五字計りをもて、三千五百の偈をむすべり。況や餘の諸尊の種子、尊形、三摩耶、其の數をしらず。而るに漢土には但纔に六卷七卷なり。涅槃經は雙林最後の說、漢土には但四十卷なり。是も梵本これ多し。此等の諸經は皆釋迦如來の所說の法華經の眷屬の修多羅なり。此の外過去

有情―こゝろあるもの
非情―こゝろなきもの、草木石の如し
依報―人畜等の生活し居るところ

答へて云はく、妙法華經の第八に云はく、

受￮持法華名￮者。福不￮可￮量。

正法華經に云はく、

若聞￮此經￮宣￮持名號￮。德不￮可￮量。

添品法華經に云はく、

受￮持法華名￮者。福不￮可￮量等云云。

此等の文は題目計りを唱ふる福計るべからずと見えぬ。一部八巻二十八品を受持讀誦し隨喜護持するは廣なり。方便品壽量品等を受持し等するは略なり。但一四句偈乃至題目計りを唱ふる者を護持するは要なり。廣略要の中には、要が中の要なり。

問うて云はく、妙法蓮華經の五字にはいくばくの功德を納めたるや。

答へて云はく、大海は衆流を納め、大地は有情非情を持ち、如意寶珠は萬寶を雨し、梵王は三界を領す。妙法蓮華經の五字も亦復是の如し。一切の九界の衆生竝に佛界を納めたり。十界を納むれば亦十界の依報の國土を收む。先づ妙法蓮華經の五字に一切の法を納むる事をいはゞ、經の一字は諸經の中の王なり。一切の群經を納む。佛世に出でさせ給

摩訶—大といふ梵語
邊土—國はづれ、田舍

法華經の御名を聞く事はおぼろげにも難有き事なり。されば須扇多佛、多寶佛は、世に出でさせ給ひたりしかども、法華經の御名をだにも說き給はず。釋迦如來は法華經のために世に出でさせ給ひたりしかども、四十餘年の間は名をも語り出し給はず。佛の御年七十二と申せし時、始めて妙法蓮華經と唱へ出させ給ひたり。然りと雖も摩訶尸那、日本の邊土の者、御名をも聞かざりき。佛滅後一千餘年を過ぎて三百五十餘年に及んでこそ、纔に御名計りをば聞きたりしか。されば、この經に値ひたてまつる事をば、三千年に一度華さく優曇華、無量無邊劫に一度値ふなる一眼の龜にもたとへたり。大地の上に針を立てて大梵天王宮より芥子をなぐるに、針のさきに芥子の貫かれたるよりも、法華經の題目に値ひ奉る事かたし。此の須彌山に針を立てて彼の須彌山より大風のつよく吹かん日、絲をわたさんに、針の穴にいたりて絲のさきの入りたらんよりも、法華經の題目に値ひ奉る事かたし。さればこの經の題目をとなへさせ給はん人は思召すべし、生盲の始めて眼あきて父母等をみんよりもうれしく、強き敵に捕られたる者の、ゆるされて妻子を見るよりも珍しとおぼすべし。

問うて云はく、題目計りを唱ふる證文これありや。

伊蘭—極めて惡臭ある樹

かるべき等云々。此の人々は經文の如くならば阿鼻大城をまぬかれがたし。されば、させる解なくとも、南無妙法蓮華經と唱ふるならば、惡道をまぬかるべし。譬へば蓮華は日に隨つて回る、蓮に心なし。芭蕉は雷によりて增長す、是の草に耳なし。我等は蓮華と芭蕉との如く、法華經の題目は日輪と雷との如し。犀の生角を身に帶して水に入りぬれば、水五尺身に近づかず。栴檀の一葉開きぬれば、四十由旬の伊蘭變ず。我等が惡業は伊蘭と水との如く、法華經の題目は犀の生角と栴檀の一葉との如し。金剛は堅固にして一切の物に破られざれども、羊の角と龜の甲に破らる。尼倶類樹は大鳥にも枝をれざれども、蚊の睫に巢をくふ鷦鷯鳥に枝折れぬ。我等が惡業は金剛の如く、尼倶類樹の如し。法華經の題目は羊の角の如く、せうれう鳥の如し。琥珀は塵をとり、磁石は鐵をすふ。我等が惡業は塵と鐵との如く、法華經の題目は琥珀と磁石との如し。かく思ひて常に南無妙法蓮華經と唱ふべし。法華經の第一の卷に云はく、

無量無數劫聞二是法一亦難等云云。

第五の卷に云はく。

是法華經。於二無量國中一。乃至名字不レ可レ得レ聞等云云。

五十二位—佛の位に上る五十二階級、十信、十住、十行、十廻向、十地等覺、妙覺(佛)

十八變—十八種の神變不思議

授記—豫言を授かること

何に況や法華經の題目は、八萬聖教の肝心、一切諸佛の眼目なり。汝等これを唱へて惡趣をはなるべからずと疑ふか。正直捨方便の法華經には、信を以て入ることを得と云ひ、雙林最後の涅槃經には、

是菩提因。雖復無量。若說信心則已攝盡等云云。

夫佛道に入る根本は信をもて本とす。五十二位の中には十信を本とす。十信の位には信心初なり。たとひ、悟なけれども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。たとひ、さとりあれども信心なき者は、誹謗闡提の者也。善星比丘は二百五十戒を持て四禪定を得、十二部經を諳にせし者也。提婆達多は六萬八萬の寶藏を覺え、十八變を現ぜしかども、此等は有解無信の者なり。今に阿鼻大城にありと聞く。又鈍根第一の須梨槃特は、智慧もなく悟もなし。只一念の信ありて普明如來と成り給ふ。又迦葉舍利弗等は無解有信の者なり。佛に授記を蒙りて華光如來光明如來といはれき。佛說いて云はく、

生疑不信者即當墮惡道等云云。

此等は有解無信の者を皆惡道に墮すべしと說き給ひしなり。而るに今の代の世間の學者の云はく、只信心計りにて解心なく、南無妙法蓮華經と唱ふる計りにて爭か惡趣をまぬ

四惡趣—地獄、餓鬼、畜生、阿修羅の四惡界

四諦—苦、集、滅、道とて覺を得る四つの心得

三歸—佛と法と僧とに歸依すといふこと

法華題目鈔

根本大師門人 日蓮 撰

南無妙法蓮華經

問うて云はく、法華經の意をも知らず、義理をも味はゝずして、只南無妙法蓮華經と計り五字七字に限りて、一日に一遍一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なんど唱へても、輕重の惡に引かれずして、四惡趣におもむかず、つひに不退の位にいたるべしや。

答へて云はく、しかるべきなり。

問うて云はく、火々といへども手にとらざればやけず。水々といへども口にのまざれば水のほしさもやまず。只南無妙法蓮華經と題目計りを唱ふとも、義趣をさとらずば惡趣をまぬかれん事いかゞあるべかるらん。

答へて云はく、師子の筋を琴の絃として、一度奏すれば餘の絃悉くきれ、梅子の酢き聲をきけば、口に唾たまり潤ふ。世間の不思議すら是の如し。況や法華經の不思議をや。小乘の四諦の名計りをさやづる鸚鵡なほ天に生ず。三歸計りを持つ人大魚の難をまぬかる。

るを知らざりきといふ

髻の中の明珠―髻を小乘の人、珠を法華大乘に譬ふ、髻珠ともいふ

寂光の都―佛のさとりによりてこの世を淨土と見たる名

りながら、爭か一分の疑心を殘して、「決定無有疑」の佛にならざらんや。過去遠々の苦は徒らにのみこそ受來しか。などか暫く不變常住の妙因を植ゑざらん。未來永々の樂は、かつ〲心を養ふとも、強ひてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからず。「三界無安猶如火宅」は如來の敎、「所以諸法如幻如化」は菩薩の詞也。寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし。本覺の栖を離れて何事か樂なるべき。願くは現世安穩後生善處の妙法を持つのみこそ、只今生の名聞、後世の弄引なるべけれ。須く心を一にして、南無妙法蓮華經と、我も唱へ佗をも勸めんのみこそ、今生人界の思出なるべき。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

日蓮　花押

空也上人―天台宗の高僧、空也念佛の開祖、天祿三年七十にて寂す

卞和があら玉―楚人卞和、荊山より璞を得、人その中に明玉あ

へぬ世の中のためしなれば、法華經には「世皆不牢固如水沫泡焰」とすゝめたり。「以何令衆生得入無上道」の御心のそこ、順緣逆緣の御言葉、已に本懷なれば、暫も持つ者も又本意に叶ひぬ。又本意に叶はゞ佛の恩を報ずる也。悲母深重の經文、心安ければ、唯我一人の御苦も僅々やすみ給ふらん。釋迦一佛の悅び給ふのみならず、諸佛出世の本懷なれば、十方三世の諸佛も悅び給ふべし、「我卽歡喜諸佛亦然」と說かれたれば、佛悅び給ふのみならず、神も卽ち隨喜し給ふなるべし。傳敎大師是を講じ給ひしかば、八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人是を讀み給ひしかば、松尾の大明神は寒風をふせがせ給ふ。されば七難卽滅七福卽生と祈らんにも、此の御經第一也。現世安穩と見えたれば也。佗國侵逼の難、自界叛逆の難の御祈禱にも、此の妙典に過ぎたるはなし。「令百由旬內無諸衰患」と說かれたれば也。然るに當世の御祈禱は逆樣なり。先代流布の權敎也。末代流布の最上眞實の祕法にあらざる也。譬へば去年の曆を用ひ、烏を鵜につかはんが如し。是偏に權敎の邪師を貴んで未だ實敎の明師に値せ給はざる故也。惜哉、文武の卞和があら玉、何くにか納めけん。嬉哉、釋尊出世の髻の中の明珠、今度我が身に得たる事よ。十方諸佛の證誠として忽ならず。さこそは「一切世間多怨難信」と知

悲願—佛の衆生をあはれみて立て給ひし衆生濟度の願

著—心をかたく附くること

さこそ—これほど

ものうからざるべき—怠らざるべき

おきてられ—指導せられ

三笠の雲—人の身の上とながむること

念」の悲願を忘れ、何なる月日ありてか、「無一不成佛」の御經を持たざらん。昨日が今日になり、去年の今年となる事も、是期する處の餘命にはあらざるをや。總て過ぎにし方をかぞへて年の積るをば知るといへども、今行末において一日片時も誰か命の數に入るべき。臨終已に今にありとは知りながら、我慢偏執名聞利養に著して、妙法を唱へ奉らざらん事は、志の程無下にかひなし。さこそは「皆成佛道」の御法とは云ひながら、此の人爭でか佛道にものうからざるべき。色なき人の袖にはそゞろに月のやどる事かは。又命已に一念にすぎざれば、佛は一念隨喜の功德と說き給へり。若是二念三念を期すと云はゞ、平等大慧の本誓、頓教一乘皆成佛の法とは云はるべからず。流布の時は末世法滅に及び、機は五逆謗法をも納めたり。故に頓證菩提の心におきてられて、狐疑執著の邪見に身を任する事なかれ。生涯幾くならず、思へば一夜のかりの宿を忘れて、幾くの名利をか得ん。又得たりとも是夢の中の榮、珍しからぬ樂也。只先世の業因に任せて營むべし。世間の無常をさとらん事は、眼に遮り耳にみてり。雲とやなり雨とやなりけん、昔の人は只名をのみきく。露とや消え煙とや登りけん、今の友も又見えず。我いつまでか三笠の雲と思ふべき。春の花の風に隨ひ、秋の紅葉の時雨に染むる。是皆ながら

ふに、一切の草木は地より出生せり。是を以て思ふに、一切の佛法も又人によりて弘まるべし。之によつて天台は佛世すら猶人を以て法を顯はす、末代いづくんぞ、法は貴けれども人は賤しと云はんやとこそ釋して御坐候へ。されば持たるゝ法だに第一ならば、持つ人隨て第一なるべし。然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀る也。其の子を賤むるは卽ち其の親を賤しむ也。爰に知りぬ、當世の人は詞と心と總てあはず。孝經を以て其の親を打つが如し。豈に冥の照覽恥しからざらんや。地獄の苦恐るべし恐るべし、愼むべし愼むべし。上根に望めても卑下すべからず、下根を捨てざるは本懷也。下根に望めても憍慢ならざれ、上根も漏るゝ事あり、心をいたさざるが故に。凡そ其の里ゆかしけれども、道たえ緣なきには通ふ心も疎に、其の人戀しけれども憑めず契らぬには待つ思も等閑なるやうに、彼の月卿雲客に勝れたる靈山淨土の行、やすきにも未だゆかず、「我卽是父」の柔輭の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず。是誠に袂を腐し、胸をこがす歎ならざらんや。暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも、心をもよほす思也。事にふれ折に付けても後世を心にかけ、花の春雪の朝も是を思ひ、風戰ぎ村雲まよふ夕にも忘るゝ隙なかれ。出づる息は入る息をまたず、何なる時節ありてか「毎自作是

冥の照覽―神佛の目に見えぬ所より御覽あること

望めて―比べ見てといふこと

我卽是父―我は卽ちこれ父と、衆生に向ひて佛いふの語

恆沙—恆河の沙ほどに數多きに云ふ

冥きより冥き—この世の心迷より來世は惡道に入ること

正直捨方便—法華經は佛の正意を打ち出したるものにて假の方便を說けるにあらずとの句

譬を取るに物なし。佛の神變にても何ぞ是を說盡さん。菩薩の智力にても爭か是を量るべき。されば譬諭品に云はく、

若說其罪。窮劫不盡。

と云へり。文の心は、法華經を一度もそむける人の罪をば、劫を窮むとも說盡し難しと見えたり。然る間、三世の諸佛の化導にももれ、恆沙の如來の法門にも捨てられ、冥きより冥きに入りて、阿鼻大城の苦患爭か免れん。誰か心あらん人、長劫の悲を恐れざらんや。爰を以て經に云はく、

見有讀誦書持經者。輕賤憎嫉而懷結恨。其人命終入阿鼻獄云云。

文の心は法華經をよみたもたん者を見て、輕しめ、いやしみ、にくみ、そねみ、うらみを結ばん其の人は、命終りて阿鼻大城に入らんと云へり。大聖の金言誰か是を恐れざらんや。「正直捨方便」の明文豈に是を疑ふべきや。然るに人皆經文に背き、世悉く法理に迷へり。汝何ぞ惡友の敎に隨はんや。されば邪師の法を信じ受くる者を名けて毒を飮む者也と天台は釋し給へり。汝能く是を愼むべし是を愼むべし。倩〻世間を見るに法をば貴しと申せども、其の人をば萬人是を惡む。汝能く〳〵法の源に迷へり。何にと云

因身の肉團―凡夫の肉體
果滿―さとりの完全なること
有爲―迷のもの
無爲―さとり
顯本遠壽―今の釋尊は實は本來佛にてありし方にて覺られし已來無量の劫なりとの說
諸乘―諸敎といふに同じ

乘をこそ信ずべけれ。持つ處の御經の諸經に勝れてましませば、能く持つ人も亦諸人にまされり。爰を以て經に云はく、

能持二是經一者。於二一切衆生中一亦爲第一。

と說き給へり。大聖の金言疑なし。然るに人此の理をしらず見ずして、名聞狐疑偏執を致せるは墮獄の基也。只願はくは經を持ち、名を十方の佛陀の願海に流し、譽を三世の菩薩の慈天に施すべし。然らば法華經を持ち奉る人は、天龍八部諸大菩薩を以て我が眷屬とする者也。しかのみならず、因身の肉團に果滿の佛眼を備へ、有爲の凡膚に無爲の聖衣を著けぬれば、三途に恐なく、八難に憚なし。七方便の山の頂に登りて九法界の雲を拂ひ、無垢地の園に花開け、法性の空に月明かならん。「是人於佛道決定無有疑」の文憑あり。「唯我一人能爲救護」の說疑なし。一念信解の功德は五波羅蜜の行に越え、五十展轉の隨喜は八十年の布施に勝れたり。頓證菩提の敎は遙に群典に秀で、顯本遠壽の說は永く諸乘に絕えたり。爰を以て八歲の龍女は大海より來りて經力を刹那に示し、本化の上行は大地より涌出して佛壽を久遠に顯す。言語道斷の經王、心行所滅の妙法也。然るに此の理を忽諸にして、餘經に等しむるは、謗法の至、大罪の至極也。

墮在泥梨―泥梨は地獄、地獄に墮つること

答へて云はく、利智精進にして觀法修行するのみ法華の機ぞと云ひて、無智の人を妨ぐるは、當世の學者の所行也。是還つて愚癡邪見の至也。一切衆生皆成佛道の敎なれば、上根上機は觀念觀法も然るべし、下根下機は唯信心肝要也。されば經には、

淨心信敬不生疑惑者。不墮地獄餓鬼畜生。生十方佛前。

と說き給へり。いかにも信じて次の生の佛前を期すべき也。譬へば高き岸の下に人ありて登る事あたはざらんに、又岸の上に人ありて繩をおろして、此の繩に取附かば、我岸の上に引登さんと云はんに、引人の力を疑ひ、繩の弱からん事をあやぶみて、手を納めて是を取らざらんが如し。爭か岸の上に登る事をうべき。若其の詞に隨ひて手をのべ是をとらへば、卽ち登る事をうべし、「唯我一人能爲救護」の佛の御力を疑ひ、「以信得入」の法華經の敎の繩をあやぶみて、「決定無有疑」の妙法を唱へ奉らざらんは、力及ばず、菩提の岸に登る事難かるべし。不信の者は墮在泥梨の根元也。されば經には、

生疑不信者。則當墮惡道。

と說かれたり。受けがたき人身をうけ、値ひがたき佛法にあひて爭か虛くて候ふべきぞ。同じく信を取るならば、又大小權實のある中に、諸佛出世の本意、衆生成佛の直道の一

修羅―阿修羅のこと、姿は天人に似て心は常に瞋る。身非常に大なるものといふ

後生の紲―死後に善所に生るゝ事の妨をいふ

大虛―大ぞら

慧日―智慧を日に譬ふ

臂をくたす―勉強に骨を折ること

北嶺―比叡山、天台の學の本山

餘趣會實。諸經或有二乘全無。故合菩薩對於二乘從難而說。

と釋し給へり。しかのみならず、二乘の作佛は一切衆生の成佛を顯すと天台は判じ給へり。修羅が大海を渡らんをば是難しとやせん。嬰兒の力士を投げん何ぞたやすしとせん。然らば則ち佛性の種ある者は佛になるべしと爾前にも說けども、未だ焦種の者作佛すべしとは說かず。かゝる重病をたやすく治すは獨り法華の良藥也。只須く汝佛にならんと思はゞ、慢の幢を倒し忿の杖をすてて偏に一乘に歸すべし。名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生の紲也。嗚呼恥づべし恥づべし、恐るべし恐るべし。

問うて云はく、一を以て萬を察する事なれば、あら〳〵法華のいはれを聞くに耳目始めて明か也。但し法華經をば、いかやうに心得候ひてか、速に菩提の岸に到るべきや。傳へ聞く、一念三千の大虛には慧日曇る事なく、一心三觀の廣池には智水濁る事なき人こそ、其の修行に堪へたる機にて候ふなれ。然るに南都の修學に臂をくたす事なかりしかば、瑜伽唯識にもくらし。北嶺の學文に眼をさらさゞりしかば、止觀玄義にも迷へり。天台法相の兩宗は、貧を蒙りて壁に向へるが如し。されば法華の機には旣に洩れて候ふにこそ。何んがし候ふべき。

化儀―佛が衆生を導く爲の説法の形式、仕方
三周―同上説法の三段の方法
併しながら―そのまゝ皆、全く

に、

現在蟲食者。僞章數卷作。謗法謗人。何不墮地獄。

と破し給ひしかば、徳一大師其の語に責められて舌八に裂け失せ給ひき。未顯眞實とは二乘の爲也と云はゞ、最も理を得たり。其の故は、如來布敎の元旨は、元より二乘の爲也。一代の化儀、三周の善巧、併ら二乘を正意とし給へり。されば華嚴經には地獄の衆生は佛になるとも、二乘は佛になるべからずと嫌ひ、方等には高峯に蓮の生ざるやうに、二乘は佛の種を焦りたりと云はれ、般若には五逆罪の者は佛になるべし、二乘は叶ふべからずと捨てらる。かゝるあさましき捨者の、佛になるを以て、如來の本意とし、法華經の規模とす。之に依つて天台の云はく、

華嚴大品不能治之。唯有法華能令無學還生善根得成佛道。所以稱妙。又闡提有心。猶可作佛。二乘滅智。心不可生。法華能治復稱爲妙云云。

此の文の心は委く申すに及ばず。誠に知んぬ、華嚴方等大品等の法藥も、二乘の重病をば癒さず。又三惡道の罪人をも、菩薩ぞと、爾前の經にはゆるせども、二乘をばゆるさず。之に依つて妙樂大師は

有人師—或人師に同じ。ある一人の學者といふこと

されば爾前の經の習として、今說く經より後に又經を說くべき由を云はざる也。唯法華經計りこそ、最後の極說なるが故に、已今當の中に此の經獨り勝れたりと說かれて候へ。されば釋には、

唯至テ法華ニ說テ前教ノ意ヲ顯ス今教ノ意ヲ

と申して、法華經にて如來の本意も教化の儀式も定りたりと見えたり。之に依つて天台は、

如來成道四十餘年。未ダ顯サ眞實ヲ法華始メテ顯ス眞實ヲ

と云へり。此の文の心は如來世に出でさせ給ひて四十餘年が間は、眞實の法をば顯はさず。法華經に始めて佛になる實の道を顯し給へりと釋し給へり。

問うて云はく、已今當の中に法華經勝れたりと云ふ事はさも候ふべし。但し有人師の云はく、四十餘年未顯眞實と云ふは、法華經にて佛になる聲聞の爲也。爾前の得益の菩薩の爲には未顯眞實と云ふべからずと云ふ義をば、いかゞ心得候ふべきや。

答へて云はく、法華經は二乘の爲也、菩薩の爲にあらず。されば未顯眞實と云ふ事、二乘に限るべしと云ふは德一大師の義歟。此は法相宗の人也。此の事を傳教大師破し給ふ

言語道斷―詞に云ひ表し得ぬ程あきれたるに云ふ
偏圓―かたよりて不完全なると完全にて缺くる處なきと

佛說によらずば、何ぞ佛法と云ふ名を付くべきや。言語道斷の次第也。之に依つて智證大師は、經に大小なく理に偏圓なしと云ひて、一切人によらば佛說無用也と釋し給へり。天台は、

若深有二所以一。復與二修多羅一合者。錄而用レ之。無文無義不レ可二信受一。

と判じ給へり。又云はく、

無二文證一者悉是邪謂。

とも云へり。いかゞ心得べきや。

問うて云はく、人師の釋はさも候ふべし。爾前の諸經に此の經第一とも說き諸經の王とも宣べたり。若爾らば佛說なりとも用ふべからず候ふ歟如何。

答へて云はく、設ひ此の經第一とも諸經の王とも申し候へ、皆是權敎也。其の語によるべからず。之に依つて佛は了義經によりて不了義經によらざれと說き、妙樂大師は、

縱有レ經云二諸經之王一。不レ云二已今當說最爲第一一。兼但對帶其義可レ知。

と釋し給へり。此の釋の心は、設ひ經ありて諸經の王とは云ふとも、前に說きつる經にも後に說かんずる經にも、此の經はまされりと云はずば、方便の經と知れと云ふ釋也。

種種說法。種種說法。以方便力。四十餘年未顯眞實云云。

此の文を聞いて大莊嚴等の八萬人の菩薩一同に、

過無量無邊不可思議阿僧祇劫。終不得成無上菩提。

と領解し給へり。此の文の心は、華嚴阿含方等般若の四十餘年の經に付て、いかに念佛を申し禪宗を持て佛道を願ひ、無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、無上菩提を成ずる事を得じと云へり。然かのみならず方便品には、「世尊法久後要當說眞實」と說き、又「唯有一乘法。無二亦無三」と說きて、此の經ばかりまこと也と云ひ、又二の卷には「唯我一人能爲救護」と敎へ、「但樂受持大乘經典。乃至不受餘經一偈」と說き給へり。文の心は、たゞわれ一人して能くすくひ護る事をなす、法華經をうけ持たん事をねがひて、餘經の一偈をも受けざれと見えたり。又云はく、

若人不信毀謗此經。則斷一切世間佛種。乃至其人命終入阿鼻獄云云。

此の文の心は、若人、此の經を信ぜずして此の經にそむかば、則ち一切世間の佛の種をたつもの也。その人は命終らば、無間地獄に入るべしと說き給へり。此等の文をうけて天台は「將非魔作佛」の詞正しく此の文によれりと判じ給へり。唯人師の釋計りを憑みて

頓證菩提—直にさとりを聞くこと
指南—導き者のこと
直至道場—さとりの場處
車輪—人を運び行く車のこと

持妙法華問答鈔

抑希に人身をうけ、適佛法を聞けり。然るに法に淺深あり、人に高下ありと云へり。何なる法を修行してか速に佛になり候ふべき。願はくは其の道を聞かんと思ふ。

答へて云はく、家家に尊勝あり、國國に高貴あり。皆其の君を貴み其の親を崇むといへども、豈に國王にまさるべきや。爰に知んぬ、大小權實は家家の諍ひなれども、一代聖教の中には法華獨り勝れたり。是頓證菩提の指南、直至道場の車輪也。

疑つて云はく、人師は經論の心を得て釋を作る者也。然らば則ち宗宗の人師、面々各々に教門を結構ひ釋を作り義を立て證得菩提と志す。何ぞ虚しかるべきや。然るに法華獨り勝ると候はゞ、心狹くこそ覺え候へ。

答へて云はく、法華獨りいみじと申すが心せばく候はゞ、釋尊程心せばき人は世に候はじ。何ぞ誤りの甚しきや。且く一經一流の釋を引きて其の迷をさとらせん。無量義經に云はく、

一闡提―梵語、不信と譯す

以信得入　等云云。
問うて云はく、解して不信なる者は如何。
答ふ、恆河の第一の者なり。
問うて云はく、證文如何。
答へて云はく、涅槃經の三十六に第一を說いて云はく、
有人聞是大涅槃經如來常住無有變易常樂我淨。終不畢竟入於涅槃一切衆生悉有佛性。一闡提人。謗方等經。作五逆罪。犯四重禁。必當得成菩提之道。須陀洹人。斯陀含人。阿那含人。阿羅漢人。辟支佛等。必當得成阿耨菩提。聞是語已。生不信心。等云云。
問うて云はく、この文、不信とは見えたるも、解にして不信とは見えず。如何。
答へて云はく、第一の結文に云はく、
若有智慧無有信心。是人則能增長邪見。

得レ聞二如レ是大涅槃經一。生二於信心一。是名レ爲レ出。

又云はく、

雖レ信二佛性是衆生有一。不二必一切皆悉有一レ之。是故名爲二信不具足一。

此の文の如くんば、口には涅槃を信ずと雖も、心に爾前の義を存ずる者なり。又この第二の人を說いて云はく、

信者無レ慧。顚倒解レ義故。等云云。

顚倒解義とは、實經の文を得し權經の義と覺る者なり。

問うて云はく、信じて得道を解せざるの文如何。

答へて云はく、涅槃經の三十二に云はく、

是菩提因雖二復無量一。若說二信心一已攝盡。

九に云はく、

聞二此經一已。悉皆作二菩提因緣一。法聲光明入二毛孔一者。必定當レ得二阿耨多羅三藐三菩提一。

等云云。

法華經に云はく、

契經―單に經と云ふに同じ

以レ信得レ入　等云云。

涅槃經の九に云はく、難じて云はく、涅槃經三十六に云はく、

我於二契經中一說。有二二種人一。謗二佛法僧一。一者不信瞋恚心故。二者雖レ信不レ解レ義故。善男子若人信心無レ有二智慧一。是人則能增二長無明一。若有二智慧一無レ有二信心一。是人則能增二長邪見一。善男子不信之人。瞋恚心故。說言レ無レ有二佛法僧寶一。信者無レ慧顚倒解レ義故。令二聞レ法者謗二佛法僧一等云云。

此の二人の中には信じて而して解せざる者を謗法と說く如何。

答へて云はく、此の信而不解の者は涅槃經の三十六に、恆河之七種之衆生の第二の者を說く也、此第二の者は涅槃經の「聞二一切衆生悉有佛性之說一雖レ信レ之而又不レ信者」なり。

問うて云はく、如何ぞ信ずと雖も而も不信なる乎。答へて云はく、一切衆生悉有佛性の說を聞いて之を信ずと雖も、又心を爾前之經に寄する一類の衆生をば無佛性の者と云ふなり。これ信じて不信の者なり。

問うて云はく、證文如何。

答へて云はく、恆河第二の衆生を說いて云はく、經に云はく、

十二因緣—吾人の生死が十二階段の因と緣とによる道理を示したるもの
無明行—十二因緣最初の二

經を破するは謗法となる。大乘經の者が小乘經を破するは破法とならず。諸大乘經の中の理は未開會の理、いまだ記小久成これなし。法華經の理は開會の理、記小久成これあり。諸大乘經の者が法華經を破するは謗法となるべし。法華經の者の諸大乘經を謗するは謗法となるべからず。大日經眞言宗は未開會、記小久成なくば法華經已前なり。開會記小久成を許さば涅槃經と同じ。但し善無畏三藏、金剛智、不空、一行等の性惡の法門、一念三千の法門は、天台智者の法門をぬすめるか。若爾らば、善無畏等の謗法は似破か又雜謗法か。五百羅漢の眞因は小乘十二因緣の事なり。無明行等を緣として空理に入ると見えたり。門は諍へども謗法とならず。攝論の四意趣、大論の四悉檀等は、無著菩薩、龍樹菩薩滅後の論師として、法華經を以て一切經の心をえて、四悉四意趣等を用て爾前の經經の意を判するなり。未開會の四意趣四悉檀と、開會の四意趣四悉檀を同ぜば、あに謗法にあらずや。此等をよく〳〵知るは教を知れる者なり。四句あり。一に信而不解、二に解而不信、三に亦信亦解、四に非信非解。

問うて云はく、信而不解の者は謗法なる歟。

答へて云はく、法華經に云はく、

あかさゞるに、記小久成ありと思ひ、華厳超過の法華經を我が經に劣ると謂ふは僻見也。三論の嘉祥の二藏等、又法華經に般若經すぐれたりと思ふ事は僻案也。善無畏等が大日經は法華經に勝れたりといふ。法華經の心を知らざるのみならず、大日經をも知らざる者なり。

問うて云はく、此等皆謗法ならば、悪道に墮ちたるか如何。

答へて云はく、謗法に上中下雜の謗法あり。慈恩、嘉祥、澄觀等が謗法は上中の謗法か。其の上自身も謗法と知れるかの間、悔還す筆これあるか。又佗師を破するに二あり。能破似破これなり。教はまされりと知れども、是非をあらはさんがために法を破す。これは似破なり。能破とは、實にまされる經を劣ると思うてこれを破す。これは悪能破なり。又現に劣れるを破す、これ善能破なり。但し脇尊者の金杖の譬は、小乘經は多しといへども同じ苦空無常無我の理なり。諸人同じく此の義を存じて、十八部二十部相諍論あれども、但門の諍にて理の諍にはあらず。故に共に謗法とならず。外道が小乘經を破するは外道の理は常住なり。小乘經の理は無常なり空なり。故に外道が小乘經を破するは謗法となる。大乘經の理は中道なり、小乘經は空なり。小乘經の者が大乘

十住毘婆沙論—印度の高僧龍樹の著

論主—論の作者、爰には龍樹を指す

又主を王といはゞ、百姓も宅中の王なり、地頭領家等も又村郷郡國の王なり。しかれども大王にはあらず。小乘經には無爲涅槃の理が王なり。小乘の戒定等に對して智慧は王なり。諸大乘經には中道の理が王なり。又華嚴經は圓融相卽の王、般若經は空理の王、大集經は守護正法の王、藥師經は藥師如來の別願を說く經の中の王、雙觀經は阿彌陀經の四十八願を說く經の中の王、大日經は印眞言を說く經の中の王、一代一切經の王にはあらず。法華經は眞諦俗諦、空假中、印眞言、無爲の理、十二大願、一切諸經の所說の所詮の法門の大王なり。これ敎を知れる者なり。而るを善無畏、金剛智、不空、法藏、澄觀、慈恩、嘉祥、南三北七、曇鸞、道綽、善導、達磨等の、我が所立の依經を一代第一といへるは敎を知らざる者なり。但し一切の人師の中には、天台智者大師一人敎を知れる人なり。曇鸞道綽等の聖道淨土、難行易行、正行雜行は、源と十住毘婆沙論に依る。彼の本論に難行の內に法華眞言等を入ると謂へるは僻案なり。論主の心と論の始中終を知らざる失あり。慈恩が深密經の三時に一代を攝めたる事、又本經の三時に一切經の攝らざる事をしらざる失あり。法藏澄觀等が五敎に一代を攝むる中に、法華經華嚴經を圓敎と立て、又華嚴敎は法華經に勝れたりと思へるは、所依の華嚴經に二乘作佛久遠實成を

修多羅—梵語、經と譯す

已說—過去に說かれしこと
今說—現在說かるゝこと
當說—未來に說かるべきこと
上郞下郞—上臈下臈と書くが正し

林最後の經として「是諸大乘」と說かれたれば、涅槃經には一切經は嫌はるかと覺ゆれども、是諸大乘經と擧げて、次下に諸大乘經を列ねたるに、十二部修多羅、方等般若等とあげたり。無量義經、法華經をば載せず。但し無量義經に擧ぐるところは四十餘年の阿含、方等、般若、華嚴經をあげたり。いまだ法華經、涅槃經の勝劣は見えず。密嚴に一切經中王とはあげたれども、一切經を擧ぐる中に、華嚴勝鬘等の諸經の名をあげて一切經中王ととく。故に法華經等とは見えず。阿彌陀經の小善根は時節もなし、小善根の相貌も見えず。誰か知る小乘經を小善根といふか。又人天の善根を小善根といふか。又觀經雙觀經の所說の諸善を小善根といふか。いまだ一代を念佛に對して小善根といふときはきこえず。又大日經、六波羅蜜經等の諸の祕敎の中にも、一代の一切經を嫌うて、その經をほめたる文はなし。但し無量義經計りこそ前四十餘年の諸經を嫌ひ、法華經一經に限りて已說の四十餘年、今說の無量義經、當說の未來に說くべき涅槃經を嫌うて、法華經計りをほめたり。釋迦如來過去現在未來の三世の諸佛世にいで給ひて各々一切經を說き給ふに、いづれの佛も法華經第一なり。例せば上郞下郞不定なり。田舍にしては百姓郞從等は侍を上郞といふ。洛陽にして源平等已下を下郞といふ。三家を上郞といふ。

苦しからず―差支なしとの意

難じて云はく、宗を立てんに諸經諸宗を破し、佛菩薩を讃むるに佛菩薩を破し、佗の善根を修せしめんがために、この善根を破する、苦しからずば、阿含等の諸の小乘經に華嚴經等の諸大乘經を破したる文ありや。華嚴經に法華大日經等の諸大乘經を破したる文これありや。

答へて云はく、阿含小乘經に諸大乘經を破したる文はなけれども、華嚴經には二乘大乘一乘をあげて二乘大乘を破し、涅槃經には諸大乘經をあげて涅槃經に對してこれを破す。密嚴經には一切經中の王と說き、無量義經には四十餘年未顯眞實と說かれ、阿彌陀經には念佛に對して諸經を小善根と說かる。これらの例一にあらず。故に又破の經經による人師、皆此の義を存せり。此等をもて思ふに、宗を立つる方は我が宗に對して諸經を破るは苦しからざるか。

難じて云はく、華嚴經には小乘大乘一乘とあげ、密嚴經には一切經中の王と說かれ、涅槃經には「是諸大乘」とあげ、阿彌陀經には念佛に對して諸經を小善根とは說かれたれども、無量義經のごとく四十餘年と年限を指して、其の間の大部の諸經、阿含方等般若華嚴等の名をよびあげて、勝劣を說ける事これなし。涅槃經の「是諸大乘」の文計りこそ、雙

隨喜—他の善を喜びてやること

阿含經—小乘經の名

地藏—六道をめぐりて衆生を救ふ地藏菩薩のこと

餘法を謗ずるは謗法にあらざるか。攝論の四意趣の中の衆生意樂意趣とは、假令人ありて一生の間、一善をも修せず、但惡を作る者あり。而るに、小緣に値ひて何れの善にてもあれ、一善を修せんと申す。これは隨喜讚歎すべし。又善人あり、一生の間たゞ一善を修す。而るを佗の善へうつさんがために、その善をそしる。「於一事中或呵或讚」といふこれなり。大論の四悉檀の中の對治悉檀又これ同じ。淨名經の彈呵と申すは、阿含經の時ほめし法をそしるなり。此等を以て思ふに、或は衆生多く小乘の機あれば、大乘を謗りて小乘經に信心をまし、或は衆生多く大乘の機なれば、小乘をそしりて大乘經に信心をあつくす。或は衆生、彌陀佛に緣あれば、諸佛をそしりて彌陀に信心をまさしめ、或は衆生多く地藏に緣あれば、諸菩薩を謗りて地藏をほむ。或は衆生多く華嚴經に緣あれば、諸經をそしりて華嚴經をほむ。或は衆生大般若經に緣あれば、諸經をそしりて大般若經をほむ。或は衆生法華經或は衆生大日經等同じく心うべし。機を見て或は讚め、或は謗る。共に謗法とならず。而るを機を知らざる者、みだりに或は讚め或は呰るは謗法となるべきか。例せば華嚴宗、三論、法相、天台、眞言、禪、淨土等の諸師の、諸經を破して我が宗を立つるは謗法とならざるか。

四重—四重禁戒といふを犯すこと

千部の論師—天親のこと、その著千部の多數あるに依ると

常沒—いつも地獄に在るべき罪人

法といふ事あるべからざるか。謗法とは、法に背くといふ事なり。法に背くと申すは、小乘は小乘經に背き、大乘は大乘經に背く。法に背かば、あに謗法とならざらん。謗法とならば、なんぞ苦果を招かざらん。此の道理にそむく、これひとつ。大般若經に云はく、般若を謗する者は十方の大阿鼻地獄に墮すべし。法華經に云はく、若人信ぜず、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと。涅槃經に云はく、世に難治の病三あり、一には四重、二には五逆、三には謗大乘なりと。此等の經文あに空しかるべき。此等は證文なり。されば無垢論師、大慢婆羅門、熈連禪師、嵩靈法師等は、正法を謗じて現身に大阿鼻地獄に墮ち、舌、口中に爛れたり。これは現證なり。天親菩薩は小乘の論を作つて諸大乘經を破しき。後に無著菩薩に對して此の罪を懺悔せんがために、舌を切らんと悔い給ひき。謗法もし罪とならずんば、いかんが千部の論師懺悔をいたすべき。闡提とは、天竺の語、此には不信と翻ず。不信とは、一切衆生悉有佛性を信ぜざるは闡提の人と見えたり。不信とは、謗法の者なり。恒河の七種の衆生の第一は一闡提謗法常沒の者なり。第二は五逆謗法常沒等の者なり。あに謗法を恐れざらん。

答へて云くは、謗法とは只由なく謗法を謗ずるを謗法というか。我が宗をたてんがために、

駄羅國の迦弐色迦王、佛法を貴み、一夏僧を供し佛法を問ひしに、一一の僧異義多し。此の王不審して云はく、佛説は定めて一ならんと、終に脇尊者に問ふ。尊者答へて云はく、金杖を折つて種々の物につくるに、形は別なれども金杖は一なり。形の異なるをば諍ふといへども、金たる事を諍はず。門門不同なれば、入門をば諍へども入理は一なり等と云々。又求那跋摩云はく、

諸論各異端。修行理無二。偏執有是非。達者無違諍等云云。

又五百羅漢の眞因各異なれども、同じく聖理を得たり。大論の四悉檀の中の對治悉檀、攝論の四意趣の中の衆生意樂意趣。此等は此善を嫌ひ此の善をほむ。檀戒進等、一一にそしり、一一にほむる、皆得道を成す。此等を以てこれを思ふに、護法清辨のあらそひ、智光戒賢の空中、南三北七の頓漸不定一時二時三時四時五時四宗五宗六宗、天台の五時、華嚴の五教、眞言教の東寺天台の諍、淨土宗の聖道淨土、禪宗の教外教內、入門は差別せりといふとも實理に入る事は但一なるべきか。

難じて云はく、華嚴の五教、法相三論の三時、禪宗の教外淨土宗の難行易行、南三北七の五時等、門は異りといへども、入理一にして、皆佛意に叶ひ謗法とならずといはゞ、謗

一夏—四月中より七月中に至る夏九十日間

眞因—各阿羅漢のさとりを得たる原因

護法清辨—兩高僧の間の佛教根本義につきての異見、智光云々も同様

空中—空の說と中道の說と

口輪―口のこと、はたらきによりて輪といふ

三時に一代をさめ、其の中に深密法華經を一代の聖教に勝れたりとす。深密法華の中、法華經は了義經の中の不了義經、深密經は了義經中の了義經なり。三論宗に又二藏三時を立つ。三時の中の第三中道教とは、般若法華なり。般若法華の中には般若最第一なり。眞言宗には日本國に二の流あり。東寺流は弘法大師十住心を立て、第八法華、第九華嚴第十眞言。法華經は大日經に劣るのみならず、猶華嚴經に下るなり。天台の眞言は慈覺大師等大日經と法華經とは廣略の異。法華經は理祕密、大日經は事理俱密なり。淨土宗には聖道、淨土、難行、易行、雜行、正行を立てたり。淨土の三部經より外の法華經等の一切經は難行聖道雜行なり。禪宗には二の流あり、一流は一切經一切の宗の深義は禪宗なり。一流は如來一代の聖教は皆言說、如來の口輪の方便なり。禪宗は如來の意密言說に及ばず教外の別傳なり。俱舍宗、成實宗、律宗は小乘宗なり。天竺震旦には小乘宗の者、大乘を破する事これ多し。日本國には其の義なし。

問うて云はく諸宗の異義區なり。一一に其の謂ありて得道をなるべきか。又諸宗皆謗法となりて一宗計り正義となるべきか。

答へて云はく、異論相違ありといへども皆得道なるか。佛の滅後四百年にあたりて、健

震旦―支那のこと、戸那も同じ
月支―月氏ともいふ、西域地方を指す
紀典博士―儒道の學者
三宗―成實、倶舍、律を指す
五宗―三論、法相、華嚴、天台、眞言を指す
一代―釋尊一代の敎を指す

餘の僧尼を還俗せしめし、此等は皆惡師を信じ惡鬼其の身に入りし故也。

問うて云く、天竺震旦は外道が佛法をほろぼし、小乘が大乘をやぶるとみえたり。此の日本國もしかるべきか。

答へて云はく、月支戸那には外道あり、小乘あり。此の日本國には外道なし、小乘の者なし。紀典博士等これあれども、佛法の敵となるものこれなし。小乘の三宗これあれども、彼の宗を用て生死を離れんと思はず。但大乘を心うる才覺と思へり。但し此の國には大乘の五宗のみこれあり。人々皆思へらく、彼の宗宗にして生死をはなるべしと思ふ故に、諍も多くいできたり。又檀那の歸依も多くあるゆゑに利養の心も深し。

第四に行者佛法を弘むる用心を明さばに、夫佛法をひろめんと思はんものは、必ず五義を存じて正法をひろむべし。五義とは、一には敎、二には機、三には時、四には國、五には佛法流布の前後なり。

第一に敎とは、如來一代五十年の說敎は、大小權實顯密の差別あり。華嚴宗には五敎を立て、一代をさめ、其の中には華嚴法華を最勝とし、華嚴法華の中に華嚴經を以て第一とす。南三北七、竝に華嚴宗の祖師、日本國の東寺の弘法大師此の義なり。法相宗は

惡緣—惡事をなすたすけ、たより
惡知識—惡を敎ふる師
結—煩惱のこと
藏—敎を藏めたる經、又その敎

壞レ心。惡知識者。二倶壞故。若惡象者。唯壞二一身一。惡知識壞二無量身無量善心一。爲二惡象一殺。不レ至二三趣一。爲二惡友一殺。必至二三趣一等云云。

此の經文の心は後世を願はん人は一切の惡緣を恐るべし、一切の惡緣よりは惡知識を恐るべしと見えたり。されば大莊嚴佛の末の四の比丘は、自ら惡法を行じて十方の大阿鼻地獄を經るのみならず、六百億人の檀那等をも十方の地獄に墮しぬ。鴦堀摩羅は摩尼跋陀が敎に隨つて九百九十九人の指をきり、結句、母並に佛を害せんと擬す。善星比丘は佛の御子十二部經を受持し、四禪定をえ、欲界の結を斷じたりしかども、苦得外道の法を習うて生身に阿鼻地獄に墮ちぬ。提婆が六萬藏八萬藏を暗じたりしかども、外道の五法を行じて、現に無間に墮ちにき。阿闍世王の父を殺し母を害せんと擬せし、大象を放つて佛を失ひたてまつらんとせしも、惡師提婆が敎なり。倶伽利比丘が舍利弗目連をそしりて、生身に阿鼻に墮せし、大族王の五竺の佛法僧を滅せし、大族王の舍弟は加濕彌羅國の王となりて、健駄羅國の率都婆寺塔一千六百所を失ひし、金耳國王の佛法を滅せし、波瑠璃王の九千九十萬人の人を殺して血ながれて池をなせし、設賞迦王の佛法を滅し、菩提樹をきり、根をはりし、周の宇文王の四千六百餘所の寺院を失ひ、二十六萬六百

力現ずといふ

破す―攻撃すること

回心―思ひかへすこと、先に勝れたりと思ひしものを劣れりと思ふに至ること

雙林―沙羅雙樹林のこと、釋尊入滅の所、時

一に似破とは、佗の義は吉と思へども此を破す。かの正義を分明にあらはさんがためか。二に能破とは、實に佗人の義の勝れたるをば辨へずして、迷ひて我が義すぐれたりと思ひて心中よりこれを破するをば能破といふ。されば彼の宗宗の祖師に似破能破の二の義あるべし。心中には法華經は諸經に勝れたりと思へども、且く違して法華經の義を顯さんと思ひてこれを破する事あり。提婆達多阿闍世王諸の外道が、佛の敵となりて佛德を顯し、後には佛に歸せしがごとし。又實の凡夫が佛の敵となりて惡道に墮つる事これ多し。されば諸宗の祖師の中に回心の筆をかゝずば、謗法の者惡道に墮ちたりとしるべし。三論の嘉祥、華嚴の澄觀、法相の慈恩、東寺の弘法等は回心の筆これあるか。よく〱尋ねならふべし。

問うて云はく、まことに今度生死を離れんと思はんに、なにものをか厭ひなにものをか願ふべきや。

答ふ、諸の經文には女人等を厭ふべしとみえたれども、雙林最後の涅槃に云はく、菩薩雖見是身無量過患具足充滿。爲欲受持涅槃經故。猶好將護不令乏少。菩薩於惡象等心無恐怖。於惡知識生怖畏心。何以故是惡象等。唯能壞身不能

當機衆—佛前にて正に說法聽聞する人々

印—手にて種々の形を結び成すもの

眞言—陀羅尼のこと、之を唱ふる所に不思議の

事もこれかたし。されば逆緣順緣のために先づ法華經を說くべしと佛ゆるし給へり。但し又滅後なりとも當機衆になりぬべきものには、先づ權經を說く事もあるべし。又悲を先とする人は先づ權經を說く。釋迦佛のごとし。慈を先とする人は先づ實經をとくべし。不輕菩薩のごとし。又末代の凡夫は、なにとなくとも惡道を免れんことは難かるべし。同じく惡道に墮つるならば法華經を謗ぜさせて墮すならば、世間の罪をもて墮ちたるには似るべからず。「聞法生謗墮於地獄勝於供養恒沙佛者等」の文のごとし。此の文の心は法華經を謗じて地獄に墮ちたるは、釋迦佛阿彌陀佛等の恒河沙の佛を供養し歸依渇仰する功德には百千萬倍すぎたりと說かれたり。

問うて云はく、上の義のごとくならば、華嚴法相三論眞言淨土等の祖師はみな謗法に墮すべきか。華嚴宗には華嚴經は法華經には雲泥超過せり。法相三論もてかくのごとし。眞言宗には日本國に二の流あり、東寺の眞言は、法華經は華嚴經に劣れり。何に況や大日經に於てをや。天台の眞言には大日經と法華經とは理は齊等なり、印眞言等は超過せりと云々。此等は皆惡道に墮つべしや。

答へて云はく、宗をたて經經の勝劣を判ずるに二の義あり。一は似破、二は能破なり。

隨佗意—佗の意に隨つての意、佛が凡夫それぞれの意に適はせて說かれたるをいふ
九界—十界中より佛界を除きたるもの
機をかゞみ—聽衆の智の程度を考へて見られしこと
當機—現在のこと、目前に說法を聽く如きをいふ
能化—敎化をなす人

若但讚佛乘、衆生沒在苦。破法不信故。墜於三惡道等。

の經文これなり。

問うて云はく、いかなれば爾前の經をば衆生謗ぜざるや。

答へて云はく、爾前の經經は萬差なれども、束ねて此を論ずれば、隨佗意と申して、衆生の心を說かれて侍り。故に違する事なし。譬へば水に石をなぐるに爭ふことなきがごとし。又しな〴〵の說敎はんべれども、九界の衆生の心を出でず。衆生の心は皆善につけ惡につけて、迷を本とするゆゑに、佛にはならざるか。

問うて云はく、衆生謗ずべきゆゑに、佛最初に法華經をとき給はずして、四十餘年の後に法華經を說き給はゞ、汝なんぞ當世に權經をば說かずして、左右なく法華經を說いて人に謗をなさせて惡道に墮すや。

答へて云はく、佛在世には佛菩提樹の下に坐し給ひて機をかゞみ給ふに、當時法華經を說くならば衆生謗じて惡道に墮ちぬべし。四十餘年すぎて後に說かば、謗せずして初住不退乃至妙覺にのぼりぬべしと知見しましましき。末代濁世には當機にして初住の位に入るべき人は萬に一人もありがたかるべし。又能化の人も佛にあらざれば機をかゞみん

今日の四十餘年の經經にして實の凡夫の成佛を許されずば、過去遠々劫の四十餘年の權經にても、成佛叶ひがたきか。三世の諸佛の說法の儀式皆同じきが故也。或は云はく不得疾成無上菩提と說かるれば、四十餘年の經經にては疾くこそ佛にはならねども、遲く劫を經ては、成るか。難じて云はく、次下の大莊嚴菩薩等の領解に云はく、

過ニ不可思議無量無邊阿僧祇劫ヲ終不レ得レ成ニ無上菩提ニ等云云。

此の文の如くならば劫を經ても爾前の經計りにては成佛はかたきか。或は云ふ、華嚴宗の料簡に云はく、四十餘年の內には華嚴經計りは入るべからず。華嚴經にすでに往生成佛此あり。なんぞ華嚴經を行じて往生成佛を遂げざらん。

答へて云はく、四十餘年の內に華嚴經入るべからずとは華嚴宗の人師の義也。無量義經には正しく四十餘年の內に華嚴海空と名目を呼び出して、四十餘年の內に計へ入れられたり。人師を本とせば佛に背くになりぬ。

問うて云はく、法華經を離れて往生成佛を遂げずば、佛世に出でさせ給ひては、但法華經計りをこそ說き給はめ。なんぞ煩しく四十餘年の經經を說かせ給ふや。

答へて云はく、此の難は佛自ら答へ給へり。

但一佛性—人天等の差異はあれど實は通じて皆一様に佛性は具へて居るとのこと

法藏比丘—無量壽經に阿彌陀佛が佛になる以前の名として出づ

行者を迎へ—念佛の行者を淨土に迎ふることを指す

問ふ、法華已前に二乘作佛を嫌ひけるを今未顯眞實といふとならば、先づ決定性の二乘を佛の永不成佛と說かせ給ひし處々の經文ばかりは、未顯眞實の佛の妄語なりと承伏せさせ給ふか。さては佛の妄語は勿論なり。若爾らば妄語の人の申すことは有無共に用ひぬ事にてあるぞかし。決定性の二乘永不成佛の語ばかり妄語となり、若餘の菩薩凡夫の往生成佛等は實語となるべきならば、信用しがたき事なり。譬へば東方を西方と妄語し申さん人は、西方を東方と申すべし。二乘を永不成佛と說く佛は、餘の菩薩の成佛をゆるすも又妄語にあらずや。五乘は但一佛性なり。二乘の佛性をかくし、菩薩凡夫の佛性をあらはすは、返て菩薩凡夫の佛性をかくすなり。或人云はく、四十餘年未顯眞實とは、成佛の道ばかり未顯眞實なり。往生等は未顯眞實にはあらず。又難じて云はく、四十餘年が間の說の成佛を未顯眞實と承伏せさせ給はゞ、雙觀經に云ふ、「不取正覺成佛已來凡歷二十劫」等の文は、未顯眞實と承伏せさせ給ふか。若爾らば四十餘年の經經にして法藏比丘の阿彌陀佛になり給はずば、法藏比丘の成佛すでに妄語なり。若成佛妄語ならば何の佛か行者を迎へ給ふべきや。又かれ、此の難を通じて云はん。四十餘年が間は成佛はなし。阿彌陀佛は今の成佛にはあらず、過去の成佛なり等と云々。今難じて云はく、

答へて云はく、佛、觀經等の四十餘年の經經を束ねて未顯眞實と説かせ給ひぬれば、此の經文に隨うて乃至十念卽得往生等は實には往生しがたしと申す。此の經文なくば謗法となるべし。

問うて云はく、或人云はく、無量義經の四十餘年未顯眞實の文は、あへて四十餘年の一切の經經並に文々句々を皆未顯眞實と說き給ふにはあらず。但四十餘年の經經に處々に決定性の二乘を永不成佛と嫌はせ給ひ、釋迦如來を始成正覺と說き給ひしを、其の言ばかりを指して未顯眞實とは申すなり。敢て餘事にはあらず。而るをみだりに四十餘年の文を見て、觀經等の凡夫のために九品往生なんどを說きたるを、妄りに往生はなき事なりなんど押し申す。あに恐しき、謗法の者にあらずやなんど申すはいかに。

答へて云はく、此の料簡は東土の得一が料簡に似たり。得一が云はく、未顯眞實とは決定性の二乘を、佛、爾前の經にして永不成佛と說かれしを、未顯眞實とは嫌はるゝなり。前四味の一切には亙るべからずと申しき。傳教大師は前四味に亙りて文々句々に未顯眞實と立て給ひき。さればこの料簡は古の謗法者の料簡に似たり。但し且く汝等が料簡に隨ひて尋ね明らめん。

決定性―二乘と定りて進歩せざる性

永不成佛―何時までも眞の佛にはなれずとの意

九品往生―極樂の階級に九品あるその處に往き生るゝこと

前四味―五味の中より最上の醍醐味を除きたるもの、法華經以前の諸經に譬ふ

所化―教を受くる人

依經―たより信奉する經文

所依―依り處とすること

雙觀經―所謂淨土門の大無壽經の別名

乃至十念―僅に念佛を十返唱へたるのみにても直に極樂に生れ得とのこと

問うて云はく、委細に相貌を知らんと思ふ。あらく〱示すべし。

答へて云はく、涅槃經第五に云はく、若有レ人言二如來無常一云何是人舌不二墮落一等云云。此の文の心は佛を無常といはん人は舌墮落すべしと云々。

問うて云はく、諸の小乘經に佛を無常と說かるゝ上、又所化の衆皆無常を談じき。若爾らば佛竝に所化の衆の舌墮落すべしや。

答へて云はく、小乘經の佛を小乘經の人が無常と說き談ずるは舌たゞれざるか。大乘經に向つて佛を無常と談じ、小乘經に對して大乘經を破するが、舌は墮落するか。此をもて思ふに、おのれが依經には隨へども、依經よりすぐれたる經を破するは破法となるか。若爾らば、設ひ觀經華嚴經等の權大乘經の人々、所依の經の文の如く修行すとも、かの經にすぐれたる經經に隨はず、又すぐれざる由を談ぜば謗法となるべきか。されば觀經等の經の如く法を得たりとも、觀經等を破せる經の出來したらん時、其の經に隨はずば破法となるべきか。小乘經を以て擬へて心うべし。

問うて云はく、雙觀經等に乃至十念卽得往生なんど說かれて候ふが、彼の經の教の如く十念申して往生すべきを、後の經を以て申しやぶらば謗法にては候ふまじきか。

料簡—料理簡擇といふことにて法を問答して研究すること
疏—註釋

法華經第七に云はく、

四衆之中。有生瞋恚心不淨者。惡口罵詈言。是無智比丘。或以杖木瓦石而打擲之。乃至千劫於阿鼻地獄受大苦惱等云云。

此の經文の心は法華經の行者を惡口し及び杖を以て打擲せるもの、其の後に懺悔せりといへども罪いまだ滅せずして千劫阿鼻地獄に墮ちたりと見えぬ。懺悔せる謗法の罪すら五逆罪に千倍せり。況や懺悔せざらん謗法に於ては、阿鼻地獄を出づる期かたかるべし。故に法華經第二に云はく、

見有讀誦書持經者。輕賤憎嫉。而懷結恨。乃至其人命終入阿鼻地。具足一劫。劫盡更生。如是展轉至無數劫等云云。

第三に問答料簡を明さば、

問うて云はく、五逆罪と謗法罪との輕重は知んぬ。謗法の相貌如何。

答へて云はく、天台智者大師の梵網經の疏に云はく、謗とは背く也等と云々。法に背くが謗法にてはあるか。天親の佛性論に云はく、若憎むは背くなり等と云々。この文の心は正法を人に捨てさするが謗法にてあるなり。

問うて云はく、證文如何。

答へて云く、法華經第二に云はく、

若人不信誹謗此經。乃至其人命終入阿鼻獄等云云。

此の文に謗法は阿鼻地獄の業と見えたり。

問うて云はく、五逆と謗法と罪の輕重如何。

答へて云はく、大品經に云く、

舍利弗白佛言。世尊五逆罪與破法罪相似耶。佛告舍利弗。不應言相似。所以者何。若破般若波羅蜜。則爲破十方諸佛一切智一切種智。破佛寶故。破法寶故。破僧寶故。破三寶故。則破世間正見。破世間正見。則得無量無邊阿僧祇罪。得無量無邊阿僧祇罪已。則受無量無邊阿僧祇憂苦。

又云はく、

破法業因緣集故。無量百千萬億歲。墮大地獄中。此破法人輩。從一大地獄至一大地獄。若劫火起時。至佗方大地獄中。如是徧十方。彼間劫火起。故從彼死。破法業因緣未盡。故還來是間大地獄中等云云。

般若波羅蜜―覺に至るべき智慧
阿僧祇―梵語、無數と譯す、
劫火―大劫の終りにこの世界を燒滅する火

破和合僧―出家の睦まじき團體をかき亂すこと
相似―似通ひたるの意
率兜婆―佛の形になぞらひて塔等の標に立つるもの、木石にて造る

るを一減と申す。又十歳より百年に一壽を增し、又百年に一壽を增する程に、八萬歳に增するを一增と申す。此の一增一減の程を小劫として、二十の增減を一中劫とは申すなり。此の地獄に墮ちたる者これ程久しく無間地獄に住して大苦をうくるなり。業因を云はゞ、五逆罪を造る人、此の地獄に墮つべし。五逆罪と申すは、一に殺父、二に殺母、三に殺阿羅漢、四に出佛身血、五に破和合僧なり。今の世には佛ましまさず。しかれば出佛身血あるべからず。和合僧なければ破和合僧なし。阿羅漢なければ殺阿羅漢これなし。但殺父殺母の罪のみありぬべし。しかれども王法のいましめ嚴しくあるゆゑに、此の罪を犯しがたし。若爾らば當世に阿鼻地獄に墮つべき人すくなし。但し相似の五逆罪これあり。木畫の佛像堂塔等を燒き、かの佛像等の寄進の所を奪ひとり、率兜婆等をきり燒き、智人を殺しなんどするもの多し。此等は大阿鼻地獄の十六の別處に墮つべし。されば當世の衆生十六の別處に墮つるもの多きか。又謗法の者この地獄に墮つべし。第二に無間地獄の因果の輕重を明さば、問うて云く、五逆罪より外の罪によりて無間地獄に墮つることあるべしや。

答へて云はく、誹謗正法の重罪なり。

雲泥—差の甚だしき譬
僻案—誤れる考
別處—八大地獄に附屬したる小地獄あるをいふ

ど、うち思ひて、地獄をも怖ぢず。或は宗宗を習へる人々は、各々の智分をたのみて、又地獄の因を怖ぢず。而るに佛菩薩を信じたるも愛子夫婦なんどを愛し、父母主君なんどを敬ふには雲泥なり。佛菩薩等をば輕く思へるなり。されば當世の人々の佛菩薩を恃みぬれば、宗宗を學したれば、地獄の苦はまぬがれなんなんど思へるは、僻案にや。心あらん人々は、よく〳〵慮り思ふべきか。

第八に大阿鼻地獄とは、又は無間地獄と申すなり。欲界の最底、大焦熱地獄の下にあり。此の地獄は縱廣八萬由旬なり。外に七重の鐵の城あり。地獄の極苦は且く之を略す。前の七大地獄竝に別處の一切の諸苦を以て一分として、大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり。此の地獄の罪人は大焦熱地獄の罪人を見る事、佗化自在天の樂の如し。此の地獄の香の臭さを人嗅ぐならば、四天下欲界六天の天人皆死しなん。されども出山沒山と申す山此の地獄の臭き氣を押へて人間へ來らせざるなり。故に此の世界の者死せずと見えぬ。若佛此の地獄の苦を具に說かせ給はゞ人聽きて血を吐いて死すべき故に、委しく佛說き給はずとみえたり。此の無間地獄の壽命の長短は一中劫なり。一中劫と申すは此の人壽無量歲なりしが、百年に一壽を減じ、又百年に一壽を減ずるほどに、人壽十歲の時に減ず

浄戒―清く戒律を保つこと

爪の上の土―極めて小數なる譬

さへづる―饒舌することをいふ

善根―善い行

飮酒、妄語、邪見の上に淨戒の比丘尼を犯せるもの、此の中に墮つべし。又比丘、酒をもて不邪婬戒を持てる婦女をたぼらかし、或は財物をあたへて犯せるもの、此の中に墮つべし。當世の僧の中に多く此の重罪あるなり。大悲經の文に、末代には士女は多くは天に生じ、僧尼は多くは地獄に墮つべしと說かれたるはこれ體の事か。心あらん人々は愧づべしはづべし。總じて上の七大地獄の業因は、諸經論をもて勘へ當世日本國の四衆にあて見るに、此の七大地獄を離るべき人を見ず、又きかず。涅槃經に云はく、末代に入りて、人間に生ぜん者は爪上の土の如し、三惡道に墮つるもるは十方世界の微塵の如しと說かれたり。若爾らば我等が父母兄弟等の死ぬる人は皆上の七大地獄にこそ墮ち給ひては候ふらめ。あさましとも云ふばかりなし。龍と蛇と鬼神と佛菩薩聖人をば未だ見ず、たゞ音にのみこれを聞く。當世に上の七大地獄の業を造らざるものをば未だ見ず、又音にもきかず。而るに我が身よりはじめて一切衆生七大地獄に墮つべしと思へる者一人もなし。設ひ言には墮つべきよしをさへづれども、心には墮つべしとも思はず。又僧尼士女、地獄の業をば犯すとは思へども、或は地藏菩薩等の菩薩を信じ、或は阿彌陀佛等の佛を恃み、或は種々の善根を修したる者もあり。皆思はく、我はかゝる善根を持てればなん

雪の如し—今の火の非常に熱苦なるに對すれば前のものは心易きを譬へたるもの

業因—其處に生れ行く因となる行爲

ざる日はあるべからず。設ひ日はありとも月はあるべからず。設ひ月はありとも年はあるべからず。設ひ年はありとも一期生妄語せざる者はあるべからず。若しからば、當世の諸人一人もこの地獄をまぬがれがたきか。

第六に焦熱地獄とは、大叫喚地獄の下にあり。縱廣前におなじ。此の地獄に種々の苦あり。若此の地獄の豆計の火を閻浮提に置けらんに、一時にやけ盡きなん。況や罪人の身の耎なること綿のごとくなるをや。此の地獄の人は、前の五つの地獄の火を見る事雪の如し。譬へば人間の火の薪の火よりも、鐵銅の火の熱きが如し。壽命の長短は人間の千六百歳を、第六佗化天の一日一夜として、此天の壽、千六百歳也。此の天の千六百歳を一日一夜として此の地獄の壽命一千六百歳なり。業因を云はゞ、殺生、偸盜、邪婬、飲酒、妄語の上、邪見とて、因果なしといふ者此の中に墮つべし。邪見とは、有人の云はく、人飢ゑて死ぬれば天に生るべし等と云々。總じて因果を知らぬ者を邪見と申すなり。世間の法には慈悲なき者を邪見の者といふ。當世の人々此の地獄を免かれがたきか。

第七に大焦熱地獄とは、焦熱の下にあり。縱廣前の如し。前の六つの地獄の一切の諸苦に十倍して重く受くるなり。其の壽命は半中劫なり。業因に云はゞ、殺生、偸盜、邪婬、

大論—大智度論百卷、龍樹菩薩の作
五百生—五百度生れかはる間
相—すがた、有樣
化樂天—都率天の上の空中に住する天界

かへし、此の罪人を炙る。或は口を開けて沸ける銅の湯を入るれば、五臓やけて下より直に出づ。壽命をいはゞ人間の四百歳を第四の都率天の一日一夜とす。又都率天の四千歳也。都率天の四千歳の壽を一日一夜として此の地獄の壽命四千歳なり。此の地獄の業因をいはゞ、殺生偸盗邪淫の上に飲酒とて酒のむもの此の地獄に墮つべし。當世の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆の大酒なる者、此の地獄の苦免れがたきか。大論には、酒に三十六の失を出し、梵網經には酒盃をすゝめる者五百生に手なき身と生ると說かせ給ふ。人師の釋には蚯蚓體の者となると見えたり。況や酒を酤りて人に與へたる者をや。何に況や酒に水を入れてうるものをや。當世の在家の人々この地獄の苦まぬがれがたし。

第五に大叫喚地獄とは叫喚の下にあり。縱廣前に同じ。其の苦の相は、上の四の地獄の諸の苦に十倍して重くこれを受く。壽命の長短を云はゞ、人間の八百歳は第五の化樂天の一日一夜なり。此天の壽八千歳なり。此の天の八千歳を一日一夜として此の地獄の壽命八千歳なり。殺生偸盗邪淫飲酒の重罪の上に妄語とて虛言せる者此の地獄に墮つべし。當世の諸人は設ひ賢人上人なんどいはるゝ人々も、妄語せざる時はありとも、妄語をせ

墮つ。當世の偸盗のもの、ものをぬすむ上、物の主を殺すもの此の地獄に墮つべし。
第三に衆合地獄とは、黒繩地獄の下にあり。縱廣は上の如し。多くの鐵の山二つづゝに相向へり。牛頭馬頭等の獄卒手に棒を取つて罪人を駈て山の間に入らしむ。此の時兩の山迫り來りて合せ押す。身體くだけて血流れて地にみつ。又種々の苦あり。人間の二百歳を第三の夜摩天の一日一夜として、此の天の壽二千歳なり。此の天の壽を一日一夜として此の地獄の壽命二千歳なり。殺生偸盗の罪の上に邪婬とて佗人の妻を犯す者此の地獄の中に墮つべし。而るに當世の僧尼士女、多分は此の罪を犯す。殊に僧にこの罪多し。士女は各々互に貪り又人目をつゝまざる故に此の罪を犯さず。僧は一人ある故に淫欲乏しきところに、若有身れば父糾されあらはれぬべき故に、獨ある女人をおかさず、もしや隱るゝと佗人の妻をうかゞひ、ふかく隱れんと思ふなり。當世のほか、貴とげなる僧の中に、ことに此の罪又多くあるらんと覺ゆ。されば多分は當世貴げなる僧此の地獄に墮つべし。
第四に叫喚地獄とは、衆合の下にあり。從廣前に同じ。獄卒惡聲出して弓箭をもて罪人を射る。又鐵の棒を以て頭を打ちて熱鐵の地を走らしむ。或は熱鐵の煎架に打返しうち

持律―戒律をよく持ち守ること

水の上におけば沈まざることなきが如し。又懺悔すれども懺悔の後に重ねて此の罪を作れば、後の懺悔には此の罪消えがたし。譬へば、盗をして獄に入りぬるものの、しばらく經て後に御免を蒙りて獄を出づれども、又重ねて盗をして獄に入りぬれば、出でゆるされがたきが如し。されば當世の日本國の人は上一人より下萬民に至るまで、此の地獄をまぬがるゝ人は一人もありがたかるべし。何に持戒の覺を取れる持律の僧たりとも、蟻虱なんどを殺さず、蚊虻をあやまたざるべきか。況や其の外山野の鳥鹿江海の魚鱗を日々に殺すものをや。何に況や牛馬人等を殺す者をや。

第二に黑繩地獄とは等活地獄の下にあり。縱廣は等活地獄の如し。獄卒罪人をとらへて熱鐵の地に伏せて、熱鐵の繩をもて身にすみうち、熱鐵の斧をもて繩に隨つて斬りさきけづる。又鋸を以てひく。又左右に大なる鐵の山あり。山の上に鐵の幢を立て、鐵の繩を張り、罪人に鐵の山を負せて繩の上よりわたす。繩より落てくだけ、或は鐵の鑊に墮し入れて煮らる。此の苦は上の等活地獄の苦よりも十倍なり。人間の一百歳は第二の忉利天の一日一夜也。其の壽一千歳なり。此の天の壽一千歳を一日一夜として、此の第二の地獄の壽命一千歳なり。殺生の上に偸盗とて、盗をかさねたるもの、此の地獄に

等活ー八大地獄中の最も罪苦輕き所

顯謗法鈔

本朝沙門日蓮撰

第一に八大地獄の因果を明し、第二に無間地獄の因果の輕重を明し、第三に問答料簡を明し、第四に行者弘經の用心を明す。

第一に八大地獄の因果を明さば、第一に等活地獄とは、此の閻浮提の地の下一千由旬にあり。此の地獄は縱廣齊等にして一萬由旬なり。此の中の罪人は互に害心をいだく。若たま〳〵相見れば犬と猨との逢るがごとし。各鐵の爪をもて互につかみさく。血肉既に盡きぬれば唯骨のみあり。或は獄卒手に鐵杖を取りて頭より足にいたるまで皆打ち碎く。身體くだけて沙のごとし。或は利刀をもて分々に肉をさく。然れども又蘇生々々するなり。此の地獄の壽命は人間の晝夜五十年をもて第一四王天の一日一夜として四王天の天人の壽命の五百歳なり。四王天の五百歳を此の等活地獄の一日一夜として其の壽命五百歳なり。此の地獄の業因をいはゞ、ものの命を斷つもの、此の地獄に墮つ。螻蟻蚊蝱等の小蟲を殺せる者も、懺悔なければ必ず此の地獄に墮つべし。譬へば、鍼なれども

怨を結べる輩は未だ一分も悔る心も起さず。是體の人の受くる業報を大集經に說いて云はく、若人あつて千萬億の佛の所にして佛身より血を出さん。意に於て如何。此の人の罪をうる事寧多しとせんや否や、大梵王言さく。若人只一佛の身より血を出さん無間の罪尙多し。無量にして算をおきても數をしらず。阿鼻大地獄の中に墮ちん。何に況や萬億の佛身より血を出さん者を見んをや。終によく廣く彼の人の罪業果報を說く事あることなからん。但し如來をば除き奉る。佛の言はく大梵王若し我が爲に髮をそり袈裟をかけ片時も禁戒を受けず缺犯を受けん者を、なやまし、罵り、杖をもて打ちなんどする事有らば、罪を得る事彼よりは多し。

弘長二年壬戌正月十六日

日　蓮　花　押

工藤左近尉殿

凡夫—迷を離れぬもの、男女に通ず

と云ひて是を惱すは、此の人佛法の大燈明を滅せんと思へと說かれたり。然れば僧の恩を報じ難し。されば三寶の恩を報じ給ふべし。古の聖人は雪山童子、常啼菩薩、藥王大士、普明王等、此等は皆我が身を鬼の打飼となし、身の血髓をうり、臂を燒き、頭を捨て給ひき。然るに末代の凡夫三寶の恩を蒙りて三寶の恩を報ぜず。いかにしてか佛道を成ぜん。然るに心地觀經、梵網經等には、佛法を學し圓頓の戒を受けん人は必ず四恩を報ずべしと見えたり。某は愚癡の凡夫血肉の身也。三惑一分も斷ぜず。只法華經の故に罵詈毀謗せられて、刀杖を加へられ流罪せられたるを以て、大聖の臂を燒き髓をくだき頭をはねられたるに擬へんと思ふ。是一つの悅なり。第二に大なる歎と申すは、法華經第四に云はく、

若有㆓惡人㆒。以㆓不善心㆒。於㆓一劫中㆒。現㆓於佛前㆒。常毀㆓罵佛㆒。其罪尙輕。若人以㆓一惡言㆒毀㆘呰在家出家讀㆓誦法華經㆒者㆖。其罪甚重等云云。

此等の經文を見るに信心を起し、身より汗を流し兩眼より淚を流す事雨の如し。我一人此の國に生れて多くの人をして一生の業を造らしむる事を歎く。彼不輕菩薩を打擲せし人、現身に改悔の心を起せしだにも、猶罪消え難くして千劫阿鼻地獄に墮ちぬ。今我に

六親―父母、妻子、兄、弟

果地―さとりの地位

其の一分をば我が身に用ひ給ふ。今六十三分をば此の世界に留め置きて、五濁雜亂の時、非法の盛ならん時、謗法の者國に充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力減ぜん時、日月光を失ひ、天龍雨をくださず、地神地味を減ぜん時、草木根莖枝葉華菓藥等の七味も失せん時、十善の國王も貪瞋癡をまし、父母六親に孝せず親しからざらん時、我が弟子無智無戒にして髮ばかりを剃りて守護神にも捨てられて、活命の計なからん比丘比丘尼の命の支とせんと誓ひ給へり。又果地の三分の功德二分をば我が身に用ひ給ひ、佛の壽命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅し、殘る所の四十年の壽命を留め置きて我等に與へ給ふ恩をば、四大海の水を硯の水とし、一切の草木を燒きて墨となして、一切の獸の毛を筆とし、十方世界の大地を紙と定めて注し置くとも、爭か佛の恩を報じ奉るべき。法の恩を申さば、法は諸佛の師也。諸佛の貴き事は法に依る。されば佛恩を報ぜんと思はん人は法の恩を報ずべし。次に僧の恩をいはゞ、佛寶法寶は必ず僧によて住す。譬へば薪なければ火無く大地無ければ草木生ずべからず。佛法有りといへども僧有りて習ひ傳へずんば、正法像法二千年過ぎて末法へも傳はるべからず。故に大集經に云はく、五箇の五百歲の後に、無智無戒なる沙門を失あり

惡律儀—惡道を行ふもの

四衆—佛弟子の四類。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷

三光—日光、月光、星光

流布の國主に値ひ奉り其の國にて法華經の御名を聞きて修行し、是を行じて讒言を蒙り流罪に行はれまゐらせて候ふ國主には未だ値ひまゐらせ候はぬ歟。法華經に云はく、

是法華經。於二無量國中一乃至名字不レ可レ得レ聞。何況得レ見受持讀誦云云。

されば此の讒言の人。國主こそ我が身には恩深き人にはおはしまし候ふらめ、佛法を習ふ身には必ず四恩を報ずべきに候か。四恩とは心地觀經に云はく、一には一切衆生の恩。一切衆生なくば衆生無邊誓願度の願を發し難し。又惡人無くして菩薩に留難をなさずば、いかでか功德をば增長せしめ候ふべき。二には父母の恩。六道に生を受くるに必ず父母あり。其の中に或は殺盗惡律儀謗法の家に生れぬれば、我と其の科を犯さざれども其の業を成就す。然るに今生の父母は我を生みて法華經を信ずる身となせり。梵天帝釋四大天王轉輪聖王の家に生れて、三界四天を讓られて人天四衆に恭敬せられんよりも、恩重きは今の某が父母なる歟。三には國王の恩。天の三光に身をあたゝめ、地の五穀に神を養ふこと皆是國王の恩也。其の上今度法華經を信じ今度生死を離るべき國主に値ひ奉れり。爭か少分の怨に依りて愚に思ひ奉るべきや。四には三寶の恩。釋迦如來無量劫の間菩薩の行を立て給ひし時、一切の福德を集めて六十四分となして功德を身に得給へり。

行住坐臥―あるく時、立止る時、坐し居る時、寢て居る時、これを四威儀といふ

止事なく―貴しといふこと

りなる也。法華經を殊に信じまゐらせ候し事はわづかに此の六七年よりこのかた也。又信じて候ひしかども懈怠の身たる上、或は學文と云ひ或は世間の事に障えられて、一日にわづかに一卷一品題目計也。去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで二百四十餘日の程は、晝夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候ふ。其の故は法華經の故にかゝる身となりて候へば、行住坐臥に法華經を讀み行ずるにてこそ候へ。人間に生を受けて是程の悅は何事か候ふべき。凡夫の習我と勵みて菩提心を發して後生を願ふといへども、自ら思ひ出し十二時の間に一時二時こそは勵み候へ。是は思ひ出さぬにも御經をよみ、讀まざるにも法華經を行ずるにて候か。無量劫の間六道四生を輪回し候ひけるには、或は謀叛を起し強盜夜打等の罪にてこそ、國主より禁をも蒙り流罪死罪にも行はれ候ふらめ。是は法華經を弘むるかと思ふ心の強盛なりしに依りて、惡業の衆生に讒言せられてかゝる身になりて候へば、定めて後生の勤にはなりなんと覺え候ふ。是程の心ならぬ晝夜十二時の法華經の持經者は、末代には有りがたくこそ候ふらめ。又止事なくめでき事に侍り。無量劫の間六道に回り候ひけるには、多くの國主に生れ値ひ奉りて或は寵愛の大臣關白等ともなり候ひけん。若爾らば國を給はり財寶官祿の恩を蒙りけるか。法華經

さてこそ候ふ—斯くの如き有様にてあり
螻蟻—虫けら、あり

てき。何に況世漸く五濁の盛になりて候ふをや。況世末代に入りて法華經を苟にも信ぜん者の、人にそねみ妬まれん事は夥しかるべきか。故に法華經に云はく、

如來現在猶多二怨嫉一。況滅度後 云云。

始に此の文を見候ひし時はさしもやと思ひ候ひしに、今こそ佛の御言は違はざりけるものかなと、殊に身に當て思ひ知られて候へ。日蓮は身に戒行なく心に三毒を離れざれども、此の御經を若や我も信を取り人にも緣を結ばしむるかと思ひて、隨分世間の事穩ならんと思ひき。世末になりて候へば妻子を帶して候ふ比丘も、人の歸依をうけ、魚鳥を服する僧もさてこそ候ふか。日蓮はさせる妻子をも帶せず、魚鳥をも服せず。只法華經を弘めんとする失によりて、妻子を帶せずして犯僧の名四海に滿ち、螻蟻をも殺さざれども惡名一天に彌れり。恐らくは在世に釋尊を諸の外道が毀り奉りしに似たり。是偏に法華經を信ずる事の、餘人よりも少し經文の如く信をも向けたる故に、惡鬼其の身に入りて、そねみをなすかと覺え候へば、是程の卑賤無智無戒の者の、二千餘年已前に說かれて候ふ法華經の文に乘せられて、留難に値ふべしと佛記し置かれまゐらせて候ふ事のうれしさ、申し盡し難く候ふ。此の身に學文つかまつりし事やうやく二十四五年にまか

行合—ほどこしの物
第六天—下より數へて第六番目の天上界
魔王—第六天に居る天魔の王
まゐらせじ料—參らせまいとの爲
三善道の業—阿修羅、人間、天上に生るゝ行爲の業
獨尊—佛のこと

云ひ、或は行合奉る時は面を覆うて眼に見奉らじとし、或は戸を閉ぢ窓を塞ぎ、或は國王大臣の諸人に向つては邪見の者也高き人を罵る者なんど申せし也。大集經涅槃經等に見えたり。させる失も佛にはおはしまさざりしかども、只此の國の僻偏として惡業の衆生が生れ集りて候ふうへ、第六天の魔王が此の國の衆生を佗の淨土へ出さじとたばかりを成して、かく、事にふれて僻める事をなす也。此のたばかりも詮ずる所は佛に法華經を說せまゐらせじ料と見えて候ふ。其の故は魔王の習として三惡道の業を作る者をば悅び、三善道の業を作る者をばなげく。又三善道の業を作る者をば甚うなげかず、三乘とならんとする者をば痛うなげく。又三乘となる者をばいたう嘆かず、佛となる業をなす者をば强になげき、事にふれて障をなす。法華經は一文一句なれども耳にふるゝ者は既に佛になるべきと思ひて、いたう第六天の魔王もなげき思ふ故に、方便を回して留難をなし、經を信ずる心を捨てしめんとたばかる。而るに佛の在世の時は濁世なりといへども、五濁の始たりし上、佛の御力をも恐れ、人の貪瞋癡邪見も强盛ならざりし時だにも、竹杖外道は神通第一の目連尊者を殺し、阿闍世王は惡象を放ちて三界の獨尊を威し奉り、提婆達多は證果の阿羅漢蓮華比丘尼を害し、瞿伽利尊者は智慧第一の舍利弗に惡名を立

能忍—釋迦牟尼を能仁とも能忍ともいふ

沙門—梵語、出家のこと

習氣—前世の習慣の餘波のこと

四恩鈔

抑此の流罪の身になりて候ふにつけて二つの大事あり。一には大なる悦あり。其の故は。此の世界をば娑婆と名づく。娑婆と申すは忍と申す事也。故に佛をば能忍と名づけたてまつる、此の娑婆世界の内に百億の須彌山百億の日月百億の四州あり。其の中の中央の須彌山日月四州に佛は世に出でまします。此の日本國は其の佛の世に出でまします國よりは丑寅の角にあたりたる小島也。此の娑婆世界より外の十方の國土は皆淨土にて候へば、人の心もやはらかに、賢聖を罵り惡む事も候はず。此の國土は十方の淨土に捨て果てられて候ふ十惡五逆、誹謗賢聖、不孝父母、不敬沙門等の科の衆生が、三惡道に墮ちて無量劫を經て還りて此の世に生れて候が、先生の惡業の習氣失せずして、やゝもすれば十惡五逆を作り、賢聖を罵り、父母に孝せず、沙門をも敬はず候ふ也。故に釋迦如來世に出でましませしかば、或は毒藥を食に雜へて奉り、或は刀杖惡象師子惡牛惡狗等の方便を以て害し奉らんとし、或は女人を犯すと云ひ、或は卑賤の者或は殺生の者と

勘文ー自己の考へたる文をさす

文應元年、「大歳庚申」之を勘ふ。正嘉より、これを始め、文應元年に勘へ畢る。いぬる正嘉元年「大歳丁巳」八月三日戊亥の尅の大地震を見て、これを勘ふ。その後、文應元年「大歳庚申」七月十六日を以て、宿谷禪門に付きて、最明寺入道殿に獻じ奉れり。その後文永元年「大歳甲子」七月五日大明星の時、いよ〳〵、この災の根源を知る。文應元年「大歳庚申」より、文永五年「大歳戊辰」後の正月十八日に至るまで九箇年を經て、西方大蒙國より、わが朝を襲ふべきの由、牒狀これを渡す。又同六年重ねて、牒狀これを渡す。すでに、勘文これに叶ふ。これに準じて。これを思ふに、未來亦しかるべきか。この書は徵ある文なり。これ偏に、日蓮の力にあらずして、法華經の眞文、聖の感應する所か。

文永六年「大歳己巳」十二月八日、これを寫す。（原漢文）

重んず―重きものと見る、恐しき方に云ふなり
盛焰―無間地獄の火をさす
佛國、寶の土―共に淨土といふに同じ

廣く、衆經を披きたるに、專ら、謗法を重んず。悲しいかな、皆正法の門を出でて、深く邪法の獄に入る。愚なるかな、各惡敎の網に懸りて、眞に謗敎の網に纏る。これ、朦霧の迷、彼の盛焰の底に沈む。豈に愁へざらんや。豈に苦しからざらんや。汝早く、信仰の心を改めて、速に、實乘の一善に歸せよ。然らば、則ち三界は皆佛國なり。佛國それ衰へんや。十方は悉く寶の土なり、寶土何ぞ壞れんや。國に衰微無く、土に破壞無くんば、身は是安全にして、心はこれ禪定ならん。此の詞、此の言、信ず可く崇む可しと。

客の曰はく、今生、後生、誰か愼まざらん、誰か恐れざらん。此の經文を披きて、具に佛語を承るに、誹謗の科至つて重く、毀法の罪誠に深し。我一佛を信じて、諸佛を抛ち、三部經を仰ぎて、諸經を閣きしは、是私曲の思にあらずして、則ち、先達の詞に隨ひしなり。十方の諸人も亦復是の如くなるべし。今世には、性心を勞し、來生には、阿鼻に墮ちんこと、文明かに、理詳かなり。疑ふべからず。彌貴公の慈誨を仰ぎて、益、愚客の癡心を開き、速かに、對治を回して、早く泰平を致し、先づ生前を安んじ。更に、沒後を扶けん。唯我信ずるのみにあらず、又、他の誤を誡めん耳と。

ず、無間の獄に墮ちなん。所以は、何に。大集經に云はく、

若有國王。於無量世修施戒慧。見我法滅。捨不擁護。如是所種無量善根悉皆滅失。乃至其王不久當遇重病。壽終之後生大地獄。如王夫人太子大臣城主柱師郡主宰官亦復如是。

仁王經に云はく、

人壞佛教。無復孝子。六親不和。天龍不祐。疾疫鬼日來侵害。災怪首尾。連禍縱橫。死入地獄餓鬼畜生。若出爲人。兵奴果報。如響如影。如人夜書火滅字存。三界果報亦復如是。

法華經第二に云はく、

若人不信。毀謗此經。乃至其人命終入阿鼻獄。

同第七卷不輕品に云はく、

千劫於阿鼻地獄。受大苦惱。

涅槃經に云はく、

遠離善友。不聞正法。住惡法者。是因緣故。沈沒在於阿鼻地獄。所受身形縱橫八萬四千由延。

ほ残れり。所以佗國の侵逼の難は、自國の叛逆の難なり。大集經の、三災の内、二災早く顯れ、一災未だ起らず。所以兵革の災なり。金光明經の内、種々の災禍一々起ると雖も、佗方の怨賊、國内を侵掠する此の災未だ露れず、此の難未だ來らず。仁王經の七難の内、六難今盛にして、一難未だ現れず。所以四方の賊來りて、國を侵すの難なり。加之ず、國土亂れん時は、先づ鬼神亂る、鬼神亂るゝが故に、萬民亂ると。今この文に就きて、具に事の情を案ずるに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡ぶ。先難是明なり、後災何ぞ疑はん。若し、殘る所の難、惡法の科に依りて、竝び起り、競ひ來らば、その時何にか爲んや。帝王は國家を基として、天を治め、人臣は田園を領して、世上を保つ。而るに、佗方の賊來りて、其の國を侵逼し、自界叛逆して、其の地を掠領せば、豈驚かざらんや、騷がざらんや。國を失ひ、家を滅せば、何の所に世を遁れん。汝、須らく一身の安堵を思はゞ、先づ四表の靜謐を禱るべきか。就中、人の世に在るや、各後生を忘る。是を以て、或は、邪教を信じ、或は、謗法を貴ぶ。各、是非に迷ふことを惡むと雖も、猶ほ佛法に歸することを哀む。何ぞ同じく、信心の力を以て、妄りに、邪義の詞を宗めんや。若し、執心飜らず、亦、曲意猶ほ存せば、早く有爲の郷を辭して、必

四表—四方

有爲—まよひ

席を避け―恐入りて謙遜する體

一闡提の施―不信者に布施すること

白浪、綠林―共に盗賊の異名こゝは異信者をさす

蘭室―善香の室に入れば自ら香を得ること

麻畝―麻の直き裡に植えらるれば蓬も直く育つこと

容則ち席を避け、襟を刷ひて曰はく、佛教は斯區々にして、旨趣窮め難く、不審多端にして、理非明かならず。但し、法然上人の選擇現在するや、諸佛、諸經、諸菩薩、諸天等を以て、捨閉閣抛を載す。其の文顯然なり。玆に因りて、聖人國を去り、善人所を捨て、天下飢渇し、世上疫病すと。今主人、廣く經文を引きて、明に、理非を示す。故に、妄執既に飜り、耳目數朗かなり。所詮、國土泰平、天下安穩は、一人より、萬民に至るまで、好む所なり、樂ふ所なり。早く、一闡提の施を止め、永く衆の、僧尼の供を致し、佛海の白浪を收め、法山の綠林を截らば、世は羲農の世と成り、國は唐虞の國と爲らん。然して後、法水の深淺を斟酌し、佛家の棟梁を崇重せんと。主人悅びて曰はく、鳩化して鷹と爲り、雀變じて蛤と爲る。悅しいかな、汝、蘭室の友に交り、麻畝の性となる。誠に、その難を顧みて、專ら此の言を信ぜば、風和ぎ、浪靜にして、不日に豐年ならんのみ。但し、人の心は時に隨つて移り、物の性は、境に依つて改る。譬へば水中の月の、波に動ぎ、陣前の軍の、劍に靡くが猶し。汝、當座に信ずと雖も、後定めて永く忘れん。若し、先づ、國土を安んじて、現當を祈らんと欲せば、速に、情慮を囘し、忩ぎて對治を加へよ。所以は何に。藥師經の、七難の内、五難忽ちに起り、二難猶

打辱―打ちはづかしめ
其の父―佛をさす
後昆―後代に同じ

客の曰はく、若し、謗法の輩を斷じ、若し佛禁の違を絶たんには、彼の經文の如く、斬罪を行ふべきか。若し然らば、殺害相加へ、罪業何かせんや。則ち大集經に云はく、

剃頭著袈裟。持戒及毀戒。天人可供養彼。則爲供養我。是我子。若有撾打彼。則爲打我子。若罵辱彼。則爲毀辱我。

料り知りぬ、善惡を論せず、是非を擇ぶ無く僧侶たるに於いては、供養を展ぶべし。何ぞ其の子を打辱して、忝くも其の父を悲哀せしめん。彼の竹杖の目連尊者を害せしや、永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺ししや、久しく阿鼻の焔に咽ぶ。先證これ明にして、後昆最も恐あり。謗法を誡むるに似て、既に、禁言を破る。此の事信じ難し。如何でか意を得む。

主人曰はく、客明に經文を見て、猶ほ、斯の言を成す。心の及ばざるか、理の通ぜざるか。全く佛子を禁むるに非ずして、唯偏に謗法を惡むなり。それ、釋迦の以前の佛教は、其の罪を斬ると雖も、能く之を忍ぶ。以後の經說は則ちその施を止む。然れば則ち、四海の萬邦、一切の四衆、その惡に施さず、此の善に歸さば、何なる難か竝び起り、何なる災か競ひ來らんと。

供―五逆を犯せる者の供養
施―法をそしる者の布施
遺體―佛滅後の形像
墎外―國外といふに同じ
釋迦の手指云云―釋迦の佛像を改めて彌陀像に造り直すこと

無量の五逆に勝れたり。故に、阿鼻大城に墮ちて、永く出づる期無けん。涅槃經の如くんば、設ひ、五逆の供を許すとも、謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は、必ず、三惡道に落つ。謗法を禁むる者は、定めて、不退の位に登らん。所謂、覺德とは、これ迦葉佛なり。有德とは、則ち、釋迦文なり。法華、涅槃の經教は、一代五時の肝心にして、其の禁實に重し。誰か歸仰せざらんや。而るに謗法の族、正道の人を忘れ、剩へ、法然の選擇に依りて、彌〻愚癡の盲瞽を增す。是を以て或は彼の遺體を忍びて、木畫の像に露はし、或はその妄語を信じて、莠言を模に彫り、之を海內に弘め、之を墎外に翫ぶ。仰ぐ所は則ち、その家風にして、施す所は則ちその門弟なり。然る間、或は、釋迦の手指を切りて、彌陀の印相を結び、或は、東方如來の鴈字を改めて、西土教主の鵞王を居ゑ、或は、四百餘回の如法經を止めて、西方淨土の三部經となし、或は、天台大師の講を停めて、善導の講となす。此の如き群類、それ誠に盡し難し。是破佛にあらずや、是破僧にあらずや。この邪義は則ち、選擇に依るなり。嗟呼悲しいかな、如來誠諦の禁言に背くこと。哀れなり、愚侶、迷惑の麤語に隨ふこと。早く天下の靜謐を思はゞ、須く國中の謗法を斷つべしと。

王於爾時。身被刀劍鉾槊之瘡。體無完處如芥子許。爾時覺德尋讃王言。善哉善哉。王今眞是護正法者。當來之世。此身當爲無量法器。王於是時。得聞法已。心大歡喜。尋即命終生阿閦佛國。而爲彼佛。作第一弟子。其王將從人民眷屬有戰鬪者。有歡喜者。一切不退菩提之心。命終悉生阿閦佛國。覺德比丘卻後壽終亦得往生阿閦佛國。而爲彼佛。作聲聞衆中第二弟子。若有正法欲盡時。應當如是受持擁護。迦葉爾時王者則我身是。說法比丘迦葉佛是。迦葉護正法者。得如是等無量果報。以是因緣。我於今日得種種相。以自莊嚴。成法身不可壞身。佛告迦葉菩薩。是故護法優婆塞等。應執持刀杖擁護如是。善男子。我涅槃後。濁惡之世國土荒亂。互相抄掠。人民飢餓。爾時多有爲飢餓故發心出家。如是之人名爲禿人。是禿人輩見護持正法。驅逐令出。若殺若害。是故我今聽持戒人依諸白衣持刀杖者。以爲伴侶。雖持刀杖。我說是等名曰持戒。雖持刀杖。不應斷命。

法華經に云はく

若人不信毀謗此經。即斷一切世間佛種。乃至其人。命終入阿鼻獄。已上

夫、經文顯然たり、私の詞何ぞ加へん。凡て法華經の如くんば、大乘經典を謗る者は、

佛告波斯匿王。是故付屬諸國王。不付屬比丘比丘尼。何以故。無王威力。

涅槃經に云はく、

今以無上正法付屬諸王大臣宰相及四部衆。毀正法者。大臣四部之衆。應當苦治。

又云はく、

佛言。迦葉以能護持正法因緣故。得成就是金剛身。善男子護持正法者。不受五戒。不修威儀。應持刀劍弓箭鉾槊。

又云はく、

若有受持五戒之者。不得名爲大乘人也。不受五戒。爲護正法。乃名大乘。護正法者。應當執持刀劍器仗。雖持刀杖。我說是等。名曰持戒。

又云はく

善男子。過去之世於此拘尸那城。有佛出世。號歡喜增益如來。佛涅槃後。正法、住世無量億歲。餘四十年佛法末。爾時有一持戒比丘。名曰覺德。爾時多有破戒比丘。聞作是說。皆生惡心。執持刀杖。逼是法師。是時國王名曰有德。聞是事已。爲護法故。卽便往至說法者所。與是破戒諸惡比丘。極共戰鬪。爾時說法者得免厄害。

咎。如是等亦名趣向一闡提道。唯除如此一闡提輩。施其餘者。一切讃歎。

又云はく、

我念往昔。於閻浮提作大國王。名曰仙豫。愛念敬重大乘經典。其心純善。無有麤惡嫉悋。善男子。我於爾時。心重大乘。聞婆羅門誹謗方等。聞已卽時斷其命根。善男子以是因緣。從是已來不墮地獄。

又云はく

如來昔爲國王。行菩薩道時。斷絕爾所婆羅門命。

又云はく、

殺有三。謂下中上。下者蟻子乃至一切畜生唯除菩薩示現生者。以下殺因緣。墮於地獄畜生餓鬼。具受下苦。何以故。是諸畜生有微善根。是故殺者具受罪報。中殺者從凡夫人至阿那含。是名爲中。以是業因。墮於地獄畜生餓鬼。具受中苦。上殺者父母乃至阿羅漢辟支佛畢定菩薩。墮於阿鼻大地獄中。善男子。若有能殺一闡提者。則不墮此三種殺中。善男子。彼諸婆羅門等。一切皆是一闡提也。

仁王經に云はく、

選擇に因るの由、盛にその詞を增し、彌その旨を談ず。所詮天下泰平、國土安穩は、君の樂ふ所、土民の思ふ所なり。夫國は法に依りて昌へ、法は人に因りて貴し。國亡び、人滅せば、佛を誰か崇む可き。法を誰か信ずべきや。先づ、國家を祈りて、佛法を立つ須し。若し、災を消し、難を止むるの術あらば聞かんと欲すと。

主人曰はく、余はこれ頑愚にして、敢て、賢を存せず。唯經文に就きて、聊か所存を述べん。抑、治術の旨、内外の間、その文幾多ぞや。具に擧ぐべきこと難し。但し、佛道に入りて、數、愚案を囘すに、謗法の人を禁じて、正道の侶を重んぜば、國中安穩にして、天下泰平ならん。即ち涅槃經に云はく、

佛言。唯除二一人一餘一切施。皆可二讚歎一。純陀問言。云何名爲二唯除一人一。佛言。如二此經中所一レ說破戒。純陀復言。我今未レ解。唯願說レ之。佛語二純陀一言。破戒者。謂一闡提。其餘在所一切布施。皆可二讚歎一。獲二大果報一。純陀復問。一闡提者其義云何。佛言。純陀若有二比丘及比丘尼優婆塞優婆夷一。發二麤惡言一誹二謗正法一。造二是重業一永不二改悔一。心無二懺悔一。如レ是等人名爲レ趣二向一闡提道一。若犯二四重一作二五逆罪一。自知二定犯一如レ是重事一。而心初無二怖畏懺悔一。不レ肯二發露一。於二彼正法一永無二護惜建立之心一。毀呰輕賤。言多二過

莠言―不正の言
この義云々―意見はよきも上奏するは不穩當ぞとなり
騏―一日千里を走る駿馬
碧蘿―青き蔓草
感神院―祇園にあり
犬神人―卑しき宮仕人

り、碧蘿松頭に懸りて、千尋を延ぶ。弟子一佛の子と生れ、諸經の王に事ふ。何ぞ、佛法の衰微を見て、心情の哀惜を起さざらん。其の上、涅槃經に云はく、

若善比丘。見壞法者、置不呵責駈遣擧處、當知是人佛法中怨。若能駈遣呵責擧處。是我弟子眞聲聞也

余善比丘の身たらずと雖も、佛法中怨の責を遁れん爲に、唯、大綱を撮つて、粗ぼ一端を示す。其の上、去る元仁年中に、延暦興福の兩寺より、度々、奏聞を經、勅宣御敎書を申下して、法然の選擇の印板を大講堂に取り上げ、三世の佛恩を報ぜん爲に、之を燒失せしめ、法然の墓所に於きては、感神院の犬神人に仰付けて、破却せしむ。其の門弟隆觀、聖光、成覺、薩生等は、遠國に配流し、その後未だ、御勘氣を許されざるなり。豈に未だ、勘狀を進ぜずと云はんや。

客則ち和ぎて曰はく、經を下し、僧を謗ること、一人として論じ難し。然れども、大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、竝に、一切の諸佛、菩薩及び諸の世天等を以て、捨、閉、閣、抛の四字を載す。其の詞勿論なり。其の文顯然たり。此の瑕瑾を守りて、その誹謗をなす。迷うて言ふか、覺りて語るか。愚賢辨たず、是非定め難し。但し、災難の起は、

釋門―佛家といふに同じ
樞楗―棟梁、座主長吏等の首職をいふ

阮藉逸才。蓬頭散帶。後公卿子孫皆教レ之。奴苟相辱者。方達ニ自然一撙節兢持者。呼爲ニ田舍一。爲ニ司馬氏滅一相。巳上

又、慈覺大師の入唐巡禮記を案ずるに、云はく、

唐武宗皇帝。會昌元年。敕レ令ニ章敬寺鏡霜法師。於ニ諸寺一傳ニ彌陀念佛教一。毎レ寺三日巡輪不レ絶。同二年。回鶻國之軍兵等侵ニ唐堺一。同三年。河北之節度使忽起レ亂。其後大蕃國。更拒レ命。回鶻國重奪レ地。凡兵亂同ニ秦項之代一。災火起ニ邑里之際一。何況武宗大破ニ佛法一。多滅ニ寺塔一。不レ能レ撥レ亂。遂以有レ事。已上取意

此を以て、之を惟ふに、法然は、後鳥羽院の御宇、建仁年中の者なり。彼の院の、御事既に。眼前に在り。然れば則ち、大唐に例を殘し、吾が朝に證を顯す。汝疑ふことなかれ。汝怪むことなかれ。唯須く凶を捨てて、善に歸し、源を塞ぎ、根を截るべしと。

客聊か和ぎて曰はく、未だ、淵源を究めずして、數其の趣を知る。但し、落華より、柳營に至るまで、釋門に樞楗在り、佛家に棟梁あり。然れども、未だ、勘狀を進ぜず、上奏に及ばず。汝賤身を以て、輙ら莠言を吐く。その義餘あるもその理謂無し。

主人曰はく、予小量たりと雖も、忝くも、大乘を學ぶ。蒼蠅驥尾に附きて、萬里を渡

捨閉閣抛—すて、とぢ、おき、なげうつ、眞實の敎の爲に權の敎を捨つるなり

八荒—八方に同じ

後を立てて、權實を辨ず。而るに、曇鸞、道綽、善導、旣に權に就きて實を忘れ、先に依りて後を捨つ。未だ、佛敎の淵底を探らざる者なり。就中、法然其の流を酌むと雖も、其の源を知らず。所以は何に。大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、竝に、一切の諸佛菩薩、及び、諸の世天等を以て、捨、閉、閣、抛の字を置きて、一切衆生の心を薄うす。是偏に、私曲の詞を展べて、全く、佛經の說を見ざるなり。妄語の至り、惡口の科、言ふも比無く、責めても餘り有り。人皆其の妄語を信じ、悉く其の選擇を貴ぶ。故に淨土の三經を崇めて、衆經を抛ち、極樂の一佛と仰ぎて、諸佛を忘る。誠に是、諸佛諸經の怨敵、聖僧、衆人の讎敵なり。此の邪敎廣く八荒に弘まり、周く十方に遍す。抑も近年の災難、往代の由を以て、强ちに之を恐る、聊か、先例を引きて汝の迷を悟す可し。

止觀の第二に史記を引いて云はく、

周末有下被髮袒身不レ依二禮度一者上。

弘決の第二に此の文を釋するに、左傳を引いて云はく、

初平王之東遷也。伊川見下被レ髮者而於レ野祭上。識者曰。不レ及二百年一其禮先亡。

爰に知りぬ、徵前に顯れ、災後に致ることを。又、

出離―生死のまよひを脫却すること

勢至―法然は幼名を勢至丸と呼び、勢至菩薩の化身と稱せらる

蓼葉―タデの葉

溷厠―かはや、入り了ればその臭を覺えざるに至るとなり

れ幾ぞや。就中、法然上人幼少にして天台山に昇り、十七にして六十巻に渉り、並に、八宗を究め、具に大意を得たり。其の外、一切の經論七遍反覆し、章疏傳記究め看ざることなし。智は日月に齊しく、德は先師に超えたり。然りと雖も、猶、出離の趣に迷ひ、涅槃の旨を辨へず。故に、遍く覿、悉く鑒み、深く思ひ、遠く慮り、遂に、諸經を抛ちて、念佛を修す。其の上、一夢の靈應を蒙り、四裔の親疎に弘む。故に或は、勢至の化身と號し、或は、善導の再誕と仰ぐ。然れは則ち、十方の貴賤、頭を低れ、一朝の男女歩を運ぶ。爾來春秋推移し、星霜相積れり。而るに、忝くも釋尊の敎を疎にして、恣に、彌陀の文を譏る。何ぞ、近年の災を以て、聖代の時に課し、強ひて、先師を毀り、更に、聖人を罵るや。毛を吹きて、疵を求め、皮を剪りて、血を出す。昔より、今に至るまで、此の如き、惡言未だ見ず。惶る可し、愼む可し。罪業至つて重し、科條爭でか遁れん。對座するも猶ほ以て恐ありと、杖を携へて歸らんと欲す。

主人咲み止めて曰はく、辛きを蓼葉に習ひ、臭きを溷厠に忘る。善言を聞きて惡言と思ひ、謗者を指して、聖人と謂ひ、王師を疑うて惡侶に擬す。其の迷誠に深く、其の罪淺からず。事の起りを聞け、委しく其の趣を談ぜん。釋尊說法の内一代五時之間に、先

益を生後に被らしむ。故に、國主は、郡郷を寄せて、燈燭を明らかにし、地頭は、田園を充てて、供養に備ふ。而るを、法然の選擇に依りて、則ち、教主を忘れて、西土の佛駄を貴び、付屬を抛ちて、東方の如來を閣き、唯四巻三部の佛典を專にし、空しく、一代五時の妙典を抛つ。是を以て、彌陀の堂に非らざれば、皆、供佛の志を止め、念佛の者に非ざれば、早く施僧の懐を忘る。故に、佛堂零落して、瓦松の煙老い、僧房荒廢して、庭草の露深し。然りと雖も、各護惜の心を捨てて、竝に建立の急を廢す。是を以て、住持の聖僧行きて歸らず、守護の善神去りて來ることなし。是偏に、法然の選擇に依るなり。悲しいかな、數十年の間、百千萬の人、魔縁に蕩されて、多く佛教に迷へり。傍を好みて、正を忘る、善神怒を爲さざらんや。圓を捨てて、偏を好む、惡鬼便を得ざらんや。若かず彼の萬祈を修せんよりは、此の一凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰はく、我が本師釋迦文、淨土の三部經を說き玉うてより、以來、曇鸞法師は、四論の講說を捨てて、一向に淨土に歸し、道綽禪師は、涅槃の廣業を閣きて、偏に西方の行を弘め、善導和尚は、雜行を抛ちて、專修を立て、慧心僧都は、諸經の要文を集めて、念佛の一行を宗とす。彌陀を貴重すること誠に以て然なり。又往生の人そ

蓮宮―淨土のこと、これを模して造るをいふ
虛空地藏―虛空藏菩薩と地藏菩薩
佛駄―佛陀に同じ、ほとけ
付屬―釋尊の依賴
供佛―佛に供養すること
施僧―僧に布施すること
一凶―念佛の教をさす
釋迦文―釋迦牟尼に同じ
廣業―大乘といふに同じ

攝—をさめ入ること
三國—天竺、支那、日本
一代五時—釋尊の一代の說法を淺深の五段に分ちて五時に次第せるをいふ
三尊—彌陀と觀音と勢至と
華界—華藏世界といふ淨土、これを形どれること

・諸雜行選應歸正行。已上

これに就きて、之を見るに、曇鸞、道綽、善導の謬釋を引いて、聖道淨土、難行、易行の旨を建て、華法、眞言總じて、一代の大乘六百三十七部二千八百八十三卷一切の諸佛菩薩及び、諸の世天等を以て、皆聖道、難行、雜行等に攝して、或は捨て、或は閉ぢ、或は閣き、或は拋つ。此の四字を以て、多く一切を迷はし、剩へ、三國の聖僧、十方の佛弟を以て、皆群賊と號し、併せて罵詈せしむ。近くは、所依の淨土の三部經の、「唯除五逆誹謗正法」の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる、法華經の第二の「若人不信毀謗此經。乃至其人命終入阿鼻獄」の誡文に迷ふ者なり。こゝに、代末代に及び、人聖人にあらず、各冥衢に容りて、竝に直道を忘る。悲しいかな、瞳矇を樹たず。痛しいかな、徒に、邪信を催す。故に、上國王より、下土民に至るまで、皆、經は、淨土三部の外の經なく、佛は、彌陀三尊の外に佛なしと謂へり。仍て、傳教、義眞、慈覺、智證等或は萬里の波濤を渉りて、渡せし所の聖教、或は、一朝の山川を回りて崇むる所の佛像、若しくは、高山の巓に、華界を建てて安置し、若しくは、深谷の底に蓮宮を起て以て崇重す。釋迦藥師光を竝ぶるや、威を現當に施し、虛空地藏の化を成すや、

此中難行道者。卽是聖道門也。易行道者卽是淨土門也。淨土宗學者先須知此旨。設雖先學聖道門人。若於聖道門有其志者。須弃聖道歸於淨土。

又云はく、

善導和尚立正雜二行。捨雜行歸正行之文。第一讀誦雜行者。除上觀經等往生淨土經已外。於大小乘顯密諸經受持讀誦。悉名讀誦雜行。第三禮拜雜行者。除上禮拜彌陀已外。於一切諸佛菩薩等及諸世天等禮拜恭敬。悉名禮拜雜行。私云。見此文須捨雜修專。豈捨百卽百生專修正行。堅執千中無一雜修雜行乎。行者能思量之。又云。貞元入藏錄中。始自大般若經六百卷終于法常住經。顯密大乘經總六百三十七部。二千八百八十三卷也。皆須攝讀誦大乘之一句。當知隨自之前。暫雖開定散門。隨自之後。還閉定散門。一開以後永不閉者。唯是念佛一門。又云。念佛行者。必可具足三心之文。觀無量壽經云。同經疏云。問曰若有解行不同邪雜人等。防外邪異見之難。或行一分二分群賊等喚回者。卽喩別解別行惡見人等。私云。又此中言一切別解別行異學異見等者。是指聖道門。已上 又最後結句文云。夫速欲離生死。二種勝法中。且閣聖道門。選入淨土門。欲入淨土門。正雜二行中。且抛

龍象—高僧のこと

密大—密教の大乘

實大—實大乘

存す—意味す

佛心—禪のこと

邪見熾盛。誹謗正法。已上

文に就きて世を見るに、誠に以て然なり。悪侶を誡めずんば、豈、善事を成さんや。客猶ほ、憤りて曰はく、明王は、一天地に因りて、化を成し、聖人は、理非を察して世を治む。世上の僧侶は、天下の歸する所なり。悪侶に於きては、明王信ず可からず。聖人に非ずんば、賢哲仰ぐ可からず。今賢聖の尊重せるを以て、龍象の輕からざるを知る。何ぞ、妄言を吐きて、强ちに、誹謗を成し、誰人を以て悪比丘と謂ふや。委細に聞かんと欲すと。

主人の曰はく、後鳥羽院の御宇に、法然と云ふ者ありて、撰擇集を作る。則ち、一代の聖教、遍く十方の衆生を迷はす。其の撰擇に云はく、

道綽禪師立聖道淨土二門。而捨聖道。正歸淨土之文。初聖道門者。就之有二。乃至。

之に準じて、之を思ふに、密大、及び、實大を存す應し。然れば則ち、今の、眞言、佛心、天台、華嚴、三論、法相、地論、攝論、此等八家の意正しく此に在るなり。曇鸞法師の往生論註に云はく、

謹案龍樹菩薩十住毘婆沙云。菩薩求阿毘跋致。有二種道。一者難行道。二者易行道。

聽此語。横作法制。不依佛戒。是爲破佛破國因緣。已上

涅槃經に云はく、

菩薩於惡象等。心無恐怖。於惡知識。生怖畏心。爲惡象殺。不至三趣。爲惡友殺。必至三趣。已上

法華經に云はく、

惡世中比丘邪智。心諂曲。未得謂爲得。我慢心充滿。或有阿練若納衣在空閑。自謂行眞道。輕賤人間者。貪著利養故。與白衣說法。爲世所恭敬。如六通羅漢。乃至常在大衆中。欲毀我等故。向國王大臣婆羅門居士及餘比丘衆。誹謗說我惡。謂是邪見人說外道論議。濁劫惡世中。多有諸恐怖。惡鬼入其身。罵詈毀辱我。濁世惡比丘。不知佛方便隨宜所說法。惡口顰蹙。數數見擯出。已上

涅槃經に云はく、

我涅槃後。無量百歲四道聖人悉復涅槃。正法滅後。於像法中。當有比丘。似像持律。少讀誦經。貪嗜飲食。長養其身。雖著袈裟。猶如獵師細視徐行。如貓伺鼠。常唱是言。我得羅漢。外現賢善。内懷貪嫉。如受啞法婆羅門等。實非沙門。現沙門像。

色を作す—立腹すること
金人云々—漢土に佛教の渡りし故事
寺塔—四天王寺建立
鷲頭の月—靈鷲山の說法
雞足の風—雞足山に於て未來の彌勒佛が說法あるべしと傳ふ

大臣城主柱師郡守宰官。亦復如レ是。已上
それ四經の文朗らかにして、萬人誰か疑はん。而るに、盲瞽の輩、迷惑の人妄りに邪說を信じて、正教を辨へず。故に、天下世上諸佛衆生に於て、捨離の心を生じ、擁護の志無し。仍て、善人、聖人、國を捨て、所を去る。是を以て、惡鬼、外道災を成し、難を致すなり。

客色を作して曰はく、後漢の明帝は、金人の夢を悟りて、白馬の教を得たり。上宮太子は守屋の逆を誅して、寺塔の構を成せり。爾來上一人より、下萬民に至るまで、佛像を崇びて、經卷を專にす。然れば則ち、叡山、南都、園城、東寺、四海一州、五畿七道、佛教星の如く羅がり、堂宇雲の如く布けり。鶖子の族は、則ち、鷲頭の月を觀、鶴勒の流は亦、雞足の風を傳ふ。誰か、一代の教を褊し、三寶の跡を廢すと謂はん。若しその證あらば、委しく、其の故を聞かんと。

主人喩して曰はく、佛閣甍を連ね、經藏軒を並べ、僧は竹葦の如く、侶は稻麻に似たり。崇重すること、年舊り、尊貴日に新なり。但し、法師は諂曲にして、人倫に迷惑し、王臣は不覺にして、邪正を辨ずること無し。仁王經に云はく、

諸惡比丘。多求二名利一於二國王太子王子前一。自說二破佛法因緣破國因緣一。其王不レ別。信二

逆。或赤日出黒日出。二三四五日出。或日蝕無光。或日輪一重二三四五重輪。現爲一難也。二十八宿失度。金星彗星輪星鬼星火星水星風星刁星南斗北斗五鎭大星一切國主星三公星百官星。如是諸星。各各諍現。爲二難也。大火燒國。萬姓燒盡。或鬼火龍火天火山神火人火樹木火賊火。如是變怪。爲三難也。大水漂沒百姓。時節返逆。冬雨夏雪。冬時雷電霹礰。六月雨冰霜雹。雨赤水黒水青水。雨土山石山。雨沙礫石。江河逆流。浮山流石。如是變時爲四難也。大風吹殺萬姓。國土山河樹木一時滅沒。非時大風黒風赤風青風天風地風火風水風。如是變爲五難也。天地國土亢陽。炎火洞燃。百艸亢旱。五穀不登。土地赫燃。萬姓滅盡。如是變時爲六難也。四方賊來侵國。內外賊起。火賊水賊風賊鬼賊。百姓荒亂。刀兵劫起。如是怪時爲七難也

大集經に云はく、

若有國王。於無量世。修施戒慧。見我法滅。捨不擁護。如是所種無量善根。悉皆滅失。其國當有三不祥事。一者穀貴。二者兵革。三者疫病。一切善神悉捨離之。其王教令。人不隨從。常爲鄰國之所侵嬈。暴火横起。多惡風雨。暴水增長。吹漂人民。內外親戚。其共謀叛。其王不久。當遇重病。壽終之後。生大地獄中。乃至如王。夫人太子

業の悪比丘。毀壞我正法。損減天人道。諸天神王悲愍衆生者。棄此濁悪國。皆悉向餘方。已上

仁王經に云はく、

國土亂時。先鬼神亂。鬼神亂故萬民亂。賊來劫國。百姓亡喪。臣君太子王子百官共生是非。天地怪異。二十八宿。星道日月。失時失度。多有賊起。

亦云はく、

我今五眼明見三世。一切國王。皆由過去世侍五百佛。得爲帝王主。是爲一切聖人羅漢。而爲來生彼國土中。作大利益。若王福盡時。一切聖人皆爲捨去。若一切聖人去時。七難必起。

藥師經に云はく、

若刹帝利灌頂王等災難起時。所謂人衆疾疫難。他國侵逼難。自界叛逆難。星宿變怪難。日月薄蝕難。非時風雨難。過時不雨難。已上

仁王經に云はく

大王吾今所化百億須彌。百億日月。一一須彌有四天下。其南閻浮提有十六大國。五百中國十千小國。其國土中有七可畏難。一切國王爲是難故。云何爲難。日月失度。時節返

甚深妙法。背甘露味。失正法流。無有威光及以勢力。增長惡趣。損減人天。墜生死河。乖涅槃路。世尊我等四王並諸眷屬及藥叉等。見如斯事。捨其國土。無擁護心。非但我等捨棄是王。必有無量守護國土諸大善神。皆悉捨去。既捨離已。其國當有種種災禍。喪失國位。一切人衆皆無善心。唯有繫縛殺害瞋諍。互相讒諂。枉及無辜。疫病流行。彗星數出。兩日並現。薄蝕無恆。黑白二虹表不祥相。星流地動。井內發聲。暴雨惡風不依時節。常遭飢饉。苗實不成。多有他方怨賊。侵掠國內。人民受諸苦惱。土地無有可樂之處。

大集經に云はく、

佛法實隱沒。鬚髮爪皆長。諸法亦忘失。當時虛空中大聲震於地。一切皆遍動。猶如水上輪。城壁破落下。屋宇悉圮拆。樹林根枝葉華葉菓藥盡。唯除淨居天。欲界一切處七味三精氣損減無有餘。解脫諸善論。當時一切盡。所生華菓味。希少亦不美。諸有井泉池。一切盡枯涸。土地悉鹹鹵。滴裂成丘澗。諸山皆燋然。天龍不降雨。苗稼皆枯死。生者皆死盡。餘草更不生。雨土皆昏闇。日月不現明。四方皆亢旱。數現諸惡瑞。十不善業道貪瞋癡倍增。衆生於父母。觀之如獐鹿。衆生及壽命色力威樂減。遠離人天樂。皆悉墮惡道。如是不善

圓覆―天
方載―地
微管―自己の管見

世早く衰へ、其の法何ぞ廢れたるや。是何なる禍に依り、是何なる誤に由るや。
主人の曰はく、獨り此の事を愁へて、胸臆に憤悱す。客來りて共に嘆く、屢談話を致さん。それ出家して道に入る者は、法に依りて佛を期するなり。而るに今神術も協はず、佛威も驗無し。具に當世の體を覿るに、愚にして、後生の疑を發す。然れば則ち、圓覆を仰ぎて、恨を呑み、方載に俯して慮を深くす。倩ら微管を傾け、聊か經文を披きたるに、世皆正に背き、人悉く惡に歸す。故に、善神國を捨てて相去り、聖人所を辭して還らず。是を以て、魔來り、鬼來り、災起り、難起る。言はずんばある可からず、恐れずんばある可からずと。

客曰はく、天下の災、國中の難、余獨嘆くにあらずして、衆皆悲めり。今蘭室に入りて、初めて芳詞を承るに、神聖去り、辭し、災難竝び起るとは、何の經に出でたるや。その證據を聞かんと。

主人曰はく、其の文繁多にして、其の證弘博なり。金光明經に云はく、

於ニ其國土一雖レ有ニ此經一未ニ嘗流布一生ニ捨離心一不レ樂ニ聽聞一。亦不ニ供養尊重讚歎一。見ニ四部衆持經之人一。亦復不レ能ニ尊重乃至供養一。遂令ニ我等及餘眷屬無量諸。天不レ得レ聞ニ此

利劍卽是—彌陀の名號の譬、善導の文に出づ
西土敎主—阿彌陀佛のこと
東方如來—藥師佛のこと
五瓶—眞言の五佛を指す
五大力—五大力菩薩
觀—樓閣

立正安國論

旅客來りて嘆じて曰はく、近年より、近日に至るまで、天變地妖し、飢饉疾癘遍く天下に滿ち、廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充ち、死を招くの輩既に大半に超え、之を悲まざるの族一人も無し。然る間に、我は、利劍卽是の文を專にし、西土敎主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃みて、東方如來の經を誦し、或は病卽消滅不老不死の詞を仰ぎて、法華眞實の妙文を崇め、或は七難卽滅、七福卽生の句を信じて、百座百講の儀を調へ、或は祕密眞言の敎に因りて、五瓶の水を灑ぎ、或は坐禪入定の儀を全うして、空觀の月を澄し、若しくは七鬼神の號を書して、千門に押し、若しくは五大力の形を圖して、萬戶に懸け、若しくは、天神地祇を拜して、四角四堺の祭祀を企て、若しくは萬民百姓を哀みて、國主國宰の德政を行ふ。然りと雖も、唯肝膽を摧くのみにして、彌飢疫に逼り、乞客目に溢れ、死人眼に滿てり。屍を臥して、觀と爲し、尸を竝べて橋と作す。觀れば夫二離璧を合せ、五緯珠を連ぬ、三寶世に在り、百王未だ窮らず、此の

や。

答へて云はく、彼は阿彌陀經の三部に依りて、これを立て、一代の經に於て、了義經不了義經を分たずしてこれを立つ。故に、法經涅槃の義に對して、これを難ずる時は、その義壞れ了んぬ。(原漢文)

情執―まよひ

來り玉はず。これ等の權文は、四十餘季の間は、教主も權佛の始覺の佛なり。佛權なるが故に所説も亦權なり。

故に四十餘季の權佛の説はこれを信ずべからず。今の法文涅槃は、久遠實成の圓佛の實說なり、十界互具の實言なり。亦多寶十方の諸佛來りて、これを證明し玉ふ。故にこれを信ずべし。阿彌陀經の説、無量義經の未顯眞實の語に壞れ了んぬ。全く釋迦一佛の語にして、諸佛の證明にはあらざるなり。二に經に就きて信を立つとは、無量義經に四十餘季の諸經を擧げて、未顯眞實といふ。涅槃經に云はく、

如來雖レ無ニ虛妄之言一、若知下衆生因ニ虛妄說一得中法利上者、隨レ宜方便則爲レ說レ之。又云依ニ了義經一不レ依ニ不了義經一。已上

かくの如き文一にあらず。皆四十四季の自說の諸經を、虛妄方便不了義經魔說と稱す。これ皆人をして、その經を捨てて、法經涅槃に入らしめんが爲なり。而るに何の恃ありて、妄語の經を留めて、行義を企て、得道を期するや。今權教の情執を捨て、偏に實教を信ずるが故に、經に就きて信を立つと云ふなり。

問うて云はく、善導和尚も人に就きて信を立て、行に就きて信を立つ、何の差別あらん

在の國土に、法華經を弘むべき由、これを願ひぬ。善導等若權者ならば、何ぞ、龍樹天親等の如く、權敎を弘めて、後に法華經を弘めざるや。法華經の告勅の數に入らざるや。何ぞ、佛の如く、權敎を弘めて後に法華經を弘めざるや。若この義無くんば、設ひ佛たりと雖もこれを信ずべからず。今は法華經中の佛を信ず。故に佛に就きて信を立つと云ふなり。

問うて云はく、釋迦如來の所說を、佛陀これを證するを實說と稱せば、何ぞ阿彌陀如來を信せざるや。

答へて云はく、阿彌陀經に於ては、法華經の如き證明なきが故に、これを信ぜざるなり。

問うて云はく、阿彌陀經を見るに、釋迦如來所說の一日七日の念佛を、六方の諸佛舌を出し、三千を覆うてこれを證明せり、何ぞ證明なしと云ふや。

答へて云はく、阿彌陀經に於ては全く、法華經の如き證明なく、但釋迦一佛、舍利弗に向つて、說きて言はく、われ一人阿彌陀經を說くのみにあらず、六方の諸佛舌を出し、三千を覆うて阿彌陀經を說くと云ふと雖も、これ等は、釋迦一佛の說なり、敢て諸佛は

舍利―佛骨

人師、本地彌陀の化身なり、慈恩大師は、十一面觀音の化身にして、亦筆端より舍利を雨らす、これ等の諸人は皆、彼々の經々に依りて皆證あり、何ぞ汝彼經に依らずして亦彼師の義を用ひざるやと。

答へて云はく、汝聞け、一切の權宗の大師先德並に舍利弗目連普賢文殊觀音乃至阿彌陀藥師釋迦如來われらが前に來りて說きて、法華經は汝等の機に叶はず、念佛等の權經の行を修め、往生を遂げて、法華經を覺れと。かくの如き說を聞くと雖も敢て用ふべからず。その故は四十餘季の諸經には法華經の名字を呼はず。何の處にか、機の堪不堪を論ぜん。法華經に於ては、多寶釋迦十方諸佛一處に集りて選定して云はく、

令法久住、於如來滅後、閻浮提內廣令流布、使不斷絕。

この外に今佛出來して、法華經を、末代不相應と定めば、既に、法華經に違ふ。知りぬ、この佛は、涅槃經に出す所の滅後の魔佛なり。これを信用すべからず。その已下の菩薩、聲聞、比丘等は亦言論するに及ばず。これ等は不審もなし。涅槃經に記す所の、滅後の魔の所變の菩薩等なり。その故は、法華經の座は、三千大千世界の外四百萬億阿僧祇の世界なり。その中に充滿せる。菩薩二乘人天八部等、皆如來の告勅を蒙り、各所

て、認可して

難—非難、攻撃

慈恩—名は窺基、唐代法相宗、玄奘三藏の弟子

法華經の信心を壞らざる可けんや。

答へて云はく、法華經の行者は心中に、「四十餘季已今當皆是眞實、依レ法不レ依レ法」等の文を存じて、而も外に語にこれを出さず。難に隨つてこれを問ふべし。抑所立の宗義、何の經に依るやと。かの經を引かば、引くに隨つて亦これを尋ねよ。一代五十季の間の說の中に、法華經より先か、後か、同時なるか、亦先後不定なるかと。若先と答へなば、未顯眞實の文を以てこれを責めよ。敢てかの經の說相を尋ぬること勿れ。後と答へなば、當說の文を以てこれを責めよ。同時なりと答へなば、今說の文を以てこれを責めよ。不定と答へなば、不定經は大部の經にあらず、一時一會の說にして、亦物の數にあらず。その上不定經と雖も三說を出でず、設ひ百千萬の義を立つると雖も、四十餘季等の文を載せて、虛妄と稱せざるより外は、用ふべからず。佛の遺言に、不依不了義經と云ふが故なり。亦知儼、嘉祥、慈恩、善導等を引きて、德を立て、難ずと雖も、法華涅槃に違ふ人師に於ては、用ふべからず。依法不依人の金言を仰ぐが故なり。亦法華經を信ぜん愚者のために、二種の信心をたつ。一には佛に就きて信を立て、二には經に就きて信を立つ。佛に就きて信を立つとは、權宗の學者來り難じて云はん、善導和尚は、三昧發得の

達磨―印度禪宗の二十八祖、支那禪宗の初祖、印して―印可し

領解は四大聲聞なり。菩薩と聲聞とは勝劣天地なりと。淨土宗の如きは、道理を立てて云はく、われ等は、法華等の諸經を誹謗するにあらず。彼等の諸經は正しくは大人のために、傍には凡夫のためにす。斷惑證理理深の敎にして、末代のわれ等これを行ずるに、千人の中に一人もかの機にあたらず。在家の諸人、多分は文字を見ず。亦華嚴法相等の名を聞かず。況や、その義を知らんや。淨土宗の意はわれ等凡夫は但口に任せて、六字の名號を稱すれば、現在には阿彌陀如來二十五の菩薩等を遣して、身に影の隨ふ如く、百重千重に行者を圍遶して、これを守り玉ふ。故に、現世には七難卽滅、七福卽生し、乃至臨終の時は必ず來迎ありて、觀音の蓮臺に乘じ、須臾の間に、淨土に至り、業に隨つて蓮華開け、法華經を聞きて、實相を覺る。何ぞ煩しく穢土に於て、餘行を行じて、何の詮かある。但萬事を抛ちて一向に名號を稱せよ云々。禪宗等の人云はく、一代の聖敎は月を指す指なり。天地日月等も汝等が妄心より出でたり。十方の淨土も執心の影像なり。釋迦十方の佛陀は、汝が覺心の所變なり。文字を執する者は、株を守る愚人なり。わが達磨大師は文字を立てず。方便を假らず、一代聖敎の外に、佛迦葉に印してこの法を傳ふ。法華經は未だ眞實を宣べず。これ等の諸宗の難一にあらず。如何ぞ、

七處八會―華嚴教は七ヶ處に八度の說法を以てせられしこと
教主―教を說かれし佛
對告衆―聽衆といふに同じ
法慧云々―菩薩衆の名

道なきが故に、法華經は爾前の流通となさず。法華經に於て十界互具久遠實成を顯し了んぬ。故に涅槃經は、法華經の爲に流通となるなり。

大文の第七に問に隨つて答ふとは、若末代の愚人、上の六問に依りて萬一にも法華經を信ぜば、權宗の諸人、或は自ら惑へるに依り、或は偏執に依りて、法華經の行者を破らんが爲に、多く四十四季竝に涅槃等の諸經を引きてこれを難ぜん。而るに權敎を信ずる人はこれ多く、或は威勢に依り、或は世間の資緣に依り、人の意に隨つて、世路を互らんが爲に、或は權敎には學者多く、實敎には智者少し。是非に就きて萬が一も實敎を信ずる者あるべからず。この故にこの一段を撰んで權人の邪難を防がん。

問うて云はく、諸宗の學者難じて云はく、華嚴敎は、報身如來の所說、七處八會皆頓極頓證の法門なり。法華經は應身如來の所說、敎主既に優劣あり。法門に於て何ぞ淺深なからん。隨つて對告衆も法慧、功德林、金剛幢等なり。永く二乘を雜へず。法華經は舍利弗等を以て對告衆となすと。（華嚴宗難）法相宗の如きは、解深密經等を以て依憑となして難を加へていはく、解深密經は文殊觀音等を以て對告衆となすと。勝義生菩薩の領解には一代を有空中と詮ず。その中とは、華嚴法華深密等なり。法華經の信解品の五時の

槃經に重ねてこれを擧げて嫌へるなり。法華經を嫌へるにあらず。亦涅槃論に至りてはこれ等の論は、書き付くるが如く天親菩薩の造、菩提流支の譯なり。法華論も亦天親菩薩の造、菩提流支の譯なり。經文に違ふことこれ多し。涅槃論も亦本經に違ふ。常に知るべし。譯者の誤なり、信用するに及ばず。

問うて云はく、先の經に漏れたるものを後の教にこれを承け取りて得道せしむるを流通とせり。阿含經は華嚴の流通と成るべきか。乃至法華經は前四味の流通と成るべきか。

答へていはく、前四味の諸經は、菩薩人天等の得道を許すと雖も、決定性の二乘無性闡提の成佛を許さず。その上佛意を探りて、實を以てこれを檢ぶるに、亦菩薩人天等の得道もなし。十方互具を說かざるが故に、久遠實成なきが故に。

問うて云はく、證文如何。

答へて云はく、法華經方便品に云はく、

若以小乘化。乃至於一人、我則墮慳貪。此事爲不可。

この文の意は、今選擇集の邪義を破らんが爲に餘事を以て證となさず。故に爾前得道有無の實義はこれを出さず。追つてこれを檢ぶべし。但し四十四季の諸經は實に凡夫の得

神力品に云はく、

以要言之。如來一切所有之法。乃至皆於此經宣示顯說。

これ等の現文は、釋迦如來の內證は皆此の經に盡し玉ふ。その上多寶竝に十方の諸佛來集の庭に於て、釋迦如來の已今當の語を證し、法華經の如き經なしと定め了んぬ。而るに多寶諸佛本土に還るの後に、但釋迦一佛のみ異變を存じて、還つて涅槃經を說きて法華經を卑くせば、誰人かこれを信ぜん。深くこの義を存じ、隨つて涅槃經の第九を見るに、法華經を流通して說きていはく、

是經出世。如彼菓實多所利益安樂一切。能令衆生見於佛性。如法華中八千聲聞得授記莂成大菓實。如秋收冬藏更無所作。

この文の如くば、法華經若邪見ならば涅槃も豈邪見にあらずや。法華經は大収、涅槃經は捃拾なりと見え了んぬ。涅槃經は自ら法華經に劣るの由を稱す。法華經の當說の文敢て相違なし。但し、迦葉の領解竝に第十四の文は、法華經を下すの文にあらず。迦葉の自身竝に所化の衆、今始めて法華經の所說の「常住佛性久遠實成」を覺る。故にわが身を指して、これより已前は邪見なりと云ふ。法華經已前の無量義經に嫌へる諸經を、涅

開祖、名は智顗、智者大師ともいふ、陳、隋の間の人

南岳―支那天台宗第二祖、名は慧思

光宅―光宅寺の法雲のこと、涅槃宗、梁代の人、

慧觀―羅什三藏、慧遠の弟子

智儼―華嚴宗の第七祖、唐代の人

嘉祥―嘉祥寺の吉藏、三論宗、隋唐代の人

善導―淨土敎の大家、隋唐代の人

釋に於てをや。設ひ末代の學者たりと雖も、依法不依人の義を存じ、本經本論に違はずんば信用を加ふべし。

問うて云はく、涅槃經の第十四卷を開きたるに、五十年の諸大乘經を擧げて前四味に譬へ、涅槃經を以て醍醐味に譬ふ。諸大乘經は、涅槃經より劣ること百千萬倍と定め了んぬ。その上迦葉童子の領解に云はく、

我從今日始得正見。自是之前。我等悉名邪見之人。

この文の意は涅槃經以前の法華等の一切衆典を皆邪見と云ふなり。當に知るべし、法華經は邪見の經にして、未だ正見の佛性を明さず。故に天親菩薩の涅槃論に諸經と涅槃との勝劣を定むる時、法華經を以て般若經に同じて、同じく第四に攝したり。豈に正見の涅槃經を以て邪見の法華の流通となさんやと。如何。

答へて云はく、法華經の現文を見るに、佛の本懷殘すことなし。方便品にいはく、

今正是其時。

壽量品にいはく、

毎自作是念。以何令衆生。得入無上道。速成就佛身。

穢土—淨土に對して此の土をさす
安養—極樂淨土の一名
光宅—光宅寺、支那金陵にあり、梁武帝の勅によりて法雲法師之を建つ
道場—道場寺、支那金陵にあり、創立年代未詳
捃拾—とりあつむ、二者中より法華を特に取る意
天台—天台宗の

答へて云はく、爾前の淨土は久遠實成の釋迦如來の所現の淨土にして、實は皆穢土なり。法華經は亦方便壽量の二品なり。壽量品に至りて、實の淨土を定むる時、この土は卽ち淨土なりと定め了んぬ。但、兜率安養十方の難に至りては爾前の名目を改めず。この土に於て兜率安養等の名を付く。例へばこの經に三乘の名ありと雖も、三乘あらざるが如し、「不須更指觀經等也」の釋の意これなり。法華經に結緣なき衆生の、當世西方淨土を願ふは、瓦礫の土を樂ふとはこれなり。法華經を信ぜざる衆生は、誠に分添の淨土なき者なり。

第三に、涅槃經は法華經流通の爲にこれを說き玉ふを明さば、

問うて云はく、光宅の法雲法師、竝に道場の慧觀等の碩學は、法華經を以て第四時の經と定め、無常熟蘇味と云ふ。天台智者大師は、法華涅槃同味と立つと雖も、亦捃拾の義を存ず。二師共に權化なり。互に德行を具せり。何を正となしてわれ等の迷心を晴すべきや。

答へて云はく、設ひ論者譯者たりと雖も、佛教に違ひて權實二教を判ぜずんば、且く疑を加ふべし。何に況や唐土の人師たる天台、南岳、光宅、慧觀、知儼、嘉祥、善導等の

本地久成—本來の佛地に於て久遠の昔に佛となり居給ひし完全の佛

兜率—彌勒菩薩の居らるゝ天の名

西方—彌陀の淨土

十方—十方にも各諸佛の淨土あり

亦云はく、

我此土安穩。

この文の如くば本地久成の圓佛は、この世界に在せり。この土を捨て何の土を願ふべきや。故に法華修行の者の所住の處を淨土と思ふべし。何ぞ煩しく他の處を求めんや。故に神力品にいはく、

若經卷所住之處。若於園中。若於林中。若於樹下。若於僧坊。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。乃至當知是處卽是道場。

涅槃經に云はく、

若善男子是大涅槃微妙經典所流布處當知其地卽是金剛。是中諸人亦如金剛。已上

法華涅槃を信ずる行者は餘處を求むべきにあらず。この經を信ずる人の所住の處は卽ち淨土なり。

問うていはく、華嚴方等般若阿含觀經等の諸經を見るに、兜率、西方、十方の淨土を勸む。その上法華經の文を見るに亦兜率西方十方の淨土を勸む。何ぞこれ等の文に違うて、この瓦礫荊棘の穢土を勸むるや。

圓機—圓敎（最上の大乘敎）を信解する智慧
緇素—僧と俗

問うて云はく、その證如何。

答へて云はく、肇公の法華の翻經の後記にいはく、

羅什三藏。奉値須利耶蘇摩三藏授法華經時語云。佛日西山隱遺耀照東北。茲典有緣於東北諸國。汝愼傳弘。

東北とは日本なり。西南の天竺より東北の日本を指すなり。故に慧心の一乘要訣にいはく、

日本一州圓機純一。朝野遠近同歸一乘。緇素貴賤悉期成佛。

願はくは日本國の今世の道俗、選擇集の久習を捨てて、法華涅槃の現文に依り、肇公慧心の日本記を恃みて法華修行の安心を企てよ。

問うて云はく、法華修行の者何れの淨土を期すべきや。

答へて云はく、法華經二十八品の肝心たる壽量品に云はく、

我常在此娑婆世界。

亦云はく、

我常住於此。

有縁云々ー二經の行はるゝにたよりある土地

答へていはく、解心なき者權敎の惡知識に遇ひて、實敎を退けば惡師を信ずる失に依りて、必ず三惡道に墮つべきなり。かの不輕輕毀の衆は權人なり。大通結緣の者の三千塵點を歷しは、法華を退して權敎に遷りしが故なり。法華經を信ずるの輩、法華經の信を捨てて、權人に隨はんより外は、世間の惡業に於ては、法華の功德に及ばざるが故に、三惡道に墮つべからざるなり。

問うて云はく、日本國は法華涅槃有緣の地なりや否や。

答へて云はく、法華經第八に云はく、

於如來滅後閻浮提內廣令流布使不斷絕。

七の卷に云はく、

廣宣流布。於閻浮提無令斷絕。

涅槃經第九にいはく、

此大乘經典大涅槃經、復亦如是爲於南方諸菩薩故當廣流布。

三千世界廣しと雖も、佛自ら法華涅槃を以て南方流布の處と定む。南方の諸國の中に於て、日本國は殊に法華經の流布すべき處なり。

大善の所生—法華を謗らざるを得るは非常の善ありしによりて生じたるものといふ

宿緣多幸—前世の因緣が非常によかりしこと

答へて云はく、法華經の第二に云はく、

若有信受此經法者。是人已曾見過去佛恭敬供養。亦聞是法。法師品云。又如來滅度之後。若有人聞妙法華經乃至一偈一句一念隨喜者。乃至當知是諸人等已曾供養十萬億佛。

流通たる涅槃經にいはく、

若有衆生。於熙連河沙等諸佛發菩提心乃能於是惡世受持如是經典不生誹謗。善男子若有能於一恒河沙等諸佛世尊發菩提心然後乃能於惡世中不謗是法。愛敬是典。已上經文

これ等の文の如くんば、設ひ先に解心なくとも、この法華經を聞きて、謗せざるは大善の所生なり。夫三惡の生を受くること大地微塵より多く、人間の生を得くること爪上の土より少し。乃至四十餘季の諸經に値ふことは大地微塵より多く、涅槃經に値ふことは爪上の土より少し。上に擧る所の涅槃經の三十三の文を見るべし。設ひ一字一句なりと雖も、この經を信ずれば宿緣多幸なり。

問うて云はく、設ひ法華經を信ずと雖も、惡緣に隨はゞ何ぞ三惡道に墮ちざらんや。

今度人身を失ひ三惡道に墮ちば、後悔すとも何ぞ及ばん。

第二に但法華經の題目計を唱へて三惡道と離るべきことを明さば、法華經第五にいはく、

文殊師利。是法華經於無量國中乃至名字不可得聞。

第八にいはく、

汝等但能擁護受持法華名者福不可量。

提婆品にいはく、

聞妙法華經提婆達多品淨心信敬不生疑惑者不墮地獄餓鬼畜生。

大般涅槃經名字功德品にいはく、

若有善男子善女人。聞是經名生惡趣者無有是處。「涅槃經は法華經の流通たるが故にこれを引く」

問うて云はく、但この經の題名を聞くと雖も、解心なくば如何にして三惡道を脫れん。

答へて云はく、法華經流布の國に生れて、この經の題名を聞き信を生ずるは、宿善の深厚なるに依れり、設ひ今生は惡人無智なりと雖も、必ず過去の宿善あるが故に、この經の名を聞きて信を致す者なり。故に惡道に墮ちず。

問うて云はく、過去の宿善とは如何。

解心―理解し得る心

一もなく―一も成佛するものなく

道俗―出家と俗人

粟散王―粟粒の如き小さき國の王

滅不レ久 已上

余選擇集を見るに、敢てこの文の未來記に違はず。選擇集は法華眞言等の正法を定めて雜行 難行と云ひ、末代のわれ等に於ては時機相應せず、これを行ずる者は千中に一もなく、佛還つて法華等を說き玉ふと雖も、法華眞言の諸行の門を閉ぢて、念佛の一門を開く。末代に於てこれを行ずる者は群賊等と定め、當世一切の道俗に於てこの書を信ぜしめ、この義を以て如來の金言と思へり。この故に世間の道俗佛法建立の意なく、法華眞言の正法の法水忽ちに竭き、天人滅少して三惡日に增長す。偏に選擇集の惡法の催す所、起す所の邪見なり。この經文を佛、記して、わが滅度の後といへるは、正法の末八十季像法の末八百年、末法の末八千季なり。選擇集の出づる時は、像法の末、末法の始なれば八百季の內なり。仁王經に記する所の時節に當れり。諸の小國の王とは日本國の王なり。中下品の善とは粟散王これなり。獅子身中の蟲の如しとは佛弟子の源空これなり。諸の惡比丘とは所化の衆これなり。說破佛法因緣破國因緣とは上に擧ぐる所の選擇の語これなり。「其王不レ別信二聽此語一」とは、今の世の道俗邪義を辨へずして猥にこれを信ずるなり。請ひ願はくは道俗法の邪正を分別して、その後正法に付して後世を願へ。

讃。若憍慢者。我當爲其而作僕使。隨順其意。令其歡喜。然後復當以大涅槃而敎導之。若有誹謗大乘經者。當以勢力摧之令伏。既摧伏已然後勸令讀大涅槃。若有愛樂大乘經者。我躬當往恭敬供養尊重讃歎。已上

問うて云はく今の世の道俗偏に選擇集に執して、法華涅槃に於ては、自身不相應の念を作すの間、護惜建立の心なし。偶邪義の由を稱する人あれば、念佛誹謗の者と稱し、惡名を天下に雨す。これらは如何。

答へて云はく、自答を存ずべきにあらず。佛自らこのことを記して云はく、

仁王經云。大王。我滅度後未來世中四部弟子諸小國王太子王子。乃是任持護三寶者。轉更滅破三寶。如師子身中蟲自食師子。非外道也。多壞我佛法。得大罪過。正敎衰薄。民無正行。以漸爲惡。其壽日減至于百歲。人壞佛敎。無復孝子。六親不和。天神不祐。疾疫惡鬼日來侵害。災怪首尾。連禍縱橫。死入地獄餓鬼畜生。

亦次下に云はく、

大王。未來世中諸小國王四部弟子自作此罪。破國因緣。乃至諸惡比丘多求名利。於國王太子王子前。自說破佛法因緣破國因緣。其王不別。信聽此語。乃至當其時。正法將

て、生死を離る可く、悪法を持つに依りて三悪道に墮つることを明かにし、二には法華經の名字計りを唱へて三悪道を離るべきを明かにし、三には涅槃經は、法華經の爲に流通と成すことを明かにす。第一に在家の諸人正法を護持するを以て生死を離るべく、悪法を持つに依りて三悪道に墮つることを明さば、涅槃經第三に云はく、

佛告迦葉。以能護持正法因緣故。得成就是金剛身。

亦云はく、

時有國王名曰有德。乃至爲護法故。乃至與是破戒諸惡比丘極共戰鬪。乃至王於是時得聞法已。心大歡喜。尋卽命終生阿閦佛國。已上

この文の如くは、在家の諸人別の知行無しと雖も、謗法の者を對治する功德に依りて生死を離るべきなり。

問うて云はく、在家の諸人佛法を護持すべき樣如何

答へて云はく、涅槃經に云はく

若有衆生貪著財物。我當施財。然後以是大涅槃經勸之令讀。乃至先以愛語而隨其意。然後漸當以是大乘大涅槃經勸之令讀。若凡庶者當以威勢逼之令

十界互具　地獄界より佛界に至る十界の各は、實は他の九界をも具有すること、法華經の深遠なる說とす

九界の佛界―九界の中にそのまま佛界を具ふること

常途―尋常

と。法華經より外の四十餘季の諸經には、十界互具なし。十界互具を說かざれば、内心の佛界を知らず。内心の佛界を知らざれば、外の諸佛も顯れず。故に四十餘季の權行の者は佛を知らず。設ひ佛を見ると雖も成佛なし。爾前の菩薩も亦自身の十界互具を見ざれば、二乘界の成佛を見ず。故に衆生無邊誓願度の願も滿足せず。故に菩薩も佛を見ず、凡夫も亦十方互具を知らざるが故に、自身の佛界に顯れず。故に阿彌陀如來の來迎もなく、諸佛如來の加護もなし。譬へば、盲人の自身の影を見ざるが如し。今法華經に至りて、九界の佛界を開くが故に、四十餘季の菩薩二乘六凡始めて自身の佛界を見る。この時この人の前に始めて佛菩薩二乘を立つ。この時二乘菩薩始めて成佛し、凡夫始めて往生す。この故に在世滅後の一切衆生の誠の善知識は法華經これなり。常途の天台宗の學者は、爾前に於て當分の得道を許せども、自義に於ては當分の得道を許さず。然りと雖も、この書に於てはその義を盡さず。略してこれを記す。追つてこれを記すべし。大文の第六に法華涅槃に依る行者の用心を明さば、一代教門の勝劣淺深難易等に於ては先の段に既にこれを出せり。この一段に於ても、一向に後世を念ふ。末代常沒の五逆謗法一闡提等の愚人の爲にこれを注す。略して三あり。一には在家の諸人正法を護持するを以

五通—天眼通、天耳通、宿命通、他心通、神足通

六通—五通に漏盡通を加ふ

等覺—菩薩の位としては最上にあり

內薰—心の本性がよき匂を有すること

冥薰—佛が外より力を加ふること

宿善、善財常啼班足等にも勝れたり。彼は權經の知識に値ひ、われ等は實經の知識に値へばなり。彼は權經の菩薩に値ひ、われ等は實經の佛菩薩に値ひ奉ればなり。涅槃經にいはく、

　依法不依人依智不依識。

「依法」と云ふは、法華涅槃の常住の法なり。「不依人」とは、法華涅槃に依らざる人なり。設ひ佛菩薩たりと雖も、法華涅槃に依らざる佛菩薩は善知識にあらず。況や、法華涅槃に依らざる論師譯者人師に於てをや。「依智」とは佛に依り、「不依識」とは等覺已下なり。今の世の世間の道俗、源空の謗法の失を隱さんが爲に、德を天下に擧げて、權化なりと稱す。依用すべからず。外道は五通を得て、能く山を傾け海を竭すとも、神通なき阿含經の凡夫に及ばず。羅漢を得て六通を現ずる二乘は、華嚴方等般若の凡夫に及ばず。華嚴方等般若の等覺の菩薩も、法華經の名字觀行の凡夫に及ばず。設ひ神通智慧ありと雖も權教の善知識をば用ふべからず。われ等常沒の一闡提の凡夫、法華經を信ぜんと欲するは、佛性を顯さんが爲の先表なり。故に妙樂大師の云はく、「內薰にあらざるよりは、何ぞよく悟を生ぜん。故に悟を生ずる力は眞如にあり。故に冥薰を以て外護となすなり」

或從知識或從經卷。聞上所說一實菩提。

この文の意は、經卷を以て善知識となすなり。法華經にいはく、

若法華經行閻浮提。有受持者。應作此念。皆是普賢威神之力。

この文の意は、末代の凡夫法華經を信ずるは、普賢の善知識の力なりと。又いはく、

若有受持讀誦正憶念修習書寫是法華經者。當知是人則見釋迦牟尼佛。如從佛口聞此經典。當知是人供養釋迦牟尼佛。已上

この文を見るに、法華經は釋迦牟尼佛なり。法華經を信ぜざる人の前には、釋迦牟尼佛入滅を取り、この經を信ずる者の前には、滅後たりと雖も、佛の在世なり。又いはく、

若我成佛滅度之後。於十方國土。有說法華經處。我之塔廟爲聽是經故。涌現其前。爲作證明。

この文の意は、われ等法華の名號を唱ふれば、多寶如來本願の故に必ず來り玉ふ。又云はく、

諸佛在於十方世界說法。盡還集一處。

釋迦多寶十方の諸佛普賢菩薩等はわれらが善知識なり。若この義に依らば、われ等は亦

是非云々—是なるか非なるかを定めよの意

善知識—まことのよき指導者

「惡知識者爲二善法怨一。是故菩薩常當下遠二離諸惡知識一上」已

請ひ願はくは、今の世の道俗、設ひこの書を邪義なりと思ふと雖も、且くこの念を抛ちて、十住毘婆娑論を開き、その難行の中に、法華經の入不入を檢べ、選擇の「準レ之思レ之」の四字を按じて、後に是非を致せ。謬りて惡知識を信じ、邪法を習ひ、この生を空しうすることなかれ。

第三に末代の凡夫の爲に善知識を明さば、

問うて云はく、善財童子は五十餘の知識に値ひき。その中に普賢、文殊、觀音、彌勒等あり。常啼、班足、妙莊嚴、阿闍世等は、曇無竭、普明耆婆二子夫人に値ひ奉りて生死を離れたり。これ等はみな大聖なり。佛世を去りて後はかくの如き師を得ること難しとなす。滅後に於て龍樹天親も去りぬ。南岳天台にも値はず。如何ぞ生死を離るべきや。

答へて云はく、末代に於て眞實の善知識あり、所謂法華涅槃これなり。

問うて曰はく、人を以て善知識となすは常の習なり。法を以て知識となすの證ありや。

答へて云はく、人を以て知識となすは常の習なり。しかりと雖も末代に於ては眞の知識なければ法を以て知識となすに多くの證あり。摩訶止觀にいはく、

四禪定―四禪天に上乘するだけの修行證果

來即與迦葉往善星所。善星比丘遙見我來。見已即生惡邪之心。以惡心故。生身陷入墮於阿鼻地獄。已上

善星比丘は佛の菩薩たりし時の子なり。佛に隨ひ奉り、出家して十二部經を受け、欲界の煩惱を壞りて四禪定を獲得せり。然りと雖も、惡知識たる苦得外道に値ひ、佛法の正義を信ぜざるに依りて、出家の受戒十二部經の功德を失ひ、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の四比丘に親近せし六百四萬の人は、四師と倶に十方の大阿鼻地獄を經しなり。今の世の道俗は、選擇集を貴ぶが故に、源空の影像を拜して、一切經難行の邪義を讀む。例へば、尼乾の所化の弟子が、尼乾の遺骨を禮して、三惡道に墮ちしが如し。願くは今の世の道俗選擇集の邪正を知りて、後に供養恭敬を致せ。しからざれば定めて後悔あらん。故に涅槃經に云はく、

菩薩摩訶薩於惡象等心無畏怖。於惡知識生怖畏心。何以故。是惡象等唯能壞身不能壞心。惡知識者二俱壞故。是惡象等唯壞一身。惡知識者壞無量善身無量善心。是惡象等唯能破壞不淨臭身。惡知識者能壞淨身及以淨心。是惡象等能壞肉身。惡知識者壞於法身。爲惡象殺不至三趣。爲惡友殺必至三趣。是惡象等但爲身怨。

十二部經云々—小乘の十二部經を總て諳誦せしこと

尼乾—一外道の名

問うて云はく、法然上人の門弟の内にも一切經藏を安置し、法華經を行ずる者あり。何ぞみな謗法の者と稱せんや。

答へて云はく、一切經を開き見て、法華經を讀み、難行道の由を稱し、選擇集の惡義を扶けんが爲なり。經論を開くに付けて彌謗法を增すこと、例へば善星の十二部經、提婆達多の六萬藏の如し。智者の由を稱するは、自身を重んじ、惡法を扶けんが爲なり。

第二に受け難き人身を受け、値ひ難き佛法に値ふと雖も惡知識に値ふが故に、三惡道に墮つることを明さば、佛藏經に云はく、

大莊嚴佛滅後。五比丘一人知正道度多億人。四人住邪見。此四人命終後墮阿鼻地獄。仰臥伏臥左脇臥右脇臥各九百萬億歲。乃至若在家出家親近此人。竝諸檀越凡六百四萬億人。與此四師俱生俱死在大地獄。受諸燒煮。大劫若盡是四惡人及六百四萬億人從此阿鼻地獄轉生佗方大地獄中

涅槃經三十三に云はく、

爾時城中有一尼乾。名曰苦得。乃至善星問苦得。答曰我得食吐鬼身。善星諦聽。乃至爾時善星卽還我所作如是言。世尊苦得尼乾命終之後生三十三天。乃至爾時如

如意珠—如意寶珠、意のまゝに何物をも生ずる最貴の寶、龍王宮にありといふ

十方—十方世界

權者—佛菩薩のかりに人として現れしをいふ

師摩訶止觀の五に云はく、

其癡鈍者。毒氣深入失二本心一故。既其不レ信則不レ入レ手。乃至大罪聚人。乃至設厭二世者。翫二下劣乘一。攀二附枝葉一。狗狎二作務一。敬二獼猴一爲二帝釋一。崇二瓦礫一是明珠。此黑闇人豈可レ論レ道。

源空並に所化の衆深く三毒の酒に醉ひ、大通結緣の法を失ふ。法華涅槃に於て不信の思を作し、一闡提と作り、觀經等の下劣の乘に依りて、方便稱名等の瓦礫を翫び、法然房の獼猴を敬うて智慧第一の帝釋と思ひ、法華涅槃の如意珠を捨て、如來聖教を偏するは、權實二教を辨へざるが故なり。故に弘決の第一に云はく、

聞二此圓頓一不レ宗二重一者。良由下近代習二大乘一者雜濫上故也。

大乘に於て、權實二教を辨へざるを雜濫と云ふなり。故に末代に於て法華經を信ずる者は、爪上の土の如く、法華經を信ぜざるものは、十方の微塵の如し。故に妙樂歎いて曰はく、像末は情澆く、信心寡薄にして、圓頓の教法、藏に溢れ函に盈つれども、暫くも思惟せず。便ち目を瞑するに至る。徒に生き、徒に死す、一に何ぞ痛しきやと。この釋は偏に妙樂大師權者たるの間、遠く日本國の當代を覽て記し置所の未來記なり。

受人身。諸根完具生於中國。具足正信。能修習道。修習道。已能修正道。修正道。已能得解脫。得解脫。已能入涅槃。如爪上土。捨人身。已得三惡身。捨三惡身。得三惡身。諸根不具生於邊地。信邪倒見。修習邪道。不得解脫常樂涅槃。如十方界所有地土。

この文は多く法門を集めて一具となせり。

捨人身還受人身。如爪上土。捨人身墮三惡道。如十方土。捨三惡身受人身。如爪上土。捨三惡身還得三惡身。如十方土。受人身如十方土。受人身不缺六根。如爪上土。受人身不缺六根。生邊地。如十方土。生中國。如爪上土。生中國如十方土。値佛法如爪上土。又云。不作一闡提不斷善根。信如是等涅槃經典。如爪上土。乃至作一闡提斷諸善根。不信是經者。如十方界所有地土。已上經文

この文の如くば、法華涅槃を信ぜずして、一闡提と作るは十方の土の如く、法華經を信ずるは爪上の土の如し。この經文を見て彌感涙押へ難し。今日本國の諸人を見聞するに、多分は權敎を行ず。設ひ口には實敎を行ずと雖も、心には亦權敎を存ず。故に天台大

治。當ㇾ知是人得ㇾ福無量不ㇾ可㆓稱計㆒。

亦云はく、

若善比丘見㆘壞ㇾ法者㆒置不㆓呵責駈遣擧處㆒。當ㇾ知是人佛法中怨。若能駈遣呵責擧處。是我弟子。眞聲聞也。

予佛弟子の一分に入らんがためにこの書を造り、謗法の失を顯し、世間に流布す。願はくは十方の諸佛この書に於て力を副へ、大惡法の流布をとゞめ、一切衆生の謗法を救はしめ玉へ。

大文の第五に、善知識竝に眞實の法に値ひ難きを明さば、これにつきて三あり。一には受け難き人身、値ひ難き佛法なることを明し、二には受け難き人身を受け、値ひ難き佛法に値ふと雖も、惡知識に値ふが故に三惡道に墮つることを明し、三には末代の凡夫の爲に善知識を明す。第一に受け難き人身、値ひ難き佛法なることを明さば、涅槃經三十三に云はく、

爾時世尊取㆓地少土㆒置㆓之爪上㆒告㆓迦葉㆒言。是土多耶。十方世界地土多乎。迦葉菩薩白ㇾ佛言。世尊爪上土者不ㇾ比㆓十方所有土㆒也。善男子有ㇾ人。捨ㇾ身還得㆓人身㆒。捨㆓三惡身㆒得

波羅夷—極惡と譯す、四重禁を犯したるもの

我念往昔。於閻浮提作大國王。名曰仙豫。愛念敬重大乘經典。其心純善無有麤惡嫉悋。乃至善男子。我於爾時心重大乘。聞婆羅門誹謗方等。聞已即時斷其命根。善男子以是因緣從是已來不墮地獄已上。

問うて云はく、梵網經の文を見るに、比丘等の四乘等を誹謗すれば、波羅夷罪なり。而るに源空が謗法の失を顯はすは豈阿鼻の業にあらずや。

答へて云はく、涅槃經の文に云はく、

迦葉菩薩言世尊。如來何故記彼當墮阿鼻地獄。善男子善星比丘多有眷屬。皆謂善星是阿羅漢。是得道果。我欲壞彼惡邪心故。記彼善星以放逸故墮於地獄已上。

この文に放逸とは謗法の名なり。源空も亦彼の善星の如く、謗法を以ての故に無間に墮つべし。所化の衆この邪義を知らざるが故に、源空を以て一切智心と號し、或は勢至菩薩、或は善導の化身なりと云ふ。彼が惡邪の心を壞らんが爲の故に謗法の根源を顯はす。梵網經の說は謗法の者の四乘なり。佛誡めて云はく、謗法の人を見てその失を顯さゞれば佛の弟子にあらずと。故に涅槃經に云はく、

我涅槃後隨其方面。有持戒比丘。威儀具足護持正法。見壞法者。即能驅遣呵責徵

雪山常啼―雪山童子、常啼菩薩、共に法華經の爲に難行せられし方といふ

諸行往生―念佛以外の行にても往生の出來ると說くこと

逆路伽耶陀―路伽耶陀を順世外道といふ、この說に反對する異說にて左順世外道とも稱せらる

を贈る間、「雪山常啼」の心を起し、命を大乘の流布に替へ、强言を吐いて云はく、選擇集を信じて、後世を願ふ人は無間地獄に墮すべしと。爾時に、法然上人の門弟、選擇集に於て上に出すところの惡義を隱し、或は諸行往生を立て、或は選擇集に於て、法華眞言等を破らざる由を稱し、或は在俗に於て、選擇集の邪義を知らしめざらん爲に、妄語を構へて云はく、日蓮は念佛を稱する人を三惡道に墮すと云ふと。

問うて云はく、法然上人の門弟諸行往生を立つる失ありや否や。

答へて云はく、法然上人の門弟と稱し、諸行往生を立つるは、逆路伽耶陀の者なり。當世も亦諸行往生の義を立つ。而も內心には一向に念佛往生の義を存じ、外には、諸行不謗の由を聞かしむるなり。抑この義を立つる者は、選擇集の、法華眞言等に於て、失を付け、捨閉閣抛群賊邪見惡見邪雜人千中無一等の語を見ざるや否や。

第二に正しく謗法の人の王地に處するを對治すべき證文を出さば、涅槃經第三に云はく、

懈怠破戒毀正法者。大臣四部之衆應當苦治。善男子是諸國王及四部衆當有罪不。不也世尊。善男子是諸國王及四部衆尙無有罪。

又第十二に云はく、

修行にて佛位に進まんとせしむる教

門弟この書を傳へて、日本六十餘州に充滿するが故に、門人世間の無智の者に語りて云はく、上人智慧第一の身となりて、この書を造り、眞實の義を定め、法華眞言等の門を閉ぢて、後に開くる文無く、抛ち還つて、取るの文無し、などと立つる間、世間道俗一同に頭を傾け、その義を問ふ者には、假字を以て、選擇集の意を宣べ、或は法然上人の物語を書す間、法華眞言に於て難を付けて、或は去年の曆祖父の履に譬へ、或は法華經を讀むは管絃より劣ると。かくの如き惡書國中に充滿するが故に、法華眞言等國にありと雖も、聽聞せんことを樂はず。偶行ずる人ありと雖も、尊重を生ぜず。一向念佛は、法華等の結緣をなすをば、往生の障となると云ふ。故に捨離の意を生ず。この故に諸天妙法を聞く事を得ず、法味を嘗めざれど、威光勢力あることなく、四天王竝に眷屬この國を捨て、日本國守護の善神も捨離し已んぬ。故に正嘉元年に大地大に震ひ、同二年に春大雨苗を失ひ、夏の大旱魃に草木を枯し、秋の大風に果實を失ひ、飢渴忽ち起りて、萬民を逃脫せしむること、金光明經の文の如し。豈選擇集の失にあらずや。佛語虛からず。故に惡法の流布あり、既に國に三災起れり。而して、この惡義を對治せずんば、佛の所說の三惡を脫るべけんや。而るに近年より予「我不レ愛二自命一但惜二無上道一」の文

隨佗—他人の意にかなふ樣にすること、方便
隨自—他人にかかはらず、自の意のまゝに打出すこと、眞實
聖道門—自力の

以下に、善導和尚の往生禮讃の十即十生百即百生千中無一の文を書き載せて云はく、

私云ッ見ニ此文ヲ彌須ク捨テ雑修ヲ專ニス。豈捨テ百即百生專修正行ヲ堅執セン千中無一雑修雑行ヲ乎。行者能思ニ量之ヲ已上、

これ等の文を見るに、世間の道俗豈諸經を信ずべけんや。次下に亦書して、法華經等の雑行と、念佛の正行との勝劣難易を定めて云はく、

一者勝劣義。二者難易義。初勝劣義者。念佛是勝。餘行是劣。次難易義者。念佛易ク修。諸行難シ修。

亦次下に、法佛眞言等の失を定めて云はく。

故知諸行非ズ機ニ失フ時ヲ。念佛往生當リ機ニ得タリ時ヲ。

亦次下に、法華眞言等の雑行の門を閉ぢて云はく、

隨佗之前暫ク開ク定散門ヲ。隨自之後還テ閉ヅ定散門ヲ。一開以後。永不ル閉者。唯是念佛一門ナリ

最後の本懐に云はく、

夫速欲セバ離レント生死ヲ。二種勝法中且ク閣テ聖道門ヲ。撰ンデ入レ淨土門ニ。欲セバ入ント淨土門ニ。正雜二行中ニ且ク抛テ諸雑行ヲ。撰ンデ應シ歸ス正行ニ已上。

河。乖涅槃路世尊。我等四王並諸眷屬及藥叉等。見如斯事捨其國土無擁護心。非但我等捨棄是王。亦有無量守護國土諸大善神。皆悉捨去。既捨離已。其國當有種種災禍喪失國位。一切人衆皆無善心。唯有繫縛殺害瞋諍。互相讒諂枉及無辜。疫病流行。慧星數出。兩日並現。薄蝕無恆。黑白二虹。表不祥相。星流地動。井内發聲。暴雨惡風不依時節。常遭飢饉苗實不成。多有佗方怨賊侵掠國内。人民受諸苦惱土地無有可樂之處。已上。

この經文を見るに、世間の安穩を祈らんに、而も三災起らば、惡法流布するが故なりと知る可しと。而るに、當世は隨分國土の安穩を祈ると雖も、去ぬる正嘉元年には大地大に動じ、同二年には大雨大風、苗實を失へり。定めて國を喪ふの惡法この國にあるかと勘ふ。撰擇集の或段に云はく

第一。讀誦雜行者。除上觀經等往生淨土經已外於大小顯密諸經受持讀誦。悉名讀誦雜行

と書き了へて次に書して云はく、

次判二行得失者。法華眞言等雜行。失淨土三部經得也。

善男子護持正法者。不受五戒。不修威儀。應持刀劍弓箭鉾槊。

又云はく、

「不受五戒爲護正法乃名大乘。護正法者。應當執持刀劍器杖」云云。

四十餘季の内にも、梵網等の戒の如くならば、國王大臣諸人等、一切竹杖弓箭矛斧鬪戰の具を蓄ふることを得ず。若これを蓄ふる者は、定めて國王の位、比丘、比丘尼の位を失ひ、後生は三惡道の中に墮つべしと定め了んぬ。而るに今の世は道俗を擇ばず、弓箭刀杖を帶せり。梵網經の文の如くならば、必ず三惡道に墮ちんこと疑なきなり。涅槃經の文無くんば如何にしてかこれを救はん。亦涅槃經の先後の文の如くならば、弓箭刀杖を帶して、惡法の比丘を治し、正法の比丘を守護せん者は、先世の四重五逆を滅して無上道を證せんと定め給ふ。亦金光明經第六に云はく、

守護正法比丘者。滅先世四重五逆必證無上道定。亦金光明經第六云。若有人於其國土。雖有此經未嘗流布。生捨離心不樂聽聞。亦不供養尊重讚歎。見四部衆持經之人。亦復不能尊重乃至供養。遂令我等及餘眷屬無量諸天。不得聞此甚深妙法。背甘露味。失正法流。無有威光及以勢力。增長惡趣。損減人天。墜生死

經に云はく、

佛告波斯匿王。乃至是故付屬諸國王。不付屬比丘比丘尼淸信男淸信女。何以故無王威力故。乃至此經三寶付屬諸國王四部弟子。

大集經二十八に云はく、

若有國王。見我法滅。捨不擁護。於無量世修施戒慧。悉皆滅失。其國出三種不祥事。乃至命終生大地獄。

仁王經の文の如くならば、佛法を以てまづ國王に付屬し、次に四衆に及ぼす。王位に居る君、國を治むる臣は佛法を以て先となして、國を治むべきなり。大集經の文の如くならば王臣等佛道のために無量劫の間、頭目等の施を施し、八萬の戒行を持ち、無量の佛法を學ぶと雖も、國に流布する所の法の邪正を正さゞれば、大風、旱魃、大雨の三災起りて、萬民を逃脱せしめ、王臣定めて三惡に墮せんと。亦雙林最後の涅槃經の第三に云はく、

今以正法付屬諸王大臣宰相比丘比丘尼優婆塞優婆夷。乃至不護法者名禿居士。

又云はく、

地論師―地論の學者
攝論師―攝論宗の學者

法華涅槃を以て不了義經となす。共に佛意を覺らず、權實二經に迷へり。これ等の誤を出すは、源空一人に限るのみにあらず、天竺の論師竝に譯者より、唐土の人師に至るまでその義あり、所謂地論師攝論師の一代の別時意趣、善導懷感の、法華の一稱南無佛の意趣、これ等は、皆權實を辨へざるが故に、出來する處の誤なり。論を造る菩薩、經を譯する譯者、三昧發得の人師猶以てかくの如し。何に況や末代の凡師に於てをや。

問うて云はく、汝末學の身に於て何ぞ論師竝に譯者人師を破するや。

答へて云はく、敢てこの難を致すこと勿れ。攝論師竝に善導等の釋は、權實二經を辨へずして、猥に法華經を以て、別時意趣と立つ。故に天台妙樂の釋と水火を作す間、且く人師の相違を閣いて、經論に付きて是非を撿する時、權實の二教は佛說より出でたり。天親龍樹重ねてこれを定む。この義に順ずる人師をば且くこれを仰ぎ、この義に順ぜざる人師をば且くこれを用ひざれ。敢て自義を以て是非を定むるにあらず。たゞ相違を出す計りなり。大文の第四に謗法の者を對治すべき證文を出さば、一には佛法を以て、國王大臣竝に四衆に附屬する事を明し、二には、正しく謗法の人王地に處するをば對治すべき、證文を明す。第一に佛法を以て國王大臣竝に四衆に附屬することを明すは、仁王

成不成―成佛と不成佛

許す文如何。
答へて云はく、大論の一百にいはく、
問曰。更有何法甚深勝般若者。而以般若屬累阿難。而以餘經屬累菩薩。答曰。般若波羅蜜非秘密法。而法華等諸經說阿羅漢受決作佛。所以大菩薩能受持用。譬如大藥師能以毒爲藥。亦九十三云。阿羅漢成佛非論義者所知。唯佛能了 已上
これ等の文を以てこれを思ふに、論師の權經は宛も佛の權實の如し。而るに、權經に依る人師猥に法華等を以て觀經等の權說に同じ、法華涅槃等の義を假りて、淨土三部經の德となし、決定性の二乘無性の闡提常沒等の往生を許す。權實雜亂の失脫れ難し。例へば外典の儒者の內典を賊みて外典を莊るが如し。謗法の失免れ難きか。佛自ら權實を分け玉ふ。その詮を探るに、決定性の二乘無性有情の成不成これなり。而るにこの義を辨へざる譯者、爾前の經々を譯する時、二乘の作佛、無性の成佛を許す。この義を知る譯者は、爾前の經を譯する時、二乘の作佛、無性の成佛を許さず。これによりて、佛意を覺らざる人師も亦爾前の經に於て、決定性無性の成佛を明すと見て、法華と爾前と同じき思を作し、或は爾前の經に於て決定無性を嫌ふ文を見、この義を以て了義經となし、

は、二乘の成不成を論ぜず。方等部の諸經には一向二乘無性闡提の成佛を斥く。般若部の諸經もこれに同じ。總じて四十餘年の諸大經の意は、法華涅槃大日經等の如く、二乘無性の成佛を許さず。これ等を以てこれを檢するに、爾前と法華との相違水火の如し。滅後の論師龍樹天親も亦倶に千部の論師なり。その差別を分つに、決定性の二乘、無性、闡提の成不成を以て論の權實を定むるなり。而るに、大論は龍樹菩薩の造、羅什三藏の譯、般若經に依る時は、二乘作佛を許さず。法華經に依れば二乘作佛を許す。十住毘婆沙論も亦龍樹菩薩の造、羅什三藏の譯なり。この論も亦二乘作佛を許さず、これを以て、法華已前の諸大乘經の意を申べたる論なることを知りぬ。

問うて云はく、十住毘婆沙論のいづれの處に、二乘作佛を許さざるの文を出したるや。

答へて云はく、十住毘婆沙論の第五に云はく、

若墮二聲聞地及辟支佛地一是名二菩薩死一則失二一切利一若墮二於地獄一不レ生二如レ是畏一若墮二二乘地一則爲二大怖畏一墮二於地獄中一畢竟得レ至レ佛若墮二二乘地一畢竟遮二佛道一

この文二乘作佛を許さず。宛も淨名等の「於佛法中以如敗種」の文の如し。

問うて云はく、大論の般若經に依りて、二乘作佛を許さず、法華經に依りて二乘作佛を

四惡―地獄、餓鬼、畜生、阿修羅

宿善―前世によき事をなしたること

塵點―塵點劫にて無量の長時

初頓―華嚴經は佛成道の最初に說かれし頓敎（たゞちに佛となる敎）なるをいふ

の邪氣を破りて、人天四惡を以て、法華經の機と定む。種類相對を以て、過去の善惡を收む。人天に生ずる人、豈過去の五戒十善なからんや、等と定め了んぬ。若慧心この義に背かば豈天台宗を知る人ならんや。而るに源信深くこの義に迷ふが故に、往生要集に於て、僻見を起し、自ら失ひ、佗をも誤るなり。適宿善ありて、實教に入りながら、一切衆生を化して、權經に還らしめ、剩へ、實經を破らしむ。豈惡師にあらずや。彼の「久遠下種大通結緣」の者の五百三千の塵點を經るが如きは、法華の大教を捨てて、爾前の權妙に遷るが故に、後には權經をも捨てて六道に回りぬ。不輕輕毀の衆は、千劫阿鼻地獄に墮つ。權師を信じて、實經を弘むる者に誹謗を作したるが故なり。而るに、源空我が身唯實經を捨てて、權經に入るのみにあらず。人を勸めて、實經を捨てて權教に入らしめ、亦權人をして實經に入らしめず。剩へ、實經の行者を罵るの罪永劫にも浮み難からん。

問うて云はく、十住毗婆沙論は一代の通論なり。難易の二道の内に、何ぞ法華眞言涅槃を入れざるや。

答へて云はく、一代の諸大乘經に於て、華嚴經の如きは、初頓後分あり。初頓の華嚴

法界―宇宙全體をさす

臨終正念―死に臨みて佛を念ずる心の動かぬこと

淺機―智淺きものを得道せしむる意

三大部―法華經の玄義、文句、及び止觀

本末―本は天台の著、末は妙樂の註釋

心無くして法界を照し、音無くして一切經を誦し、卷軸を取らずして、法華經八卷を奉る德これあり。これ豈權敎の念佛者の、臨終正念を期して、十念の念佛を唱へんと欲する者に百千萬倍勝るの易行にあらずや。故に天台大師文句の十に云はく、

都勝諸經故言隨喜功德品。

妙樂大師の、法華經は、諸經よりも淺機を取るなり、而るに、人師この義を辨へざるが故に、法華經の機を深くとることを破りて云はく、

恐人謬解者。不測初心功德之大而推功上位蔑此初心。故今示彼行淺功深以顯經力。

「以顯經力」釋の意趣は、法華經は觀經等の權經に勝れたるが故に、行は淺く、功は深し。淺機を攝するが故なり。若慧心の先德、法華經を以て、念佛より難行と定め、愚者頑魯の者を攝せずと云はゞ、恐らくは、逆路伽耶陀の罪を招かざらんや。亦恐る人謬解の内に入らざらんや。總じて天台妙樂の三大部の本末の意には、法華經は諸經に漏れたる愚者、惡人、女人、常沒闡提等を攝し給ふなり。陀師佛意を覺らざるが故に、法華經を諸經に同じ、或は地住の機に取り、或は凡夫に於ても、別時意趣の義を存す。これ等

散心に一心を一處に定めずに

散心誦二華法一。不レ入二禪三昧一。坐立行。一心念二法華文字一。

この釋の意は、末代の愚者を攝せんが爲なり。散心とは定心に對する語なり。誦法華とは、八卷一卷一字一句一偈題目一心一念隨喜の者五十展轉等なり。坐行とは、四威儀を嫌はざるなり。一心とは定の一心にもあらず、理の一心にもあらず、散心中の一心なり。念法華文字とは、この經は、諸經の文字に似ず、一字を誦すと雖も、八萬寶藏の文字を含み、一切諸佛の功德を納むるなり。天台大師玄義の八に云はく、

手不レ執二卷一常讀二是經一。口無二言聲一偏誦二衆典一。佛不レ說レ法恒聞二梵音一。心不二思惟一普照二法界一上已。

この文の意は、手に法華經一部八卷を執らざれども、この經を信ずる人は、晝夜十二時の持經者なり。口には讀經の聲を出さざれども、日々時々念々に一切經を讀む者なり。佛の入滅はすでに二千餘季をへたり。然りと雖も、法華經を信ずる者の許に、佛の音聲を留めて、時々刻々念々に我が死せざる由を聞かしむるなり。心に一念三千を觀ぜざれども、偏く十方法界を照す者なり。これ等の德は、法華經を行ずる者に備るなり。この故に、法華經を信ずる者は設ひ臨終の時、心に佛を念はず、經を誦せず、道場に入らざるも、

四威儀―行（あるく間）住（直立して居る間）坐（すわり居る間）臥（寢て居る間）

宗佗宗之偏黨。專擇權智實智之深奧。終得一乘眞實之理五乘方便之說者也。既開今生之蒙。何遺夕死之恨。

この序の意は偏に、慧心の本意を顯すなり。自宗佗宗の偏黨を捨つる時、淨土の法門を捨てざらんや。一乘は眞實の理を得る時專ら法華經に依るにあらずや。源信僧都は、永觀二年甲申の冬十一月往生要集を造り、寛弘二年丙午の冬十月の比一乘要訣を造る。その中間二十餘季、權を先にし、實を後にす。宛も佛の如く、亦龍樹天親天台等の如し。汝往生要集を便となし、師の謗法の失を救はんと欲すれども敢てその義類に似ず。義類の同じきを以て一處に聚るならば、何等の義類同じきや。華嚴の如きは、二乘界を隔つるが故に十界互具なし。方等般若の諸經は亦十方互具を許さず。觀經等の往生極樂も亦方便の極樂なり。成佛往生倶に法華經の如き往生にあらず。皆別時意趣の往生成佛なり。その上、源信僧都の意は、四威儀に行じ易きが故に、念佛を以て易行と云ひ、四威儀に行じ難きが故に、法華を以て難行と稱せば、天台妙樂の釋を破る人なり。所以に、妙樂大師の末代の鈍者無智の者等の法華經を行ずるに、普賢菩薩並に多寶十方の諸佛を見奉るを易行と定めて云はく、

七逆罪—出佛身血、殺父、殺母、殺和尚、殺阿闍梨、破羯磨僧、殺阿羅漢、

攝す—成佛せしむるものの中にをさめ入れてあること

一往—たゞ一と通り

王三昧—三昧中の王

槃等には、唯五逆七逆謗法の者を攝するのみにあらずして、また定性無性をも攝す。就中末法に於ては常沒の闡提これ多し、豈に觀經等の四十餘季の諸經に於てこれを扶く可けんや。無性の常沒、決定性の二乘は但法華涅槃等に限れり。四十餘季の經に依る人師は、彼經の機を取る。この人は未だ敎相を知らざるが故なり。但し往生要集は一往序文を見る時は、法華眞言等を以て顯密の內に入れて殆ど末代の機に叶はざる書と雖も、文に入りて委細に一部三卷の始末を見るに、第十の問答料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時、觀佛三昧、般舟三昧、十住毗婆沙論、寶積、大集等の爾前の經論を引きて、一切の萬行に對して、念佛三昧を以て王三昧と立て了んぬ。最後一の問答あり。爾前の禪定念佛三昧を以て、法華經の一念信解に對するに百千萬倍劣ると定む。復問を通ずる時、念佛三昧を萬行に勝ると云ふは爾前の當分なりと云々。知る當し、慧心の意は、往生要集を造りて末代の愚なる機を調へて、法華經に入れんが爲なり。故に最後に一乘要訣を造る。その序に云はく、

諸乘權實古來諍也。俱據經論互執是非。余寛弘丙午歲冬十月病中歎曰。雖遇佛法不了佛意。若終空手後悔何追。爰經論文義賢哲章疏。或令人尋或自思擇。全捨自

波羅密―梵語、度と譯す、この行によりて迷界を度りて悟界に入らしむる意

一念信解―只一念たりとも信解すること

行淺功深―修行は淺くとも功德は深きこと

四重―殺生、偸盜、邪淫、妄語を四重禁戒とす

行ニ大直道一無ニ留難一故。

と佛自ら難易勝劣の二道を分ち玉へり。佛よりほか、等覺已下末代の凡師に至るまで、自義を以て難易の二道を分ち、この義に背く者は外道魔王の説に同じからんと。隨つて四依の大士龍樹菩薩十住毗婆沙論には、法華已前に於て難易の二道を分ち、敢て四十四年已後の經に於て難行の義を存ぜず。その上もし修し易きを以て易行と定めば、法華經の展轉の行は、稱名念佛より行じ易きこと、百千萬億倍なり。もしまた、勝を以て易行と定めば、分別功德品に爾前四十餘季の八十萬億劫の間、檀、戒、忍、進、念佛三昧等、先の五波羅密の功德を以て法華經の一念信解の功德に比するに、一念信解の功德は、念佛三昧等の先の五波羅密の功德に勝ること百千萬億倍なり、難易勝劣といひ、行淺功深と謂ひ、觀經等の念佛三昧を法華經に比するに、難行中の極難、勝劣中の極劣なり。その上惡人愚人を扶くること、また教の深淺による。阿含十二季の戒門には、現身に四重五逆の者に得道を許さず。華嚴、方等、般若、雙觀經等の諸經は、阿含經より教深きが故に、觀門の時重罪の者を攝すと雖も、なほ戒門の日は、七逆の者に現身の受戒を許さず。然りと雖も、決定性の二乘、無性の闡提に於て戒觀共にこれを許さず。法華涅

當りて、法華眞言は聞き難く、行ひ難きが故に、わが身鈍根なるが故にとなり。敢て法體を嫌ふにはあらず、その上、序より已外正宗に至るまで十門あり。大文第八の門に述べて云はく、

今勸念佛、非是遮餘種種妙行。只是男女貴賤。不簡行住坐臥。不論時處諸縁修之不難。乃至臨終願求往生得其便宜不如念佛。已上。

これ等の文を見るに、源空の選擇と、源信の往生要集と、一巻三巻の不同ありと雖も、一代聖教の中には易行を撰んで、末代の愚人を救はんと欲する意趣は但し同じことなり。源空上人眞言法華を難行と立てて惡道に墮せば、慧心先德もこの失を免るべからず。如何。

答へて云はく、汝、師の謗法の失を救はんがために、源信の往生要集に寄せて、謗法の上に彌よ重罪を招くものなり。その故は、釋迦如來五十年の說教に總じて四十二年の意を無量義經に定めて云はく、

行於險逕多留難故。

と、無量義經の已後を定めていはく、

留難—さまたげ

法體―敎の內容、

常沒―常に惡道に沈沒する

雜云々―往生の目的に適切ならざるもの

聖道淨土の二門を分つと雖も、我私に法華眞言等の實大密大を以て、四十四季の權大乘に同じて聖道門と稱す。「準レ之思レ之」の四字これなり。善導和尚の正雜二行を分つ時もまた、法華眞言を以て、雜行の內に入る。總じて選擇集の十六段に亙りて、無量の謗法をなす根源は、この四字より起る。誤れるかな。畏しきかな。爰に、源空の門弟、師の邪義を救うて云はく、諸宗の常の習、譬ひ經論の證文無しと雖も、義類の同じきを聚めて一處に置く。而も選擇集の意は、法華眞言等を集めて雜行の內に入れ、正行に對してこれを捨つ。偏に經の法體を嫌ふにあらず。但風勢なき末代の衆生を常沒の凡夫と定めて、この機易行の法を撰ぶ時、稱名念佛を以てその機に當て、易行の法を以て諸敎に勝ると立つ。權實淺深等の勝劣を詮ずるにあらず。雜行といふを嫌ひて、雜といふにあらず。雜と云ふは、不純を雜といふ。その上諸の經論竝に諸師もこの意なきにあらず。故に叡山の先德の往生要集の意偏にこの義なり。所以に往生要集の序に云はく、

顯密敎法其文非レ一。事理業因其行惟多。利智精進之人未レ爲レ難。如二予頑魯之者一豈敢矣。是故依二念佛一門一云云。

この序の意は慧心先德も、法華眞言等を破るにあらず、但偏にわれ等頑魯の者の機に

應の惡言を吐き、選擇集の邪義を扶け、一旦の欲心に依りて、釋迦、多寶並に十方諸佛の御評定の「會法久住於閻浮提廣宣流布」の誠言を壞り、一切衆生に於て、一切三世十方の諸佛の舌を切るの罪を得しむ。偏にこれ惡世の内の比丘は邪智にして、心諂曲に未だ得ざるをこれ得たりと謂ひ、乃至惡鬼その身に入り、佛の方便隨宜所説の法を知らざるが故なり。

問うて云はく、龍樹菩薩並に三師法華眞言等を以て、難、聖、雜の内に入れざるを、源空私に之を入るとは何を以て知るや。

答へて云はく、遠く餘處に證據を尋ぬべきにあらず。即ち選擇集に見えたり。

問うて云はく、選擇集の第一篇に云はく、

道綽禪師立㆓聖道淨土二門㆒而捨㆓聖道㆒。正歸㆓淨土㆒之文約束了。次下引㆓安樂集㆒私料簡段云。初聖道門者就㆑之有㆓二㆒。一者大乘。二者小乘。就㆓大乘中㆒雖㆑有㆓顯密權實等不同㆒。今此集意唯存㆓顯大及以權大㆒。故當㆓歷劫迂回之行㆒。準㆑之思㆑之。應㆑存㆓密大及以實大㆒。已上。

選擇集の文なり。この文の意は、道綽禪師の安樂集の意は、法華已前の大小乘經に於て、

等なり。聖、難、雜の失を判ずるには、末代の凡夫これを行ぜば、百の時に希に一二を得、千の時希に三五を得ん。或は千が中に一も無し。或は群賊惡衆邪見惡見邪雜の人等と定むるなり。淨、易、正の得を判ずるには、末代の凡夫これを行ぜば、十は即ち十生じ、百は即ち百生ぜん等なり。謗法の邪義これなり。

問うて云はく、一代聖教を聖道、淨土、難行、易行、正行、雜行と分つ。その中に難、聖、雜を以て時機不相應と稱すること、但源空一人の新義にあらず。曇鸞、道綽、善導三師の義なり。これ亦これ等人師の私の按にあらず。その源は龍樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり。若し源空を謗法の者と稱せば、龍樹菩薩竝に三師を謗法の者と稱するにあらずや。

答へて云はく、龍樹菩薩竝に三師の意は、法華已前の四十餘季の經に於て、難易等の義を存す。而るを源空より已來、龍樹竝に三師の難行等の語を借りて、法華眞言等を以て難雜等の內に入れぬ。所化の弟子師の失を知らず、この邪義を以て正義なりと存じ、この國に流布せしむるが故に、國中の萬民悉く、法華眞言等に於て時機不相應の想をなす。その上世間を貪る天台眞言の學者、世の情に隨はんが爲に、法華眞言等に於て、時機不相

佛性論—四卷、世親著

妙樂—名は湛然、荊溪尊者とも云ふ、天台智者大師第五世の孫

稱名—口に南無阿彌陀佛と稱ふること

若憎二背大乘一者。此是一闡提因。爲レ令二衆生捨一二此法一故。

謗法の相貌はこの法を捨てしむるが故なり。選擇集は、人をして法華經を捨てしむる書にあらずや。閣抛の二字は佛性論の憎背の二字にあらずや。亦法華經誹謗の相貌は四十餘季の諸經の如く、小善成佛を以て、別時意趣と定むる等なり。故に天台の釋に云はく、

若不レ信二小善成佛一則斷二世間佛種一也。

妙樂重ねてこの義を宣べていはく、

此經遍開二六道佛種一。若謗二此經一義當レ斷也。

釋迦多寶十方の諸佛、天親天台妙樂の意の如くんば、源空は謗法の者なり。所詮選擇集の意は、人をして法華眞言を捨てしめんと書き了んぬ。謗法の義疑なきなり。大文の第三に選擇集謗法の緣起を出さば、

問うて云はく、何れの證據を以て源空を謗法の者と稱するや。

答へていはく、選擇集の現文を見るに、一代聖教を以て二に分つ。一には聖道、難行、雜行、二には淨土、易行、正行なり。その中に聖、難、雜といふは、華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃、大日經等なり。淨、易、正と云ふは、淨土三部經の稱名念佛

山門―叡山
寺門―三井寺

四衆―出家の男女と在家の男女

山門、寺門、東寺、天台竝に日本國中法華眞言を習ふ諸人を群賊、惡衆、惡見の人等に譬ふる源空が重罪、何れの劫にかその苦果を經盡すべきか。法華經の法師品に持經の者を罵る罪を説いていはく、

若有惡人。以不善心。於一劫中。現於佛前。常毀罵佛。其罪尚輕。若人以一惡言毀訾在家出家讀誦法華經者。其罪甚重。

一人の持者を罵る罪すらかくの如し。況や書を造り、日本國の諸人に罵らしむる罪をや。何に、況やこの經を千中無一と定めて、法華經を行ずる人に疑を生ぜしむる罪をや。觀經等の權經に遷らしむる謗法の罪をや。願くは、一切の源空が所化の四衆、頓に選擇集の邪法を捨てて、忽に法華經に遷り、今後阿鼻の災を脱れよ。

問うていはく、正しく源空が法華經を誹謗する證文如何。

答へて云はく、法華經の第二に云はく、

若人不信毀謗斯經。則斷一切世間佛種。

不信の相貌は人をして法華經を捨てしむればなり。故に天親菩薩の佛性論の第一にこの文を釋して云はく、

念佛三昧—心を阿彌陀佛にかけて念を他に散さぬ修行、三昧は梵語、定と譯し、心を一つ所に定むること

內證—自己心內のさとり

本國の源信僧都はまた、叡山第十八代の座主慈慧大師の御弟子なり。多くの書を造れどもみな法華經を弘めんがためなり。而るに往生要集を造るの意は、爾前四十餘季の諸經に於て、往生成佛の二義あり。成佛の難行に對して、往生易行の義を存し、往生の業の中に於て、菩提心觀念の念佛を以て最上となす。故に大文第十の問答料簡の中第七の諸行勝劣門に於ては、念佛を以て最勝となす。次下に爾前最勝の念佛を以て、法華經の一念信解の功德に對して、勝劣を判ずる時、一念信解の功德は、念佛三昧より勝る百千倍なりと定めたまへり。當に知るべし、往生要集の意は、爾前最上の念佛を以て、法華最下の功德に對して、人をして法華經に入らしめんが爲に造れる書なるを。故に往生要集の後に、一乘要訣を造りて、自身の內證を述ぶる時、法華經を以て本意となす。而るに、源空竝に所化の衆、この義を知らざるが故に、法華眞言を以て、三師竝に源信所破の難聖雜竝に往生要集の序の顯密中に入れて、三師竝に源信を法華眞言の謗法の人となす。その上、日本國の一切の道俗を化し、法華眞言に於て、時機不相應の旨を習はしめ、在家出家の諸人に於て、法華眞言の結緣を留む。豈に佛の記し玉ふ所の「世中比丘邪智心諂曲」の人にあらずや。亦「則斷一切世間佛種」の失を免るべきか。その上、

順次—此の世を去れば直に次の生を受くること

萬行—念佛の一行に對してあらゆるよき修行をさす

を造りて、華嚴、方等、般若等の意を宣べ、大論を造りて、般若、法華の差別を分ち、天親菩薩は、如來の滅後九百季に出世して、倶舍論を造りて、小乘の意をのべ、唯識論を造りて、方等部の意をのべ、最後に佛性論を造りて、法華、涅槃の意をのべ、了義、不了義を分ちて、敢て佛の遺言に違はず。末の論師竝に譯者の時に至りては、一向權經に執するが故に、實經を會して、權經に入れ、權實雜亂の失出來せり。亦人師の時に至りては、各依憑の經を以て、本となすが故に、餘經を以て權經となす。これより、彌佛意に背く。而るに淨土の三師に於ては、鸞綽の二師は、十住毘婆沙論に依りて、難易聖淨の二道を立つ。若し本論に違ひて、法華眞言等を以て、難易の內に入れば信用に及ばず。隨つて、淨土の論註竝に安樂集を見るに、多分は本論の意に違はず。善導和尚は亦淨土の三部經に依りて、彌陀稱名等の一行一願の往生を立つる時、梁、陳、隋、唐の四代の攝論師、總じて、一代聖教を以て、別時意趣と定む。善導和尚の存念に違へるが故に、攝論師と破する時、彼の人を群賊等に譬ふ。順次往生の功德に賊するが故に、その所行を雜行と稱することは、必ず萬行を以て、往生の素懷を遂ぐる故は、この人初むる故に千中無一と嫌へり。この故に善導和尚も雜行の言の中に、敢て法華眞言等を入れず。日

會す—解釋する

若但云々—衆生の機を考へずに最上の教をはめ說けば云々

爲本—目的とすといふに同じ

ざる世間の學者は、大集權門の五五百歲の文を以て、この經に同じ、淨土三部經より已前に滅盡すべしと存ずる立義は、一經先後の起盡を忘れたるなり。

問うて云はく、上に擧ぐる所の、曇鸞、道綽、善導、慧心等の諸師みな法華眞言等の諸經に於て、末代不相應の釋を作る。これに依りて、源空竝に所化の弟子、法華眞言等を以て雜行と立て、難行道と誹み、行者をば、群賊惡衆惡見の人等と罵り、或は祖父の履に類し（聖光房語）或は、絃歌等にも劣るといふ（南無房語）。その意趣を尋ぬれば、偏に時機不相應の義を存ずるが故なり。これ等の人師の釋を如何に、これを會すべきや。

答へて云はく、釋迦如來一代五十年の說教一佛の金言に於て、權實二教を分け、權經を捨てて、實經に入らしむる佛語顯然たり。こゝに於て、「若但讃佛乘。衆生沒在苦」の道理を恐れ、且く四十二季の權經を說くと雖も、「若以小乘化乃至於一人。我則墮慳貪」の失を脫れんがために、「入大乘爲本」の義を存し、本意を遂げて法華經を說き給ふ。

しかるに涅槃經に至りて、

我滅度必出四依令弘通權實二教。

と約束し了んぬ。故に龍樹菩薩は、如來の滅後八百季に出世して、十住毘婆沙等の權論

四味—五味中の前四味

多寶如來從地涌出。分身諸佛自十方來集一處。釋迦如來諸佛爲御使責充滿八方四百萬億那由佗世界菩薩二乘人天八部等。云多寶如來竝十方諸佛涌出來集意趣偏爲令法久住也。各三說諸經滅盡之後。偏於未來五濁難信世界弘此經立誓言時。二萬菩薩八十萬億那由佗菩薩各立誓狀云。我不愛身命但惜無上道。千世界微塵菩薩文殊等皆誓云。我等於佛滅後乃至當廣說此經云云。

その後佛十諭を擧げ玉ふ。その第一の喩は、川流江河を以て、四十餘季の諸經に譬へ、法華經を以て大海に譬ふ。末代濁惡の無慚無愧の、大旱魃の時、四味の川流江河は竭ると雖も、法華の大海は減少せず等と說き了へて、次下に正く說て云はく、

我滅度後。後五百歲中。廣宣流布。於閻浮提無令斷絕。

と定め了んぬ。倩ら文の次第を按ずるに、我滅度後の次の後の字は、四十餘季の諸經滅盡の後の後の字なり。故に、法華經の流通たる涅槃經にいはく、

應以無上佛法付諸菩薩。以諸菩薩善能問答。如是法寶則得久住。無量千世增熾益盛利安衆生。已上。

かくの如き等の文は、法華、涅槃は無量百歲にも絕ゆべからざる經なり。この義を知ら

留めて教化せしむとの佛言

速疾歷劫―普通は長き時間を修行せざるべからざるを直に飛び越えて佛となるを得との教

隨宜―方便といふに同じ

外道―外教、多くは婆羅門教の說をさす

三說―已今當經を輕重せられしをさす

八萬聖教―八萬四千の法門と云ふに同じ

劫の往生成佛、無量義經の實義を以てこれを檢ぶるに、無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐれども、終に、無上菩提を成ずることを得ず。乃至險逕を行くに、留難多きが故に經と云ふなり。往生、成佛倶に別時意趣なり。大集、雙觀經等の住滅の先後はみな隨宜の一說なり。法華經に來らざる以前は、彼の外道の說に同じ。譬へば、江河の大海に趣かず、民臣の天王に隨はざるが如し。身を苦しめ行を作すとも、法華、涅槃に至らざれば、一分の利益なく、有因無果の外道なり。在世滅後倶に、教ありて、人無く、行ありて、證なきなり。諸木は枯るゝと雖も、松柏は萎まず。衆草は散ると雖も、鞠竹は變せず。法華經も亦復かくの如し。釋尊の三說、多寶の證明、諸佛の舌相、偏に令法久住にあるが故なり。

問うていはく、諸經滅盡の後、特り法華經の留るべき證文如何。

答へていはく、法華經の法師品に、釋尊自ら流通せしめていはく、

我所說經典無量千萬億。已說今說當說。而於其中此法華經最爲難信難解云云。

文の意は一代五十季の已今當の三說に於て最も第一の經なり。八萬聖教の中に殊に未來に留めんと欲して說き玉ひしなり。故に次の品に、

特留—特に末代の爲にこの經を

答へていはく、爾前四十四季の經經は、各、時機に隨つて、而も興廢あるが故に、多分は、淨土の三部經より、已前に滅盡あるべきか。諸經に於ては、多く三乘現身の得道を說くが故に、末代に於ては、現身得道の者これ少し。十方の往生淨土は、多くは末代の機に蒙らしむ。これに就きて、西方極樂は、娑婆鄰近なるが故に、最下の淨土なるが故に、日輪東に出で西に沒するが故に、諸經に多くこれを勸む。隨つて淨土の祖師のみ獨りこの義を勸むるにあらず。天台妙樂等も亦爾前の經に依るの日は、且くこの筋あり。亦獨り人師のみにあらず。龍樹天親もこの義あり。これ一義なり。亦仁王經等の如きは、淨土の三部經より尙久しく末法萬季の後、八千季住す可しと。故に、爾前の諸經に於て一定すべからず。第二に、法華、涅槃と、淨土の三部經との久住、不久住を明さば、

問うて云はく、法華、涅槃と、淨土の三部經といづれが先に滅すべきか。

答へて云はく、法華、涅槃より已前に、淨土の三部經は滅す可きなり。

問うていはく、何を以てこれを知るや。

答へていはく、無量義經に、四十餘季の大部の諸經を擧げ了へて、未顯眞實と云ふ。故に雙觀經等の特留此經の言は皆方便なり、虛妄なり。華嚴方等、般若、觀經等の速疾歷

目足―重要なるもの

末法設雖有教法無行證於然者行佛法者。萬一難有得道歟。然見雙觀經當來之世經道滅盡。我以慈悲哀愍特留此經止住百歲。其有衆生値斯經者。隨意所願皆可得度。等文。釋迦如來一代聖教皆滅盡後。唯特留雙觀經念佛可利益衆生。と見え了んぬ。この意趣に依りて、粗、淨土家の諸師の釋を勘ふるに、その意なきにあらず。道綽禪師は、當今末法は、これ五濁惡世なり、唯淨土の一門のみ通入の路なるべしと書し、善導和尚は、萬年に三寶滅し、この經のみ住すること百年なりと宣べ、慈恩大師は、末法萬年に餘經悉く滅し、彌陀の一教利物、偏に增すと定め、日本國の叡山の先德慧心僧都は、一代聖教の要文を集めて、末代の指南を敎ゆる、往生要集の序にいはく、

夫往生極樂之教行濁世末代之目足也。道俗貴賤誰不歸者。但顯密教法其文非一事理業因其行惟多。利智精進之人未爲難。如予頑魯之者豈敢矣。

乃至次下にいはく、

就中念佛之教多利末代經道滅盡後濁惡衆生計也。

總じて、諸宗の學者も、この旨を存すべし。殊に、天台一宗の學者誰か、この義に背くべけんや。如何。

子、正法華經の屬類の經末、婆娑論の十六字、攝論の識と八九に分つ。法華論と妙法華經との相違、涅槃論の法華煩惱に汙するの文、法相宗の定性無性の不成佛、攝論宗の法華經の一稱南無の別時意趣、これ等は譯者人師の誤なり。この外に、四十四季の經々に於て、多くの誤あり。設ひ法華、涅槃に於て、誤あるも、誤なきも、四十餘季の諸經を捨てて、法華、涅槃に隨ふべし。その證上に出し了んぬ。況や、誤ある諸經に於て、信心を致す者、生死を離るべきや。大文の第二に、正像末に就きて、佛法の興廢あることを明さば、これに就きて二あり。一には、爾前四十餘季の内の諸經と、淨土の三部經と、末法に於て、久住、不久住を明かにし、二には、法華、涅槃と、淨土の三部經、竝に、諸經との久住、不久住を明にす。

問うていはく、如來の教法は、大小、深淺、勝劣を論ぜず。但時機に依りてこれを行へば定めて利益あるべきなり。然るに、賢劫、大術、大集等の諸經を見るに、佛の滅後二千餘季已後は、佛法皆滅して、但、教のみありて、行證あるべからず。隨つて、傳教大師の末法燈明記を開くに、

我延曆二十季辛巳一千七百五十歲。一說也 自延曆二十季已後亦四百五十餘歲也。既入

別時意趣—最後未達の結果を今の事の如くに說きて人を導くこと

久住—三の教世に存して人を導く力あること

行證—教の如くに修行すると、修行によりて證果(さとり)を得ること

梵漢未達—梵語と漢語とに通達せざること
宿習—昔より習の性となり居ること
會通—論斷
流轉—まよひのまゝに身をまかすこと
法爾—自然
無漏—さとり

來の入滅は、すでに二千二百餘の星霜を送れり。文殊、迦葉、阿難、經を結集せし已後四依の菩薩重ねて、世に出で、論を造り、經の意を申べ、末の論師に至りて漸く誤出來す。亦譯者においても、梵漢未達の者、權教宿習の人、實の經論を曲げて、權の經論の義を存ぜり。これに就きて唐土の人師、過出の權敎の宿習の故に、權の經論心に叶ふ間、實の經論を用ひず。小しく自義に違ふ文あれば、理を曲げて、會通を構へ、以て自身の義に叶はしむ。設ひ後に、道理と念ふと雖も、或は名利に依り、或は檀那の歸依に依りて、權宗を捨てて實經に入らず。世間の道俗亦無智の故に、理非を辨へず、但し人に依りて法に依らず。設ひ惡法たりと雖も、多人の邪義に隨つて、一人の實說に依らず。而るに衆生の機多くは流轉に隨ひ、設ひ、出離を求むとも、亦多分は、權經に依る。但恨むらくは、惡業の身、善に付け、惡に付け、生死を離れ難きのみ。然りと雖も、今の世の一切の凡夫、設ひ今生を損すと雖も、上に出す所の涅槃經第九の文に依りて、且く法華、涅槃を信ぜよ。その故は、世間の淺事すら、展轉する時は、虛は多く、實は少し。況や佛法の深義に於いてをや。如來の滅後二千餘年の間、佛教に邪教を副へ來り、萬に一も正義なきか。一代の聖教多分は誤あるか。ゆゑに、心地觀經の法爾無漏の種

過去云々—釋迦佛以前に古く七佛相つぎて世に出で給へりといふ

未結集—いまだ編輯せぬ

雙林最後—娑羅雙樹林にて釋尊の入滅せらるゝ時に涅槃經を說かる

三昧發得—さとりを得たること

し、分身の諸佛十方より盡く一處に集りて、舌を梵天に付け玉ふ。今この義を以て、余推察を加ふるに、唐土、日本に渡れる所の、五千七百餘巻の諸經以外の、天竺、龍宮、四王天、過去の七佛等の諸經、並に、阿難の未結集の經、十方世界の塵に同ずる諸經の、勝劣、淺深、難易、掌中にあり。無量千萬億の中に、あに、釋迦如來の所說の諸經に漏るべきや。已說、今說、當說の年限に入らざる諸經これあるべきや、願はくは、末代の諸人且く、諸宗高祖の弱文無義を閣いて、釋迦、多寶、十方諸佛の強文有義を信ずべし。何に、況や、諸宗の末學偏執を先と爲し、末代の愚者、人師を本と爲して、經論を抛つる者に依憑すべきや。故に、法華の流通たる、雙林最後の涅槃經に、佛、迦葉童子菩薩に遺言して云はく、

依レ法不レ依レ人。依レ義不レ依レ語。依レ智不レ依レ識。依ニ了義經一不レ依ニ不了義經一云云。

予世間を見聞するに、自宗の人師を以て、三昧發得、智慧第一と稱すれども、無德の凡夫をして、實經に依りて法門を信ぜしめず、不了義の觀經等を以て、時機相應の敎と稱し、了義の法華、涅槃を閣いて、誤りて、理深解微の失を付く。如來の遺言に背きて、依人不依法、依語不依義、依識不依智、依不了義經不依了義經と談ずるにあらずや。如

二藏—聲聞藏（小乘教）菩薩藏（大乘教）
舊譯新譯—華嚴經の翻譯に舊と新とにより數種あり
佛乘—最上の佛となるべき教
頓教—直に佛果に至らしむる教
漸教—長き修業を經て漸く佛果に進む教
意樂—考といふほどの語
已—法華以前をさす
今—法華をさす
當—涅槃をさす

諸宗の高祖多分は、四依の菩薩なるか、定めて所存あらん。是非に及ばず。然りと雖も、自身の疑を晴さんがために、且く人師の異解を閣いて、諸宗の依憑の經々を開き見るに、華嚴經は、舊譯五十六十、新譯八十四十なり。その中に、法華、涅槃の如き、一代聖教を集めて方便と爲すの文無し。四乘を說くと雖も、その中の佛乘に於いて、十界互具久遠實成を說かず。但し、人師に至りて、五教を立て、先の四教に諸經を收めて華嚴の方便となす。法相宗の如きは、三時教を立つるの時、法華等を以て、深密經に同ずと雖も、深密の五卷を開き見るに、全く、法華等を以て、中道の內に入れず。三論宗の如きは、二藏を立つる時、菩薩藏に於て、華嚴、法華等を收め、般若經に同ずと雖も、新譯の大般若經を開き見るに、大般若を以て、法華涅槃に同ずるの文なし。華嚴は頓教、法華は漸教等とは、人師の意樂にして、佛說にあらざるなり。法華經の如きは、序分無量義經に慥に四十餘季の季限を擧げ、華嚴、方等、般若等の大部の諸經の題名を呼びて、未顯眞實と定め、正宗の法華經に至りて、一代の勝劣を定むる時、わが所說の經典無量千萬億、已に說き、今說き、當に說かんとするの金言を吐きて、而もその中に於いて、この法華經は最も、これ難信、難解なりと說き給ふ時、多寶如來地より湧出して、妙法華經皆これ眞實と證誠

了義—實義を盡したるをいふ

歷劫修業—無限の長時を修業して後に進むこと

五性各別—人には根本よりさとりの五種の階段に至るべき性定まり居るとの說

問うていはく、不了義經を捨てて、了義經に就くとは、大圓覺修多羅了義經大佛頂如來密因修證了義經、かくの如き諸乘經は、みな了義經なり。依用すべきか。

答へていはく、了義、不了義は所對に隨つて不同なり。二乘菩薩等の所說の不了義經に對して、一代の佛說は、みな了義なり。佛說に就きて、また、小乘經は不了義、大乘經は了義なり。大乘に就きて、また、四十餘年の諸經は不了義經にして、法華、般若、大日經等は了義經なり。而るに、圓覺、大佛頂等の諸經は、小乘、及び歷劫修業の不了義經に對すれば、了義經なり。法華經の如きは、了義にあらざるなり。

問うていはく、華嚴、法相、三論等、天台、眞言より以外の諸宗の高祖、各、その依憑の經々に依りて、その經々の深義を極めんと欲へり。これ爾るべきや。如何。

答へていはく、華嚴宗の如きは、華嚴經によりて、諸經を判じて華嚴經の方便となす。法相宗の如きは、阿含、般若等を卑しとして、華嚴、法華、涅槃を以て、深密經に同じ。同じく、中道教を立つると雖も、亦、法華、涅槃は、一類の一乘と說くが故に不了義經なり。深密經には、五性各別を存するが故に、了義經と立つるなり。三論宗の如きは、二藏を立てて、一代を攝し、大乘に於いて深淺を論せず、而も、般若經を以て依憑となす。これ等の

法華經第七に、法華經を行ずる者の住處を說いていはく、

於如來滅後、應當一心受持讀誦解說書寫如說修行。所在國土乃至若經卷所住之處。若於園中。若於林中。若於樹下。若於僧坊。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。是中皆應起塔供養。所以者何。當知是處卽是道場。諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提。是九

法華經の流通たる涅槃經にいはく、

我涅槃後正法未滅。餘八十年爾時。是經於閻浮提當廣流布。是時當有諸惡比丘。抄掠是經分作多分能滅正法色香味美。是諸惡人雖復讀誦如是經典。滅除如來深密要義、安置世間莊嚴文飾無義之語。抄前著後抄後著前前後著中。中著前後。當知如是諸惡比丘是魔伴侶。乃至譬如牧牛女多加水乳。諸惡比丘亦復如是。雜以世語錯定是經。令多衆生不得正說正寫正取尊重讚歎供養恭敬。是惡比丘爲利養故不能廣宣流布是經。所可分流少不足言。如彼牧牛貧窮女人展轉賣乳乃至成糜而無乳味。是大乘經典大涅槃經亦復如是。展轉薄淡無有氣味。雖無氣味猶勝餘經是一千倍。如彼乳味於諸苦味爲千倍勝。何以故是大乘經典大涅槃經於聲聞經最爲上首十是。

此經難持。若暫持者。我即歡喜。諸佛亦然。如是之人諸佛所歎。是則勇猛。是則精進。是名持戒行頭陀者。（於末代無四十餘年の持戒。唯持法華經爲持戒。是三。）

涅槃經にいはく、

於乘緩者乃名爲緩。於戒緩者不名爲緩。菩薩摩訶薩於此大乘心不懈慢。是名奉戒。爲護正法。以大乘水而自澡浴。是故菩薩雖現破戒不名爲緩。（是文は通法華經の戒を文也。是四。）

法華經第四にいはく、

妙法華經乃至皆是眞實。（此文は多寶の證明也。是五。）

法華經第八普賢菩薩の誓にいはく、

於如來滅後。閻浮提内廣令流布。使不斷絶。（是六。）

法華經第七に云はく、

我滅度後。後五百歳中。於閻浮提無令斷絶。（釋迦如來の答。是七。）

法華經第四に、多寶竝に、十方諸佛來集の意趣を說いて云はく、

令法久住故來至此。（是八。）

を存ずべきにあらず。法華經の方便品にいはく、

佛自住二大乘一。乃至自證二無上道一。大乘平等法一若以二小乘一化乃至於二一人一。我則墮二慳貪一。此事爲不可。

この文の意は、法華經より外の諸經を皆、小乘と說けるなり。亦壽量品にいはく、「樂二於小法一」これ等の文は、法華經より外の四十餘季の諸經を、みな、小乘と說けるなり。天台妙樂の釋に於て、四十餘季の諸經を、小乘と釋すれども、佗師これを許すべからず。故に、但、經文を出すなり。第四に、且く、權經を閣いて、實經に就くことを明さば、

問うていはく、證文如何。

答へていはく、十の證文あり。法華經にいはく、

但樂受二持大乘經典一。乃至不レ受二餘經一偈一。

涅槃經にいはく、

依二了義經一不レ依二不了義經一。四十餘季を云二不了義經一と是一。

法華經にいはく、

常途―普通、一般などいふに同じ

出世―出世間、宗教界のこと

自答を存ず―自分だけの考にて答をなすこと

に勝る由、これを顯す故なり。但し、邪見の文に至りては、法華經を覺知せざる一類の人、涅槃經を聞きて、悟を得る故に、迦葉童子の自身、並に、所引を指して、涅槃經已前を、邪見等といふなり。經の勝劣を論ずるにあらず。第三に、大小乘を定むることを明さば、

問うていはく、大小乘の差別如何。

答へていはく、常途の說の如きは、阿含部の諸經は小乘なり。華嚴、方等般若、法華、涅槃等は大乘なり。或は、六界を明すは、小乘なり。十界を明すは、大乘なり。

問うていはく、諸宗に亙りて、わが據るところの經を、實大乘といひ、餘宗所據の經を、權大乘といふこと、常の習なり。末學に於いて、是非定め難し。いまだ聞知せず。法華經に對して、諸大乘經を、小乘と稱する證文如何。

答へていはく、宗々の立義、互に是非を論ず。就中、末法に於いて、世間、出世につきて、非を先とし、是を後とす。自ら是非を知らず。愚者の歎ず可き所なり。但し且く、われ等が智を以て、四十餘季の現文を看るに、この文を破る文無ければ、人の是非を信用すべからず。その上、法華經に對して、諸大乘經を、小乘と稱することは、自答

乗之を信ずればつひに佛になること

久遠實成―今の釋尊は實は久しき以前に佛と成り居られしものとの説

當說―涅槃經をさす

舌相云々―眞實たることを證明するをいふ

法華經に嫌はれて、今說の中に入るなり。

問うていはく、法華經と、涅槃經と、いづれが勝れたるか。

答へていはく、法華經勝るゝなり。

問うていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、涅槃經に、自ら、「如₂法華中等₁」と說きて、「更無₂所作₁」と云ふ。法華經に、當說を指して、難信、難解といはざるが故なり。

問うていはく、涅槃經の文を見るに、涅槃經已前は皆、邪見といふ。如何、

答へていはく、法華經は、如來出世の本懷なるが故に、

「今者已滿足今正是其時。然善男我實成佛已來」

等と說く。但し、諸經の勝劣に於いては、佛自ら、我が說く所の經典は無量千萬億なりと擧げ了つて、已說、今說、當說等と說く時、多寶佛地より誦現して、皆これ眞實と定め、分身の諸佛は、舌相を、梵天に付し玉ふ。かくの如く、諸經と、法華經との勝劣を定めぬ。このほか釋迦如來、一佛の所說なれば、先後の諸經に對して、法華經の勝劣を論ずべきにあらず。故に、涅槃經に諸經を嫌ふ中に、法華經を入れず。法華經は、諸經

報身の壽ー報身佛の壽命無量なるをいふ

二乘作佛ー聲聞、緣覺の二小

十餘季の諸經は、無量義經に劣ること疑なき者なり。

問うていはく、密嚴經にいはく、一切經中勝。大雲經にいはく、諸經轉輪聖王。金光明經にいはく、諸經中王。これ等の文を見るに、諸大乘經の常の習なり。何ぞ、一文を瞻て、無量義經は、四十餘季の諸經に勝るといふや。

答へていはく、教主釋尊、もし諸經に於て、互に、勝劣を說かば、大小乘の差別、權實の不同あるべからず。もし、實に、差別無きに、互に、差別、淺深を說かば、諍論の根源、惡業起罪の因緣也。爾前の諸經は、第一に、緣に從ひて不定なり。或は、小乘の諸經に對して第一と、或は、報身の壽と說きて、諸經の第一と、或は、俗諦、眞諦、中諦等と說きて。第一なりと、一切の第一にあらず。今の無量義經の如きは、四十餘季の諸經に對して第一なり。

問うていはく、法華經と、無量義經と、いづれが勝れたろか。

答へていはく、法華經勝れたり。

問うていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、無量義經には、いまだ、二乘作佛と、久遠實成とを、明かにせず、故に、

卻後三月我當般涅槃。乃至如來昔於耆闍崛山及餘住處。已廣分別一實之道。今於此處。

問うていはく、普賢經の後に、いづれの經を說き給ふや。

答へていはく、涅槃經を說き給ひしなり。

問うていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、普賢經にいはく、

卻後三月我當般涅槃。

涅槃經三十にいはく、

如來何故二月涅槃。亦云如來初生出家成道轉妙法輪皆以八日。何佛涅槃獨十五日。

大部の經、大概かくの如し。これより已外諸の大小乘經は、次第不定なり。或は、阿含經より已後に、華嚴經を說き、法華經より已後に方等、般若を說く。皆、義類を以て、これを收めて、一處に置く可し。第二に、諸經の淺深を明さば、無量義經にいはく、

初說四諦(阿含)次說方等十二部經摩訶般若華嚴海空。宣說菩薩歷劫修行。

亦いはく、四十餘年未顯眞實。又いはく、無量義經尊無過上。かくの如き等の文は、四

に涅槃經を列ぬ。今の所立の次第は、般若經の後に、無量義經を列ぬる相違如何。

答へていはく、涅槃經第十四の文を見るに、涅槃經已前の諸經を列ねて、涅槃經に對して、勝劣を論じて、法華經を擧げず。第九の巻に於きて、法華經は、涅槃經より已前なりとこれを定め給ふ。法華經の序品を見るに、無量義經は、法華經の序文なり。無量義經には、般若の次に、華嚴經を列ぬれども、華嚴經を初時に遣ることは、般若經の後は、無量義經なればなり。

問うていはく、無量義經の後に、いづれの經を説き玉ふや。

答へて曰はく、法華經を説き玉ふなり。問ふていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、法華經の序品にいはく、

爲諸菩薩說大乘經名無量義敎菩薩法佛所護念佛說此經已結跏趺坐入於無量義處三昧。

問うていはく、法華經の後に、いづれの經を説き給ふや。

答へて曰はく、普賢經を説き玉ふ。問うていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、普賢經にいはく、

きて、別して、方等の名を立つるは、私の義にあらず。無量義經、涅槃經の文顯然たり。阿含の證果は、一向一乘なり。次に大乘を說く。方等より已後皆大乘と云ふと雖も、大乘の始なるが故に、初に從りて、方等部を方等といふなり。例へば、十八界の十半は、色なりと雖も、初に從へて色境の名を立つるが如し。

問うていはく、方等部の諸經の後には、いづれの經を說き給ふや。

答へていはく、般若經なり。

問うて曰はく、何を以て、これを知るや。

答へて曰はく、涅槃經に曰はく、

從二方等一出二般若一。

問うていはく、般若經の後には、いづれの經を說き給ふや。

答へて曰はく、無量義經なり。

問うていはく、何を以てこれを知るや。

答へていはく、仁王經にいはく、二十九年中と、無量義經に云はく、四十餘年と。

問うていはく、無量義經には、般若經の後に、華嚴經を列ね、涅槃經には、般若經の後

卽趣波羅柰。乃至爲五比丘說。

涅槃經に華嚴經の次の經を定めていはく、

於波羅柰國轉正法論。宣說中道。

これ等の經文は、華嚴經より後に、阿含經を說くなり。

問うていはく、阿含經の後にいづれの經を說き給ふや。

答へて曰はく、方等經なり。

問うていはく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、無量義經にいはく、

初說四諦。乃至次說方等十二部經。

涅槃經にいはく、

從修多羅出方等

問うて曰はく、方等とは、天竺の語、此には大乘と云ふなり。華嚴、般若、涅槃等皆大乘方等なり。なんぞ、獨方等部に限りて、方等の名を立つるや。

答へて云はく、實は、華嚴、般若、法華皆方等なり。しかりと雖ども、今、方等部に於

阿含經―小乘經の總稱に用ひたり

ひし證文なり。

問うて云はく、無量義經に云はく、

初說四諦乃至次說方等十二部經摩訶般若華嚴海空。

この文の如くんば、般若經の後に、華嚴經を說けり。相違如何と。

答へて云はく、淺深の次第なるか、或は、後方の華嚴經なるか。法華經の方便品に一代の次第淺深を列ねて云はく、

無有餘乘（華嚴經也）若二（般若經也）若三（方等經也）

此の意なり。

問うて云はく、華嚴經の次には、いづれの經を說き給ふや。

答へて曰はく、阿含經を說き給ふなり。

問うて云はく、何を以て、これを知るや。

答へていはく、法華經の序品に、華嚴經の次の經を說きていはく、

若人遭苦厭老病死爲說涅槃

方便品にいはく、

時―說かれたる時

師利菩薩に問うていはく、

又觀諸佛聖主師子演說經典微妙第一其聲淸淨出柔軟音敎諸菩薩無數億萬。

亦方便品に、佛自ら初成道の時を說いて云はく、

我始坐道場。觀樹亦經行。乃至爾時。諸梵王及諸天帝釋。護世四天王及大自在天。竝餘諸天衆眷屬百千萬。恭敬合掌禮。請我轉法輪

此等の說は、法華經に華嚴經の時を指す文なり。故に華嚴經の第一に云はく、

毘沙門天王 略 月天子 略 日天子 略 釋提桓因 略 大梵 略 摩醯首羅等 略

涅槃經に、華嚴經の時を說きて云はく、

旣成道已。梵天勸請。唯願如來。當爲衆生廣開甘露門。乃至梵王復言。世尊一切衆生凡有三種。所謂利根中根鈍根。利根能受唯願爲說。佛言梵王諦聽諦聽。我今當爲一切衆生開甘露門。

亦三十三に、華嚴經の時を說きて云はく、

如十二部經修多羅中微細之義我先已爲諸菩薩說

かくの如き等の文は皆、諸佛世に出で玉ひて、一切經の初には、必ず、華嚴經を說き玉

は、佛說に任せ、敢へて、自義を存ずること無し。分ちて、七門と爲す。一には、如來の經敎に於いて、權實二敎を定むることを明かにし、二には、正像末の興廢を明かにし、三には、選擇集の謗法の緣起を明かにし、四には、謗法の者を對治すべき證文を出すことを明かにし、五には、善知識、並に、眞實の法に値ひ難きを明かにし、六には、法華、涅槃に依る行者の用心を明かにし、七には、問に隨ひて答を明かにす。

大文の第一に、如來の經敎に於いて、權實二敎を定むることを明さば、此に於て四あり。一には、大部の經の次第を出して、流類を攝することを明かにし、二には、諸經の淺深を明かにし、三には、大小乘を定むることを明かにし、四には、且く權を捨て、實に就く可きことを明かにす。第一に大部の經の次第を出して、流類を攝することを明さば

問うて云はく、佛最初に何なる經を說き玉ふや。

答へて曰はく、華嚴經なりと。

問うて云はく、其の證如何と。答へて云はく、六十華嚴經の離世間淨眼品に云はく、

如是我聞。一時佛在摩竭提國寂滅道場。始成正覺。

法華經の序品に、放光瑞の時、彌勒菩薩、十方世界の諸佛の五時の次第を見る時、文殊

慧燈—智慧を燈火に譬ふ
三藏—經と律と論との一切佛法
日本邊土—日本といふ田舍
上人—淨土宗の法然上人をさす
一代を二門—釋尊の御説教を自力門と他力門とに分つ
四聖云々—聲聞、緣覺、菩薩、佛になる心を斷つこと
帝釋—天人の中にての頭
信謗—之を信ずると謗ると

得道の者は、麟角より希なり。或は、權教に依るが故に、或は、時機不相應の教に依るが故に、或は位の高下を知らざるが故に、凡夫の習、佛法に就きて、生死の業を增すこと、その緣一に非らず。中昔、邪知の上人有りて、末代の愚人の爲に、一切の宗教を破りて、選擇集一卷を造る。名を、曇、綽、導の三師に假りて、一代を二門に分ち、實經を録して權經に入れ、法華、眞言の直道を閉ぢて、淨土三部の隘路を開く。亦、淨土三部の義にも順ぜずして、權實の謗法を成し、永く四聖の種を斷じて、阿鼻の底に沈む可き僻見なり。而るに、世人これに順ふこと、譬へば大風の小樹の枝を吹くが如く、門弟此の人を重んずること、天衆の帝釋を敬ふに似たり。此の惡義を破らんが爲に、亦、多くの書あり、所謂、淨土決義鈔、彈選擇、摧邪輪等なり。此の書を造るの人皆碩德の名、一天に彌ると雖も、恐らくは、未だ、選擇集謗法の根源を顯さず。故に、還つて、惡法の流布を增す。譬へば、盛なる旱魃の時に、小雨を降せば、草木彌枯れ、兵者を打つ刻に、弱き兵を先にすれば、強敵倍力を得るが如し。予此の事を歎く間、一卷の書を造りて、選擇集の謗法の緣起を顯し、名づけて、守護國家論と號す。願はくは、一切の道俗、一時の世事を止めて、永劫の善苗を種ゑよ。今經論を以て、邪正を直す。信謗

十方微塵ー十方の世界に無數にあるの意
三惡ー地獄、餓鬼、畜生
爪上ー爪の上ほどの僅少なる比喩
證果ーさとりの果を得たる
佛日ー釋尊をさす
四依ーたよるべき四つの法、法に依り人に依らず、了義經に依り不了義經に依らず、義に依り語に依らず、智に依り識に依らず

守護國家論

夫以るに、偶十方微塵三惡の身を脫れて、希に、閻浮日本爪上の生を受くるも、亦閻浮日本爪上の生を捨てて、十方微塵三惡の身を受けんこと疑無きなり。然るに生を捨てて、惡趣に墮つる緣一にあらず。或は、妻子、眷屬の哀憐に依り、或は、殺生、惡逆の重業に依り、或は、國王と成りて、民衆の難を知らざるに依り、或は、法の邪正を知らざるに依り、或は、惡師を信ずるに依る。此の中に於きても、世間の善惡は、眼前に在れば、愚人も之を辨ふべし。佛法の邪正、師の善惡に於きては、證果の聖人すら、尙ほ、これを知らざるなり。況や、末代の凡夫に於いてをや。加之ならず、佛日西山に隱れ、餘光東域を照してより已來、四依の慧燈は、日に滅し、三藏の法流は月に濁る。實經に迷へる論師は、眞理の月に雲を副へ、權經に執する譯者は、實經の珠を碎きて、權經の石となす。何に況や、震旦の人師の宗義それ誤無からんや。何に況や。日本邊土の末學誤り多く、實少き者をや。隨つて、其の敎を學ぶ人數は、龍鱗よりも多けれど、

従と申して三つしたがふ事有りて五つの障あり。龍女我女人をつみしれり。然れば餘をば知るべからず女人を導かんと誓へり。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

には人天の中にも交れり。其の相種々也。或は腹は大海の如く、咽は鍼の如くなれば、明けても暮れても食すとも飽くべからず。まして五百生七百生なんど飲食の名をだにも聞かず。或は己が頭をくだきて腦を食するもあり。或は一夜に五人の子を生みて夜の内に食するもあり。萬菓林に結べり、取らんとすれば悉く劍の林となり、萬水大海に流れ入りぬ。飲まんとすれば猛火となる。如何にしてか此の苦を脱るべき。次に畜生道と申すは其の住所に二あり。根本は大海に住す。枝末は人天に雜れり。短き物は長き物にのまれ、小き物は大なる物に食はれ、互に相食んでしばらくも休む事なし。或は鳥獸と生れ、或は牛馬と成りても重き物をおほせられ、西へ行かんと思へば東へやられ、東へ行かんとすれば西へやらる。山野に多くある水と艸をのみ思ひて、餘は知るところなし。然るに善男子善女人此の法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、此の三罪を脱るべしと說き給へり。何事か是にしかん、賴もしきかなたのもしきかな。又五の卷に云はく、

我聞二大乘教一度二脫苦衆生一

と。心はわれ大乘の教をひらいてと申すは法華經を申す。苦の衆生とは何ぞや。地獄の衆生にもあらず餓鬼道の衆生にもあらず只女人を指して苦の衆生と名づけたり。五障三

心を有すその內れは天に服して之に奉仕するもあり

跖―足の裏

焦熱―八熱地獄の一つ

金翅―金翅鳥とて鳥中の最大なるものとす

如しと云へり。又云はく一度女人を見る者はよく眼の功德を失ふ。設ひ大蛇をば見るとも女人を見るべからずと云ひて、又ある經には、

所有三千界男子諸煩惱合集爲二一人女人之業障一。

三千大千世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取集めて女人一人の罪とすと云へり。或經には三世の諸佛の眼を脫けて大地に墮つとも女人は佛に成るべからずと說き給へり。此の品の意は人畜をいはゞ畜生たる龍女だにも佛に成れり。まして我等は形のごとく人間の果報也、彼が果報にはまされり、爭か佛にならざるべきやと思食すべきなり。中にも三惡道におちずと說かれて候ふ。其の地獄と申すは八寒八熱乃至八大地獄の中に、初め淺き等活地獄を尋ぬれば此の一閻浮提の下一千由旬也。其の中の罪人は互に常に害心をいだけり。もしたま〳〵相見れば獵師が鹿にあへるが如し。各々鐵の爪を以て互につかみさく。血肉皆盡きて唯殘りて骨のみあり。或は獄卒棒を以て頭より跖に至るまで皆打ちくだく。身も破れ碎けて猶沙の如し。焦熱なんど申すは譬へんかたなき苦也。鐵城四方に囘りて門を閉ぢたれば、力士も開きがたく、猛火高くのぼつて金翅の翼もかけるべからず。餓鬼道と申すは其の住處に二あり。一には地の下五百由旬の閻魔王宮にあり。二

佛種子—佛になる種
夜叉—天の下に住し、恐ろしき

也。五の卷提婆品に云く、

若有ニ善男子善女人一。聞ニ妙法華經提婆達多品一、淨心信敬不レ生ニ疑惑一者、不レ墮ニ地獄餓鬼畜生一、生ニ十方佛前一

と。此の品には二つの大事あり。一には提婆達多と申すは阿難尊者には兄、斛飯王には嫡子、師子頰王には孫、佛には從弟にて有りしが、佛は一閻浮提第一の道心者にてましまししに怨をなして、我は又閻浮提第一の邪見放逸の者とならんと誓ひて、萬の惡人を語らひて佛に怨をなして三逆罪を作して現身に大地破れて無間大城に墮ちて候ひしを、天王如來と申す記莂を授けらるゝ品にて候ふ。然れば善男子と申すは男此の經を信じまゐらせて聽聞するならば、提婆達多程の惡人だにも佛になる。まして末代の人はたとひ重罪なりとも、多分は十惡をすぎず。まして深く持ち奉る人佛にならざるべきや。二には娑竭羅龍王のむすめ龍女と申すは、八歳の小蛇、佛に成りたる品にて候ふ。此の事めづらしく貴き事にて候ふ。其の故は華嚴經には、

女人地獄使。能斷ニ佛種子一、外面似ニ菩薩一、內心如ニ夜叉一

と。文の心は女人は地獄の使、よく佛の種をたつ、外面は菩薩に似たれども內心は夜叉の

法せられし由見ゆ

染淨虛融―けがれと云ふも淨きものといふもつづまる所はなにもなく一つのものに外ならぬの意

也と說かせ給へども、佛と云ふは無虛妄の人とて永く虛言し給はずと聞きしに、一日ならず二日ならず一月ならず二月ならず一年二年ならず、四十餘年の程まで虛言したりと仰せられしかば、又此經を實と說き給ふも虛言にやあらんずらんと不審なししかば、此の不審釋迦佛一人しては舍利弗を始め事はれがたかりしに、此の多寶佛寶淨世界よりはるばると來らせ給ひて、法華經は皆是眞實なりと證明し給ひしに、先の四十餘年の經を虛言と仰せらるゝ事、實の虛言に定まるなり。又法華經より外の一切經を空に浮べて、文文句句阿難尊者の如く覺り、富樓那の辯舌の如くに說くとも其を難事とせず。又須彌山と申す山は十六萬八千由旬の金山にて候ふを、佗方世界へ礫になぐる者ありとも難事には候はじ、佛の滅度の後當世末代惡世に法華經を有のまゝに能く說かん是を難しとすと說かせ給へり。五天竺第一の大力なりし提婆達多も、長三丈五尺廣一丈二尺の石をこそ佛になげかけて候ひしか。又漢土第一の大力楚の項羽と申せし人も、九石入の釜に水滿ち候ひしをこそ提げ候ひしか。其に是は須彌山をばなぐる者は有りとも、此の經を說の如く讀み奉らん人は有がたしと說かれて候ふに、人ごとに此の經をよみ書き說き候ふ經文を虛言に成して當世の人々を皆法華經の行者と思ふべき歟、能々御心得有るべき事

十方華王—佛の名
みぎり—砌、ところといふに同じ
瓔珞細輭の衣—うるはしき頸胸の飾、及びやはらかなる美しき衣
欲色二界—欲界と色界、三界の中の二つ
白鷺池—般若經の中に、佛がこの池の邊にて說

まして滅度の後一毫の煩惱をも斷ぜず、少しの罪をも辨へざらん法華經の行者を、惡み嫉む者多からん事は、雲霞の如くならんと見えたり。然れば則ち末代惡世に此の經を有りのまゝに說く人には敵多からんと說かれて候ふに、世間の人々我も持ちたり我も讀み奉り行じ候ふに、敵なきは佛の虛言歟、法華經の實ならざる歟、叉實の御經ならば當世の人々經をよみまゐらせ候ふは虛よみ歟、實の行者にてはなき歟、如何。能々心得べき事也明むべき物也。四の卷に、多寶如來は釋迦牟尼佛御年三十にして佛に成り給ふに初には華嚴經と申す經を十方華王のみぎりにして別圓頓大の法輪、法慧、功德林、金剛幢、金剛藏等の四菩薩に對して三七日の間說き給ひしにも來り給はず、其の二乘の機根叶はざりしかば瓔珞細輭の衣をぬぎすて、麤弊垢膩の衣を著、波羅奈國鹿野苑に趣いて、十二年の間、生滅四諦の法門を說き給ひしに、阿若倶鄰等の五人證果し、八萬の諸天は無生忍を得たり。次に欲色二界の中間、大寶坊の儀式、淨名の御室には三萬二千の牀を立て、般若白鷺池の邊、十六會の儀式、染淨虛融の旨をのべ給ひしにも來り給はず、法華經にも一の卷乃至四の卷人記品までも來り給はず、寶塔品に至りて初めて來り給へり。釋迦佛先四十餘年の經を我と虛事と仰せられしかば人用ゐる事なく、法華經を眞實

曠劫―計量し難き長き時間

衣の裏―人々の佛性を有するを各の衣の裏に玉を置きながら知らぬに譬ふ

滅度―肉體が死滅すること

五天竺―印度を東、西、南、北、中、の五に別ちていふ

になるべし飢ゑたる國より來りて忽に大王の膳にあへるが如しと喜びし文也。我等衆生無始曠劫より已來妙法蓮華經の如意寶珠を片時も相離れざれども、無明の酒にたぼらかされて衣の裏にかけたりとしらずして、少しきを得て足りぬと思ひぬ。南無妙法蓮華經をだに唱へ奉りたらましかば、速に佛に成るべかりし衆生どもの、五戒十善等のわづかなる戒を以て、或は天に生れて大梵天帝釋の身と成りていみじき事と思ひ、或時は人に生れて諸の國王大臣公卿殿上人等の身と成りて是程の樂なしと思ひ、少しきを得て足りぬと思ひ悅びあへり。是を佛は夢の中の榮、幻のたのしみ也、唯法華經を持し奉り速に佛になるべしと說き給へり。又四の卷に云はく、

而此經者如來現在猶多怨嫉。況滅度後云云。

釋迦佛は師子頰王の孫、淨飯王には嫡子也。十善の位を捨て、五天竺第一なりし美女耶輸多羅女をふりすてて、十九の御年出家して勤め行ひ給ひしかば、三十の御年成道し御坐して、三十二相八十種好の御形にて、御幸なる時は大梵天王帝釋左右に立ち、多聞持國等の四天王先後圍繞せり。法を說き給ふ御時は四辯八音の說法は祇園精舍に滿ち三智五眼の德は四海に敷けり。然れば何れの人か佛を惡むべきなれども猶怨嫉するもの多し。

に於ての生涯中のことをいへり

ないがしろ―軽蔑すること

野干―狐のこと

より已來或は鹿となり或は熊となり或時は鬼神の爲に食はれ給へり。かくの如き功德をば、法華經を信じたらん衆生は是眞佛子とて是實の我が子なり、此の功德を此の人に與へんと說き給へり。是程に思食したる親の釋迦佛をばないがしろに思ひなして、「唯以一大事」と說き給へる法華經を信ぜざらん人は、爭か佛になるべきや。能々心を留めて案ずべし。二の巻に云はく、

若人不レ信毀二謗此經一。則斷二一切世間佛種一。乃至不レ受二餘經一偈一。

と。文の心は、佛にならん爲には唯法華經を受持せん事を願ひて餘經の一偈一句をも受けざれと。三の巻に云はく、

如下從二飢國一來忽遇中大王膳上。

と。文の心は、飢たる國より來りて忽に大王の膳にあへり。心は犬野干の心を致すとも、迦葉目連等の小乘の心をば起さざれ、破れたる石は合ふとも、枯木に花はさくとも、二乘は佛になるべからずと仰せられしかば、須菩提は茫然として手の一鉢をなげ、迦葉は涕泣の聲大千界を響かすと申して歎き悲みしが、今法華經に至りて迦葉尊者は光明如來の記莂を授かりしかば、目連、須菩提、摩訶迦旃延等は是を見て、我等も定めて佛

隱顯の義—一つの佛が場合によつて姿を隱顯すること

不成—成り立たぬ

久遠より已來—釋迦が遠き前世

主師親御書

釋迦佛は我等が爲には主也師也親也。一人して救ひ護ると說き給へり。阿彌陀佛は我等が爲には主ならず親ならず師ならず。然れば天台大師是を釋して曰はく、

西方佛別緣異。佛別故隱顯義不ㇾ成。緣異故子父義不ㇾ成。又此經首末全無㆓此旨㆒。閉ㇾ眼穿鑿。

と。實なるかな釋迦佛は中天竺の淨飯大王の太子として、十九の御年家を出で給ひて檀特山と申す山に籠らせ給ひ、高峯に登りては妻木をとり深谷に下りては水を結び、難行苦行して、御年三十と申せしに佛にならせ給ひて一代聖教を說き給ふに、上には華嚴、阿含、方等、般若等の種々の經經を說かせ給へども、內心には法華經を說かばやとおほしめされしかども、衆生の機根まち〲にして一種ならざる間、佛の御心をば說き給はで人の心に隨ひ萬の經を說き給へり。かくの如く四十二年が程は心苦しく思食しかども、今法華經に至りて我が願既に滿足しぬ、我が如くに衆生を佛になさんと說き給へり。久遠

日蓮上人文集題名異稱一覽

主師親御書……釋尊三德
四恩鈔……與工藤吉隆書
立正觀抄……法華止觀同異訣
身延山御書……身延山記
種々御振舞御書……與光日尼書
大豆御書……與檀越某書
四條金吾女房御書……報四條氏妻書
月滿御前御書……報四條氏書
四條金吾殿御書……報四條氏書
四條金吾殿御消息……與四條氏書
土籠御書……與日朗書

佐渡御勘氣鈔……與清澄知友書
佐渡御書……與門人等書
同生同名御書……與四條氏妻書
經王殿御返事……報四條氏書
辨殿尼御前御書……與日昭母書
彌源太殿返事……報北條彌源太書
上野殿御返事……報南條氏書(上野書)
上野殿御返事……與南條氏書(上野書)
兄弟鈔……與兵衛志書
桟敷女房御返事……報桟敷女房書
蒙古使御書……與大內氏書
松野殿御返事……報松野氏書
南條殿御返事……報南條氏書(上野書)

日蓮上人文集目錄

山に隠棲し、弘安五年十月十三日、武藏の池上宗仲寺に寂す。享壽六十一。門下多くの俊秀を出し。其の末流、關東及び京都を中心として今なほ宗敎界の一勢力をなし、近時又上人の人格を憧憬し、其の主義を渇仰する風、隆なるものあり。本書亦これが爲に多少の便をなさば、校訂者望外の幸也。

大正三年八月　　校訂者　鈴木暢幸

事へて藥王麿といふ。年十八剃髮受戒して蓮長と稱し、後自ら日蓮と改む。眞言禪律及び天台を學び、ついで叡山に登りて專ら法華經の義を講究すること十餘年、歸山の後、建長五年四月二十八日「念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊」の四箇言を提說し、七字の題目を高唱し、自ら一法門を立つ。上人時に三十二歲。道善等大に怒りて山を逐ふ。

文應元年七月立正安國論を作して時の執權職北條時賴に上り、忌諱に觸れて伊豆の伊東に流され、三年にして赦され、鎌倉に還る。文永八年九月、上人五十歲の時、また幕府の憎むところとなり、相州龍口に於て斬られんとせしが、時宗の宥むるによりて死一等を減じ、十月佐渡に流さる。十年二月赦され還る。五月檀越波木井實長の請によりて甲斐の身延

自己の教義を論述せるものもあれば、實際は論文と見るを至當とすべきものあり。かゝる類をば、便宜論文中に連ねしもの一二あり。

上人の文集にして出版せられしものに「高祖遺文錄」「日蓮聖人御遺文」等あり。いづれも斯宗學匠の手に編せられしものとして、尊重に値する物なれども、惜むらくはその校訂通俗的ならざるを以て、一般人士の閱讀に不便尠なからず。本書はこれらの諸書に參酌して、其漢文なるは和譯し、句讀點を改め、假名遣を一定して、力めて讀み易からしめん事に苦心せり。

さてこの文の著者日蓮上人は、父を貫名左衞門重忠といふ。貞應元年二月十六日房州長狹の郡に生る。年十二にして清澄山に登り、道善師に

緒言

本書は教界の英傑日蓮上人の文中、主要なる論述拾數篇と別に消息文類數十通とを選擇して、之に校訂を施したる物也。上人の述作は其貳拾一歳の時安房の清澄に「戒體卽身成佛義」を試筆せしより、六拾一歳寂を武藏池上に示すに至るまで、大小實に四百五十篇に餘る。されば本書に收むる所は僅にその一部に過ぎざる如しと雖も、上人の教義を解し、其の人格を偲ばん料としては、之を以て十分なるべきを信ず。蓋し上人の教義は比較的に直截なり。故に其の論述多岐に亙れるもの少く、主要なる數篇は優に全般を含蓄せるかの觀あればなり。

本書大別して論文消息文の二となせるも、實は他に對する消息中に

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

―ジョンソン

日蓮上人文集

全

